

額見町遺跡Ⅲ

(C・F・G地区の一部区域の調査)

一 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3一



C地区SI98のL字型カマド付設置支柱型穴建物

2008年 3月31日

石川県小松市教育委員会

額見町遺跡Ⅲ

(C・F・G地区の一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 —

2008年 3月31日

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成6年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）の発掘調査報告書である。本報告は平成17年度から平成21年度までに5分冊で、刊行を予定しており、本書はその第3分冊目、C地区の前回報告済みの北側区域以外と、F地区の南東端を除く区域、そしてG地区の北西端区域の報告書にあたる。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、発掘調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

《調査地》石川県小松市額見町な1番地外
《報告対象面積》（C・F・G地区にわたる区域の一部）約8,250㎡
《調査期間》（C地区）平成10年3月23日～平成10年10月6日
（F地区）平成10年10月12日～平成12年3月14日
（G地区）平成11年5月10日～平成12年3月14日
《調査担当者》（C地区）望月精司
（F地区）大橋由美子、岩本信一
（G地区）津田隆志
4. 遺構の測量図作成については、向出泰央・坂利彦・船石純子・松本敦子（以上臨時職員）・谷口佳代・柿崎とも・木戸真由美・中村悦子・望月智美・宮川明美・本村美那子・山岸陽平・西島一代・久乘仁美ら測量補助員の協力を得て、調査担当者である望月と大橋、岩本、津田が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。
5. 出土品整理は、平成9年度から平成19年度までの中で、遺跡全体として行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。なお詳細な整理経過は第1分冊報告書「額見町遺跡Ⅰ」第1章第3節の記載に基づく。
6. 遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、遺構図修正、原稿執筆については、出土品整理作業員、江波圭、奥出桂子、柿田康子、国本久美子、谷口佳代、山崎千春の協力を得て、望月と西田（大橋）が実施した。
7. 本書の編集は望月が担当し、執筆分担は目次に記載した。
8. 写真撮影は遺構を望月・大橋・岩本が、遺物を望月が担当し、空中写真についてはアジア航空株式会社に委託した。
9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載の写真等については、無断で複写、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。
11. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。
赤澤徳明、穴澤義功、上村安生、宇野隆夫、大澤正己、柿田祐司、春日真実、亀田修一、川畑 誠、木立雅朗、北野博司、金 錦詳、小嶋孝孝、小林正史、権 五栄、酒井清治、坂井秀弥、笹澤正史、定森秀夫、城ヶ谷和広、菅原祥夫、杉井 健、田嶋明人、出越茂和、戸調幹夫、西谷 正、丹羽野裕、橋本澄夫、畑中英二、菱田哲郎、藤原 学、宮田浩之、森 隆、森内秀造、山中敏史、吉岡康暢、渡辺 一、（財）石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

目 次

例 言	i
目 次	ii
凡 例	iii
報告書抄録	iv
第 I 章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区	1
第 1 節 額見町遺跡と発掘調査概要	(望月 精司) …… 1
第 2 節 今回報告の調査区 (C・F・G地区) 概要	(西田由美子) …… 6
第 II 章 今回報告区域検出遺構	14
第 1 節 建物遺構	(西田由美子) …… 14
第 2 節 土坑	(西田由美子) …… 99
第 3 節 手工業生産関連遺構	(望月 精司) …… 129
第 4 節 その他の遺構と包含層	(西田由美子) …… 137
第 III 章 今回報告区域出土の遺物	(望月 精司) …… 149
第 1 節 出土遺物の概要	149
第 2 節 古代の遺構出土遺物解説	152
第 3 節 中世の遺構出土遺物解説	240
付表 1 額見町遺跡Ⅲ報告区域出土古代遺物観察表	246
付表 2 額見町遺跡Ⅲ報告区域出土中世遺物観察表	262
第 IV 章 総 括	
第 1 節 掘立柱建物に関する検討 - 額見町遺跡の田嶋編年 I～V期までの特徴 -	(西田由美子) …… 265
第 2 節 南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察	(望月 精司) …… 280
写真図版	295 ～ 322

凡 例

(遺構について)

1. 本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海面水準（T. P.）である。
2. 遺構名称は竪穴建物跡をSI、掘立柱建物跡をSB、土坑をSK（土師器焼成坑もSK）、溝状遺構をSD、炉状遺構をSJ（鍛冶がもSJ）、井戸をSE、集石遺構をSX、ピットをPとし、土器溜まりはグリッド（Gr）名に土器溜まりを付した。Pは調査地区ごとに遺構番号を付したが、他は遺跡全体での通し番号とした。
3. 現場で付した遺構番号を別に変更したものについては、SB197・SJ44・SK216・SK219 → SI104 の1件のみ。遺構ナンバーの漏れから欠番となったものは、SI95・SI102・SI103・SB111・SB244・SB260・SB263・SK118・SK277の9件がある。
4. 遺構図の基本的な開載縮尺は、竪穴建物跡に関して平面図・断面図を1/60とし、掘方平面図は1/120、造り付けカマド平面・断面図は1/30、削平竪穴建物跡については1/100とし、断面図で一部1/50とする。掘立柱建物跡は平面・断面図を1/100、土器溜まりは平面図を1/80、土坑は平面・断面図を1/40とするが、一部1/80の場合もある。炉状遺構平面図は1/40とし、生産遺構の平面・断面図は1/40とする。
5. 遺構図で示す平面図の+はグリッド杭の位置を、断面図は水平レベルラインである。これに付記するH=とした数値は標高値を水平基準から求めた海拔高で示す。
6. 竪穴建物平面図に記載する細かいドット網掛け範囲は被熱焼土化範囲を、粗いドット網掛けはカマドソダ粘土範囲を、ストライプ網掛けは切石を示し、砂目ドット網掛けはソダ被熱を、掘り方平面図に示した薄いドットは柱穴を示す。また、竪穴建物跡及び掘立柱建物跡の柱穴内に示した網掛けは柱頭位置を示す。なお、土坑と竪穴建物の遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係にあることを示すもので、それに付記した図Noは遺物図版の図に付した番号と一致している。
7. 竪穴建物跡の土層断面図に示す数字は覆土土層を、アルファベットは床下土層を示し（床下のみの場合数字で示すものあり）、その間の太線は床面ラインを示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」に基づく。

(古代の遺物について)

1. 本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文150・151ページに示したとおり、基本的に前報告の「顔見町遺跡」の出土遺物分類に基づく。また、観察表や本文に示す遺物属時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年輪（田嶋明人1988「古代土器編年輪の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告書）』及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』）に基づく編年標記であり、その編年の筆者暦年代観については遺物観察表の巻末にまとめて掲載する。
2. 遺物図版の縮尺は鉄器を1/2に、それ以外を1/3に統一した。また、遺構図に掲載した造り付けカマド焚口部材の石材実測図についても1/4とした。
3. 遺物図版で示す実測図断面に示される網掛けは、黒塗りが須恵器または須恵質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器、鉄製品とした。また、土器の内外面に示される網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が墨痕跡または油煙痕跡、漆着痕跡であり、カマドの支脚や焚口石材の網掛けは被熱部分を示す。
4. 須恵器や土師器、陶磁器類の実測図右断面に示す「□」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、砥石に示す「□」は磨耗痕跡範囲を示す。
5. 須恵器、土師器の実測図においてロクロ（回転台等回転使用も含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを非ロクロ製品と意識的に分けるため、定規で線を引き、非ロクロ製品はフリーハンドで示した。ただ、中世土師器はロクロ使用でも回転力力の弱いものはフリーハンドとしている。
6. 遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径（受け部・返り径）は口縁上端部（受け上端・返り上端）での直径を、底径は底部切り離し外端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（つまみ径）は胴部（つまみ部）最大径を、脚部径は脚下端部での直径を示す。なお、器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とし、立高や返り高は受け部下端から口縁部まで、返り部までの垂直高とした。
7. 遺物説明、観察表で示す胎土については、観察表巻末に凡例をまとめて掲載する。
8. 遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄1988「須恵器器類に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H類を平行線文、D類を同心円文とし、Ha類は平行線彫り込みに直交して目目のあるもの、Hb類は右斜交の目目のあるもの、Hc類は左斜交の目目のあるもの、He類は目目の見えないものとし、Da類は目目の見えないもの、Db類は同心円彫り込みに沿って同心円目目の見える芯材使用のもの、Dc類は柁目状目目のもの、SD類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。また、別のものは記号以外の表記にした。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぬかみまちいせき (Nukamimachi Sites)
書名	額見町遺跡
副書名	串・額見地区産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3
巻次	Ⅲ
編・著者名	望月精司・西田由美子
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 (電話) 0761-22-4111
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
額見町	石川県小松市額見町 な1番地外	160	03089	36度 21分 16秒	136度 24分 30秒	C地区 1998.03.23～1998.10.06 F地区 1998.10.12～2000.03.14 G地区 1999.05.10～2000.03.14	C・F・ G地区の 約8,250	小松市が施 工する串・ 額見地区産 業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時代 今回報告区域は8世紀 ～9世紀前半に集 落経営の主体があり、 11世紀に土師器生 産、12世紀に新たに 集落経営	堅穴建物24軒、掘立柱建 物跡119棟、土坑162基、 炉状遺構19基、土器溜ま り7箇所、土師器焼成坑 2基、鍛冶炉2基、製炭 土坑2基、道路状遺構1 条	須恵器・土師器・朝鮮 系軟質土器・甕形土製 品・円筒形土製品・特 殊版・円面硯・榎状土 製品・専用焼台・二彩 陶器・磁石・碧玉・銅鈴・ 鉄鏝・刀子	当地区では8世紀～ 9世紀前半に集落主 体があり、L字型カ マド付設置堅穴建物は 3軒のみ。うち1軒 は8世紀初頭で、最 新時期の堅穴建物。
要約		6世紀代に墓域化した台地上に、古墳群消滅とともに突如出現する古代集落遺跡。7世紀初頭の集落成立時にL字型カマド付設置堅穴建物を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主とした集落と判断される。7世紀後半に当集落内で生産される朝鮮系軟質土器や同時期に始まる鍛冶生産、須恵器窯製品を運別した際に生じる窯道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が7世紀に変革期を迎えることと関連性が強く、広義での台地上集落群は丘陵部工業生産地帯の母村としての性格を持つ。7世紀後半は集落増加期であり、8世紀前半までに全盛期を迎えるが、7世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系煮炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を經由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と見え、それは地方支配政策、評制施行前段階策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれただらう江沼評や工業生産地と一体的なものであり、潟湖を媒体に屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。			

S A M A R Y

The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system, etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.

第1章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区

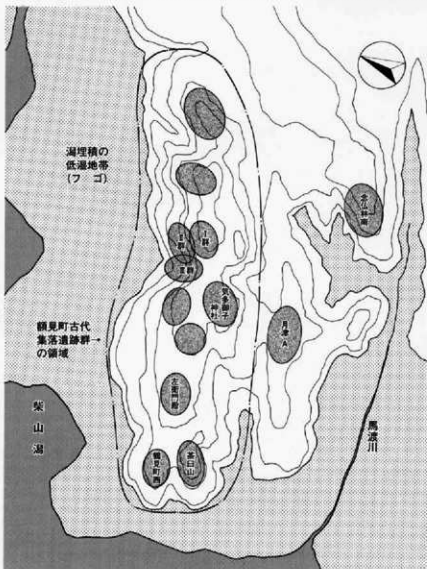
第1節 額見町遺跡と発掘調査概要

第1項 額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

額見町遺跡は、長軸800m、短軸550mの北東方に長い遺跡分布を示す440,000㎡の広大な集落遺跡である。幾つかの集落単位が集合した結果、広大な面積の集落域となったものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和20年代の耕地整理によって起伏に富んだ台地地形が階段状に削り取られ、その際に台地南西端の茶白山周辺が削平を受けた。茶白山古墳や茶白山祭祀遺跡、茶白山遺跡はその時に発見された遺跡である。昭和30年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東へ伸びる台地は土砂採取により大きく削平を受けたが、その際、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側部は消失することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和56年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、遺跡所在すら確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成8・9年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成7年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査において新発見した遺跡であり、当台地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたのだろう。明治42年及び昭和37年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが右図に示したものである。当台地領域は柴山沼に面して北東方に細長く伸びる台地で、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状を呈す、長軸2400m、短軸750m、約150haにも及ぶ広大な台地である。図に示した集落分布予想図は、旧地形をもとに想定したものだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。

第2項 平成7年度～12年度 発掘調査概要

今回報告する額見町遺跡は、平成7年度から12年度までの6年間にわたる発掘調査報告で、石川県立埋蔵文化財センター調査も含め、38,500㎡の面積を発掘調査した。当調査で

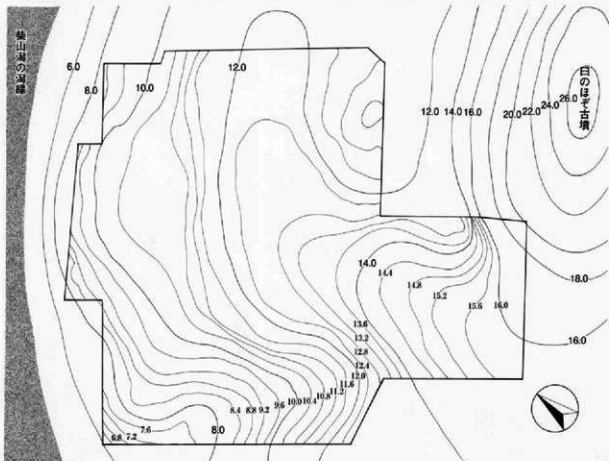


第1図 額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想 (1/20,000)

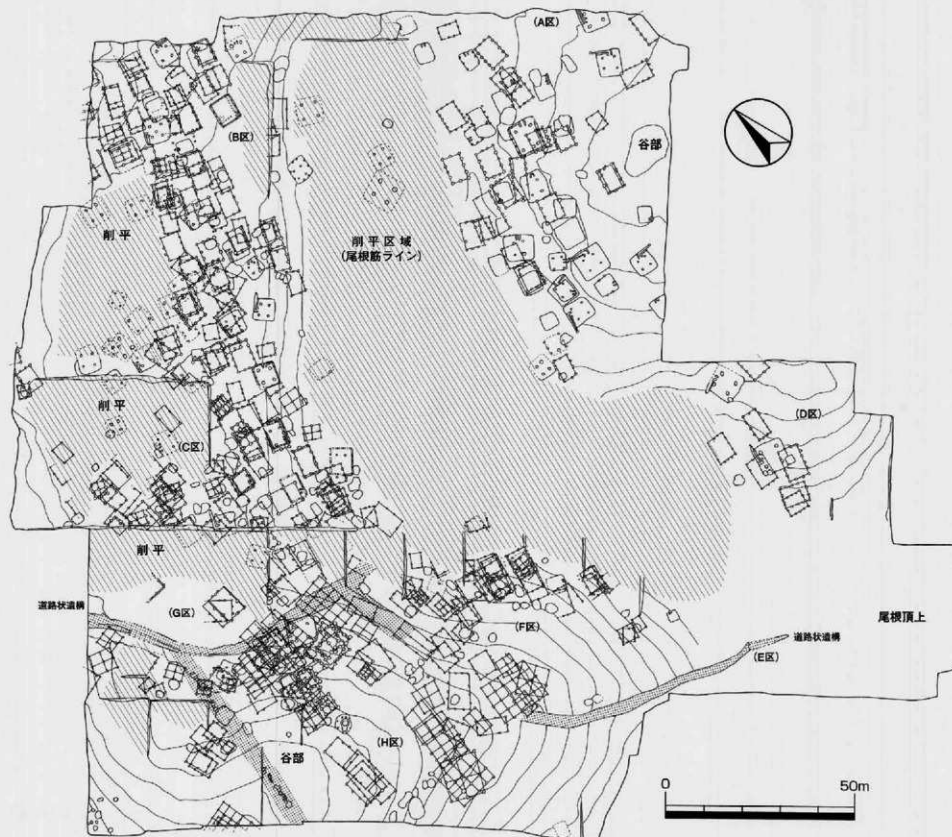
検出した遺構は、堅穴建物119軒、掘立柱建物330棟、土坑424基（うち土師器焼成土坑10基、製炭土坑7基、墓坑15基以上）、炉状遺構（うち鍛冶炉跡12基）、井戸3基、溝状遺構53条（うち道路状遺構5本）、集石遺構2基で、他に土器溜まり遺構を20箇所以上確認している。後述するように調査面積の多くが削平されていたため、相当数の遺構が既に消失した状態であり、遺跡が完存していれば、どれだけの建物数が存在していたのか、悔やまれるところである。14世紀頃の集石遺構2基と縄文時代に遡るであろう落とし穴土坑1基以外は全て、7世紀前半から12世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高26mの尾根頂上部（白のはぞ古墳立地）から南西側に張り出すようにして尾根筋が伸び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が伸びていく。東側尾根頂上部から北側へ伸びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は15mにも及ぶ。谷部から見て、白のはぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さがあり、集落立地に際して古墳を意識したような選地を行っていたことは間違いない。また、北側へ細く伸びた尾根筋から北西方へは細く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がりが気味となる）を形成しており、そこから柴山海側の海縁へは比高差7m以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山海から南東側へ伸びてくる支谷に続く小さな谷が入り込み、楕円形状を呈する緩い傾斜地を形成している。比高差6m程度を測る傾斜面で、南西側へ谷は広がっている。

極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形コンタから見て取れると思うが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるという造成を行っている。この結果、約14,000㎡、調査面積の36%が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては、遺構基底部が遺存していたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか、把握できる状況にない。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分もあり、その箇所での遺構分布が確認できないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布はもとも

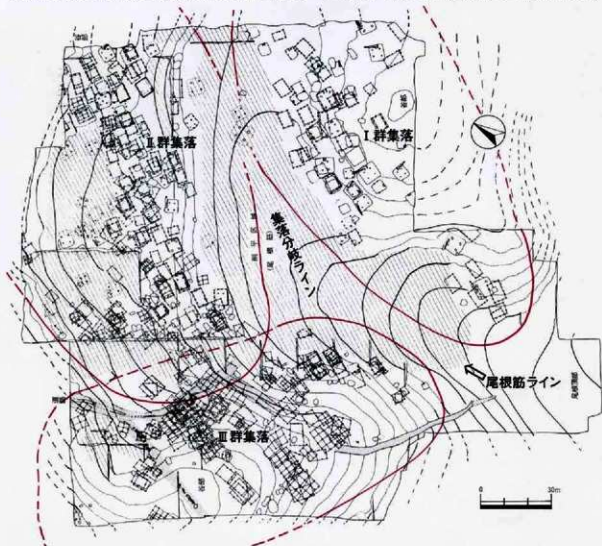


第2図 額見町遺跡発掘調査区域内の復元地形 (1/2,000)



第3図 額見町道跡主要遺構配置図 (1/1,000)

と低かった可能性がある。尾根筋が集落の分岐線であった可能性があろう。当地は紫山湧から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部を避けて選地していた可能性があり、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたと予想される。鞍部や谷部は黒色土壌が厚く、粘土質の黄褐色土地山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物選地の一つの要因であったろう。削平地が多く不確定要素は多いが、以上の集落分布傾向から想定すると、以下の集落群構成になるとみる。Ⅰ群集落はAD地区に展開する鞍部緩斜面上の建物群、Ⅱ群集落はB地区からC地区そしてF地区北端へ南北に延びる鞍部緩斜面上の建物群、Ⅲ群集落はF・G・H地区に分布する紫山湧へ緩く傾斜していく広い緩斜面上の建物群である。Ⅰ群集落は7世紀前半の竪穴建物の検出例が多く、7世紀代から8世紀前半に主体を置く集落群と言える。Ⅱ群集落は7世紀前半から8世紀代までの長期集落と言えるが、主体は7世紀中頃から8世紀中頃で、最も建物検出例の多い集住区域と言える。Ⅲ群集落は7世紀前半の建物も確認されるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて8世紀以降に主体を置く集落と言える。特に11世紀後半から12世紀の建物群が広く展開しており、Ⅰ・Ⅱ群集落では未確認の井戸や道路状遺構、大規模な土器廃棄場遺構等を検出する。全ての遺構を検証したわけではないため、今後、報告する中で、細部の修正が行われるものとみなが、大略的には、以上Ⅲ群の集落群構造を展開していたものと考えている。当集落群のまとまりに基づき、報告書刊行順も、調査年度順に捕らわれず、Ⅰ群集落であるA地区とD地区の報告を報告書Ⅰとし、Ⅱ群集落であるB地区とC地区の一部の報告を報告書Ⅱとした。今年度はⅡ群集落の南側に当たるC地区とF地区を主に報告書Ⅲとして刊行する。平成20年度以降は、Ⅲ群集落であるG地区とH地区の報告並びに鉄関連遺物報告を報告書Ⅳ・Ⅴとして、平成21年度には完了させる予定である。



第4図 額見町遺跡の集落のまとまり概念図

第2節 今回報告の調査区 (C地区・F地区・G地区) 概要

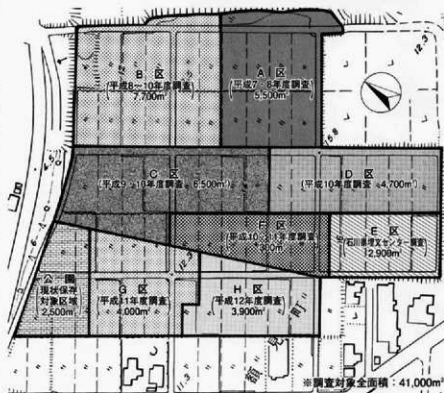
第1項 遺構の概要と分布

今回報告の調査区は、前回報告区域の南・西側にあたり、C地区では前回報告分を除く5,530㎡、F地区では次回報告分を除いた2,825㎡、これにG地区の極一部である北側の275㎡が加わる、総面積8,630㎡が報告区域である。このうち、昭和初期の農地開発により完全削平されて3,120㎡に及ぶ面積が遺構の検出されない区域となっている。この他、土層が著しく削平を受けたことにより遺構基部のみ検出される区域が1,590㎡に及ぶ。要するに、今回の総面積中の約半分である4,710㎡が遺跡の消失・破壊などの被害を受けていたことになる。

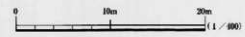
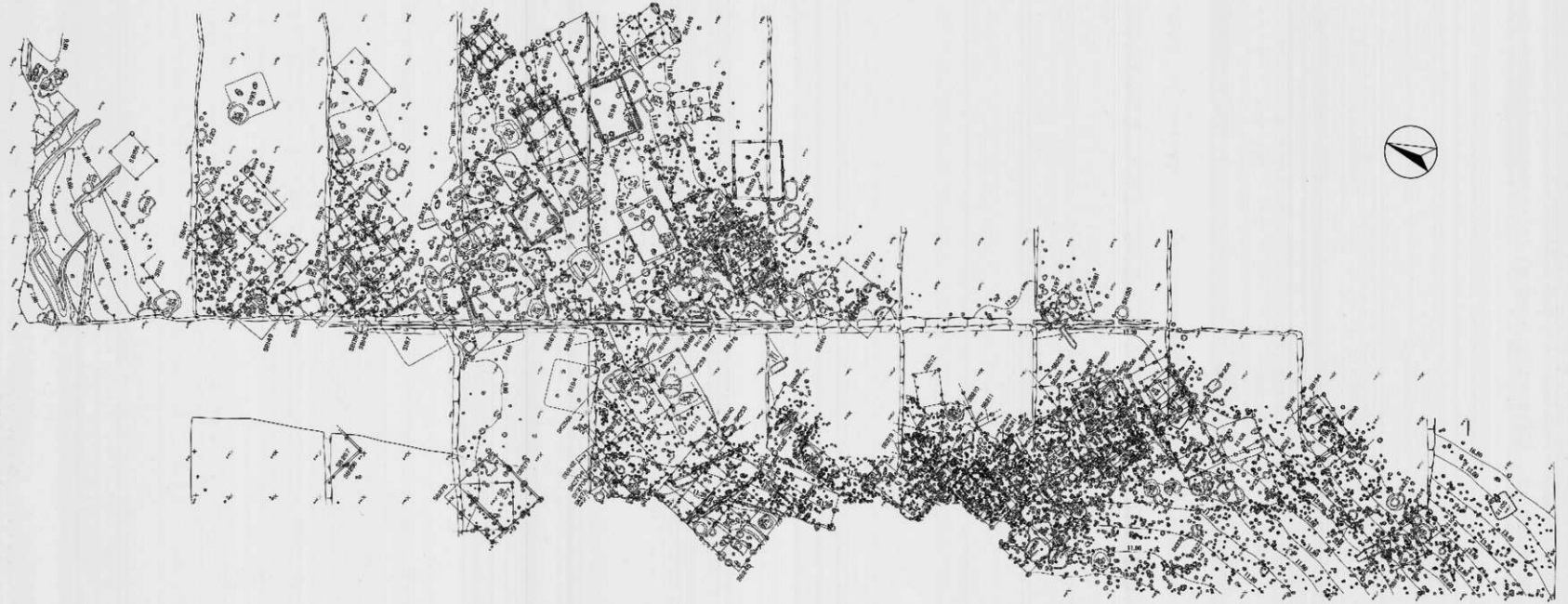
ここで、今回報告区域の旧地形を見てみると、遺跡全体中央の南北に走る尾根部が、今回報告区の東側からF地区東側を通り更に東方向に曲がる形で存在する。尾根部から西側には、C地区を中心としてF地区西側に架かるテラス状部分広がる。テラス状部分から西側は、柴山湯に向かって急傾斜を呈し、建物遺構は認められなくなる。F地区東側は、尾根部から西側方向への谷部(H地区)に向かう途中の、標高差3.2mを測る緩傾斜地となる。以上のような地形で、尾根部は完全削平されているが、その他の削平を受けた区域も、当然遺構がないか遺構密度の薄い区域となっている。

遺構の分布は、大きく2箇所に分けられると言える。1つは、テラス状部分での集中である。このテラス状部分は、C地区から北側のB地区に続く遺構密集区でもある。もう一箇所は、F地区東側へ向かいテラス部分から谷部に回り込む区域、テラス状部分と比較すれば傾斜の強い箇所であり、このような地形においても遺構の集中がみられる。そして、両者には建物時期に異なりが見られる。

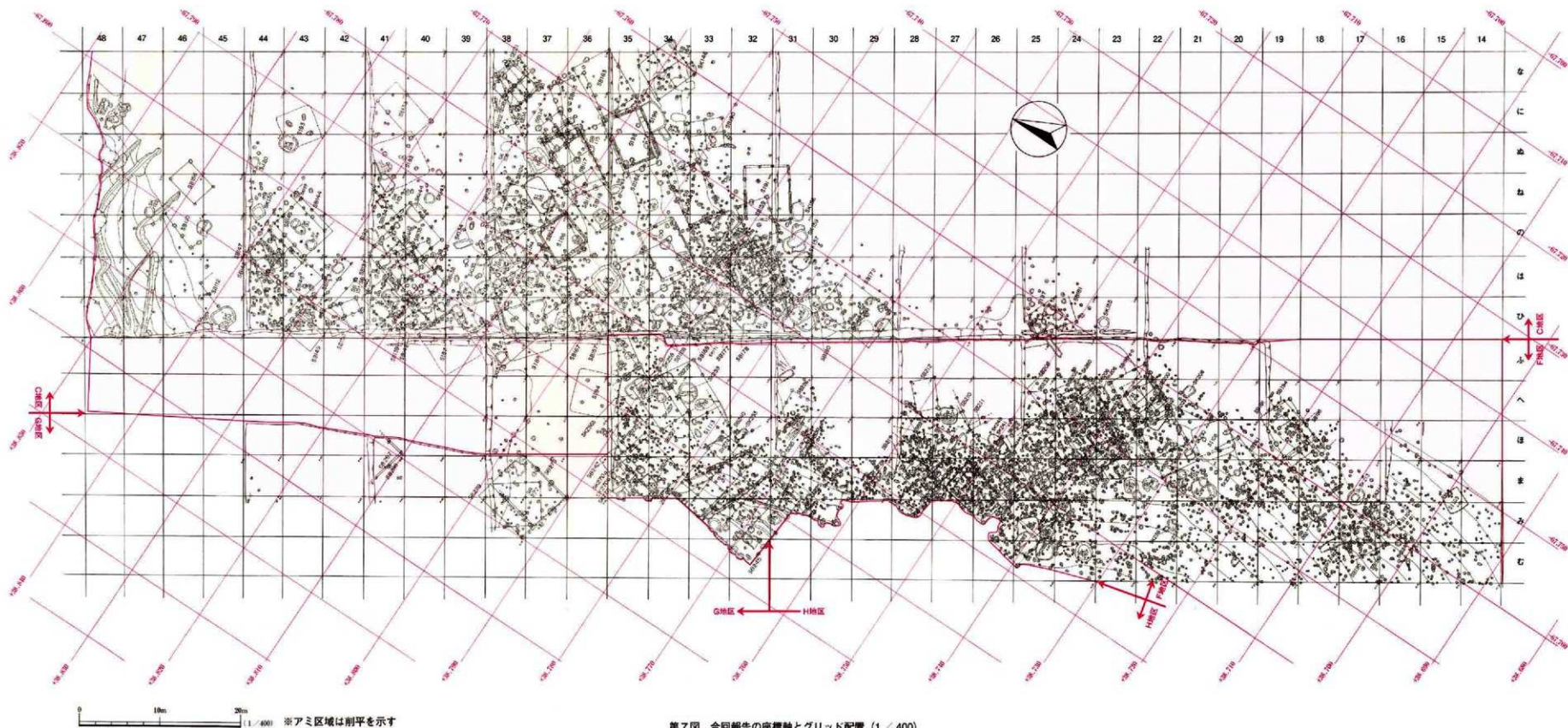
今回報告区域から検出された遺構数は、本報告のために遺構整理した結果、竪穴建物24軒、掘立柱建物124棟、土坑158基、墓塚12基、土器焼成坑3基、鍛冶炉2基、製炭土坑3基、道路状遺構1条、溝状遺構3条、炉状遺構31基、中世の集石遺構1基である。前回報告の中でも示されているように、今回調査区も包含層が残存する区域では、遺構密集区である上に黒色地山土での黒色埋土・覆土という極めて遺構検出の困難な状況の中の調査である。今回の整理で、改めて図面を広げると、本当に建物であるかどうか疑問がもたれるものが否定できない。特に掘立柱建物では、柱筋の通りが悪いものや、ピット規模が統一されていないまばらな掘立柱建物がある。しかし図面上の判断は、現地判断には及ばない考えから、現地成果を基本的にそのまま記載することとした。但し、遺構同士の相互関係や覆土の階位等により、どうしても変更せざるを得ないと判断した例外もある。以下、変更した遺構を挙げてゆく。SB197+SJ44+SK216・219を総じて竪穴建物に関する遺構と判断してSI104と変更した。また、SI109掘方土坑2・4の出土遺物時期が新しく、SI109出土遺物の時期と一致しないためSK206・207と変更した。SK173は道路状遺構1に含まれるものと判断し、SD25土坑3と変更した。SK107はSI89のカマドと判断し変更したため欠番とした。なお、調査当初に遺構として取り扱ったものの、その後遺構でないと現地で判断さ



第5図 額見町遺跡発掘調査地区区画図(S=1/2,500)



第6図 今回報告の調査区 (C地区・F地区・G地区) 全体図 (1/400)



第7図 今回報告の座標軸とグリッド配置（1 / 400）

れ穴番となったものもある。これについては、後述の遺構毎に詳細を述べてゆくことにしたい。

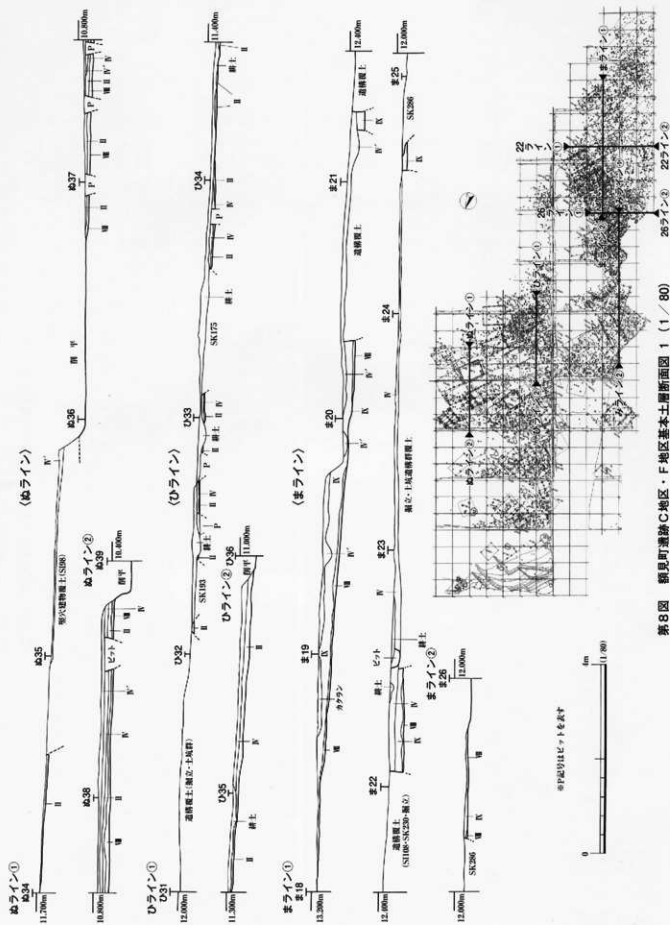
検出された遺構は、これまで額見町遺跡Ⅰ・Ⅱで報告された遺構構造と同類のものも多いが、新たな様相をもつものも認められる。これまで報告されていない新たな構造をもつ竪穴建物の出現、竪穴建物数の減少、掘立柱建物では数が竪穴建物と反比例する如く増加し、さらに中世を中心に存続してゆく形態の低床式の総柱建物の出現、極めて検出例の多くなる土坑、そして今回、墓塚や道路状遺構が新たに検出された。

遺構時期の推移については、竪穴建物では、7世紀前半が4軒、7世紀後半が1軒、7世紀後半から8世紀前半が1軒、8世紀前半が8軒、8世紀中頃2軒、8世紀後半3軒、9世紀前半1軒、時期不明のもの4軒となっている。今回竪穴建物そのものが少ないことが上げられるが、8世紀前半が主体的で全体の33%を占めている。なお、C地区とF地区では似たような時期別の検出数となっている。ただし、テラス状区域となるC・F地区西とF地区東で区切れば、圧倒的にテラス状区域の方が竪穴建物数は多い。これに対し、掘立柱建物では、C地区とF・G地区について時期差が認められる。時期が重なって判断せざるをえない建物が多いので、大きく割り振って値を算出してみると、C地区では7世紀後半から8世紀前半の建物が18棟で全体の31%、9世紀前半も31%、7世紀前半が17%、9世紀後半から10世紀前半が12%であり、8世紀前半から9世紀前半にかけての時期に主体をもつ。F地区では、8世紀前半が10棟で20%、8世紀後半から9世紀前半が21棟で41%、9世紀後半から10世紀前半のものが6%、7世紀後半のものは4棟見られるが時期の重なりがありこの時期とは断言できないもの。また、7世紀前半の建物は無い。なお、F地区での時期不明建物は多く29%に及ぶ。F地区では、C地区で定数量確認されている7世紀代の掘立柱建物が、極限られた数もしくは無かったと判断することもでき、時期の主体を8世紀後半から9世紀前半にもつ。この他、中世の総柱建物がC地区とF・G地区それぞれに1棟ずつ認められる。但し、この建物の構造が中世のものとは判断されるにもかかわらず、出土する遺物は古代のものが多いため、遺物の出土だけでは時期を確実に判断できないのではないかと考えている。このことは他の建物に対しても言えることであろう。土坑についても掘立柱建物と似たような時期推移が見られる。C地区では8世紀後半のものが最も多く全体の26%を占め、次いで8世紀前半のものが多い。7世紀代は6%にすぎないが、検出はされている。F地区では、8世紀後半のものが最も多く22基で全体の30%、次いで9世紀前半のものが18%である。7世紀代のもは2基確認されるが、この時期のみに限定できない時期重複がみられるものである。以上のような様相は、建物群の主体が徐々に南へずれていったと判断できる。

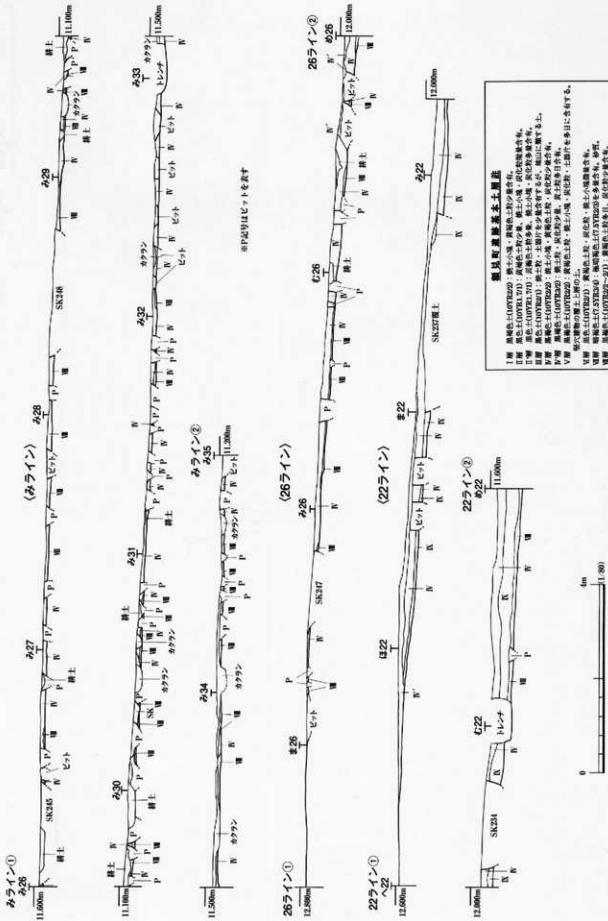
第2項 基本層序

前回までの報告と同様に、包含層土層断面図で本遺跡全体の基本層を記録している。今回報告区南東から北東にかけてのGr「ぬ」「ひ」「ま」「み」の平仮名ラインと、北東から南西にかけてのGr「22」「26」の数字ラインで記録されている。この中で地形傾斜を捉えられるものは、「ぬ」「ひ」「22」「26」ラインである。「ま」「み」ラインはH地区へ続く谷部への傾斜を端的に表すものではないが、基本層を捉えるための参考として断面図を掲載することとする。さて、いずれのラインでも包含層が残存する区域のみを記録しており、削平により基本土層が寸断される状態となっている。

本遺跡では、最も下層に黄褐色系土山が存在し、次に黒色系土山との間の漸移層である黒褐色土山山のⅧ層、このすぐ上位には黒色系土山の上層土と考えられるⅡ層及びⅨ層が堆積する。この層より更に上位にⅣ層やⅤ層の包含層が堆積する。基本として5つの層が認められ、今回の報告区は比較的この層順に準じて堆積している。但し、F西地区のみ黒色系土山がない状態では、Ⅷ層の上にⅣ層が堆積する。標高の最も高い尾根部は、削平により黄褐色系土山が露出している状態である。遺構が掘り込まれるのは、Ⅱ・Ⅸ・Ⅳ層である。Ⅱ層とⅨ層は、同層と言っても差し支えない層と判断可能なもので、この層では古いもので田嶋編年Ⅱ3～Ⅲ期、更に時代が継続してⅥ3期までの遺構が認められる。また、Ⅱ層・Ⅸ層の上層にあたるⅣ層では、田嶋編年Ⅳ1～Ⅴ期にあたる遺構が主体的に掘り込まれていると言える。前回報告ではⅣ層上面で古代Ⅱ1期の遺構が掘り込まれ、Ⅳ層上面が集落成立当初から7世紀後半の中で成立した包含層である可能性が掲げられているが、今回報告区域は前回同様の様相とはならない。要するに、層位が時代順となっていないばかりか、本遺跡全体の中でも層位により時期差を捉えることは難しいと判断される。よって時代の経過に伴う明確な包含層堆積はなかったと判断せざるを得ないが、Ⅳ層面やⅨ層面が古代生活面と捉えてよいだろうと思われる。



第8図 梶見町遺跡C地区・F地区基本土層断面図 1 (1/80)



第9図 額見町遺跡C地区・F地区基本土層断面図2(1/100)

第Ⅱ章 今回報告区域検出遺構

第1節 建物遺構

第1項 竪穴建物

今回報告区域での竪穴建物は24軒である。C地区で16軒、F地区で9軒が検出された。C地区ではL字形カマド付き建物の他、壁立建物にL字形カマドが付設する新たな構造をもったものが検出された他、壁立建物にコーナーカマドが付設するタイプも検出されている。C地区では、4本主柱や支柱など柱が明確に確認できる竪穴建物が多いのに対し、F地区で検出されたものでは、前述のような構造の竪穴建物は見られず、柱穴を伴うものもSI104・105のみであり、削平されているということもあろうが、竪穴建物として貧弱な印象のものが多いと言える。C地区とF地区では、竪穴建物構造に極端な差があるように思われ、本遺跡でこれまで示してきたⅡ群集落とⅢ群集落の竪穴建物の差と言えるものであろうか。

今回報告する建物は、遺構番号ではSI82～SI113にあたるが、の中には既に前回報告済みのものが含まれている。この他、SI95とSI102・103は欠番で、SI112は次回の報告分である。規模については、縦長×横長cmで記載する。面積による建物主軸は、カマドを奥に向けた位置を中心として北・南からの角度で表示している。今回報告の調査区では削平区域でカマドが削平されている建物も多く、このようなものに関しては、長辺壁を縦軸として設定するか、北方位に近い軸を設定して、建物主軸を割り出している。竪穴建物構造の類型造り付けカマド類型は、一昨年度報告の額見町遺跡Ⅰにすべて基づいている（望月精司2006「第四章総括－額見町遺跡の古代建物構造と造り付けカマドについて－」〔額見町遺跡Ⅰ〕小松市教育委員会。以下、本項の中では、※2006望月と記述する）。面積による建物類型も報告Ⅰ・Ⅱに準じ、特大が55m以上、大型が55～39m、中型36～25m、小型を25m以下としている。掘方土坑の位置づけも前回までの報告に準じた。竪穴建物の出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

1. SI82

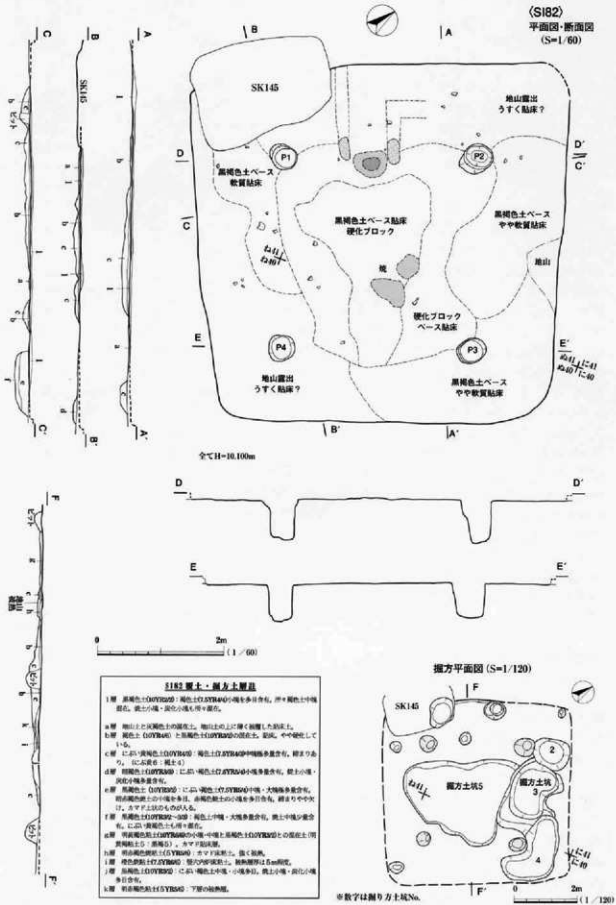
〔立地・規模・形態〕C地区中央ぬ・ね-40・41Grの削平区域に位置し、建物の貼床が露出した状態で検出された建物である。壁は削平されてしまっており、検出された床面は隅丸方形プランを呈す。規模は、570×540～590cmを測り、建物面積は322㎡の中型クラスになるものと思われる。竪穴主軸はN-53°-Wをとる。なお、北西側はSK145により切られている。

〔柱穴〕中央に柱間寸法が縦軸310cm、横軸300cmを測る4本主柱を伴う。柱穴規模は、径40～56cm、深さ54～70cmを測る。廃絶時には、全ての柱が抜き取られている。また、設置時には、P1・2は左側である南西壁側から掘り立てている。P3・4については不明である。

〔カマド〕削平のため、カマドは焚口のソデ基部と被熱面のみ残存する。北西壁の中央に付設するタイプである。建物の規模や時期からL字型カマドと十分想定可能である。カマドの規模は、主部で残存縦長が外寸で150cm、幅98cm、煙道長はL字屈曲点が不明なのだが、ソデ基部の端から建物貼床の末端までを計測し、左側で230cm、右側で200cmを測る。焚口幅は内寸60cm、ソデ厚は基部のみの計測だが15～18cmである。主部では薄いカマドの貼床が残存している。このカマドは建物内の貼床を施してから構築されている。

〔覆土堆積と遺物出土〕覆土は2～4cmを主体に最大でも6・7cm程度しか残存しておらず、黒褐色土ベースに褐色土塊を多目に含有する単層である。出土遺物は総数で、須臾器食膳具29点、須臾器貯蔵具13点、土師器食膳具26点、土師器煮炊具314点、この他としてカマド石1点を出土し、時期はⅠ1新期と判断される。

〔床の状況と掘方〕貼床は、壁に向かい検出床面が下がる状況を呈しているが、これは削平によるものである。また、貼床はほぼ全面で検出されているものの、北東壁の中央部分のみ明確な地山をもつため、階段状の出入り口があった可能性が想定されるが、この地山部分の周囲に硬化面が確認出来ないため、何とも言い難い。貼床は、2・3cm程度の薄いもので、中央で良好に残存する部分ではフラットな面を形成している。貼床土は、黒褐色土をベースに黄褐色土の硬化塊が混在する土が主体で、中央が硬化する。また、中央には床面被熱が2箇所検出されている。床下からは、掘方土坑が5基検出されている。中央に浅くて大型のものが1基と、これを中心に北東壁側へ3基、西側にはSK145と重なる形で1基が位置する。掘方土坑1・2からは遺物が多量に出土する。



第 10 図 竪穴建物遺構図 1 (S182)

2. SI85

〔立地・規模・形態〕C地区中央、ね37Grに位置する。規模は430～450×210～260cmを測り、面積は10.34㎡と超小型の竈穴規模の建物である。壁高は残存14.5cm、プランは隅丸方形を呈し、西側壁の中央が張る形となっている。柱穴は長軸中央上に2本のみ、カマドはSK120によって切られていると予想され、被熱面の一部とカマドソデ石が検出されるのみである。主軸はN-157°-W。

〔柱穴〕2本主柱穴と思われる。これ以外に主柱穴は検出されておらず、また掘立柱建物の土間の空間として併うような掘立柱建物との関連も見いだせないことから、2本主柱の単独竈穴建物と判断した。主柱穴は長軸上の壁際中央に1本と、壁外に1本検出されている。規模は径26～40cm、深さ40cm、柱間規模は490cmであった。

〔カマド〕建物左手の南壁と東壁の隅にてSK120に切られて、かろうじて被熱面の約1/3が検出されている。この被熱の近くではカマドソデ石の一部と考えられる遺物が出土しており、検出された被熱面がカマド焚口被熱と判断できる。このカマドソデ石の一部と思われるものが、壁と平行に検出されているため、ソデが長軸方向に平行になって南壁端に取り付くものと予想されるが、東壁に取り付くものであった可能性もあるだろう。無煙道型のカマドである。

〔覆土堆積と出土遺物〕SK120に切られた付近では、カマドソデ崩壊土が認められ、この他は黒褐色土ベースで含有物の少ない土が単一層で確認できる。カマドを壊した後、一括埋戻しがされたと考えられる。出土遺物は総数で、須恵器食器具32点、須恵器貯蔵具9点、土師器食器具7点、土師器煮炊具246点である。この他、土製支脚4点やカマド石2点が出土し、時期は、Ⅱ3新期と判断される。

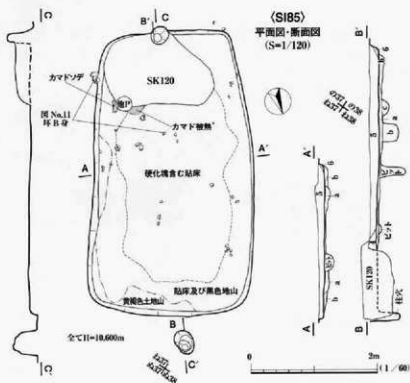
〔床の状況と掘方〕床は、北・東壁際の一部が黄褐色土地山となっているが、これ以外は貼床を施されている。貼床は2～5cmの厚みで、建物中央では黒色土とにぶい褐色土塊を極めて多量に混ぜ込んだ土を貼っている。これを中心に、周囲に硬化しない黒褐色土ベースの貼床が認められる。中央部分の硬化は弱めである。床面はほぼフラットを呈すが、カマド被熱付近が5cm程高くなっている。床下の状況では、掘方土坑はなく、窪み程度の掘方があるだけである。掘方から、東壁際に2本のピットを検出している。このピットは或いは、この建物に付属する柱穴のたぐいかもしれない。

3. SI86

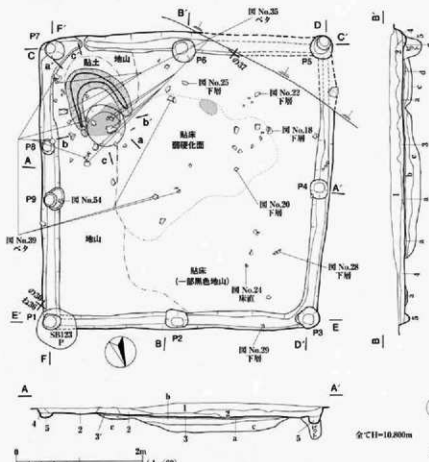
〔立地・規模・形態〕C区中央でSI85の南側、の36・37Grに位置する。壁周溝と壁支柱を伴う壁立式建物で、プランはやや歪な正方形を呈す。建物西側の一部を削平により消失しているが、支柱穴が残存し、全体の規模を十分に復元出来る状態である。建物規模は430～470×460～470cmを測り、面積20.92㎡の小型タイプである。壁高は最大で20cmである。カマドは南隅コーナーに通常カマドが付設、真南にカマドが取り付くこととなる。主軸はN-110°-E。

〔壁支柱・壁周溝〕壁に周溝が廻り、この周溝内で壁支柱と考えられるピットが9本検出されている。壁隅と、壁間中央に規則正しく配置されるが、P8のみ規則から外れるように1本余分に配置されている。支柱規模は、径30～34cmでP8のみ22cm、深さは四隅が深めで34～46cm、壁中央のものは浅めで11～30cmを測る。深さについては、壁周溝下端からの深さである。なお、四隅の支柱は内側から外側へ、要するに室内から室外方向へ向けて掘り立てられている。配置についてだが、相対する位置になるように配置をとっているものの、柱間規模は正確さに欠けている。その柱間規模は、P1・2間が500cm、P2・3間が525cm、P3・4間が525cm、P4・5間が575cm、P5・6間が550cm、P6・7間が525cm、P7・8間が375cm、P8・9間が200cm、P9・1間が475cmであった。P5・7は覆土下底部で柱礎と考えられる黒色土を検出しており、廃絶時に柱穴内で切り取られたか根腐れを起こして残存したという可能性があるだろう。この2本以外は、廃絶時に柱を抜き取っている。壁周溝は、上端幅22～30cm、下端幅8～18cm、深さが床面より5～8cmを測る、断面形U字状の極浅いものである。

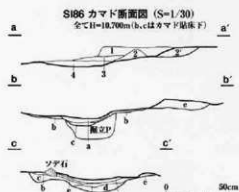
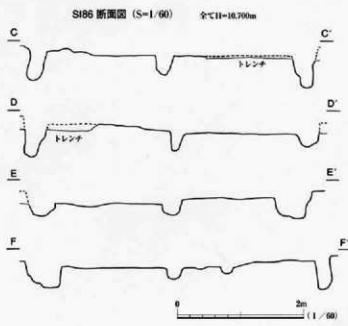
〔カマド〕カマドは建物の東壁・南壁の交差する壁コーナーに付設する、逆U字形の無煙道型カマドである。焚口は、このカマドの奥のP7とP2を結ぶ対角線上に位置する。規模は、主部が外寸縦長96cm、外寸幅96cm、焚口幅は内寸で60cm、ソデ厚は外寸で20～25cmを測る。床面は焚口から若干下がり30cm地点で傾斜角35°をもって立ち上がり、その後奥へ5°の傾斜角で緩やかにのぼってゆき、焚口から56cm地点で奥壁が立ち上がる。このカマドは焼成部が凹む構造をもって、このため有段となるが、段の立ち上がり全面が焼けているわけではなく、一部分が被熱を受けている状態である。左ソデ端にはソデ石の一部分が認められる。ソデは基底部のみ



(S186) 平面図・断面図 (S=1/60)



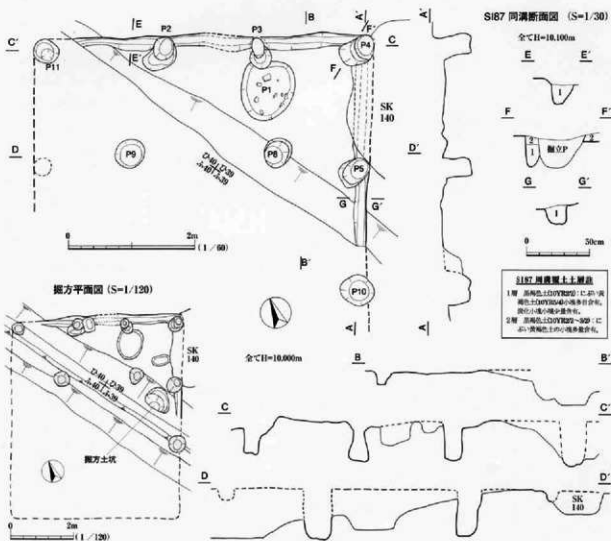
第 11 図 竪穴建物遺構図 2 (S185・S186)



SI86 カマド壁土・南方土層記

- 1層 黒褐色土(IVYK20) 褐色土中・小塊多量、黄土中・小塊多量、黒色土中塊少量含む。
- 2層 黒褐色土(IVYK20) 褐色土(IVYK40)中塊・小塊多量含む(図7:層3)、赤・白褐色土中塊多量含む。黄土中塊多量、褐色土中塊少量含む。層3より劣る。
- 3層 黒褐色土(IVYK20) 褐色土中塊少量含む。黄土中塊多量含む。
- 4層 黒褐色土(IVYK20) 褐色土中塊少量含む。黄土中塊・中塊多量含む。
- 5層 褐色土(IVYK30) カマド基床(図7)がよく顕著して見えている。
- 6層 黒褐色土(IVYK20)に、黄土中塊・大塊含む。地盤すべり顕著していない。
- 7層 黒褐色土(IVYK20)に赤・黄褐色土(IVYK40)が混在し含む。地盤が湿化する。
- 8層 黒褐色土(IVYK20)一部。黄褐色土(IVYK40)中塊・小塊多量含む。
- 9層 黒褐色土(IVYK20)一部。赤・白褐色土(IVYK40)中塊多量、黄土中塊多量含む。ソデ土。
- 1層 黒褐色土(IVYK20) 黄褐色土の中塊多量含む。
- 2層 黒褐色土(IVYK20) 黄土中塊・褐色土中塊多量含む。やや硬質。

(SI87) 平面図・断面図 (S=1/60)



第12図 竪穴建物遺構図3 (SI86・SI87)

残存する状態であり、覆土の下層部の広い範囲でカマド崩壊混在土が認められるため、廃絶時に破壊されたことを物語っている。

(覆土堆積と遺物出土) 壁際で壁の崩壊土が一部認められ、前述したように覆土の下層部に、ぶい黄褐色土を含有するカマド崩壊混在土が認められる。特に建物中央やカマド周辺に多いことが特徴である。この上層には黒褐色土に褐色土塊や焼土塊を多目に含有する覆土が認められるもの、自然堆積層とも言いがた、やはり一括に埋め戻されたものと思われる。遺物は、1層にあたる上層から主体的に出土し、これ以外ではカマド床直上でまとまっているものの、全体的には疎らである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具82点、須恵器貯蔵具39点、土師器食膳具30点、土師器煮炊具534点、土製支脚のような土師木製品2点、石製品24点である。時期は、Ⅱ3新～Ⅱ期にあたるものである。

(床の状況と床被熱・掘方) 建物の東壁側、建物全体の1/4に地山床を使用しているが、この部分以外では貼床を検出している。貼床自体は薄いものであり、1・2cm程度の厚みしかない黒褐色土ベースのものである。カマドを中心として中央にやや硬化する面を持っているが、著しい硬化ではない。床は、中央はフラットを呈すが、西壁側が東壁側より10cm床レベルが上がっている。また、硬化面の南西端では床被熱が認められる。掘方には、中央に大規模な掘方土坑が位置し、この土坑に接して2基の小規模掘方土坑が配置されている。

4. SI87

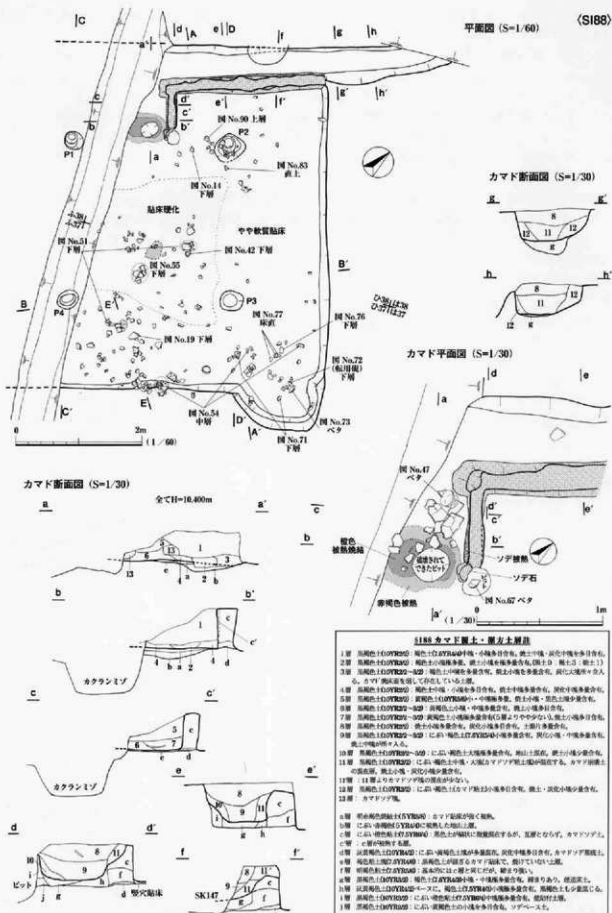
(立地・規模・形態) C地区中央西端、ひ・ふ-39・40Gr、F地区との境に位置し、削平により全体の1/5のみ残存していた建物である。柱穴の検出は2本のみであったが、おそらく4本主柱穴になるものと思われる。壁には周溝と壁支柱を伴う、4本主柱の建物である。カマドが検出されていないため、おそらく完全に削平された西壁若しくは南壁に設置されていたのだろう。もちろんコーナーカマドであった可能性ももたれよう。よって西側にカマドが付設するとすれば、建物主軸はN-69°-Wとなり、南側にカマドが付設するなら主軸はN-159°-Wとなる。建物規模は、残存縦長330cm、横520cm、この建物が正方形と仮定するなら推定縦長520cm、面積は推定で27㎡となろうが、正方形でなく長方形の建物であるなら、もっと面積は大きくなる。いずれにせよ、中型クラスの建物となろう。建物プランは、正方形と示しつつも、SI91やSI98のように長方形となる可能性も高いと考えている。削平のため壁の立ち上がりは検出されていない。

(柱穴・壁支柱・壁周溝) 4本主柱穴と考えられるが、検出されたのは2本のみで、どのような配置をとっていたかは不明である。検出された2本の柱穴は、径が42～50cm、深さはP9が33cm、P8は66cmを測る。勿論削平されているため、本来の深さは少なくとも75～80cmはあったものと考えている。両者の柱間規模は230cmであった。また、これら主柱の土層では、掘方土がしっかり残った状態であり、柱は抜き取られ埋め戻されている。壁周溝は上端幅で20cm、深さ15cmを測るもの。壁支柱は径20～50cm、深さ40～62cmを測る。検出されたのは6本分だが、隣柱間に2本ずつの支柱が並ぶタイプと思われる。これら支柱の下底半分は、根腐れのためだろうか、いずれも柱根が残っている。下底を残し、上半分は柱を抜き取り、土を入れ埋め戻している。

(床の状況とピット・掘方・遺物出土) 床は、覆土の検出がされていないことからわかるように、削平のため殆ど剥き出しの状態で見出されている。よって、貼床は薄く伴うものの、殆ど地山が露出する状態で、床自身も削平の影響を受けている可能性をもつ。P1は、径90cm、深さ10～12cm程の小土坑状のもので、底面はほぼ平坦を呈するもの。覆土は、黒褐色土(10YR2/2)に、ぶい黄褐色土と焼土の中塊を多量に含有し、炭化中塊を多目に含有する1層と、暗褐色土(7.5YR3/3)に、ぶい黄褐色土の中塊が極めて多量に、焼土・炭化中塊を多目に含有する2層からなる。掘方土坑の可能性もあるかもしれないが、焼土や炭化物の含有が多いので、貯蔵穴と判断されたもの。完全に床下レベルと考えられる位置から掘方土坑が1基確認されている。覆土はP1と似ているが、焼土や炭化物の含有が少ないことが特徴である。内部にはテラスを形成して深めの落ち込みが認められる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具46点、この他瓦鉢を含む土師木製品3点、石製品1点である。時期はⅡ2～Ⅱ3期と判断され、建物時期も同様になるだろう。

5. SI88

(立地・規模・形態) SI87に隣接する建物で、C地区ひ37-38に位置する。削平により全体の1/3を消失している。建物規模は縦長540cm、横残長410cmを測る。横長は復元可能であり、推定570cmになるものと思われる。面積は推定で31㎡、いずれにせよ中型規模の建物になろう。壁高は最大で45cm。建物は方形プランを呈すが、東壁



第13図 竪穴建物遺構図4 (S188)

両側の一部分が壁ラインより外側へ、半楕円形に突出している。これを除けば直線的な壁ラインをもっている。北西壁には、L字型カマドが付設し、建物中央には床被熱が確認できる。主軸はN-48°-W。

〈柱穴・床の状況・被熱炉床面〉中央4本主柱穴である。柱間規模は、いずれも250cmであり、均等配置されている。柱穴規模は、径30～45cm、深さ26～34cmを測る。廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。床はフラットを呈し、4本主柱で囲まれた中央部分が硬化し、この周囲はやや軟質を呈す。全面が2～4cm程度の薄い貼床を施され、貼床土は褐色粘土ブロックが主体で黒褐色土が隙間に入り込むものである。硬化部分の中央には、中央炉と思われる長径30cm、短径22cmの不整形を呈す被熱面が検出されている。

〈カマド〉北西壁に付設されるL字型カマドである。カマド左ソデは削平により完全に消失しているが、右ソデや煙道の残存状況は非常に良好である。ソデの高さは26～30cmを測り、直立している。焚口は、P1側にやや寄り気味で位置する。主部の貼床部分は、削平の影響もあらうと思われるが、残存する部分では平坦を呈し、dラインのL字屈曲地点では、主部の床レベルから3～5cm上がる。さらにgラインでは8cm程床レベルが上がるため、徐々に煙道に向かって床が傾斜している。右側へL字に曲がる地点の内側に突出部が認められ、障壁機能を備えている。基部ソデは、基底部を粘土で施した後、にぶい橙色粘土層を主体とした土で構築している。このソデ土は、時々黒色土が輪状にほんの少し入るものの互層とはならないものである。煙道ソデは前述の基底部粘土と、にぶい橙色粘土との間に、明褐色粘土が入る層となっている。また、焚口被熱とはほぼ同じ位置のソデ内側に被熱を受け赤化している。焚口の床被熱部分は、後世に掘り込まれたと考えられるピットにより一部が切られて失われているものの、残存部分は非常に良好で、被熱が強かったとみえ、中央部分の広い範囲で焼結し橙化している。カマドの規模は、主部で縦外寸147cm、幅は不明だが推定100cm程になろうか。焚口幅は内寸推定65～70cm。ソデ厚は主部で12～15cm、煙道ソデ幅は27～30cmと太く頑丈に作り込まれている。屈曲地点から壁立ち上がりまでの煙道長は234cm、煙道幅は外寸で屈曲地点が76cm、壁際が64cmである。カマド貼床は全体に施されており、主部の貼床は薄いもので、褐色粘土塊が主体で黒褐色土が混在する土が貼り付けられている。煙道では黒褐色土を主体として貼床され、掘方を揃う如く床平坦面を形成しているようで、厚みもまちまちである。なお、このカマドが構築後に、建物内貼床が施されている。

〈覆土堆積・掘方・遺物出土〉覆土に関しては、カマド付近でカマド崩壊土が認められ、これ以外は黒褐色土に明褐色土粘土ブロックが所々混入する程度の黒褐色土ベースの層となっており、一括埋め戻しがなされたものと思われる。最上層にあたる1層は、砂質土も含まれており、土層断面からみても、後世に流れ込んだものである可能性が高い。建物の掘方は、P2・3間に収まる形で、P2・3間に収まる形で、P1基盤出されている。この掘方土は、大型で有段を呈す形状で、段の上では床面レベルより10cm程の深さ、1段下がる床面レベルより25cm程の深さとなる。なお、覆土はb層の単層であった。出土遺物は、カマド焚口や南東壁側でまとまった出土が見られ、全体的に出土量は多い方だと言えよう。出土遺物は総数で、須恵器食器具316点、須恵器貯蔵具81点、土師器食器具152点、土師器煮炊具1,549点、その他として円筒土器や土製支脚・置カマド破片・空壁塊を含み81点である。下層や床面からI1期の遺物が出土しており、覆土中層からはII3期のもの、上層からはV2期のもの、最上層からは中世を主体とした遺物が出土する。本建物の時期はI1期と判断される。

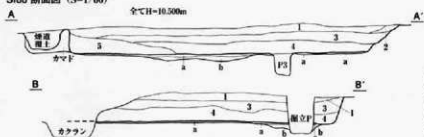
6. SI89

〈立地・規模・形態〉C地区は36・37Grの、SI86とSI88の中間に位置する。調査時に大型土坑としていたものを、カマド被熱等の検出により竪穴建物と判断したものである。壁高が6～15cmと非常に浅く、西壁の壁立ち上がりが検出されていないため、正確な建物規模は難しいが、残存する縦長は280cm、横長は250～280cmを測る。縦長は推定で300～320cm程になろうかと考えている。よって面積は推定で75㎡、いずれにせよ10㎡以下の超小型の竪穴建物となる。プランは重なる長方形で、東壁と南壁の一部が段をもって突出している。カマド被熱は南東壁側にカマドソデ石とともに検出されており、小型カマドがコーナーに付設したようだ。ソデの位置から考えても無煙道型のa類突出型(Ca類 ※2006望月・文献名は冒頭)になるのだろう。柱穴の検出はない。掘立柱建物に付設するような土間的性格のものとも考えられることから、時期もあわせ検討してみたが、付設する掘立柱建物が周囲にないため、単独の建物であったと考えざるを得ない。主軸はN-120°-E。

〈カマド〉カマドは、焚口被熱と両ソデ石のみ検出されている。小型で壁に直行に付設されたものと考えられ、ソデ石の位置から考えれば、煙道が壁外へ突出するタイプ(a類突出型)になるのであろうと思われる。カマド

第1節 建物遺構

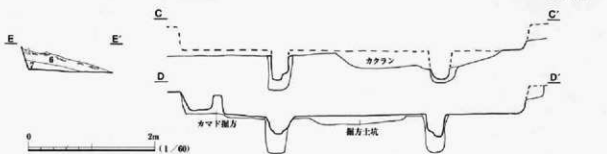
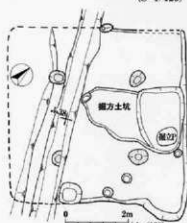
SI88 断面図 (S=1/60)



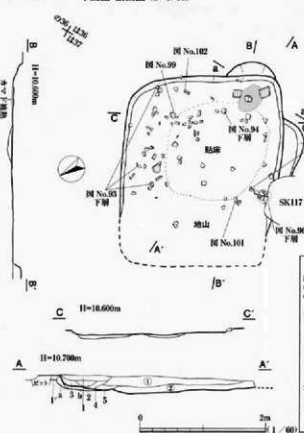
- SI88 竪土・覆方土層図**
- 1層 黒褐色土(DY7342) 竪土小塊や中多量、黒土小塊少量含有、中や中硬、明褐色土(DY7348)中塊少量含有。
 - 2層 黒褐色土(DY7342) 2層 1層に似るが、明褐色土小塊少量含有する土層。
 - 3層 黒褐色土(DY7342) 明褐色土小塊少量含有、黒土小塊少量含有、明褐色土中塊少量含有。
 - 4層 黒褐色土(DY7342) 明褐色土大塊多量・黒土、明褐色土、中塊少量、黒土、黒土中塊少量含有、黒褐色土層・地底。
 - 5層 4層と同層土層、明褐色土中塊少量含有。カマド付近の土。
 - 6層 黒褐色土(DY7342) 明褐色土大塊多量・中塊少量含有、黒土中塊、黒土小塊少量含有。
 - 7層 黒褐色土(DY7342) 明褐色土中塊多量、大塊少量含有、黒土小塊、黒土小塊少量含有。
- a層 黒褐色土(DY7342) 明褐色土大塊多量、明褐色土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒褐色土層が重なっている。

b層 黒褐色土(DY7342) ベース土、明褐色土(DY7342)中塊少量多量含有、黒褐色土小塊少量含有。

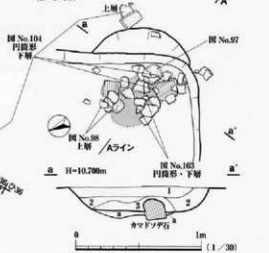
SI88 掘方平面図 (S=1/120)



(SI89) 平面図・断面図 (S=1/60)



SI89 カマド平面図・断面図 (S=1/30)



- SI89 竪土・カマド掘方土層図**
- 竪土
- 1層 黒褐色土(DY7320) 明褐色土小塊少量、黒土小塊少量含有、黒土、黒土中塊や中多量含有。
 - 2層 黒褐色土(DY7320) 1層に似るが、明褐色土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
- カマド掘方
- 1層 黒褐色土(DY7320) 黒土小塊、中塊少量含有、明褐色土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - 2層 黒褐色土(DY7320) 黒土小塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - 3層 黒褐色土(DY7320) 黒土小塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - 4層 黒褐色土(DY7320) 黒土中塊、中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - 5層 黒褐色土(DY7320) 黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
- カマド掘方
- a層 黒褐色土(DY7320) 黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - b層 黒褐色土(DY7320) 黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有、黒土中塊少量含有。
 - c層 黒褐色土(DY7320) 1層に似るが、明褐色土中塊少量含有、黒土中塊、黒土中塊少量含有。

第14図 竪穴建物遺構図5 (SI88・SI89)

被熱付近の壁外に若干の落ち込みが認められるため、これがカマド奥側や煙道と関連をもつものと推測される。カマド内部については、被熱面から焚口にかけては10°の傾斜を有し、焚口地点から以降は傾斜角3°程の平坦となっており、カマド床には貼床が施されており、奥壁にかけても掘方が認められ、この部分に被熱が確認されている。なおソデ石は、貼床に食い込むように設置されている。カマド規模は、縦長が奥壁外の落ち込みから焚口までで残存56cm、横長が外寸で56cm。焚口幅が内寸で28cm。ソデは不明なのだが、ソデ石の幅が14～18cmであり、これと同様のソデ厚になるものと思われる。

〔床の状況と掘方〕建物の床の状況は、土層断面図を見るとカマド焚口被熱の手前で縦やかに窪み形状となっていて、南壁側の床面に比べ5～10cm程低い状態を呈している。しかし、土層断面図の後に測量された断面図では床は平坦となっていて、北側床面レベルが他と比べ5cm程低くなっている。後者の方が正しいであろう。床の一部に貼床が検出されており、貼床は焚口被熱を中心に径150cmの円形で施され、この周りは地山床として使用している。掘方は浅く、最大でも5cm程度であり、床の窪みを修正するように床を形成した結果ではないかと思われる。掘方土坑は検出されていない。

〔覆土堆積・遺物出土〕建物内の覆土は、カマド付近で焼土や炭化物が多目に混入する層を確認しているが、カマドソデ土の混在するようなものとはなっておらず、どちらかという建物覆土にカマド前壊土が見られる層である。カマド付近の下層では、特に焼土や炭化物が極めて多量に含有している。出土遺物は総数で、須恵器食器具67点、須恵器貯蔵具24点、土師器食器具15点、土師器煮炊具277点である。その他陶器土器や厚鉄破片、白磁等その他として6点、石製品16点が出土する。時期はⅡ2期と判断される。

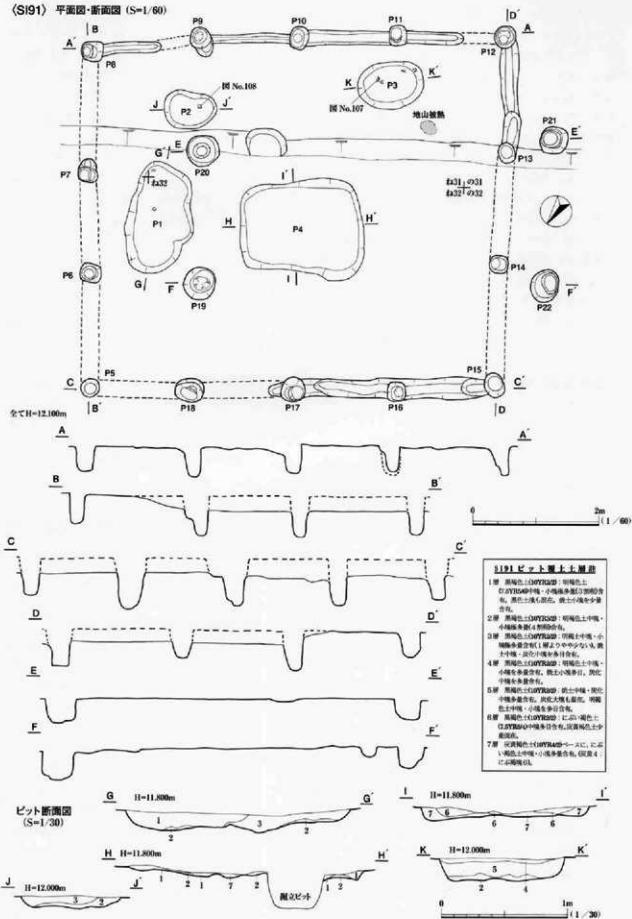
7. SI91

〔立地・規模・形態〕C地区南西の旧地形根拠部から鞍部にかかる削平区域の、ぬへの-32・33Grに位置する。全体が削平され、床面が全てとんでしまっている状態で検出されている。SI98と同様の構造、壁周溝と壁支柱による壁式土の建物だが主柱をもつタイプである。但し、SI98と違って2本分の主柱が周溝外にも位置する。プランは長方形を呈し、削平により検出されていない壁周溝もあるが、非常に直線的な壁ラインをもちつ。規模は、周溝までで570～590×670～690cmを測り、面積は39.44㎡。周溝外の主柱までとするなら、横長が760～770cmに至り、この場合の面積は44.37㎡となる。いずれにせよ大型クラスの建物である。南西・南東壁の交差する付近で被熱層を検出しており、これがカマド被熱になろうかと考えられる。勿論削平により地山被熱の部分のみが残存している状況である。この形態の建物ではこれまでのところ、対角線上に焚口をもつタイプか、短縮された小型のL字型カマドに限定されているので、被熱の位置から対角線上に焚口をもちコーナーカマドであった可能性が高いと言える。建物主軸はN-145°-E。

〔支柱・壁周溝・壁支柱〕4本主柱の規模は径44～50cm、深さ32～44cmを測り、底面に一段窪み浅い段を形成する。P21・22は壁周溝の外に配置されている。柱間規模は横軸（長辺軸）がいずれも550cm、縦軸（短辺軸）はP19・20間が210cm、P21・22間が230cmを測り、壁外の柱が若干開くような配置をとっている。これらの主柱は、建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。また、壁周溝は上端幅が12～33cm、深さ18cmを測り、壁周溝内に支柱が均等に配置されている。支柱は、長辺壁で中に3本、短辺壁で中に2本、径14cmが使われている。四隅柱が特に深いということはなく、中柱が深いものもみられる。支柱の深さは、検出面から測って40～45cmが主体で、最も浅いもので24cm程度である。設置時に、底面へ暗褐色土主体に褐色土中・大塊が混在する土を混入し、掘方底面を形成したと思われる痕跡を4本分で確認している。この形成の厚みは、3cm程度のものが1本、他3本には約18～20cm程である。だからといって、柱底面の深さがいずれも一定となったわけではない。柱の長さにはバラツキでもあったのであろうか。また、これら支柱は、建物廃絶時に切られたり、抜かれたりしている。支柱の設置・廃絶時処置においては、規則性は見られない。

〔掘方土坑と建物内土坑・遺物出土〕覆土は削平のため一切残存しておらず、前述したように床も一切残っていないが、4基の土坑が検出されており、P1～P4と番号を付している。P1～P3は、焼土や炭化物が非常に多く、灰溜め的な機能をもったピット状のものであり、建物内土坑として機能していた可能性がある。P4は、覆土が掘方土坑の土層を呈しているため、建物中央に隅丸方形プランの掘方土坑を1基作り込んだものと考えられる。竈穴建物からの出土遺物は総数で、須恵器食器具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食器具13点、土師器煮炊具35点と極めて少ないが、時期はⅡ2～Ⅱ3期と判断される。

(SI91) 平面図・断面図 (S=1/60)



第15図 竪穴建物遺構図6 (SI91)

8. SI92

(立地・規模・形態) C地区中央北側、の・は41Grに位置する建物で、削平により全体の3/4を消失する。カマド、柱穴は検出されていないが、カマドは西壁・北壁に付設したと思われる。規模は、残存する長壁を縦として、450×残存270cm。推測して横長も450cm程度になろうかと考えている。面積は約20㎡を予想しているが、本来のプランが長方形だとしても、小型建物になるのは違うと思われる。壁高は残存最大14cmで、壁は直線的、平面プランは正方形が長方形になるものと予想する。堅穴主軸はカマド位置を推測して西側付設ならN-60°-W、北側付設ならN-30°-Eとなる。

(床の状況・掘方土坑) 検出された床では掘方土坑を示すプランが西側で見られる以外の全面が貼床されている。貼床自体は黒色ベースの薄いものであり、2～4cmを主体として最大でも6cm程度である。地山が露出している箇所や貼床の一部には硬化が認められる。貼床の下底には掘方土が認められないので、堅穴掘削後、床面を平らに形成するために施されたものと思われる。なお、掘方土坑上面にも貼床土が確認されており、この部分で10cm程度の厚みである。床面はほぼフラットを呈すが、掘方土坑の位置する部分が僅かに窪んでいる。掘方土坑は非常に深く、床レベルから最大48cmを測り、内部にテラスや段を有す大型のものである。

(覆土堆積と遺物出土) 建物覆土では、壁からの崩壊土と考えられる堆積層が認められ、これ以外は含有物が少なめの単層である。遺物の出土は極めて少なくばらばらついている。特筆すべきは、床面から輪郭口が検出されていることである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具16点程度である。時期は、Ⅱ2期と判断される。

9. SI93

(立地・規模・形態、柱穴、遺物出土) C地区の北側の削平区域、に・ぬ43Grに位置、しっかりした掘り込みをもつ4本主柱のみ検出された建物であり、尚かつP4がSK128によって切られてしまっている。よって堅穴規模は不明だが、想定して中型規模の建物になるのだろう。検出された4本主柱は、径が残存50cm、深さが残存14～28cmを測り、底面が若干窪むものがある。柱抜き取り痕跡が確認できるので、柱は建物廃絶時に抜き取られたものと考えられる。しかし、抜き取り時に掘方までさほど影響が及ばなかったとみえて、柱痕跡が確認でき、この径が16cm程であった。柱の設置に関しては、対角線上に内側から掘り立てているものとみられる。柱間規模は、南北軸間で240cm、東西軸間で220cmと、とても良く揃っており、きっちり配置されている。建物主軸は、北向きと仮定するとN-34°-Eとなる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具3点、土師器煮炊具が2点、土製支脚2点のみであり、時期は不詳である。

10. SI94

(立地・規模・形態、遺物出土) C・F地区にまたがり、へ35・36Grに位置するもので、削平により殆どの部分が失われている建物である。建物の南東側一部と4本主柱のみ検出されたもの。検出された南東側部分では床レベルが標高1055～1060mを測る。このことから、削平区域では床レベルから測って65～70cmは削られてしまっていることとなる。本来かなりの深さで柱穴が掘り込まれていたことがわかる。残存する壁・床部分とP2の位置関係から全体を推測すると、おそらく若干長方形プランで、推定580×500cmあたりになるものと思われる。面積も推定で29㎡あたりの中型クラスの建物になるものと思われる。4本主柱配置だが、P2のみ外側へ飛び出るように配置されており、P1・4間で290cm、P3・4間で270cmであった。柱穴の規模は、径が残存40cm、深さが残存16～22cm、P2は深さ4cmしかない。全ての柱は切り取られたと思われ、柱痕が残存する。その径は16cm程であった。南東側壁の床と壁が残存する部分では、床は地山床である。若干黒褐色土が、この地山床にブロック状に食い込んでいる。壁高は残存16cm。覆土は、下層に黄褐色土塊を極めて多量に含有する黒褐色土、上層は黄褐色土塊が多目で焼土を含有する黒褐色土層となっている。この建物の主軸は、カマド位置が不明なため、東壁側が長辺と判断して軸とし、N-70°-Eとしておく。出土遺物は、土師器煮炊具7点のみと極めて少ない出土である。P2からⅠ1期に位置づけられる土器が出土するものの、これだけでは判断し難いため、時期不詳としておく。

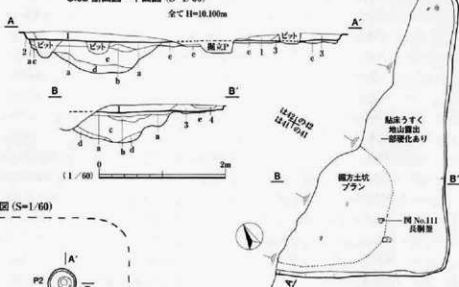
11. SI97

(立地・規模・形態) C地区南東端ひ24・25Gr、旧地形尾根部から鞍部にかかる削平区域で、壁が完全に失われた状態で、建物の一部が検出されたものである。この建物は、壁間溝を伴わない壁支柱のみで屋根を支える構造

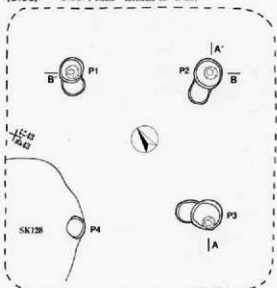
SI92 掘方平面図
(S=1/120)



SI92 断面図・平面図 (S=1/60)



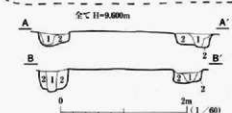
(SI93) SI93 平面図・断面図 (S=1/60)



SI92 掘方土坑

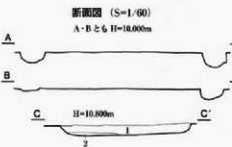
1層 黒褐色土(0YR7/2) 掘方土坑少量含有。CにA層褐色土の中塊多量含有。
 2層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土(0YR7/2)中塊。掘方土坑、掘方土坑少量含有。CにA層褐色土の中塊多量含有。
 3層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土の中塊多量含有。掘方土坑少量含有。
 4層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土の中塊多量含有。掘方土坑少量含有。

a層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土(0YR7/2)中塊を多量含有。掘方土坑。
 b層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土の中塊を多量含有。(国1 瓦葺)
 c層 CにA層褐色土(0YR7/2)に多量褐色土(0YR7/2)中塊多量含有。掘方土坑の付加。掘方土坑あり。
 d層 黒褐色土(0YR7/2) 黒褐色土(0YR7/2)中塊多量含有。掘方土坑あり。CにA層褐色土(0YR7/2)あり。掘方土坑あり。
 e層 黒褐色土(0YR7/2)掘方土坑に、CにA層褐色土(0YR7/2)中塊多量含有。掘方土坑。掘方土坑あり。



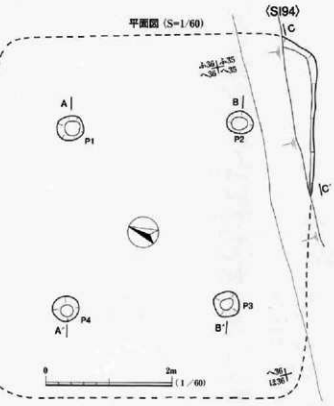
SI93 掘方土坑

1層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土少量含有。掘方土坑あり。
 2層 黒褐色土(0YR7/2) CにA層褐色土(0YR7/2)中塊少量含有。掘方土坑あり。掘方土坑あり。掘方土坑。



SI94 掘方土坑

1層 黒褐色土(0YR7/2) 黒褐色土の中塊を多量含有。掘方土坑少量含有。
 2層 黒褐色土(0YR7/2) 黒褐色土の中塊を多量含有。掘方土坑あり。

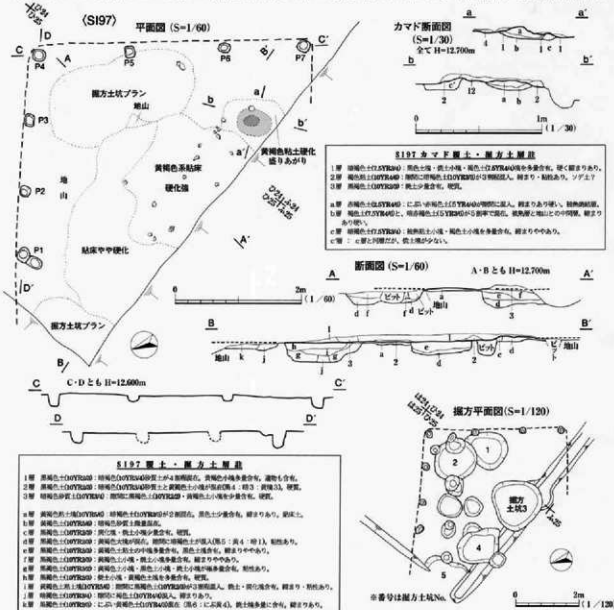


第16図 竪穴建物遺構図7 (SI92・SI93・SI94)

の、壁立式建物である。建物規模は、東西軸方向で残存400cm、南北軸方向で450cmを測る。東西軸方向は、推定570cm程になろうかと考えている。よって、面積は約26㎡、東西軸方向がもっと長いものだったとしても、中型規模の建物と言えるだろう。全体プランは方形と考えられるが、北壁側が広がり気味となっていたようである。カマド焚口被熱の状態から、カマドは東壁側で、壁に直行して付設するコーナーカマドであった可能性が高い。よって、建物主軸は、N-108°-E。

〈壁支柱〉壁支柱は、全部で7本検出された。南北軸側の壁（横壁側）で中柱2本をもち、東西軸側（縦壁側）で中柱は3本検出されており、残存する床や掘方の位置から考えても少なくとも4本はあったものと思われる。これに隅柱が付くことになる。支柱の平面プランは方形を呈し、径は16～18cm、深さ8～25cmを測る。支柱の柱間規模は、南北軸側（横壁側）で1.3mまたは1.4mであり、東西軸側（縦壁側）で1.0mか1.1mであり、規則性が何える値となっており、計画的に配置されていたようだ。これらの支柱は、建物廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。なお、主柱穴は検出されていない。

〈カマド・床面と掘方〉カマドに関しては、焚口被熱がしっかりと検出され、被熱周囲にカマド貼床が残存している。土層の4層も、カマド貼床がもしれない。なお、カマドは建物床よりも高い位置に構築されている。床の状況は、カマド焚口被熱の手前帯に貼床が確認でき、黄褐色粘土の塊がベースで隙間に暗褐色土が混入する土で貼床されている。特にカマド焚口の手前2m四方では床の硬化が認められ、これより北側部分では硬化が弱まる



第17図 壁立建物遺構図B (SI97)

ている。貼床は2～6cmの厚みで検出されたが、上面が削られている可能性もあろう。また、貼床の周りでは地山が剥き出しとなっており、掘方土埃ブランがしっかりと見えているものがある。掘方土埃は円形や不整形の中間規模なものが5基、その間にビット状のものという具合に連続して掘り込まれている。

《遺物出土》出土遺物は総数で、須器器食膳具53点、須器器貯蔵具17点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具166点。この他匣鉢破片5点が出土する。これらの遺物はⅡ3期と判断される。

12. S198

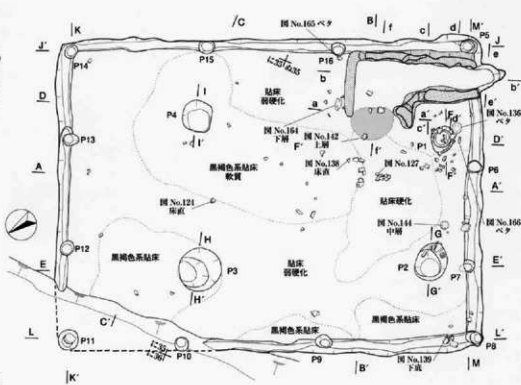
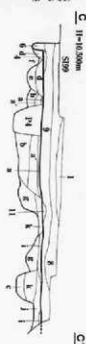
《立地・規模・形態》C地区中央西寄り、に・ぬ35-ぬ34Grに位置する。北側の一部を削平により消失するが、全体的に遺存状態は良好なものである。壁周溝と支柱をもつ壁立式の建物であり、さらに室内に4本支柱を伴う。東壁の南端側には、煙道が短縮した小型のL字型カマドが付設する。建物規模は500×670cm、面積33.5㎡を測る、中型建物である。プランは長方形を呈すが、壁の上端ラインは意外と波打っている。壁高は、最大で40cmを測る。主軸はN-125°-Eで、カマドが南端に付設する形をとる。

《支柱穴・壁支柱・壁周溝》壁穴室内に、4本の柱跡を検出している。径は38～68cmでP1が最も小さい。深さはP1・2が60cm、P4が40cm、P3は82cmで突出して深くになっている。柱は、建物のプランの中央に位置するのではなく、右側の南壁側にずれた状態に位置し、しかも柱のみのプランを見ると台形状を呈している。その柱間規模は、P1・2間が210cm、P2・3間が380cm、P3・4間が390cm、P4・1間が390cmであった。これら支柱穴は、建物廃絶時に全て抜き取られ埋め戻されている。壁周溝は、カマド煙道を除いて壁を廻っており、規模は、上端幅14～28cm、深さ14～28cmを測る。周溝の土層断面では、板敷痕跡や裏込めが確認されており、板敷痕跡の幅は4cmであった。支柱は、計12本で構成されている。規模は径16～25cmを測り20cm程が主体である。深さは40～52cmであり、四隅柱が深くになっている。これら支柱は、建物廃絶時に抜き取られ、黒褐色土(10YR2/2)に、ぶい褐色土埃をやや多目に含有する軟質土で埋め戻されている。

《カマド》カマドは、東壁の南端側に付設する、短縮煙道をもつL字型カマドである。主部の左ソデは基底部のみ残存する状況であり、そのまま周溝手前でしっかりとL字に曲がり、添うように奥壁側ソデへ至る。右ソデは、焚口から奥へ15cm地点で内側へ10cm突出する障壁部を持ち、これをすぎると内側は緩やかに屈曲して煙道ソデに続いてゆく。このため、煙道末端に行くに従って窄まってゆく形状を呈している。焚口被熱は顕著であり、床自体も特に主部部分の床がうすうすとも被熱している。また、右ソデ焚口部分にも被熱が認められ、左ソデからL字に屈曲した後の奥側のソデにまでも被熱が確認できる。この障壁は、あまり機能しなかったのかも知れない。煙道が短いせいか、煙道末端が窄まってゆく形状をもっているためか、床面に炎の引きがよいかマドであったものと考えられる。焚口の被熱面に石製支脚と土製支脚が出土している。石製支脚が本来の位置から動いている可能性があるだろうが、二個並列の掛口をもつタイプだった可能性も否定できないだろう。ちなみに、これまで2個掛けタイプは本遺跡で殆ど検出されていない。カマドの床面では、主部は被熱面が5°の傾斜、その後窪むのだが、また5°の傾斜をもつ。煙道では、そのまま5°の傾斜を保つが、屈曲点から55cmに至る地点で13°に傾斜が高くなる。ソデについて、主部部分の断面では基底部から直立に立ち上がる形状を呈し、煙道ではハの字型を呈している。このカマドのソデには、粘土の他に黒褐色土をベースとしたものをソデ土として使用しており、しかも、まとまった単位となっている。L字型カマドのソデは重厚に構築されているが、床面も非常に重厚に作られている。掘方が非常に深く、まるでカマド床を作り替えたようであり、焼粘土を混ぜ込んでいることが特徴である。カマド貼床も非常に厚く、5～17cmを測るが10cm程が主体的である。カマド規模は、主部で外寸縦長115cm、横長105cm、焚口幅が内寸70cm。煙道長はL字型の屈曲点から末端までで100cm、これは通常のL字型カマドの1/2以下である。そして、外寸煙道幅は、屈曲地点で90cm、壁際で75cmである。以上のようなL字型カマドは、この時期をもって消滅するため、L字型カマド変遷においては最終段階の構造をもつものとなる。《床の状況と掘方》床は、全面に貼床が施されている。カマド焚口被熱手前に、長径230cm短径140cmの不整形を呈す床の硬化が確認できる。そのすぐ左位置にあたる北側区域には、黒褐色土ベースの軟質床が認められる。長径370cmを測る不整形プランを呈して比較的広範囲に亘るものである。本遺跡で、このような位置に軟質床をもつのは、非常に特異なことと言える。西壁側には黒褐色土ベースで硬化ブロックが混在する貼床が3箇所認められる。この他も、やはり黒褐色土ベースの貼床となっており、硬化するものの強い硬化ではない。貼床土そのものは2～4cmと薄く、これが主体であり、最厚でも10cmである。床は、中央あたりから北側にかけて若干

(S198)

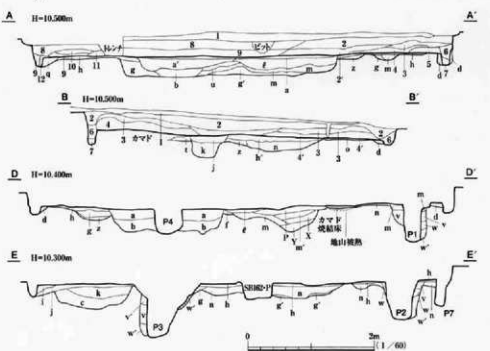
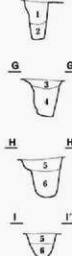
平面図・断面図
(S=1/60)



主柱穴断面図

(S=1/30)

全てH=11.1000m



主柱穴土層構成

- 1層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化大塊多量、炭化少量を含む。
- 2層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 3層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 4層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 5層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 6層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。

主柱穴土層構成

- 1層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量を含む。炭化大塊多量、炭化少量を含む。
- 2層 黒褐色土(DP7922) に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 3層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 4層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 5層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 6層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 7層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 8層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 9層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 10層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 11層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。
- 12層 黒褐色土(DP7922) 2部 に赤・褐色土(DP7924)中塊多量、炭化少量を含む。

第18図 竪穴建物遺構図9 (SI98)

窪み、カマド付近では他よりも床レベルが高くなっており、北壁際や西壁際では10cm程低くなる。掘方には、中央に大型の掘方土坑が位置し、北側を中心に連続して小規模なものやピット状の掘方土坑が掘り込まれている。掘方土坑の覆土には、土器を多く含むものが多い。

〔覆土堆積・遺物出土〕覆土は、カマド付近のみならず広い範囲で、カマドソダ崩壊土と思われる堆積層が認められ、その上層には壁側から流れ込むような形状での堆積層が認められる。自然堆積層と思われる。周溝では、9層のような板扉痕跡や12層のような板扉の裏込め土が確認できるが、断面Aラインの1箇所のみである。この他は板扉を抜き取って埋め戻したと考えられる。遺物出土については、堅穴規模に対して出土量は少ない。カマド付近や南壁付近で、まとまった出土をしている。この南壁付近で完形の環が、床面から出土している。出土遺物は、須恵器食膳具118点、須恵器貯蔵具63点、土師器食膳具22点、土師器煮炊具525点、製塩土器・土製支脚・出雲型支脚などの土師土製品が8点である。時期は、Ⅱ3期最古相と判断される。

13. SI99

〔立地・規模・形態〕この建物は、SI98東側の上面に重複して掘り込まれた堅穴建物である。SI98を先行して調査したためにプランの一部分が土層断面からの想定線となってしまった。さらに、北東側で近代乱瓦、南壁の一部はSK172と重複するため、一部の壁を消失する。建物の平面プランは隅丸長方形である。建物の壁高は最大20cm。規模は350×320～340cmを測り、面積は11.2㎡と超小型の建物である。なお、柱穴は検出されていないが、掘方平面図に示されている小穴と、なんらかの関連があるかもしれない。建物主軸はN-149°-W。

〔カマド被熱〕南・東壁際に被熱面が検出されている。ここがカマド被熱になるものと思われるが、壁からやけに近いことが若干の疑問を抱かせる。煙道が屋外へ直結して延びる構造をもっていたのだろうか。この被熱面では、支脚が出土している。なお、このカマド被熱付近で、さらに上層から掘り込まれた土坑を確認しており、この土坑によりカマドは壊されたものと思われる。

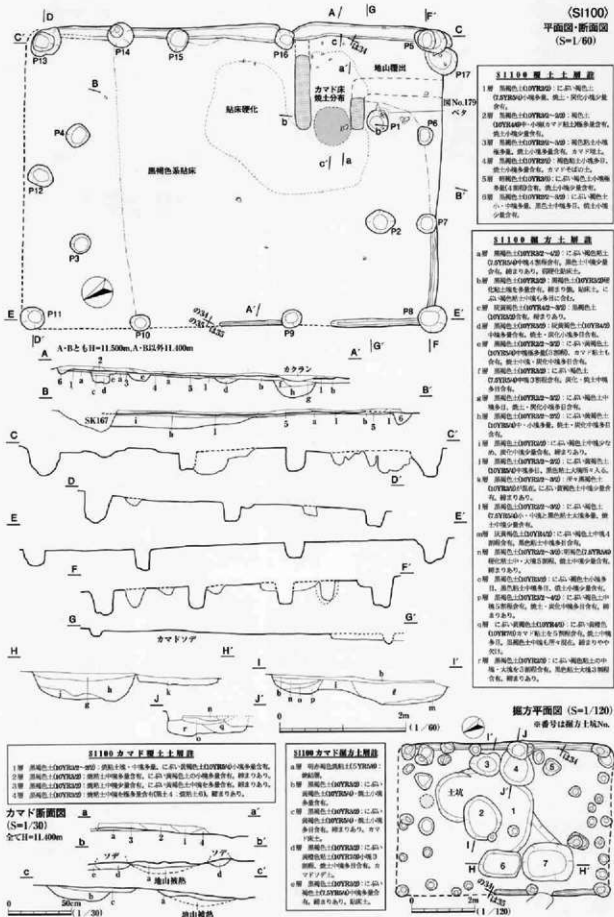
〔床の状況と掘方〕本建物の上面から掘り込まれた土坑や、切り合った周囲の遺構や攪乱により、検出された床は少ない。検出された床には、黒褐色土をベースにした貼床を施しており、締まりをもつ程度で著しい硬化はみられない。貼床の厚さは2～4cmを主体とし、最大厚で7cmであり、床面はほぼフラットを呈している。床下には、大型で深い掘方土坑が検出されている。建物の全体に渡っており、2～3基の土坑が結合したかのように、底面に段を有して掘り込まれている。

〔覆土堆積・遺物出土〕覆土堆積では、壁際で壁崩壊土と考えられる層が認められ、これ以外は黒褐色土ベースの一括土層と判断されるものである。カマド被熱付近で後に掘り込まれたと考えられる土坑覆土が4層として検出されており、カマドソダや焼土が混在するものとなっている。出土遺物総数で、須恵器食膳具33点、須恵器貯蔵具15点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具120点、土製支脚・置カマドが2点である。時期はⅣ1期と判断される。

14. SI100

〔立地・規模・形態〕C地区中央でF地区寄り、の34・35-ね34Grに位置する建物である。削平の著しい区域にあり、殆どの壁および北側床や周溝が倒れてしまっているが、4本主柱に壁周溝と壁支柱を伴う壁立式の建物と判断できる。建物構造や規模・形態はSI98と同様になるものと考えられる。本建物のカマドの削平は著しく、主部のみが残存する状況と思われ、SI98と同様に恐らく短縮されたL字型カマドになるものと考えている。建物平面プランは長方形を呈し、建物規模は480×660cm、面積31.68㎡。中型クラスの規模をもつ。かろうじて検出された覆土から、残存する壁高は2～4cmであった。建物主軸は、N-120°-E。

〔主柱穴・壁支柱・壁周溝〕柱穴は屋内で4本検出されている。規模は径34cmを主体に32～46cm。深さはP1が26cm、P2が51cm、P4は20cm、P3は不明だがP4と同様の深さになるものと思われ、深さにも径にもばらつきがある。主柱の配置は、壁周溝ラインや壁支柱と平行にならず、反時計回りに全体にずれるように配置されている。主柱の柱間規模は、P1・2間が160cm、P2・3間とP4・1間が490cm、P3・4間が170cmである。壁周溝は削平の影響により検出されたりされなかったりするが、全周していたとみて良いだろう。北西側が更に削平を受けるため、周溝も下底部分が検出されている状況である。周溝の規模は、幅14～26cm、深さ12cm。西壁側の規模は、幅7～12cm、深さ4～5cmであった。なお、周溝覆土は黒褐色土(10YR2/2～3/2)をベースに、にぶい褐色土の小中塊を多量、黒色土の中塊を多目、焼土小塊を少量含有する。壁支柱は12本が検出され、壁隅と1辺に1～3



第21図 竪穴建物遺構図12 (SI100)

本の中柱で構成される。規模は、四隅柱が径40cmを主体に、中柱は30cmを主体とし22～42cmの径幅をもつ。深さは、四隅柱が40～50cm、中柱が24～34cmで、四隅柱が深めとなる特徴をもち、旧地形に添う断面形状を呈している。なお、これらの壁支柱は建物廃絶時に抜き取られ、埋め戻されている。

〈カマド〉削平によりカマド焚口被熱と、ソデの基部基部部、主部のカマド床の一部が検出されただけの状況である。前述したようにSI98と同位置にあり、規模等からも構造は同じものと判断しており、煙道が短縮されたL字型カマドであったものと思われる。残存する右ソデの基部部からL字に屈曲する地点が推定可能であり、煙道長を推定して110cmとなる。この長さはSI98と同じ位の値である。主部で残存する床には焼土が分布、煙道部分は削平により地山が露出する。床は被熱部分で傾斜角7°を測り、被熱の途切れる地点から奥では傾斜角3°であった。内部にはカマドの貼床が検出されているところもあれば、地山が露出しているところもあり、内部上面に削平の影響があるものと思われる。なお、検出されたP17の覆土は壁支柱の埋め戻し土と同様のものとなっており、支柱もP17を切って掘り込まれており、深さ16cm程度と浅いものであり、煙道掘方の一部がこのような形で検出された可能性が高いと考えている。ちなみに、P17覆土は上下2層からなり、上層は、黒褐色土(10YR2/2)に、ぶい褐色土中塊と炭化小塊・黒色土塊を多目に、焼土中塊を多量に含有する。下層は、黒褐色土(10YR3/2)に、ぶい褐色土中塊・焼土中塊を多量、炭化小塊を多目に含有、灰褐色土も混じる土層であった。また、カマドの規模は、主部で外寸縦170cm×横100cmを測り、焚口幅は内寸で65cm、ソデ厚は基部部のみで22～24cmである。

〈床の状況と掘方・遺物出土〉床の状況だが、P10とP14を結ぶラインから南側の区域で貼床を検出している。このラインから北側区域は地山が露出している状況である。貼床は、黒褐色土ベースのものを貼り付けており、厚み2～6cmの非常に薄いものである。床面は、中央が2・3cmと僅かに下がるが、南北方向に対してフラットな面を形成している。東西方向に対しては西壁へゆくに従い床が低くなっており、床の高さが15cmも下がっている。カマド付近では床は最も高くなっている。床の硬化は、カマド焚口からP15・16間までの不定形範囲に広がる状況となっている。掘方土坑は、建物中央を中心に大型のものが掘り込まれ、この周囲に小規模なものが連続して掘り込まれている。出土遺物は総数で、須臾器食膳具36点、須臾器貯蔵具5点、土師器食膳具22点、土師器煮炊具159点である。その他、土製支脚や手づくね土器の土師器製品が2点出土する。時期は、Ⅲ期古段階と判断することができる。

15. SI101

〈立地・規模・形態〉C地区南側のF地区との境、ひ31・32Grに位置する。削平により、西側の大部分が消失、また南側や西側も土坑が重複している。東壁が直線ではなく、不整形となって検出されている。北壁の一部は直線的であり、このラインから全体を復元するならば、隅丸形状のプランをもっていたのではないと思われる。主柱穴と思われるピットが堅穴内から2本分検出されている。カマドは削平された区域にあったとみえ、検出されていない。この堅穴の規模は、南北軸を縦として残存で400×240cm、推定で400×420cm程の面積約17㎡になるものと思われる。小型建物以下に位置づけられるだろうが、この建物はⅡ期と判断できることから、本遺跡の中で、この時期としては異例の小ささである。建物主軸は、北カマドと想定するとN-7°-W、西カマドと想定するとN-91°-W、南カマドであればN-173°-Eとなる。

〈柱穴〉堅穴内から2本分の柱穴が検出されているが、おそらく4本主柱になるのだろう。柱穴規模は、径42～52cm、深さ16～26cmを測る。堅穴建物の柱穴としては貧弱な印象であり、柱穴でない可能性も考えなければならないだろう。柱間規模は200cmである。なお、これら柱穴の土層では、下底で掘方土が残存しており、上層では埋め戻し土が確認できる。

〈床の状況・掘方・建物覆土・遺物出土〉床は、P1から西側方向へ半隅丸形状に貼床が認められ、この他は地山床を使用している。貼床が確認できる部分では、若干の窪みを呈している。貼床は5～10cmの厚みをもち、掘方下底で少量の掘方土が認められるものの、下底まで貼床土が及ぶ箇所もあり、堅穴として掘削した後に床面を形成するように貼られたものと考えられる。なお、掘方土坑は検出されなかった。建物覆土については、貼床付近でカマド崩壊土を多量に含む層を確認し、この上層に単層の埋土が認められる。自然崩壊土層を示しておらず、カマドを破壊した後、一括埋め戻しを行ったと思われる。出土遺物は、建物内から満遍なく疎らに出土する程度である。出土遺物は総数で、須臾器食膳具26点、須臾器貯蔵具18点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具84点。

この他、土師土製品が23点、砥石などの石製品2点が出土する。時期は、I 1期と判断される。

16.S1104

〈立地・規模・形態・検出状況〉F地区南側、み16・17Grに位置する。調査時に4本の良好な柱跡を検出し、後に、柱と周辺の遺構の関係から竪穴建物と判断したものである。当初4本のみの掘立柱建物と捉えていたSB197を主柱とし、SJ44被熱層をカマド被熱とし、この被熱のすぐ上面の同位置に存在するSK219をカマドに伴う土器廃棄関連とした。また、SK216の浅い土坑は同時期に当たり、この建物の掘方土坑と判断した。よって以上の遺構番号は欠番となった。F地区は、南端が最も標高が高くなり、北西に進むに従って緩やかに傾斜していく地形である。近代の田圃造成のため段状に削られ、S1104のP2・4を結ぶラインから北西側が削平をかなり受けている。しかし半分は残存状態がよかつたにもかかわらず、調査時に竪穴建物の床検出はされなかった。本建物が明確な床としての堅さや周囲の土と異なるような質をもっていなかったことから、このような結果になってしまったのではないかと考えている。4本主柱から判断した主軸方位は、N-20°-E。本建物の時期がV 1期ということもあり、7世紀代に見られるような4本主柱の形態ではなく、主柱が四隅か屋外へ付くタイプと考えれば、規模は推定で340×300cm程の、推定建物面積10㎡程になるか。また、カマド被熱の位置から、カマドは中央に取り付くと思われる。なお、この建物は、本遺跡の竪穴建物変遷の中で最も末期の建物にあたるが、時間的にも特異であり、本当に竪穴建物としてよいのか疑問も残るところである。

〈柱穴・カマド〉柱間寸法は横軸200cm、縦軸340cmを測る。柱の規模は、径40～48cm、深さ45～50cmである。配置は長方形を意識して配置しているが、P1のみ外側に飛び出すようにずれて掘られており、これにより台形状の配置をとっている。カマド被熱位置の直ぐ上面10cm以内に、土器の集中廃棄が確認されている。赤彩碗等の食膳具も含まれるのだが、煮炊具が中心であり、カマドに関連する廃棄物として捉えた。このカマド廃棄物を除去した下から、被熱面が検出された。この被熱層は2層からなるもので、上層は被熱焼結した赤褐色土(5YR4/6)の硬化土の隙間に暗褐色土(7.5YR3/3)が3割程混入する層である。下層は、暗褐色土(7.5YR3/4)がベースで赤褐色土塊が4割程混入するが、上層程硬化していないのが特徴のものである。この層を見たところ、地山被熱ではなく、人的な貼床を形成した部分が焼けており、被熱部分しか確認はできないがカマドとして床を構築した可能性もたれる。

〈掘方土坑とその他の遺構・遺物出土〉掘方土坑として判断したP3・4間に位置する土坑は、規模が長径170cm短径100cm、深さ18cmを測る洋梨型の楕円形である。底面は平坦を形成、覆土は黒褐色土(10YR2/3)をベースに暗褐色土(10YR3/3)が5割程で混在し、黄褐色土(10YR5/6)の小塊を多量に含有する単層からなる。この建物には、SJ37・38・40・41が位置している。建物の床レベルを判断することは難しいものの、柱穴の断面から標高13.05m辺りではなかろうかと予想している。各々の標高は、SJ37が13.17～13.20m、SJ38が13.15m、SJ40が13.07m、SJ41が13.06mである。前者の2基は高い位置となるため、この建物には伴わないと判断できる。後者の2基は、或いは、この建物に伴っていたかもしれないと考えている。出土遺物は総数で、須臾器食膳具19点、須臾器貯蔵具9点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具100点であり、時期は、V 1期と判断される。

17. S1105

〈立地・規模・形態〉F地区東側の南端・み-14・15Grに位置する、建物密集区から外れた区域に単独で立地する。竪穴に柱穴をもつ極めて小型の建物で、竪穴部分の規模は260×225～250cm、面積6.18㎡を測る。壁高は30cmを主体に最大で35cm。建物プランは長方形であり、南壁側の柱穴が広がるため柱穴配置は台形状プランを呈している。北壁に中央配置する無煙道型タイプで、排煙口を屋外へもつ煙道突出型(Cb類突出型 ※2006望月・文献名は冒頭)の小型カマドが付設する。主軸はN-23°-E。詳細は後述するが、本建物には常に建物を使用したような著しい生活痕跡が少なく、竪穴内が綺麗であり、「産屋」「忌み小屋」のような役割を担った建物ではないかと予想している。

〈柱穴〉4本分の柱跡と思われるピットを検出している。4本中2本(P2・3)は壁際に付設するように位置し、もう2本(P4・5)は南壁側の竪穴外に位置する。P2・3、P4・5は、南北軸に向かってほぼ相対する位置にそれぞれ配置されているが、全体の配置を見ると台形状を呈している。柱間規模は、P2・3間が235cm、P3・4間とP5・4間が215cm、P4・5間は310cmであった。柱間の規則性は見られるのだが、竪穴に対して右回り方向へ全体にずれる形で配置がされている。柱穴の規模は、径が16～28cm、深さは、P2・3が似たような深さをもつ

ものの、柱底面が堅穴床面に届かない深さとなっている。P5は良好な深さを呈しており深さ24cmを測るが、P4は非常に浅いもので深さは5cmしかない。いずれのピットも深さはそれぞれであり、現況面から5～30cmと、深さに統一性はない。

〈カマド〉北壁中央で壁に付設するカマドである。ソデは逆V字状を呈し、左ソデ奥と右ソデ手前部分が廃絶時の破壊によるものか、壊れて失われている。ソデには、極めて多量の焼土と土器を混ぜ込んでおり、基底部からの立ち上がりが内傾気味に構築されている。カマド内部では、全面で貼床が認められ、焚口から38cmの地点に転用支脚が検出されている。貼床は基本的に暗褐色土に黒褐色土や褐色粘土が混在する土であり、焚口被熱部分では黄褐色粘土のみを貼っており、これが被熱している。支脚は、小釜を伏せて床に埋め込んでいる。この小釜内には黒褐色土に焼土塊が混入する土を詰め込んであり、焚口側が被熱する。支脚から奥の貼床は厚いものとなっている。焚口被熱は顕著で、内部の床は、支脚まで10°の傾斜角をもち、支脚から奥に掛けては奥壁まで12°、奥壁で立ち上がって屋外へ続く。立ち上がってから末端までは35°の傾斜である。屋外へ突出した煙道の端にはピットが検出されており、径28～30cm、深さ35cmの規模をもつ。なお、カマド内部からは煮炊具がまとまって出土している。カマド規模は、焚口から奥壁までの長さが外寸で63cm、焚口から突出部までの長さと同じく外寸93cm、横長外寸65cm、焚口幅が内寸で45～50cm、ソデ厚15cm、奥壁からの突出部のみで長さ30cm、幅21～28cmを測る。

〈床の状況と掘方・建物内施設〉床は凸凹状を呈しており、南・東壁側の床が10cm程高くなる状態である。カマドを中心に中央部分が著しく硬化する。この硬化は南壁中央まで続いており、ここが入り口になるものと思われる。床は、厚みが1～4cmの薄いものであり、黄褐色粘土の地山塊を叩き締めた貼床と考えられ、床には炭がブロック状に点在している。カマドの左手ではピットが検出されている。このピットの覆土には灰が入っていないため、貯蔵目的だったと思われる。なお、貼床土以外の掘方土は検出されていない。

〈覆土堆積・遺物出土〉覆土は自然堆積の土層を呈しており、建物廃絶後、そのまま放置したのであろう。遺物の出土は少なく、カマド焚口と床硬化面内を中心にして出土する。総数で須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具8点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具76点、土製支脚1点が出土し、時期はⅣ2期古段階と判断される。

18. SI106

〈立地・規模・形態〉F地区南東側、ふへー22・23Grに位置する。削平の影響で、カマド・2辺の壁・4本のピット・床の一部のみが検出され、総じて堅穴建物と判断したもの。規模は、堅穴部分で残存330×320cm、面積11㎡程。ピットを含めた規模は450×450cm程で、面積は約20㎡になる。堅穴は壁ラインが歪な方形プランを呈し、柱までの建物全体のプランは正方形になるものと思われる。面積がもう少し大きくなる可能性もあろうが、いずれにせよ小型建物となろう。主軸はN-113°-E。東・南壁で検出できた壁の高さは20cm程である。

〈柱穴・床の状況・床面被熱〉検出された4本のピットは、4本主柱になるものと考えている。主柱は堅穴周囲で検出されたものだが、配置においてP2のみ外側に飛び出すように位置するため、柱配置のプランは台形状になる。柱間規模は、P1・2間とP3・4間が400cm。P4・1間が370cm、P2・3間が410cmである。規模は径34～40cm、深さ16～25cmを測る。床は、中央で貼床の一部が検出されており、褐色土塊をベースに隙間に黒褐色土が4割程混入するものと、黒褐色土に硬化する褐色土塊が2割程で混在する、2種類の土で構成されている。カマド被熱手前の一部分では硬化部分が残存する。中央以外の床では、上面が削平を受けている部分や、貼床や掘方の検出されない部分がある。後者は壁際でもあり、地山床を使用していた可能性もあろうか。なお、貼床の厚みは4.5cmを呈し、しっかりと床を構築している。中央から南寄りの位置では、被熱面を検出しており、この被熱面部分は上層の床面が削平されているため、被熱の下底部分が残存していたものと思われる。

〈カマド・灰溜めピット〉南東壁コーナーに付設し、焚口を対角線上にもつ。ソデが逆U字状を呈する無煙道型に属するもので、排煙口を屋外へもつ煙道突出型（C b類突出型 ※2006望月・文献名冒頭）である。このカマドが検出された部分には、上層で被熱面がもう1層確認されたが、これは本カマドに関連するものではなく、上面に焼土坑が掘り込まれたものと判断した。廃絶時のカマド破壊もあっただろうが、この焼土坑により更にカマドは破壊を受けたものと思われる。カマド被熱面は建物床の高さより10cm程下がったレベルで、カマド内部においては焚口から50cm奥壁側へ至る地点で立ち上がる。そして煙道に至るのだが、掘立柱建物のピットに切られていることもあり末端はよくわからない。だが、煙道はSI105のような屋外へ突出する形態のものである。

カマドのソデは、被熱面が下がっていることで、ソデの形をかなり残しているといった状況で、人為的な構築といった底部はなく、地山が盛り上がっている程度である。この地山盛り上がりから、このカマドの基底部となるのだろう。なお、内部での貼床はカマド手前では検出されなかった。逆に、煙道側では掘方土が確認でき、煙道床を形成している。カマド規模は、焚口から奥壁立ち上がりまで外寸60cm、幅は推定外寸で100cm。焚口幅は内寸60cm、突出する煙道の暗存長は30cm、幅外寸50cmを測る。カマドの右側にピットが位置する。覆土に灰や焼土を多量に含んでおり、本カマドに付属する灰溜めの機能をもっていたと考えられる。

《遺物出土・掘方土坑》出土遺物は、極めて少ない。出土遺物は総数で、須臾器食膳具8点、須臾器貯蔵具4点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具67点、製塩土器の土師土製品1点である。時期はⅡ2～Ⅱ3期に相当するものである。掘方からは、小規模な掘方土坑が4基検出されている。いずれも貼床下底から測って深さ30～40cmの、しっかりとした落ち込みをもつものである。掘方土坑1は、黒褐色土ベースの土と褐色土塊に暗褐色土等が混在する、粘性をもつ土が覆土である。掘方土坑2は主に黒褐色土が充填されているタイプのものである。いずれも本遺跡においては、掘方土坑覆土の典型的な埋土をもつ。

《覆土内遺構》この竪穴建物では、覆土内レベルで他の遺構が検出されている。まず、カマドの報告で少し記述したが、カマドの上面に掘り込まれたと考えられる焼土坑である。当初焼面が2層に渡って検出され、上層にあたる焼面の範囲が広がったため、カマド被熱とするには違和感をもっていたが、更に下層でこぢんまりとした被熱面が検出され、こちらがカマド焚口被熱と確信したのもよって、カマド部分に焼土坑が掘り込まれたものと判断し、上層焼土坑とした。この焼土坑のプランは不明であり、なお、重複するSJ45は、本建物の検出面よりも20cm以上の上面で検出されているものであり、本建物との関連はないものである。

19. SI107

《立地・規模・形態》SI106カマド南側を若干切って位置する建物である。F地区へ・は22Grにあたり、柱穴をもたず、カマドを北東隅のコーナーに付設する建物である。建物プランは隅四方形で西壁側が広がり、北西側の一部を削平により消失している。竪穴規模は370×250～260cm、面積9.82㎡の超小型である。壁高は10～16cmを測り、建物主軸はN-90°-Eをとる。

《カマド》カマドは、建物北東壁隅のコーナーカマドで、ソデは大部分が失われており、内部も他のピットにより破壊されている状態である。残存するソデはカマド基底部とソデの極一部である。カマド基底部は、粘性のある暗褐色土(75YR3/3)がベースでしっかりと作り込まれている。左ソデ基底部付近では6cmの高さをもってソデが残存する。このソデ土は、褐色土粘土に暗褐色土に炭化塊や焼土も含有するもので、手応えがしっかりしてざらつきがあるもの。この残存ソデの上面に3cm程に渡って被熱面が確認できる。これらソデの状況から復元を試みれば、両ソデが真っ直ぐ奥壁に取り付くタイプの無煙道型カマド(C a類 ※2006望月・文献名は冒頭)でないかと考えている。床被熱は明確で、周囲が明赤褐色(5YR5/6)焼結層、中央が橙色(10YR6/8)を呈す被熱焼結層で特によく焼けている。なお、カマドの規模は、縦長外寸70～72cm、幅外寸62cm、焚口幅内寸38～40cm、ソデ厚は残存で13cmを測る。

《床の状況と掘方・覆土堆積・遺物出土》床は、黒褐色土ベースの貼床を施しており、明確な硬化をもたないものであり、床の中央で軟質部分があるものの、基本として締まりがある。なお、東壁付近は地山床を使用している。床面は凸凹を呈しており、東壁側から西壁側へ向かうに従い緩やかに低くなっている。貼床の厚みも、東壁側が薄く2～4cm程、中央から西側にかけては10cm程である。なお、掘方としては貼床土と底面地山に間層が僅かに見られる程度で、掘方土坑は検出されていない。掘方全体に貼床土が及んでいると言ってもよいくらいで、床面を形成するために入れられた土がそのまま床をも形成したと思われる。

《覆土堆積・遺物出土》覆土は、カマドの周辺でカマド崩壊土らしき土層を確認しているおり、カマドにピットが掘り込まれていることから、4・5・6層は上層からの掘り込まれた土の可能性が高い。その際にカマド関連の土が混入した可能性があると考えている。これら以外では1層と3層に分層されているものの、褐色土塊の含有の有無で分層されているだけであり、基本的には黒褐色土の一括埋土層と考えられる。床面における凸凹検出状況からも、廃絶後の早い段階で埋戻しされたものと思われる。遺物の出土は少なく、建物内に疎らに散在する程度である。特筆するなら鉄製品が床面より出土している。出土遺物の総数は、須臾器食膳具72点、須臾器貯蔵具11点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具187点である。時期はIV2段階にまとまっている。

20. SI108

〈立地・形態・規模〉SI106・107の南東、F地区は20・21Grに位置する建物である。調査時にカマド被熱を検出したことで、建物と判断したものである。柱穴は検出されていない。南壁の中央から左寄り位置に、カマドが付設する。規模は推定で、縦長440cm、横長490cm。推定面積は22㎡程で、小型から中型クラスの建物になるのだろう。主軸は、N-126°-E。

〈建物の検出状況と床の検出状況〉この建物は、調査時に大型土坑と考えていたもので、カマド焚口被熱と考えられる面やカマドソデの基底部と考えられる部分が検出されたことにより、堅穴建物として扱いを変更したものである。しかし、結局床を明確に捉えることは出来なかった。覆土と床面との明瞭な境のない、床の硬化がない状態で、硬化が認められなくても床面であれば粘土等の含有物が硬化することができ、それがそれすらなかったものである。カマド被熱検出レベルと床レベルがほぼ同じ高さであるケースが多いことから、本建物の床面をカマド被熱検出レベルに合わせて捉えただけであり、本来機能していた床であったのかどうかは疑問が残るものである。但しこの方法で、北壁の一部と東壁が検出できている。とはいうものの、捉えることが出来た壁高は2cm程である。そして、この建物の全体プランは隅丸形状になるものと思われる。また、南西側のラインは掘方として捉えた落ち込みのラインであり、このラインまでが本来の床範囲であるかどうかは正確には不明である。よって、本建物の面積も前述した推定値より大きくなる可能性がある。

〈カマドの状況〉カマドの焚口被熱と、ソデ基底部を検出している。ソデ基底部は、暗褐色土(7.5YR3/3)をベースに褐色土(7.5YR4/4)が4割程混在する土で、しっかり締まっている。焚口被熱は、綺麗に酸化焼結して、中央が一段と著しく焼け明黄褐色を呈している。また、焚口被熱から奥では、浅く窪み小ピット状の痕跡を検出しており、これがカマドの支脚抜き取りピットかもしれない。しかし、かなり小規模なもので、支脚抜き取りピットだとしても、ピット下底部分が運良く残って検出された可能性もあろう。カマド内部では、貼床の検出はされなかった。削平されて地山が露出している状態なのだろう。このような状況だが、奥側では緩やかに登る傾斜が認められた。この傾斜角は10°であった。なお、カマド規模は、縦長が推定で60cm、横長が推定で75cm、ソデ厚は残存で10cmである。

〈堀方・掘方土坑・遺物出土〉掘方においては、床の厚さを捉えることは難しいが、おそらく断面の1層で破線より下部分が貼床になるのだろうと思われる。また、床下では掘方土坑が2基検出されている。中央から東寄り、大型のもの1基と、小型のもの1基である。掘方土坑は深いものである。遺物出土については、床面からは満遍なく出土しており、決して多くない量である。逆に掘方からは、掘方土坑を中心に土器が多く出土している。出土遺物は総数で、須恵器食膳具90点、須恵器貯蔵具30点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具298点である。その他土製支脚2点、砥石1点が出土している。時期は、ほぼⅡ3期にまとまる。

21. SI109

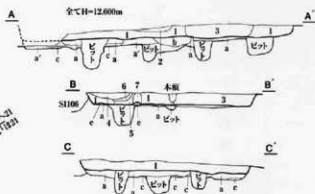
〈立地・推定規模・形態〉F地区東側、へ・ほ-23・24Grに位置する建物で、貼床の一部と掘方土坑のみが検出されたものである。よって、全体規模など詳細は実のところ不明である。検出された掘方土坑を囲うように範囲を設定して復元を試みると、東西軸側の長さが推定490cm。正方形プランと仮定するならば面積は推定で24㎡位となろうか。よって小型から中型クラスの建物になるだろう。なお、この建物に伴う柱は検出されていない。また、カマドも検出されていないため、削平部分にあった可能性が高いと思われる。なお、残存貼床の北側に想定線を記載しているものの、削平部分が北側であった可能性もある。カマドの検出もされておらず、壁ラインも不明であり、建物主軸を復元することはできない。

〈床の状況と掘方・出土遺物〉部分的に検出された貼床は、黄褐色粘土ベース部分、褐色土ベースの部分、黒褐色土がベースの部分と3種類の土が使用されて構築されている。建物覆土が一切検出されていないため、この床自体も上面が削平を受けている可能性をもつ。掘方には掘方土坑が2基検出されており、掘方土坑1の最下層から白粘土が検出されている。出土遺物の総数は、須恵器食膳具109点、須恵器貯蔵具25点、土師器食膳具19点、土師器煮炊具332点、土師土製品5点である。ほぼⅡ3期に時期はまとまっている。

22. SI110

〈立地・検出状況と推定規模・形態〉F地区西側、ほ・ま26・27Gr、旧地彩尾根部と鞍部の境辺りで、削平を受けている区域に立地する。4本主柱と、カマド被熱、掘方土坑1基のみが検出されており、上面が全て削られた

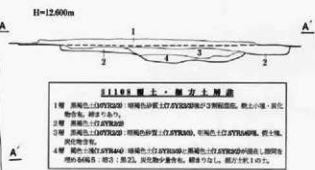
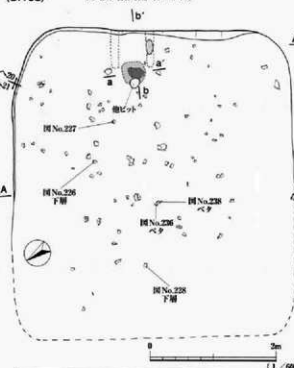
(SI107) 平面図・断面図 (S=1/60)



SI107 層上・層下層断面

- 1層 黒褐色土(1)AYR302-520 : 黄土・褐色土層の小塊が多量含有, 締まりあり。
 - 2層 黒褐色土(1)OYR200 : 黄土塊物多量含有。
 - 3層 黒褐色土(1)OYR200-510 : 黄土塊少量含有, 締まりあり。
 - 4層 黒褐色土(1)OYR200 : 黒褐色土(1)OYR200が4層程度, 褐色土塊少量含有。
 - 5層 黒褐色土(1)AYR302-520 : 褐色土層・小塊多量含有, 黄土層・小塊少量含有, 締まりあり。
 - 6層 黒褐色土(層)AYR304 : 黒褐色土(1)AYR302P-3物同様に, 締まりあり。
 - 7層 黒褐色土(1)OYR200 : 褐色土(1)OYR200P-3物同様に, 断面に黒褐色土(1)OYR200が1層程度入, 締まりあり, 褐色土層少量含有。
- a層 黒褐色土(1)AYR302 : 黄土塊・褐色土塊多量, 灰化物含有, 締まりあり, 壁土層。
- b層 黒褐色土(層)A-ベタ : 壁土層のみ, 壁土層のみ, 壁土層のみ。
- c層 黒褐色土(1)OYR200 : 締まりあり, 概況, 壁土層。
- d層 黒褐色土(1)OYR200 : 褐色土(1)AYR304, 褐色土(1)AYR304, 褐色土(1)AYR304 : 壁土(壁土), 締まりあり, 黄土層多量含有, 壁土層。
- e層 黒褐色土(1)OYR200 : 褐色土(1)OYR200P-3物同様に, 締まりあり。
- f層 褐色土(層)OYR304 : 褐色土(1)OYR304P-3物同様に, 締まりあり, ソラ基礎土層。

(SI108) 平面図・断面図 (S=1/60)

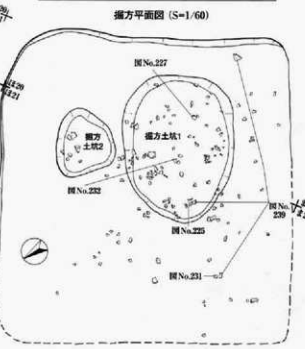
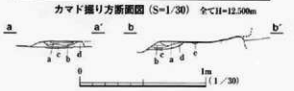


SI108 層上・層下層断面

- 1層 黒褐色土(1)OYR200 : 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。
- 2層 黒褐色土(1)AYR304 : 褐色土(層)AYR304, 褐色土(1)AYR304, 黄土層, 灰化物含有。
- 3層 黒褐色土(1)OYR200 : 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有。
- 4層 褐色土(層)AYR304 : 褐色土(1)AYR304P-3物同様に, 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり, 壁土層1の土。

SI108 カマド層上・層下層断面

- a層 明褐色土(1)OYR304 : 断面に, 土質・褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。
- b層 明褐色土(1)AYR304 : 断面に, 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。
- c層 明褐色土(1)AYR304 : 断面に, 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。
- d層 明褐色土(1)AYR304 : 断面に, 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。
- e層 明褐色土(1)AYR304 : 断面に, 褐色土(層)AYR304P-3物同様に, 褐色土塊・灰化物含有, 締まりあり。

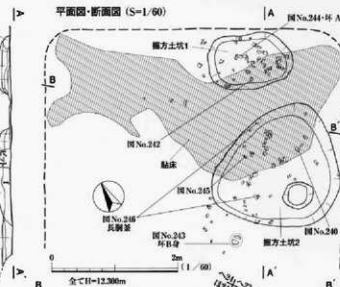


第25図 竪穴建物遺構 16 (SI107・SI108)

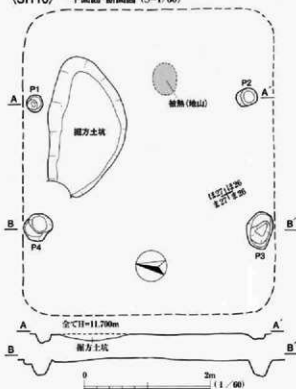
(SI109)

- SI109 掘方土坑・掘方土屋遺**
- a 層 黒褐色粘土(10YR2/3) 中褐色土(10YR5/6) に赤褐色土(10YR5/8)を少量含む。中に黒褐色土(10YR2/3)の小塊あり。時期Ⅱ・Ⅲ期土、黒土、緑土、赤土、炭化小塊を含む。焼土あり。
- b 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量存在。焼土あり。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- c 層 黒褐色土(10YR2/3) に赤褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒褐色土(10YR5/8)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。
- d 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- e 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- f 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- g 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- h 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- i 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- j 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- k 層 黒褐色土(10YR2/3) 黒褐色土(10YR5/6)が少量あり。黒土・緑土・黒土、焼土少量を含む。炭化土塊・黒褐色土塊少量を含む。
- 以上。

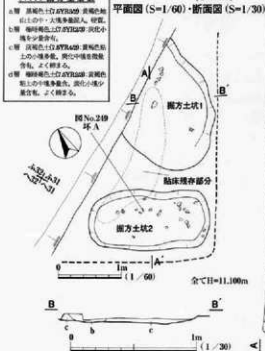
平面図・断面図 (S=1/60)



(SI110) 平面図・断面図 (S=1/60)



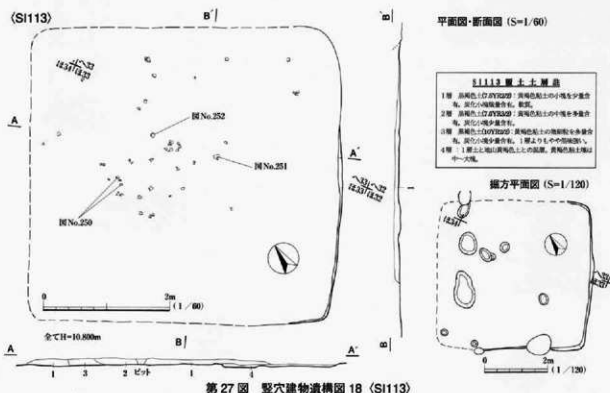
SI111 掘方土屋遺



第26図 竪穴建物遺構図 17 (SI109・SI110・SI111)

状態である。よって、正確な全体規模は不明だが、4本主柱の位置等から全体を推測すれば、恐らく主柱が壁際に割立られるタイプと思われる。すると、面積は推定で20㎡程の小規模になるものと推測される。検出された被熱は、地山が焼けた状態であり、カマド被熱の基底部分と予測でき、壁中央にカマドが付設されていたものと考えられる。建物主軸は、N-82°E。

〈主柱穴・掘方土坑・遺物出土〉4本主柱である。柱の規模は、径25～58cm、深さ8～25cmを測る。柱間規模は、P2・3間とP4・1間が200cm、P1・2間が340cm、P3・4間が350cmであり、P3が外側へ飛び出るように配置している。これら主柱穴は建物廃絶時に抜き取られ、埋め戻されている。掘方土坑は、P1側1に1基検出されており、餃子形のフランを呈して、深さは最大20cmを測る。掘方土坑の覆土は1層の単層であり、黒褐色粘土(10YR2/3)に、黄褐色粘土(10YR5/6)中塊や大塊と炭化小塊を多量に含有し、径20cm程の炭化大塊を少量含有する土で埋められている。よって、一括に埋め戻されたものと考えられる。なお、出土する遺物の総数は、須恵器食器具6点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具29点と極めて少ないが、時期はⅡ3期とまとまっている。



第27図 竪穴建物遺構図18 (SI113)

23. SI111

〈立地・検出状況〉F地区西側ふへ31Grに位置し、削平区域から検出され、かなりの部分を消失する建物である。貼床の一部と掘方土のみを検出したもので、柱穴は検出されず、プランや規模は不明である。主軸は、北向きを想定してN-30°-E前後になるだろうと予想しており、一応記述しておく。カマドが付設していたかどうかも分からない状態である。

〈床の状況と掘方土坑・遺物出土〉貼床と考えられる土を検出しているが、一部分に残存する程度で、これ以外には既に削平されている。この検出された貼床土も、恐らく上面が削平を受け下底部分が崩壊して残っていたものと思われる。掘図で示した貼床範囲は断面から復元したものである。貼床は、黒褐色土ベースの土であり、残存する厚さは最大で5cmである。掘方土坑は、2基検出されている。掘方土坑1は、落ち込みを有するものの、非常に浅く、どちらかという掘方そのものといった印象である。掘方土坑2は、深さ10cm程度の浅いものである。出土遺物の総数は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具14点、土師器煮炊具53点で、極めて少ない。出土する遺物の時期はIV1期に位置づけられるものである。

24. SI113

〈立地・規模・形態〉F地区西側、ふへは33Grに位置する。やはり、削平区域からの検出である。かなりの部分が削平されており、しかも柱穴、カマドの検出はない。竪穴規模は、460～470×推定490cm。推定面積23㎡程の小型建物になろう。主軸は、N-35°-E。

〈覆土と床の状況〉覆土と考えられる土層堆積層が認められ、これを取り除いた段階で南西壁の立ち上がりが高くながら現われたという状況である。床面と言えるのか判断し兼ねるのだが、貼床は認められず、地山がそのまま露出する。一応床面としてこの地山面では、硬化など一切認められない。この面は凸凹しており、建物の南側に向かって下がり気味となる。また、中央では僅かなマウント状を呈しながら、窪み部分もみられる。このような状況から、前述する覆土が貼床や掘方である可能性もあろうかと予測してみたが、やはり貼床や掘方土よりも、本遺跡でみられる覆土に近い土層と考えられる。この面で、ピットに近い土坑状のものが2基検出されている。北側のものは深さ7cm、南側のものは深さ4cmで、非常に浅いものであり、掘方土坑と判断できる。

〈遺物出土〉出土遺物は総数で、須恵器食膳具15点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具15点、土師器煮炊具37点程度であり、極めて少ない出土量である。時期は、I1期と判断されるものである。

第 2 項 掘立柱建物

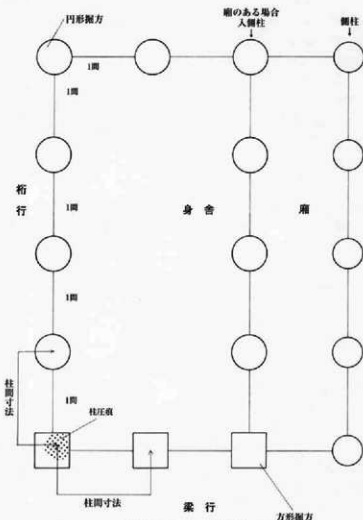
掘立柱建物の遺構名・番号は A 地区からの連番になっており、今回報告する区域で検出された掘立柱建物は、SB110～245・261・262・277～278・287・288 である。SB110～245 の中には、前年度までに報告済みのもの (SB119・128～132・160・161・182～189)、次年度報告予定のもの (SB214・215・218・243) が含まれている。また、欠番となっているものが 3 棟ある。SB197 は、調査時に掘立柱建物として検出されたものだが、整理時にカマドや掘方土坑と判断できる遺構が周囲に認められ、総合的に竪穴建物柱穴と判断して欠番となった。調査時から欠番となっているものに SB111・244 がある。以上を踏まえると、今回報告する掘立柱建物は 124 棟となる。内訳は C 地区で 65 棟、F 地区 54 棟、G 地区 5 棟である。

今回報告区域から検出された掘立柱建物の基部構造を見てみると、個柱建物が全体の約 80% を占め、次いで総柱建物が約 15% を占め、その他 5% には片廂建物、高床式の総柱建物、椀持ち構造の建物が含まれる。今回、新たに出現した建物では、古代末頃から登場してくる大型の総柱建物、床束建物と言ってもいいのかもしれないが、要するに低床構造である総柱建物が検出されている。

文中表記では、長軸側を桁、短軸側を梁として、桁行×梁行として表示する。なお、桁・梁の区別が区別を付かない場合は、北軸に最も近い柱列を軸としている。建物主軸については、桁行を主軸と設定して、北からの角度を表示した。但し総柱建物や、横向きに配置するものに関しては考えられる主軸を提示した。掘立柱建物の各名称は、奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡 I 遺構編』に基づき、引用参考しながら表記した。出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

1. SB110

C 地区北端の削平区域、の 46Gr に位置する。建物の半分以上と上層を削平により消失している。残存 3 間×残存 2 間。おそらく梁行は 3 間になろうかと考えている。建物規模は、残存桁行 5.3 m、残存梁行 1.2 m で梁行推定 3.6 m とみている。よって建物面積は、3 間×2 間の建物とするなら 19 m² 程になる。建物主軸は N-20° E をとり、柱穴掘方プランは円形を呈し、径 40～53 cm、深さ 22 cm を測るが、P1 のみ削平の影響により径 23 cm 深さ 6 cm となっている。但し、深さはほぼ同様である。柱間寸法は、桁間 160～180 cm、梁間は前述のとおりであり、柱筋の通りは桁行・梁行とも良好である。覆土では、柱抜き取り痕は確認できず、上下 2 層からなる人為的埋め戻し埋土層となっている。本建物の柱穴は遺存状態が悪いものの、比較的良好な柱穴といえる。また、最下底では地固め土が認められる。出土遺物は、土師器食器具 1 点、土師器煮炊具 1 点のみであり、時期は II～IV? 期と思われる。なお、本建物内部に収まる形で SK123 が重複する。



第 28 図 掘立柱建物の各部名称

2. SB112

C地区北端、SB110南側に隣接して検出された建物でSK124と重複する。柱穴3本のみ検出されたもので側平区域に位置することもあり、他は破壊されてしまったものと思われる。桁行、梁行のどちらの柱穴列かは不明だが、南北軸に近いので桁行としておく。残存規模は4.0m、2間分である。柱間寸法は170cmと190cm、柱穴は円形プランを呈し、径は44cmを主体に32～46cm、深さはP1が26cm、他2本が10～12cmを測る。隅柱が深めで中柱が浅めといった傾向をもつものが本遺跡には多く、P1は隅柱にあたるのだろう。建物の廃絶時に柱は抜き取られ、上下2層からなる人為的埋土で埋め戻されている。建物主軸はN-19°E。なお、出土遺物は、土師器煮炊具2点のみ、時期はⅡ～Ⅲ期に位置づけられるものである。

3. SB113

建物規模が、桁行6.4m梁行4.6mで面積29.44㎡、4間×3間の側柱建物である。C地区中央な・に36・37Grに位置し、SI98、SB114～117・162・163と重複する。建物主軸はN-33°E。柱間寸法は、桁間160cm、梁間では北梁行が140～168cmだが、南梁行は152cmである。柱穴プランは2本分のみ円形を呈すが、他は全て方形を呈すことから、もともとは全て方形であった可能性があろう。柱穴規模は、径56～60cmを主体に52～72cm、深さ24～52cm、四隅柱と桁行中柱が深めとなっている。また、底面には柱の位置していた部分と考えられる窪みがみられる。柱は廃絶時に殆ど抜き取られて埋め戻されており、抜き取られた方向は多方向である。この内P6・11下底で柱痕が残存しており、根腐れのためか下底で柱を切ったものと思われ、この径が20～22cmであった。また、P1～3・6～9・11～13にて柱圧痕を確認している。柱圧痕は、下底面(でない場合もある)の一部分が柱の圧力により硬化や光沢をもつといった痕跡である。この径が16～20cmと幅のある値であったことから、圧痕の一部分が検出された柱穴もあるのだろう。柱筋の通りは、東桁P7が内側にずれ、西桁P11が1本分外側に、南梁のP9が外側にずれている。北梁は良好である。掘方の並びについては、P1～3は方形ラインが揃って正確に配置されている。これ以外は方形プランが斜めに配置されたりずれたりしている。P1～3を見本として掘り込んだものであろうか。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具24点であり、時期は1期と判断されるものである。

4. SB114

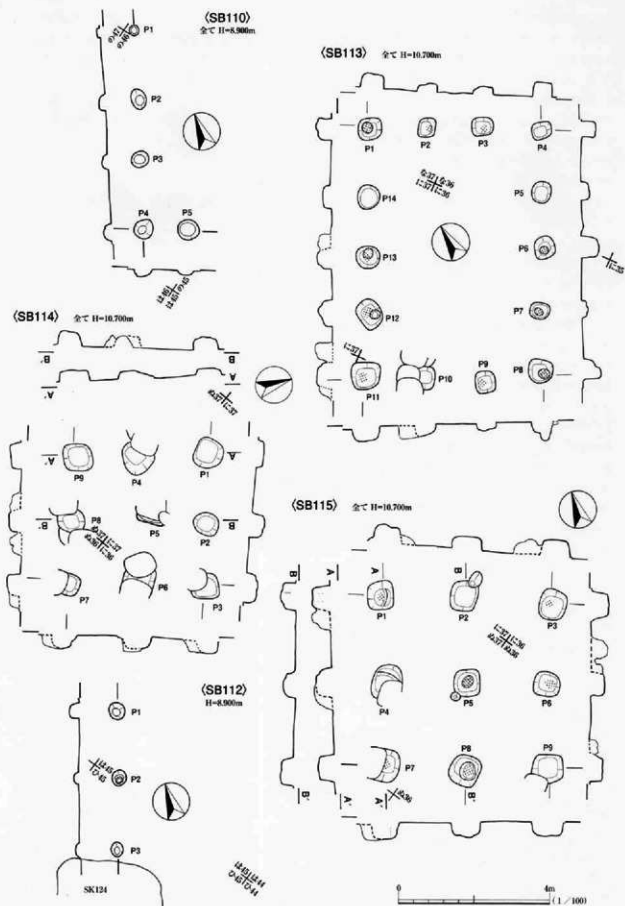
建物規模が、桁行3.56m梁行3.4m、面積12.10㎡を測る、2間×2間の総柱建物である。C地区に・ぬ・37・38Grに位置し、SB113・115～117と重複する。柱間寸法は桁間172cm・180cm、梁間170cmを測る。柱穴は方形プランを呈し、径56～76cmで主体を70cm前後にもち、深さ18～36cmを測る。深さについては、上面削平が水平でないため深さに幅があるような印象だが、似たような深さをもっている。但しP2のみ他よりも15cmも深い。柱筋の通りは、桁行梁行とも良い。配置も、掘方外側ラインが揃っていないことと、中央柱P5が北西側にずれるものの概ね良好と言えよう。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。建物主軸は、N-15°Eをとる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具1点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期と判断されるものである。

5. SB115

建物規模は、桁行4.4m梁行4.4mで面積19.36㎡、2間×2間の総柱建物である。SB114と同様の箇所で見出されたのだが、南側にずれて位置する。建物主軸はN-21°E。柱間寸法は、桁間216・224cm、梁間210・230cm。柱穴掘方プランは方形を呈し、しっかりした掘り込みを有す。柱穴規模は、径72～84cm主体でP6のみ60cmで最大径が84cm、深さは32～44cmを測る。なお、深さは旧地形に若干添い、全ての柱穴がほぼ同じような深さをもつ。P8のみ柱痕跡を確認、この径が25.6cmであった。また、柱圧痕をP1・3・5～8で検出しており、径は18～26cmを測る。柱筋の通りは良い。掘方の並びに関してはP3・8が斜めに配置されているもの、この他は良好であり、特にP1・2はきっかりと揃っており、これを基準にして掘り込んだ可能性がもたれよう。建物廃絶時には、柱は抜き取られて人為的埋土で埋め戻されているが、掘方裏込め土が残存する状態であり、P7・9では最下底で地固め土と考えられる土を確認している。この建物は、柱間規模に規格外性をもち、しっかり掘り込まれた柱穴をもつ、非常に良好な建物であると言える。出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器煮炊具11点であり、時期はI1期に位置づけられる。

6. SB116

建物規模が、桁行7.84～7.8m梁行4.28～4.32mで面積33.62㎡、4間×3間の側柱建物である。桁行と梁行



第29図 掘立柱建物遺構図1 (SB110・SB112・SB113・SB114・SB115)

が直行しないため、建物プランが歪んだ方形となっているものである。C地区中央ぬ・ね-36・37Grに位置し、SB113-115・117・118と重複する。建物主軸はN-30°-E。柱間寸法は、桁間180～220cm、梁間112～152cm。掘方プランは円形・方形を呈しているが、元はすべて方形であった可能性が高いと思われる。径60cmを主体に56～80cmを測り、深さ44～48cm主体でP7・12のみ16cmで、底面が窪むものが見られる。このようにP7・12以外の深さは一定だが、北梁行のみ隅柱が深く旧地形に添った掘り込みを呈している。掘方断面では段掘やスロープが見られるものがあるが、一定方向ではない。柱抜き取り痕がP2～4・11にて確認されており、覆土は設置時の掘方裏込め土がかなり残存する状態で、1層からなる埋め戻し土が確認でき、P2・5・12では柱穴下底で柱地固の土が認められる。柱痕跡がP8～10で検出されており、径はP8で14cm、P9で20cm、P10で24cmであった。また、柱圧痕をP1・4・8～10・12・13で検出しており、この径は24cm程であった。柱筋の通りは、桁行は良好であり、梁行の南梁は良いが北梁P3が若干内側にずれている。掘方の配置は、前述したように東桁が柱1本分南側へ全体にずれる形で位置するため、梁行・桁行は直行しない。ただ、このずれは規則正しいものと捉えることも可能である。この建物は、良好な柱穴をもちながらも計画性や統一性に欠けるものである。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具7点、土師器食膳具13点、土師器煮炊具55点と、掘立柱建物からの出土としては多量であるが、時期はⅡ3期におさまっている。

7. SB117

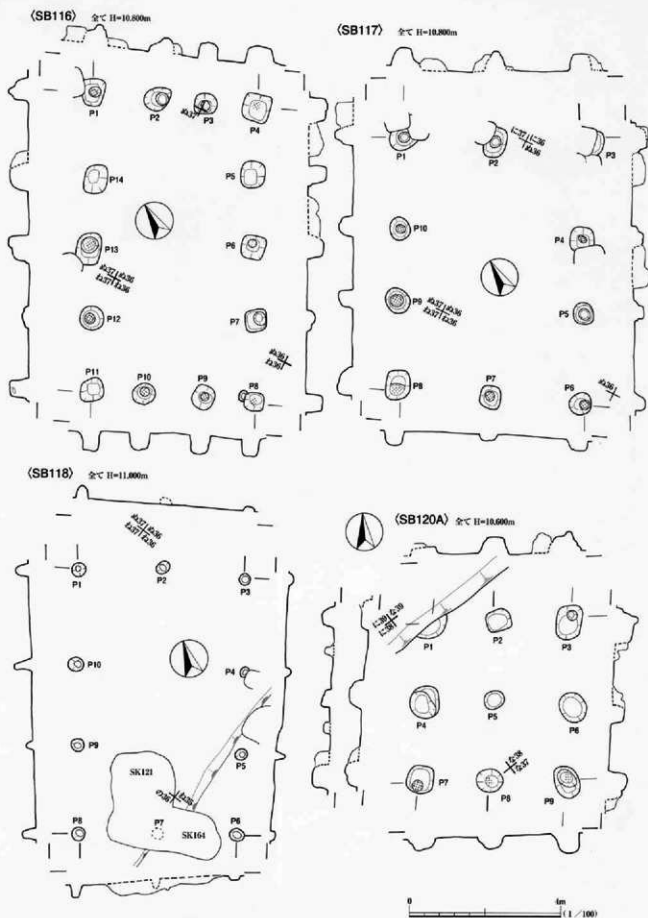
建物規模が、桁行6.64m梁行4.92mで面積32.66㎡、3間×2間の隅柱建物である。SB116と同様の位置で、SB113-115・118とも重複する。建物主軸はN-33°-E。柱間寸法は、桁間184～240cm、梁間240～256cmである。掘方プランは円形・方形を呈すが、元は全て方形であった可能性もたれる。径は60cmを主体に52～80cmを測る。断面は段掘やスロープを呈し、西桁は南側方向から、東桁は北方向から、柱を掘り立てた可能性がある。深さは40～48cmでP7が16cmを測り、基本として旧地形に添う掘り込みをもち、北梁行以外では四隅柱が深く中柱が浅めとなっている。なお、P1～3・5以外の柱穴では柱圧痕を検出、この径が20～22cmであった。柱筋の通りは基本的に良好、但しP6のみ外側へずれている。建物廃絶時には柱は抜き取られて埋め戻されているが、上層は締まりのあるものとなっている。この建物は規格性・監督性のやや薄いものではあるが、柱穴はしっかりと掘り込まれたものである。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具5点のみで、1期?あたりのものか。

8. SB118

建物規模が、桁行6.8～7.0m梁行4.2～4.4mで面積29.67㎡を測る、3間×2間の隅柱建物である。P3・4がずれて配置されているため、北梁行が直行しない。北梁行が広がり気味の台形状プランの建物となるものである。SB117の更に南に重複して位置、SB116、SK121・164とも重複する。建物主軸はN-19°-E。柱間寸法は、桁間212～298cm、梁間220cm、掘方は円形プランで、径28～40cm、深さ20～48cm、細く深めの柱穴が多く、径は40cm前後が主体になるものと思われる。柱筋の通りでは、桁行は良く、梁行ではP2が外側にずれており悪い。廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。以上から、柱穴は小さいが深く、簡易な印象の規格性に乏しい建物と思われる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具3点のみ、時期を判断することは難しく不詳である。

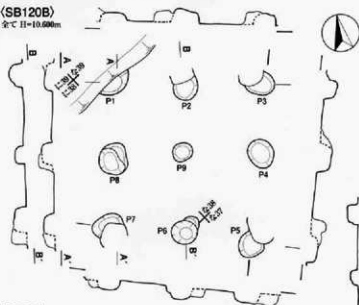
9. SB120A

建物規模が桁行4.2m梁行4.0mで、面積16.8㎡、2間×2間の総柱建物である。C地区中央でB地区寄り、な37・38-に38Grに位置し、SB120B・121と重複する。この3棟の切り合いは、SB121が最も古く、SB120Aが最も新しい。建物主軸はN-5°-Eと、真北に等しい。柱間寸法は、桁間200～220cm、梁間200cmを測る。掘方プランは円形や方形を呈しているが、元は全て方形だった可能性もたれよう。径56～76cmで主体を64～68cmにもち、深さは24～48cmを測る。中央のP5のみ径50cm深さ22cmと小規模を呈すが、基本としてしっかりとした良好な柱穴である。P7～9のみ柱圧痕を検出しており、この径が16～28cmであった。径16cmのものは、柱圧痕の一部が検出されたのだろう。柱筋の通りは、P7が柱圧痕にからず外側に飛び出るようにずれており、これを除けば良好である。掘方の配置では、掘方ラインの外枠を定めているとはとても言えない。なお、建物廃絶時に柱は抜かれ、掘方裏込め土を若干残しながら上下2層からなる人為的埋土で埋め戻されている。また、P8にかかる中央縦ラインそれぞれの柱穴間で小ピットを検出しており、何らかの関連がもたれるものと思われる。出土遺物は、SB120A・B合わせて、土師器煮炊具7点とカマド形土製品1点であり、時期は1期あたりになるとと思われる。

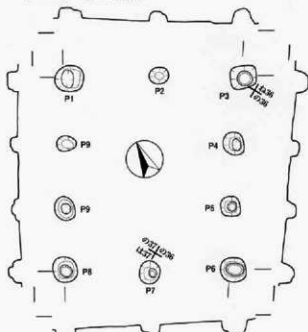


第30図 掘立柱建物遺構図2 (SB116・SB117・SB118・SB120A)

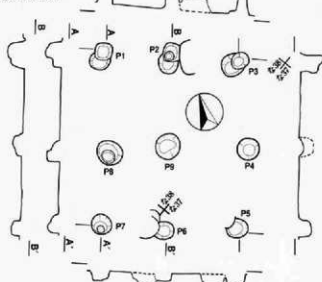
(SB120B)
全てH=10.600m



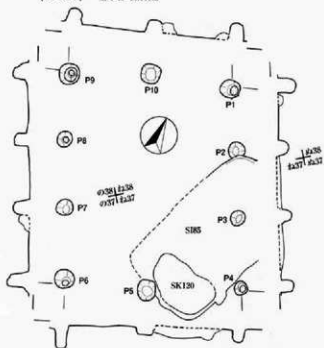
(SB123) 全てH=10.700m



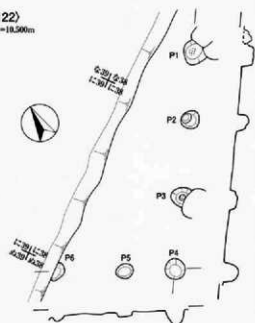
(SB121)
全てH=10.700m



(SB124) 全てH=10.500m



(SB122)
全てH=10.500m



第31図 掘立柱建物遺構図3 (SB120B・SB121・SB122・SB123・SB124)

10. SB120B

SB120Aと重複して同位置、SB121とも重複する建物である。建物規模が、桁行4.0m梁行3.8mを測り、面積15.96㎡、2間×2間の総柱建物である。建物主軸はN-12°-E、SB120Aに比べ建物主軸をやや東へ振っている。柱間寸法は、桁間192・208cm、梁間190cmを測る。柱穴掘方プランは円形・不整形を呈すが、円形主体であり、径は64cmを主体に64～80cm、深さ20～32cmを測る。中央P5のみ小規模を呈しており、120Aも同様となっていて似ている。深さはP5を除いて概ね同じような深さをもつが、中柱の方が若干深めとなっている。配置については、P5のみ外側に飛び出るように位置するものの、柱筋の通りは良好である。よって、掘方の並びや向きに規則性は見られないが、柱穴はしっかりとした掘り込みをもつ建物である。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られ、掘方裏込め土が多く残る状態で、しっかりと埋め戻されており、土に締りをもつことからSB120Aへの建て替えに伴う可能性は高い。

11. SB121

建物規模が、桁行4.4m梁行3.6mを測り、面積15.84㎡、2間×2間の総柱建物である。SB120A・Bと同様の位置で、主軸はN-18°-Eと更に東に振った形を取っている建物である。柱間寸法は、桁間188～252cm、梁間168・192cmである。柱穴プランは円形・方形を呈し、径46～68cm、深さ24～60cmを測る。深さは四隅がやや深めのラインも見られるが、様々な深さ・形状をもっている。特に北梁のP2・3は細くて深い。柱筋の通りは、桁行は中柱のP4が東側へP8が南東側へずれており悪いが、梁行は良好である。掘方の並びに関してもP1・2は揃うが、他はばらけて配置されている。なお、建物廃絶時には柱は抜かれ、人為的埋土で埋め戻されている。出土遺物は須恵器食器1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点で、時期はⅠ期と位置づけされる。

12. SB122

建物規模が、桁行5.8m梁行残存3.2m(推定4.6m)を測り、面積推定26.68㎡、3間×残存2間(推定3間?)の側柱建物である。おそらく建物の半分以上を削平により消失、3間×4間であった可能性もあろうが、ここでは3間×3間として報告する。建物主軸はN-35°-E、C地区中央部に38Grに位置し、SB120AB・121と重複する。柱間寸法は桁間180～202cm、梁間140・180cm、桁行柱筋の通りは良いが、梁行ではP1が若干外側にずれて通りが悪い。柱穴プランは円形であり、径40～62cmで主体を50cmにもつと思われる。深さは、隅柱が32～40cm、中柱が10～28cmであり、隅柱が深いタイプである。P4-6のみ柱痕が残存しており、この径が16～18cmであった。廃絶時に柱は抜き取られているが、掘方土がそのまま残り、柱を抜き取った部分のみ埋土が入れられている。なお、抜き取り方向はランダムと思われる。出土遺物は須恵器食器1点、土師器煮炊具6点であり、時期はⅠ期～Ⅱ期にあたる。

13. SB123

建物規模が、桁行5.08m梁行4.4～4.68mを測り、面積23.06㎡、3間×2間の側柱建物である。C地区中央、は37-の36・37Grに位置し、S186・89、SB126と重複する。S186との切り合い関係は、断面でS186が新しいことを確認しており、SB123の柱穴を埋めてS186のカマドを構築している。建物主軸はN-24°-Eをとる。柱間寸法は、左桁間が164cm、右桁間が164・180cm、南梁間220cm、北梁間224・240cmである。掘方プランは方形主体で円形も見られ、元は全て方形であった可能性があろう。径は40～72cmを測るが四隅柱が64cm以上と大きめで、中柱はプランが小さめで径52cmが主体となっている。深さは20～36cm、こちらも四隅深めで、若干干地地形に添った掘り込みをもっている。なお、底面では柱の位置を示すものか、窪むものが多い。P6では柱痕を検出、この径は18cmであり、建物廃絶時に切り取ったものと思われる。P8でも柱痕を確認しているが、上面10cmに埋土が認められるため、柱穴内部の上の方で廃絶時に柱を切り取ったものか。それとも柱穴内で切られたか根腐れにより柱の下底部分を残したものであろうか。なお、その他、柱穴の最下底部で地固め土と思われる、締まりのある黒色土を6本分検出している。柱筋の通りに関しては、左桁行の通りは良い。右桁行では、P4・5を通すとP3が完全に外側にずれてしまい、P3を通すと今度はP4・5が通らなくなる。要するに右桁行の柱の通りは悪い。ただし、梁行は良好である。右桁がずれて、ひしゃげた形状を呈す建物となる可能性が高いものの、このP3さえ除けば、きっちりと柱の配置された建物となる。出土遺物は、須恵器食器4点、土師器食器1点、土師器煮炊具28点で、時期はⅡ期とⅤ期の2時期と位置づけされるが、S186の時期がⅡ期～Ⅲ期であることから、本掘立柱建物はⅡ期のものと判断できる。

14. SB124

建物規模が、桁行5.24～5.48m 梁行4.28～4.68m、面積24.01㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。P1が内側へずれて位置するため、北梁行と右桁行が直行せず、全体プランが台形状の歪な形状となっているものである。建物主軸をN-20°-EにとりSB123北側、ね・の-37・38Grに位置、SI85・86、SB125・126、SK120と重複する。柱間寸法は、桁間160～192cm、梁間214～240cmである。柱穴は方形・円形プランを呈するものの元はすべて方形であった可能性もあり、径は50cmを主体に34～54cm、深さ28～56cmを測る。深さは、四隅が深めタイプで、右桁行と南梁行が若干旧地形に添った掘り込みとなっている。柱筋の通りでは、桁行は良いが、梁行は中柱が通らず、特に北梁は中柱のP10を通すとP1が完全に通らなくなり、P1を通すとP10は外側へずれてしまう。なお、建物の廃絶時に柱は抜き取られ、埋め戻されているが、掘方土は残存しない状態で2層からなる埋土を確認している。本建物は、深さに規則性が見られるしっかりとした柱穴をもつものだが、配置にばらつきがみられる。出土遺物は須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具21点であり、時期はI期と、II 2～II 3期の2時期と判断される。

15. SB125

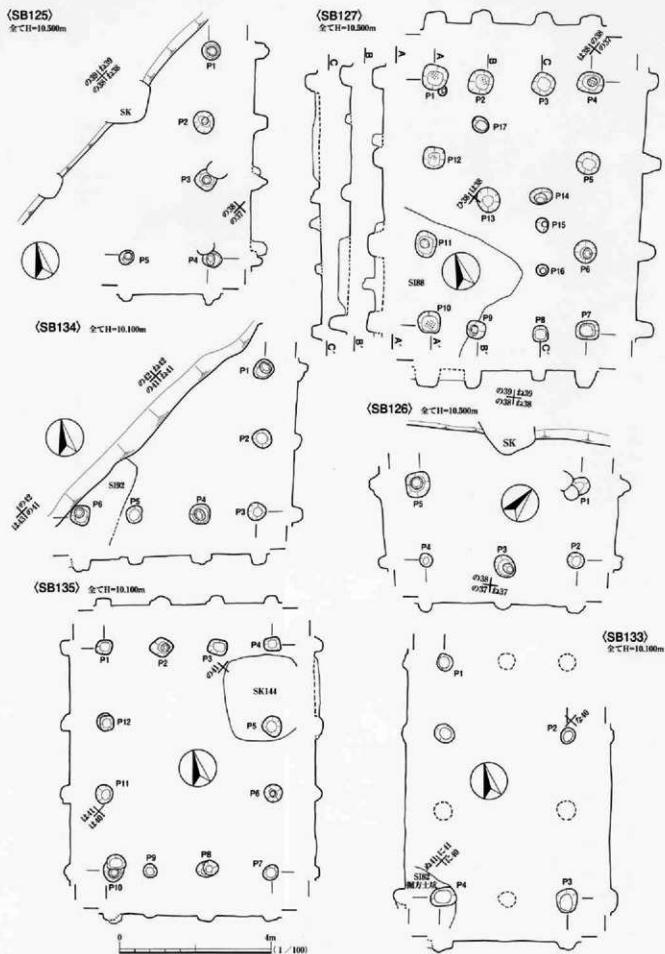
SB124の北側、ね・の38Grに位置し、削平により建物全体の1/3程度が残存するものと思われる。建物規模が、残存で桁行5.4m 梁行2.2mを測る、残存3間×残存1間の側柱建物である。推定面積は3間×2間として24㎡、最低でこの面積が予測できるが、これよりも規模が大きかった可能性もあろう。建物主軸はN-13°-Eをとる。柱間寸法は、桁間が152～200cm、梁間は220cm。柱穴プランは方形や円形を呈す。径は52cmを主体に40～60cm、深さは30～40cmが主体で最も浅いものでP5の16cmである。柱痕跡がP2のみに確認され、この径が16cm程度であった。柱筋の通りは桁行P2・3が内側へずれ悪いものとなっているが、梁行は良好である。また、方形配置は主軸に対し斜めとなっている。建物廃絶時にP2以外の柱は抜かれ埋め戻されている。なお、この建物はSB124・126、SK126・133と重複、土坑が本掘立柱建物に取るように位置している。出土遺物は土師器煮炊具10点が出土しているが、時期判断は困難なもののばかりであり時期不詳である。

16. SB126

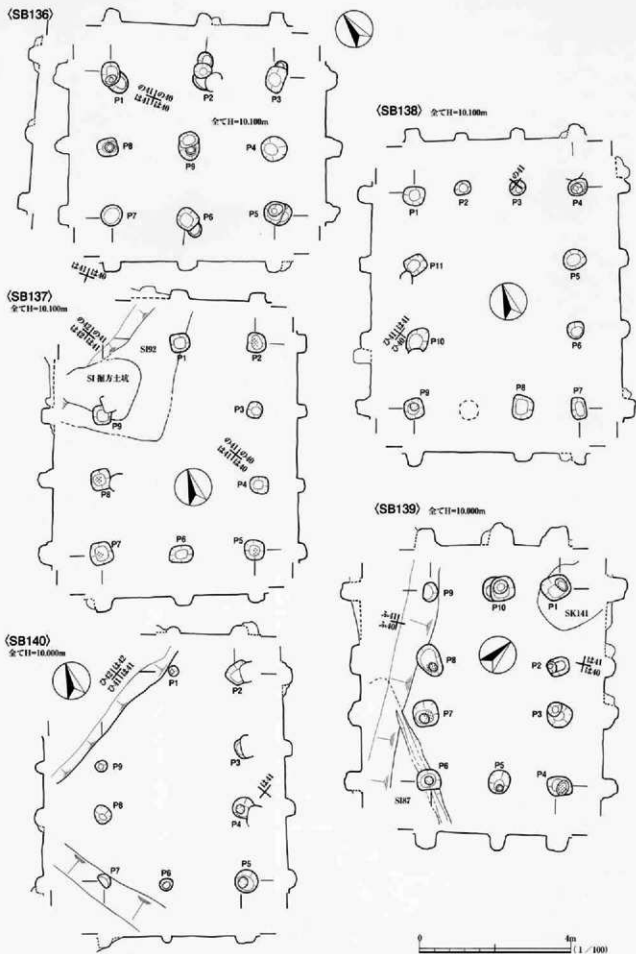
削平により建物のおそらく2/3以上を消失する建物である。SB125と同じ位置であり重複する。建物規模が、桁行残存1.0m 梁行4.0mを測り、残存1間×2間である。おそらく3間×2間の建物だろうと予想しているが、そうならば桁行は推定6.0mとなり推定面積24㎡となる。勿論これ以上の桁行である可能性もあろう。建物主軸はN-41°-E。柱間寸法は、桁間200cm、梁間180・220cmを測る。柱穴配置は、P3・5に若干のずれがみられる。柱穴掘方プランは円形・方形・不整形を呈し、径36～60cmを測るが、主体は56cm程にならうと思われる。深さは16～32cmを測る。本建物は、上面も削平されているとはいえ、柱穴が細く小さいもので、配置にもずれがあり簡易な要素を否めない。なお、廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点であるが、時期はVI期に位置づけされるものである。

17. SB127

建物規模が、桁行6.52m 梁行4.16m、面積27.12㎡、3間×3間の側柱建物である。C地区中央の、は・ひ-37・38Grに位置し、SI88・SK116と重複する。建物主軸はN-18°-E。柱間寸法は、桁間が200～232cm、梁間は120～128cmと微妙な差があるものの、相対して柱は配置されている。なお、建物の中央に似たような2つの柱穴が検出されている。これら柱穴は柱穴間東西軸に添うものではないが、この建物に伴う可能性がある。また、南北軸ラインには小ピットが幾つか検出されている。柱穴掘方プランは方形が主体で、円形も認められる。規模は、径56cmを主体に40～66cm、深さ44cmが主体で最大48cm、北梁は上層削平により32cm程度、最も浅いものはP8・13・14の24cmである。これらの浅い3本の柱以外は、ほぼ同じような深さを呈している。柱痕跡を検出したものは、P1～5・9・11・13・14であり、この径は20cm程度を測った。また、柱圧痕も検出されているが、この径が12～20cm程。柱の径は20cm程であったものと考えられる。柱筋については、右桁行は通りが良好で、左桁行ではP11がずれ、北梁行は良好だが南梁行P8はずれている。掘方の並びも側が揃うということはなく、方形プランのものが斜めに配置するものもある。建物廃絶時に、柱は切られたり、抜かれて埋め戻されたりしており一貫性はない。特に柱痕が残るものでもP3～5・9・14というような、掘方内部の上層近くで柱を切り取ったと思われるものが検出されている。本建物の柱穴はしっかりして非常に良好だが、規格外に乏しいのと言えよう。



第32図 掘立柱建物遺構図4 (SB125・SB126・SB127・SB133・SB134・SB135)



第33図 獨立柱建物遺構図5 (SB136・SB137・SB138・SB139・SB140)

出土遺物は、須恵器食膳具5点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具40点と、掘立柱建物には多い。時期はⅡ2～Ⅱ3期にあたる。

18. SB133

C地区中央から北寄りの、に40・41Gr 削平区域で5本の柱穴のみ検出されたものである。おそらく3間×2間の建物になると思われる。建物規模が桁行6.2m梁行3.2m、面積19.84㎡を測る。建物主軸はN-15°-Eをとる。柱間寸法は、桁間1区間だけ確認できており、180cmであった。柱穴プランは円形で隅柱が円形を呈し、径は56cmを主体に36～68cm、深さ6～28cmを測り、深さにばらつきが見られる。覆土等是不明、柱筋の通りは残存するものでは良好である。この建物は、削平により殆どが失われたか、あるいは建築を途中でやめた可能性ももたれよう。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具15点であり、時期はⅢ期とⅤ期の2時期に相当する。

19. SB134

C地区中央から北寄りの削平区域、ねの41Grに位置し、1/2以上を消失する建物である。建物規模が、残存で桁行4.0m梁行4.8m、残存2間×3間の側柱建物である。推定面積19.2㎡。勿論これ以上の規模を持つ可能性はもたれようが、隅柱が深めを呈するため2間×3間であった可能性の方が高いと思われる。本遺跡では四隅柱が深めとなる傾向の建物が多く検出しているためである。建物主軸はN-13°-E。柱間寸法は、桁間180・200cm、梁間148～168cmを測る。柱穴プランは円形・方形を呈し、規模は径44～52cmで主体を48cmにもち、深さは18～28cmを測る。柱筋の通りは桁行・梁行とも良い。なお、廃絶時に柱は抜き取られて埋め戻されている。また、この建物はSI92、SB141・147と重複する。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具16点であり、時期はⅣ2新～Ⅴ1期と判断される。

20. SB135

建物規模が、桁行5.88m梁行4.4mを測り、面積約25.87㎡、3間×3間の側柱建物である。SB134南側に重複して位置、この他SB136・137・141、SK142とも重複する。建物主軸はN-15°-E。柱間寸法は、桁間188・200cm、梁間は北梁間140・160cmで南梁間120～164cmである。柱穴プランは円形・方形で、径は52cmを主体に34～56cm、深さはP10が14cm、P7・9が8cmを測り、この3本以外では20cmと同じ深さを呈す。柱の配置では、桁行は相対して位置するものの正確さにやや欠け、北梁行は良好だが南梁行はばらけている。また、掘方も方形であるのに建物軸に対し斜めというように、規則性に欠ける配置となっている。しかし、柱筋の通りも良く、しっかりとした柱穴である。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されており、覆土が掘方土が若干残りつつ殆ど埋土である土層を確認している。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具14点、時期はⅠ期とⅤ～Ⅵ1期の2時期にあたる。

21. SB136

建物規模が、桁行3.6m梁行4.32m、面積15.55㎡を測る、2間×2間の側柱建物である。C地区の・は40Grに位置してSB135・137・138・141と重複する。建物主軸はN-36°-E。柱間寸法は、桁間168・188cm、梁間196～236cmを測る。P2位置が東方向へずれて配置されるため、柱筋の通りは、桁行の隅柱や南梁は良好だが、北梁行・桁行の中柱軸がずれてしまう。柱穴プランは円形・方形を呈し、規模は径48～68cmで主体は52cmになるものと思われ、深さは24～44cmを測り、最も浅いものはP9の20cmである。深さは、旧地形に若干深い掘り込みをもち、わずかの差はあるものの同様の深さを呈す。柱抜き取り痕が確認されているものはP1で、外側方向へ柱を抜き取っている。また、柱痕跡をP3・4で検出しており、この径が32～36cmであった。よって、廃絶時にP3・4は柱を切り取り、この他は抜かれて埋め戻されたと考えられる。この建物はP2のずれのために規格性に若干欠けるものの、しっかりと掘り込みをもつものである。出土遺物は、土師器煮炊具7点のみ、時期判断は困難で不詳である。

22. SB137

建物規模が、桁行5.52m梁行4.08m、面積22.52㎡、3間×2間の側柱建物である。削平の影響により柱穴1本を消失している。C地区の・は41-は40Grに位置、SI92、SB134～137・141と重複する。柱間寸法は、桁間176～192cm、梁間は196～216cmである。柱穴プランは方形で、柱穴規模は径52cmを主体に40～60cm、深さ20～34cmを測り、北梁行・右桁行は同じ深さを呈し、南梁行と左桁行は旧地形に添いP7が最も深くなる。このP7の径が60cmと最大径である。柱抜き取り痕はP5・6に確認されており、抜かれた方向は一定ではない。柱

痕跡をP7のみで確認、柱径は20cm程であった。また、柱圧痕をP2・5・7・8で検出しており、この径は最大16cmを測るが、部分的に柱圧痕が残っていたものを検出したものであろう。柱筋の通りは桁行・梁行とも良いが、方形でありながら、建物軸に対し斜めに配置されるものがあり、掘方の配置については統一性に欠ける。建物廃絶時にはP7のみ柱を切り取ったと考えられ、この他は抜き取られ埋め戻されたと思われる。覆土は、掘方土が若干残存する状態で、人為的埋土である。本建物は、きっちりとした規格性に欠けるものの、良好な柱穴と深さをもつ建物と言える。出土遺物は、須恵器食器具3点、土師器煮炊具16点であり、これらはIV期頃にあたるものである。建物主軸はN-16°-E。

23. SB138

建物規模が、桁行5.6m梁行4.24m、面積23.74㎡、3間×3間の側柱建物である。C地区は40・41Grに位置し、SB135～137・141と重複する。建物主軸はN-18°-E。柱間寸法は、桁間172～188cm、梁間132～148cmである。柱穴プランは円形・方形を呈すが、方形が主体であり、円形のは元々方形であった可能性があるだろう。柱穴規模は径52cm程を主体に42～60cm、深さは20～36cmを測り、四隅が深めで中柱が残るパターンのものである。柱筋の通りは、桁行は良好だが、梁行の北梁は筋が通らない。また、P8・9間の柱穴は検出されなかった。なお、この建物の柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食器具5点、土師器食器具3点、土師器煮炊具25点で、時期はIV 2新～V期にあたるものである。

24. SB139

建物規模が、桁行5.2m梁行3.4m、面積17.68㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。C地区は40・41Grに位置し、SB17、SB138・140・142、SK141・151と重複する。建物主軸はN-46°-E。柱間寸法は、桁間132～208cm、梁間152～192cm、柱穴プランは方形を主体として不整形も認められるが方形を主体としている。柱穴規模は、径が64cmを主体として56～72cm、深さは28～44cmを測る。比較的隅が深めのしっかりした柱穴で、中柱に深いものも見られる。柱抜き取り痕を確認しているものから、桁行は北西側へ向かって柱を抜き取っており、掘方裏込め土の残存するものが多く、抜かれた柱の部分に埋め戻し土を入れている。柱圧痕がP4・7・8のみ認められ、この径が20cm程であった。柱筋の通りは、左桁は良好だが右桁P4が柱1本分外に飛び出ており、通りは悪い。梁行は、北梁は良好だが、南梁のP5が若干外へずれている。掘方の配置は、柱筋の通りに対して平行となっているものもあるが、P1のように斜めに配置されているものあり、様々である。非常にしっかりした柱穴であるにもかかわらず、配置や柱間規模の規格性に乏しさをもつ建物と言えよう。出土遺物は、須恵器食器具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食器具1点、土師器煮炊具13点、円鉢体部破片1点が出土し、時期はV 2～VI 1期と判断されるものである。

25. SB140

建物規模が、桁行5.6m、梁行3.6m、面積20.16㎡、3間×2間の側柱建物である。C地区は40・41Grに位置し、削平により1本の柱と西側の上面を著しく消失している。SB137・139・141・142・151と重複、SK141は建物内に入るように位置している。建物主軸はN-16°-Eをとり、柱間寸法は、桁間の左桁間132・200cm、左桁間160・200cm、南梁間160・200cm、北梁間は残存で172cmである。右桁間に規則性が見られるのに対し左桁間には規則性が見られないが、削平による影響と考えられるだろうか。柱穴プランは円形を主体に方形も確認できる。柱穴規模は、径56～60cmを主体に最小で24cm、深さは12～24cmを測るが20～24cmが主体となっており、四隅が深めである。柱筋の通りは桁・梁とも良く、掘方の配置ではP2やP3が斜めとなっている。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ人為的埋土で埋め戻されている。出土遺物は、土師器煮炊具3点のみであり、時期は不詳である。

26. SB141

建物規模が、桁行5.8m、梁行4.0m、面積23.2㎡を測る3間×3間の側柱建物である。建物主軸はN-11°-E。C地区は40・41Grに位置し、SB135・136・138、SI92と重複する。柱間寸法は、桁間172～220cm、梁間88～176cmを測る。柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈し、径は44cmを主体に40～56cm、深さ14～48cmを測る。深さについては、左桁は隅柱が深め、右桁は同じ深さだが左桁の半分の深さしかない。また、梁行は南北とも基本として旧地形に添っていると思われる、よって右桁側が削平されていると判断される。柱筋の通りは、左桁行や梁行は良好だが、右桁行はP4が内側へずれており通りが悪い。また、廃絶時に柱を抜いて埋め戻している。出土

遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点のみ、時期判断は難しく不詳である。

27. SB142

C地区中央西寄りF地区との境、ひ40・41Grに位置し、建物南側のおそらく1/3以上が削平により失われているものである。SB139・140、SI87、SK151と重複する。建物規模は、桁行残存4.4m×梁行3.2m、残存3間×2間。残存桁・梁からの面積が14㎡程である。ただし、本来はこれ以上あったものと推測可能で、推定で20㎡程ではなかろうか。建物主軸はN-12°Eをとる。柱の配置はP5が若干ずれており、P3の方形掘方が斜めに配置されるなど簡易的な印象を受けるだろうが、意外としっかりと掘り込まれた柱穴である。径は48cmを主体に36～52cm、深さはP4・5が16cm以外は全て28cmを測る。柱穴プランは方形・円形を呈すが、元は全て方形であった可能性もたれよう。桁間寸法は、桁間が確認できる部分で右桁間160cm、左桁間140cm、梁間160cmを測る。また、土層断面から全ての柱穴の下底に地固め土が認められる。なお建物廃絶時には、柱は抜き取られ単層の人為的埋土で埋め戻されているが抜き取り方向は不明である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点のみ、Ⅳ2～Ⅴ期にあたるものである。

28. SB143

建物規模が、桁行・梁行とも3.6m、建物面積12.96㎡、2間×2間の総柱建物である。C地区中央、の・は38Grに位置する。この建物の柱穴は、SB125・126やSK126・130・136ABといった多くの遺構と重複することや、削平の影響により柱穴の下底部分のみ検出したものもある。それでも非常に良好な掘り込みをもって検出されている。柱間規模が、いずれも180cmと統一されており、柱穴プランは方形・長方形を呈し、規模は径52～100cmを測るが主体は70cm前後になるものと思われる。深さは12～36cmを測る。径はP3で66cm、P2で70cmであり、このくらいの径が主体的だったと思われる。深さは中央のP9が浅いが他はほぼ一定の深さを呈している。柱筋の通りはP5のみ若干内側に入るものの、良好である。建物主軸はN-31°E。廃絶時には柱は抜き取られて埋め戻されている。掘方の配置や規模が、上部の削平や他遺構重複の影響によりばらけた印象を受けるだろうが、本建物は柱の配置に規格性と、しっかりと掘り込まれた柱穴をもつ良好な建物である。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具6点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期に位置づけられる。

29. SB144

C地区中央から西側寄り、の43Gr削平区域で、桁行と考えられる4本の柱穴のみ検出されたものである。桁行3間分で、6.0mを測る。柱間寸法は148～220cm、プランは円形で径28～44cm、深さは12～18cmで上面の削平により非常に浅い。これらの柱は、廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。なお、建物主軸はN-12°Eとなろう。出土遺物はなく、時期不詳である。また、重複する遺構はSB145、SK129である。

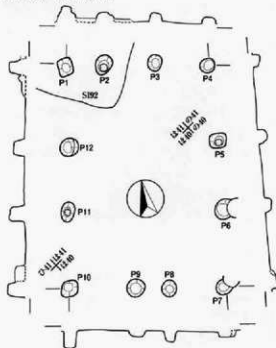
30. SB145

建物規模が、桁行5.48m梁行4.6m、建物面積25.2㎡、3間×3間の隅柱建物である。SB144の西側に重複して位置、建物南東側1/3を削平により消失し、SK131・148と重複する。主軸はN-14°Eをとり、柱間寸法は、左桁間180・188cm、右桁間残存で196cm、梁間は北のみで140～164cmであり、左桁間には規則性が見られる。柱穴プランは円形・方形・不整形を呈し、径28～58cm、深さ6～10cmと削平の影響が色濃く見られるが、同じような深さをもっている。柱筋の通りは、桁行は良いが、梁行のP2が内側について通らないう。掘方の並びや向きはランダムである。この建物の廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。なお、出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具3点、砥石1点が出土するが、時期を判断することは困難であり時期不詳である。

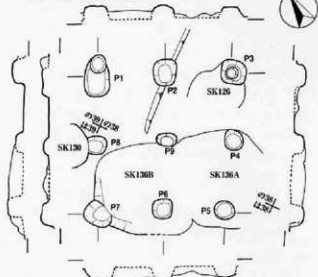
31. SB146

SB145の西側に隣接して位置する建物で、削平により北西端1本の柱穴を消失している。建物規模は、桁行5.6m梁行4.2mで、建物面積23.52㎡、3間×2間の隅柱建物である。建物主軸はN-10°Eをとる。柱間寸法は、左桁間180・200cm、右桁間180・192cm、梁間は200・220cmであり、いずれも規則性が認められる。柱穴プランは円形・方形を呈すが、方形プランが主体的であり、円形のものも本来は方形であったものと考えている。柱穴規模は、径40～56cm、深さ8～26cmを測る。深さはP3・5以外で似たような深さをもつ。ちなみにP3・5は深さ12cmであった。柱抜き取り痕はP6のみ確認しており、抜き取り方向は東側であった。この他の柱も廃絶時に抜き取られ掘方が残る状態で埋め戻されているが、抜き取り方向は不明である。柱筋の通りでは、桁行は良いのだが、P4の底面窪みが柱穴位置であれば、ずれることとなる。梁行はP2・6の中柱が若干ずれるものの、通らないこと

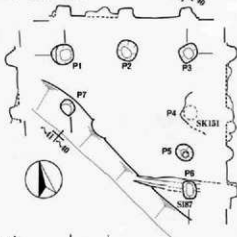
(SB141) 全てH=10.00m



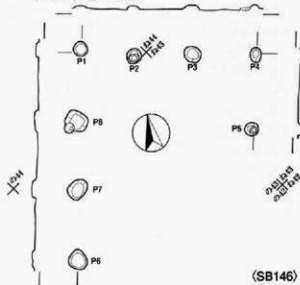
(SB143) 全てH=10.00m



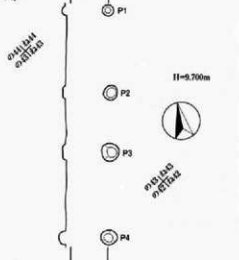
(SB142) 全てH=10.00m



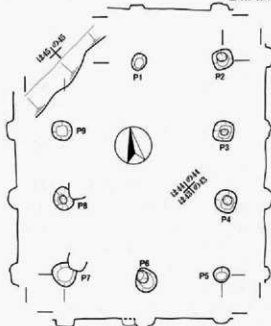
(SB145) 全てH=9.70m



(SB144)



(SB146)
全てH=9.70m



第34図 掘立柱建物遺構図6 (SB141・SB142・SB143・SB144・SB145・SB146)

はない。なお、建物西側に小ピットが並ぶ。このピット列は柱位置に対してというわけではないが、軒先支柱の可能性がどうか。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具20点と、V期前後に位置づけられるものが出土する。

32. SB147

SB146と重複する建物で、の・は44Grに位置する。建物規模が、桁行3.6m梁行3.32mで、建物面積11.95㎡、2間×2間の総柱建物である。主軸はN36°-E。柱間寸法は、桁間180cm梁間160・172cmと規則性をもって配置されている。柱穴掘方プランは方形を呈すものの、掘方の外枠・内枠ラインが揃うということではなく、P1・2・4・5は方形の向きが軸に対して斜めに配置される。但し柱筋の通りは桁行・梁行とも良く、しっかりとした掘り込みをもつ良好な柱穴である。柱穴規模は、径64～70cm、深さ16～40cmを測り、梁行方向のみ東側が高いという旧地形に添った掘り込みをもち、基本的に四隅深めタイプだが、P3のみ浅い。柱抜き取り痕跡を確認できるものはP5・6であり、外側に向かって柱は抜かれている。この他の柱についても、廃絶時に抜き取られ埋め戻されているが、掘方土が残存するものもある。柱圧痕がP6のみで検出されており、この径が20cm程であった。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具26点で、時期はV～VI2期にあたる。

33. SB148

SB146南側・SB147と重複する建物で、C地区は43Grに位置する。建物規模が、桁行5.32～5.52m梁行4.0～4.12m、建物面積22.0㎡、3間×2間の総柱建物である。主軸はN7°-E。柱間寸法は、桁間168～208cm梁間172～240cmであり、寸法に統一感は見られない。柱穴プランは円形・方形を呈し、規模は径32～56cmで、深さ8～36cmを測る。深さでは、左桁行の隅柱が深いタイプで、東側の旧地形が高かったことが判断できるが、この他の深さは様々であり、中柱にひどく貧弱なものが目立つ。この建物の柱筋は良いのだが、配置がランダムであり、全体的にひしゃげた形状で、桁行と梁行がきちんと直行しない。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。また、左桁行の外側に小ピットが並ぶが、この建物に関連するものであろうか。出土遺物は、須恵器食膳具6点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具15点で、時期はIV2期が主体であり、IV・V期にあたるものが出土している。

34. SB149

SB148南西側で重複し、C地区西側ひ43Grに位置する。SB150・152～154とも重複する。建物の半分以上が削平により消失する総柱建物である。建物規模は残存で、桁行5.12m梁行4.4m、3間×2間であるが、断面から四隅の深い掘り込みをもつタイプと判断され、この建物規模で収まるだろうと考えている。よって、建物面積は22.52㎡となり、主軸はN6°-E。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間220cmを測る。柱穴プランは方形を呈し、径44～72cmで60cm前後を主体、深さは18～32cm、旧地形に添いながら隅柱が深めであり、中柱は段掘りとなっている。柱筋の通りは良いが、掘方の配置はP5・6が斜めに配置されている。建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されているが、抜かれた方向はランダムである。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具12点で、時期はIV2～V期に位置づけられる。

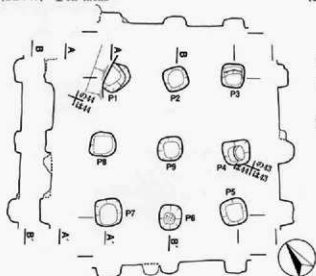
35. SB150

SB149の東側に重複して位置する建物で、削平により2本分の柱を消失しているが、2間×2間の総柱建物と判断している。建物規模は、桁行3.4m梁行4.4mで、面積14.96㎡を測る。建物主軸はN34°-E。柱間寸法は、桁間160・180cm、梁間220cmである。柱穴プランは方形が主体で2本のみ円形を呈す。柱穴規模は、径60cmを主体に44～68cm、深さ14～48cmを測る。柱筋の通りは、梁行と東桁行は良好だが、西桁行のP6がずれて通らない。また、中央P7も桁行軸方向は通るが、梁行軸方向はずれて通らない。掘方の配置は基本的に良好だが、P1のみ方形プランが斜めに配置されている。柱抜き取り痕跡を5本で確認しており、抜き取り方向は1本のみ南方向で残りは全て北方向であった。また柱痕跡をP2で検出、この径が16cm程であった。柱圧痕は、P1で検出されており、この径は20cm程であった。廃絶時には、P2以外の柱を抜き取って埋め戻している。なお、出土遺物は、土師器煮炊具2点のみだが、時期はI?期に位置づけられるものである。

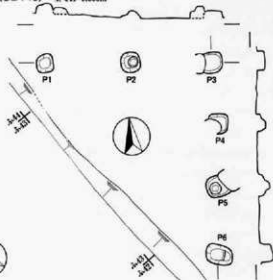
36. SB151

SB150と重複する建物であり、C地区ひ41・42-は42Gr削平区域に位置する。SB139・140とも重複している。

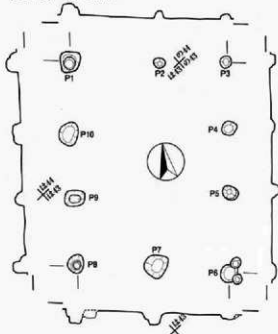
(SB147) 全てH=9.700m



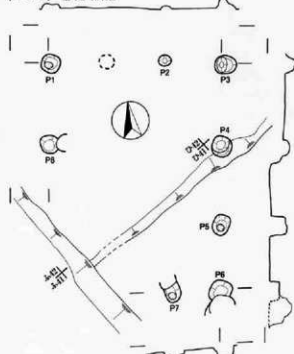
(SB149) 全てH=9.600m



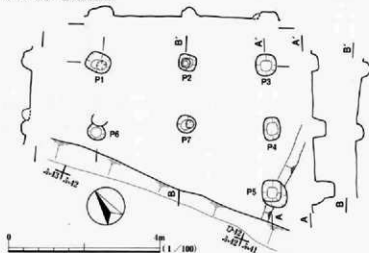
(SB148) 全てH=9.700m



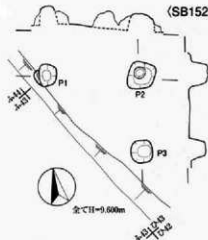
(SB151) 全てH=9.700m



(SB150) 全てH=9.600m



(SB152)



第35図 掘立柱建物遺構図7 (SB147・SB148・SB149・SB150・SB151・SB152)

建物は、削平により1/4を消失する側柱建物であり、北梁行の1本も消失してしまっていると思われ、桁行き3間×梁行推定3間になるものと考えている。建物規模は桁行6.0m×梁行4.52m、建物面積27.12㎡、主軸はN-9°-E。柱穴掘方プランは円形・方形を呈すものの、本来全て方形であった可能性をもつ。柱穴規模は径52cm程を主体に34～56cm。深さは、東桁行の残りが最も良くて深さ44～48cm、他は残存状況が悪く最も浅くて6cmである。柱間寸法は桁間172～216cm、梁間が残存で128・152cmを測る。柱筋の通りは良く、廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、土師器煮炊具5点のみであるが、時期は1期?に位置づけられよう。

37. SB152

C地区ひ43Grで、SB149・154に重複して位置する建物であり、柱穴3本のみが検出されたもの。但し、柱穴の規模や形状から桁行2間×梁行2間の総柱建物になると考えているものである。残存する建物規模は、桁行20m梁行24mだが、復元規模は桁行4.0m梁行4.8mと予想する。よって推定面積は19.2㎡。勿論桁行・梁行が逆になることも考えられるため、建物主軸はN-7°-Eになるものと思われる。柱穴プランは方形を呈し、径44～74cmを測るが主体は60～70cmになるものと思われる。深さは40～48cmと旧地形に添った掘り込みをもっている。柱抜き取り痕跡がP3で確認されており、柱は外側に向かって抜かれている。またP1・2では柱痕跡が認められ、この径が22～24cmであった。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点で、時期はV期とVI期の2時期に位置づけられるものである。

38. SB153

C地区は42-ひ43Grの削平区域で、3間分にあたる4本の柱穴が検出されたもの。おそらく側柱建物の桁行1本分と考えられるが、規模は7.2m、柱間寸法は220～252cmを測る。建物主軸はN-84°-Wになるものと思われる。柱穴プランは円形主体で不整形も認められ、径28～48cm、深さ8cmと削平の影響が著しい。覆土から、柱は抜き取り埋め戻されたものと判断でき、出土遺物はなく、時期不詳である。

39. SB154

SB152と重複する建物であり、ひ43Grで4本分の柱穴のみ検出されたものである。SB152に比べ柱穴規模や形状が小さく、おそらく側柱建物になるのではないかと予想しているものである。柱間寸法は、南北方向を桁行として、桁間168cm、梁間は120cmと寸法は均等なのだが狭く、少し異質な印象である。柱穴プランは円形・方形を呈し、径60～72cm、深さ24～48cmを測る。これらの柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。建物主軸は、N-8°-Eになるだろうか、もしくはN-98°-Eになるものと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点土師器煮炊具2点であり、時期はIV 2期に位置づけされる。

40. SB155

建物規模は、桁行5.2～5.4m梁行4.96～5.2mを測り、面積26.92㎡、3間×3間の側柱建物である。C地区ひ43Grに位置し、SI88、SK147-153と重複、南西側の特に削平の著しい区域にかかり、全体の半分を消失している。主軸はN-14°-E。柱間寸法は、桁間160・180cm、梁間160・180cmと、規則的な柱間を持っているのだが、P1が北側にずれて配置されているために、全体の建物プランが台形状となっている。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径44～84cmで主体が50cm程になろうか。深さは、12～36cmを測る。柱抜き取り痕跡は5本の柱穴で確認でき、柱は外側方向へ抜き取られている。柱筋の通りで、桁行は良好だが梁行はP1がずれるために悪い。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具23点、土製支脚1点であり、時期はV期とVI 2期の2時期のものである。

41. SB156

C地区西側の削平区域、ぬ・ね46Grに位置し、4本の柱穴のみ検出されたものである。おそらく側柱建物の隅柱になるのだろう。推定で桁行3間×梁行2間になるものと思われる。建物規模は、桁行4.2m梁行3.08m、建物面積12.93㎡の小型獨立柱建物である。建物主軸はN-14°-Eをとる。柱穴プランは円形を呈し、柱穴規模は径36～54cm、深さ6～12cmを測る。類型は一応B類としておく。出土遺物はなく、時期不詳である。

42. SB157

C地区とF地区にまたがる中央、ひ・ふ-35・36Grに位置するもので、著しい削平を受けている建物である。検出した柱穴の規模から、桁行推定4間×梁行4間(身舎部分3間・廊部分1間)の片廂建物と考えており、削平により1/3程度が残存したものと思われる。検出された柱穴は7本分のみで、身舎では円形プラン、廊では方

形プランを呈す。柱穴規模はP1・2が径50・60cm、P3～7が径70～88cmを測り80cm前後が主体となっており、両者にはっきりと違いが見られる。深さは、P1・2で28cm、P3～7で44～52cmである。このP3～7の部分を身舎、P1・2の部分を竈と考えているが、柱穴の規模からしても大型の建物であった可能性は極めて高いと考えている。柱間寸法は、P4・5間、P5・6間、P6・7間が180cm、P2・3間、P3・4間が160cm、P1・2間が128cmを測り、きっちりと配置され規則性がみられる。建物規模は、桁行で推定4間として72m、梁行身舎5.2m底1.6m、推定面積48.96㎡となる。建物主軸は、桁行軸でN-107°-E、梁行軸でN-17°-Eとなる。建物廃絶時には柱は抜かれ埋め戻されているが、方向は不明である。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具17点、カマド石1点であり、時期はⅡ2～Ⅴ期に位置づけられる。

43. SB158A

建物規模が、桁行6.72m梁行4.2m、4間×2間、建物面積28.22㎡の側柱建物である。C地区南西側ね33・34Grを中心とした区域に位置しており、SB158Bと重複、SB158Bが建て替え後の建物と判断されるもの。柱穴プランは円形・方形・不整形を呈しているが、本来全て方形であった可能性もたれる。柱穴規模が、径52～80cmで主体は60cm程をとるものと考えている。深さは36～40cm主体で、最も浅くてP12の24cm、最も深くてP6の54cmを測る。前述の2本を除けば、旧地形に添った深さに掘り込まれている。柱圧痕がP1・7・11で検出されているが、径が14cm程と細すぎるため一部が残存した可能性が高い。柱間寸法は、桁間128～192cm、梁間208・212cmを測り、建物主軸はN-32°-E。掘方の配置は、P2の方形プランが斜めに配置されるなど様々である。柱筋の通りは、桁行と北梁行は良好だが、南梁行P8の窪みが柱部分にあたるなら内側にずれている。柱は抜かれ埋め戻されており、P5・7では柱穴下底部に地固めの土と考えられる土層が残存し、なおかつ硬化している。また、建物の内部で、桁行軸に添って並ぶ小ピットが2列もあり、何か関連する可能性があるだろうか。出土遺物は、SB158A・Bあわせて、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具14点、匣鉢1点が出土しており、時期はⅡ2～Ⅱ1期に位置づけられる。

44. SB158B

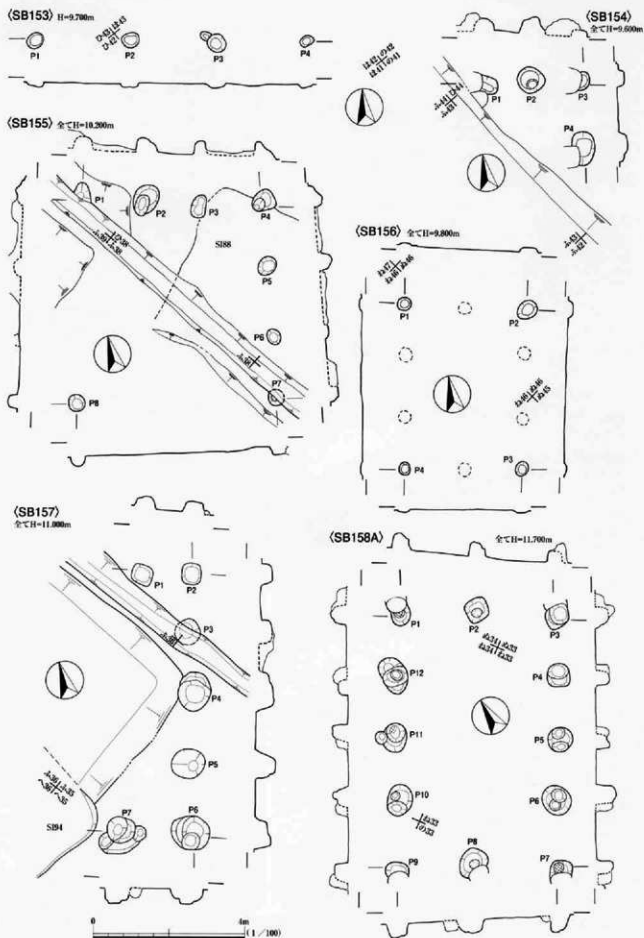
建物規模は桁行7.0m梁行4.4mを測り、面積30.8㎡、4間×2間の側柱建物である。SB158Aからの建て替え後の建物である。建物主軸はN-32°-EでSB158Aと同じである。柱間寸法は、桁間160・188cm、梁間220cmと規則性が認められ、柱穴プランは方形・不整形を呈すものの、本来方形であった可能性もあるだろう。柱穴規模は、径52～72cmで主体は60cm程と思われる。深さは36～56cm、旧地形にやや浅いながら四隅が深めとなっている。柱筋の通りは、左桁行は良好だが、右桁行P6は若干内側へずれる。梁行は中柱が内側へずれており、北梁P2を通そうとするとP1が完全にずれしてしまうこととなる。掘方の配置では、方形プランのものは斜めに位置している。なお、建物廃絶時には柱は抜かれ埋め戻されているが、掘方埋土が残存する状態であり、数本の柱の下底部には地固めの土が硬化する状態で確認されている。

45. SB159

SB158の南東側に隣接して位置する建物。C地区ねの32Grにあたり、SI91、SB173・175、SK165ABと重複する。建物規模は、桁行4.6m梁行3.68m、面積16.92㎡、3間×2間の側柱建物である。主軸はN-32°-E。柱間寸法は、桁間140・160cm、梁間は北梁間188cmで南梁間192・176cmを測る。柱穴プランは円形・方形を呈し、径50cmを主体に40～54cm、深さは18～44cm、円形プランのものは元々方形であった可能性があろう。深さは四隅深めで中柱がやや浅めを呈し、梁行は旧地形に添ったものとなっている。柱抜き取り痕跡を2本のみ確認しているが、2本とも北方向への抜き取りと考えられる。柱痕跡はP1～4で検出しており、この径が16～20cmであった。また、柱圧痕はP8で検出しており、この径は20cmである。柱筋の通りは基本として良いのだが、P1・6が1本分飛び出る形状となっている。P1を通すならば北梁行が僅かにひしゃげる形となり、規模は桁行4.64～4.68m梁行3.68～4.0mとなる。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具17点で、時期はⅡ3期と、Ⅴ～Ⅵ期の2時期のものが出土する。

46. SB162

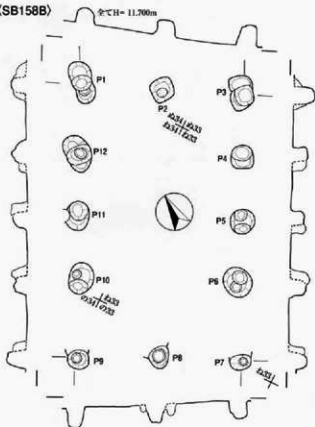
建物規模が、桁行7.6m梁行4.4mを測り、面積33.44㎡、4間×2間の側柱建物である。削平により2本の柱を消失するものの、SI98との重複にもかかわらず非常にしっかりした掘り込みが検出された建物である。この他SI99、SB113・163とも重複、C地区に・ぬ35Grに位置する。主軸はN-35°-E。柱間寸法は、桁間180cmと200



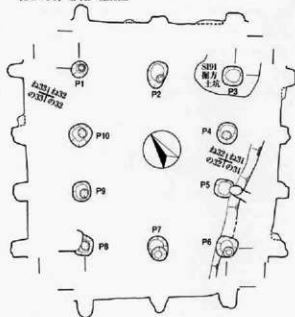
第36図 掘立柱建物遺構図8 (SB153・SB154・SB155・SB156・SB157・SB158A)

(SB158B)

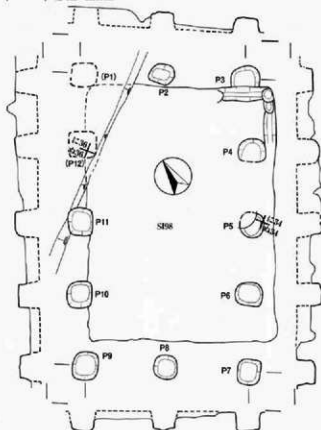
全てH=11.700m



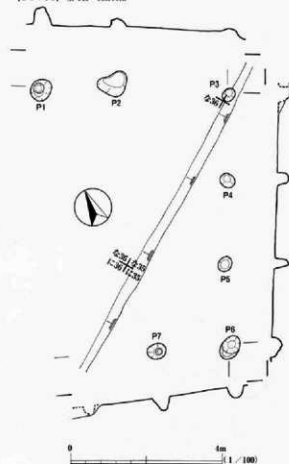
(SB159) 全てH=12.000m



(SB162) 全てH=11.800m



(SB163) 全てH=11.300m



第37図 掘立柱建物遺構図9 (SB158B・SB159・SB162・SB163)

cmが柱間交互に、梁間は220cmとなっており、規則性をもつ寸法となっている。柱穴プランは方形を呈し、規模は径70cmを主体に60～76cmを測る。深さは48cmと判断可能で一定の深さを保っている。柱筋の通りは桁行・梁行とも良い。掘方の並びでは、P2がややずれているものの、この他は計画されて配置されたと思われる。廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されているが、掘方裏込め土が残る状態である。なお、出土遺物は、須恵器食器1点、須恵器貯蔵具2点、土師器食器1点、土師器煮炊具13点であり、時期はⅡ2～Ⅲ3期に位置づけされる。また、隣接するSB116は方位や規模も同じで同時期のものと判断できる。

47. SB163

SB162の北側、C地区な・に35・36Grに位置、SB113・161・162と重複する建物で、削平により建物の半分を消失する。建物規模は、桁行6.8m梁行5.0mを測り、面積34.0㎡、3間×推定3間の竪柱建物である。建物主軸はN27°E。柱間寸法は、桁間220・240cm、梁間は残存で176・180cm。柱穴は円形プランを主体に不整形もみられ、径30～66cmを測るが主体は48cm程で、深さは6～44cmを測る。柱穴は細長いものが多く、掘方断面で掘り鉢状を呈するものもみられる。柱筋の通りは良いのだが、掘方の並びでP2が外側にずれている。ただし、この柱穴の規模は削平の影響によるものかもしれない。また、建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は須恵器食器1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点のみだが、時期はⅣ1期と判断されるものである。

48. SB164

C地区と・な34～な35Grに位置する建物である。建物規模が、桁行4.8～5.0m梁行4.96～5.32mを測り、面積25.18㎡、2間×2間の竪柱建物である。建物主軸はN24°Eをとる。柱間寸法が、桁間240・260cm、梁間244～272cmを測る。P1が南側へずれているために左桁行と北梁行が直行しない、建物全体が台形状のひしゃげた平面プランとなっている。柱穴は円形プランで、規模は径32～48cmを測るが主体は36～44cmで、深さは10～44cmを測る。南梁行と右桁行が若干旧地形に添った掘り込みをもち、北梁と左桁は実は同じ深さに掘り込まれている。北梁行のP2のみ外側へずれるため北梁行の柱筋の通りは悪いが、この他は良好である。柱穴規模や柱間寸法から、古代の竪柱建物とするには梁間が残るものであり、どちらかと言うと中世に出現する低床の竪柱建物である可能性が高いのではないかと考えられる。出土遺物は、須恵器食器3点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具11点であり、古代の土器が主体となって出土し、この他中世1期に相当する遺物破片が1点出土している。このように出土遺物からは古代のものが主体となっているが、建物の構造が中世の竪柱建物と考えられるため、両者が合わない例となっている。

49. SB165

C地区中央のF地区との境、は・ひ36～ひ35Grに位置する建物で、削平によりP8を失っているものである。なお、この建物はSB157・166・167、SK113・132と重複している。建物規模が、桁行5.2～5.6m梁行3.8mを測り、面積20.52㎡、3間×2間の竪柱建物である。左桁が下へずれており、このため桁行と梁行が直行しない若干菱形を呈す建物全体プランとなっている。但し柱筋の通りは良好である。建物主軸は、N20°Eをとる。柱間寸法は、桁間148～212cm、梁間160～200cmであり、全ての柱間寸法が異なっている状態である。柱穴プランは円形主体で、径は40～44cmを主体に48cmまで至る。深さは22～44cmで、若干旧地形に添いながらも似たような深さをもつ。建物廃絶時に柱は抜き取られているが、抜き取り方向がランダムであり、埋土には抜き取り痕の他、掘方裏込め土が残存している。この建物は、配置に関して計画性や規則性が見られず、建物の重みも含め簡易的な要素が否めない。出土遺物は、須恵器食器1点、土師器煮炊具2点、カマド石が1点であり、時期は不明である。

50. SB166

C地区ひ36・37Grで、SB167と重複して位置し、削平により建物のおそらく1/3程度が残存する竪柱建物である。建物規模は桁行残存1.68mで推定5.0m程、梁行は3.68m、推定3間×2間になるのだろうか。3間×2間とすれば、推定面積は18.4㎡となる。建物主軸はN57°E。柱間寸法は、桁間が残存で152cmと168cm、梁間が180・188cmである。柱穴プランは円形で、径48～52cm、深さ16～40cmを測る。深さは、梁行のみを見れば四隅深めタイプとも思われるが、桁行には細いものや浅いものもみられる。なお、柱は廃絶時に抜き取られ、掘方裏込め土が残る状態で埋め戻されている。出土遺物はなく、時期不詳である。

51. SB167

C地区ひ37Gr、SB166と重複するもので、こちらが削平により全体の1/3程度が残存しているものと思われる。建物規模は、残存桁行1.8mで推定4.8m程ではないだろうか。梁行は3.08mである。推定面積14.78㎡、建物主軸がN-45°-Eの、推定桁行3間×2間の側柱建物である。柱穴掘方プランは円形で、径44～68cmを測り、主体は45～50cmとなろう。深さは12～20cmを測る。柱筋の通りでは、梁行は良好だが、桁行のP4が外側へずれて通らない。柱間寸法は桁間が132・180cm、梁間が152・160cmを測る。柱穴そのものは良好な掘り込みをもつものの、配置の規格性に乏しい小型建物になろうと思われる。出土遺物はなく、時期不詳である。

52. SB168

C地区中央から南寄りF地区との境、C地区ひ33・34Grに位置するもので、4本の柱列のみ検出されたものである。検出された柱穴は梁行と思われる2間分と桁行の1間分で、F地区の削平により殆どを消失したのであろう。規模は、桁行は残存1.2m、梁行は3.4mである。梁行の柱間寸法は168cm、桁行の柱間寸法は前述の残存部分で120cmと非常に狭いので、やや疑問が残る。建物主軸はN-63°-E。柱穴プランは円形で、径52cmが主体、深さは24～48cmを測る。これら柱は建物廃絶時に抜き取られ埋められているが、掘方裏込め土が残存する。出土遺物は、須恵器食器3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具10点で、時期はV期に位置づけられるものである。

53. SB169

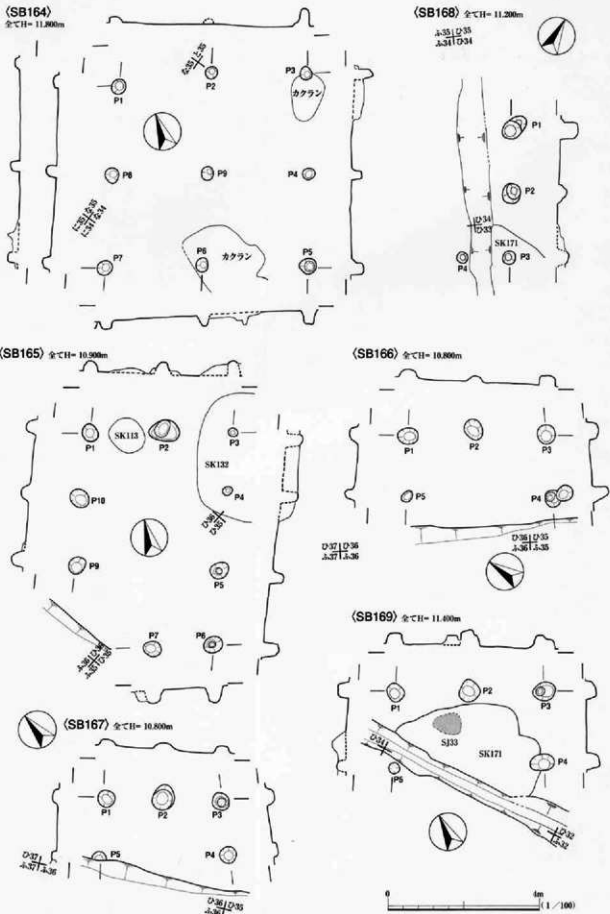
C地区ふ32Gr、F地区との境で検出された建物であり、削平により全体の2/3以上を消失している側柱建物である。建物規模は、梁行残存2.0mで推定6.0m程、梁行3.8m。梁行残存1間分だが、おそらく3間×2間になろうと考えている。よって推定面積22.8㎡、建物主軸はN-30°-E。柱間寸法は、桁間192・200cm梁間192cmと、規則性が伺える寸法となっている。柱穴プランは不整形や楕円形を呈し、柱穴規模は削平されたP5を除いて径48～64cmで主体50cm、深さ32～48cmを測る。柱穴プランに難色を示すものの、深さや配置が良好である小規模な掘立柱建物と言えよう。また、これら柱は建物廃絶時に抜き取られ埋められている。なお、この建物はSB168・171・177と重複、SK171・175やSJ33とも重複し、建物内部に収まるように位置している。SJ33は検出レベルが標高11.23～29であり、本掘立柱建物と同じような検出レベルをもっている。出土遺物は、須恵器食器具11点、土師器食器具1点、土師器煮炊具18点で、時期はⅡ3～Ⅳ期のものが出土するが、主体はⅢ期になるものと判断される。

54. SB170

C地区は34・35-ひ35-の34Grに位置、SI100と重複する建物である。桁行は3間分を検出、この3間の左桁柱間に小ピットが検出されているが関連の有無は判断できない。梁間は1間分が検出されており、削平やSI100との重複の影響により中柱が失われたものと考えられ、おそらく本来は2間であったものと推測している。建物規模は桁行7.2～7.4m、梁行5.0～5.6mを測り、北西梁行が広がり南東梁行が窄まるように柱穴が配置されているため、南西桁行と梁行が直角しない。北東桁行と梁行は直角する。よって建物の全体プランは台形状となっている。柱穴のプランは方形を主体に円形もみられ、径が64～90cmで主体は70～80cmになろうか。深さは6～32cmで、北側へ向かって上面削平が著しく、柱間小柱穴以外は大型でしっかりとした掘り込みをもっている。土層断面では人為的な含有物が多量に含まれる土で埋められており、掘方裏込め土も検出されている。この建物は、削平により中柱が失われたと考えているのだが、或いは建築を途中で中止した可能性もたれよう。ただし、覆土をみても、途中で建設と中止した根拠を確定できるものがない。建物主軸は、桁行軸でN-70°-Eとするが、梁行軸とするとN-30°-Eとなる。建物面積は38.69㎡。なお、桁行外側には、桁行軸と平行に小ピットが並び、小ピット列は規則正しいものではないが、軒先支柱の可能性があらう。しかし、このような歪んだ建物に伴うものかという疑問が残る。出土遺物は、須恵器食器具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食器具1点、土師器煮炊具3点と、掘立柱建物の出土量として多い。時期は、Ⅱ3～Ⅳ1期と判断される。

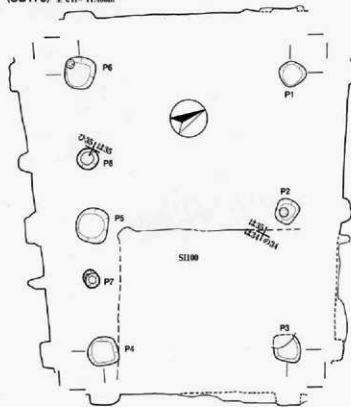
55. SB171

SB170南側に隣接して、C地区ひ33・34Grに位置する。F地区との境の削平区域にあたるため、建物の一部がC地区で検出されたものである。桁行が1間分検出され、この桁間が280cm。梁間は2間で312cmを測る。建物復元を試みると、おそらく3間×2間で桁行推定8.4mになろうかと思われ、推定面積26.2㎡になるのではないかと予想する。桁行の長い、長細い建物プランとなるのだが、F区でよく似た建物であるSB224が検出されている。

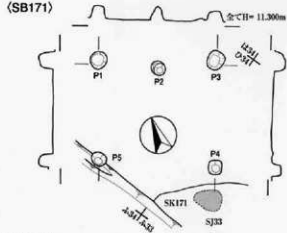


第38図 掘立柱建物遺構図10 (SB164・SB165・SB166・SB167・SB168・SB169)

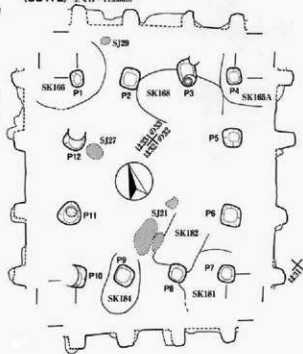
(SB170) 全てH=11.400m



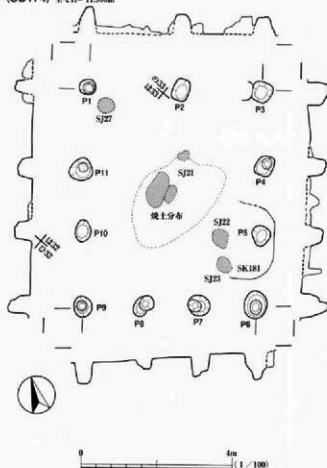
(SB171)



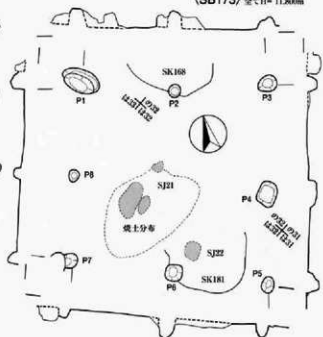
(SB172) 全てH=11.800m



(SB174) 全てH=11.500m



(SB173) 全てH=11.800m



第39図 掘立柱建物遺構図11 (SB170・SB171・SB172・SB173・SB174)

柱間寸法の梁間は152・160 cmを測り、柱穴プランは円形・方形を呈し、径40 cm主体で34～50 cm、深さ24～36 cmと、柱穴そのものは小さくて細いものである。建物主軸はN-21°-Eをとる。柱筋の通りは、桁行は良いのだが、梁行のP2が通らない。また、これら柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。なお、この建物はSB168・169、SK171、SJ33と重複する。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具18点で、時期はⅡ2～Ⅲ期と位置づけられるものである。

56. SB172

C地区内で遺構が最も重複する区域に位置するものである。C地区南側の・は32・33Grにあたり、この他SB173～176、SK165A・166・168・176・181・182・184、SJ21・27と重複する。SB172の建物規模は、桁行5.2 m梁行4.0 mの3間×3間、建物面積20.8 m²を測る、側柱建物である。柱間寸法は、桁間160 cmと200 cm、梁間120 cmと140 cmであり、規則性を伺わせる寸法となっている。建物主軸はN-15°-E。柱穴掘方プランは方形が主体で、P3は長方形を呈す。柱穴規模は径48～52 cmが主体で36～64 cmを測る。深さは40 cmが主体で最も浅いものが28 cm、最も深いP5が52 cmである。北梁行のみが旧地形に添い、この他はP5が深めだが、ほぼ同じ深さをもつ。柱筋の通りは、左桁P11が外側にずれて悪いが他は良好である。掘方の配置では、方形プランであるのに斜めに配置されているものがあり、方形を意識しているものの全体枠としての認識はなかったようだ。全体として、柱穴はしっかりした掘り込みをもち、柱間寸法を合わせるなどの規格性が伺える建物である。なお、これらの柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されており、掘方表込め土が残存する状態である。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具26点、時期はⅣ期とⅤ期の2時期と判断される。

57. SB173

C地区遺構重複区域、の・は32Grに位置する。建物規模は桁行4.6～5.2 m梁行4.92～5.28 m、面積24.99 m²の2間×2間の側柱建物である。建物主軸はN-16°-E。P3やP5が外側に大きくずれて配置されるため、全体に至な台形状プランを呈す。桁行と南梁行の柱筋の通りは良いのだが、北梁行のP2が内側にずれて柱筋が通らない状態である。柱穴規模は径や深さが様々であり、径28～60 cm、深さ16～52 cmを測るが、径の主体は44 cmになるかと思われる。柱穴プランも円形・方形・不整形・楕円形と様々だが、円形と方形が主体とみてよいだろう。また、柱間寸法も桁間232～280 cm、梁間244～280 cmとばらついており、掘方の配置にもばらつきが見られる。この建物は、規則性や統一性がなく、簡易要素が強いものと思われる。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。また、建物内部に重複するSJは検出標高が高いため、本建物に伴わないと考えられる。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具30点、土製支脚を含む土師製品2点であり、時期はⅢ期とⅤ期・Ⅵ期の時代幅をもつ遺物が出土する。

58. SB174

C地区遺構重複区域に位置、の32-は32・33Grにあたる。建物規模が桁行5.6 m梁行4.6 m、面積25.76 m²を測る3間×2(3)間の側柱建物である。建物主軸はN-18°-E。柱間寸法は、桁間168～200 cm、梁間140～240 cmと一見幅をもつが、それぞれ桁行梁行で規則的な寸法をもつ。柱穴は方形・円形を呈し、径52 cmを主体に44～72 cm、深さ44～72 cmを測り、最も浅くてP8の25 cmである。深さは、若干旧地形に添いながら、四隅が深く中柱が浅めのタイプである。柱筋の通りは、桁行P4やP10がやや外側に位置するため通りが悪いが、梁行の通りは良い。また、これら柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。抜き取り痕跡が3本のみで確認できているが、抜き取り方向は放射状に外側に向かっていて、また、柱の設置方向は6本で確認できているものの、すべてランダムな方向からの設置である。出土遺物は、須恵器食膳具30点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具103点、匣鉢3点と、掘立柱建物の出土としては多量である。時期はⅤ2～Ⅵ期を主体で、Ⅳ期のものも出土する。

59. SB175

同じくC地区遺構密集区域で検出された建物である。の・はひ32-は31Grに位置する。建物規模は、桁行6.12～6.52 m、梁行が4.8 m、面積30.33 m²の3間×2(3)間の側柱建物である。P1がずれて設置されているため左桁行と北梁行が直行せず、北梁行が斜めに傾く建物プランをもつ。このためP1・11間の桁間が188 cmを測るのだが、他の柱間寸法は規則性をもっている。その寸法は、桁間3間中の中央が200 cmで、この他が220 cm。梁間は北梁間が240 cm、南梁間が160 cmである。柱穴掘方プランは方形で、径は56 cm程を主体に52～66 cm、深さは

隅柱 40～52 cm 中柱 28～32 cm 主体で P5 のみ 48 cm を測る。四隅の深さがほぼ一定である。柱筋の通りは桁行・梁行とも良い。また、掘方の配置についても、右桁行の外側ラインがしっかりと揃っており、南梁行もある程度の揃いが見られる。これら以外に揃いは見られないが、この2本のラインが基準となって掘り込まれたと思われる、ある程度監督された可能性があらうか。柱痕を確認している柱穴が2本あり、この径が22 cm 程であった。また、覆土の下端から上へ2/3程で柱痕を確認しているものが4本見られる。掘方内部で柱を切り取ったものか、根腐れにより柱下底部分を放置したものはわからないが、残存する柱痕上面には更に埋土があり、柱痕の周りには掘方裏込め土が残ったままの状態である。これら6本以外の柱は、廃絶時に柱を抜き取り埋め戻されている。本建物は一部監督性も伺え、掘り立て時当初は管理され規格性をもって建てられた建物と考えられるが、P1の配置不備がみられることが特徴だろう。また、本建物の桁行・梁行に平行するように小ピット列が内外に並ぶ。これらの小ピット列がこの建物に関連するかは断言出来ないが、軒先支柱や、間仕切りのような可能性がもたれよう。建物主軸は、N33°-E。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具25点、黒鉢3点であり、時期はV～VI期と位置づけられる。

60. SB176

同じくC地区遺構密集区域で検出された建物である。は・ひ32-はは31Grに位置する。建物規模は桁行6.4 m 梁行4.6 m、面積29.44 m²、3間×3間の側柱建物である。建物主軸はN34°-Eで、SB175と同様の主軸方位であり、両者が建て替えの関係だった可能性がもたれようが、確認できていない。柱間寸法は、桁行208～220 cm、梁行100～180 cmと、概ね相対する位置に柱が配置されるが、SB175に比べ規格性に欠ける。柱穴は方形・円形・長方形を呈すが、元は全て方形であった可能性がもたれる。径は52～72 cm、最小のもので36 cmを測る。深さは16～52 cmを測り、基本として四隅深めでやや旧地形に添い、南梁行きのP8-9は浅く貧弱なピットである。但しP12のように深いものもある。柱筋の通りでは、桁行P5が外側にややずれがみられるが、左桁行の通りは良い。梁行では南梁行P9が内側にずれるが、北梁行は通りが良い。柱痕跡を4本分で検出しており、この径が17～22 cmであった。この他SB175で記述したような覆土下部で柱痕を検出しているものが1本認められた。これら以外の柱は建物廃絶時に抜き取られているが、抜き取り方向は不明で単層埋土である。柱の設置に関しても、確認できるものでは、多方向から柱を掘り立てていると思われる。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具50点、黒鉢2点で、時期はII期とIV～V期の2時期に位置づけられる。

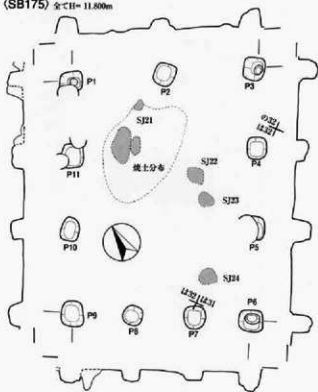
61. SB177

C地区遺構密集区から南西側、ひ32・33GrのF地区境にて、F地区の隅平と他遺構の重複により柱穴4本のみが検出され、建物全体の2/3以上を消失する建物である。南北軸方向の並びを桁行として報告する。検出された柱穴は、桁行側に2本、梁行側に2本である。残存規模は、桁行残存3.0 m、梁行残存4.2 m。復元を試みると2間×3間の建物であれば推定面積35 m²、3間×2間であれば30 m²弱程にならうか。建物主軸はN5°-Eとなる。柱穴プランは方形・長方形・円形を呈すが、本来全て方形だったのだろう。径は52～68 cmで最小40 cm、深さは40～48 cmを測る。深さは良好で、桁行は一定を呈し、梁行は旧地形に添う深さとなっている。良好なピットなのだが、柱間寸法のP1・2間が188 cm、P2・3間が240 cm、P3・4間が300 cmと、配置はばらばらしている。また、建物廃絶時に柱は抜き取り埋め戻されている。なお、重複する遺構は、SB169・176・178、SII01、SK186・191、S130である。遺物の出土は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具7点であり、時期はV期に相当するものである。

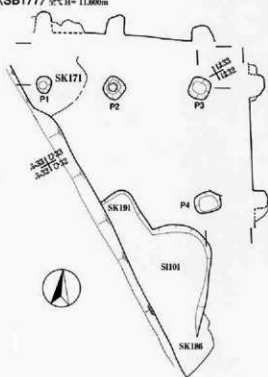
62. SB178

SB177と似た条件で検出された建物であり、建物全体の1/2以上が消失するものである。C地区ひ31・32Grにあたる。5本の柱穴のみ検出されたのだが、4本が並ぶ側を桁行として報告する。残存桁行は3間分で桁行長7.2 m、梁行は1間分が残存しており2.2 mである。全体規模を推定すると、おそらく3間×2間になるのではないかとと思われるが、勿論4間×3間である可能性もあろう。推定面積は最低でも31.68 m²となる。建物主軸は、桁行軸ならN70°-Wであるし、横向き建物ならN20°-Eとなる。検出された柱穴は、円形・方形・不整形プランを呈すものの円形プランが主体である。径は56 cmを主体に最大64 cm、深さは44～60 cmを測る。桁行の深さは旧地形に添ったものとなっており、P1以外の掘方断面が段掘を呈している。柱は細長く深いものが多く、特にP3は小規模で貧弱なものである。柱間寸法は桁間200・260 cm、梁間残存220 cm。柱痕跡をP1のみ検出しており、この径が

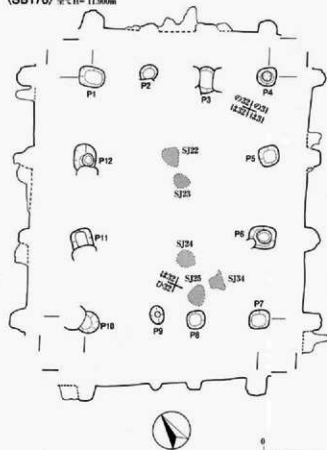
(SB175) 全てH=11,800m



(SB177) 全てH=11,600m



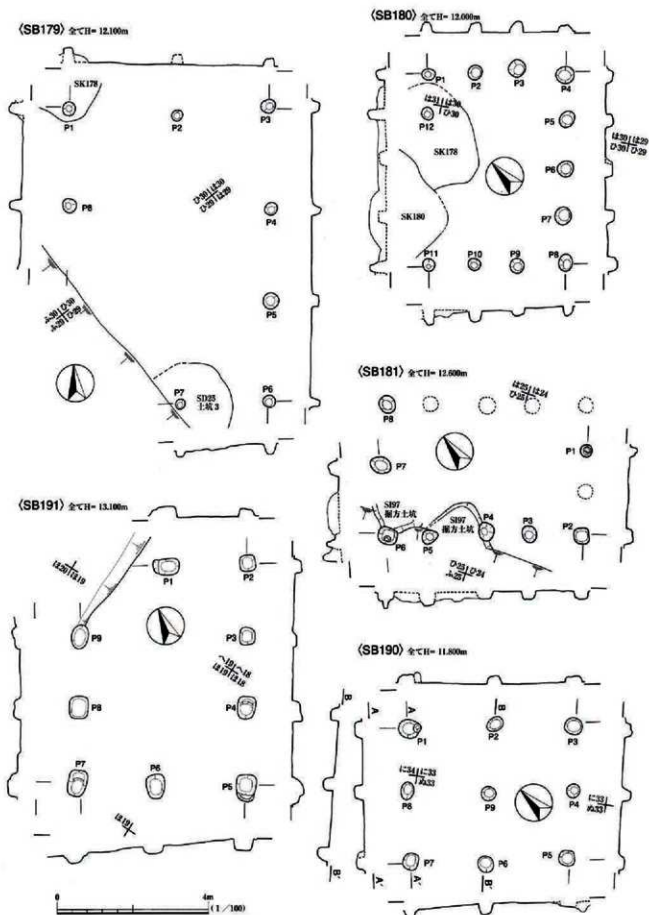
(SB176) 全てH=11,900m



(SB178) 全てH=11,800m



第40図 掘立柱建物遺構図12 (SB175・SB176・SB177・SB178)



第41図 独立柱建物遺構図13 (SB179・SB180・SB181・SB190・SB191)

22cm程であった。これ以外では柱は抜き取られ埋め戻され、全て外側に向かって抜き取られている。柱筋の通りはP3が外側に飛び出ており悪い。また、覆土の下底では柱地固め土と考えられる層を全ての柱穴において検出している。本建物桁行の外側に小ピットが並び、軒先支柱の可能性がもたれようか。なお、この建物は多くの遺構と重複、その遺構はSB175・176、SI101、SK164・177・180・186～189・191～192、SJ26・34である。出土遺物は、須恵器食器具7点、須恵器貯蔵具1点、土師器食器具2点、土師器煮炊具30点であり、時期はV期を主体に、Ⅲ期・Ⅳ期のものも出土し、幅広い時期をもつ。

63. SB179

C地区南側、は・ひ・30・31Grに位置し、SB180と重複、SK174やSD25とも重複する。建物規模は、桁行7.8m 梁行5.2m、面積40.56㎡、3間×2間の側柱建物である。建物主軸は、N-5°-E。柱間寸法は、桁間240～280cm、梁間240～280cmを測る。柱間寸法が長いということ、柱穴規模が小さいということ、桁間・梁間軸が直行する位置で建物内部に床東柱が見られること、SB245と軸が揃うということから、中世の低床の総柱建物である可能性が高いのだが、出土遺物の時期と一致しない。ただ、SB245出土遺物においても間違いなく中世の建物構造であるのに、古代遺物の方が多量に出土していることもあり、出土遺物の時期のみで判断することも難しいと考えられる。しかし、当時の現地調査で側柱建物とされていることを踏まえ、最終的に側柱建物と判断した。柱穴プランは円形を呈し、径は32cmが主体で28～40cm、深さ16～30cmを測る、小規模なものである。柱筋の通りは、桁行は良好だが、梁行のP2は完全にずれる形となっている。その他、建物時期に添う形で、建物外側に並ぶ小ピット列があるが、軒支柱的なものであろうか。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器煮炊具3点と少なく、時期はⅣ期に位置づけられるものである。

64. SB180

建物規模が、桁行5.0m 梁行3.6mを測り、面積18.0㎡、4間×3間の側柱建物である。土坑との重複により2本の柱を消失している。C地区は・ひ・30Grに位置、SB179、SK178～180と重複する。主軸はN-45°-E。柱間寸法は右桁間120・140cm、左桁間が残存100cm、梁間は112～128cmを測る。P1・12間が100cmと最も狭いが、右桁行には規則性が見られる。また、梁行でも柱間寸法の統一こそないが、相対する位置に配置している。柱間寸法の短い、多柱タイプになろう。柱穴プランは円形で、径40cmを主体に36～44cmと小さく、深さは20～30cmを測る。北梁行P3が若干外側に位置するものの、柱筋が通らないことはなく、全体として柱筋の通りは概ね良い。なお、出土遺物は、須恵器食器具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食器具1点、土師器煮炊具6点であり、時期は、Ⅲ期・Ⅴ期・Ⅵ3期の3時期にあたるものが出土している。

65. SB181

C地区南端ひ24・25Grの削平区域に位置、SI97と重複する建物で、建物全体の旧地形の高所部分1/2を消失する。建物規模が、桁行5.2m 梁行残存2.4mで推定3.4m、桁行4間×推定北梁行2間・南梁行3間と思われる側柱建物である。推定面積17.68㎡、主軸はN-51°-W。柱間寸法は、桁間120・140cm、梁間120～180cmを測る多柱タイプである。柱穴プランは円形・方形・不整形、隅柱が方形を呈し、径は40cmを主体に32～48cm、深さ20～40cmを測り旧地形に添う掘り込みをもっている。柱穴の配置はP2・8が外側にずれるため、柱筋の通りは悪い。また、これらの柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食器具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点であり、時期はⅡ2～Ⅳ2期に位置づけされる。

66. SB190

建物規模が、桁行4.2m 梁行3.6mを測り、面積15.12㎡、2間×2間の側柱建物である。C地区に・ぬ33Grに位置する。主軸はN-42°-WもしくはN-48°-E。柱間寸法は桁間220・220cm、梁間172・188cmを測る。柱穴掘方プランは円形で一部方形を呈し、柱穴規模は、径36～48cm、深さ20～28cm、深さは旧地形に添ったものとなっている。柱筋の通りは、基本として良いが、P2が南東側へ若干ずれていることで、P6とP2を結ぶラインの通りが悪くなる。出土遺物は、須恵器食器具1点のみで時期不詳である。

67. SB191

F地区東側は18・19～19Grに位置し、建物規模が、桁行5.8m、梁行4.4m、3間×2間の面積25.52㎡を測る側柱建物である。SB192～194・198と重複する。削平により建物の柱1本分を消失。主軸はN-23°-E。柱間寸法は、桁間180・200cm、梁間は200・240cmと、相対する位置に規格性をもって配置されている。柱穴プラン

ンは長方形・方形で、P9のような楕円形もみられるが、本来方形であった可能性もたれる。柱穴規模は、径48～68cm最小で40cm、深さ10～28cmを測る。四隅にしっかりと掘り込みをもって深めを呈すタイプで、旧地形に添った掘り込みをもつ。旧地形では北東側が最も標高が高かったと思われ、削平の影響がP2・3の規模に現われている。柱筋の通りは、桁行・梁行とも良好である。また、掘方の配置も、方形の枠を描いているというわけではないが、斜め等に配置されず、軸に平行に配置されている。建物廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されており、抜き取り方向はランダムであった。出土遺物は、須臾器食膳具8点、須臾器貯蔵具3点、土師器煮炊具6点、時期はⅡ3期とⅣ～Ⅴ期の2時期相当に位置づけられる。

68. SB192

SB191と同位置で検出され、削平によりおそらく半分を消失する側柱建物である。建物規模が、桁行4.8m、梁行が残存2.2mだが推定で3.8m程、3間×推定2間、推定建物面積18.24㎡。主軸はN-21°-E。柱穴プランは方形・円形・不整形を呈すが、本来全てで方形であった可能性があるだろう。柱穴規模は、径52～64cm、深さ28～40cmで最小16cmを測り、細いものもある。深さにおいては、P3のみ浅いもののほぼ一定の深さを呈しており、検出面が斜めになることから整地の可能性も考えられよう。柱間寸法は、桁間166cm、梁間残存で180・220cmであった。柱筋の通りは、残存する限りだが良い。柱痕跡をP2・4で確認しており、この径が18cm程である。これ以外の柱は廃絶時に抜かれており、抜き取り方向はランダムである。設置にしても多方向から掘り立てたと考えられ、設置や廃絶時の監督性はなかったようだ。P2・4・5では、柱穴下底で地固め土と考えられる層を検出している。出土遺物は、土師器煮炊具2点のみで、時期は不明である。

69. SB193

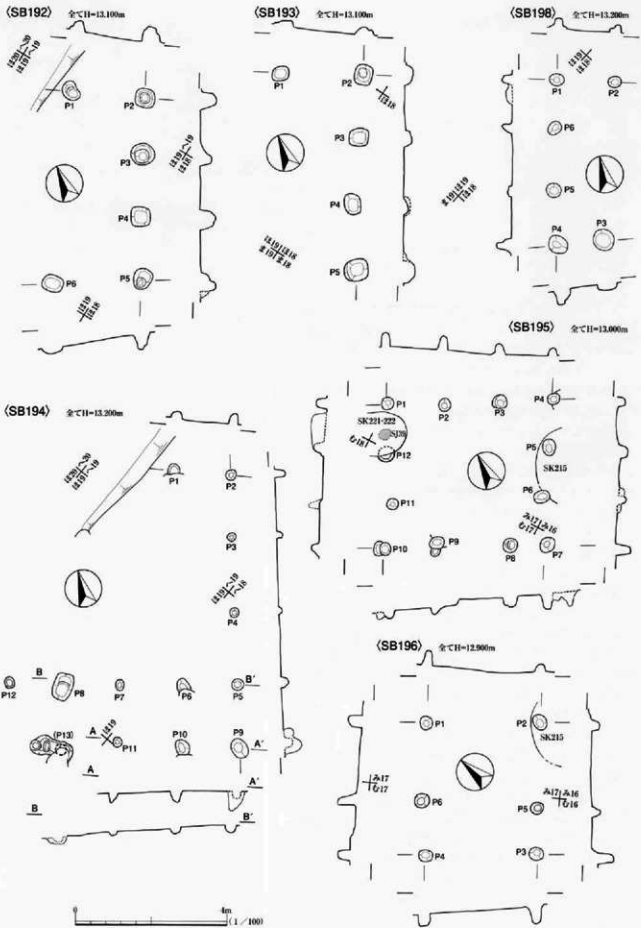
同じくSB191・192と同位置で検出された建物で、削平によりおそらく半分以上を消失する側柱建物である。断面から四隅が深めに掘り込まれるタイプと判断でき、おそらく3間×2間になるものと予想する。建物規模が、桁行5.16m、梁行残存2.12mで推定4.2m、推定面積21.67㎡である。建物主軸はN-24°-E。柱間寸法は、桁行172cm、梁行が残存で212cm。柱穴プランは方形を呈し、径50～64cm、深さ16～32cmを測る。深さは旧地形に添った掘り込みをもちながら、SB191のように四隅が深くなるタイプである。柱間寸法は良好なのだが、P1やP4が内側にずれて配置されているため、柱筋の通りは悪い。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されており、抜き取り方向は一定でなく、掘方裏込め土が残存する状態である。出土遺物は、須臾器貯蔵具1点のみであり、時期不明である。

70. SB194

同じくSB193と同様の位置で検出されたもので、この建物も削平の影響を受けており、消失は建物全体の1/4以上になろうか。片廂建物でないかと考えているものである。身舎が残存で桁行4間×梁行3間に、廂が南側に取り付く。建物規模は残存で、身舎の桁行5.8m、梁行5.6m、廂1.6mを測る。勿論、身舎部分の桁行が4間以上となる可能性はあろう。よって、面積は最低でも身舎で32.48㎡、廂が9.28㎡となり、合計で41.76㎡となる。この建物は桁行と梁行が直行していない。梁行のP2・3・4が全体に西側にずれて配置されるため、側柱や入側柱は平行なのだが、梁行が歪んでいる状態である。建物主軸は、桁行を軸としてN-73°-W。建物が北に対し横配置となればN-17°-Eとなる。柱間寸法は、桁行で140～160cm、梁行で172～200cmを測る。柱穴プランは円形を主体に方形・楕円形を呈し、径20～32cm、深さ20～28cmが主体で最も浅くて6cmと、小規模で細長いものである。深さは四隅が深めの所もみられ、南桁行・入側桁行が旧地形に添った掘り込みをもつが高低差が著しい。これら柱穴規模は上面に削平の影響が及んでいるとはいえ、中世の総柱（床束）建物を連想させる。しかし柱間寸法が中世の総柱建物と比較して狭いことや、どうしても床束柱に相当する柱が検出されなかったこともあり、古代の片廂建物と判断している。なお、柱筋の通りは概ね良好だが、P11のみ内側にずれている。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物はなく、時期は不詳である。

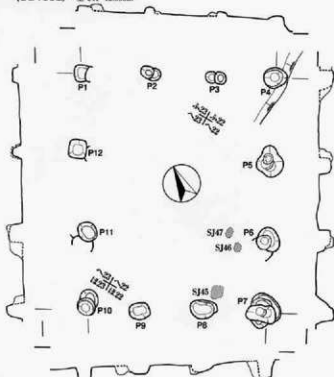
71. SB195

建物規模が、桁行3.72～3.8m、梁行4.2～4.32m、建物面積16.01㎡の3間×3間、側柱建物である。F地区南東み・む17Grに位置し、SB196、SK220～222・214・215と重複、P1・12間にSJ39も重複する。柱間寸法は、桁間112～132cm、梁間92～148cmを測り、P4がずれているために北梁行と東桁行が直行しない。よって、建物全体では、P4が飛び出る歪んだ形状を呈す。西桁行と南梁行はかろうじて直行しているものの、P9やP11が

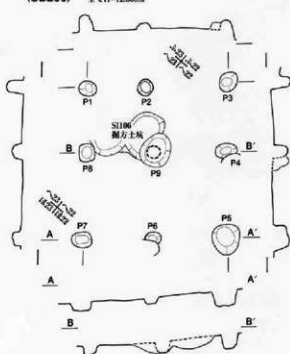


第42図 掘立柱建物遺構図14 (SB192・SB193・SB194・SB195・SB196・SB198)

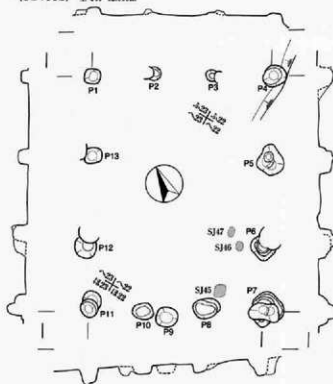
(SB199a) 全てH=12.600m



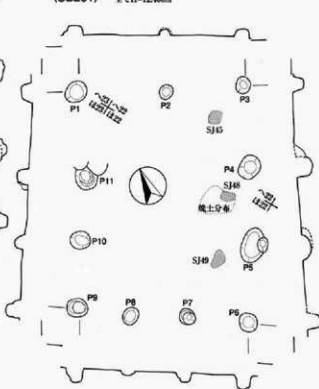
(SB200) 全てH=12.600m



(SB199b) 全てH=12.600m



(SB201) 全てH=12.400m



第43図 掘立柱建物遺構図15 (SB199a・SB199b・SB200・SB201)

内側にずれている。さらに、東桁行のP6や北梁行のP2もずれており、全てのラインで柱の通りは悪く、前述した柱間寸法にも統一性や規則性は見られない。柱穴プランは円形で、径36cmを主体に28～40cm、深さは24～36cmを測る。西桁行の深さにばらつきが認められるが、この他は基本的に旧地形に添った深さをもつ。柱穴は小さく深いものである。この建物は規格性の窺えない簡易な印象のものである。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみ、時期は不詳である。主軸はN-29°-E。

72. SB196

SB196と同位置の建物で、桁行3間分と梁行1間分の6本の柱穴が検出されたものである。竪穴建物の柱穴とも考えられたものだが、竪穴柱穴としては柱穴規模が小さすぎること、竪穴建物として判断できるような掘方土坑等の遺構が検出されなかったことから、側柱掘立柱建物として扱った。建物規模は、桁行3.4m梁行2.92mを測るが、おそらく3間×2間の建物ではないかと推測する。建物面積は9.92㎡と極めて小規模で、柱穴プランは円形を呈し、径32～36cm、深さ20～48cmを測る。深さに規則性や統一性は見られないが、柱筋の通りは良い。なお、出土遺物は、土師器煮炊具1点のみだが、時期はV期?頃か。主軸はN-51°-E。

73. SB198

F地区東側は18Gr、建物東側が削平され西側6本の柱穴のみ残存する側柱建物である。4本が並ぶ3間側は、4.28mを測り、柱間寸法が120～160cmである。これにはほぼ直行して並ぶそれぞれ1間分の柱間規模は120cmと148cm。柱穴は円形を呈し、規模が径34～52cmを測るが主体は45cm程になるうか。深さは10～40cmを測る。柱の深さはばらついており、細く深い印象のものである。主軸は3間側に合わせてとN-19°-Eとなる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点のみ、時期不明である。

74. SB199a

F地区東側での遺構密集区域の最東にあたる、ふ・へ・ほ-23・24Grに位置する。建物規模が、桁行6.2m梁行4.8m、3間×3間の建物面積29.76㎡、側柱建物である。主軸はN-27°-Eをとる。SB199bの建て替え後の建物であり、主軸をやや西へ振って建て替えている。この他、SB200～203、SI106・107、SJ45～47と重複する。柱間寸法は、桁間188～232cm、梁間148～156cmを測る。桁間寸法は、3間ではそれぞれ異なる寸法の統一はないが、右桁間と左桁間ではほぼ同じ柱間寸法となっており、計画的に相対する位置に配置されたと考えられる。柱穴プランは、円形・方形・不整形を呈しているが、本来全て方形であった可能性もあるだろう。径44～60cmを主体に最も削平が及ぶものでは28cm、最大72cmを測り、深さは10～48cmである。旧地形で北梁行側が最も標高が高かったとみえ、北梁行側の深さが10～12cm。右桁行・南梁行は、隅柱が深めとなっている。柱抜き取り痕跡を確認している柱穴は3本で、柱抜き取り方向は多方向である。また、設置に関しても多方向から柱を掘立てたようである。柱穴の配置は、P2・4・9がやや外側にずれており、P12においては1本分飛び出るように外側にずれている。よって、右桁行の通りは通らないということはないが、他は柱筋の通りは悪いと言えよう。また、左桁柱穴の外側に、柱穴と平行に並ぶようにして小ピット列が認められ、軒支柱の可能性があるだろうか。なお、この建物はSB202と主軸を同様にし、隣接するようにならぶ。出土遺物は、SB199a・b合わせて、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具49点、時期はIV古期が主体で、この前後の時期のものも出土する。

75. SB199b

SB199a建て替え前の建物である。建物規模が桁行6.0m梁行4.6m、面積27.6㎡を測る。3間×3間の側柱建物。主軸はN-29°-Eをとる。柱間寸法は、桁間148・212・232cm、梁間148・156とばらつきがあるのだが、相対する位置にきちんと配置されている。柱穴掘方プランは円形・方形・不整形を呈すが、本来全て方形だった可能性があらう。規模は径44～56cmを主体に、削平を受けたもので28cm、最大72cmを測る。深さは22～48cmであり、四隅が深めで、旧地形にやや添った深さを呈している。柱筋の通りは、P9がやや外側に、P10がやや内側にずれるため、南梁行の通りは悪いのだが、この他は概ね良好である。P13に関しては非常に良好な柱穴で、北梁行に相対する柱穴が検出されておらず、これ1本のみ検出であり、本建物に伴う可能性を十分にもつものである。なお、これら柱は、建物廃絶時に抜き取られ埋戻されている。SB199aと同様に隣接する他建物や軒支柱の関連が示唆される。

76. SB200

SB199と同位置で検出、へ22・23Grにあたる。建物規模は、桁行4.0m梁行3.6m、面積16.56㎡、2間×2間、総柱建物である。主軸はN-15°-E。柱間寸法は桁間172・228cm、梁間132～208cmを測り、北梁行のP2が左側へずれているために綺麗な田の字とならない。それでも柱筋の通りは良好と言える。柱穴プランは円形・方形を主体に不整形・楕円形もみられ、径40～52cm、深さ20～44cmを測る。深さに関しては四隅柱が深い若しくは大きく、基本として旧地形に添っている。但し、掘方の規模に揃いはなく、細いものや大規模なものも様々である。柱抜き方向が確認されたものは3本のみ、方向は全て北向きであった。この他の柱も抜き取られ埋め戻されているが、抜き取り方向は不明である。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具1点で、時期はIV2期に位置づけられるものである。

77. SB201

SB199南側に重複して位置する建物で、へ・ほ22～ほ20Grにあたる。この他SB200～203、SK210と重複する。建物規模は、桁行5.18～6.2m梁行4.4～4.44m、面積26.52㎡、3間×2(3)間の隅柱建物である。南桁のP6を中心に大きくずれ、斜めとなるため南梁行が桁行に直行しない。よって、台形状の建物プランとなるものである。建物主軸はN-24°-E。柱間寸法は、桁行160～220cm梁行132～232cmで、統一性が見られない寸法である。柱穴は、円形・方形・不整形を呈し、径36～56cm、深さ20～44cmを測る。基本として旧地形に添う掘り込みをもちながら四隅柱を深くするもの。但し、P4は中柱であるのに深くっており、この柱の下部から地固め土のような層を検出している。この柱穴だけ掘りすぎたために、土を入れて調整したのだろう。柱筋の通りは、右桁行や南梁行の通りが良いが、北梁行P2や左桁行P11が内側にずれて通りが悪いものとなっている。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されており、掘方裏込め土が存存する状態である。本建物は、配置などにばらつきが見られるもの、掘り込みのしっかりした良好な柱穴をもつものである。なお、出土遺物は、須恵器食膳具14点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具73点と多く、時期はV2期を主体にⅢ～Ⅳ期のものも出土している。

78. SB202

SB201からさらに南側へずれるように重なって位置し、ほ21・22～ま22Grにあたる。この他、SI107、SK210・230・231・237と重複する。建物規模は、桁行6.4m梁行4.6m、面積29.44㎡、4間×2(3)間の隅柱建物である。主軸はN-29°-E。柱間寸法は、桁間120～200cm、梁間148～244cmを測る。柱穴掘方プランは円形・方形を主体に不整形もみられ、径は48cmが主体で24～52cmを測り、深さは20～36cmを測る。深さは旧地形に添う掘り込みをもつが、P2・9のみ浅めである。柱穴P6・8は浅すぎて削平されてしまったものか、検出されていない。柱筋の通りでは、梁行は良好である。桁行では、P7やP12がずれており柱筋の通りは良いとは言えない。また、掘方の並びについてもばらつきが目立つ。本建物は、掘り込みにも配置にもばらつきが目立ち、相対する位置に柱を設置するものの、規則性が見られない建物と判断可能である。なお、これらの柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されており、左桁で確認された抜き取り痕跡では南方向へ柱を抜いている。この他については、抜き取り方向は不明、理土に縛りをもつことが特徴である。なお、SB201との関連については、土層断面でSB202が古いものと確認している。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具20点であり、時期はIV2期頃のもの判断される。

79. SB203

SB199・200と同様の位置で検出、へ22・23にあたる。削平の影響があつて中央P9の検出がされなかったのだが、2間×2間の隅柱建物と判断したものである。P5が内側にずれていることで、右桁行と南梁行が直行しない形状となっている。建物規模は、桁行4.4m、梁行3.0～3.32m、面積13.9㎡を測る。主軸はN-25°-E。柱間寸法は、桁行212・232cm、梁行140～168cm。柱穴掘方プランは不整形もみられるが、円形・方形を主体としており、径は56cmを主体に32～72cmを測り、深さは10～26cmである。深さにばらつきが目立ち、削平を受けているとはいえ柱穴は貧弱な印象のものである。柱筋の通りは基本として良いのだが、P4がややずれている。簡易要素を否めないつくりをしており、隅柱建物として成立するのだろうか。なお、出土遺物は、須恵器貯蔵具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具10点、時期はV期前後と判断される。

80. SB204

F地区東側ま・み-20・21Grに位置、削平により全体の1/3を消失するものである。建物規模は、桁行6.6m、梁行が残存3.2m推定4.8mと考える、3間×推定3間の側柱建物である。面積は31㎡程にならうか。建物主軸はN-37°-E。柱間寸法は、桁間192～240cm、梁間128・160cmである。柱穴プランは円形・不整形を呈し、規模は径40cmを主体に32～60cm、深さは12～32cmで基本的に旧地形に添うが、柱穴は小さく細いものが多い。柱筋の通りは、桁行P5と北梁行P1がやや外側に位置しており、良好とは言えない。本建物は、柱間規模に若干の規則性がみられるもの、柱穴が小さく細く、深さにもばらつきが見られる建物であると言える。なお、出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点が出土し、時期はⅣ2期を主体として、Ⅲ～Ⅴ期と幅広い時期のものが出土している。

81. SB205

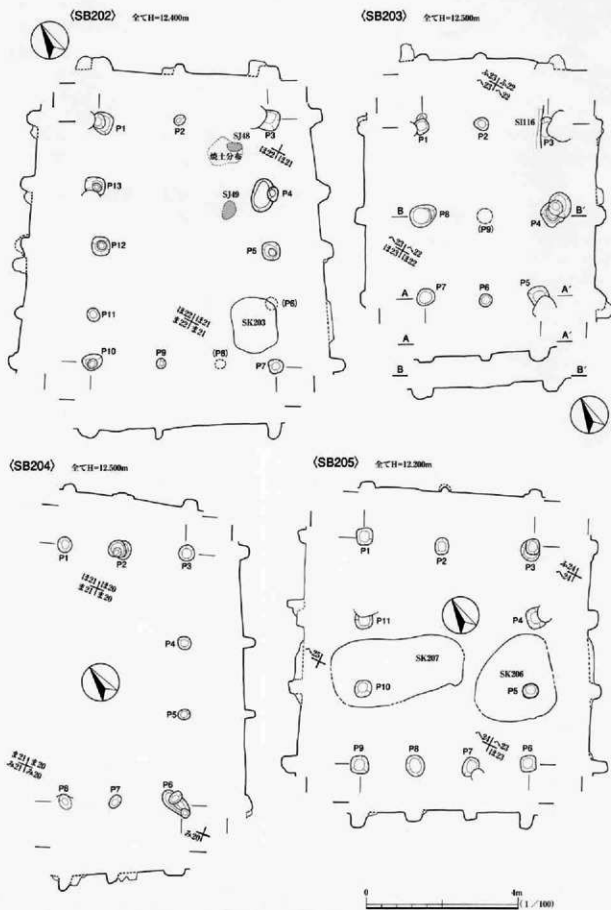
F地区東寄りの中央、遺構密集区域に位置する建物で、へ・ほ24Grにあたる。建物規模は、桁行5.72～6.0m梁行4.4m、面積25.78㎡の3間×2(3)間の、側柱建物である。P1が1本分外側に飛び出るようにずれて配置されているため、P1を通すと梁行が左上がりの形状となってしまう。この他は配置も良好で、柱筋の通りもよい。桁間寸法も桁間南側が200cm、中央が180cm、北側が188～200cm。梁間は南梁間が140cmと148cm、北梁間が212cmと232cmを測る。北梁間が異質だが、他は規則性が見られる。主軸はN30°-E。柱穴プランは円形もみられるが方形主体で、径48cm主体に36～54cm、深さ12～40cmと、旧地形に添って、四隅を深くもつタイプである。これらの柱は建物廃絶時に抜き取られているが、抜き取り方向はランダムである。本建物はP1のずれがなければ規格性の高い建物として判断することができる。なお、この建物は、SI109、SB206・207・231・232・234、SK206・207・260・261・265・269と重複する。出土遺物は須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具11点であり、時期はⅢ～Ⅳ期に位置づけられる。

82. SB206

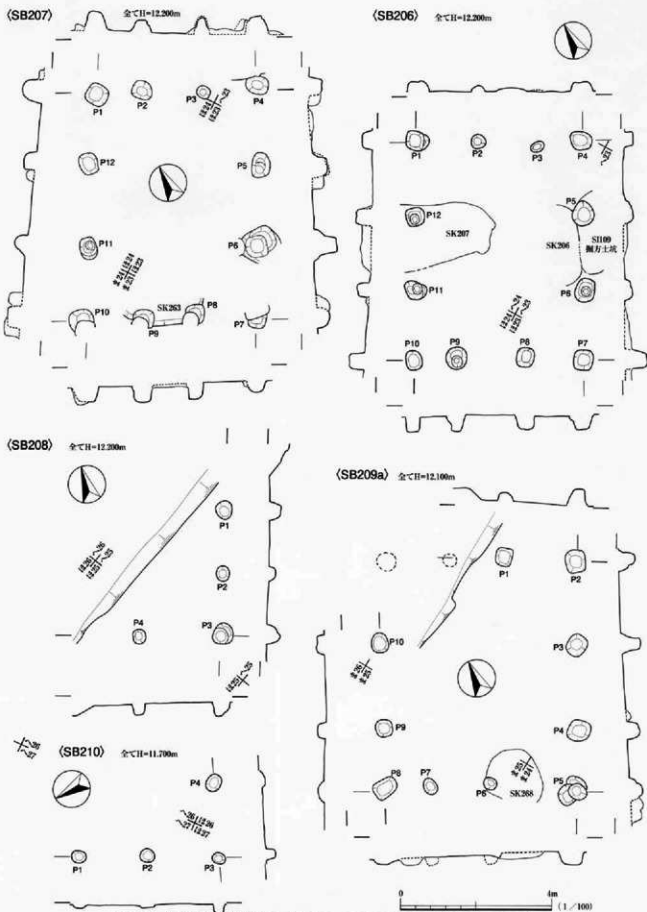
SB205と同様の位置で検出された建物。建物規模が、桁行5.8m梁行4.4m、3間×3間の側柱建物である。面積は25.52㎡、主軸はN28°-E。柱間寸法は、桁間180・200cm、梁間112～160cmを測り、桁間に規則性が見られる。柱穴プランは円形・方形を呈すものの、本来全てで方形であったのだろう。径は48cmを主体に径24～60cmを測り、深さは24～40cmである。深さに関しては、桁行は旧地形に添う掘り込みをもち、特に右桁行は隅柱が深めである。北梁行も隅柱深めを呈し、南梁行は同じ深さをもつ。P2・3が削平により貧弱なものとなっているが、この2本を除けば基本として非常にしっかりとした柱穴である。柱筋の通りは、桁行のP6が若干外側にずれているが良好であり、梁行に関してもP3が完全にずれているのだが、上面が削平され柱穴底面が検出されたことを踏まえれば、本来通りは良かったのではないかと予想する。これら柱は、建物廃絶時に抜き取られ、掘り土が残っている状態で埋め戻されている。なおP7の土層断面では、柱穴下底部分にしっかり締まる土を確認しており、設置時の調節土ではないだろうか。本建物は規格性が見られるもの、梁行の配置に関してはばらつきが強いものと言える。また、両桁行の外側に、小ピットが並んで検出されており、軒先支柱の可能性もたれよう。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具23点、時期はⅤ期前後に位置づけられる。

83. SB207

建物規模が、桁行5.8～6.2m梁行4.4m、面積26.4㎡、3間×3間の側柱建物である。SB205・206の南側に重複して位置し、F区はま・ま-23・24Grにあたる。P4が北側へ若干ずれており、P4を通そうとすると北梁行が桁行に直行しない形状となり、P4を通さないと建物プランは正長方形を呈すが、P4のみ1本分外側に飛び出ることとなる。建物主軸はN30°-E。柱間寸法は、桁間180～220cm、梁間132～160cm。柱穴プランは方形・不整形で、不整形のものは本来方形であったものと思われる。柱穴規模は、径48～62cm、深さは28～50cmで最も深いもので60cmを測り、深さにはばらつきが見られる。前述したようにP4を通して通さなくても、柱筋の通りは桁行・梁行とも良好である。方形掘方の配置は軸ラインに対して斜めに配置されるものが多く、方形を意識しただけの印象を持つ。建物廃絶時には、柱は抜き取られているが、抜き取り方向はランダムである。なお、覆土で柱地固め土と思われる層を6本で確認している。また、内部のP5とP12を結ぶラインで柱穴列が見られ、この建物に関連するものだろうか。出土遺物は、須恵器食膳具が25点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具



第44図 掘立柱建物遺構図16 (SB202・SB203・SB204・SB205)



第45図 掘立柱建物遺構図17 (SB206・SB207・SB208・SB209a・SB210)

71点、砥石等の石製品2点と瓦鉢1点であり、掘立柱建物出土遺物としては多い。時期はV期が主体で、II～IV期のものも出土する。

84. SB208

F地区中央、へ・は25Grに位置するもので、削平により殆どを失い4本の柱穴のみ検出されたもの。SB209ab・233と重複する。残存していたのは、2間分の並びと1間分で、2間分の並びの方を桁行として報告する。桁行の柱間寸法は164cmと168cm、梁行の残存柱間寸法は220cmである。柱穴は円形を呈し、径は32～56cm、深さは16～36cmを測る。廃絶時に柱は抜き取られており、抜き取り方向はランダムである。本遺跡の掘立柱建物の傾向から、この建物は3間×2間若しくは4間×2間になるのではないかと予想される。前者では推定面積17㎡、後者では推定面積29㎡となり、主軸はN-17°E。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器食器具2点、土師器煮炊具19点で、時期はIII～V期に位置づけられる。

85. SB209a

建物規模が、桁行6.12m梁行5.0m、3間×3間の榑柱建物で、削平により2本の柱穴を消失している。F区中央は・ま25Grに位置、SB209bからの榑小建て替え建物である。この他SB230・233・235・236、SK268・269とも重複する。建物面積は30.6㎡、主軸はN-25°Eをとる。柱間寸法は、桁間160・224cm、梁間120～216cmを測り、桁間は多少の規格性が伺える寸法となっている。柱穴プランは、円形・方形・長方形を呈するもの、本来は全て方形であったものと思われる。径は52cmを主体に小規模なもので32cm、大規模なもので64cmを測る。深さは12～48cm、似たような深さで掘り込んでいるが、隅柱は規模がやや大きい傾向である。また、削平の影響は特に左桁行に現われている。柱筋の通りは、右桁行は良いが、左桁行のP10や南梁行のP6・7がずれて通りは悪い。掘方の並びでは、P8が長方形で完全に斜めに配置され、この他P3・4の方形掘方も斜めに配置されるなど、掘方の配置に関して一貫性はない。なお、この建物も建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。また、建物の内部に軸に添って並ぶピット列、両桁行の外側にランダムだが並ぶ小ピット列があり、何か関連するのかもしれない。出土遺物は、SB209a・b合わせて、須恵器食器具34点、須恵器貯蔵具5点、土師器食器具5点、土師器煮炊具33点、カマドソデ石1点が出土、時期はIV古期が主体でV～VI期のものも出土する。

86. SB209b

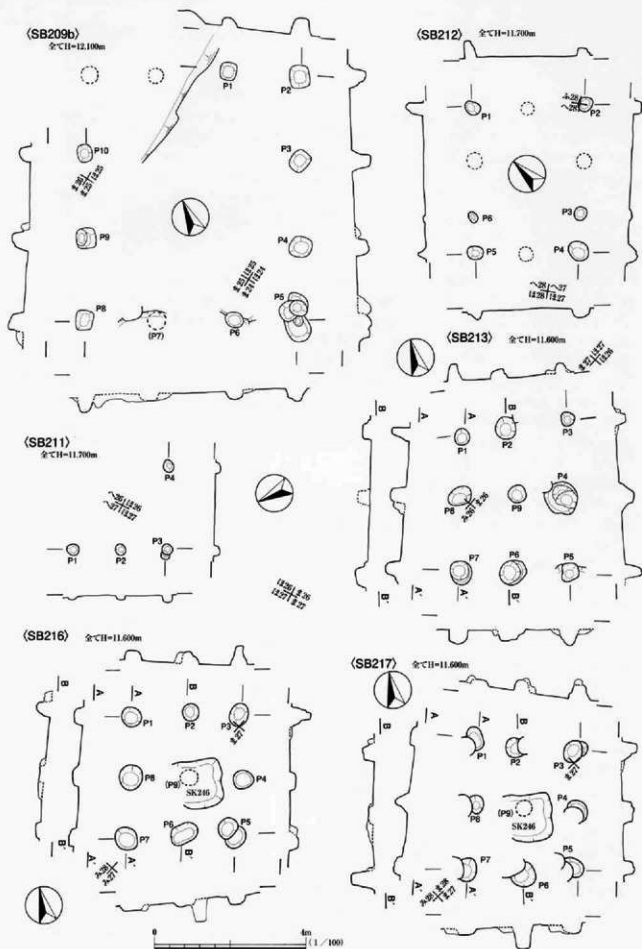
SB209aと同位置で、建て替え前の建物である。建物規模が、桁行6.4m、梁行5.6m、建物面積35.84㎡を測る3間×3間の榑柱建物である。建物主軸はSB209aと同様。柱間寸法は、桁間200～224cm、梁間残存168・196cmを測る。柱穴掘方プランは方形を呈し、柱穴規模は径44～56cm、深さ22～44cmである。南梁行は旧地形に添っており隅柱が大きく深いもので、おそらく北梁行も同じような状態になるのだろう。桁行は同じような深さや大きさをもち、中柱で深めのも認められる。柱穴の配置は、軸に対して斜めに配置されるものがあり、P1のように若干外側にずれているものも見られるが、柱筋の通りは概ね良いものと思われる。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されているのだが、抜き取り痕跡の下底部分で柱径を測ることができるものがあり、この径が20～22cmであった。なお、覆土から柱穴下底で地固め土層を1本のみ確認している。また、SB209aで述べた建物内外のピット列は、本建物との関連も窺える。

87. SB210

F地区中央から西寄り、へ26・27Gr削平区域で4本のみ検出されたもの。3本列の方を桁行として報告する。残存は桁行2間分と梁行1間分であり、3間×2間若しくは4間×2間あたりになろうかと思われる。前者であれば推定面積21.6㎡、後者であれば28.8㎡となる。なお、建物主軸はN-32°E。柱間寸法は桁間180cm、梁間200cmを測る。柱穴プランは円形で径32～46cm、深さはP3が24cmでこれ以外が6～8cmを測る。削平により小規模になっているが、恐らく四隅が深いタイプになるものと思われる。建物廃絶時には、柱は抜かれて埋め戻されている。出土遺物はなく、時期不詳である。

88. SB211

SB210と同位置で同様の残存状態である建物。こちらも3本列の方を桁行として報告する。柱間寸法が、桁間120cm、梁間200cmを測り、建物全体を復元してみると5間×2間あたりになるだろうか。すると推定面積は25㎡となる。また、柱間寸法が短いため多柱タイプの建物である可能性も小される。建物主軸はN-29°E。柱穴プランは円形を呈し、径28cm、深さ10～16cmを測る。削平により柱穴は小規模になっているが、配置、深さとも



第46図 掘立柱建物遺構図18 (SB209b・SB211・SB212・SB213・SB216・SB217)

一定である。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物はなく、時期不詳である。

89. SB212

SB210・211の北西に隣接して位置する建物である。C地区へ27・28Grの削平区域にあたり、柱穴6本のみが検出された。おそらく桁行3間×梁行2間の側柱建物になるものと予想する。この建物はSB196と検出のされ方や規模など、非常によく似ている。建物規模は、桁行3.8m、梁行2.8mを測り、建物面積は10.64㎡とかなり小型の規模で、柱間寸法は桁間の南側で92cmであった。建物主軸はN-47°-Eをとり、柱穴プランは不整形もみられるが円形主体で、柱穴規模は径28～56cm、深さ8～44cmを測る。P2が建物全体方形プランから丁度飛び出するように配置されているため、筋を通そうとするとひしゃげた形状となる。深さに全く一定は見られず、簡易的要素が強い印象である。但し、消失したと思われる中柱がもともとなかったとすれば、建物を途中で中止した建物である可能性もたれよう。なお、検出された柱は抜かれ埋め戻されたら覆土から判断でき、出土遺物はなく時期不詳である。

90. SB213

F地区中央、ま26・27Grに位置し、SB223内部に完全に収まる形で重複、SB222とも重複する。建物規模が桁行3.6～4.0m、梁行2.8mの2間×2間の総柱建物である。柱間寸法は、桁間が160・200cm、梁間128・152cmを測り、面積10.64㎡。主軸はN-15°-E。柱穴掘方プランは円形主体で、径は40～72cmを測るものの56～60cmが主体となるだろう。また、深さは26～40cmを測る。深さに関しては、旧地形に添うものと思われ、南側が深くなっている。柱筋の通りは良好だが、北梁行が斜めに配置されているため建物全体プランが台形状を呈し、中央P9もずれている。建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。柱穴の深さは様々であり、総柱らしい太くしっかりした柱穴も見られるが細いものもあり、統一性にも規格性にも欠ける。出土遺物は、須恵器食糧具2点、土師器煮炊具9点で、時期はN～V期と判断される。なお、本建物の東側に、主軸・柱穴規模・時期が一致するSB238が隣接、両者の位置関係も柱間1間分相当であり、連続する建物の可能性が極めて高いと考えている。そうなれば、2間×4間の総柱建物となる。

91. SB216

建物規模は、桁行3.2m梁行3.0m、面積9.6㎡を測る、2間×2間の総柱建物である。F地区中央、ま27・28Grに位置、SB217・219・220、SK246、SJ51と重複する。建物主軸はN-14°-E。柱間寸法は、桁間160cm、梁間140・160cmを測る。柱穴掘方プランは不整形もみられるが基本的に円形主体で、規模は径60cmを主体に48～66cm、深さは16～24cmでP3のみ深さ52cmを測る。深さについてはP3のみに深く細く異質であるが、他はほぼ一定の深さを保つ。柱筋の通りは概ね良好で、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物はなく時期不詳である。

92. SB217

SB216と同位置で検出されたもので、建物規模が、桁行3.2m梁行2.8m、面積8.96㎡を測る、2間×2間の総柱建物である。建物主軸はN-12°-E。柱間寸法は、桁間160cm、梁間は北梁間が120・160cmで南梁間140cmである。柱穴掘方プランは円形を呈し、径60cmを主体として44～64cmと幅をもち、深さは12～40cmでP6のみ60cmを測る。ただし、P6は柱穴掘削時に掘りすぎたと意識したようで、柱穴下底部分を18cmも埋め戻して深さを調整したと判断できる層を土層断面で確認できる。P6を除けば、旧地形にやや添いながら、ほぼ同じ深さを目指して掘削したようである。柱筋の通りは悪い。柱間隔は規則的になっているのに、配置そのものは外側や内側にずれているものが多い。なお、これら柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。SB216との関係だが、土層断面からSB216が新しいことを確認しており、SB217を建て替えてSB216を掘り立てた可能性もたれる。出土遺物はなく、時期は不詳である。

93. SB219

建物規模が、桁行4.4m梁行2.8m、面積12.32㎡を測る3間×2間の側柱建物で、削平により2本分の柱穴を消失する。F地区西側ま27・28Grに位置、SB216・217・220・221と重複する。建物主軸はN-32°-E。柱間寸法は、桁間120～176cm、梁間は南梁間120cm北梁間残存140cmを測る。柱穴プランは円形・不整形・楕円形を呈するのだが、主体は円形である。断面形状では、殆どの柱穴壁に段掘りスロープをもち、中には掘り鉢状で細い柱穴もみられる。柱穴規模は径が28～60cmで主体は44cm程になろうか。深さは12～44cmでP1のみ6cmを測る。深さもプラン

も多様であり、柱筋の通りも悪い簡易的な印象の建物である。なお、これらの柱は建物廃絶時に抜かれて埋め戻されている。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点のみで、時期不明である。

94. SB220

C地区は・ま28Gr、4本の柱穴のみ検出されたものである。2間並びの方を梁行として報告する。残存する梁間寸法は132cmと148cmを測り、桁間寸法は148cmを測る。柱穴プランは円形や楕円形を呈するもの、径は36～44cmを測って主体は40cmとなろうが、P4は52cmを測る。深さは36～52cm、P4のみ6cmである。小型で細長い柱穴であり、P4のみ異なる状態である。これらの柱は廃絶時に抜かれ埋め戻されている。建物主軸は、N-5°-Eをとり、重複する遺構はSB219・221で、出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具1点だが、時期を判断することは難しく、時期不明である。

95. SB221

SB220と同位置で検出されたもので、削平によりおそらく全体の半分を消失する建物である。建物規模は、桁行が残存で4.48m、推定3間7.2m程になろうかと考えている。梁行は3.4m、推定面積24.48㎡、推定3間×2間の側柱建物である。重複する遺構はSB216・217・219・220で、建物主軸はN-21°-W。柱間寸法は、桁間188・260cm、梁間160・180cmを測る。柱穴プランは円形主体でやや楕円形も呈し、径36～52cmを測るが44～48cmが主体となろう。深さは36～52cm、P4のみ10cmと非常に浅く異質だが、他は細長い柱穴である。柱穴の配置に関してはP5がやや外側に飛び出すように位置するが、柱筋の通りは概ね良好と思われる。なお、これら柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具1点のみ、時期は不明である。

96. SB222

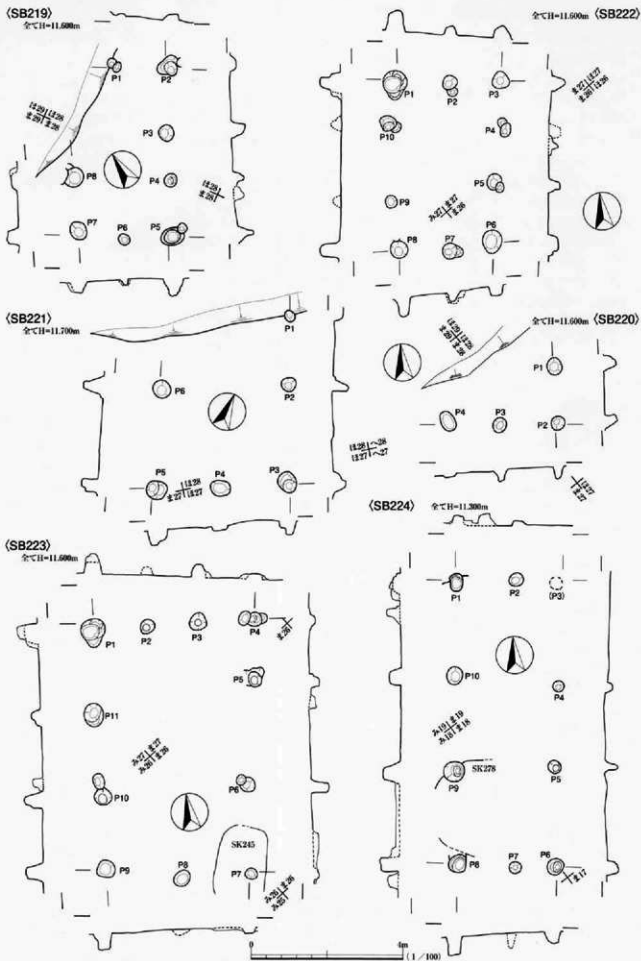
建物規模は、桁行4.4m、梁行2.48～2.8m、面積11.61㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。P6が西側にずれて位置するため南梁行が窄まる建物形状を呈す。左桁行と北桁行は直行する。建物主軸は、左桁行に合わせN-6°-E、ほぼ真北に方位をとる。柱間寸法は、桁間100～204cm、梁間108～152cm、寸法が一致する柱間はない状態である。柱穴は、円形・不整形プランを呈し、径は主体44cmで24～52cmを測り、深さは20～56cmの規模をもつ。基本的に四隅深めで、梁行が旧地形に添う掘り込みをもっていると言えようが、底面が平坦とならないものや、深いもの、良好なもの等様々で統一性には欠ける。柱筋の通りも北梁行のみ良好だが、他は通りが悪い。なお、これら柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。この建物は規格性が全く伺えないものとなっている。また、重複する遺構はSB213・223であり、SB223に添うように隣接して、主軸もほぼ同じである。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点で、時期はIV期前後に位置づけられる。

97. SB223

建物規模が、桁行6.4～6.8m梁行3.8～4.2m、面積26.4㎡を測る、3間×2(3)間の側柱建物である。南梁行のP7が南西側に大きくずれるため、南梁行が窄まり歪む建物プランとなる。F地区西側ま・み-26・27Grに位置、SB213・222・245と重複する。建物主軸はN-7°-E。柱間寸法は、桁間160～280cm、梁間140～200cmを測る。柱穴プランは円形を主体としながら不整形も呈し、径36～60cmで主体は40cm程になろうか。深さは16～44cmで、中柱が深いもの、良好なもの、隅柱だが貧弱なものもあり、様々である。柱筋の通りは、左桁行と北梁行が概ね良好だが、右桁行と南梁行の通りは悪い。また、建物廃絶時には、柱は抜き取られて、掘方土がそのまま残る状態であり柱径の復元が可能で、この径が20cm程であった。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具2点で、時期不明である。

98. SB224

建物規模は、桁行7.4m梁行2.6m、面積19.24㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。F地区西側ま・み-28・29Grに位置、SK248と重複する。建物主軸はN-4°-E、ほぼ真北に方位をとる。柱穴掘方プランは円形で、規模は径30～54cm、主体は40～48cmとなろう。深さは12～48cmを測る。深さや径に関しては、削平されたということもあろうが、様々な形状をもち、規格性や統一感がない。柱間寸法は、左桁間が240cmと均等に配置され、右桁間が212～280cm、梁間112～160cmを測る。柱筋の通りは、桁行は良いのだが、梁行の中柱が外側にずれて通りは悪いものとなっている。但し、右桁行の配置は、全く左桁行の均等配置とは異なっており、驚く程貧弱な配置となっている。なお、これらの柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されているが、柱の抜き取り痕跡から柱は、右回り方向に抜かれた可能性が高い。柱穴規模や柱間規模が中世の低床の総柱(床束)建物とよく



第47図 掘立柱建物遺構図19 (SB219・SB220・SB221・SB222・SB223・SB224)

似ている。遺物は出土せず、時期不詳である。

99. SB225

この建物は、左桁行7.0m、左桁行6.6m、北梁行4.6m、南梁行4.0mを測り、左桁行と南梁行のみ直行、南梁は窄まり北梁が聞き気味となって、全体が重む3間×2間の側柱建物である。F地区西側でG・H地区とのほぼ境である、ま・み-30・31に位置、SB245やSD27・28と重複する。建物面積は29.92㎡。柱間寸法は桁間180～284cm、梁間188～240cmを測る。柱穴掘方プランは円形主体で楕円形もみられ、柱穴規模は径23～52cmで主体は36～44cmとなろう。深さは22～48cmで、旧地形に添うところもあるが、細く深いものが多い。重む建物だが、柱筋の通りは意外と良好で、唯一右桁行のP4が完全に飛び出して配置する。この建物も廃絶時に柱が抜かれ埋め戻されているが、抜き取り方向はランダムであった。柱の設置に関しても同様である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点であり、時期不明である。建物主軸はN-15°E。

100. SB226

F地区西側の削平区域、へ・は31Grで検出された建物。削平により建物全体のおそらく半分以上を消失する。建物規模は、桁行残存4.0mで推定6.6m、梁行3.08mの、推定3間×2間の側柱建物である。勿論4間×2間である可能性もたれよう。建物主軸はN-5°E。建物面積は、推定20㎡程になろうか。柱間寸法は、桁間220cm、梁間152・160cmを測る。柱穴は円形を呈し、径は主体を40cmにもち、最小で28cmを測る。深さは12～20cmと上面が削平されているため浅いのだが、P3が若干外側に配置されるものの規則性のある配置をもち、深さもほぼ一定で、良好な柱穴の掘り込みをもつ建物である。柱筋の通りもよい。なお建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、土師器煮炊具2点のみであり、時期はⅣ～Ⅴ期とされるもの。

101. SB227

建物規模が、桁行6.4m梁行4.2m、面積26.88㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。F地区西側端付近、ふ・へ・は34-ふ・へ35Grに位置し、SB228、SI113、SK256ab・257～259と重複する。柱間寸法は、桁間200・220cm、梁間210cmで、規格性がみられる。柱穴プランは円形を主体に楕円形も呈し、径は44cm主体で36～58cm、深さは20～32cmを測って、しっかりとした掘り込みをもつ。北・南梁行は旧地形に添う深さであり、右桁行は隅柱深め、左桁行は逆に中柱深めとなっている。ほぼ全ての柱で、柱痕跡を確認しており、この径は18cmを主体に16～20cmであった。また、柱筋の通りは概ね良好で、本建物の配置は規格のといえよう。なお、右桁行それぞれの柱に添柱と思われる小ピットが認められ、南梁行にも平面図には現われていないが断面にて添柱と思われるものが確認できる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具3点で、時期はⅢ期頃のものと思われる。建物主軸はN-20°E。

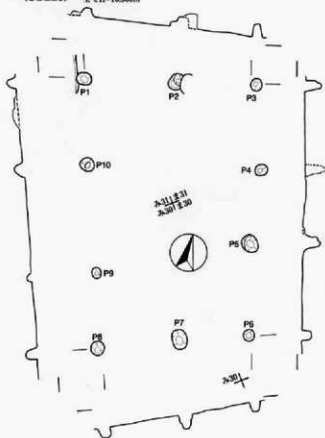
102. SB228

建物規模が、桁行7.0m梁行5.08m、面積35.56㎡を測る、4間×2?間の側柱建物である。この建物は右桁行が全体に南へ80cm下がっており、このため建物プランがきっちりとした菱形となっている建物である。よって、桁行と梁行が直行しない。F地区西側のSB227と重複して同じ位置で検出、ふ・へ-33・34Grにあたる。柱穴プランは円形・楕円形を呈し、径44cmを主体に34～60cm、深さは16～28cmが主体でP1が最も深く40cmを測る。深さに規則性はみられず、簡易的な印象である。柱筋の通りは悪い。P6～7間の3本分の柱と、P1～8間の1本分の柱が検出されておらず、痕跡すら残存していないので、或いはこの建物は建設途中で中止された可能性もたれる。なお、この建物は柱を抜き取っているが、抜き取り方向はランダムであった。抜き取り痕跡から柱径の復元が可能で、径は20cm程である。重複遺構はSB227とSI113、SK268・269・278は建物内に収まるように重複している。なお、出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具1点で、時期はⅡ期～ⅣIに位置づけられる。建物主軸はN-22°E。

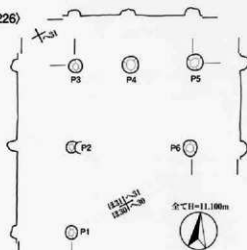
103. SB229

SB227西側に隣接するように位置する建物。F地区西側端、へ・は-35・36Grにあたる。削平によりおそらく半分以上を消失している。建物規模は、桁行残存5.2mで推定7.6m、梁行3.6m、推定3間×2間、推定面積27㎡を測る側柱建物である。建物主軸はN-19°E。柱間寸法は、桁間132～240cm、梁間160・200cmを測る。柱穴は円形プランが主体で、径36～40cmを主体に32～56cmを測り、深さは10～24cmを主体にP5のみ最も深く44cmである。深さに一貫性はなく無計画な印象のものである。柱筋の通りは概ね良い。柱は建物廃絶時に抜き

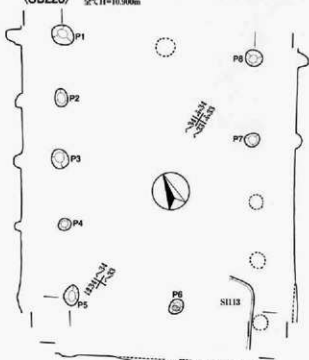
(SB225) 全てH=10.900m



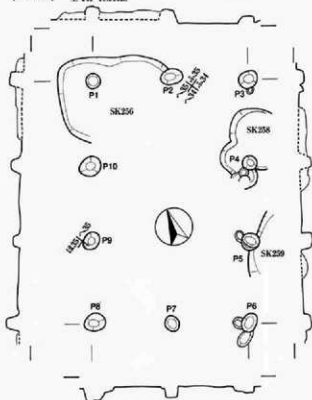
(SB226) 全てH=11.100m



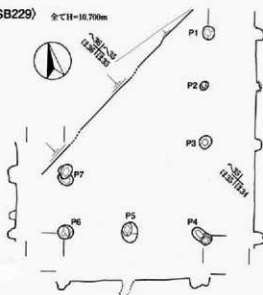
(SB228) 全てH=10.900m



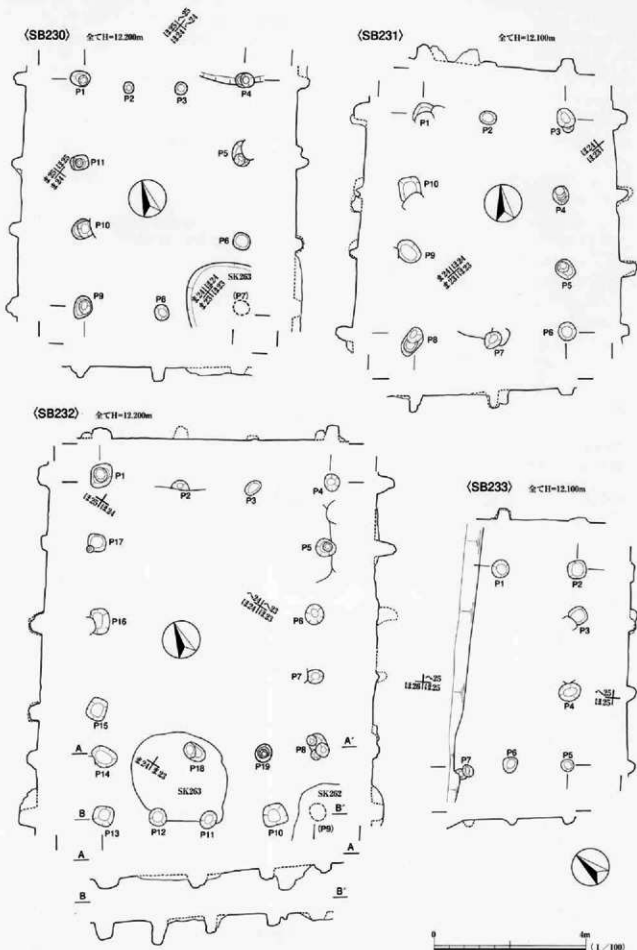
(SB227) 全てH=10.900m



(SB229) 全てH=10.700m



第48図 掘立柱建物遺構図20 (SB225・SB226・SB227・SB228・SB229)



第49図 掘立柱建物遺構図21 (SB230・SB231・SB232・SB233)

取られ埋め戻されているが、抜き取り方向はランダムである。簡易的な印象の建物であり、重複する遺構はSI94、SB241である。出土遺物は、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具4点、土製支脚1点が出土し、時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられる。

104. SB230

建物規模が、桁行6.0m梁行4.2m、面積25.2㎡を測る、3間×2(3)間の側柱建物である。F地区東側の遺構密集区域である、は24・25-ま24Grに位置、SB205・206・209ab・231・232・234・235、SK263と重複する。建物主軸はN-18°-E。柱間寸法は、桁間172～228cm、梁間116～220cmを測り、規則性が見られるのは左桁行のみで、他は柱間が正確に一致するところはない。柱穴プランは円形・方形・不整形・楕円形を呈するものの円形・方形を主体にするものと思われ、径は44～48cmを主体に24～66cmを測り、深さは20～36cmを測る。桁行は旧地形に添った掘り込みをもち、北梁行は四隅深めタイプ、南梁行は同じ深さをもつもののP7のみ浅い。柱筋の通りは、桁行は良好だが梁行は悪い。また、廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。本建物はB類と類型づけられるものであり、出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具11点であり、時期はⅣ2期とⅤ2期頃の2時期に相当するものである。

105. SB231

建物規模は、桁行5.8m梁行4.0mで面積23.2㎡、3間×2間の側柱建物である。SB230と同様の建物密集区に位置する。主軸はN-7°-E。柱間寸法は、左桁間160～220cm、右桁間180～220cm、北梁間160・200cm、南梁間188・212cmで、同じ寸法の柱間が多い。柱穴プランは円形・方形が主体で、径40～80cmを測るものの主体は44～48cmにもち、深さは20～44cmでP8のみ8cmを測る。深さは、左桁行と北梁行が隅柱深めで、右桁行と南梁行は中柱の方が深い。全体に深さは様々である。柱穴配置はP1が東側に完全にずれている。このP1を通そうとするとP9・10が全く通らなくなり、P1を通さなければP8・9・10の柱筋は通ることとなる。P1を通すとすれば、北梁行長は3.6mとなり、北桁行が穿まる形状の建物全体が台形状プランとなる。これ以外の柱筋の通りも良好ではなく、P4が内側に、P2・7が若干内側にずれている。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されているが、掘方裏込め土がかなり残存する状態である。また、この建物の桁行軸・梁行軸に添って多くのビット列が認められるが、この建物の軒先支柱の可能性も窺えようか。但しこのような重んだ建物に軒先が取り付くのか疑問ももつ。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具9点、団鉢1点が出土し、時期はⅤ期前後にあたるものである。

106. SB232

SB230・231と同様の場所に位置するもので、F地区東側へ・は-23・24Grにあたる。この建物は、梁行方向に廂をもつと考えている。建物規模は、桁行が身舎部分7.0～7.2m廂1.8m、梁行5.6～6.2m、4間×3間の身舎に1間×4間分の廂が南梁行側に付設する。面積は、身舎で42.43㎡、廂10.08㎡の全体面積52.51㎡、本遺跡の中では大型建物となる。ただし、P4が東外側に、P1が北側に1本分飛び出るようにずれて配置されているため、北梁行が歪となり桁行と直行しない形をとる。建物主軸は、N-28°-E。柱間寸法は、身舎の左桁間100・160・180・200・240cmで、P14・15間が100cmと特異な短かさとなっている。右桁間は160・180cmである。身舎梁間は132～240cm、廂梁間が100～172cmを測る。柱間は規則正しいとは言えない。柱穴プランは、円形・方形・楕円形を呈しているが、本来は全て方形であった可能性もたれよう。径は50cm程が主体で40～68cm、深さは14～60cmを測り様々である。右桁行の中柱では他に比べP6・7のように貧弱なものがある。柱筋の通りは、良好とは言えない。北梁行のP2・3が完全に内側に、右桁行ではP6が1本分内側にずれ、南梁行のP9・P19は外側に、P11も若干外側に、入側と左桁行の交差するP14も若干内側にずれる。掘方の配置に関しても、方形であるのに建物軸に対して平行ではなく斜めに配置されるものがある。建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されているが、抜き取り方向はランダムである。この建物は、計画性・規則性に乏しいものと思われるが、柱穴の規模にばらつきがあるとはいえ、大多数がしっかりとした掘り込みをもち、建物全体も大規模で簡易建物とすることはできない。大規模建物の割に建て方が貧弱な印象である。なお、桁行の外側には、小ビット列が並んでおり、この建物に関連するものかもしれない。出土遺物は、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具116点で、この他瓦片破片が153点も出土する。時期はⅤ～Ⅵ期に位置づけられるものである。

107. SB233

F地区中央の遺構密集区で、やや北西にずれて位置するものであり、へ24・25Grにあたる。この区域は削平区域との境で、上面削平を受けつつ建物全体の約半分を消失する。建物規模は、桁行5.2m、梁行残存2.6mで推定3.8～4.5mであり、桁行3間で、梁行はおそらく北梁行2間・南梁行3間となるのだろう。よって推定面積は19.8～23.4㎡になるものと思われる。建物主軸はN-53°-E。柱間寸法は、桁行P2・3間が120cmで他が200cm、梁行は北梁行192cm、南梁行92・152cmを測る。配置はP7のみずれているものの、他は良好で、柱筋の通りもP7を除いてよいものと思われる。柱穴プランは円形・方形・不整形と様々であり、柱穴規模は径48cmを主体に32～56cm、深さは8～28cmを測る。なお、重複する遺構はSB208・209abである。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具5点、その他円筒形土師質土製品が1点出土、時期はIV 2新期に位置づけられる。

108. SB234

F地区中央遺構密集区、へ23・24Grに位置する。梁行の中柱が両方とも外側にずれて設置されていることから、棟持柱としては深くはなないもの、近接棟持柱構造か、半独立棟持柱構造になる側柱建物と思われる。この建物は、SB131(Ⅱ報告済み)に似た構造のものである。建物規模は、桁行5.2m梁行3.6m、面積18.72㎡を測る3間×2間である。主軸はN-70°-W、建物が横配置をとればN-20°-Eとなる。柱間寸法は、桁間152～184cm、梁間172・188cm。柱穴プランは円形・方形・不整形と様々で、隣柱が方形である。径は50cmを主体に32～68cm、深さは20～44cmで、四隅柱の規模が大きく、やや旧地形に添った深さをもつ。四隅柱の深さは32～44cm、中柱は20～24cmである。柱筋は左桁P7がずれて良くないが、右桁は良好である。出土遺物は、須恵器食膳具7点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具36点、この他竈壁1点、匝鉢16点が出土する。時期はV期前後とⅡ3期の2時期に位置づけられる。

109. SB235

SB234の北西側に隣接するように位置するもので、ま24・25-の25Grにあたる。建物規模は、桁行5.8～5.88m梁行3.4～3.8m、面積21.02㎡、3間×2間の側柱建物である。P6が1本分外側にずれて配置されるために、建物全体で東梁行が広がる形となる。建物主軸は、N-72°-W、建物が横配置をとればN-18°-Eとなる。柱穴プランは円形・方形を主体に楕円形と様々で、径は52cmを主体に最大76cm、最小32cmを測る。深さは12～24cmで旧地形に添った掘り込みをもつ。柱筋の通りは悪く、配置にも規則性がみられない。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器食膳具7点、土師器煮炊具21点で、時期はV-IV期に位置づけられる。なお、隣接するSB234は時期・方位がほぼ同じとなり、並列していた可能性があらう。

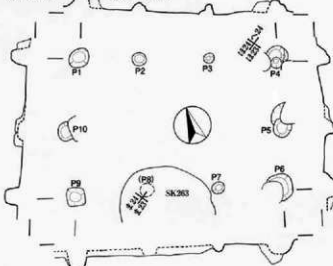
110. SB236

建物規模が、桁行5.4m梁行4.2m、面積22.68㎡を測る3間×2(3)間の側柱建物である。削平により建物南西側1/3を消失する。建物主軸はN-21°-E。F地区中央ま・み25Grに位置、SB209・235・237、SK245・247・280・281・283・284・287a、Sj59と重複する。柱間寸法は、桁間160・180・200cm、南梁間100・160cm、北梁間210cmである。柱穴プランは方形・円形を呈すが、本来全て方形であった可能性がある。径は60cmを主体に36～64cm、深さは22～36cmを主体に北梁行は8～16cmを測る。深さについては、右桁行が旧地形に添った掘り込みをもち、梁行はほぼ同じ深さを呈す。柱筋の通りは良く、配置ではP3・4・5の方形側方外側ラインが揃っており、これらを基準に掘り込まれた可能性が考えられよう。なお、これら柱は廃絶時に抜かれ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具6点、土師器煮炊具3点で、時期はⅢ期頃のもの判断される。

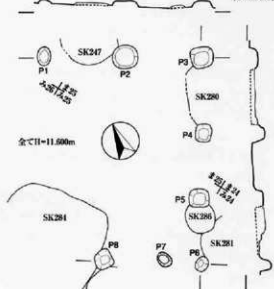
111. SB237

建物規模が、桁行5.0m梁行3.8m、面積19.76㎡を測る、3間×3間の側柱建物である。SB236と同位置に重複して位置する。削平と重複土坑の切り込みにより、南西側で3本分の柱を消失している。柱間寸法は、桁間152・168・180cm、梁間112～144cmを測る。相対する位置にきっちり配置されているものの、柱間寸法に規則性はみられない。建物主軸はN-16°-E。柱穴プランは、方形・長方形・円形を呈すものの、本来全て方形であった可能性もたれる。径は32～48cm、深さは20～32cmを測り、P3・9が浅いものの、基本として旧地形に添うものである。配置では、P3・8・9にずれがみられるが、削平により小規模なものになった可能性をもち、柱筋の通りは本来良かったのではないかとと思われる。ちなみに右桁行の通りは良好である。なお、建物廃絶時には柱

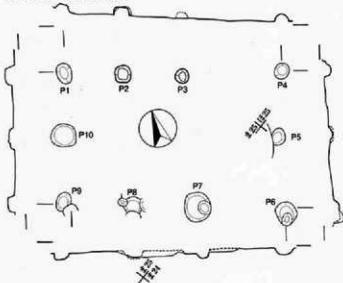
(SB234) 全てH=12.000m



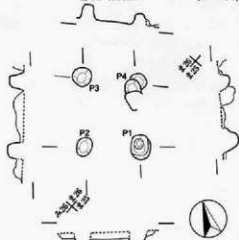
(SB236)



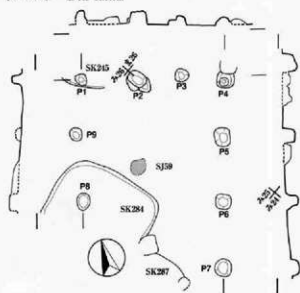
(SB235) 全てH=11.700m



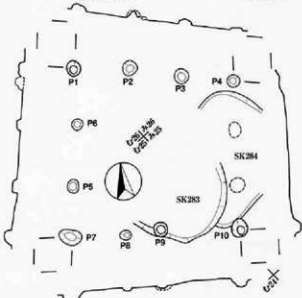
全てH=11.700m (SB238)



(SB237) 全てH=11.600m



全てH=11.300m (SB239)



0 4m (1/100)

第50図 掘立柱建物遺構図22 (SB234・SB235・SB236・SB237・SB238・SB239)

は抜かれ埋め戻されている。なお、出土遺物は、須恵器食膳具15点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具12点であり、V期前後とⅢ期前後の2時期のものが出土している。

112. SB238

SB213の東側に隣接し、1間×1間の4本分の柱穴が検出されたものである。柱間規模は、桁行1.48・1.8m梁行1.4m、面積は2.29㎡。主軸はSB213と同じN-15°-Eをとる。掘方プランは円形・方形を呈し、径20～74cmで主体を50cmにもち、深さは28～40cmを測る。深さに関しては、旧地形に添うものとなっており、南側が深くなっている。柱筋は通るのだが、P2のためにひしゃげた全体形状となる。とはいうものの、しっかりした良好な柱穴であり、堅穴建物の主柱の可能性もあるだろうが、柱間寸法が堅穴建物にしては狭すぎるということ、カマド検出のなかったことで、現地調査では掘立柱建物として判断された。SB213で前述したようにSB213と連結して4間×2間の総柱建物となる可能性が高いと思われるものの、現地で判断されていないことから、今回別々に報告している。なお、これらの柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。また、出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点であり、時期はV期頃と考えられる。

113. SB239

建物規模が、桁行4.0～4.52m梁行4.2～4.4m、3間×3間の総柱建物で、梁行が斜めとなっているため、建物全体が台形状を呈するもの。左右桁行と南梁行は直行するものの、柱筋の通りは全てにおいて悪いと言え、P2は外側に、P6は1本分内側に、P9は若干内側にずれている。P7は楕円形プランの柱穴が斜めに配置されるが、筋は何と通っている。柱間寸法は、桁行140・160cm、梁行92～200cmを測る。柱穴は円形主体に楕円形プランもち、径は40cm程を主体に30～56cm、深さは四隅柱が深めで20cm、中柱が浅めで12cm主体を測る。基本として旧地形に添った掘り込みをもち、梁行では隅柱が深く中柱が浅めとなっている。これら柱は、建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。この建物は規格性が全く見られないものであり、簡易的な要素が強い建物と言えるだろう。F地区西側でH地区との境、み・む-25・26に位置するものであり、SK283～285と重複する。なお、建物面積は18.31㎡、主軸はN-8°-E。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具1点のみであるが、時期はⅣ期とⅥ期頃の2時期が認められる。

114. SB240

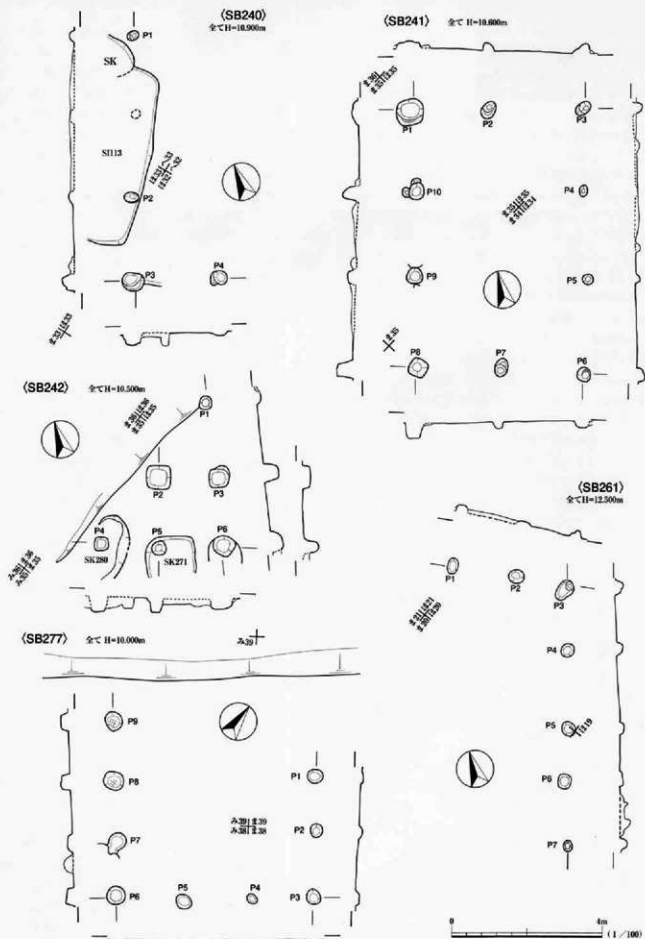
F地区西側の削平区域で検出され、建物の半分以上を消失するものである。へ・ほ-33・34Grに位置し、SI113・SK253・SB228と重複する。建物規模は、桁行6.4m梁行残存2.32mで推定4.6m、推定面積29.44㎡を測る。3間×推定2間である。柱間寸法は、桁間220cm、梁間232cmを測り、中世建物の柱間のように長い。建物主軸はN-25°-E。柱穴プランは円形や方形を呈し、径32～56cmを測るが40～50cmに主体をもつ。深さは8～10cmを主体としてP3が32cmであり、四隅が深めのタイプになろうかと思われる。柱筋跡を3本分の柱で確認しており、この径が14～16cmであった。なお、柱筋の通りは概ね良い。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみで、時期は不明である。

115. SB241

建物規模が、桁行6.8～7.0m梁行4.4m、面積30.36㎡の、3間×2間の総柱建物である。右桁P6が南側に1本飛び出るように位置するため、この柱を通そうとすると南梁行が桁行と直行せず、やや台形状の平面プランとなってしまう。柱間寸法は、右桁行が220・240cm、左桁行が220～248cm、南梁行が220cm、北梁行が192・248cmと、寸法が同じ柱間が何方所もある。主軸はN-13°-E。F地区西側端はま・ま-34・35Grに位置、SB229・242、SK271ab・272と重複する。柱穴プランは円形・方形・楕円形で隅柱が方形であった可能性が有ろう。径は40～52cmを主体として最小で28cm、P1のみ72cmを測る。深さは10～40cm、基本として旧地形に添う四隅深めタイプだが、P10のように中柱で深いものがある。P6を除けば柱筋の通りは良い。なお、廃絶時には柱は抜かれ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点で、時期はⅡ3～Ⅲ期頃とされる。

116. SB242

SB241北西側に一部重複して位置する建物で、削平により全体の1/3を消失するものである。F地区は35～ま35・36Grにあたる。建物規模は、桁行3.8m梁行2.72～3.2mの2間×2間、総柱建物だが、P1が軸に対して西側に大きくずれて配置されており、北梁行が狭まった台形プランを呈している。但しP1は削平を受けていること



第51図 掘立柱建物遺構図23 (SB240・SB241・SB242・SB261・SB277)

から、柱穴の下端部分が残存した可能性があり、本来の掘方は他と同じような規模であった可能性をもつ。建物面積は11.24㎡を測り、主軸はN20°Eをとる。柱間寸法は、桁間180・200cm、梁間148・168cmを測り、柱穴プランは方形・円形を呈すが、円形プランのものは、本来方形であった可能性が高いだろう。柱穴規模は、径52～64cm、小さいものは削平の影響があると見られ32cm、深さは18～40cmでP1は10cmである。削平されているとはいえ、P1の貧弱さや配置の悪さが気になることである。柱筋の通りは良く、廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具10点であり、時期はⅡ2～Ⅲ期とされる。

117. SB245

F地区西側でG地区にまたがって検出されたもので、ま・み・む-32・33、ま・み31・34、の32・33Grに位置する。中世代に出現する柱穴規模が小さく柱間規模が大きいといった特徴をもつ、低床の竪柱建物である。建物規模は、桁行128m梁行10.2mの、5間×4間で、面積は130.56㎡を測る大規模建物である。建物主軸は、N5°Eをとる。柱間寸法は、桁間208～288cm、梁間180～292cmを測る。柱穴プランは、円形を主体に不整形も呈し、径は40cm主体で28～54cm、深さは40cm程が主体で最小径20cm最深52cmを測る。旧地形にやや添った掘り込みであり、深さに統一はなく様々な深さをもつ、小規模で細長い柱穴である。個柱列のみ桁行と梁行が直直し、柱穴は赤瓦目に配置されるが柱穴間の正確さに欠ける配置と言え、個柱においてもP28のよう柱筋の通らないものがある。また、P1も柱2本分ほど東側にずれて配置されており異質な印象を受ける。柱は、廃絶時に抜き取られているが、抜き取り痕跡から柱径が確認できるものがあり、柱は径13～14cmが主体と思われる。なお、出土遺物は、須恵器食膳具16点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具13点、中世Ⅰ期の土師器食膳具2点、灰陶器1点が出土する。時期は、Ⅳ～Ⅴ期と中世に位置づけられ、出土量は古代遺物が圧倒的に多いものの、建物構造では中世のものだと判断せざるを得ない。

118. SB261

F地区東側は、ま20-ま19Gr、削平区域で建物の一部が検出された竪柱建物である。建物規模は、桁行6.8mで4間、北梁行残存3.08mで2間だが3間である可能性も十分あり、3間と推測すれば推定梁行は南梁行で4.6mになる。よって面積は、4間×2間なら21㎡程、4間×3間なら33㎡程となろう。残存梁行が桁行と直直しでない建物で、台形状のひしゃげた建物プランになると思われる。建物主軸は桁行軸からN18°Eである。柱間寸法は、桁間136～208cm、梁間136～180cm、柱穴プランは円形・方形・不整形・楕円形を呈すが、円形主体で、本来全て方形であった可能性もたれるだろう。柱穴規模は、径32～36cmが主体でP3が5cmを測り、深さは8～20cmで基本的に旧地形に添った掘り込みをもち、桁行は隅柱が深い。柱筋の通りは、概ね良いものと思われる。なお、この建物に重複する遺構は、SB204・262、SK232、SI108である。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点のみ、時期は不明である。

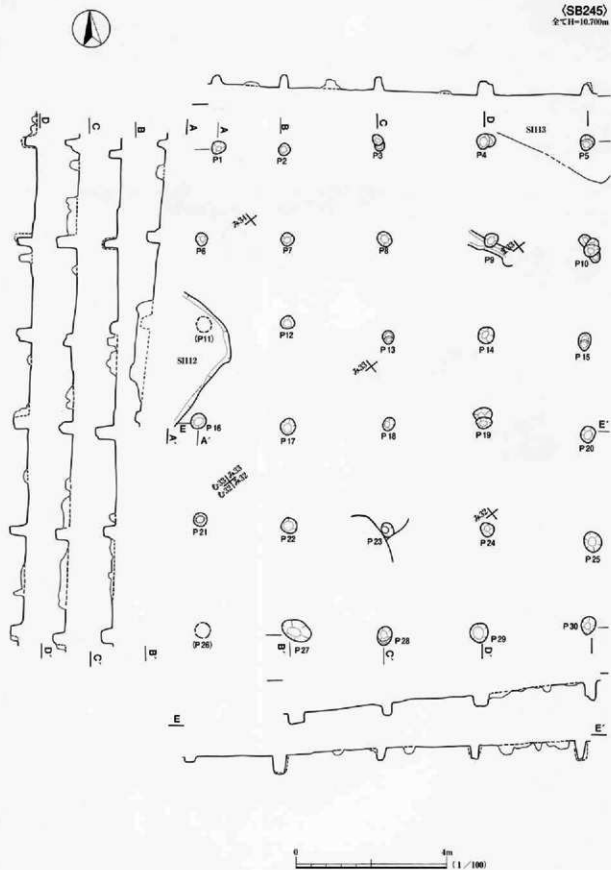
119. SB262

SB261南側に隣接して位置するもので、削平の影響により建物の1/2を消失している。建物規模は、桁行5.72m、梁行残存2.0mで推定4.0m。3間×おそらく2間になるものと思われ、よって推定面積は23㎡となる。建物主軸はN31°Eである。柱間寸法は、桁間170～220cm、梁間残存200cm、柱穴プランは円形・不整形・楕円形がみられるが、円形主体と言ってよいだろう。柱穴規模は、径40～50cm、深さは10～24cmで旧地形に添い、柱筋の通りは良い。なお、出土遺物は、土師器煮炊具1点のみ、時期不明である。

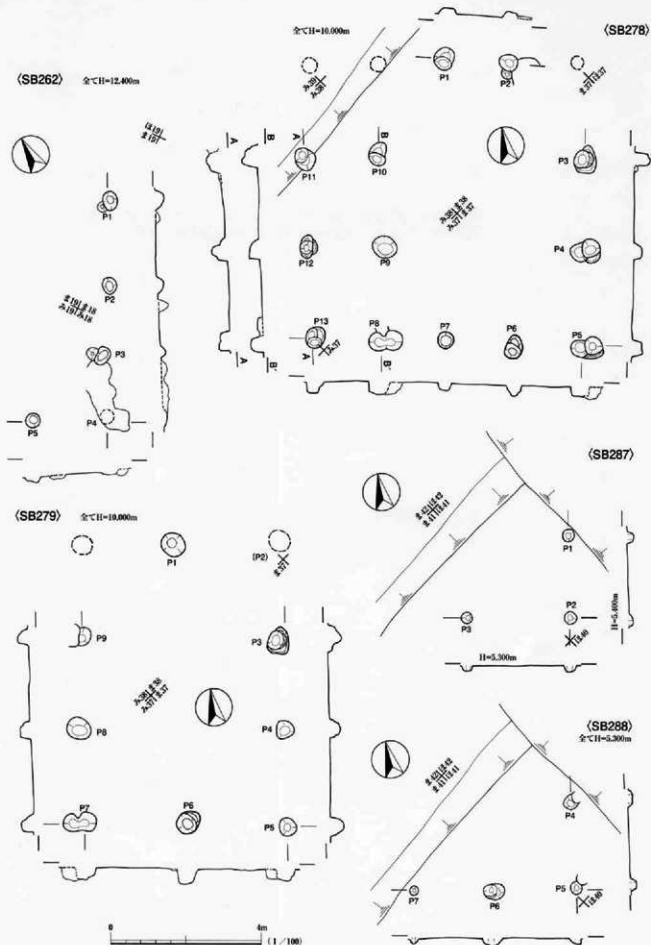
120. SB277

F地区の西側端のG地区にまたがる削平の著しい区域で検出された竪柱建物である。ま・み-37・38Grにあたり、北側の約1/3を完全に削平され消失、SB278・279と重複する。建物規模は、桁行が残存4.72mで3間分、おそらく4間になるのではないかと予想しており、推定桁行6.4mと思われる。梁行は5.2m、よって推定4間×3間で、推定面積33㎡となろうか。建物主軸はN36°E。柱間寸法は、桁間140～172cm、梁間160・180cmを測る。柱穴掘方プランは円形で、柱穴規模は径50cmを主体として28～52cmを測り、深さは6～24cmを測るがP1は4cmしかなく、削平の影響を色濃く受ける値となっている。柱圧痕を2本のみ検出しており、この径が16cm程であった。柱筋の通りは、左桁行は良好である。右桁行や梁行では、P1・2・5が若干外側にずれるものの、通らないということはない。なお、建物廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。出土遺物は、土師器煮

(SB245)
全長10.700m



第52図 掘立柱建物遺構図24 (SB245)



第 53 図 掘立柱建物遺構図 25 (SB262・SB278・SB279・SB287・SB288)

炊具1点のみであり、時期不明である。

121. SB278

SB277と同様の位置で検出された、片廂建物である。G地区ま・みー37・38Grにあたる。削平により3本の柱を消失していると思われる。建物規模は、身舎桁行7.4m梁行5.2mの3間×3間、身舎西側に梁行1.88mを測る廂が付設する。建物面積は、身舎38.48㎡廂13.91㎡で合計52.39㎡となり、本遺跡では大型の部類に属する。建物主軸はN-12°Eをとり、柱間寸法は、桁間240・260cm、梁間160～180cmを測り、柱穴プランは不整形もみられるが円形主体で、柱穴規模は径50cm前後を主体に48～66cmを測る。深さは16～40cmを測り、基本として同じような深さをもつのだが、きっちりと同一ということはなく、浅めのものもみられる。柱筋の通りは概ね良いものと思われるが、柱穴の配置はP5やP13が若干外側にずれている。なお、これらの柱は建物廃絶時に抜かれ埋め戻されている。なお、本建物はSB279と重複、土層断面からSB279が古いことが確認されており、SB279の建て替え建物である可能性が高い。出土遺物は、須恵器食器具3点、土師器煮炊具21点で、これらの時期はV期頃と思われる。

122. SB279

SB278と同位置で、建物規模が、桁行7.4m梁行5.2m、面積38.48㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。削平により2本の柱を消失している。建物主軸はN-11°Eで、建て替え後のSB278と同じ方位をとる。柱間寸法は、桁間240cm、梁間260cmを測る。柱穴掘方プランは不整形もみられるが円形主体で、柱穴規模は、径56cmを主体に48～68cm、深さは26～40cmであるものの、ほぼ一定の深さとなっている。柱圧痕をP3のみ検出しているが10cm程度であり、柱としては細すぎるため、一部分が検出されたのだろう。柱筋の通りは概ねよいものと思われるが、P4が若干ずれて配置されている。これら柱は、すべてが半時計回り方向から設置されたと思われ、設置方法に規則性が伺える。廃絶時には、柱は抜き取られ埋め戻されているが、抜き取り方向は確認できなかった。深さ・柱間寸法に規格性が認められ、設置時には監督性も伺える建物である。P4の配置のみ気になるところである。なお、出土遺物は、須恵器食器具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器食器具1点、土師器煮炊具33点で、時期はIV～V期に位置づけられるものである。

123. SB287

F地区西側の末端に近い、G地区の削平区域から検出された建物であり、建物の殆どが破壊され、3本のみ柱穴列が検出されたものである。南北軸に近い方を桁行として報告する。検出された桁行の並びは1間分で残存2.6m、梁行も1間分で残存2.6mである。主軸はN-13°E。柱穴プランは円形を呈し、径32cm、深さ10～16cmで一定の深さをもっていたものと思われる。検出された柱穴全てに柱圧痕が認められ、この径が12～16cmであった。また、廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。なお、この建物は、ほ・ま41Grから検出され、SB288と重複する。出土遺物は、須恵器食器具1点のみで、時期は不明である。

124. SB288

SB287と同じ区域で、4本の柱穴のみ検出された建物である。3本列の方を梁行として報告する。検出された桁行の並びは1間分で残存2.2m、梁行は2間分で残存4.2mである。復元を試みると、3間×2間と推定すれば面積は約28㎡となる。建物主軸はN-13°E。柱間寸法は桁行で220cm、梁行で200・220cmである。柱穴プランは円形を呈し、柱穴規模が径22～54cmで、深さ12～24cmを測る。柱穴全ての底面全体に柱圧痕を検出しているが、柱穴自体の規模が小さいものもあり、様々な規模の柱が使用されたのであろうか。なお、柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。また、重複するSB287との関連だが、SB288の方が新しいことを土層から確認しており、本建物はSB287から建て替えられた可能性が高いと言えよう。なお、出土遺物は、土師器食器具2点、土師器煮炊具5点で、時期はIV 2期頃と判断されるものである。

第2節 土坑

今回報告する地区から検出された土坑は、前回報告分と比較して数が約3倍に及ぶ。土坑番号は他遺構と同様にA地区からの連番で、今回はSK106～287が主となるが、この内前回までに報告した分(SK109・112・127・137・142・152・154・183・197～205)、次回報告対象分(SK227・228・254・255・279)が含まれている。また、調査時に土坑重複を確認したものは、区別するために同じ土坑番号でもa・b・cやI・II等を番号端に付して表記している。これに対し、当初土坑として判断したものの遺構整理時の段階で竈穴建物の床下掘方土坑や竈穴建物のカマド関連と判明したものの(SK107・216・219)や、道路状遺構と判断した土坑(SK173)については遺構番号を変更したため欠番としている。また、現地調査段階から欠番となっているものもある(SK118・170・196・277)。その他、SK146は土師器焼成坑、SK111・274は製炭土坑であり、本節では報告せず、第3節手工業生産関連遺構で報告する。以上を踏まえると、今回報告対象の土坑数は総数168基となるが、小規模で遺物出土が少ないもの、或いは遺物が殆ど出土していないもの、特徴の薄いものは報告を除外することとする。

今回報告する土坑には、新たに墓塚の特徴をもつものが検出されている。また、小型竈穴状で方形プランの掘り込みをもち、比較的遺物が少ないという、これまでに本遺跡で検出されていなかった特徴の土坑が検出されている。小型竈穴状の土坑は、掘立柱建物に付設する土間的な事例があり、同様の機能をもつと思われるもの、本遺跡で掘立柱建物に伴うという確実な判断は、現地調査においてもされていない。

土坑の分類は、昨年度までの報告に即している。A類土坑を通常の土坑、B類土坑を遺物の比較的多い大型土坑で、当初は粘土掘削が目的とされ、その後土器廃棄として利用されたとするもの。但し今回粘土掘削が目的であったか不明なものも多く、大型で遺物出土の多い土坑をB類土坑に含めた。C類土坑は柱穴状の小型土坑。D類土坑は竈穴建物の掘方土坑状を呈す土坑。E類は被熱焼結した小型炉の床下土坑位置づけ。F類土坑は、焼成土坑で、土師器焼成坑でないが何かを焼いたとされる土坑である。そして今回新たに、墓塚または墓塚の可能性のある土坑をG類土坑とし、方形プランで小型竈穴状のものをH類土坑として付け加える。これら土坑類型の内訳は、A類土坑が66基、B類土坑は32基、C類土坑26基、D類土坑4基、E類土坑1基、F類土坑3基、G類土坑12基、H類土坑21基、A類とH類の要素が混合したもの2基、B類とH類が混合したもの2基である。また、出土遺物については、出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。では、詳細を述べてゆく。

1. SK106

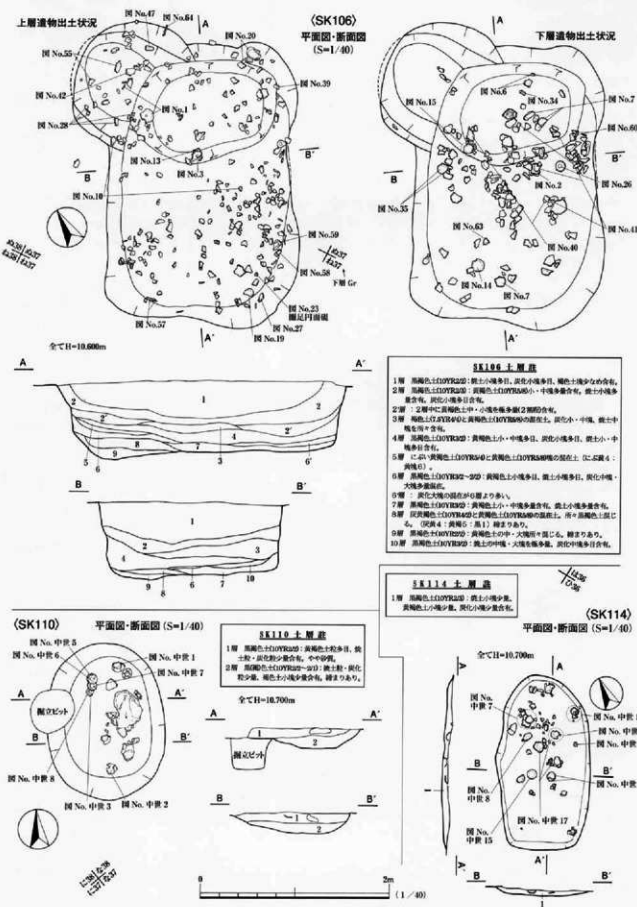
C地区ぬ37Grに位置し、規模は、長径300cm×短径200cmを測る大型土坑である。隅丸方形プランの北隅に半円状の突出部が付いた形状をしている。深さは72～80cmを掘り、非常に深い。底面に一段の落ち込みを伴い、遺物は非常に多く、全体的に出土し特に集中する箇所はない。覆土は上下2層からなるが、下層ではカマド粘土混在土や焼土の廃棄層が確認されており、比較すればこの層から遺物の方が多く出土する。竈穴廃絶時に関連した大型の廃棄土坑とも言え、土坑類型は土器の比較的多い大型土坑とするB類である。出土遺物は、須恵器貯蔵具212点、須恵器貯蔵具84点、土師器食器具83点、土師器煮炊具1,457点。この他、土製支脚14点、置カマド14点、円面鏡1点、砥石を含む石製品が12点出土する。以上の出土遺物の時期は、II 3期に位置づけられる。なお、隣接するSB114・116とは出土遺物時期が同じである。

2. SK110

C地区ぬ38Grに位置、規模が長径166cm×短径125cm、深さ22cmを測る。プランは楕円で、底面に平坦面を形成しつつ、底面から立ち上がり非常に緩やかにもつ。出土遺物は、大型の礫石が捨てられ、12世紀の土師器小皿が完形で重なるなどまとまっており、この土師皿の上層には古墳中・後期の管玉が出土している。出土遺物は、須恵器食器具9点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具11点その他、古代末の土師器食器具55点、緑石凝灰岩製の管玉1点、カマド石を含む石が26点出土する。時期は、中世I～I 1期が主体である。なお、この土坑に重複する掘立柱建物は時期が異なり関連はない。土坑類型は、通常の土坑であるA類土坑としておく。

3. SK114

C地区ぬ36・37Grに位置、長径186cm×短径100cm、深さ6cmの土坑である。プランは長方形だが、北側が丸くなっている。土坑底面は基本的に平坦だが、部分的に浅い落ち込みをもつ。土坑からの出土遺物は少ないのだが、小型埴や皿を中心に廃棄している。分類型はA類となる。出土遺物は、須恵器食器具10点、須恵器貯蔵具4点、



第54図 土坑遺構図1 (SK106・SK110・SK114)

土師器煮炊具15点と、中世Ⅰ-Ⅱ期にあたる土師器食膳具が119点出土する。

4. SK115

C地区ひ37Grに位置、長径250cm×短径250cmの大型土坑である。プランは円形を呈し、深さ40cmを測る。底面までの中間位置でテラスを形成、さらに底面では平坦面を形成する。この土坑の西側は削平により一部失われるものの影響は少ない。土坑東側の、上層を中心に古代末から中世の土師器坑・皿が集中して廃棄されている。この他は古代の遺物で須恵器中心である。2時期の遺物がそれぞれまとまって出土している。分類型はB類でよいだろう。出土遺物は、須恵器食膳具329点、須恵器貯蔵具62点、土師器食膳具86点、土師器煮炊具529点で、古代末の土師器食膳具が213点出土する。時期は、古代Ⅵ1期及び中世Ⅰ-Ⅱ期の2時期となる。

5. SK116・136a・136b

C地区の・は-37・38Grに位置し、3基の土坑が重複する。SK116は長径696cm×短径500cm範囲に広がるものである。土層断面で底面からの立ち上がりを確認しているものの、平面図に表現されておらずプランのみとなっている。遺物出土が非常に多く、中央から西側で更に土坑状の落ち込みを形成する。このSK116の北側に重複して位置するのがSK136a・bである。

SK136aは長径240cm×短径230cm、深さ32cmの規模をもち、SK136bは長径250cm×短径216cm、深さ40cmを測り不整形を呈すものである。両者とも底面は平坦で、遺物出土が非常に多い。出土遺物は小破片が多く、大破片は中層以下で多い。土師器や須恵器食膳具を中心にまとまりをもって廃棄しており、両者ともA類土坑と類型づけられる。なお、これら3基の土坑の前後関係は、土層断面から、SK136bが最も古く、次いでSK136a、最も新しいのはSK116と確認されている。SK116の出土遺物は総数で、須恵器食膳具379点、須恵器貯蔵具97点、土師器食膳具133点、土師器煮炊具1,017点、銚鉢を含む土師土製品が29点であり、時期は、Ⅴ1期に位置づけられる。また、古代末の土師器食膳具が33点出土している。SK136の出土遺物はa・b合わせて、須恵器食膳具90点、須恵器貯蔵具29点、土師器食膳具69点、土師器煮炊具753点、土製支脚や置カマなどの土師土製品が15点、砥石などの石製品が9点出土する。時期はⅡ3期に位置づけられる。

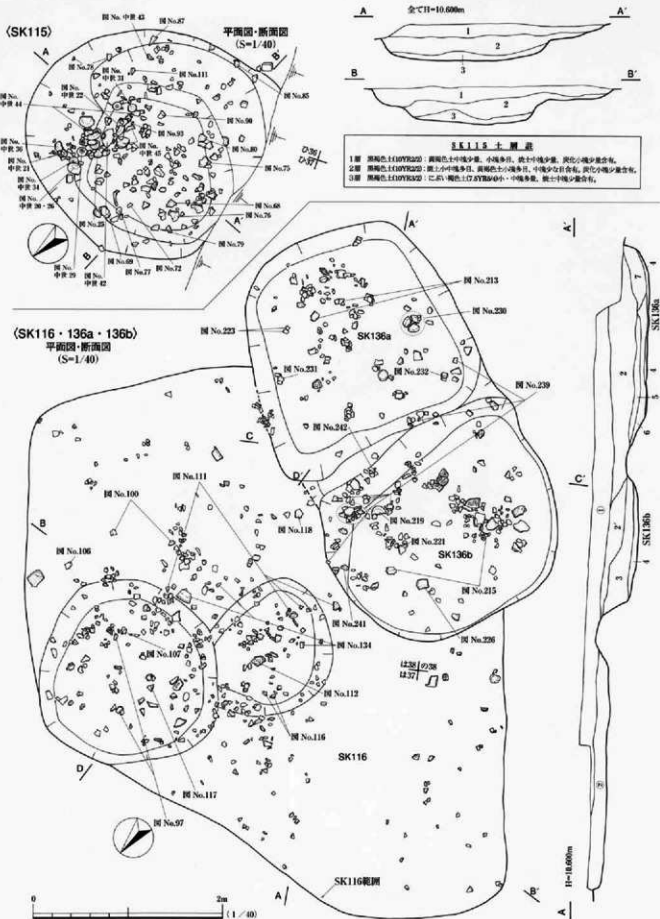
6. SK117

C地区はひ37Grに位置する。方形プランを呈し、長径160cm×短径80cm、深さは44～48cmを測るものである。底面はほぼ平坦で、出土遺物は微量である。土層は、5層に分層されているが、1層から3層は含有物が少ない黒褐色土を呈し、4層は地山との漸移層的なものであろう。規模や土層から、墓として機能したものと判断することができたため、墓塚として今回から新たにG類と分類型に加えることとした。出土遺物は、須恵器食膳具14点、須恵器貯蔵具8点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具18点が出土する。時期は、Ⅳ2新期?頃になるものと判断される。

7. SK121a・121b・SK164

C地区の35・36Grに位置し、3基の土坑が重複して検出されたものである。SK121aは、長径255cm×短径160cm、隅丸長方形プランをもつ大型土坑である。深さは4～13cmと浅く、底面は凸凹し、規模の割に出土遺物が少ない。覆土は、堅穴建物の掘方土状を呈し、土坑分類はD類と判断する。なお、この土坑はSK121bに切れ、SB118内に収まるように位置し、S186と隣接して主軸が揃い時期もあっている。SK121bは、SK121aを切って重複するものである。土坑規模は長径155cm×短径85cm、深さ20～23cmを測り、プランは隅丸方形を呈して底面に一段落ち込みをもつ。通常の土坑と位置づけられるA類土坑となる。両者合わせての出土遺物は、須恵器食膳具14点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具22点、砥石1点であり、時期はⅡ3～Ⅲ期に位置づけられる。

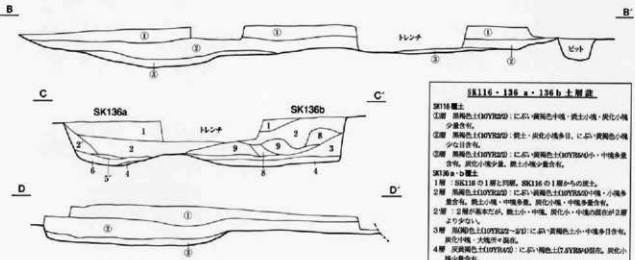
SK164は、SK121に切られているものである。長楕円プランの深いものと、この周囲に広がる浅いものを合わせてSK164としている。長楕円プランのものは、規模が長径130cm×短径110～120cm深さ40cmを測る。この周囲に、不整形を呈し、長径280cm×短径250cm、深さは不明だが非常に浅いものと思われる土坑が広がる。これらは各々単独の土坑である可能性もあろうが、調査時に大型の浅い方を上層遺物として捉えており、覆土は長楕円プランの方のみ確認されている。出土遺物は多目で、全体的に満遍なく出土する状況である。土坑類型は、A類土坑としておく。出土遺物は、須恵器食膳具42点、須恵器貯蔵具19点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具105点、この他置カマなどの土師土製品が7点であり、時期はⅡ3期と判断される。



第55図 土坑遺構図2 (SK115・SK116・SK136a・SK136b)

SK116・136a・136b断面図 (S=1/40)

全てH=10.600m



SK116・136a・136b土層図

- SK116土層**
- 1層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土・黄土小塊・炭化小塊少量含む。
 - 2層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土・黄土小塊多量。L61・黄褐色土小塊少量含む。
 - 3層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土(OY7340)・中塊多量含む。炭化小塊少量含む。
- SK136a土層**
- 1層 SK116の1層と同層。SK136の1層からの粘土。
 - 2層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土(OY7322)・中塊・小塊多量含む。黄土小塊・中塊多量。炭化小塊・中塊多量含む。
 - 3層 2層が厚いため、黄土小・中塊。炭化小・中塊の割合が2層より少ない。
 - 4層 黒褐色土(OY7322)～2層：L61・黄褐色土・中塊多量含む。炭化小塊・大塊等も含む。
 - 5層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土・炭化小塊・黄土小塊多量含む。同層。
 - 6層 黒褐色土(OY7322)～ベースに：L61・黄褐色土・炭化小塊多量含む。炭化小塊・大塊等も含む。L61・黄褐色土・炭化小塊少量含む。
 - 7層 黒褐色土(OY7322)：黄土・中塊・炭化小塊多量。L61・黄褐色土少量含む。L61・黄褐色土・炭化小塊多量・中塊多量・炭化小塊多量含む。炭化小塊・黄土・中塊多量含む。
 - 8層 黒褐色土(OY7322)：黄土土層・炭化小塊多量・炭化小塊多量含む。
 - 9層 黒褐色土(OY7322)：黄土土層・炭化小塊多量・炭化小塊多量含む。

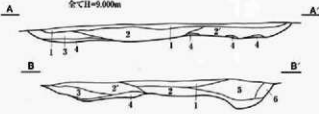
(SK124)



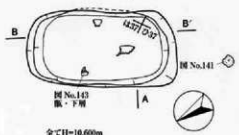
SK124土層図

- 1層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土(OY7340)・中塊・小塊多量含む。所々黒褐色土(OY7342)・中塊多量含む。黄土小塊・炭化小塊少量含む。
- 2層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土・中塊多量含む。黄土小塊少量含む。炭化小塊少量含む。
- 3層 2層中に、L61・黄褐色土・中塊多量。黄土・炭化小塊多量を含む。
- 4層 黒褐色土(OY7322)：L61・黄褐色土・中塊少量含む。含有物なし。
- 5層 黒褐色土(OY7342)～ベースに：L61・黄褐色土・中塊多量・炭化小塊多量含む。炭化小塊少量含む。
- 6層 黒褐色土(OY7322)～2層：所々黒褐色土(OY7342)を含む。黄褐色土(OY7340)の中塊・中塊少量含む。
- 7層 黒褐色土(OY7322)～2層：黄褐色土・中塊・小塊多量含む。炭化小塊・炭化小塊少量含む。

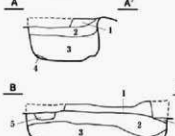
全てH=9.000m



平面図・断面図 (S=1/40) (SK117)



全てH=10.600m



SK117土層図

- 1層 黒褐色土(OY7322)：黄土小塊・褐色土小塊少量含む。土層全含有する。
- 2層 黒褐色土(OY7322)：褐色土小塊多量含む。炭化小塊・中塊多量含む。黄土小塊少量含む。
- 3層 黒褐色土(OY7322)～2層：褐色土小塊少量。暗褐色土(L4層の)2層中も同じ。
- 4層 暗褐色土(OY7342)：褐色土・中塊・中塊多量含む。
- 5層 暗褐色土(OY7342)：褐色土・中塊多量含む。

第56図 土坑遺構図3 (SK116・SK136a・SK136b・SK117・SK124)

8. SK124

C地区北西側ひ45Grの削平区域に位置する。土坑規模は長径285cm×短径240～275cm、深さ15～30cmを測る。プランは隅丸方形を呈し、底面は平坦面を形成しつつも南側で一段落ち込みや若干の凸凹がみられる。土坑類型はB類とする。出土遺物は、須恵器食膳具17点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具25点、土師器煮炊具211点が出土し、時期はⅢ期と判断される。なお、本土坑はSB112と重複、SK124と隣接し、時期が揃う。

9. SK128

C地区北側の削平区域で検出された土坑で、ぬ43・44Grに位置する。長径260cm×短径218cmの不整形を呈し、深さ40cmで底面に平坦面を形成する。削平区域での検出のため、本来はもっと深いものだったのだろう。SI93と重複するため、SI93の掘方土坑である可能性もたれようが、SI93の4本支柱の傾向やSK128の出土遺物が新しさから、関連は薄いと判断されよう。土坑類型は、B類と位置づけておく。遺物は、土坑の東側に集中するように出土しており、総数は、須恵器食膳具35点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具18点、土師器煮炊具151点、土製支脚や置カマドの土師土製品7点であり、時期はⅣ1期あたりと判断される。

10. SK130

C地区ぬ・の44Grに位置し、不整形正方形プランの土坑で、規模は長径160cm×短径153cm、深さ30～40cmを測るものである。底面は傾斜面や若干の窪みをもつ。出土遺物は、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具9点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具69点が出土し、時期はⅣ2期と判断される。このように出土遺物も少なく、プランが方形である小型堅穴状の土坑が、今回新たにC地区で確認されている。土坑分類ではA類としてもよいのだろうが、小型堅穴状の特徴をもつものとしてH類と新たに付け加えて類型づけることとする。

11. SK132

C地区は35・36Grの位置する大型土坑で、隅丸方形プランを呈すもの。土坑規模は長径330cm×短径300cm、深さ54cmを測る。底面に平坦面を形成しており、出土遺物が多い。覆土には、黄褐色系の土や白灰粘土塊、焼土の含有物が多く、カマド破壊に伴う排土が充填されている。このカマド排土は、下層にも一部混じるものの中層に面的に確認できる。よって、本土坑は堅穴建物廃絶時のカマド破壊に伴う破棄土坑と考えられ、分類型はB類となる。ただ、底面平坦と方形プランであることから、小型堅穴状のH類の可能性もあろう。出土遺物には、陶製分銅や鉄滓も出土している。総数は、須恵器食膳具97点、須恵器貯蔵具31点、土師器食膳具26点、土師器煮炊具358点であり、時期はⅢ新～Ⅴ1期と判断される。

12. SK133

C地区ぬ38-の38・39Grに位置する土坑である。基本として方形プランを呈すが、西側は隅丸方形状となっている。規模は長径100cm×短径64cm、深さは40cmを測り、底面は基本的に平坦を呈す。土坑東壁側では底部からの壁立ち上がりに緩やかな転換点をもつが、他の土坑壁は直立に近いものとなっている。規模は小型だが、方形プランで深く、壁直立状で遺物が少ないという特徴から、土坑類型は墓塚であるG類と判断される。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具13点で、時期はⅢ期頃と思われる。

13. SK134

C地区の39Gr、SK133の西側に位置する。長軸230cm×短軸50～90cm、深さは18～30cmを測る。削平区域での検出であり、深さは本来もっとあったものと思われる。プランは長楕円形を呈し、底面に平坦面を形成するが、北西と南東の短軸方向立ち上がりが有段状となり、長軸側の立ち上がりは直立に近いものとなっている。長楕円プランで遺物が少ないという特徴も墓塚の可能性が高いとされており、類型はG類としておく。出土遺物は、須恵器貯蔵具2点のみ、時期不詳である。

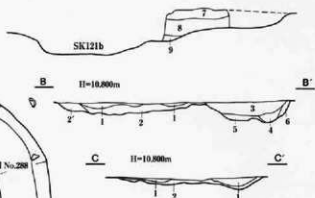
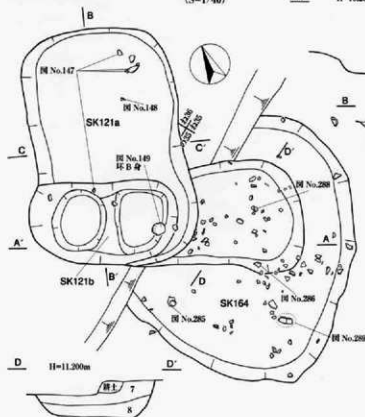
14. SK135

C地区は38Grに位置する、長径143cm×短径118cmの円形プランを呈し、深さ24～28cmを測る。底面は平坦で、土坑壁はほぼ直立を呈す。覆土には焼土塊や炭化塊の含有が多く、遺物は上層から下層まで偏りなく多量に出土する。A類土坑と位置づけられる。出土遺物は、須恵器食膳具88点、須恵器貯蔵具15点、土師器食膳具15点、土師器煮炊具190点、この他厚鉢片12点、カマド石2点、鉄滓付土器1点が出土する。時期はⅤ2期に位置づけられるものである。

(SK121a・121b・164)

平面図・断面図
(S=1/40)

A H=10.200m A'

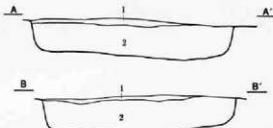
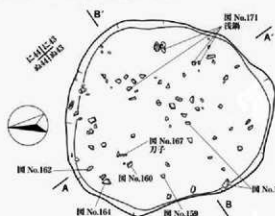


SK121a・121b・164 土層図

- SK121a 遺土
- 1層 黄褐色土(OYR20)：黄土・褐色土小塊少量、小塊多目含有。
 - 2層 黄褐色土(OYR20)：褐色土(OYR40)小・中塊多量含有、餅まわりあり。
- SK121b 遺土
- 3層 黄褐色土(OYR20)：褐色土小塊多目含有、黄土・炭化粒少量含有。
 - 4層 褐色土(OYR20)：褐色土中塊多目含有。
 - 5層 黄褐色土(OYR20)：褐色土小塊多量含有。
 - 6層 黄褐色土(OYR20)：褐色土中塊・大塊多目含有。
- SK164 遺土
- 7層 黄褐色土(OYR20)：L系・黄褐色土(OYR20)中塊少量含有、黄土・炭化小塊少量含有。
 - 8層 黄褐色土(OYR20)：L系・黄褐色土小塊少量、黄土小塊多目、炭化小塊少量含有。
 - 9層 黄褐色土(OYR20)：L系・黄褐色土小塊(OYR20)多量含有。

(SK128) 平面図・断面図 (S=1/40)

全てH=9.600m

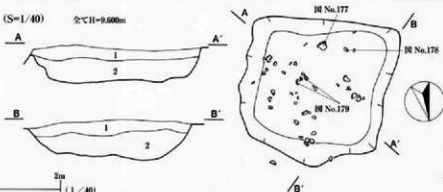


SK128 土層図

- 1層 黄褐色土(OYR20)：L系(O)・黄褐色土入る、餅まわりあり。
- 2層 黄褐色土(OYR20)：黄褐色土上・褐色土塊の塊1箇あり、炭化粒・黄土・褐色土塊を多量に含有、餅あり。

(SK130) 平面図・断面図 (S=1/40) 全てH=9.600m

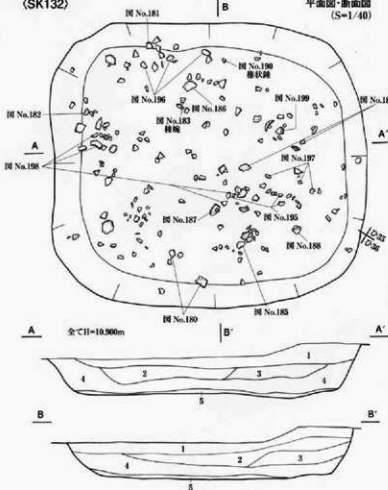
- SK130 土層図
- 1層 黄褐色土(OYR20)：黄褐色土(OYR20)が4箇所設定、黄土・黄土・炭化粒の小塊を多量含有。黄褐色土塊を多量含有、餅まわりあり。
 - 2層 黄褐色土(OYR20)：黄褐色土(OYR20)と5箇所で設定。黄土・黄土・炭化粒の小塊を多量含有、餅まわりあり。



第57図 土坑遺構図4 (SK121a・121b・SK164・SK128・SK130)

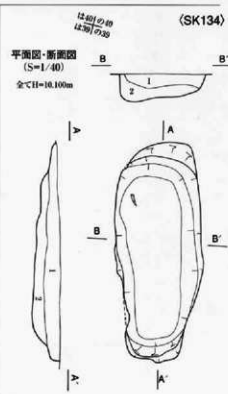
(SK132)

平面図・断面図
(S=1/40)



- SK132 土層表**
- 1層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土(IVR44)小塊・中塊多量含有。黄土小塊・中塊多量含有。炭化中塊少量含有。土層多く含有。
 - 2層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土小塊・中塊多量含有。黄土小塊・中塊多量含有。炭化中塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土小塊・中塊多量含有。黄土小塊多量含有。炭化中塊多量含有。黄土小塊少量含有。この区画内には炭素した土もあり。オマツツノ土と思われる。
 - 4層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土小塊・中塊多量含有。黄土小塊多量含有。
 - 5層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土小塊・中塊少量含有。

(SK134)



- SK134 土層表**
- 1層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土(IVR44)小塊少量。黄土小塊多量含有。
 - 2層 黒褐色土(IVR22)に赤土質褐色土小塊少量。黄土小塊少量含有。

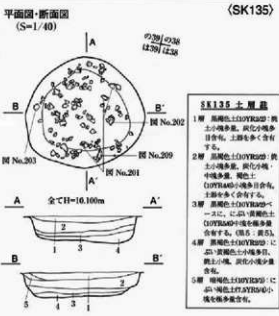
(SK133)

平面図・断面図 (S=1/40)



- SK133 土層表**
- 1層 黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊・中塊多量含有。炭化中塊多量。黄土小塊少量含有。
 - 2層 黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊多量含有。黒褐色土小塊・中塊多量含有。黄土小塊少量含有。
 - 3層 赤褐色土(IVR44)に赤褐色土(IVR44)小塊多量含有。黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊多量含有。黄土小塊多量含有。
 - 4層 黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊多量含有。黄土小塊多量含有。

(SK135)



- SK135 土層表**
- 1層 黒褐色土(IVR22)に黄土小塊多量含有。炭化中塊多量含有。土層多く含有する。
 - 2層 黒褐色土(IVR22)に黄土小塊多量含有。炭化中塊多量含有。黄土小塊(IVR44)小塊多量含有。土層多く含有する。
 - 3層 黒褐色土(IVR22)に黄土小塊多量含有。炭化中塊多量含有。黄土小塊(IVR44)小塊多量含有。土層多く含有する。(層5)
 - 4層 黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊多量含有。黄土小塊少量含有。
 - 5層 黒褐色土(IVR22)に赤褐色土(IVR44)小塊少量含有。

第58図 土坑遺構図5 (SK132・SK133・SK134・SK135)

15. SK138

C地区中央のF地区寄り、は・ひー38・39Grに位置する。SK139と重複、これを切って掘り込まれた土坑である。土坑規模は、長径274cm×短径304cm、深さは24～30cmを測る、不整形円形を呈す大型土坑である。底面は平坦面を形成しつつも若干の凸凹状を呈し、東側にテラス状の突出部のな落ち込みを確認できる。出土遺物は多目で、須恵器食膳具71点、須恵器貯蔵具32点、土師器食膳具32点、土師器煮炊具213点、土師土製品23点であり、時期はⅣ2古期と判断される。本土坑は、B類土坑と類型付けておく。

16. SK139

SK138と重複して位置する土坑で、本土坑の方が古い段階となるものである。長径304cm×短径170cm、深さは32～50cmを測る。プランは長楕円形を呈し、底面で一段落ち込みをもって平坦面を形成する。覆土は全体的に黒く含有物の少ないことが特徴である。大型の割に遺物は少なく、ほぼ1層から出土する。土坑類型は、B類土坑と位置づけておく。出土遺物は、須恵器食膳具19点、須恵器貯蔵具13点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具206点、匣鉢3点、砥石等の石製品4点が出土、時期はⅡ3期と判断されるものである。

17. SK144

C地区ねの40Grに位置する。長径224cm×短径170～190cm、深さ12cmを測る、方形で浅い土坑である。但し、削平区域の境に位置することもあり、本来もっと深さがあった可能性をもつ。底面は平坦を呈し、出土遺物も少ない。土坑類型は、H類土坑とする。土間的な印象を受ける土坑だが、掘立柱建物の一部に付設するというような検出のされ方ではない。SB135と重複してはいるものの、SB135の築行方向の壁から本土坑が飛び出してしまおう配置となるため、関連性は薄いものと思われるが、遺物の時期に重なりが見られる。なお、隣接するS182とは同様の時期となる。出土遺物は、須恵器食膳具9点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具54点であり、時期はⅠ1期とⅢ期頃の2時期のものが認められる。

18. SK158

C地区の31Grで、4基の土坑が重複する内の1つである。長径170cm×短径126cmの、隅丸方形を呈すもので、深さは30cmを測る。底面には、短径方向が若干傾斜するものの平坦面を形成する。出土遺物は少ないが、上層から主に出土する。この土坑はSK160を切って掘られ、本土坑埋没後に、今度はSK159に切られ掘り込まれている。土坑の類型は、通常土坑であるA類でよいだろう。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具31点であり、時期はⅡ3期と判断される。

19. SK159

SK158と同様に4基の土坑が重複する1つである。長短径とも150cmを測る隅丸方形プランをもつもので、重複する4基SK158～161の中で最も新しい段階で掘られたものである。4基のうち最も深く、深さ40cmを測る。底面は平坦で、出土遺物はSK158と同様に少なく、上層から出土する。総数は、須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具77点であり、時期はⅣ2古期と判断されるものである。この土坑は通常土坑であるA類土坑としておく。

20. SK160

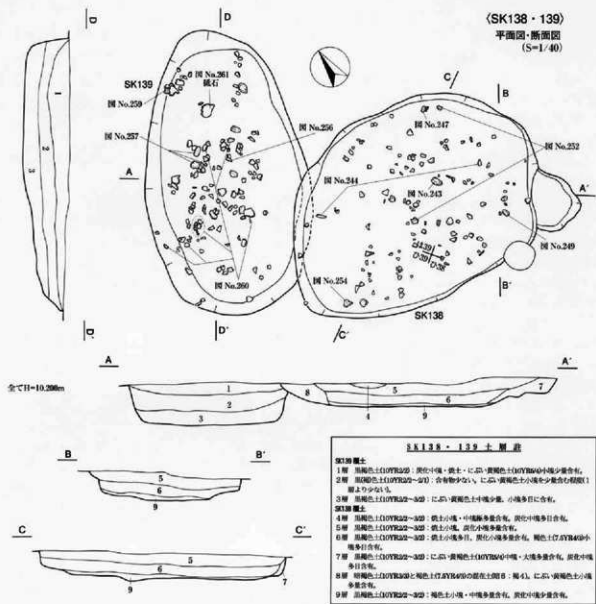
SK158と同様に4基の土坑が重複する1つである。長径264cm×短径200cmを測る大型土坑で、SK158・159に切られている。深さは6～20cmと浅く、隅丸方形プランを呈している。北西側底面に一段落ち込みがみられるが浅く、基本として平坦面を形成すると予想する。本土坑は小型竪穴状で方形プランとするH類土坑と判断する。出土遺物は微量で、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具8点、透かし入りの円面型脚部1点が出土するが、時期を判断することは難しく不詳である。

21. SK161

SK158と同様に4基の土坑が重複する1つで、SK159に切られるものである。土坑規模は長径182cm×短径残86cm(推定130cm)、深さ10cmで、不整形プランを呈す。底面は平坦で、遺物は少なく、通常A類土坑としておく。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具7点であり、時期は不詳である。

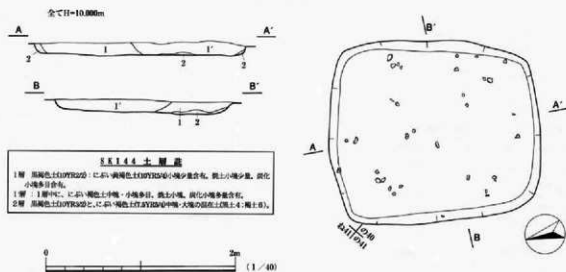
22. SK163

C地区中央の、ね35Grに位置するものである。隅丸方形プランを呈し、規模は長径150cm×短径95～110cm、深さ38～44cmを測る。底面には北西側に一段の落ち込みを有すが、浅いものである。出土遺物は、2層以下では



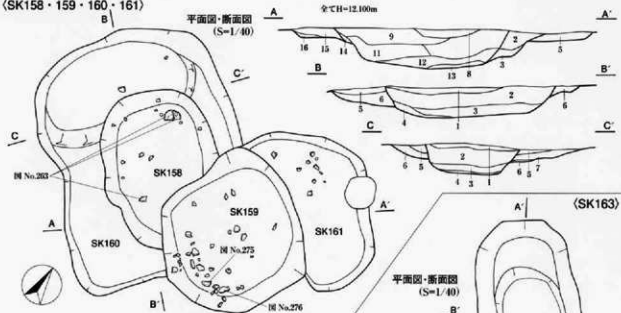
(SK144)

平面図・断面図 (S=1/40)



第59図 土坑遺構図6 (SK138・SK139・SK144)

(SK158・159・160・161)



SK158・159・160・161土層表

SK158 層上	1層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土(10YR7/3)中塊多量・中砂混入。黄土・黄化小塊多量含有。
2層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土(10YR7/3)中・中塊多量。黄土小塊少量含有。	
3層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土(10YR7/3)中・中塊少量。黄化小塊少量含有。	
4層 灰黄褐色土(10YR7/4) 黄褐色土小塊・中塊多量含有。	
SK159 層上	5層 暗褐色土(10YR7/3) 黄褐色土粒・中塊多量含有。中砂混入。黄土・黄化小塊少量含有。
6層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土小塊中多量含有(2層より多)。黄化小塊少量含有。	
7層 灰黄褐色土(10YR7/4) 黄褐色土小塊・中塊多量含有。	
SK160 層上	8層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小・中塊多量含有。黄化小塊少量含有。
9層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小塊・中塊多量。黄土・黄化小塊多量含有。	
10層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小・中塊多量。黄土・黄化小塊多量含有。	
11層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土中・中塊多量含有。灰黄褐色土(10YR7/4)混在。	
12層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小・中塊多量。黄土・黄化小塊少量含有。	
13層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土中塊多量(2層)含有。	
14層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小塊少量。黄化小塊少量含有。	
SK161 層上	15層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土(10YR7/3)中・中塊多量含有。
16層 黄褐色土(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小塊多量含有。	

SK163土層表

1層 黄褐色土	(10YR7/2) C:灰・黄褐色土(10YR7/3)中塊少量。黄土小塊多量含有。
2層 黄褐色土	(10YR7/2) C:灰・黄褐色土小塊・中塊多量。黄土・黄化小塊少量含有。
3層 黄褐色土	(10YR7/2) C:灰・黄褐色土中塊多量(2層)含有。
4層 黄褐色土(10YR7/2) 黄褐色土中塊多量含有。	

(SK165A・165B)



第60図 土坑遺構図7 (SK158・SK159・SK160・SK161・SK163・SK165A・SK165B)

極めて少なく、殆どが1層から出土する。長軸側の壁立ち上がりが直角に近く、出土遺物も少ないことから、本土坑は小型の墓塚の可能性が高いのではないかと考えている。よって類型は一応H類としておく。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具8点、土師器煮炊具14点、置カマド1点であり、時期はIV 2新～V 1期と判断される。

23. SK165A・165B

C地区南側で土坑や掘立柱建物密集する区域の1つである、の31Grに位置し、SK165A・Bの2基の土坑が重複する。SK165Aは、SK165Bに切られているため、規模は残存長径170cm×短径170cmで、隅丸方形を呈し、深さは18～24cmを測る。底面には凸凹状で浅い落ち込みをもつ。遺物の出土は少なく、小型堅穴状を呈しているためH類土坑と位置づけする。SK165Bは、長径326cm×短径180～230cm、深さ30cmを測り、プランが隅丸台形状の方形を呈する大型土坑である。底面を平坦に形成しており、土師器の出土は多目である。こちらも小型堅穴状のものであり、H類土坑と判断する。これら、2基の土坑からの遺物出土状況は、上層から下層まで満遍なく出土しており、遺物の時期も同時期である。また、両者とも、掘立柱建物に付する土間的なものであった可能性もたれようが、現地調査で掘立柱建物の検出はされなかった。出土遺物は、SK165A・B合わせて、須恵器食膳具63点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具37点、土師器煮炊具234点、管状土鍾等の土師器製品が4点、カマド石等の石製品が4点であり、これらの時期はIV 1期に位置づけられるものである。

24. SK171・SJ33

C地区南側でF地区区との境、ひ・ふ33Grに位置する。この土坑は2基の土坑が重なっている可能性が高いもので、大型土坑の埋没後、土坑中央にもう1基掘り込まれたと思われる。その後中央が窪み1層土が堆積したと思われる。この埋土1層下面で検出されているのが被熱層SJ33であり、土坑が埋まった窪みを利用したものであろう。なお、土坑規模は、全体で長径残存390cm×短径280～325cm、深さ22cmを測り、底面は平坦面を形成する部分もあれば、窪みや1段の落ち込みをもつ部分も見られ、凸凹の形状を呈している。大きな土坑のプランは方形だが、これに掘り込まれた土坑のプランは不明である。土坑類型は、一応B類土坑としておく。SK171の出土遺物は、須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具27点、土師器煮炊具224点、土師器製品13点であり、時期はI期と判断される。SJ33の形状は卵形の円形で、規模は長径75cm×短径60cmを測り、被熱としては大型プランを呈する。土坑覆土2層が、6～14cmに渡って被熱を受け、黒色土内の含有物が赤化したといった状態で、炭化物も少量混じっている。

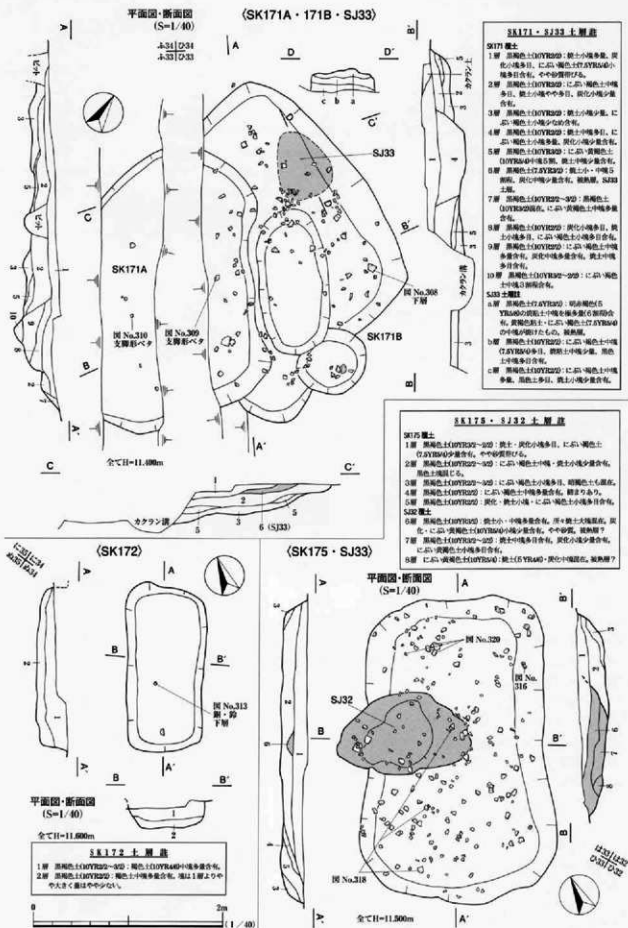
25. SK172

C地区ぬ34Gr、SI99に隣接して位置する。長径185～190cm×短径80～85cm、深さ32cmを測る隅丸長方形を呈す。底面は一段の落ち込みを浅くもつものの平坦であり、土坑壁は直立に近い。覆土は、含有物量の多少により2層に分層されるが、ほぼ同層であり、一括埋土と考えられる。出土遺物は少なく、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具11点、銜鉢1点、銅製の鈴1点であり、時期はI・II期である7世紀代と判断される。以上から、墓塚と判断することができ、分類はG類土坑でよいだろう。

26. SK175・SJ32

C地区南側は、ひ33Gr、の土坑及び掘立柱建物の集中区域に位置するものである。隅丸方形プランを呈し、長径320cm×短径186～210cm、深さ20～28cmを測る。底面は若干のマウンド状を呈する部分があるものの平坦面を形成、覆土は自然堆積層と判断出来る。小型の堅穴状を呈していることから、H類土坑とする。出土遺物は多目で、須恵器貯蔵具94点、須恵器貯蔵具13点、土師器食膳具28点、土師器煮炊具440点、銜鉢5点、カマド石4点であり、時期はIV 1期とV期の2時期に判断される。

なお、この土坑に2基のが状遺構SJ30とSJ32が重複している。SJ30は本土坑よりも検出レベルが標高115mとなり、かなり上層の遺構となるため関連は薄いと考えられる。SJ32は、本土坑の西側で検出されたもので、本土坑が自然埋没した後、恐らく土坑の窪地を利用してか何かを焼き、その上に更に流土が堆積したと考えられる。本土坑を利用したというものの、土坑プランから外れており、人為的な層が確認出来るため、焼床を構築した可能性がある。但し、下層の覆土は、SK175もSJ32も同層と思われる。SJ32は、黒褐色土ベース土が焼けた状態である。これは、非常に明確な被熱、例えば硬化するというような検出ではなく、覆土に含有する地山土塊と黒褐色土が被熱して赤化する柔らかいものである。



第61図 土坑(炉状)遺構図B (SK171A・SK171B・SJ33・SK172・SK175・SJ32)

27. SK176a・176b

C地区南側の・は32Gr、土坑と掘立柱建物の集中区域に位置し、SK181・182とも重複するため4基の土坑が重複するものである。SK176aは北側に位置し、3基の土坑に切られているためプラン全容は不明だが、長楕円形になるものと思われる。残存長径280cm×短径120cm、深さ10cmの浅い平坦な部分を形成し、中央から北寄りに44cmの深い落ち込みをもつ。この落ち込み部分からの遺物出土は多く、土坑類型はA類とする。SK176bは、SK176aの南側に位置し、長径140cm×短径100cmの円形を呈すものである。深さは140cmで、北側にテラスを形成し、底面は平坦で、出土遺物は少ない。土坑類型はA類とすることができる。両者の土坑からは、厚鉢、焼け弾けた土師器片が出土しており、土師器焼成坑で焼成された土師器が一括廃棄されたと思われる。最も近いSJ30土師器焼成坑との関連が伺われよう。出土遺物は、SK176a・b合わせて、須恵器食膳具44点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具12点、土師器煮炊具233点、置カマド等の土師器製品が102点で、この内厚鉢は99点である。時期は、SK176aがⅡ2～Ⅲ1期、SK176bがⅡ3～Ⅲ期とされる。

28. SK181

C地区は32Grに位置する、SK176・182と重複する土坑で、4基の中で最も古い段階のものになる。規模は、長径214cm×短径192cm、隅丸方形プランを呈し、深さは20cmである。底面は若干の窪みをもちながらもほぼ平坦を呈す。出土遺物は少なく、小規模竈穴状を呈しており、H類としておく。なお、本土坑の上面にSJ22・23が位置する。これらの炉状遺構を構築するために、本土坑が掘方として掘り込まれたに依り、本土坑の規模が大きいため、別段階で炉状遺構が設けられたのだろう。遺物の出土は、須恵器貯蔵具19点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具50点であり、時期はⅣ1～Ⅳ2古期とされるものである。この他、竈壁塊1点や古墳時代の特殊鉢1点も出土している。

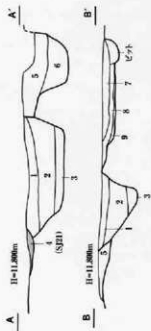
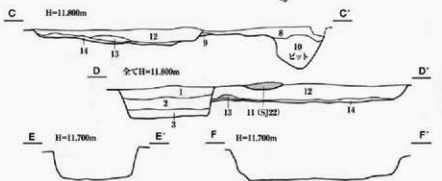
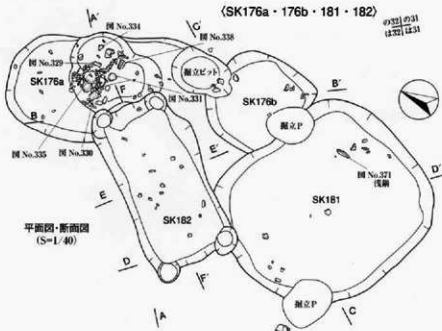
29. SK182, SJ21a・SJ21b・SJ21c

SK181を切って北側に位置する土坑である。長方形プランを呈し、規模は長径200cm×短径95cm、深さは43cmを測る。底面は平坦で、底面からの壁立ち上がりをはほぼ直角にもつ。覆土は、黒褐色土ベースにふい褐色土塊を含有し、この含有物の量で3層に分層可能だが、一括埋土といっていだろ。この土坑の四隅には小ピットが検出されており、縦に構築材を打ち込んだと考えることが可能だろう。よって、本土坑は墓塚と判断される。類型はG類土坑と位置づけられる。なお、出土遺物は、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具64点、厚鉢4点、カマド石1点で、時期を判断するのは難しく不詳である。

土坑の西側に3基の炉状遺構が検出されている。SJ21a・b・cとしたものである。これらの炉状遺構はSK182に伴うものではなく、SK182の埋没後に構築された遺構である。SJ21aは、長径260cm短径140cm範囲の中で、3箇所の不整形を呈した被熱面をもつもので、これらの被熱面は、もとは1つに繋がっていた可能性があらう。被熱部分には、粘土と黒褐色土の混生土を貼って炉床を形成しており、一部が還元して周囲にも焼土が分布する。固化されている遺物は被熱面に張り付いて出土する。また、これらSK182・SJ21a・b・cが収まる範囲には、広く焼土分布が認められ、炉状遺構に関連したものである可能性が高いとみている。

30. SK178・180・SJ53

C地区南側、土坑・掘立柱建物の密集区域に位置し、SK178・180が重複して検出されたものである。SK178は、・ひー30・31Grに位置し、SK180に切られており、プランは隅丸方形プランで、規模は、長径280cm×短径は残存100cm、深さ20cmを測るものである。底面は平坦を呈し、最上面に長径63cmを測る被熱層を有する。この被熱層は炉状遺構と言えるもので、SJ53を付している。土坑類型は、被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけするE類土坑と判断されるところであるが、小型炉とするには土坑の規模が大きいため、炉を形成するための土坑ではなく、土坑の埋没後に偶然この場所でも何かが焼かれた跡と判断したい。よって、A類土坑とする。出土遺物の総数は、須恵器食膳具80点、須恵器貯蔵具16点、土師器食膳具25点、土師器煮炊具234点である。時期はⅤ2主体で、この他Ⅱ3～Ⅲ期のものとⅤ～Ⅵ期のものが認められ、時期幅をもつ。SK180は、SK178の西側、ひー30・31Grに位置するものである。土坑規模は、長径370cm×短径254cmで深さは40～60cmを測る。プランは楕円形を呈しており、土坑の底面から上面に向かい半分位の高さ、要するに覆土内で、広い被熱層を確認している。この被熱面は黒褐色土ベースに、ふい褐色土が極めて多量に混在する土で、弱い被熱層であり、北側から南側にかけて、段をなしている。被熱範囲は、長径290cm×短径95～140cmに及ぶ。なお、本土坑の床面は、凸凹状



SK176a・176b・181・182土層表

- 1層 黒褐色土(D0Y7B20) に赤い褐色土中塊 (GYR40)を多量含む。赤い褐色土塊多数含有。砂質粘りる。
- 2層 黒褐色土(D0Y7B20) に赤い褐色土(へ大塊)を多数含む。黒褐色土中塊少量含有。粘りあり。
- 3層 黒褐色土(D0Y7B20)へ一部に赤い褐色土中塊(へ大塊)を多数含む。粘りあり。
- 4層 黒褐色土(D0Y7B20)に黒土中塊多数。中塊多量含有。黒褐色土中塊も混じる。粘りあり。上面傾斜上。

SK176a 土

- 5層 黒褐色土(D0Y7B20)に黒土中塊多量。灰化中塊少量含有。赤い褐色土中塊少量含有。
- 6層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土中塊少量含有。黒土中塊少量含有。

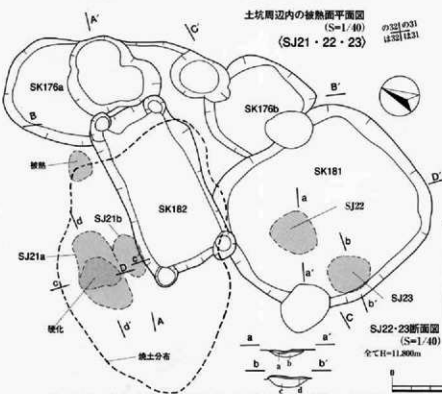
SK176b・ピット層土

- 7層 黒褐色土(D0Y7B20)に黒土中塊多量。灰褐色土中塊少量含有。赤い褐色土中塊少量含有。黒土中塊少量含有。
- 8層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土中塊多量含有。黒土中塊少量含有。
- 9層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土の中塊を多数含む。
- 10層 黒褐色土(D0Y7B20)へ一部に赤い褐色土(D0Y7B40)中塊多数(大塊)を含む。赤い褐色土中塊少量含有。粘りあり。黒褐色土に混じる。ピット土層上。

SK181 層土

- 11層 黒褐色土(D0Y7B20)に砂質粘りる。部分的に赤褐色GYR20土。粘りしている。黒土中塊多数含有。
- 12層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土(D0Y7B40)中塊多量を含む。黒土中塊少量含有。粘りあり。
- 13層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土中塊多量含有。黒土中塊少量含有。
- 14層 黒褐色土(D0Y7B20)に赤い褐色土中塊。赤褐色土GYR40の中塊多量含有。

土坑周辺内の被熱面平面図 (S=1/40) の32の31は32は31



SJ22・23土層表

S22 層土

a層 黒褐色土(D0Y7B40)に赤い褐色土(GYR40)中塊。黒土中塊も混じる。粘り強。黒褐色土に黒褐色土の固結土を混へた層が散在するもの。

b層 黒褐色土(D0Y7B40)へ中塊を散在ける。黒土中塊少量混じる。所々粘り褐色土GYR40を混する。

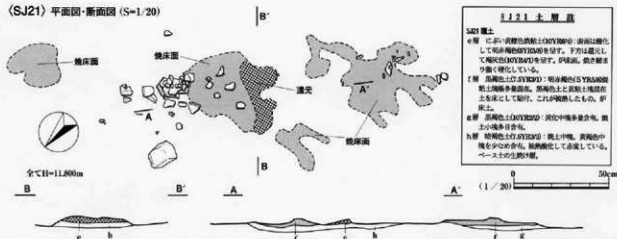
S23 層土

c層 黒褐色土(D0Y7B40)へ中塊と中塊。

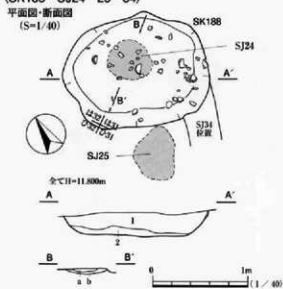
d層 黒褐色土(D0Y7B40)に黒土中塊少量。黒土中塊多量。赤褐色土(D0Y7B40)中塊多量含有。粘りは弱くはな。

第62図 土坑(炉状)遺構図9 (SK176a・SK176b・SK181・SK182・SJ21・SJ22・SJ23)

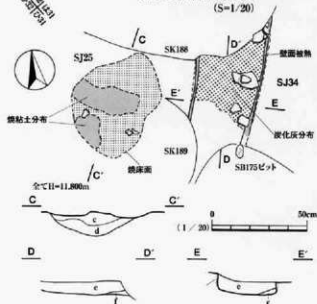
(SJ21) 平面図・断面図 (S=1/20)



(SK188・SJ24・25・34)



SJ25・SJ34 平面図・断面図 (S=1/20)



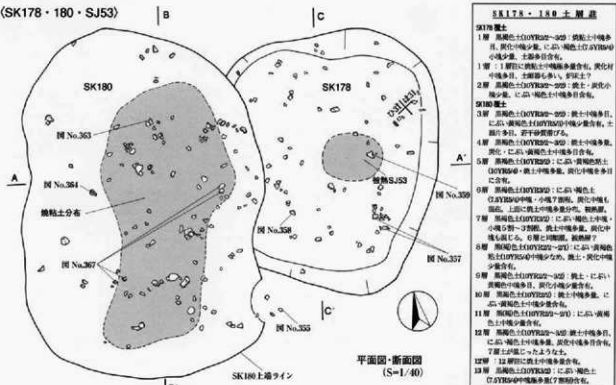
第 63 図 土坑 (炉状) 遺構図 10 (SJ21・SK188・SJ24・SJ25・SJ34)

で大きく段をなしている。この土坑は、土師器焼成坑とは言えないものであり、何かを焼いた跡である焼成土坑ということができ、土坑類型はF類と位置づけられる。しかし、上層を中心に出土遺物は多く、須恵器食膳具223点、須恵器貯蔵具40点、土師器食膳具75点、土師器煮炊具528点、管状土鍾1点、円面硯1点が出土する。上層は廃棄土坑とされたのだろう。時期はⅡ3～Ⅳ期のものが認められるが、主体はⅢ～Ⅳ1期と判断される。

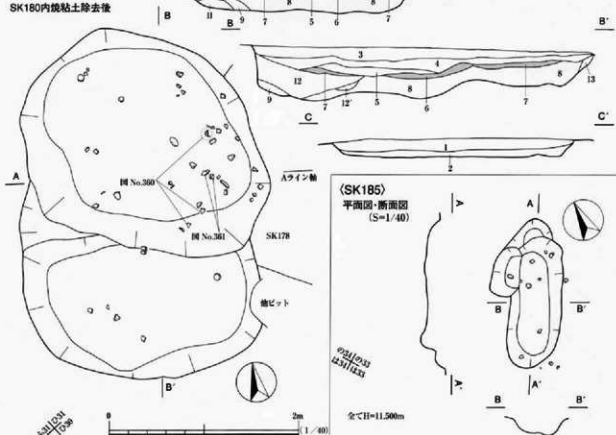
31. SK185

C地区の33Grに位置する土坑で、長楕円形プランを呈し、規模は長径158cm×短径65～75cmを測る。深さは18cmだが、削平区域による値である。底面に落ち込みや凸凹をもち、遺物は非常に少ない。覆土が不明だが、長楕円形というプランや遺物稀少という点から、墓塚の可能性があると考えている。よって、G類土坑と位置づけしておく。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具34点であり、時期は不詳である。

(SK178・180・SJ53)



SK180内焼粘土除去後



第64図 土坑(炉状)遺構図11 (SK178・SK180・SJ53・SK185)

32. SK188、SJ24・25・34

SK188は、C地区は31・32Gr、土坑・掘立柱建物の集中区域南側寄りに位置する土坑である。規模は、長径154cm×短径122cm、楕円プランを呈して深さは26cmを測り、底面は平坦である。出土遺物は少なく、下層からも出土するが、上層から中層を中心に出土する。なお、本土坑の東壁面に確認しているうっすらとした被熱層は、SJ34に接する範囲に限られている。この壁面被熱は、赤褐色(5YR4/8)を呈し、薄く粘土を貼ったか又は地山が被熱したものと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具18点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具14点、土師器煮炊具59点であり、時期はⅣ2～Ⅴ1期とされるものである。本土坑の覆土上層でSJ24、土坑に隣接して南西側にSJ25、SK188に切られる形でSJ34が検出されている。SJ24の被熱面検出レベルは、標高117.6m。SK188の遺構確認レベルは、標高115.0m。両者の差は5cm程度であり、SJ24がもともとSK188内にて構築されたものである可能性もたれよう。しかし、確実性はないので、SK188は土器廃棄を目的とした通常の土坑とし、A類と位置づけておく。SJ25は、長径57cm×短径41cmの不整形プランを呈すものである。床を貼って炉床を形成しており、黒褐色土を混在させているため被熱は明赤褐色の焼粘土塊が集中するといった状態である。SJ34は、前述したが北側がSK188に切られている状態である。残存長径61cm、短径33～36cmで、底面から立ち上がりをもち、断面ではU字状を呈す。底面からの立ち上がりの高さは6～9cmであり、この壁面は被熱している。底面は平坦で炭化灰が分布しており、南側では地山が露出している状態である。底面自体は被熱している。覆土では底面付近に炭化材の塊を多量に混在する炭化灰層が残し、この上層には含有物の多い黒褐色土が認められる。これらの状況から、SJ34は製炭土坑である可能性が非常に高いと考えられる。

33. SK207

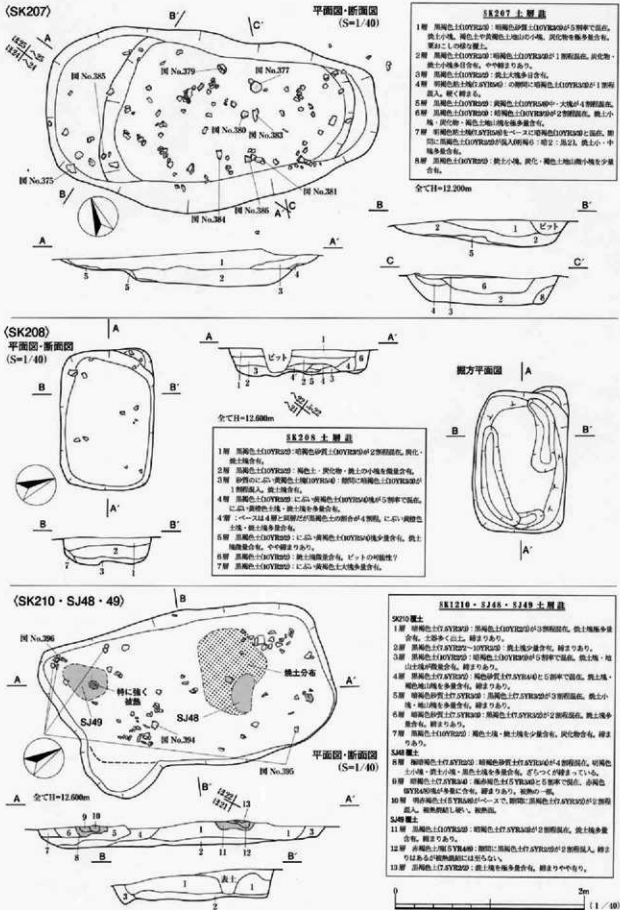
F地区東側の削平区域から遺構密集区域にかかる、へ・ほ24Grに位置する大型土坑である。土坑規模は、長径350cm×短径140～192cm、隅丸長方形プランを呈するもの。底面に一段の掘り込みを有するため、長軸側の両端にテラスを形成している。落ち込みの底面やテラス面は平坦で、テラス面までは深さ14cm、一段掘り込みの底面までの深さは38cmを測る。出土遺物は多く、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具116点で、時期はⅣ2新期と判断される。また、この土坑は多くの遺構と重複しているが、その中でSB207北西端に収まるように位置している。遺物が多く廃棄されていることから、土器の比較的多い大型土坑として位置づけているB類土坑とするのが妥当だろう。

34. SK208

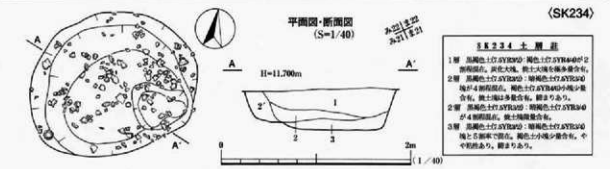
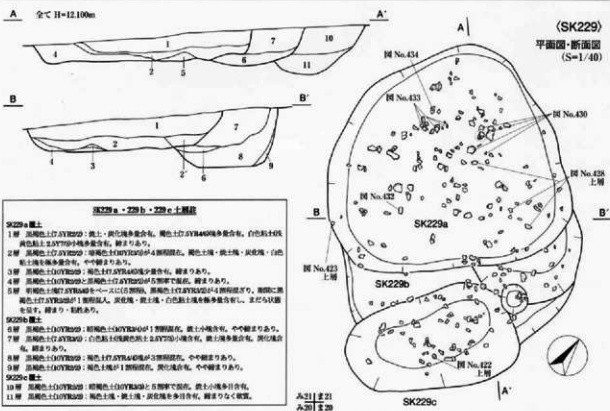
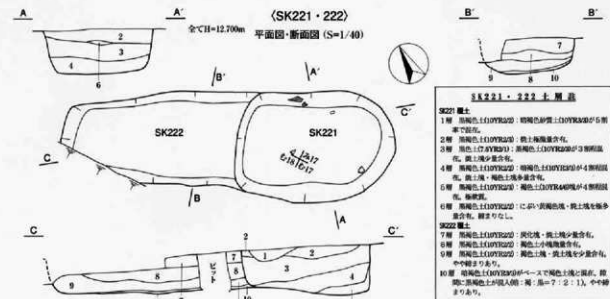
F地区東側の削平区域である、へ21Grに位置する。規模は、長径150cm×短径100cmの方形プランを呈し、深さは24～30cmを測る。削平区域からの検出ということから、本来深さはもっとあったと思われる。底面は凸凹を呈し、底面から壁立ち上がり際で浅い溝状の窪みを検出している。溝状の窪みは一周しないが、底面に対し端が落ち込む形状となっているため、中央がマウンド状となっている。土坑壁は、直角気味に立ち上がっている。覆土は細かく分層されているのだが、1・2層の黒褐色土ベース土のものと、3層以下のふい黄褐色土がベースとなっている層の大きく2つに分かれることが特徴であり、がらりと様相が異なる。3層以下の底面付近の土は人為的に形成したような、所謂整穴建物の掘方土坑的な土層となっている。1・2層は、含有物が非常に少なく、分層されているものの、ほぼ一括埋土と言ってよいだろう。これらの特徴から、本土坑は墓塚の可能性があると考えられるが、規模が小さいことが断定できない点である。土坑類型は一応G類土坑としておく。出土遺物は少なく、須恵器食膳具6点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具44点であり、時期は不詳である。

35. SK210

F地区東側の中央遺構密集区域、ほ22Grに位置する。重なる方形プランで、規模は長径300cm×短径165cm、深さ24cmを測る。底面は、北側に一段の浅い彫り込みを伴うが、ほぼ平坦を呈している。覆土断面から、1～3層・14層と、4～7層で基本土層が異なっており、2基の土坑が重複している可能性が高い。また、土坑の上面にはSJ48・49の炉状遺構が検出されている。SJ48は前述の4～7層の上面に位置し、長径50cm、短径35cmの無花果形を呈し、被熱焼結して極めて硬くなっている。中央の10cm円形は特に強く被熱し、黄色系に変色している。2基の土坑が重複していると考えられるなら、土坑は被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけられるものとなろう。SJ49は1層が被熱したもので、黒褐色土が被熱するため柔らかい状態である。長径42cm×短径22cmの楕円形状に被熱面が認められ、これから西側へ向かって約60cmに渡り多量の焼土が分布している。こちらは、土坑との間



第65図 土坑(炉状)遺構図12 (SK207・SK208・SK210・S448・S449)



第66図 土坑遺構図 13 (SK221・SK222・SK229・SK234)

速性は薄いものとみている。SK210は方形であり、小型竪穴状を呈すことから、H類土坑と位置づけておく。但し、前述したように北側ではもう1基SJ48が関連したE類土坑が存在するものと思われる。本土坑からの遺物は、規模の割に少なめであり、総数は須恵器食膳具15点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具186点、石製品3点、土師土製品2点である。時期はⅡ3期とⅡ1・2期の2時期のものが認められる。なお本土坑は、SB201やSB202内に収まるように位置しているが、出土遺物の時期が合わない。

36. SK221・222

F地区東側の端で遺構が集中する箇所、み・む-17・18に位置する。SK221がSK222を切る形で重複するものである。SK221は、隅丸方形プランを呈し、長径168cm×短径116cm、深さ40～52cmを測る。底面は平坦を呈しつつも東側に若干低くなっている。出土遺物は微量であり、覆土は黒褐色土に含有物の少ない土が主体を占め、底面からの立ち上がりも直角に近いものである。SK222は方形プランを呈し、東側がSK221に切られるため全体規模は不明だが、残存長径186cm×短径100cm、深さ40cmを測るものである。底面は平坦で、覆土最下層に暗褐色土ベースの土が認められるが、これ以外は黒褐色土に含有物の稀少な土を埋土としている。以上両者は、墓域である可能性があると思われる。よって、G類土坑と位置づけておく。出土遺物は、両者とも出土量が少ない。SK221では須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具16点、土師土製品2点であり、時期はⅡ3期と判断される。SK222の出土遺物は極めて少なく、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点のみ、時期は不詳である。

37. SK229a・229b・229c

F地区東側、ま21Grに位置する3基の土坑が重複するものである。SK229aは、3基の中で最も新しく掘り込まれているもので、不整形プランを呈し、長径256cm×短径236cm、深さ22～32cmを測り、底面は平坦で遺物が非常に多い土坑である。覆土の上層1層と、下層5層で、白色粘土塊の含有土を確認している。基本として土器廃棄を目的とした大型土坑と考えられ、B類土坑と位置づけられる。SK229bは、SK229aに切られるため半分しか残存しないが、円形を呈するものと考えられる。長径128cm×短径100cm、深さは40～60cmを測り、底面は平坦で出土遺物が多い。覆土上層に白色粘土の小塊含有土をもつ。この土坑は、柱穴状の小型土坑に位置づけられ、C類土坑と判断される。SB229cは、3基の中で最も最初に掘り込まれた土坑である。規模は、長径180cm×短径100cm、深さ50cmを測る。プランは楕円形を呈し、底面はやや掘り鉢状であり、緩やかな土坑壁面をもつ。分類は、典型的なA類土坑とされるものである。出土遺物は、SK229a・b・c全体で、須恵器食膳具84点、須恵器貯蔵具26点、土師器食膳具38点、土師器煮炊具374点、製塩土器等の土師土製品9点、砥石1点である。時期はⅡ1～Ⅱ4古期と判断される。

38. SK234

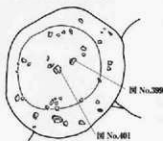
F地区東側中央寄りの、に22Grに位置する土坑である。プランは円形で、土坑規模は長径192cm×短径150cm、しっかりと掘り込みをもつものである。底面は、一段低く掘り込まれており、テラス面を形成している。底面やテラス面は平坦であり、テラス面まで深さ30cm、底面まで深さ40～44cmを測る。出土遺物は多量で、特に上層から多く出土する。総数は、須恵器食膳具88点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具15点、土師器煮炊具192点、土師土製品2点であり、時期はⅡ2新～Ⅱ1期と判断される。この土坑は、土器廃棄を目的としたと考えられ、B類土坑と位置づける。

39. SK235・236・237・212a・212b

F地区東側の掘立柱建物密集区南側、ま21・22Grに位置する、5基の土坑が連なる重複土坑である。SK235は、SK236埋没後に掘り込まれたもので、不整形プランの長径305cm×短径230cmを測る大型土坑である。深さは24～35cmを測り、底面は基本として平坦を呈す。覆土は一括埋土層となっており、遺物出土は多く、土坑類型はB類土坑と判断できる。出土遺物総数は、須恵器食膳具65点、須恵器貯蔵具19点、土師器食膳具22点、土師器煮炊具241点、土師土製品2点であり、時期はⅡ2新～Ⅱ1期とされる。

SK236は、SK235北側に掘り込まれたもので、長径192cm×短径160cmの円形プランを呈すものである。深さは40～46cmを測り、底面は凸凹を形成している。遺物は多目だが、土坑類型はA類としておきたい。出土遺物は須恵器食膳具39点、須恵器貯蔵具8点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具94点、土師土製品2点であり、時期はⅡ1期と判断されるものである。

SK212a 遺物出土状況

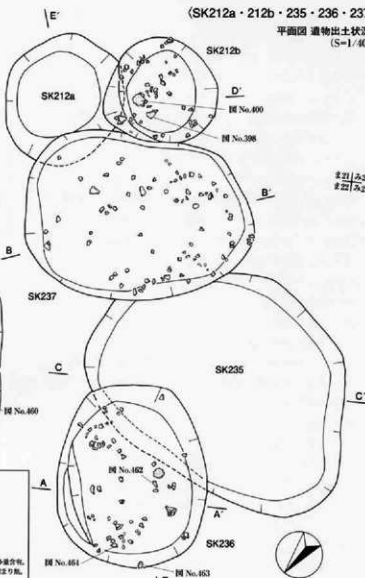


SK235 遺物出土状況



(SK212a・212b・235・236・237)

平面図 遺物出土状況 (S=1/40)



SK212a・212b・235・236・237 土坑表

SK236 墓土

- 1層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色砂質土(IVYR40)が2割程度混在。黄土・小塊多数含有。
- 2層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土塊、黄土塊多数含有。中・細砂ありあり。
- 3層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色土(IVYR20)が5割程度混在。黄土塊多数含有。
- 4層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土(IVYR40)が5割程度混在。

SK237 墓土

- 5層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色砂質土(IVYR20)が割混。褐色土(IVYR40)・黄土塊多数含有。
- 6層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色砂質土(IVYR20)が2割程度混在。黄土塊多数含有。細砂あり。
- 7層 黒褐色土(IVYR20)：黄土が基本だが、黄土塊が少ない。
- 8層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土(IVYR40)が5割程度混在。黄土塊多数含有。細砂ありなし。
- 9層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色土(IVYR20)が4割程度混在。褐色土(IVYR40)中・大塊多数含有。
- 10層 6割以上が砂質土。黄土塊・大塊多数含有。
- 11層 褐色土塊(IVYR40)：黒褐色土(IVYR20)が2割程度混在。
- 12層 黒褐色土(IVYR20)：黒褐色土(IVYR20)が5割程度混在。褐色土塊・黄土塊が多数含有。

SK212b 墓土

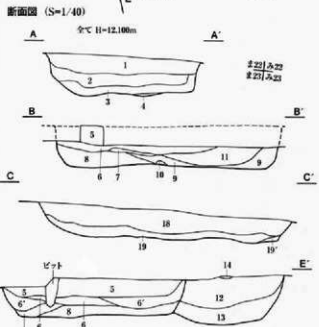
- 13層 12層と似たが、黄土塊が少なく、褐色土塊少量含有。
- 14層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土(IVYR40)中・大塊が4割程度混在。細砂あり。

SK212b 墓土

- 15層 黒褐色土(IVYR20)：黄土塊・褐色土塊少量含有。
- 16層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土塊・黄土塊少量含有。
- 17層 黒褐色土(IVYR20)：黄土塊少量含有。細砂ありなし。

SK235 墓土

- 18層 黒褐色土(IVYR20)と黒褐色砂質土(IVYR40)が5割程度混在。砂質土、黄土塊・遺物多数含有。褐色土(IVYR40)中・大塊多数含有。中・細砂ありあり。
- 19層 黒褐色土(IVYR20)：褐色土(IVYR40)が5割程度混在。黄土塊少量含有。
- 20層 19層と基本的な同層だが、褐色土塊が多い。



第 67 図 土坑遺構図 14 (SK212a・SK212b・SK235・SK236・SK237)

SK237は、SK235の南側に位置する大型土坑でSK212aとも重複、両者を切って位置するものである。規模は長径242cm×短径196cm、深さは40cm、底面は基本として平坦だが浅い掘り込みをもつ部分をもつ。土坑プランは楕円形で、出土遺物は多く、土坑類型はB類と判断できる。出土遺物は、須恵器食膳具49点、須恵器貯蔵具14点、土師器食膳具16点、土師器煮炊具246点で、時期はⅣ2新～Ⅴ1期とされる。

SK212aは、長径140cm×短径124cm、深さ52～54cmの円形プランを呈すもの。底面は若干凸凹状だが基本として平坦で、深く掘り込まれた土坑である。出土遺物は多目で、覆土は2層に分層されるが、ほぼ同質のものとして判断可能である。柱穴状の小型土坑としているC類土坑と判断する。このSK212a埋没後に掘り込まれているのが、SK212bである。規模は、長径124cm×短径117cm、深さ24～36cmを測り、底面は平坦を呈す。覆土は埋め戻し埋土層で、類型はC類土坑とされる。SK212a-b合わせての出土遺物は、須恵器食膳具48点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具14点、土師器煮炊具176点であり、時期はⅣ1期とされる。

これら5基の土坑の前後関連を土層断面から見てみると、最初に掘り込まれているものはSK236とSK212aである。次にSK212bとなり、これら3基の土坑は時期がほぼ同じである。その次はSK235、最後にSK237が掘り込まれたものと思われる。なお、これら土坑5基の内外では炉状遺構が5基検出されているが、検出面が土坑検出面よりかなり高く、土坑と炉状遺構との関連性は薄いものとみている。

40. SK239

F地区東側ま22・23Grに位置、SK235～237重複土坑から北西側に隣接し、同じく掘立柱建物密集区の南側に隣接するものである。隅丸方形の南側にテラス状の落ち込みが付設するような形状を呈している。土坑規模は、長径216cm×短径164cm、深さ54cmを測る。覆土は一括埋土層を示しており、出土遺物は多く、B類土坑とすることができる。出土遺物は須恵器食膳具55点、須恵器貯蔵具20点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具184点、土師土製品5点、砥石1点で、時期はⅢ新～Ⅳ1期と判断される。

41. SK241・249

F地区中央ま26Grに位置、2基の土坑が重複するもの。SK249は長径310cm×短径148cm、深さ4～8cmの長楕円形を呈す非常に浅い土坑である。この中央に、径95～100cmの円形で深さ10cmを呈する小規模な被熱層をもつSK241が位置する。SK241では、被熱焼結した面が2箇所認められ、焼結面にまとまった炭化材も確認されており、焼土坑と位置づけられるF類と判断される。SK241の出土遺物は、須恵器食膳具5点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点であり、時期はⅢ～Ⅳ期とされる。SK249の出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具12点であり、時期は不詳である。

42. SK247 I・247 II

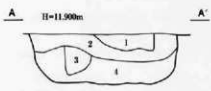
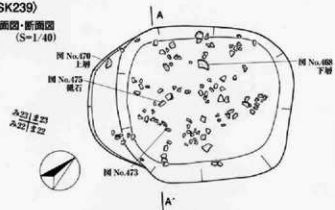
F地区中央ま25・26Gr、SK243の南側に位置する土坑である。2基の土坑が重複、SK247 Iの後にSK247 IIが掘り込まれる。SK247 Iは、長径174cm×短径146cm、深さ28cmを測る円形プランで、底面を平坦にもつ。遺物は少なく、覆土には5層のような白色粘土層が確認されている。土坑類型はA類土坑と判断される。SK247 IIは、長径150cm×短径150cm、深さ20cmの浅いもので円形プランである。底面は若干の落ち込みを有すものの平坦を呈し、覆土には、SK247 Iの5層と同質の白色粘土層を含有する層が認められる。出土遺物は多目で、土坑分類は同じくA類とされる。出土遺物はSK247 I・II合わせて、須恵器食膳具34点、須恵器貯蔵具7点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具130点である。時期は、SK247 IがⅣ2期、SK247 IIがⅤ2期と判断される。

43. SK248

F地区中央でH地区との境、ま・み28に位置する。土坑プランは隅丸方形で、規模は長径294cm×短径280cmの大型土坑である。深さは12～22cmを測り、底面を平坦にもつ。この底面では硬化面が確認されているが、この硬化は堅穴建物で確認されるような硬さではなく、強く締まる程度のものである。硬化の状況は3種類のタイプに分けることができる。硬化面1は、地山面が硬化するもので、黒褐色土の大塊を疎らに含むものである。硬化面2は、黄褐色の地山土に黒褐色土大塊が5割率で含まれるものである。硬化面3は、黒褐色土が主体で黄褐色土の中へ大塊を疎らに含むものであり、硬化面1・2に比べ硬化の具合がやや軟質である。以上の硬化面は、貼床されたものではなく、掘方や掘方土坑も一切検出されていない。地山土が硬化し、7層のような層を形成するのである。この土坑は、現地調査で当初堅穴建物としていたが、堅穴建物と判断するに至るカマドや柱穴等の検出がなかったため、土坑に変更されたものである。本土坑は、小型堅穴状のH類土坑と位置づけられる。なお、

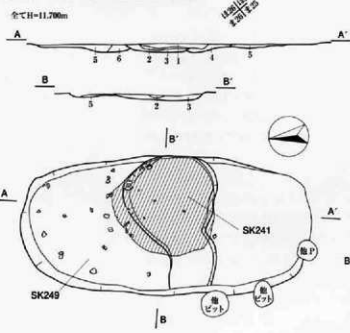
(SK239)

平面図・断面図 (S=1/40)

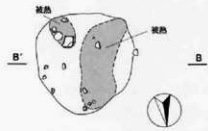


SK239 土層表
 1層 黒褐色土(C0YR2.5) 暗褐色砂質土(7.5YR6.0) 1割程度。粘土塊少量含有。硬まりあり。
 2層 黒褐色土(3.0YR2.5) 暗褐色土(7.5YR6.0) 3割程度。炭化塊・粘土塊少量含有。硬まりあり。
 3層 黒褐色土(C0YR2.5) 褐色土大塊・粘土塊少量含有。
 4層 黒褐色土(C0YR2.5) 黄土層小塊・褐色土塊少量含有。炭化塊含有。

(SK241・249) 平面図・断面図 (S=1/40)



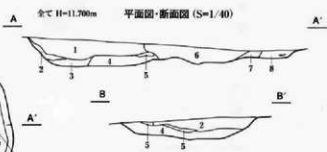
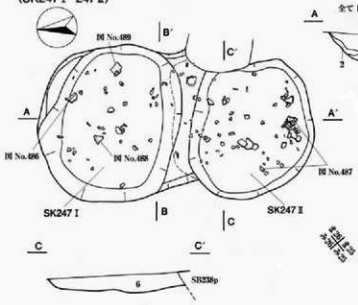
SK241 被熱状況



SK241・249 土層表
SK241 覆土
 1層 黒褐色土(7.5YR3.0) 黄褐色粘土・炭化小塊少量含有。土層が多少厚めに存在。
 2層 3層の小塊を含む(7.5YR6.0)黄土中・大塊少量含有。黄土。粘土が散らばっているところが多くなる。
 3層 暗褐色土(7.5YR2.5) 黄褐色粘土小塊少量含有。炭化土小塊少量含有。
 4層 黒褐色土(7.5YR2.5) 黄褐色粘土小塊を少量含有。2層の粘土小塊少量含有。
SK249 覆土
 5層 黒褐色土(C0YR2.0) 黄褐色粘土小塊少量含有。炭化小塊少量含有。
 6層 黒褐色土(7.5YR2.0) 黄褐色粘土小塊少量含有。



(SK247 I・247 II)



SK247 I・247 II 土層表
SK247 I 覆土
 1層 黒褐色土(7.5YR2.5) 黄褐色粘土・炭化小塊を少量含有。やや硬まりあり。
 2層 黄褐色粘土土(7.5YR3.0)と黄褐色粘土土(7.5YR6.0)大塊が主体。
 3層 黒褐色土(C0YR2.5) 黄褐色粘土大塊を少量。炭化小塊少量含有。硬質石灰。
 4層 黒褐色土(7.5YR2.5) 硬質石灰中・大塊少量。炭化小塊少量含有。硬質石灰。
 5層 反白色土(C0YR7.0) 灰・糠状や膠状の分布。
SK247 II 覆土
 6層 黒褐色土(C0YR2.5) 黄褐色粘土大塊を少量。炭化小塊少量含有。やや硬まりあり。
 7層 黒褐色土(C0YR2.5) 黄褐色粘土小塊少量含有。5層と中間の反白色土が主体となる。
 8層 黒褐色土(7.5YR3.0) 黄褐色粘土小塊を少量含有。炭化小塊少量含有。

第68図 土坑遺構図 15 (SK239・SK241・SK249・SK247 I・SK247 II)

遺物は全体に疎らに出土し、遺物の総数は須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具53点であり、時期はⅡ3期と位置づけされる。

44. SK251

F地区西側、み31Grに位置するもので、規模は長径160cm×短径117cmを測り、菱形に近い歪な方形プランを呈す。深さは12cmと浅く、底面はほぼ平坦で、出土遺物は殆どない。この土坑は上面が削られてしまった墓墳の可能性のあるものと考えられ、G類土坑としておく。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点、この他中世陶器が1点出土する。時期はⅡ3期と判断される。

45. SK253

F地区西側は32Grの削平区域で検出された土坑である。規模は長径200cm×短径75cmを測り、平面プランは長楕円形を呈す。深さは10cmを主体に最も深く14cm、底面は若干の傾斜と凸凹を形成する。遺物の出土は極めて少なく、本土坑も上面が削平を受けた墓墳である可能性が考えられるため、土坑類型はG類土坑としておく。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点と土師器煮炊具3点のみ、時期は不詳である。

46. SK256a・256b

F地区西側端へ35Grに位置、2基の土坑が重複するものである。SK256aは、SK256b埋没後に掘り込まれた土坑で、方形に近い楕円形プランを呈し、規模は長径284cm×短径190cm、深さ30～44cmを測る。底面は所々平坦面をもちつつ、さらに深い掘り込みや凸凹状を呈す。なお、土坑類型は当遺跡で典型的なB類土坑とされる。SK256bは、隅丸方形形状を呈し、長径210cm×短径残長80cm、深さ20cmを測るものである。底面はほぼ平坦であり、浅く遺物も多くないので、A類土坑と位置づけしておく。出土遺物は、SK259a・b合わせて、須恵器食膳具18点、須恵器貯蔵具8点、土師器食膳具21点、土師器煮炊具108点、砥石1点、灰輪陶器2点、古代末食膳具1点が出土するが、時期を判断することは難しく不詳である。

47. SK259a・259b

F地区西側、へ33・34Grに位置して2基の土坑が重複するものである。SK259aが新しく、SK259bを切って掘り込んでいる。SK259aは、2基のうち北東側に位置するものである。楕円形プランを呈し、長径215cm×短径154cm、テラス面を西側に形成しながら底面へと至り、更に浅い掘り込みをもっている。このテラス面までは深さ20cm、底面までが40cmを測る。出土遺物は土坑規模の割に少なく、A類土坑と判断する。SK259bは、規模が長径200cm×短径120cm、深さ32cmを測るものである。楕円形プランを呈し、底面は平坦面を形成し、遺物は少なく、A類土坑と位置づけしておく。出土遺物は、SK259a・b合わせて、須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具87点、土師器土製品1点であり、時期はⅢ新からⅣ1期と判断される。

48. SK262a・262b

F地区東側の掘立柱建物密集区域の、ほ22・23Grに位置し、2基の土坑が重複するものである。SK262aは、SK262bの後に掘り込まれたもので、円形プランを呈し、長径160cm×短径150cm、深さ50cmを測る。出土遺物は多目だが、覆土の状況からみても、C類土坑と位置づけられるものである。SK262bは、洋梨形とも言える楕円形プランを呈し、北側がSK262aに切られるため長径の残存長は250cm、短径210cm、深さは40cmを測る。底面は平坦を呈し、出土遺物は全体的にちらばる状態で、B類土坑といえることができる。出土遺物は、SK262a・b合わせて、須恵器食膳具53点、須恵器貯蔵具14点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具294点、土製支脚等の土師器土製品2点であり、時期はⅣ2期と判断される。

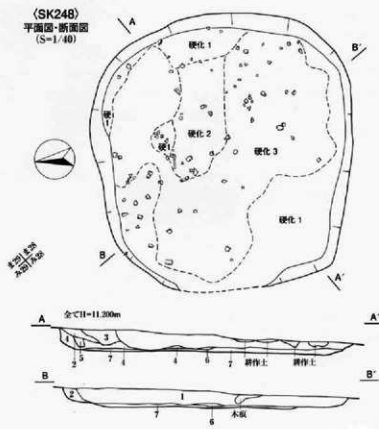
49. SK263

F地区東側は・まー23・24Grに位置する土坑である。土坑規模は長径270cm×短径250cm、深さ32～38cmを測り、ほぼ円形を呈す。SB207・230～232と重複、特にSB231内に収まるように位置しており、遺物の時期が重なる。底面は若干凸凹状だが、ほぼ平坦を呈すと言えよう。土坑規模の割に遺物出土は少ないが、一応B類土坑としておく。出土遺物は、須恵器食膳具65点、須恵器貯蔵具25点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具294点、匝鉢38点であり、時期はⅢ～Ⅳ1期とⅤ期の2時期に及ぶ。

50. SK270a・270b

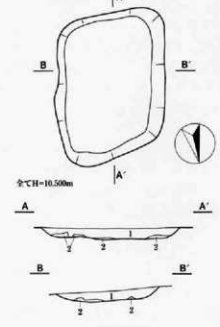
F地区西側端ま35Grに位置するもので、2基の土坑が重複するものである。SK270aがSK270bよりも新しく、SK270aは西側が削平により1/3～1/2程失われている土坑である。規模は残長で長径195cm×短径100～120

(SK248)
平面図・断面図
(S=1/40)



- SK248 土層表**
- 1層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土(TAYK20)中塊少量、中塊数、大塊少量含有。硬化小・中塊少量含有。
 - 2層 黄褐色粘土(TAYK20)：黄褐色粘土少量含有。硬化小塊少量含有。
 - 3層 黄褐色土(TAYK20-30)：1層に似て、中塊数、大塊少量含有。硬化小塊少量含有。
 - 4層 黄褐色土(TAYK20-30)：黄褐色土に、中塊多数、硬化小塊少量含有。中塊数、硬化小塊少量含有。
 - 5層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に中塊少量含有。粘りからしめ、粘り。
 - 6層 黄褐色土(TAYK20-30)：砂質で、粘り、粘り、含有物なし。
 - 7層 黄褐色粘土上、黄褐色土中・大塊が固い。硬質で粘り状の硬塊に包まれるが、2-3cmで地上露出する。

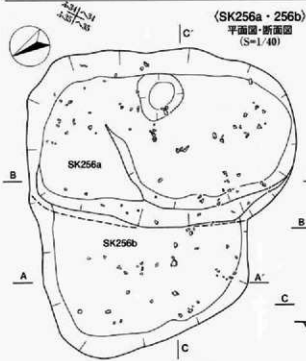
平面図・断面図
(S=1/40)



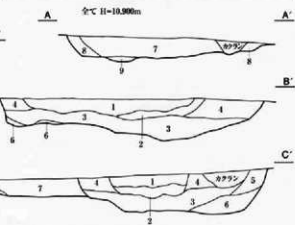
- SK251 土層表**
- 1層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に中塊少量含有。粘りなし。
 - 2層：1層土と黄褐色粘土に包まれる。硬質粘り。粘りなし。



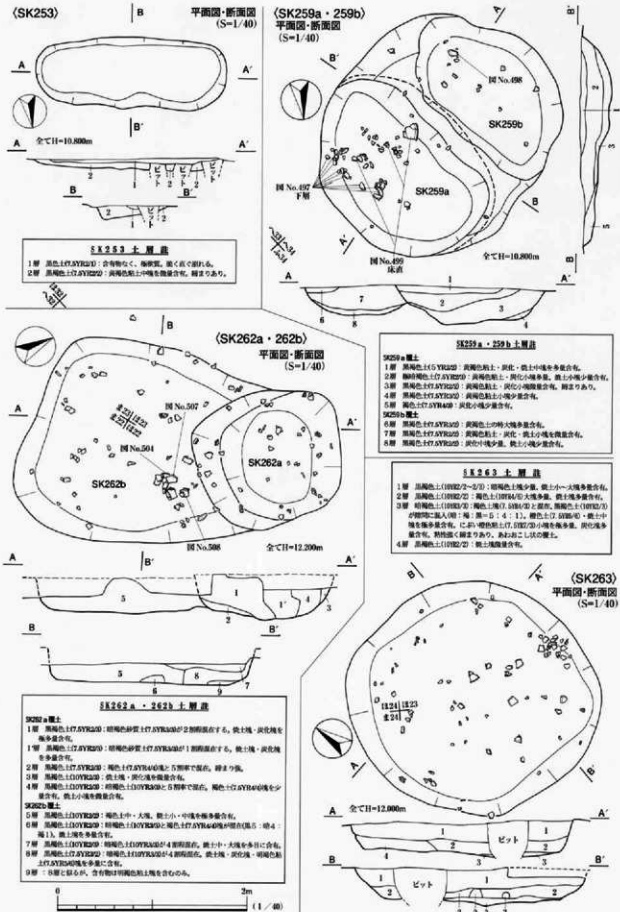
(SK256a・256b)
平面図・断面図
(S=1/40)



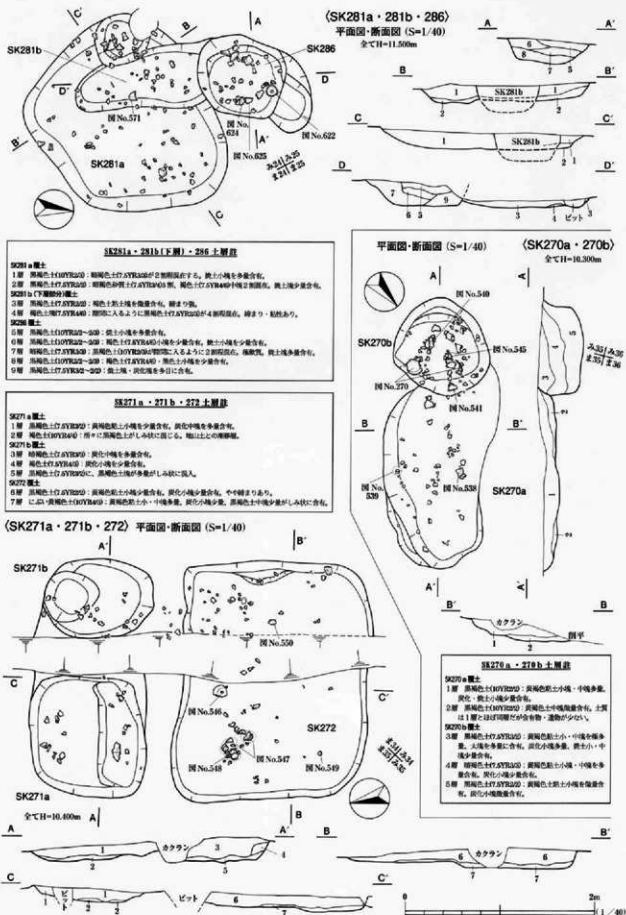
- SK256a・256b 土層表**
- SK256a 層土**
- 1層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に塊数多量含有。硬化小塊少量含有。
 - 2層：1層土に似て、粘り4層土が塊りつら。黄褐色土の大塊も固い。
 - 3層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に中塊少量含有。硬化小塊少量含有。粘り小塊も数層露出。
 - 4層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に中塊少量含有。
 - 5層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に塊数多量含有。
 - 6層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に中塊多量、大塊少量含有。硬化小塊少量含有。
- SK256b 層土**
- 1層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に塊数多量含有。硬化小塊少量含有。
 - 2層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に塊数多量含有。硬化小塊少量含有。
 - 3層 黄褐色土(TAYK20)：黄褐色土に大塊4層露出。



第69図 土坑遺構図 16 (SK248・SK251・SK256a・SK256b)



第 70 図 土坑遺構図 17 (SK253・SK259a・SK259b・SK262a・SK262b・SK263)



第71図 土坑遺構図18 (SK270a・270b, SK271a・271b, SK272, SK281a・281b, SK286)

cm、深さは、10～18cmと浅い。出土遺物は少なく、土坑類型はA類と判断する。SK270bは、SK270aの南側に位置するもの、古い方となる。規模は長径105cm×短径95cm、深さは45cmと深い。底面は窪み形状をもってあり、出土遺物は多い。土坑類型は、柱穴状の小型土坑と位置づけられるC類としてよいだろう。出土遺物は、SK270a・b合わせて、須恵器食膳具17点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具28点、カマド石5点である。時期は、SK270aがⅡ3～Ⅲ期、SK270bがⅣ期と判断される。

51. SK271a・271b、272

F地区西側端にて検出された隣接する3基の土坑である。SK271aは、隅丸方形プランを呈し長径130cm×短径120cm、深さ16cmの浅いものである。底面には南側で一段の浅い落ち込みをもつ。出土遺物は少なく、A類土坑とするのが妥当だろう。SK271bは、SK271aの東側に位置する、長径114cm×短径84cm、深さ26cm測る楕円形プランの土坑である。底面は平坦だが北側に浅い落ち込みを有し、土坑類型では、C類土坑としておく。SK271a・bの出土遺物は少なく、両者の総数で、須恵器食膳具19点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具70点である。時期を判断することは難しく、時期不詳である。SK272はSK271a・bの南側に位置するものである。方形プランを呈し、長径252cm×短径200cmを測る。深さは12～22cm、底面にはテラス面を形成しつつ一段浅い掘り込みをもっている。出土遺物は多目で、総数は須恵器食膳具23点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具47点、土製支脚1点であり、時期はⅣ1期と判断される。土坑類型は、方形で小型堅穴状のものであり、H類土坑と類型づけられる。なお、以上3基の土坑は時期が同じであり、出土遺物同士が接合されている。

52. SK281a・281b、286

F地区中央み24Grに位置する、3基重複の土坑である。SK281aは長径219cm×短径172cm、深さ17～20cmを測る不整形プランである。覆土には底面近くに白色粘土塊が検出されている。出土遺物も多く、この土坑はB類と判断してよいだろう。SK281bは、SK281aを切って掘り込まれ、北側はSK286に切られている、楕円形の土坑である。長径は残存で130cm、短径56～70cm、深さは30cmを測り、類型はA類土坑としておく。SK281の出土遺物はa・b合わせて、須恵器食膳具88点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具133点、匣鉢2点、石製品8点で、時期はⅤ期と判断される。SK286は、長径93cm×82cmの円形プランで、深さ26cmを測る柱穴状の小型土坑であり、土坑分類はC類とされるもの。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具54点、土師器製品1点であり、時期はⅤ2～Ⅵ1期である。

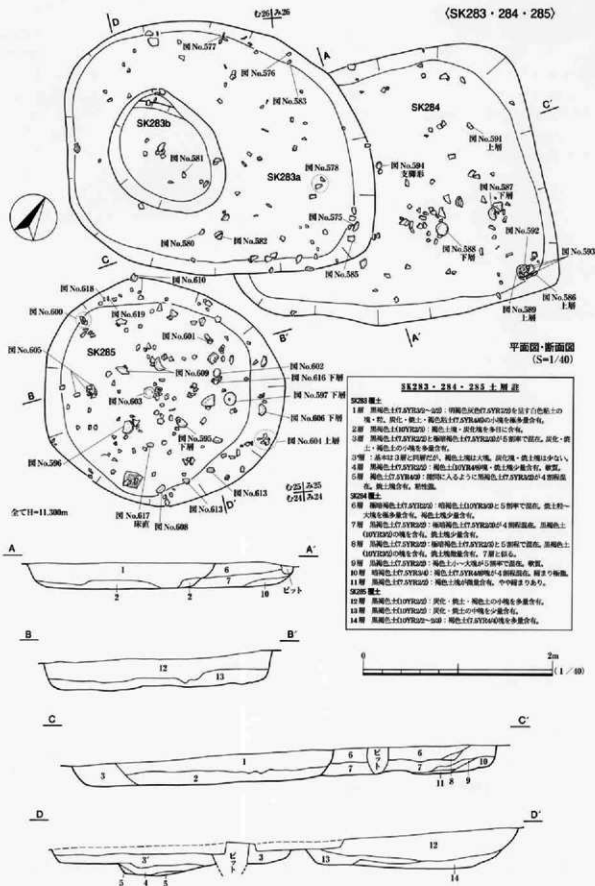
53. SK283・284・285

F地区中央み・む25Grで、3基の土坑が重複・隣接するもので、SK284埋没後に掘り込まれたのがSK283である。SK283の規模は、長径330cm×短径268cmの楕円プランで、底面の西側に更に深く掘り込まれた円形の落ち込みが確認されている。この落ち込み以外は平坦を呈し、深さは24～30cmを測る。出土遺物は多く、須恵器食膳具100点、須恵器貯蔵具25点、土師器食膳具19点、土師器煮炊具285点、土師器製品4点、石製品2点であり、時期はⅡ3期とⅣ2新からⅤ1期の2時期をもつ。この土坑は典型的なB類土坑と言える。

SK284は、SK283の北東側に位置、長径342cm×短径280cmを測る方形プランを呈するもの。深さは250～280cmを測り、底面は平坦で、土間的な堅穴状土坑と言えるだろう。小型堅穴状のH類土坑と位置づけしておく。ただし、この土坑には土層断面での記述はないが、カマド粘土や支脚が捨てられており、堅穴建物に関連して廃棄機能をもった可能性もたれよう。出土遺物は、須恵器食膳具64点、須恵器貯蔵具18点、土師器食膳具12点、土師器煮炊具154点、土製支脚1点、石製品2点で、時期はⅣ2古期と判断される。

SK285は、SK283の南側に隣接して位置する土坑である。プランは円形を呈し、規模は長径254cm×短径240cm、深さ30～40cmを測る。底面は平坦だが西側が若干深くなって掘り込まれている状態である。出土遺物は多く土坑全体から出土しており、完形品などまとまったものが多い。大型の土器廃棄坑として典型的なB類土坑と判断できるものである。出土遺物の総数は、須恵器食膳具144点、須恵器貯蔵具25点、土師器食膳具14点、土師器煮炊具333点、土師器製品5点であり、時期はⅤ1期と判断されるものである。

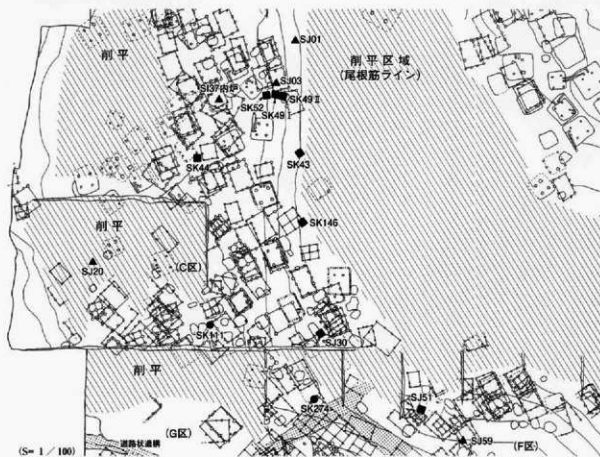
(SK283・284・285)



第72図 土坑遺構図19(SK283・SK284・SK285)

第3節 手工業生産関連遺構

顔見町遺跡は、各種手工業生産を主な生業の一つとする集落遺跡であることは、遺跡概要のところでも述べたが、今回の報告地区でも、比較的多くの手工業生産関連遺構が検出されている。土師器焼成坑がSK146とSJ30、SJ51の3基、鍛冶炉がSJ20とSJ59の2基、製炭土坑がSK111とSK274の2基で、B地区で見られたような手工業生産関連遺構の集中分布のような在り方はなく、調査区に広く散在するような分布の在り方を示す。以下に各種生産遺構の説明を行う。



第73図 B・C・F区の手工業生産関連遺構分布図 (■—土師器焼成坑、●—製炭土坑、▲—鍛冶炉)

第1項 土師器焼成坑

1. SK146

尾根筋側の削平区近くに存在する土師器焼成坑で、時的に近いB地区の土師器焼成坑SK43と同様の立地をする。削平地のため傾斜は不明だが、SK43同様に、奥壁を山側に設定して、床面をほぼフラットに掘削する。

縦軸長110cm、横軸長148cmの横長型隅丸方形プランで、SK43よりもひとまわり小型化している。奥壁や側壁の立ち上がりは削平のために判然としませんが、やや開き気味に立ち上がり、前壁は明瞭な壁の立ち上がりをもたず、開口するタイプとみられる。奥壁深は最も残りのよい部分で10cm、床長縦97cm×横148cm、床面積14㎡程度で、小型ながらも方形を維持する平面プランをもつ。削平されていなければ、奥壁の立ち上がりも十分にあった可能性は高く、この時期の土師器焼成坑としては古代的な形態を維持している。

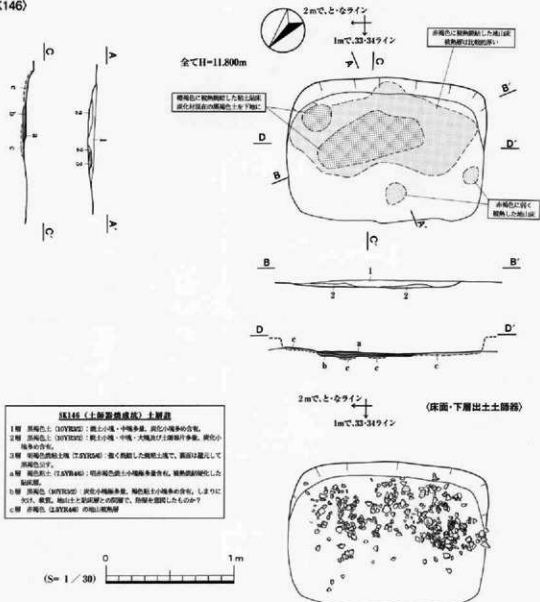
焼成坑の被熱は床面中央付近のやや奥壁寄りに集中しており、前部にかけては弱い地山被熱痕跡が確認されただけであった。地山がそのまま酸化被熱する箇所もあるが、床面中央から奥壁際にかけて黄褐色粘土を貼床しており、そこでは地山土との間に炭化材を混在させた黒褐色土が挟み込まれていた。炭化材を混在させる意味として、床面の防湿機能が考えられるが、貼床をして、地山を直に床にしなかったのも同じ目的があったからだろう。土器焼成において湿気は温度上昇の妨げになるだけでなく、焼成破損や黒斑発生の要因ともなりかねない。土

土師器焼成坑の床面に貼床や防湿装置などの造作を行うことは事例として多くはないが、南加賀窯の土師器焼成坑を数多く検出した二ツ梨一貫山支群の8世紀後半の事例では、貼床や床下暗渠溝など防湿効果を高めた構造が多く確認された（小松市教育委員会「二ツ梨一貫山窯跡」2002年）。匣鉢形土製品の存在や土師器焼成坑の形態等をはじめとして、額見町遺跡の土師器焼成坑の技術系譜が南加賀窯であったことを物語る根拠となろう。

埋土に灰層の確認はなかったが、下層には燃料材であろう炭化材小片と桶糞状黒灰の粒が混在しており、500点を越える土師器小片が遺存していた。土師器小片は長胴釜等の煮炊具片を52点含むが、それ以外は全て椀類の食膳具破片で、内面黒色焼成された土師器は確認されず、その窯道具と考えている匣鉢状土製品も出土していないなど、当焼成坑では内黒土師器生産を行っていなかった可能性が高い。内黒の生産は古代Ⅵ1期以降、継続的に生産され、南加賀窯終焉後もSK43などで継続的に行われているものだが、古代Ⅶ2期に一時衰退する傾向があり、土師器食膳具形態などから見ても、当焼成坑は内黒土師器生産衰退期にあたる時期と理解する。

土師器片には過度の焼成や急激な昇温により焼き弾けた製品が多く確認され、また、通常、つくはずがない箇所に見える黒斑が見られる破片や焼き歪みの激しい土師器片がある（写真70・71）。焼成粘土塊A類と呼称する製品固定の道具として使われるものは確認されていないが、これら土師器片がそのような役割をしていたのであ

(SK146)



第74図 手工業生産関連遺構図1 (SK146:土師器焼成坑)

ろう。当焼成坑の湿気の多い地盤を考えれば、土師器片を意識的に床に敷いて焼成していた可能性は高く、焼成中に破損した土師器片をそのまま遺棄したものは極めて少なかったのではないかと考える。

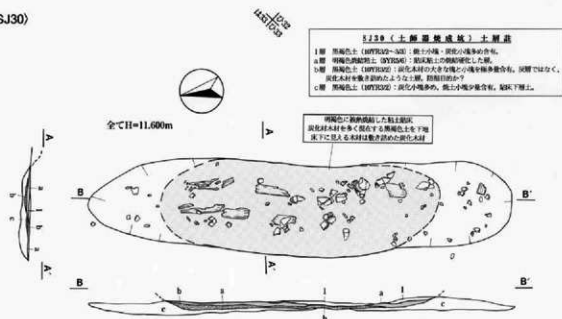
2. SJ30

尾根筋側の削平区から若干鞍部へ降りた所に立地するが、SK43、SK146とはほぼ同じ等高線上に存在する土師器焼成坑である。掘立柱建物の密集区に近いところに存在し、SK175の上に重なって、SK175が埋められた後に作られている。溝状に長楕円形に掘られた長軸315cm、短軸60cm、深さ10cm弱の土坑の上に貼床して土師器焼成施設にしている。

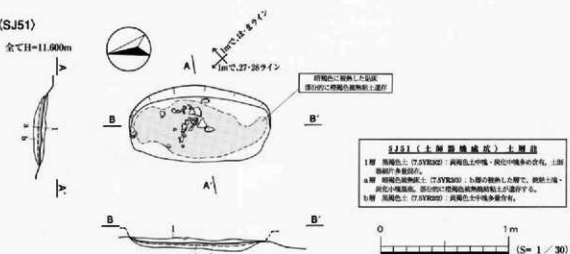
貼床した被熱床面の範囲は長軸210cm、短軸60cmの楕円形で、中央がやや窪むような形状をもつ。貼床は黄褐色粘土を比較的厚く貼り込むものだが、その床下には炭化材を含む黒褐色土が挟み込まれている。炭化材は土坑の長軸に沿って敷かれた部分もあり、全面に及ぶものではないが、防湿効果を狙って意識的に床下に敷いたものと考えられよう。貼床は部分的に剥がれている箇所もあるが、かなり硬く被熱焼結している部分もある。

当土坑の形状や被熱床面の部分的な剥離など、当初は煮炊き用の炉状遺構と判断し、土師器焼成坑とは考えなかったが、内黒土師器焼成のための焼成道具と想定している匣鉢形土師器製品が多数出土したこと、焼成測鑑

(SJ30)



(SJ51)



第75図 手工業生産関連遺構図2 (SJ30、SJ51：土師器焼成坑)

したような土師器片または断面に二次被熱を受けたような土師器片が多く出土したこと、出土する煮炊具に煮炊き使用の痕跡が認められなかったことから、土師器焼成遺構と判断した。ただ、土師器焼成坑としての定型的な形状をなしておらず、匣鉢形土製品は出土しておらず、土師器焼成坑とするには疑問視される部分もある。ただ、消去法でいけば、被熱痕跡と焼成痕跡、焼成道具の要素から、土師器焼成に伴う被熱遺構とすべきであり、現状では土師器焼成坑の他に選択肢は浮かばない。なお、当土坑の時期だが、出土する浅鍋等の器形から、VI 1期からVI 2期頃と考えている。

3. SJ51

SJ30よりさらに南側、尾根筋削平区域から若干緩部へ降りた所に立地する土師器焼成坑で、SK43やSK146とほぼ同じ等高線上に存在する。掘立柱建物の密集区内に存在しており、柱穴との直接的な重複はないが、総柱建物SB218に重複している。傾斜角6度の緩傾斜面に、奥壁を山側に設定して、床面をややフラット気味に掘削するもので、斜面に沿って横長の楕円形土坑を構築する。規模は縦軸長52cm、横軸長105cm、奥壁高20cm程度で、土師器焼成坑の中ではかなり小型のものである。SJ30と同様、SK43等の定型的な土師器焼成坑に比べると、形態や規模などまとまりをもっておらず、小規模な一過性の生産であったものと見る。大量生産する窯場での土師器焼成坑とはその性格を大きく違えていたものだろう。

焼成坑の被熱は土坑床面のほぼ全体に及ぶが、貼床粘土が遺存して硬質に酸化被熱焼結した部分は僅かであり、ほとんどは暗褐色系の焼土塊を多く混在する土が被熱する程度であった。この部分も貼床が剥がれた可能性もあるが、被熱はしており、部分的に粘土貼床するものであったろう。壁面に被熱痕跡を残す箇所はなく、埋土に灰層や燃料材の遺存する部分はない。

遺物は床面直上から出土しており、土師器浅鍋、短脚小釜などの煮炊具片を中心に62点出土する。煮炊具片は外面スス痕跡など煮炊具使用痕跡の見られるものはなく、焼成剥離したような薄い剥片状のものや2次被熱して赤化したものなどが多かった。煮炊具の時期から概ね古代IV 2期からV期の間で考えている。

第2項 鍛冶炉

1. SJ20

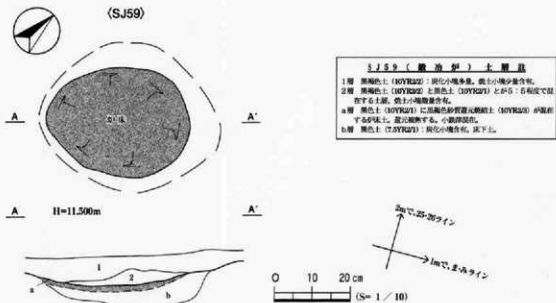
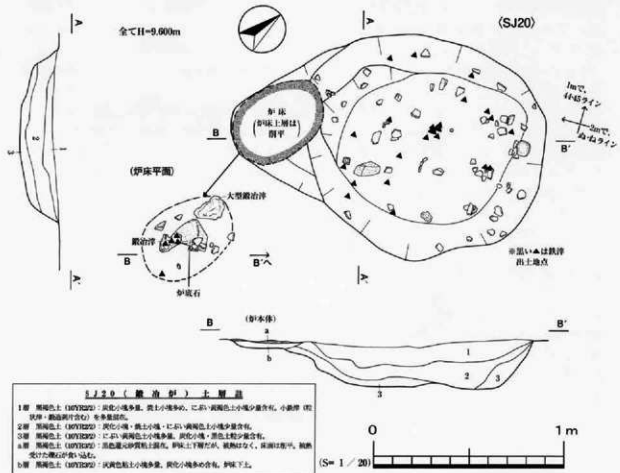
C地区の北西側、削平の著しい区域で検出された鍛冶炉である。周辺の遺構は削平されて残っておらず、近接する竪穴建物の遺存状態から見て、恐らく20～30cmは上部の削平を受けている可能性がある。検出された鍛冶炉は、土坑の張り出し部に作られたもので、土坑は135×118cmの楕円形プラン、深さ25cmを測る。南西側に浅い窪み状の張り出しがあり、その部分に流紋岩系の礫石と鍛冶炉特有の還元焼結した黒色の炉床土が確認された。炉が構築されたと思える部分の中央付近に22×16cmの大型の礫石が上部平坦となるように埋め込まれており、その周辺で大型の鍛冶滓と流動滓が出土した。隣接土坑の埋土上層上面からも多くの碗形鍛冶滓、小型鍛冶滓、羽口とともに複数の同質石材をもつ礫が出土しており、C地区から同質の流紋岩の礫に溶着した鉄滓が付着する事例が多く確認された点などを総合的に判断して、SJ20については、流紋岩の礫石を炉材として作り上げた石囲炉であったと考えた。SJ20の礫石の食い込む位置が中央であることは気になるが、この石を基底部の石とし、その周りに大型の礫石を配列したものと見る。この石は炉の芯材として組まれたものであり、周りに配列した礫石にかけて粘土を貼り付けて炉体を作り上げるような構造であったのだろう。

当鍛冶炉は炉床土の一部を遺存するが、炉の規模を復元できるような炉床痕跡はなく、炉体を囲む石材の断片も遺存していなかった。ただ、炉底部に残された流動滓や大型の碗形鍛冶滓は、比較的初期の精錬を行えるような大型の炉体を有していた可能性を示している。しかしながら、一方で、炉床土内で検出された鍛冶剥片や粒状滓など鍛冶鍛冶を行なった痕跡もあり、精錬のみならず様々な工程を可能とする鍛冶炉であったものと推察される(穴澤義功氏よりご教示)。

当遺構の時期については、鍛冶炉に伴って遺物の出土がないため、間接的な時期比定になるが、隣接して掘られる土坑の遺物が古代IV 2期からV 1期に位置づけられるものである点から、その直後の時期、遅くともV 1には構築されたものと見る。長期で操業する可能性もあるため、廃絶時期はわからないが、大型の精錬炉であれば、比較的長期操業も考えられよう。

この石囲炉の形状をもつ鍛冶炉は、朝鮮半島では4～7世紀に複数の確認事例があると聞くが、日本国内では

類例に乏しく、北陸では羽咋市寺家遺跡で 2 基検出されるに止まる（石川県立埋蔵文化財センター「寺家遺跡発掘調査報告書 1」1986 年、187 - 190 頁）。いずれも孤立柱建物内に設置されるもので、孤立柱建物は 2 間 × 3 間のしっかりとしたものである。建物は 8 世紀後半頃と見られ、鍛冶炉も同時期と考えられている。残りのよい S102 鍛冶炉は長さ 20 cm 程度の花崗岩を径 25 cm 程の範囲を囲むように円形配置してその上に厚さ 2 cm 程度の粘



第 76 図 手工業生産関連遺構図 3 (SJ20、SJ59 : 鍛冶炉)

土を貼り付けて炉床とするもので、直径 20 cm、深さ 12 cm の円形すり鉢状を呈す。糊装着のための溝も設けられており、遺存状態がよい。遺存状態の悪い Si01 でも大型の花崗岩を配置して作られていることがわかっているが、ここでは炉の基底部に扁平な 30 × 50 cm の石を平坦に据えており、額見町 SJ20 の炉底石と類似する。時間的にも近く、寺家遺跡と共通する炉の構築方法であった可能性が高い。

なお、額見町遺跡に近接する念仏林南遺跡では 7 世紀前半の 29 号竪穴建物内に小型鍛冶炉の付設が見られ、ここでは炉床の横に大型の石が据え置かれていた（小松市教育委員会「念仏林南遺跡Ⅱ」1995 年、146 - 148 頁）。鍛冶炉の半分は調査区外であったため、全形を知ることはできなかったが、石囲炉の構造であった可能性を持つ。7 世紀前半に上る事例であり、これが石囲炉構造であったとすれば、額見町遺跡の鍛冶炉もその生産の初期段階から石囲炉構造を採用していた可能性をもつと言えよう。額見町遺跡で確認される L 字型カマド付設置穴建物は当集落が朝鮮半島系移民で形成されたことを物語るが、額見町遺跡の集落形成期、丘陵部では製鉄が開始され、同時に額見町遺跡で鍛冶滓や砂鉄製錬滓が検出されるようになるなど、南加賀地区の製鉄を担う技術者の集落として額見町遺跡が形成されたと予想している。丘陵部の製鉄遺跡で朝鮮半島との関連性を示す資料は確認できていないが、当地域の鍛冶炉構造が初期から石囲炉構造を呈しているとするれば、製鉄の開始期に朝鮮系移民が強く関与した根拠資料となりえるだろう。額見町遺跡の調査では明確にその時期の石囲炉は確認されていないが、今後、三湖台地の古代集落遺跡を調査する中で発見される可能性は高いと考える。

また、石囲炉構造で共通する寺家遺跡との関連では、気多大社と額見町遺跡群内に所在するであろう気多御子神社との関連性が気になる。気多御子神社が所在したと考えている地域に近接して、大規模な祭祀場が設けられており、集落だけではなく、この台地集落群の共同の祭祀場として機能していた可能性を持つ。この祭祀場は柴山岡から延びる谷部の最奥にあたり、海から上がる邪気を祓うような祭祀が行なわれた可能性を持つ。そこに渡来的要素が絡むのかは、今後の整理報告で明らかとなるが、寺家遺跡に見られる祭祀と共通する要素があるとするれば、興味深く、額見町遺跡の性格を考える上で、寺家遺跡との関連性は今後注目される要素であろう。

2. SJ59

F 地区の南西側、土坑や掘立柱建物の密集する区域に存在する鍛冶炉で、SK284 の埋土上面より検出されるため、土坑廃絶の後に構築されたものとみなされる。また、鍛冶炉は古代の掘立柱建物 SB237 の内部に位置しており、当掘立柱建物は規模としては大きい、当鍛冶炉に伴う覆屋、工房的な建物であった可能性もある。鍛冶炉は、火の発生する範囲が狭いことと鍛冶作業における炎の色の識別を重視するため、太陽光線を遮断できる屋内であることの方が都合がよいとされており、鍛冶炉の建物内設置は必然的とも言われている。SK284 は古代Ⅳ 2 古期の遺物が出土しており、SB237 からはⅤ期前後の遺物が出土しているところから見て、鍛冶炉は掘立柱建物とともにⅤ期に構築されたものと予想しておきたい。

鍛冶炉は還元焼結した炉床のみ検出されたもので、炉壁等の炉体構築物は遺存していなかった。炉床は 30 × 37 cm の楕円形で、やや窪むような形状をもつ。炉床土上面から多くの鍛冶剥片と粒状滓、小型板形鍛冶滓が採取できており、炉の周辺からも板形鍛冶滓や流動滓、鍛冶滓が出土する。これら周辺の鉄滓も当鍛冶炉に伴うものと予想でき、炉壁等が消失しているため、炉の構造や規模は復元できないが、炉床の大きさや炉床に残された鍛冶剥片、小型ないしは極小の板形鍛冶滓の存在から、鍛冶工程の最終段階の作業を主とした小型の鍛冶炉であったものと予想する。

なお、炉床土は黒色土に還元焼結した砂質土塊が混在するもので、厚さは 2 cm 程度。その下には掘方状の浅いくぼみを有している。

第3項 製炭土坑

1. SK111

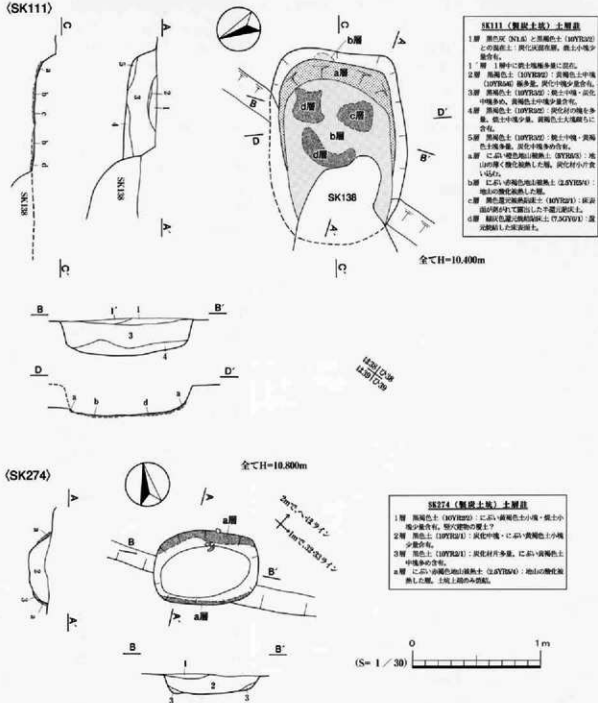
C 地区の中央付近、竪穴建物や掘立柱建物が密集する区域で検出された製炭土坑である。後世の田地造成により土坑の北西側が削平されているのと、SK138 と重複しているために、前部に当たる箇所が判然としないが、縦長四方形状の形態をなすものと見られる。当箇所はさほど傾斜度を持たないが、地形的に山側にあたる東側に奥壁を設定し、床面をほぼフラットに掘削する。

縦軸長 130 cm 以上、横軸長約 100 cm の規模で、深さは 20 cm 程度を測る。奥壁、側壁とも比較的立ち気味で、

前壁は不明だが、形状からして緩く傾斜して立ち上がるものと予想される。床長は縦 105 cm × 横 85 cm 程度、床面積では 0.8 m²程度と予想され、製炭土坑としては比較的大型のしっかりとした構造のものと言える。

製炭土坑の被熱は床面全体と奥壁と左側壁の一部見られる。壁の被熱は一部が酸化被熱する程度で弱いが、床の被熱は強くしっかりしている。地山酸化被熱している部分と還元焼結している部分とがあり、最も還元焼結した部分（d層）は粘土の貼床が確認される。表面が緑灰白色に強く還元焼結しており、それが割かれた部分では黒色の還元層（低温還元層：c層）が露出する。その黒色還元層までは貼床で、貼床が割かれた部分では酸化被熱した地山が露出している。

埋土に灰層の確認はなかったが、下層の黒褐色土には炭化材片が多量に混在しており、特に手前側の層で多く確認できた。奥壁側の埋土下層では壁の崩れたような土が溜まっており、度重なる焼成で表面の層は剥落すること(SK111)



第77図 手工業生産関連遺構4 (SK111、SK274: 製炭土坑)

とが多かったであろう。埋土中には遺物の混在がほとんどなく、少量の土器が混在する程度である。Ⅳ1期からⅣ2古期のものと見られるが、当土坑を切って存在するSK138がⅣ2古期であるため、Ⅳ2古期を下限としてⅣ1期までの幅で考えておきたい。

この製炭土坑と位置づけられる土坑は、「伏焼法」と呼ばれる簡易な木炭生産法で炭焼きを行なった焼成遺構だと考えられている。古代以来、近代においても行なわれていた炭焼き方法で、土坑に木炭となる木材を積み重ねて点火し、ある程度木材に火が行き渡った時点で土や砂、灰で覆って燻し焼きにする方法である（岸本定吉「炭」創成社、1998年、115～118頁）。この焼成法による製炭土坑の被熱痕跡は、床面が強く被熱することは稀で、炭化灰が下層に溜まる程度で、薄く酸化被熱するものが大半である。後述するSK274はこのような痕跡を持つ事例であるが、側壁の被熱は比較的顕著に認められるものの、床面は被熱痕跡をほとんど残さない特徴を持つ。また、全ての壁が立つような奥と手前の関係を持たない単なる土坑形態を呈するものが多く、土坑に奥と手前の位置関係を作り出すSK111の特徴とは異なっている。

伏焼法の製炭土坑は、被熱痕跡やその土坑形態から考えて、継続的な生産施設としての位置づけが低く、それが弱い被熱痕跡に繋がっているものと考えられる。つまり、SK111については、製炭土坑として長期的に木炭生産を行なったための痕跡ではないかと考えた。土坑形状も風の取り入れ口を斜面下方に設定し、土器焼成坑にも似た構造をもつ点で、比較的良質の木炭を生産する意識があった可能性をもつ。

製炭土坑でこのような床面が還元焼結する事例は極めて稀と云えるが、竈室構造を持つ製炭室では、比較的焼出例が多い。ただ、半数以上は、床面の表面に薄く炭素が吸着したような黒色を呈す還元層を形成する程度で、灰色にまで還元焼結するには、その焼成回数が大きく影響しているものと考えている。竈の床面や壁の焼結度合いは度重なる焼成によって蓄熱焼結することが多く、それは土器焼成坑の酸化被熱層の形成の仕方と同様である。

以上、SK111の土坑形態の特徴や被熱特徴について、他とは異なる特徴の成因を推察したが、そのような製炭土坑が鍛冶集落で形成されていたことは重視してよい。鍛冶用の木炭も鉄素材と同様に丘陵部で生産し、持ち込まれた可能性は高いのであるが、製鉄用木炭と鍛冶用木炭とは作り分けがなされていたようである。特に鍛冶用木炭は軟質で火つきのよい立ち消えするような木炭がよいとされたために、竈室焼成ではなく、製炭土坑で生産されることが多かったとされる。また、近世の製鉄指南書、「鉄山秘書」には製鉄用木炭には大径木を使った大炭を、鍛冶用木炭には小径木を使った小炭を使用すると記されており、鍛冶用材の適材の筆頭にはクリ材が上げられている（岸本定吉の前掲書、253～254頁）。SK111では樹種特定を行っていないが、額見町遺跡で樹種分析を行なったH地区の製炭土坑SK404の事例では、分析した10点全ての材がクリ材に統一されていた。また、富山県富山市向野池遺跡で検出された鍛冶遺跡関連の製炭土坑では29点のうち20点がクリ材であり、丘陵部での製炭室の分析結果とは様相を違えている（南加賀製鉄の二ツ梨一貫山支群の製炭室ではイヌシヤ・モクレン・ナツバキの順、林支群の製炭室ではクスギ・アカガシ・クリ・コナラの順で構成される。望月精司「北陸地方の古代製炭・製鉄業の森林利用」『古代製炭の森林利用技術—一人と森との関わり—』東北芸術工科大学、2008年）。『鉄山秘書』にあるように鍛冶用木炭にはクリ材の選択使用が見られており、まさに鍛冶用木炭を鍛冶場の近くで生産していたことになる。ただ、生木で選ぶよりも木炭にしてから選ぶ方が容易であり、多くは丘陵部内で生産されていたものとみなされよう。

2. SK274

F地区のやや北西寄り、大型掘立柱建物SB245、竪穴建物SI113と重複する。SI113の南側壁を切って掘り込まれており、竪穴建物廃絶後に掘られたことがわかっている。土坑内からは古代Ⅳ期の土器が少量出土しており、竪穴建物がそれ以前と位置づけられているため、Ⅳ期の製炭土坑とすることに問題はないだろう。

長軸80cm、短軸60cmを測る楕円形の平面プランで、全ての壁が直立気味に立つ、通常の土坑形態をもつ。床面はほとんど被熱痕跡がなく、土坑の壁の上半のみ酸化被熱するもので、埋土下層に炭化材小片が多量に検出されたことから製炭土坑と性格づけた。ただ、かなりの小型土坑であり、被熱痕跡も弱いなど、当遺跡で検出される製炭土坑の中でも生産回数の少ない、一時的な生産のためのものであった可能性が高いだろう。当製炭土坑が鍛冶遺構との関連性の中で位置づけられる根拠はないが、当遺跡の鍛冶が8世紀代に生産の拡大を図った可能性が高いことを考えれば、鍛冶関連のものとして性格づけるのが穏当と判断される。

第 4 節 その他の遺構と包含層

第 1 項 道路状遺構・溝状遺構

本道跡で検出された道路状遺構は、一部 C 地区にかかるとともに F・G・H 地区を中心に確認されている。本道跡全体の道路状遺構を述べれば、等高線に沿うように G 地区北端から南東側へ曲がって F 地区に延び、さらに東に曲がって C 地区へ繋がるものが道路状遺構 1。道路状遺構 1 の F 地区西側から分岐して H 地区に延び緩やかな弧を描く様に F 地区に至り、斜面を登るように続くものが道路状遺構 2。そして道路状遺構 1 の G 地区東側から分岐して南側に直線的に至るものが道路状遺構 3 である。これら道路状遺構は、路面の検出、道路幅員と思われる溝状遺構、道路の付帯的構造遺跡と思われるピット列や液板状凸凹面が検出され、それぞれつながって面的に捉えることが出来たものである。但し、削平の影響により路面の検出は一部に至り、床下構造もわからなくらいに削られて消滅する部分も見られる。特に C 地区の一部にかかる部分から先の東側は、更に標高が高くなるため完全に消滅してしまっている。なお、F 地区の末端部分から先の本道跡で E 地区とした区域には、(財)石川県埋蔵文化財センターが平成 9 年に発掘調査した道路状遺構が検出された。

今回報告対象となるのは、F・C 地区部分に存在する道路状遺構 1 の一部分と、これから分岐する道路状遺構 2 の一部と、溝状遺構である。調査時の遺構記号は溝状遺構を含めて SD として標記しており、今回報告区域では SD24～29 にあたる。また、1 つの道路状遺構に関連すると現地調査で判断されたものには SD 記号と遺構番号に付して遺構名を付け加え取り扱っている。この内 SD26 は H 地区内になるため、次回報告となる。今回報告の主体となるものは SD25 である。また、道路状遺構 1 と 2 との分岐点が今回報告区域になっているものの、この分岐の判断は、道路状遺構全体を図面上で判断した際に決定したもので、現地調査を行っていない。例えば、SD29 東端から付くように位置する溝状遺構には SD 番号が付されていないなど、分岐点についての詳細を述べられない状況である。また、道路状遺構と関連する可能性があると考えているものの、最終的な判断に困るものが SD27・28 で、これらは溝状遺構として報告しておく。また、今回報告区域に SD24 と付された溝状遺構が F 地区東側の削平区域から検出されているが、浅く特徴が少ないものであり報告を割愛したい。

1. 道路状遺構 1 (SD25)

F 地区西側は、ま 31・32Gr で、土器細片を中心に礫や鉄滓も含んで硬化する広がり（土器敷き硬化面と呼ぶ）が検出された。この層を掘削後、溝状遺構 (SD29) やピット列、土器敷き硬化面の下層位置からは、土坑状遺構 (SD25 土坑 1・2・3) も検出された。検出された土器敷き硬化面は、削平により部分的に残存する状態であり、検出上面も既に削平されている可能性もたれる。総合的に西から東へ斜面を登るように曲がりながら位置するものを道路状遺構 1 とし、今回報告はこの約半分の区域となる。では詳細を述べてゆく。

(検出路面の状況)

土器敷き硬化面は、路面と考えられるものである。本道路状遺構内からは、3箇所検出されたのみで、全体をみると削平により殆どの路面が消失している状況と思われる。最も遺存状態の良い区域が、ま 32Gr にあたる。長径 540 cm × 短径 75～95 cm の範囲で、最も硬化が強く、土器細片が集中する。この、硬化し土器が混入する層が断面図での 1 層にあたり、厚さ 2～4 cm を測る。土器は上面のみならず 1 層全体に及び、砂の混入も認められる。硬化面は、ま 32Gr 以外では、ほ 31Gr や C 地区 SD25 土坑 1 でも検出されているが、上面が削平によりに



第 78 図 額見町遺跡 道路状遺構全体図

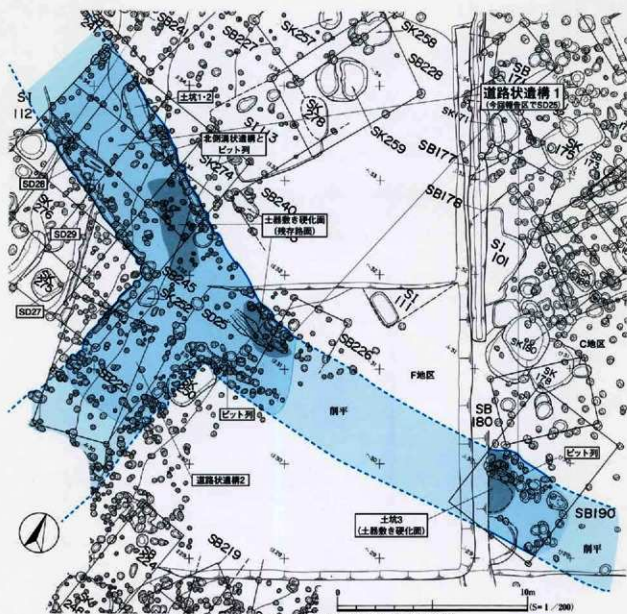
の主体となるものは SD25 である。また、道路状遺構 1 と 2 との分岐点が今回報告区域になっているものの、この分岐の判断は、道路状遺構全体を図面上で判断した際に決定したもので、現地調査を行っていない。例えば、SD29 東端から付くように位置する溝状遺構には SD 番号が付されていないなど、分岐点についての詳細を述べられない状況である。また、道路状遺構と関連する可能性があると考えているものの、最終的な判断に困るものが SD27・28 で、これらは溝状遺構として報告しておく。また、今回報告区域に SD24 と付された溝状遺構が F 地区東側の削平区域から検出されているが、浅く特徴が少ないものであり報告を割愛したい。

1. 道路状遺構 1 (SD25)

F 地区西側は、ま 31・32Gr で、土器細片を中心に礫や鉄滓も含んで硬化する広がり（土器敷き硬化面と呼ぶ）が検出された。この層を掘削後、溝状遺構 (SD29) やピット列、土器敷き硬化面の下層位置からは、土坑状遺構 (SD25 土坑 1・2・3) も検出された。検出された土器敷き硬化面は、削平により部分的に残存する状態であり、検出上面も既に削平されている可能性もたれる。総合的に西から東へ斜面を登るように曲がりながら位置するものを道路状遺構 1 とし、今回報告はこの約半分の区域となる。では詳細を述べてゆく。

(検出路面の状況)

土器敷き硬化面は、路面と考えられるものである。本道路状遺構内からは、3箇所検出されたのみで、全体をみると削平により殆どの路面が消失している状況と思われる。最も遺存状態の良い区域が、ま 32Gr にあたる。長径 540 cm × 短径 75～95 cm の範囲で、最も硬化が強く、土器細片が集中する。この、硬化し土器が混入する層が断面図での 1 層にあたり、厚さ 2～4 cm を測る。土器は上面のみならず 1 層全体に及び、砂の混入も認められる。硬化面は、ま 32Gr 以外では、ほ 31Gr や C 地区 SD25 土坑 1 でも検出されているが、上面が削平によりに



第79図 今回報告の道路状遺構全体図と付帯遺構

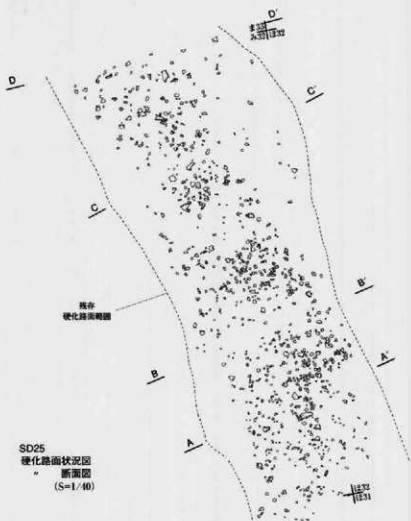
消失している可能性がある。ほ31Gの路面は、強い硬化とは言えないが、土器細片の集中が検出されている。C地区SD25土坑3では硬化が認められ、土器の集中や砂の混入が確認できるものであり、詳細は別に述べる。

〈路面下の状況〉

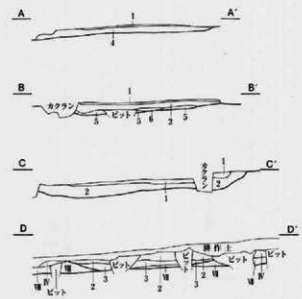
路面（1層）下層の2層にも1層程ではないが土器の混入がみられる。1層以下の人為的埋土を取り除くと、断面形状でならかな逆U字状を呈す形、つまり緩やかに下がって底面に平坦面を形成する形状となる。深さは東側で8～10cm、西側で12～14cmを測る。浅いものであり、底面が硬化することはない。この土坑状のものは、人為的に掘り込まれた掘方的なものなのか、自然に窪みが発生していたものを成形し直して路面を構築したものが、不明である。いずれにせよ、最終的に検出された路面を形成している。

〈東端に位置する土坑3〉

土坑3は、C地区調査時に土坑番号を付して捉えていたものだが、土器細片が多量かつ非常に硬い土層であったことから、SD25に関連する遺構として変更したものである。土坑3は、ま32Gr内の土器敷き硬化面とほぼ同じような特徴をもつ。土坑として名付けているものの、深さは非常に浅く4～10cm程度であり、底面が平坦となる。検出範囲は長径300cm、短径130cm程度で、土器細片や小石が多量に混ぜ込まれ、非常に硬く叩き締められている。この他、砂質土や暗褐色土も確認でき、路面に補修を行った結果と考えられる。前述した、ま



H-A-DZ. 10,800m
E-FZ. 11,100m

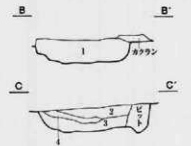
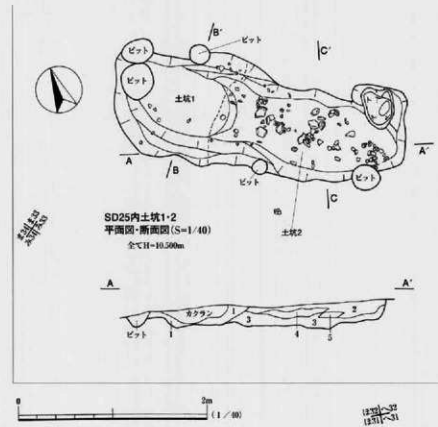


遺構状況 (S125内土坑1・2) 上層部

- 1層 黒褐色土(E17JY820)：含有物(土塊)はほとんど見られず。中・小砂質で均質。遺構物(多数)を伴い、周辺に土。
- 2層 黒褐色土(E17JY820)：砂質土壌。土塊(少量)を伴い、土塊(少量)を伴っている。
- 3層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 4層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 5層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 6層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。

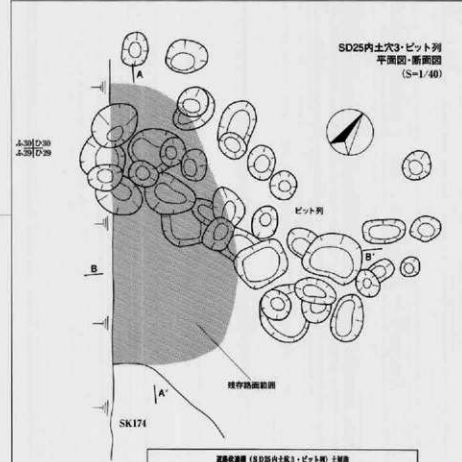
以下の層は、包含物モーション上層に属する。

- 7層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 8層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 9層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。



遺構状況 (S125内土坑1・2) 上層部

- 1層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 2層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 3層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 4層 2層ペースト。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 5層 2層ペースト。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。



遺構状況 (S125内土坑3・ピット列) 上層部

- 1層 黒褐色土(E17JY820)：砂質土壌。土塊(少量)を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 2層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 3層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 4層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 5層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。
- 6層 黒褐色土(E17JY820)：黒褐色土の小塊を伴う。周辺に少量の土塊を伴う。土塊(少量)を伴っている。

第80図 道路状遺構図 (SD25)

32Gr内での土器敷き硬化面での底面では硬化が見られなかったのだが、こちらでは、底面も硬化して、叩き締められたような硬さもつ。このことから、路面が2面あったものと判断可能だろう。

(西側に位置する土坑1・2)

ま 32Gr土器敷き硬化面の北側で検出された溝状遺構・ピット列の末端に位置する土坑状の掘り込みで、道路状遺構1に位置的にも関連するものと思われる。上面にあったであろう路面は既に削平されて残存していない。2基が重複して、土坑2の上に土坑1が掘り込まれている。全体規模は、長径310cm、短径90～120cm、深さ20～33cmを測る。土坑2の底面は、平坦を呈しながら一段低い掘り込みをもち、土坑1は底面に丸みをもつ。土坑2の方が、圧倒的に遺物量が多く、土器細片のほか大型礫や鉄屑も混入する。

(SD29の状況)

SD29は、土器敷き硬化面の南側に位置する。先行してSH12を調査したため西側が切られている状態で、残存長880cm、幅28～44cm、深さ14～20cmを測り、深さは東側が次第に高くなるという旧地形に添ったものとなっている。埋土は、基本土層が黒褐色土で炭化中塊を少量含有し、黄褐色粘土小・中塊の多少で上下2層に分層される。下層は黄褐色粘土塊が多く締まりのないもの、上層は黄褐色粘土塊が少量含有する。SD29内には多数の小ピットが確認でき、小規模なもので径16～20cm深さ14～20cmを測り、大規模なものでは径42～50cm深さ30～40cmを測る。ピット覆土は、下記に示したピット列覆土に準じている。

(北側の溝状遺構とピット列の状況)

溝状遺構とピット列で土層が確認されているものは、土器敷き硬化面の北側に位置するもの、つまり、ま 33Grから連続しては31Grでピット列端が位置する、ほぼ1本の線上に位置するものである。溝状遺構は、長径640cm、幅26～40cm、深さ12～21cmを測る。埋土は単層で、黒褐色土に黄褐色粘土塊・炭化中塊が微量に含有する。この溝の内外に連続して並ぶピットは、径30cm前後を主体として18～47cm、深さ10～48cmと、実に様々な規模をもつ。覆土はそれぞれ単層で、黒褐色土に黄褐色粘土の小塊から大塊や炭化物の小・中塊が含有、含有物を多量に含むものの方が少なく、微量または少量が含まれるものが多い。

(SD29・北側溝状遺構とピット列の検出について)

溝状遺構やピット列は、土器敷き硬化面の検出レベルではブランがまったく見えなかった遺構であり、土器敷き硬化面を完全に取り除いた状態で検出されたものである。土器敷き硬化面の西南に位置するSD29、北側に位置するピット列と溝状遺構、ほ 31Grで残存する土器敷き硬化面の南北それぞれに連続して並ぶピット列、そしてC地区ひ 29Grで検出された土坑1の北側に連続するピット列である。これら溝状遺構とピット列を結び、面的なSD25の幅員、道路範囲と捉えることができるだろう。土器敷き硬化面がこの範囲のごく限られた部分にしか検出されていない点もたれるが、上層が削平されている可能性が極めて高いこともあり、恐らく道路幅員と考えてよいだろうと思われる。この幅は、300～400cmを測り、一定の幅をもっていなかったものと判断できる。また、本遺跡の中で道路状遺構の両サイドに溝状遺構が検出されたのは、SD25のみ、この区域のみに限られる。道路状遺構で溝状やピット列が付設する事例は多くあり、溝状遺構は「側溝」として「平地における空間の確保、流路の性格が薄く、連続・非連続がある」、ピット列は「側溝際で検出され、土留め、欄、植樹痕跡などの意見あり」(山村信策 2004「古代道路の構造」『古代交通研究 第10号』)という付帯的構造要素がまとめられている。今回報告の溝状遺構やピット列も、このような要素をもっていたものと推測する。ただ、本遺跡で側溝と思われるものが検出されているのは、今回のSD25のみ、道路状遺構1と2の分岐点部分に限られている。なぜこの部分にしか検出されなかったのか疑問が残るところである。分岐点と何か関連があるのだろうか。

(SD25及び付帯遺構の遺物出土状況)

SD25から出土する遺物は、硬化路面から須恵器食膳具432点、須恵器貯蔵具131点、土師器食膳具21点、土師器煮炊具325点、円面硯1点、土師土製品6点、石製品2点、灰釉陶器1点である。土坑1からは、須恵器貯蔵具3点のみ。土坑2からは、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具10点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具17点。土坑3からは、須恵器食膳具93点、須恵器貯蔵具49点、土師器食膳具9点、土師器煮炊具112点。これらの時期は、IV 2期～V期に位置するものである。なお、SD29からは須恵器貯蔵具1点のみ、時期不詳である。

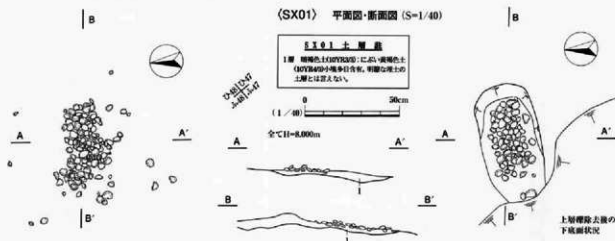
2. SD27・28

SD27は、F地区ま・み 32～み 31Grに位置し、SD29に切られ南北方向に走る溝状遺構で、長径660cm、幅

24～30 cm、深さ7～11 cmを測る。埋土は、2層で構成されており、黒褐色土に黄褐色粘土の小塊を少量、炭化小塊を微量含む層と、黒褐色土に黄褐色粘土の小塊を微量含む黒味の強い層である。SD28は、F地区ま・み33Grに位置、東西に走る溝状遺構で、残存長410 cm、幅15～20 cmで最大幅が東側で30 cm、深さ5～11 cmを測るものである。埋土は、単層で黒褐色土に黄褐色粘土の微細粒を少量、炭化小塊を微量含有する軟質土である。これら2本の溝底面では、ピットが確認できる。SD27では連続して掘り込まれているものではなく、ピット埋土は、前述したSD25ピット列の埋土と同様の土層をもつ。これら2本の溝状遺構は、溝端部が丁度接するような配置をとる。2本の形状が開き気味のL字形になり、両者の埋土も似ているため、併存したのではないかと予想している。SD29に切られているため、これ以前のものとは分かるが、SD25が分岐する地点から西にずれた形で、しかも分岐形状と非常に似た状態で検出されていることが、SD25との関連を伺わせる。

第2項 集石遺構

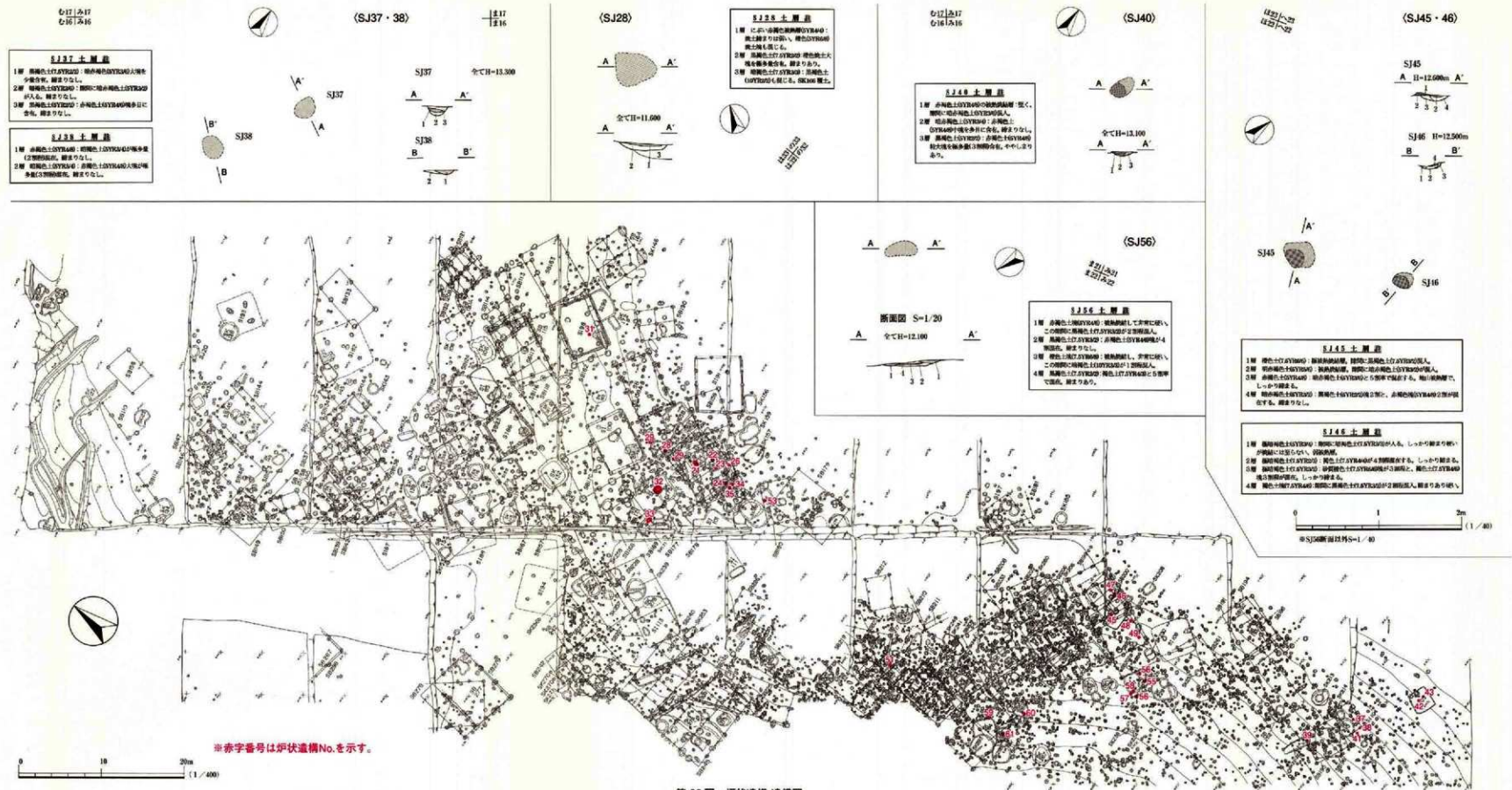
15世紀代と思われる集石遺構が1基検出されている。C地区西端、ひ・ふ48Gr南側において、180 cm四方の範囲に川原石が所々集中または点在して検出された。点在する石を取り除くと、集石は110×50 cm規模で顕著に認められ、元は方形に配置されていたと思われる。周囲に点在する石は、壊れた時に飛んだのだろう。重なる集石の上面の石を取り除くと、石を綺麗に並べて配置されていた。掘方らしき明瞭な落ち込みはもたず、浅い窪みに上に礫を貼り付けた印象である。また、断面図で示した1層は、埋土や掘方埋土ではなく、旧表土の可能性もある。1基のみの検出であるが、検出地が調査区端で、さらに標高が下ってゆく西側が傾平を受けていることもあり、元は区画して配置された配石墓群であった可能性もあるだろう。さて、石を詳しく調べてみると、これらの石は径4～12 cmの円形で平たいものである。ほぼすべてが川原石で構成されている。石は上面で65個8.8kg、下底面で66個10.6kg。総計して131個19.4kgが使用されていた。石の種類は、濃飛流紋岩が約6～7割を占め、この他に使用割合順で、デイスイト・珪岩・角礫凝灰岩・安山岩・流紋岩・片麻岩・変朽安山岩である。なお上面でデイスイトは使用されておらず、下底面では角礫凝灰岩・変朽安山岩は使用されていない。また、一部の石には被熱を受けたような赤化するものが見られる。両面に及ぶものあれば、片面のみのもの確認できる。この観察は、整理段階で確認したものであり、調査時に被熱を受けているという確認はされていないことから、赤化した石を使用したものと判断する。



第81図 集石遺構図 (SX01)

第3項 炉状遺構

今回報告する区域から検出されている炉状遺構は、被熱面を有し、炉として機能したと考えているもので、地床炉や屋外炉と言われているものである。単独で検出されるものが多いが、土坑内や堅穴建物覆土からの検出も見られる。土坑内のものについては、焼土坑のように規模が大きくなり、土坑に基本として伴わない被熱という位置づけである。遺構記号はSJとし、遺構番号は前回報告であるB地区からの連番となっており、今回報告は、SJ20～SJ61にあたる。この内SJ20・59は鍛冶炉、SJ30・51は土師器焼成坑であり第3節手工業生産遺構



第 82 図 炉状遺構 遺構図

で述べている。SJ52も鍛冶炉だが、G地区に位置するため次回の報告となる。また、SJ35・36は報告書Iで既に報告済みであり、SJ44は、整理時に竪穴建物のカマド被熱と判断されたため欠番、SJ55も炉状遺構ではないと判断して欠番となった。なお、現地調査時からの欠番はSJ54である。その他、SK178内で検出され、炉状遺構番号の付されていないものが1基あり、欠番となっていた遺構番号SJ53を整理時に付した。以上を踏まえると、今回報告する炉状遺構は総数32基となる。この内10基については、土坑内外で検出されたこともあり、第3節土坑で概ね報告済みである。今回報告の炉状遺構には、大きく3箇所に及ぶ検出集積が見られる。1箇所目は、C地区の南側の、の〜ひー32・33Gr内外の掘立柱建物密集区域である。次に、F地区中央からやや東側で、へ〜ま22Gr内外に建物が集積する区域。そして、同じくF地区の南東側の、み16Gr辺りに集中して検出されている。遺構密集区域の、しかも掘立柱建物が密集する区域に集中しているのは、単なる偶然なのかもしれないが、掘立柱建物に伴う屋外炉の役割をもっていた可能性が予想される。なお、以上のような検出は、基本的に遺構の遺存状況が良好だった区域に限られる。

前回報告では、炉状遺構が3つのタイプに分かれるとした。1. 人為的な構築が見られる炉状遺構(Aタイプ)、2. 地山被熱する炉状遺構(Bタイプ)、3. 竪穴建物覆土で検出された炉状遺構(Cタイプ)である。これを元にして、今回の炉状遺構を調べてみると、以下のような特徴を持っていること確認された。

1. 人為的な構築(貼床)が見られ、掘方を作っている(A-①タイプ)
2. 人為的な構築(貼床)が見られるが、掘方は伴っておらず、地山が被熱する(A-②タイプ)
3. 人為的な構築はなく、地山が直接被熱しているもの(Bタイプ)
4. 竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築が見られるもの(C-①タイプ)
5. 竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築はなく、下の遺構覆土が被熱する(C-②タイプ)

以上の中で4や5について、前回では竪穴建物覆土での検出が多かったのだが、今回は土坑覆土からの検出が多くなっている。このような炉状遺構については、竪穴建物や土坑が検出するか土が自然堆積していく中で溜りとなっていたところに、炉床を形成したのではないかと予想している。その際、炉を作る時に、貼床を貼っているものと、貼床を施さない場合があったようである。

なお、遺構と重なっている炉状遺構が多く見られるが、遺構検出面よりもかなり上のレベルで検出されているものが殆どである。

右表の補足をしておく、被熱部分の断面図をとっていないため厚みの不明なものがある。これらは、地山が焼けている場合や、炉面を構築している場合があり、断ち割りを行ってはいるものの、図に残せない状態、つまり被熱が薄すぎたためか、壊れてしまったためか、図にすることが出来なかったものである。また、SJ38・39はSI105地点から検出されているが、SI105の上面で検出された可能性が高い。また、SJ66はSK281のおそらく覆土内で検出されたものである。

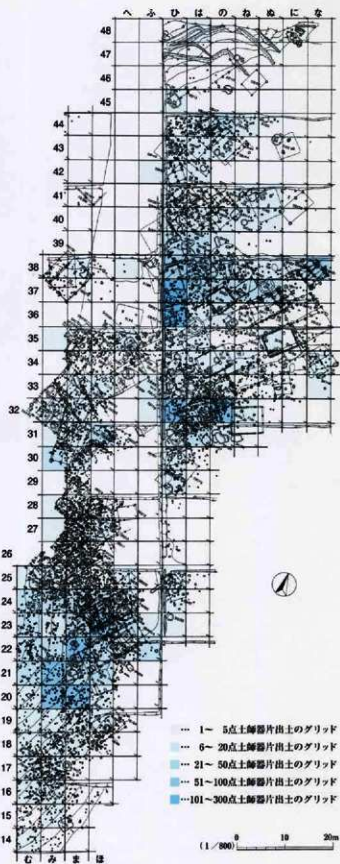
さて、特徴的な炉状遺構を挙げてみる。広範囲の焼土分布内に被熱面が3箇所確認されたSJ21、これもSK182(112頁)にて詳細報告済みである。そして、SK171を一部切って位置し、他の炉状遺構に比べ若干土坑状でこれも広範囲が被熱するSJ33。こちらもSK171と伴って報告し土坑遺構図内で図掲載している。SJ56は、掘方をもたない炉状遺構だが、2mm程度と1mm程度の薄い被熱面の2層が確認されている。この他に、SJ34は製炭土坑の可能性が非常に高いもので、詳細はSK188(116頁)とともに概ね報告した。

今回検出の炉状遺構データ

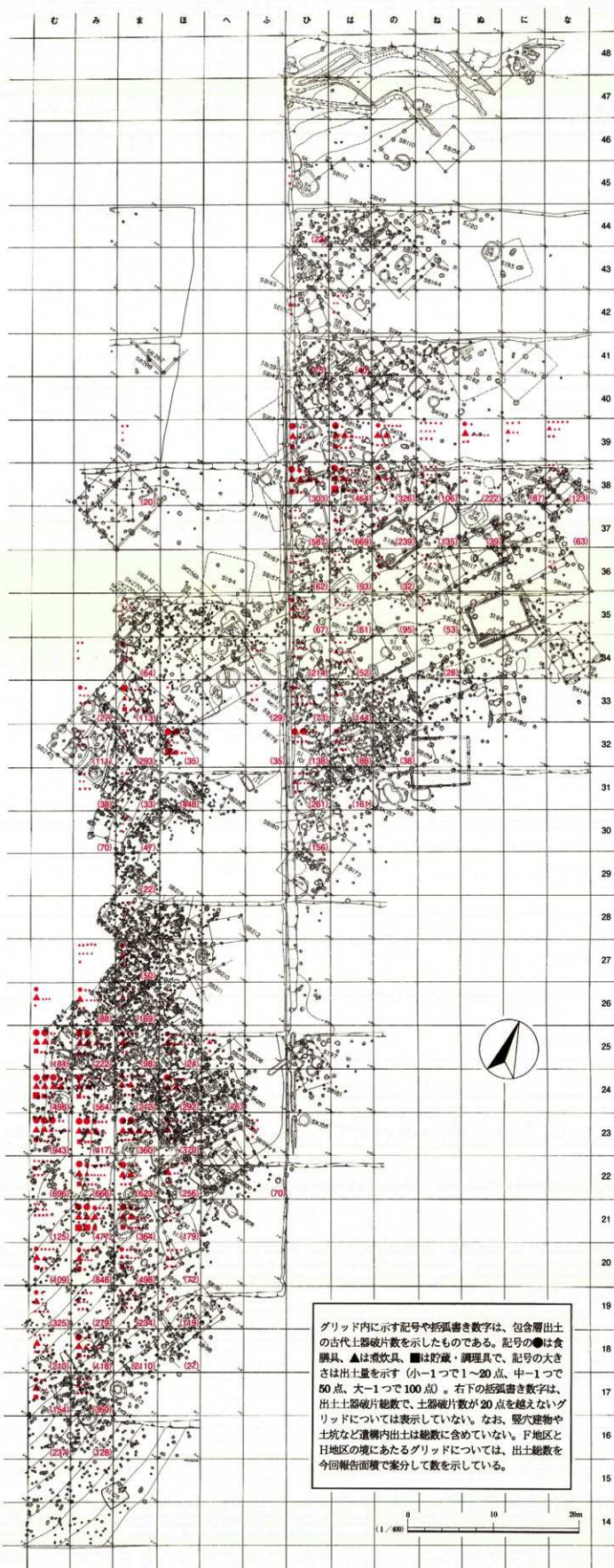
遺構番号	地区	SK21 時台	検出状況	地山被熱	平面規模 (長さ×幅)	貼床厚 (mm)	タイプ
21	C区	182	直径260cm程度140cm幅内で平置炉3箇所の検出	11.68	260×140 敷土内	1~4	A-①
22	C区	181	SK181覆土上面	11.75	44×26	3	C-①
23	C区	191	単独	11.73~75	46×38	2	A-①
24	C区	188	単独	11.76	46×33	4	A-①
25	C区	188	単独	11.75	55×42	2~7	A-①
26	C区		単独	11.84~87	20×20	4~5	A-①
27	C区		単独	11.52	40×35	2.5	A-①
28	C区		SK168覆土上面	11.46~48	52×40	2	C-①
29	C区		単独	11.52~53	23×16	1~1.5	A-①
31	C区		SI188土内、上面より20cmで検出		27×20	6	C-②
32	C区	175	SK175覆土上面	11.25~11.3	140×86	10	C-②
33	C区	171	SK171覆土上面	11.23~29	74×52	5~10	C-②
34	C区		製炭土坑の可能性	11.62位	幅約39~36	-	B
37	F区		単独	13.17~13.2	28×23	-	B
38	F区		単独	13.15	26×23	5	B
39	F区		単独	12.81	32×28	3.5	B
40	F区		SK217覆土中層	13.07	32×19	2	C-①
41	F区		単独	13.06	26×20	-	B
42	F区		SI105上面?	-	17×13	?	C-②?
43	F区		SI105上面?	-	40×30	?	C-②?
45	F区		単独	12.35~38	35×30	2~3	A-②
46	F区		単独	12.47~12.5	25×20	5	A-①
47	F区		単独	12.38	21×14	2~3	A-②
48	F区	210	SK210覆土上面	12.38	38×20	5~7	C-②
49	F区	210	SK210覆土上面	12.42	50×36	3~7	C-②
50	F区		単独	12.03	48×38	2	A-①
53	C区		SK170覆土上面	11.89~91	33×25	1~2	C-②
56	F区		単独-被熱面あり	11.96~98	32×16	2	A-②
57	F区		単独	12	17×10	1	A-①
58	F区		単独	12	21×18	1.5	A-①
60	F区		SK281覆土内?	-	24×16	?	C?
61	F区		単独	12.11~13	26×26	3	A-②

第4項 包含層・土器溜まり

包含層として提示したものは、遺構として特定できずに、グリッドで取り上げた遺物で、遺構認定できなかったもの全てを含んでいる。この他に、土坑のような落ち込みを持たないが、多量の土器を伴うことから土器溜まりとして取り扱っているものがある。今回報告区域では、ま20～24Gr、み15・19～25Gr、む17・20・22～25Grである。特に出土量の多いのが、ま22Grとみ・む-22・23Grである。これら土器溜まりから出土する遺物は、様々な時期をもっていたため、本項では包含層に含めて示している。なお、土器溜まりについては第3章今回報告区域出土の遺物にて詳細を述べるものとする。さて、包含層遺物の分布を見てもみると、削平された箇所では、分布は薄いものとなっている。F地区東側の区域と、C地区に～ひ-37・38Grには、特に集中が認められる。C地区については、包含層そのものが厚く残存していた区域であったためと言える。F地区の場合は、削平を免れているということもあろうが、遺物集中箇所が遺構密集区でもなく、更に南に延びる谷部の土器溜まりへと続くものであり、これが原因と考えられる。なお、提示した11～12世紀土師器の分布について、特に集中する箇所は、前述した包含層出土遺物の集中箇所とはほぼ同様となっている。最も集中するC地区中程区域の場合は、SK115の中世遺物が多量に廃棄されたものや、S188内上層にて検出された中世遺物の廃棄により、数値が大きくなったためと考えられる。やはり包含層が厚く残っており、遺構の遺存状態もよかったことが、この結果に結びついたのであろう。この他に、1Grからの出土が5点以内に取りまるものが圧倒的に多い。F地区では、東側にあたる標高12.00m前後にかろうじて集中が見られるものの、出土量が1Grに最大でも50点以内であり、C地区に比べれば出土量はかなり少ないと言え、散布程度と判断可能である。



第83図 11～12世紀土師器包含層出土量分布図



グリッド内に示す記号や括弧書き数字は、包含層出土の古代土器破片数を示したものである。記号の●は食器、▲は煮炊具、■は貯蔵・調理具で、記号の大きさは出土量を示す（小→1つで1～20点、中→1つで50点、大→1つで100点）。右下の括弧書き数字は、出土土器破片総数で、土器破片数が20点を越えないグリッドについては表示していない。なお、竪穴建物や土坑など遺構内出土は総数に含めていない。F地区とH地区の境にあたるグリッドについては、出土総数を今回報告面積で案分して数を表示している。

第84図 古代土器包含層出土量分布図

第三章 今回報告区域出土の遺物

第1節 出土遺物の概要

第1項 出土遺物の総量と時期別比率

今回の報告対象とした区域は、C地区の前回報告済みの北側区域以外と、F地区の南東端を除く区域、そしてG地区の北西端の一部である。前回報告のB地区から伸びるⅡ群集落の南側にあたる部分と次回以降に報告するⅢ群集落の北東端にあたる区域とにわたっており、調査グリッドでは、な～ま-14～48Grとみ～む-14～25Grの区域にあたる。ここでは、竪穴建物24軒、掘立柱建物119棟、土坑162基などが確認され、出土遺物は、遺物収納箱(645×380×145mm)で165箱を数える。内訳は須恵器(陶磁器含む)がC地区25箱+F地区38箱+G地区0.3箱、土師器がC地区48箱+F地区40箱+G地区0.6箱、石製品がC地区2箱+F地区2箱+G地区0.1箱、鉄滓・鉄製品がC地区3箱+F地区6箱で、遺物片総数で示すと須恵器17,307点(食器具12,186/貯蔵具5,108/土製品13)、土師器39,206点(食器具3,373/煮炊具33,198/土製品1,273/中世食器具1,362)、石・石製品764点、鉄滓・鉄製品3,150点ほどとなる。

以上の出土量を報告ⅠのA地区や前回報告したB地区及びC地区北側区域と比較すると、A地区の須恵器105箱、土師器145箱、石製品13箱、鉄滓・鉄製品12箱、報告Ⅱ区域の須恵器88箱、土師器173箱、石製品9箱、鉄滓・鉄製品8箱とは、その出土総量に大きな開きがある。今回の報告区域は全体で約8,250㎡あり、前回報告したB地区とC地区北側区域の8,500㎡に近い面積を持つが、完全に削平されて遺構が既に消失してしまった区域が約3,500㎡、包含層や遺構覆土の大半が削平を受けている区域が約1,300㎡あり、実質的な調査面積は3,500㎡ほどとなる。実質調査面積との比較では、報告ⅠのA地区4,500㎡や、報告Ⅱの4,700㎡に比べると、1,000㎡ほど少ないわけで、それが遺物出土総数に反映されているものとも言える。ただ、報告Ⅰで示した箱数比率指数(1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会1992年)で比較しても、今回報告地区の43.4に対し、報告Ⅱの地区では59.1、A地区の指数では61.1であるから、その出土比率には明確な差があり、本遺跡の中で当地区は土器廃棄の少ない区域と位置づけられるだろう。A地区やB地区に比べて良好に遺存する竪穴建物が半減していることが主な要因と言えようが、A地区やB地区で見られた、まとまった遺物廃棄場遺構や廃棄層が存在していないことも大きな要因と言えるだろう。その分、当地区の建物検出数は、他の地区から抜きん出たり、掘立柱建物を中心とする建物区域であったことがこのような遺物出土量に反映しているものと評価したい。

遺物の時期は、報告Ⅰで述べた縄文時代の土器や石器を別にすると、7世紀初頭、つまりは田嶋明人編年の古代Ⅰ期以降(以降、田嶋編年で示す場合の古代土器は古代Ⅰ期と示す)、筆者が報告Ⅱで考察した三湖台集落土器編年(『三湖台地集落群の古代前半期土器様相』)ではⅠB期以降の遺物となる(以降、望月の三湖台編年で示す場合は三湖台Ⅰ期と示す)。ただ、包含層からは三湖台ⅠA期またはそれを遡るような時期の須恵器環Hが破片で僅かに出土しており、当該跡の近隣にそのような時期の集落が存在していた可能性があるが、当該跡に隣接して存在する6世紀の前方後円墳「白のはぞ古墳」からの流出遺物である可能性も否定できない。

以上の遺物以外は、7世紀初頭の古代Ⅰ期古段階以降、三湖台ⅠB期以降のものである。A・B地区に比べて、7世紀代に位置づけられる遺物の量は少なく、それは後述する竪穴建物の数にも現れている。当地区の遺物の中心は8世紀代で、9世紀においても遺構に伴って一定量の土器出土が確認される。ただ、9世紀後葉以降は出土量が半減し、11世紀前半までは遺物出土の少ない状況が続くが、11世紀中頃の田嶋編年中世Ⅰ期になると、新たな形で集落形成がなされ、中世Ⅰ-Ⅱ期をピークとして、多くの建物が出現し、盛んな土器廃棄が行われる。しかしながら、長くは続かず、12世紀後半以降の遺物は皆無に近く、11世紀中頃に再興された中世集落は短期で消滅したものと理解される。ここで言う中世は、歴年代的には平安時代末期の範疇に入りますが、前述したような新たな集落展開が見られることと土器様相においても大きな転換様相を看取できるため、意識的にこれらの時期の遺構や遺物については、古代末期に位置づけず、中世の遺物、遺構と位置づけておきたい。

古代遺物の遺構出土状況を見ると、土坑からが44%を占め、竪穴建物は13%と少ない。包含層や土器溜まりからは合計しても35%を占めるに止まり、A・B地区の遺構別出土状況とは様相が異なる。A地区では竪穴33%、土坑12%、包含層54%、B地区では竪穴37%、土坑13%、包含層48%であるから、その出土遺物の違

いは明瞭で、これが先に述べた当地区の遺物出土比率にも現れていると言える。

竪穴建物の時期は7世紀前半が4軒、7世紀後半が4軒、8世紀前半が9軒、8世紀後半が4軒、9世紀前半が1軒と、8世紀を主体に確認できる。ただし、竪穴埋土上半には竪穴建物の時期よりも確実に新しい遺物廃棄が確認できており、中世の遺物も含め、8世紀後半以降の遺物を定量含んでいる。

土坑からの古代土器出土は、前述したように多い傾向にあるが、1,000点近く土器を出土する大型の土器廃棄土坑はSK106、SK115、SK116、SK136、SK180の5基のみである。ただ、出土量が多いと判断できる300点を超すような土器廃棄土坑と言えるものは19基程度あり、当地区の土器廃棄が土坑へ主に行われていたことを物語る。土器出土量が概ね150点を超える土坑について、時期別に分けると、7世紀に位置づけられるものではなく、8世紀前半が14基、8世紀後半が18基、9世紀前半が19基、9世紀後半が5基で、10世紀前半においても1基の土坑が確認される。10世紀後半から11世紀前半は、土器廃棄土坑の確認はないが、その代わりに土師器焼成坑が2基確認できる。このような時期構成は、掘立柱建物とも共通するものと理解する。

掘立柱建物の時期比定は、出土遺物が少なく困難なため、包含層やピット内出土土器の時期構成を参考とする、食膳具のみでの比率だが、各時期に分けた包含層・ピット出土の食膳具破片概数(20点程度の括りて表示した)では、7世紀前半が須恵器40+土師器60、7世紀後半が須恵器40+土師器20、8世紀前半が須恵器380+土師器140、8世紀後半が須恵器400+土師器140、9世紀前半が須恵器360+土師器120、9世紀後半が須恵器200+土師器60となる。7世紀前半の数量を100とすると、後半に60へ減少、8世紀前半に一気に520へ激増する。その後8世紀後半の540、9世紀前半の480まで同様の高い割合を維持し、9世紀後半になって260へ半減させる。10世紀から11世紀前半までは、極めて土器は少なく、集落の急激な衰退を予感させる。

以上、出土土器や帰属する遺構の時期は、A・D地区のI群集落やB地区中心のII群集落の北側に比べると、明らかに新しい時期に中心を移していることがわかる。特に、今回報告の地区では、土坑や掘立柱建物に関しては、8世紀前半から9世紀前半の間に中心をおいており、竪穴建物の構成も含めても、8世紀前半代から後半にかけて集落群のピークがあるものと理解する。9世紀代に至っても一定量の建物が存続していたものと理解されるが、9世紀中頃から後半には急速に衰退し、中世初頭段階に新たな集落再編を迎えるのである。I群集落やII群北側の集落とは異なる新たな集落群の展開を示しているものと言えよう。

出土遺物名	須恵器食膳具	須恵器貯蔵具	土師器食膳具	土師器煮炊具	土製品	石製品	遺構別計
竪穴建物	1,124(15.3%)	387(5.3%)	396(5.4%)	5,201(70.6%)	165(2.2%)	95(1.3%)	7,366(13.2%)
掘立柱建物	405(16.7%)	123(5.1%)	135(5.6%)	1,543(63.6%)	191(7.9%)	31(1.3%)	2,428(4.3%)
土坑・焼成坑	4,368(17.9%)	1,291(5.3%)	1,967(8.1%)	15,813(64.8%)	468(2.0%)	477(2.0%)	24,384(43.6%)
印状遺構	48(6.8%)	22(3.1%)	10(1.4%)	402(56.5%)	226(31.8%)	3(0.4%)	711(1.3%)
道路状遺構	528(43.4%)	195(16.0%)	28(2.3%)	454(37.3%)	7(0.5%)	5(0.4%)	1,217(2.2%)
土器溜まり	1,054(31.5%)	642(19.2%)	141(4.2%)	1,471(44.0%)	16(0.5%)	21(0.6%)	3,345(6.0%)
包含層・ピット	4,659(28.3%)	2,448(14.9%)	696(4.2%)	8,314(50.5%)	215(1.4%)	132(0.8%)	16,464(29.4%)
計	12,186(21.8%)	5,108(9.1%)	3,373(6.0%)	33,198(59.4%)	1,286(2.4%)	764(1.4%)	55,915

今回報告区域出土古代遺物出土遺構別集計表(破片数表示)

第2項 出土遺物の分類と器種名

1. 古代遺物

古代遺物は大半が土器・土製品で構成されるもので、僅かの金属製品と石製品が装身具や工具、武器、部材などに使われる程度である。金属製品は鉄製品が主で、刀子、鉄鏃、鎌、釘、鍛冶道具類、加工途中品、金具類などが確認でき、銅製品では鈴がある。石製品は、緑色凝灰岩の管玉、凝灰岩製の管玉状未成品、紡錘車、砥石(大型砥石含む)、金床石、造り付けカマドや炉の芯材などがあり、ほとんどは砥石とカマド部材で占められる。古代の土器・土製品は、須恵器と土師器、二彩釉陶器がある。二彩釉陶器は小型短頸甕で、国産品と推察される。須恵器は食膳具と貯蔵具、土師器は食膳具と煮炊具に機能分化している。ただ、一部、須恵器に甕や長胴釜、赤彩土師器に鉢や小型甕など、例外的なものも少量ながら確認される。

古代の土器は、須恵器を食膳具と貯蔵具、土師器を食膳具と煮炊具に大分類する中で、各個別の器種名を付し

ているが、須恵器の鉢や甌などの調理具としての機能を持つものについても、須恵器貯蔵具として分類してある。当遺跡出土の古代土器の器種分類については、『額見町遺跡Ⅱ』の第Ⅲ章第1節第2項の「出土遺物の分類」で、既に器種分類案を提示しており、本報告では基本的にそれに基づいて器種名を付している。ただ、その分類案についても、これまでの小松市の筆者記述報告書に準拠しており（『ニツ梨一貫山窯跡』2002年、『八里山遺跡群』2004年）、須恵器食器については田嶋明人氏の1988年北陸古代土器編年での分類案（『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会）、須恵器貯蔵具類については1999年の北野博司氏の分類案（『須恵器貯蔵具の器種分類』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会）、土師器食器具と煮炊具については、筆者の提示した『額見町遺跡Ⅱ』に基づいている。

なお、土師器食器具については、色による識別を明示してあるので、提示しておく必要がある。つまり、焼成段階に内面に発炭素材を入れて黒色に焼成させる内黒品と赤色酸化鉄を胎土に混ぜ合わせることで赤い発色の製品を作り出す赤色品、黄土と鉄粒を混ぜた赤色塗布材により器面のみを赤く焼成した赤彩品、色調の変化をさせるための造作を特にしないう通常品とに分けられる。なお、9世紀以降、外面赤彩塗布し、内黒焼成する碗皿類が出現するが、これについては外赤内黒品とする。

以上の須恵器・土師器以外に、二彩輪陶器が1点あるが、それ以外にも土製品が多く出土する。土製品については、分類案提示という形ではなく、今回の報告地区から出土した土製品について、概要をここでまとめておく。まずは、須恵質の土製品だが、文房具類である円面硯の破片が11点と水滴に使用されたと思われるミニチュアの平皿1点、土製形代である馬形土製品片が2点と度量衡資料である權杖錘の完形が2点、須恵器生産関連遺物として、須恵器室内で使用する貯蔵具専用焼台4点と須恵器窯の着置台片12点が出土する。円面硯出土量は多く、目だって出土する坏蓋転用硯と合わせて、硯資料の多さは目を引くものがある。なお、權杖錘の完形2点は、同一の土坑から出土しているものであり、何らかの祭祀行為に伴うものかもしれない。

次に土師質土製品だが、煮炊きに伴う電筒連用具として、電形土製品が64点、円筒形土製品が23点、支脚形土製品が100点出土する。A地区出土量（甕：84点、円筒：6点、支脚：103点）やB地区出土量（甕：38点、円筒：5点、支脚：60点）と比較すると、全体の遺物出土量の割りに極めて高い数値と評価ができる。これは当地区における竈穴建物の少なさと掘立柱建物数の多さに基づくものであり、時間的に8世紀以降に集落の中心があることも関連するだろう。以上の煮炊き関連土製品に比べて、生産用具としての製塩土器片は7点と少なく、漁労網錘として使用される管状土錘も20点に止まる。管状土錘の量は他の地区に比べると少ないとは言えないが、製塩土器はA地区で234点、B地区で74点出土したの比べると、隔絶の感があり、それは製塩土器出土の中心が7世紀代であることを物語るであろう。なお、土師器焼成に伴う焼成道具として匣鉢状土製品があるが、今回報告地区では出土が極めて多く、1,047点もの破片が出土している。これについては、全て古代に位置づけられるものであるか、疑問もあるが、胎土が南加賀産のものであるものが一定量あり、また、古代初期に位置づけられる土師器焼成坑から匣鉢状土製品が出土することから、大半は古代のものと考えられる。須恵器窯専用の焼台や置台片とともに、古代土器生産関連の遺物と位置づけられよう。

2. 中世遺物

当報告地区より出土する中世遺物については、大量の土師器食器具と僅かの土師器煮炊具及び東濃窯産と思われる灰輪陶器または山茶碗と中国産船載白磁で構成される。中国産青磁や越前系の変器系陶器も少量出土するが、中世後半期か、近世以降の可能性があり、ここでは除外しておく。土器・陶磁器以外に当期に位置付け可能な遺物を確認できておらず、金属製品も中世へ下るものはほとんどないとしている。

中世土器に関しても、『額見町遺跡Ⅱ』の第Ⅲ章第1節第2項の「出土遺物の分類」で提示した、器種分類案に基づいて器種名を付している。図での表示についても同様とし、焼き上がり状態については、内面を吸炭させて黒色に焼成するものを内黒品、通常の焼き上がりだが赤色酸化鉄粒を胎土に練り込んで赤く発色させるものを赤色品、白色粘土を使用して意識的に白く発色させるものを白色品、通常土師器の発色のものを通常品とする。

ただし、総括における平安後期土器編年については、ここで示す器種名や時期区分と異なる方法をとっているため、注意が必要である。

第2節 古代の遺構出土遺物解説

ここでは、古代に位置づけられる遺物について述べるが、遺構出土の個別の遺物説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心に、竪穴建物、掘立柱建物、土坑（墓坑含む）、土師器や鍛冶等の生産関連遺構、道路状遺構、土器溜まり遺構、ピット、包含層の順で提示する。なお、本報告においては、鉄滓や羽目、加漣等の製鉄及び鍛冶に関連する遺物は除外して報告してある。これは、当遺物群の取り扱いについて、遺跡全体との検討が必要であり、地区別に報告する性格のものではないと判断したからである。当遺跡は生産・鉄加工の工程を行っていることが、集落の成立や遺跡としての性格を語る重要な要素と見ており、遺跡全体での報告を科学分析結果とともにまとめ、報告書Ⅴとして別冊で刊行する予定である。よって、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できそうな鉄製品のみを報告する。

第1項 古代竪穴建物出土遺物

古代の竪穴建物から出土する遺物はまとまりをもった一括性高い遺物群が多いが、破片数では150ページで示した出土遺構別器種破片数構成表のように、13%程度を占めるに止まる。構成としては、食膳具が22%、煮炊具が6%、貯蔵具が72%で、時期の古いものが中心ということもあるが、竪穴内へのカマド使用土器の廃棄により、煮炊具の比率が高い。以下では、遺物を図示できた全ての遺構について述べることにする。

1. SI82 出土遺物

削平された竪穴建物であり、図示した出土遺物は掘方土坑からのものである。出土量は少ないが、図示した遺物は時期的にまとまりをもっており、三湖台編年のI C期、北陸古代編年ではI 1期新に位置づけられよう。

須臾器は1の南加賀窯産の坏H身が出土するのみで、口径は12cmと小さく、短い立ち上がり呈す。土師器食膳具は、2・3の土師器椀Hと4の高坏Hで、椀Hの小型化と内黒焼成していない点、高坏Hの椀形呈す坏部器形の特徴など、古代I 1期新段階の特徴を示している。土師器煮炊具は、当期の基本的器種である短胴小釜と長胴釜、甌があり、いずれも在来型技法のA類で、器内の薄い特徴や長胴釜や甌の胴部器形など、当器種の中でも新しい様相を示している。

2. SI85 出土遺物

小型の竪穴建物であり、出土遺物は一定量存在するが、ほとんどが小破片資料で、図示できたものは少ない。ただ、11・12の須臾器坏B、坏Aの扁平器形で大ぶりを呈す特徴や13の赤彩土師器椀Fの底径の大きさ、14のカキ目調整施す土師器短胴小釜の口縁部器形特徴など、古代II 3期の中でも新相、三湖台3C期の特徴を有するものであり、比較的まとまりを有した資料と言えよう。小破片のため図示できていないが、ここから出土する土師器煮炊具の調整技法がカキ目調整や叩き成形の北陸型技法をもつものに加えて、在来型のハケ目調整のものが一定量存在していることも、当期の特徴と言えるものである。

なお、その他の出土品として、支脚形土師器製品が4点出土している。そのうち2点のみを図示しているが、15は脚部中空型の下端部縮広がりのもの、16は脚部中空型の比較的大型のものである。明確な被熱痕跡はないが、カマド支脚として使われた可能性があろう。

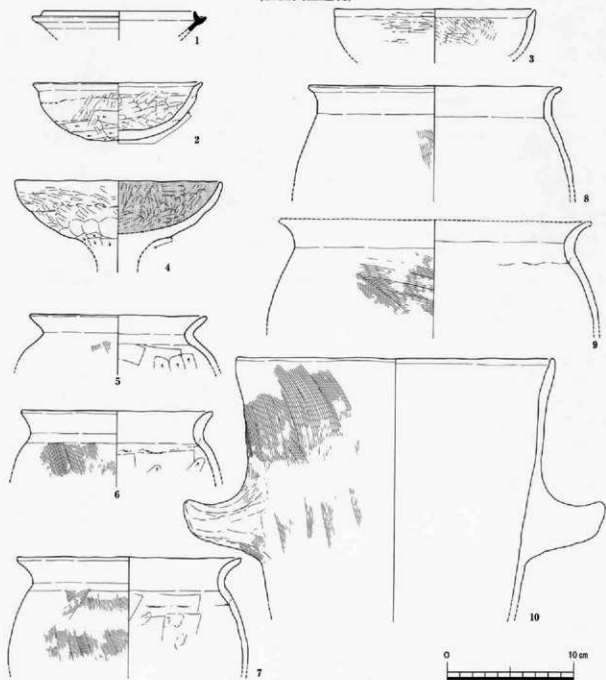
3. SI86 出土遺物

良好な遺存状態の竪穴建物であり、比較的出土遺物が多い。一部埋土上層で古代IV期～V期の遺物が混在するが、下層出土やカマド出土のものは古代II 3期新相からIII期に位置づけられるもので、三湖台編年では3D期に位置づけられるものと言えよう。

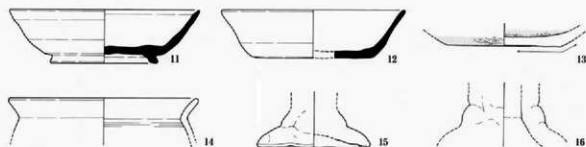
図示した遺物は、当竪穴建物に伴うと判断される上記時期のもので、比較的まとまりをもった資料と言える。須臾器食膳具は坏Bと坏Aで構成される。両器種とも概ね一法量呈す扁平器形のものだが、19の大型蓋の存在は、法量分化の段階にあることを思わせる。胎土は南加賀窯北群産が大半を占めており、この点からも当期の特徴をうかがい知れる。

土師器食膳具は、在来型技法のものは存在せず、全てロクロ成形の赤彩の椀類と有蓋坏で構成される。28の椀Fや30・31の坏B蓋はヘラ切りのもので、大型扁平器形を呈し、当期の特徴を有している。29は底面ケズリ調整を施すため切り離し痕は不明確だが、底部厚手で、底面の平坦な器形から糸切り技法の椀Aと思われるもの

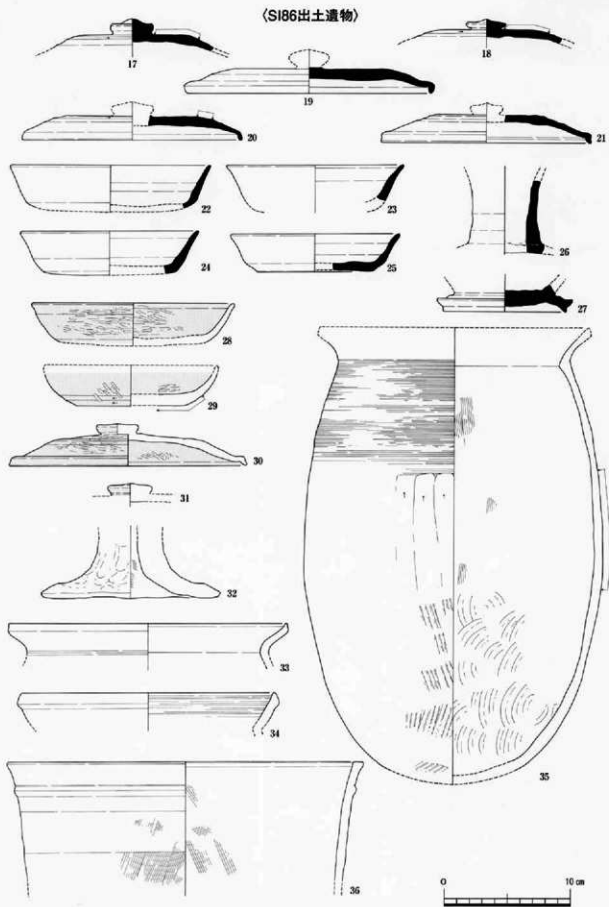
(S182出土遺物)



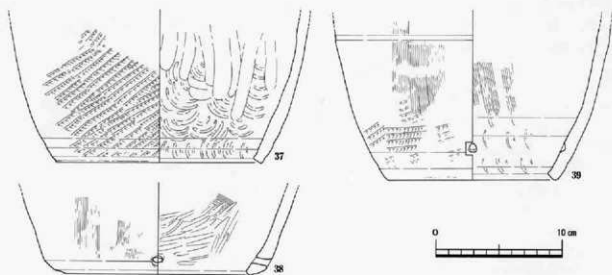
(S185出土遺物)



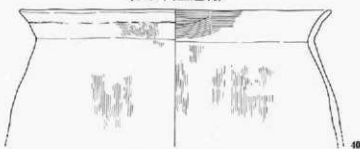
第85図 古代竪穴建物出土遺物1 (S182、S185、全てS=1/3)



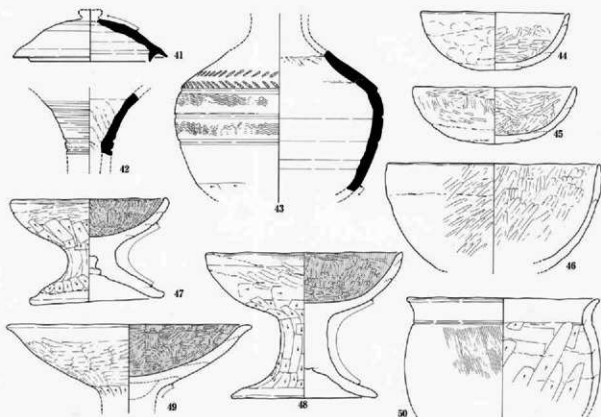
第86図 古代竪穴建物出土遺物2 (SI86-1、全てS=1/3)



〈SI87出土遺物〉



〈SI88出土遺物〉



第 87 図 古代竪穴建物出土遺物 3 (SI86-2、SI87、SI88-1、全て S=1/3)

である。当器種の出現段階のものと言えよう。

土師器煮炊具は、胴部破片にハケ目調整の在来型A類が一定量含まれるが、図示できたものはB類のみである。B類は北陸型煮炊具として、器形的に定型化された特徴を有するが、最終調整等で一部在来型のハケ目調整を併用するものが一定量存在しており、当器種の確立期的様相とは言い難い。ただ、煮炊具の産地がほぼ窯場産に限られており、在来型の生産から窯場生産へ移行した段階と位置づけられる。土師器食膳具が窯場産に統一される状況と合わせ、当期の特徴と言えるものである。なお、当資料では甕が一定量確認されるが、底部筒抜けタイプ(37)と胴部下端に穿孔し、別付けの棧を取り付けるタイプとがある。別付け棧渡しタイプは完全に穿孔してしまう38が一般的だが、39は内面から窪みをつけただけのものである。

土師器土製品には支脚形が2点出土している。32は中空タイプの脚端が強く裾広がりのもので、高環脚のような器形を呈す点で特徴的である。

4. S187 出土遺物

大型の竪支柱竪穴建物であるが、竪穴の85%程度は削り取られており、遺物の出土は極めて少ない。時期比定可能な須恵器資料もなく、図示した40の土師器煮炊具から竪穴建物の時期を判断するしかない。当土師器煮炊具は、地元B類胎土の長胴釜で、内外面ハケ目調整を施す薄手の作りのものである。古代Ⅱ2期からⅡ3期に位置づけられるものと理解され、破片で出土する赤彩椀の時期とも矛盾しない。竪穴建物の形態からも当期に位置づけて問題ないものと判断される。

5. S188 出土遺物

深い掘り込みをもつ竪穴建物で、埋土中の土器は今回報告地区の中では最多出土量をもつ。床面やカマド周辺から土師器食膳具、煮炊具を中心として、三湖台ⅠC期に位置づけられるまとまった資料が出土しているが、埋土中層から下層付近では時期の異なる遺物が混在しており、埋土中層に古代Ⅱ3期前後の資料が、埋土上層に古代Ⅱ2期前後の資料が、埋土最上層に中世Ⅰ期の資料が、それぞれまとまりをもって出土する。中世資料は次項で一括して述べるため除外し、ここでは竪穴建物に伴う資料と竪穴廃絶後に廃棄された埋土中層資料、埋土上層資料の3項目に分けて述べることにする。

(竪穴建物に伴う資料)

古代Ⅰ1期新相段階、三湖台ⅠC期の良好な一括資料である。須恵器は極めて少なく、41の銅蓋は埋土最上層の出土、43の瓶Fも最上層出土で他遺構と接合する資料、42の甕のみが、床面近くの出土である。坏Hは破片すら確認されていないが、当期の須恵器食膳具は本来坏H主体に、高坏と少量の有蓋鉢で構成されるものである。41の有蓋鉢は当期の南加賀窯産須恵器を特徴付ける器種とも言え、返りは長く、口径が12cm程度を測るものである。南加賀窯北群産のものであり、古代Ⅰ1期新の戸津六ヶ丘2号窯で生産されるものに類似する。

土師器食膳具は在来型の椀Hと高坏Hで構成される。椀Hは、小型で体部開く器形の44・45と大型で深身の46の2法量が存在する。いずれも内面黒色焼成されないものであり、器形や法量分化などとあわせ、当期の椀Hを特徴付けるものと言える。高坏Hはいずれも内黒焼成するもので、大型と小型に法量分化している。大型には49の口縁部外反の浅い器形のものが見られるが、これは古い器形の遺存と言え、48の内湾器形を呈すものが当期の主体的な器形と言える。脚は三湖台ⅠA期のような長脚のものはなく、かなり短くなっている。小型の47は当期を特徴付ける器種で、坏部は内湾器形で、短い脚がつく。

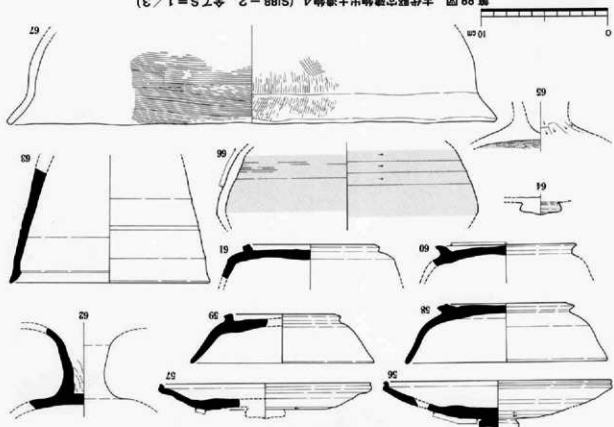
以上の土師器食膳具には、粘土巻き上げの痕跡を残すものが多い。44の椀Hは小さな底部円盤に右回りで粘土巻を1回転半、45の椀Hは逆回り、47の小型高坏の坏部も右回りで2回転、これに対し脚部は反対周りの粘土巻き上げ痕跡が見える(写真32・33)。土器製作者の利き手や成形時の体勢、姿勢を復元する上で良好な資料と言えよう。

土師器煮炊具は在来技法の短胴小釜と長胴釜、そして破片だが、甕と浅鍋も出土している。短胴小釜は外面ハケ目調整、内面ケズリ調整のもの。長胴釜も同様の技法を持つもので、胴部は薄く、長胴器形を呈す。

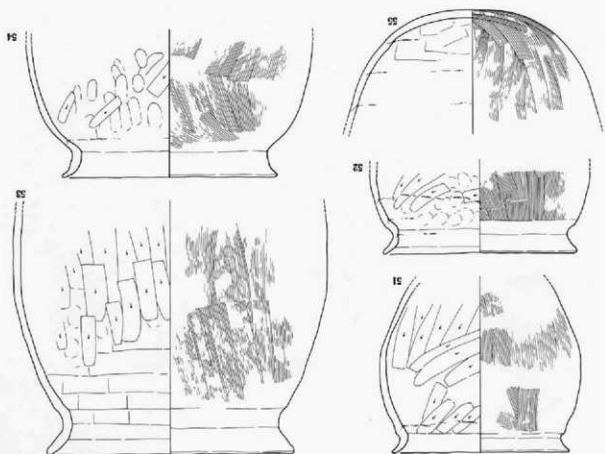
(埋土中層資料)

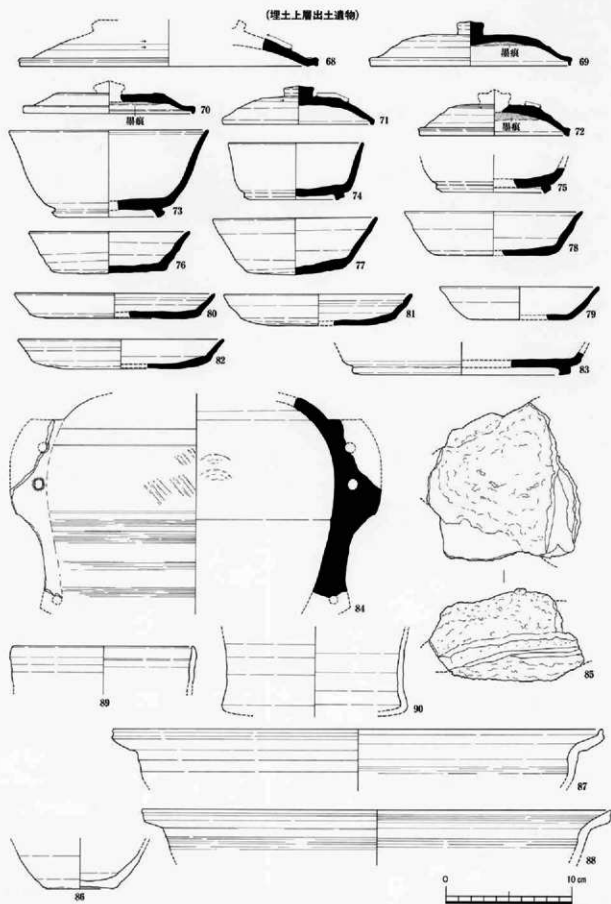
古代Ⅱ3期、三湖台ⅢC期に位置づけられる資料で、須恵器食膳具を中心に出土している。須恵器は坏B蓋身、高坏G、鉢Fで、土師器は内黒高坏G、赤彩椀類、赤彩坏B類、赤彩鉢F(?)の食膳具と、在来型の浅鍋や長胴釜の煮炊具である。須恵器坏Bはほぼ南加賀産に統一されている。

第88図 古代整穴遺物出土遺物4 (S188-2、全T S=1/3)



(出土中層出土遺物)





第89図 古代竪穴建物出土遺物5 (S188-3、全てS=1/3)

(埋土上層資料)

北陸古代福年のⅤ2期を中心とするⅤ1期からⅤ1期にかけての資料である。当堅穴埋土の中で最も当期の出土遺物が多く、須恵器食膳具を中心に出土している。須恵器食膳具は、坏B、坏A、盤A、盤B、碗A、貯蔵具では瓶B、瓶D、甕、土師器食膳具では赤彩碗と外面赤彩内面黒色の碗皿類、煮炊具もひと揃いの器種が出土する。図示したものは須恵器食膳具が主で、68の大型法量の蓋は環状突帯の廻る、金属器系有台坏の蓋となるもので、当期の特徴的な器種の一つである。坏B蓋は4点図示したが、そのうちの3点で内面墨痕と顕著な磨耗痕跡が確認でき、裏に転用されたことがわかる。当遺構から黒書土器の出土はないが、当地区ではこの時期に位置づけられる黒書土器は比較的多く出土している。

なお、当資料群に伴うものとして、須恵器窯で使用された可能性の高い粘土塊置台片(85)と土師器生産に関連する匝鉢状土師器製品(90)が出土している。粘土塊置台は窯の床土と粗い砂質帯びる粘土塊との間に須恵器坏Aか盤Aの破片が挟み込まれたもので、須恵器の上には溶解した自然釉が厚く掛かり、窯床土とともに溶着している(写真62)。須恵器片の形態から当期に位置づけたもので、須恵器窯製品の選別等に伴う廃棄資料と予想される。また、匝鉢状土師器製品は、南加賀窯の粘土のもので、Ⅴ期に位置づけられるものと判断した。これについても、内黒土師器生産関連の遺物と判断できる。

6. SI89 出土遺物

小型堅穴建物で、出土遺物は多くはないが、埋土中に在来型技法の土師器煮炊具A類とともに、92・93のような古代Ⅲ期古段階、三湖台3D期に位置づけられる須恵器が混在している。ただ、それ以外は比較的資料のまともはあり、カマド出土の97・98の土師器短胴小釜や長胴釜などを含め、概ね古代Ⅳ2期を前後する時期に位置づけられる。食膳具は須恵器主体であるが、破片では赤彩土師器碗が定量出土しており、煮炊具も窯産の北陸型が主体である。

以上の遺物の他に、当堅穴からは3点の円筒形土師器製品が出土しており(102と103は同一個体の可能性もある)、103・104はカマド内埋土からの出土が確認される。いずれも北陸型と言えるロクロ・叩き技法をもつ南加賀窯産と推察されるもので、102は上端をソケット状に絞り込む部分の破片、103は筒部にあたる部分の破片、104は底部を有する形態の基底部付近の破片である。104については、基底部直上に横口が付設されるタイプのもので、円筒形土製品をL字形屈曲させる機能を持った部材であったと理解される。このような形状を持つ円筒形土製品は南加賀窯二ツ梨一貫山支群の土師器焼成坑群で出土が確認されており(小松市教育委員会2002年「二ツ梨一貫山支群」)、当土師器焼成坑群がⅣ2期前後に位置づけられる点からも、当焼成坑群で生産された可能性を持つ。さて、この土製品だが、104の横口付近の内面にはターレット状のススが付着する(写真27)。ソケット状の有段形態の口縁部や横口式の連結部は、管状土製品を長く繋ぐとともにL字に屈曲させて使用することを前提とした土製品であることを予想させ、カマド使用で内面スス痕が付くとすれば、煙突に使用したと考えるのが妥当であろう。円筒形土製品は、カマドでの出土が多いことから、カマド部材と理解されている。カマド構築の芯材と理解する研究者も多いが、管状を呈することと連結させる機能を持たせることは、やはり煙突での使用が本来の機能であったものと考えられ、このような煙突使用痕跡の確認はそれを裏付ける資料と評価されよう。新潟以東で多い、カマドソダ芯材に使われる事例は、転用事例と考えておきたい。

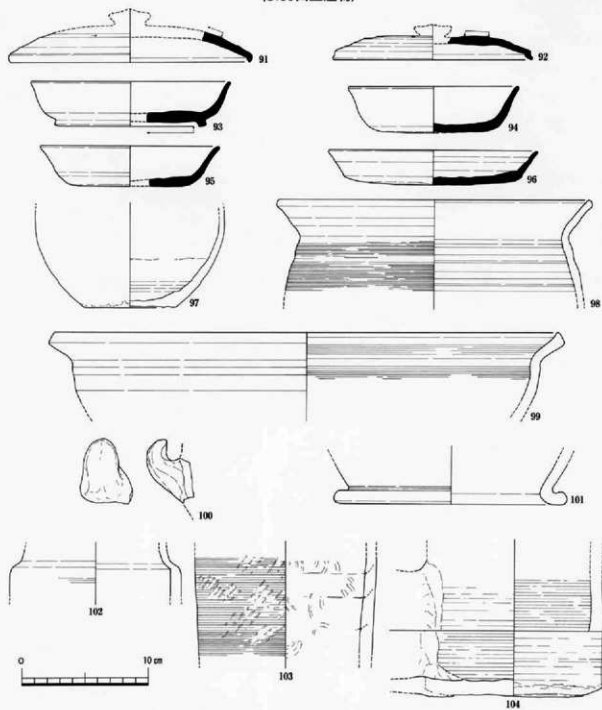
7. SI91 出土遺物

大型の壁支柱堅穴建物であるが、床面まで削平されていたため、出土した遺物は、掘方や柱穴中からの少量の破片のみである。須恵器は坏B身片のみで、古代Ⅱ2期からⅡ3期、三湖台3C期から3D期のものと推察される。土師器煮炊具は在来型技法のA類のみで、短胴小釜と浅鍋を図化した。器形から須恵器と同様の時期と考えた。図化していないが、食膳具で赤彩土師器碗類や煮炊具でロクロ成形のものも確認されており、これらも当該期資料とみてよいだろう。

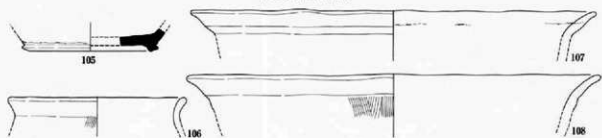
8. SI92 出土遺物

堅穴建物の2/3が削平されているため、出土遺物は30点にも満たない。このため、時期比定できるような資料に欠くが、掘方土坑から出土した110の赤彩土師器輪Fは地元B類粘土で底部ケズリ調整を施す丁寧な作りのものである。底部大きな形態を呈す点など、古代Ⅱ2期、三湖台3B期に位置づけられる。109の坏A蓋も同様の時期と判断可能であり、破片で出土するその他の遺物も当期に位置づけることに矛盾はない。

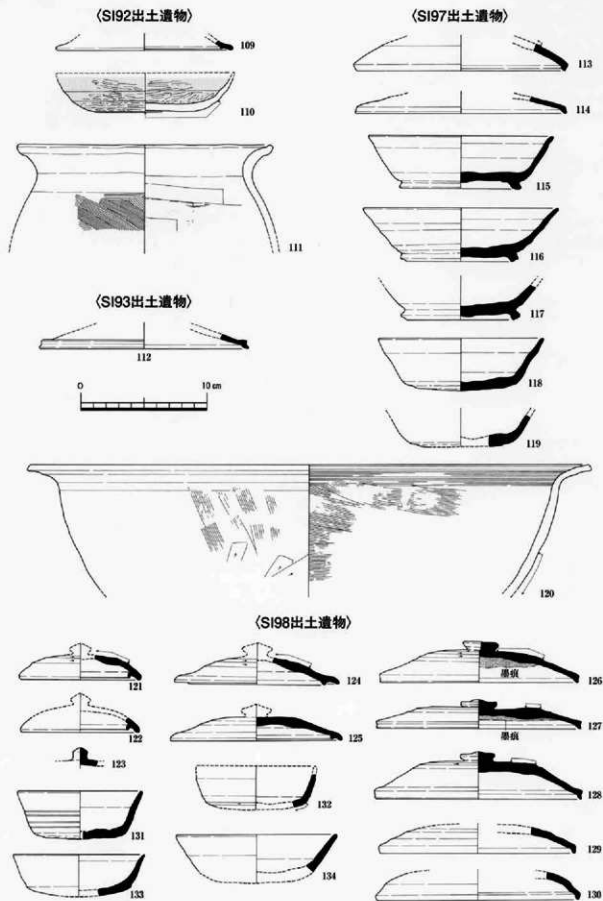
(SI89出土遺物)



(SI91出土遺物)



第90図 古代竪穴建物出土遺物6 (SI89、SI91、全てS=1/3)



第91図 古代竪穴建物出土遺物7 (SI92、SI93、SI97、SI98-1、全てS=1/3)

9. S197 出土遺物

壁支柱型穴建物と考えられるものが、床面まで削平されており、掘方土坑と支柱穴のみ遺存していた。遺物は掘方土坑から出土しており、須恵器杯B、杯A、土師器煮炊具類が確認される。図示した須恵器食膳具は南加賀窯北群産のもので、115・116・118・119は古代Ⅱ3期に位置づけられる戸津46号窯の須恵器に近似した特徴を持つ。120の土師器浅鍋は口縁部にカキ目調整をもつB類技法のものだが、胎土は地元C類であるなど、煮炊具生産が須恵器窯場へと移行していく三湖台3D期より以前の様相を呈しており、その点でも三湖台3C期に位置づけて大過ない。

10. S198 出土遺物

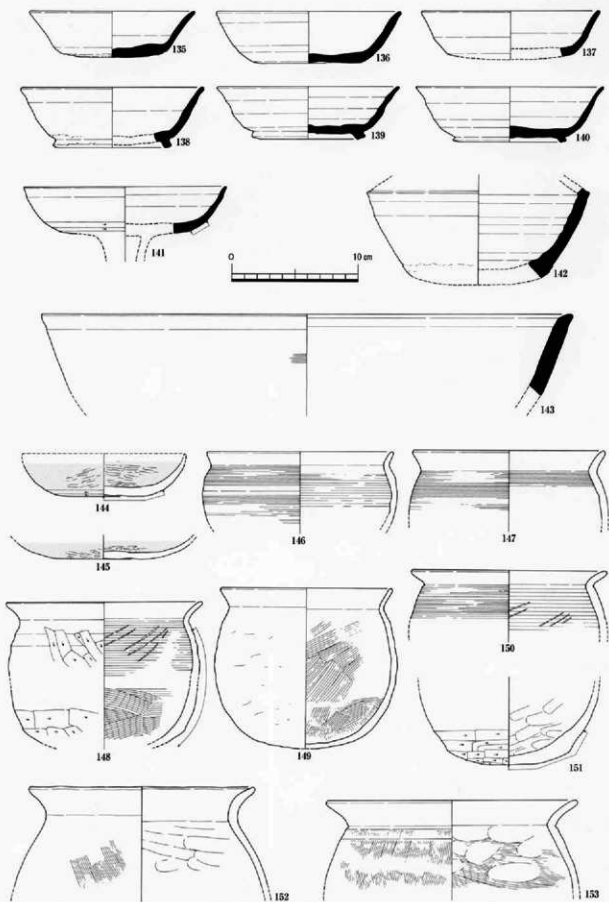
堅穴建物埋土中より多くの土器が出土しており、埋土下層から床面にかけて（床下も一部含む）、須恵器食膳具を中心に時期にまとまりをもった一括資料が存在する。古代Ⅱ2期からⅡ3期への過渡期、ないしはⅡ3期の最古相段階と位置づけられるもので、三湖台編年では3B期から3C期への過渡期とするのが妥当である。L字形カド付設置穴建物では最も新しく位置づけられる資料となるが、ただ、掘方土坑等の床下より出土する遺物には、121～123・131～133の須恵器杯G蓋身と124・125の須恵器杯A蓋が存在し、これらについてはそれぞれ三湖台2A期と2B期に位置づけられよう。前者はほとんどが能美窯産で、南加賀窯産は131の体部沈線をもつ4条入れる杯G身のみである。

以上の三湖台2期に位置づけられる床下資料を除けば、図示したものは3B期から3C期に位置づけられる。須恵器食膳具は杯B蓋身と杯A、高杯Gで構成される。杯類の器種一法量と器形的特徴は古代Ⅱ3期の古相に位置づけて大過ない様相を持つが、134・135の杯Aは体部外傾器形から蓋を伴う有蓋杯Aの可能性が高く、127の杯B蓋器形も、つまみや全体的な器形特徴から、古代Ⅱ2期の様相と捉えられる。三湖台3C期の中でも最古期の資料とするのが妥当だろう。なお、当須恵器には126・127の黒痕をもつ杯B蓋や136・139のような焼成による焼きヒビの入る杯身類がある。須恵器のある杯B蓋は、内面広く墨が付着し、筆慣らししたような痕跡を持つ。研磨痕を伴わないため、靨としては使用されていないが、墨溜め用具として転用されたものだろう。なお、この126の杯B蓋は完形品だが、全体が焼き歪んだもので、当初から靨に使用されたものかもしれない。焼きヒビをもつ杯身136は口縁部に、139は底部に底切れをもつもので、139に関しては容器としては不適当である（写真52・53）。この須恵器もほぼ完形品であり、126に伴う可能性がある。

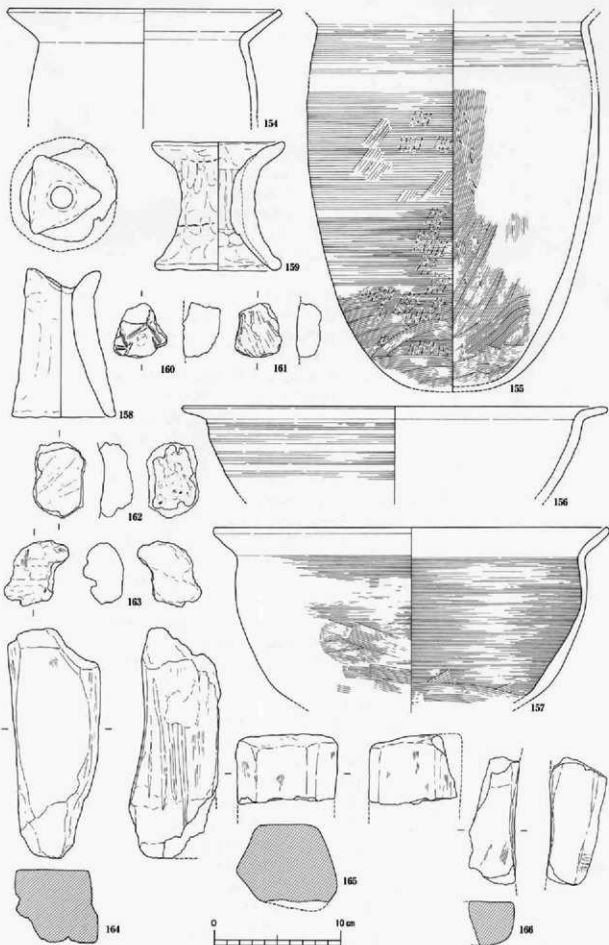
これら須恵器食膳具に伴う土師器食膳具は、赤彩陶Fを主体に構成される。やや小型で扁平な144と底部広い145とがあり、いずれも窯場A類胎土である。また、破片資料だが、少量の内黒高杯に伴っており、須恵器系技法の高杯Gと在来型技法の高杯Hが確認される。このような土師器食膳具構成も当期の特徴を示すと言える。煮炊具は、短胴小釜、長胴釜、浅鍋が出土している。いずれの器種も須恵器系技法による煮炊具B類ではほぼ構成されるが、149の短胴小釜は内面ハケ目調整、152の長胴釜は外面ハケ目調整、内面ヘラナデの在来型技法のものであり、僅かながら在来型技法A類の煮炊具が存続している。ただ、胎土は他の須恵器系B類と同様に窯場生産のものであり、土師器生産が須恵器窯場へと移行していく段階のものとして位置づけられよう。

図示した短胴小釜はいずれも頸部「く」字屈曲で口縁端部を丸くおさめる器形を呈するもので、胴部上半はカキ目調整かロクロナデ調整、底部は内面から指ナデかハケ目調整により押し出し、外面をケズリ調整により丸くするものである。長胴釜は155のみ全形がわかるもので、頸部「く」字屈曲で胴部にあまり張りを持たずに砲弾型を呈するものである。成形は粘土組織み+成形叩きによって胴部既形を作り、カキ目調整をした後に、内面を靨方向のハケ目調整するもので、このハケ目調整により内面から底部を押し出して丸底化し、底面付近のみ外面カキ目調整によって最終の仕上げを行っている。内面からのハケ目調整による底部押し出しは在来型技法の特徴であり、この時期に見られる長胴釜の技法特徴と言えるものである。

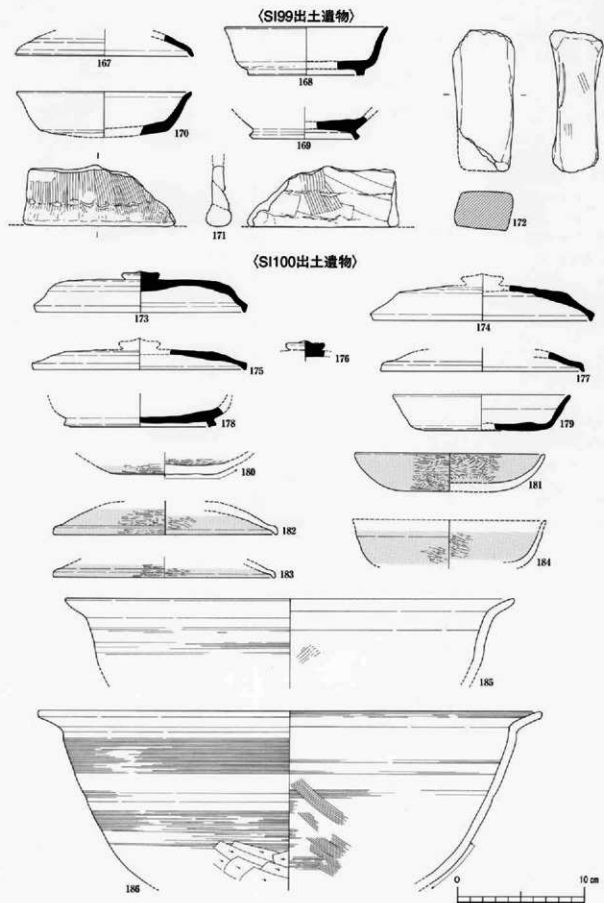
その他の遺物としては、支脚形土製品3点と製塩土器1点、砥石類3点が出土している。支脚形土製品はタイプの異なる2つの大型品を図示した。158は上部へ傘まる円筒形で、上端を三方に突出させて三叉支持する形態のものである。全体に被熱を顕著に受けており、スス付着はないが、赤色または一部還元がかかったように焼結している（写真29）。堅穴建物内の支柱穴から出土しており、完形に近いものである。159は上下端とも強く相反する鼓形を呈するもので、これについても被熱赤化している。159は床下出土の破片であり、当堅穴建物に伴うものは158の支脚である可能性が高い。なお、当堅穴建物の掘方土坑や床下からは焼成粘土塊（160～163）が



第92図 古代竪穴建物出土遺物8 (SI98-2、全てS=1/3)



第93図 古代壑穴建物出土遺物9 (SI98-3、全てS=1/3)



第94図 古代堅穴建物出土遺物10 (SI99、SI100-1、全てS=1/3)

数多く出土している。表面に平滑な面をもち、細い茎状の縦維圧痕がところどころ食い込むもので、建物の土壁片か土器焼成に伴う覆い型野焼き法の泥天井塊（焼成粘土塊B類）にあたる可能性が高い（写真66）。

11. SI99 出土遺物

竪穴建物の半分以上がSI98に重複しており、重複部分での遺物の帰属が不明確である。遺物出土量は概して少なく、三舞台4A期～4B期の須恵器食器類を中心に出土する。171は内外面にハゲ目調整を施す来型技法の甕形土師製製品で、技法的に古手の印象を受けるが、胎土は竈場A類であり、混在資料ではなく、当期に位置づけ可能と理解する。なお、SI98で図示した159の支脚形土製品だが、破片が当竪穴建物からも出土しており、当竪穴建物に伴うカマド支脚である可能性をもつ。

12. SI100 出土遺物

竪穴建物の上部が削平を受けている大型の壁支柱竪穴建物で、図示したものは掘方土坑や床下から出土したものである。出土遺物も少なく、決して良好な資料とはいえないが、図示したものは時期的にまとまりをもっており、古代Ⅲ期古相段階、三舞台編年で3D期に位置づけられる。

須恵器食器類は坏B蓋身と坏Aで、一器種一法量や大型法量で扁平器形を呈す点など古代Ⅲ期古段階の特徴を有している。須恵器はいずれも南加賀窯北群産であり、その点もこの時期の特徴と言える。土師器食器類は赤彩品では統一されており、碗Fは扁平器形を呈し、坏B蓋身を一定量含む。煮炊具では短胴小釜、長胴釜、浅鍋、飯類が出土しているが、図示できたものは浅鍋と飯である。浅鍋は深身器形で、口縁部屈曲の短いものだが、ロクロ成形のB類であり、186の外面下半にはケズリ調整が入る。口縁部を丸くおさめる器形で、この時期の特徴を現している。飯の187は底部筒抜けの形態を呈すもので、良好な遺存状態のものである。胴部成形は粘土縦積み後に縦方向のハゲ目調整を施すもので、カキ目調整と口縁部のロクロナデ調整により正立状態での仕上げを行う。その後、倒立状態にし、胴部下位を叩き整形（外：Ha類、内：同心円）により内傾気味に器形修正してからロクロナデ調整により仕上げる。このように技法的には須恵器系B類のものと言えるが、1次成形段階での調整にハゲ目調整を入れたり、把手形態を来型A類に付されるような牛角形把手としている点など、来型と須恵器系の融合した技法を使用している。当期の特徴的な煮炊具と言えるのだろう。

その他の遺物としてはミニチュア土器と支脚形土製品、釘状の棒状鉄製品が出土する。ミニチュア土器は、小型鉢状器形を呈す手づくね製品で地元胎土のもの。支脚形土製品は中実の作りで中心に穿孔をもつC類タイプで、上下端を広げる形態を持つ。これも地元胎土であり、土師器煮炊具や食器類が竈場生産品には統一されている状況と対照的である。

13. SI101 出土遺物

竪穴建物の大半が削り取られており、出土遺物は極めて少ない。竪穴埋土からは複数時期の土器が出土しているが、竪穴に伴うようなまとまった下層資料は、三舞台1期に位置づけられるものである。図示したものは全て土師器煮炊具で、来型A類技法のものであり、器形も192の胴部張る器形や193の手付き深鍋器種の存在など、三舞台1B期に位置づけ可能と考えられる。なお、須恵器食器類では坏Hの底部破片が1点出土しており、当該時期に位置づけて問題なくある。

14. SI104 出土遺物

竪穴の大半が削平された竪穴建物で、遺物は掘方土坑を中心に出土している。主に須恵器食器類が出土しているが、古代V期に位置づけられるものであり、これまでの竪穴建物資料の中では最も新しい。図示したものはいずれも破片であるが、194・196～198など、いずれも古代V1期に位置づけられるもので、胎土は南加賀窯産である。なお、198の盤Aの外底面には2箇所朱墨痕があり、薄くて判読できなかったが、文字のようなものがかすかに見える。土師器は両面赤彩を施す碗Aと短胴小釜が出土する。

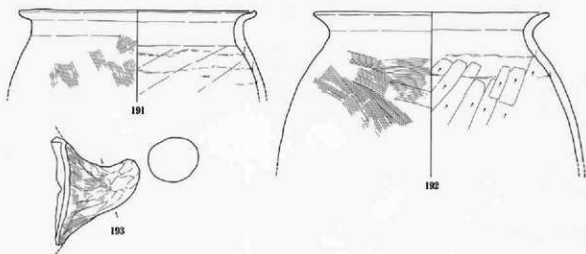
15. SI105 出土遺物

遺存状態のよい竪穴建物で、カマド周辺に当竪穴建物に伴う土師器煮炊具が一括廃棄されているが、全体的に遺物出土量は少なく、特に食器類器種はほとんど出土していない。唯一図示できたものは201の須恵器坏Aで、口径13cm程度の扁平器形を呈す点や全体的な器形特徴から、古代Ⅳ2古期に位置づけ可能と判断される。当須恵器は一部口欠けがあるが、完形品であり、外底面に「上」墨書が記される。

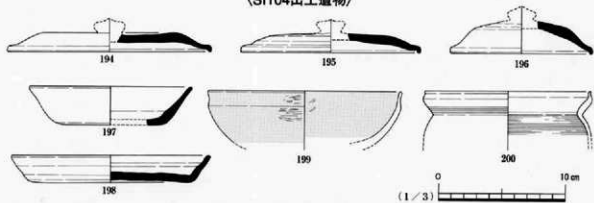
これ以外の土師器資料は、赤彩碗類が破片で僅かに出土する以外は、煮炊具資料である。長胴釜で3個体以上



〈SI101出土遺物〉

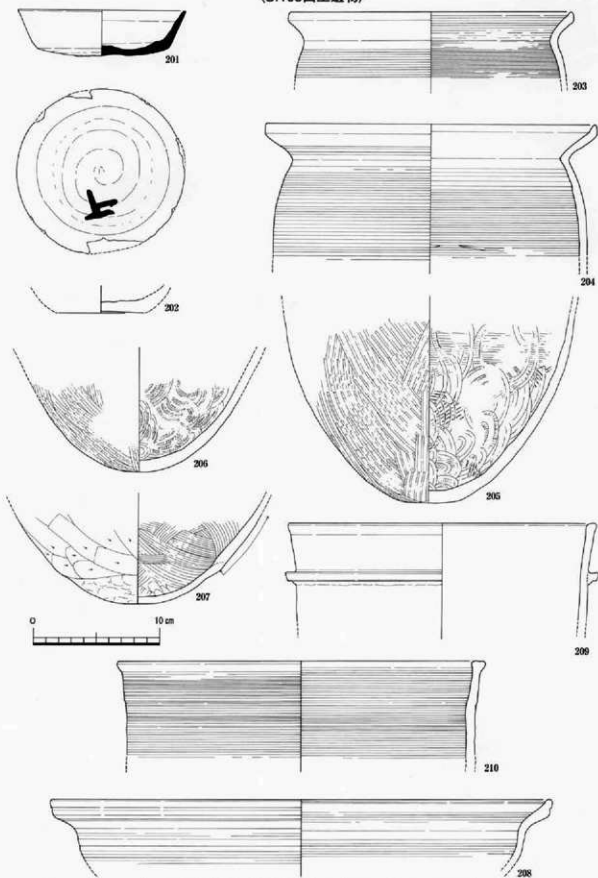


〈SI104出土遺物〉



第 95 図 古代竪穴建物出土遺物 11 (SI100-2、SI101、SI104、190のみS=1/2、他は全てS=1/3)

(SI105出土遺物)



第96図 古代竪穴建物出土遺物 12 (SI105. 全てS=1/3)

出土しており、胴部上半と胴部下半が接合できていないが、同一個体の可能性も残される。北陸型として完成された形態と技法を持ち、胴部は成形叩きを伴わず、底部の丸底化は外面平行線文、内面同心円文の叩き出し成形による。ただ、207については、叩き出し成形は行わず、伝統的とも言える、内面から指ナマリによる押し出しと外面の指押さえにより丸底化させ、内面をさらにハケ目調整、外面をケズリ調整して仕上げている。以上の長胴釜には、203・204・207で内面スズ状タール痕を残すものが確認されており、通常の使用方法とは異なる使われ方をした可能性がある。他の煮炊具としては、浅鍋と甌を図示したが、甌器特徴など当期に位置づけて問題のないものである。なお、209の突帯の巡る器種は甌としたが、器内薄手であることと突帯が断面方形の丁寧な細い形状を持つ点など、金属器系でもあり、甌の中では特殊品と言えるものかもしれない。

16. SI106 出土遺物

削平された竪穴建物であり、掘方土坑もなく、カマドと思われる被熱床面周辺で僅かに土器が出土する程度である。図示したものは古代Ⅱ2期からⅡ3期に位置づけられる須恵器坏A(211)と口縁端部に面を持つ小型鍋状器形の製塩土器(212)で、製塩土器も須恵器とほぼ同時期と判断されるところから、当該期の竪穴建物と判断した。製塩土器は内面横ハケ目調整の薄手のもので、南加賀産のものと思われる。外面は強く被熱赤化しており、剥落している。

17. SI107 出土遺物

小型の竪穴建物で、埋土中には古代Ⅲ期からⅤ期までの土器が混在するが、図化できるような比較的残りのよいものはほぼ古代Ⅳ2期前後の土器である。須恵器は坏B蓋身、坏A、盤Aが出土するが、216の坏Aと217の盤Aは法量や器形、技法など当期の特徴をよく出している。土師器は長胴釜や浅鍋、台付鉢、円筒形土師製製品が出土する。台付鉢は脚部にスカシを持たない、基部径の大きなタイプで、Ⅳ2期の器形特徴を示している。円筒形土師製品も当期に顕在化する土製品と言えるもので、221は上端を有段式にして絞るタイプである。当竪穴建物では他にも2点出土している。

なお、218の底部系切り後にケズリ調整を施す須恵器底部破片だが、小型底径を呈す点、体部の立ち上がりと内面平滑に仕上げる点などから、コップ形須恵器の可能性もある。南加賀産であり、当期に位置づけられるものとみる。

18. SI108 出土遺物

竪穴建物の西側が削平されているが、比較的出土量は多く、下層を中心としてまとまりをもった土器が出土する。ただ、一部埋土内に土坑が重複しており、それらについても一緒に図示したが(236～239)、古代Ⅳ2古期頃に位置づけられるものであり、当竪穴建物出土遺物の説明からは除外する。

以上の重複土坑資料を除くと、図示した須恵器は、坏B蓋身の扁平器形を呈す特徴や法量から古代Ⅱ3期新からⅢ期古相に位置づけられるが、226の坏B身高台器形や227の坏A器形については、Ⅲ期まで下がるものではなく、古代Ⅱ3期の範疇で収まるものと言える。須恵器は南加賀産でも南群産が定量存在し、能美産も少量確認される。この点もⅢ期に下がるに等しい様相でもある。

土師器は赤彩で占められ、坏B器種が確認できる。煮炊具は在来型技法のものはないが、地元胎土のものが依然存在しており、須恵器窯場における煮炊具生産の本格化段階以前の様相を示す。須恵器の胎土構成なども含めて、三湖台3C期の様相を示すものと言えよう。

なお、当資料からは砂岩質の大型砥石と支脚形土製品が出土する。支脚形は上下端が強く外反する鼓形のもので、被熱痕は確認されない。

19. SI109 出土遺物

竪穴建物の床面まで削平を受けた、掘方土坑だけを遺存する資料であるが、遺物は少なからず出土している。ただ、遺構密集箇所のために混在する土器資料も多く、当竪穴建物に伴うものと位置づけられる資料は少ない。図示したものは当竪穴建物に伴うと判断される資料で、須恵器食膳具を中心に抽出してある。須恵器食膳具は坏B蓋身と坏Aで、240・241・245は古代Ⅱ3期新段階の資料と言えよう。他のものも概ねⅡ3期に位置づけられるものであり、246の土師器長胴釜も当期に位置づけて大過ないと判断される。

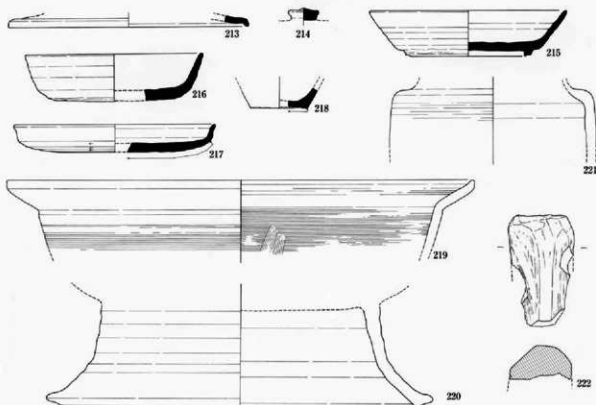
20. SI110 出土遺物

削平竪穴建物で、掘方土坑も少なく、出土遺物は極めて少ない。時期帰属可能なものは図示した247の土師器

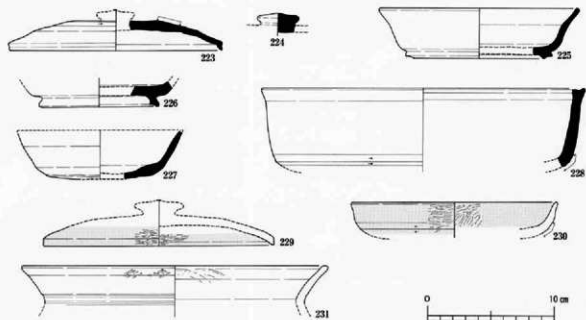
(SI106出土遺物)



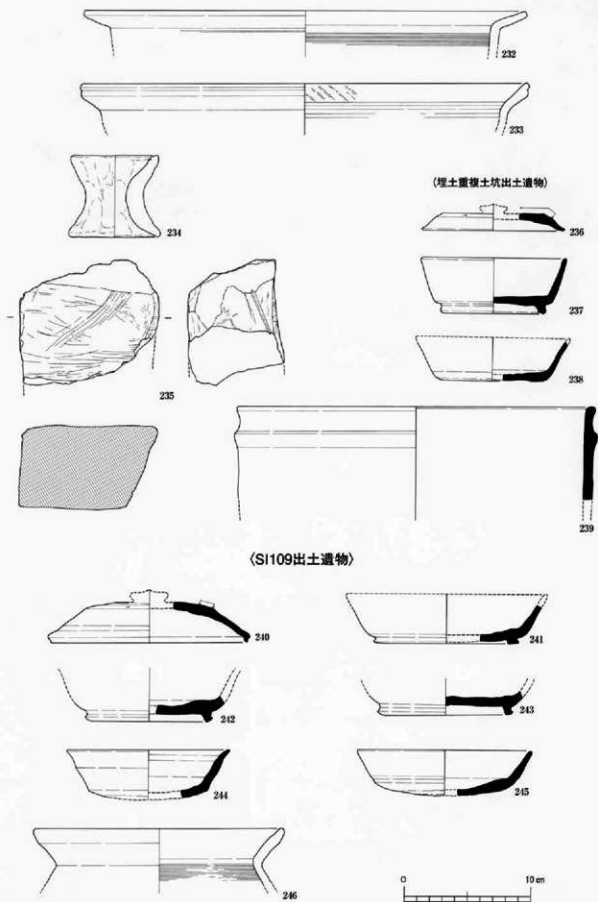
(SI107出土遺物)



(SI108出土遺物)



第97図 古代竪穴遺物出土遺物 13 (SI106、SI107、SI108-1、全てS=1/3)



第98図 古代竪穴建物出土遺物 14 (SI108-2、SI109、全てS=1/3)

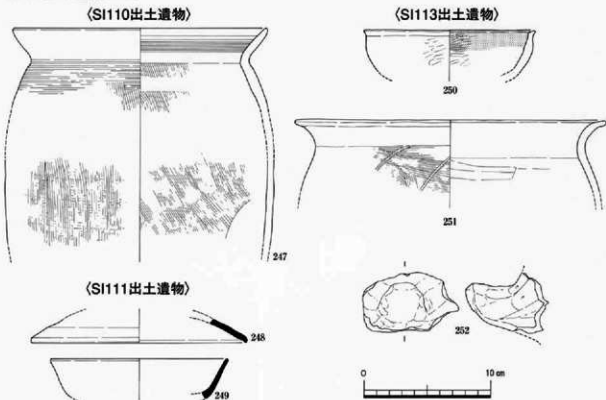
長胴釜のみで、カキ目調整後に外面縦方向のハケ目調整を施すものである。長胴となる器形や口縁部器形、在来技法を多用する特徴など、窯場生産への過渡期に見られる当器種の融合現象であり、古代Ⅱ3期に位置づけられるものと考えられる。

21. SI111 出土遺物

竪穴建物の大半が倒平を受けており、コーナー部分のみ遺存している。このため、出土遺物は極めて少なく、図示したものは掘方土坑から出土した須恵系食器2点である。248の坏B蓋は口径17cm弱を測る折り曲げ口縁のもので、口径が大きく古代Ⅲ期の印象を受けるが、折り曲げは短く全体的に薄手のため、古代Ⅳ1期頃とするのが妥当だろう。249の坏Aも体部外反の薄手のものであり、同時期に位置付けて問題ないものと理解する。

22. SI113 出土遺物

埋土から床面まで倒平を受けた竪穴建物で、出土遺物は極めて少ない。須恵器はほとんど入っておらず、食器は土師器主体で構成される。図示した250の口縁部外屈する内黒輪Hや、固化していないが口縁部内湾器形の輪H、脚部中実の内黒高環Hの破片も出土しており、古代Ⅰ1期の様相を持つ。ともに出土する土師器煮炊具は外面ハケ目調整、内面ヘラナデ調整する在来型技法のもので、251は口径の大きさから見て、手付き深鍋と判断される。252の把手破片も深鍋の可能性が高く、古代Ⅰ1期、その中でも古手の時期、三湖台1B期に位置づけられるものと理解したい。



第99図 古代竪穴建物出土遺物15 (SI110、SI111、SI113、全てS=1/3)

第2項 古代掘立柱建物出土遺物

古代掘立柱建物から出土する遺物は、今回報告地区の中で4.3%の割合をもつが、掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は破片が主で、一つの遺構としての一括性や同時期性を問にくい資料が多い。特に、今回報告地区の掘立柱建物は、掘立柱建物どうしの重複をはじめとして、土坑や竪穴建物との重複が多く、他の遺構からビット埋土層への土器混入が目立っている。つまり、掘立柱建物出土遺物としてここで図示はしたものの、その掘立柱建物に本当に伴うものであるのかとなると、微妙な部分がある。よって、ここでは、特に時間的にまとまりをもった一括性高いと判断できる掘立柱建物資料や特筆すべき遺物を出土した遺構のみを取り上げる。なお、その他の掘立柱建物出土資料は別記一覧表に代えることとした。

SB116は78点の土器が出土しており、図示したものは全て異なる柱穴からだが、時期にまとまりを持つ。4の須恵器杯B蓋の扁平器形や口縁部折曲げ形態、5の赤彩土師器碗F器形などから、古代Ⅱ3期の古相呈す時期と推察する。6・7の土師器長胴釜も同時期で問題なく、いずれも北陸型の成形技法を持つ。特に7は口縁部外面に成形叩き痕跡を残すもので、口縁端面形成の特徴やカキ目調整後に胴部中位以下を外内縦方向ケズリ調整、内面縦方向ハケ目調整を施す点は、北陸型煮炊具成立期の在来型技法との融合を表している。

SB174は146点の土器を出土する掘立柱建物で、ピット4・6を中心に固体化可能な土器が出土する。41の杯B蓋は古代Ⅳ2新期に遡る可能性を持つが、他は概ね古代Ⅴ2期を前後する時期にまとまっており、須恵器はほぼ南加賀窯産に統一される。須恵器食膳具の他に土師器短胴小釜や浅鍋、甌も出土しており、当期に位置づけられる数少ない資料と言える。なお、土器とともに48の須恵器窯産材としての置台片が出土する。須恵器食膳具片を中に噛んでおり(写真65)、須恵器の時期から見て、古代Ⅴ期に位置付け可能と判断する。

SB191は土器出土が17点と少ないが、特筆すべきものとして65の土師器長胴釜を上げる。この長胴釜は頸部屈曲が明瞭で、口縁部にロクロヒダ状の段を数段もつ器形のもので、所謂「丹波系煮炊具」と呼称するものである。丹波の由良川流域に分布の中心がある特徴的な煮炊具で、丹波系移民の存在を示す資料と位置づけている。胎土は地元胎土であるが、赤い発色をさせるために赤色酸化鉄粒を意図的に混入している。当煮炊具は古代Ⅱ1期以降に北陸で散見されるものだが、三湖台地集落ではⅡ3期をもってほぼ消滅する様相をもち、同じピットより出土する須恵器の時期(古代Ⅲ期頃)と若干のズレがある。

SB199は79点の土器を出土する掘立柱建物で、建替えを同主軸、同規模で行っている。このため建替えにさほど時間差はないものと見られ、出土する土器は古代Ⅳ1～Ⅳ2古期の66～70・74・75と古代Ⅴ2期頃の71・72・76の2時期が確認される。建替えに時期差があった可能性もあるが、当掘立柱建物の南側に重複するSI107は古代Ⅳ2古期に位置づけられる竈穴であり、Ⅳ期の資料はSI107に伴う土器が混在した可能性がある。

SB207は104点の土器を出土する掘立柱建物で、94のような古代Ⅱ3期の須恵器やⅣ期の須恵器を少なからず混在するが、土師器を中心にⅤ期を中心とする土器が主体を占めている。図示した95～10は古代Ⅴ2期を前後する時期のものと思われ、特に98～100の土師器浅鍋は同じピット(P6)から出土する。

SB209は78点の土器を出土する掘立柱建物で、図示したものはA掘立柱建物に伴うものである。102・106は時期が異なるが、他は古代Ⅳ2古期にほぼまとまっており、当該掘立柱建物を当期に位置づける。なお、101の杯B蓋については内面に広く墨痕と磨耗痕が確認できており、転用視として使用されている。

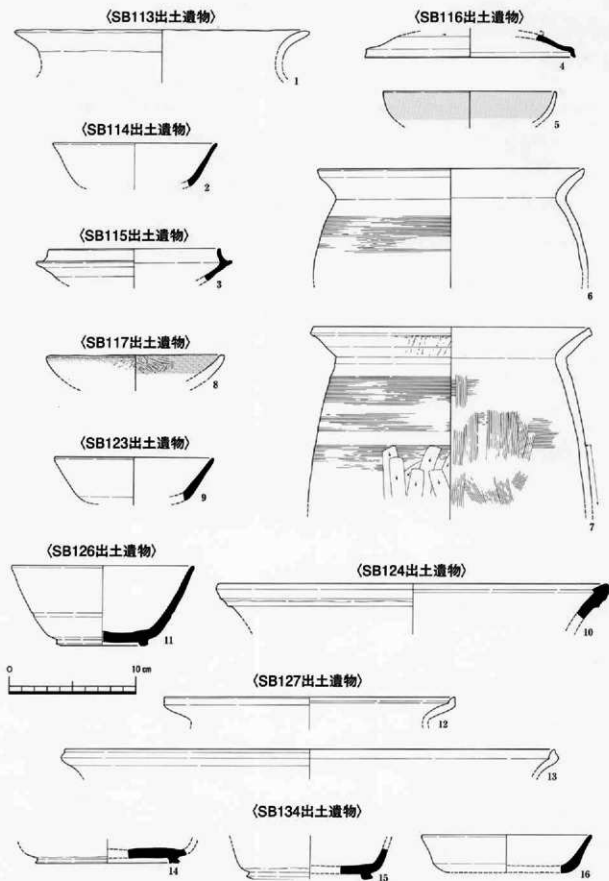
SB232は294点の土器を出土する掘立柱建物であるが、うち153点が匣鉢状土師器製品(以降、匣鉢とする)であり、その大半がピット18から集中出土している。ピット18内には土師器短胴小釜・浅鍋片が多く埋められており、煮炊具類に煤付着等の使用痕跡が全く見られない点、匣鉢や煮炊具に焼成剥離痕(焼き分け等による剥離痕)や強度の被熱による赤化、破面での火色や黒斑が確認される点、当土師器片とともに多量の焼土小塊が埋土に混在している点などから、当土師器片は近隣で行われた土師器焼成に伴う一括廃棄品であると考える。この匣鉢や短胴小釜、浅鍋(125～137)は、小釜や浅鍋の口縁部屈曲器形や調整技法等から古代Ⅵ2期に位置づけられるものと判断できる。後述する他のピット出土土器群とは明確な時期差をもち、これら土師器焼成に伴う一括廃棄品が、ピットの埋土下層には入っていないことから考えても、当掘立柱建物とは直接関係のないものと判断できよう。なお、匣鉢についてだが、口径16cmを測る底部立ち上がりから口縁部まで直立する筒形の土師器製品で、胎土は煮炊具と同様のものが使われる。底部切り離しを回転ヘラ切りによる須恵器技法のもので、底部ともに極めて薄く作られている。当土製品については、古代Ⅵ1期に南加賀産で生産が本格化する外赤内黒土師器食膳具(南加賀産は身内部に発炭材を入れて2個の食膳具を合わせ口焼成する技法がとられる)とともに出現してくるもので、口縁部のズレ防止目的で使用された内黒焼成専用道具と性格付けしている。

これら土師器焼成に伴う一括土師器を除くと、図示したとおり、概ね古代Ⅳ2新期に中心をもち、Ⅴ1期頃までの範疇でおさまる。なお、124の土師器赤彩碗Aについては、内外面ミガキ調整を伴うもので、体部外傾器形を呈しており、外赤内黒の碗Aに繋がる器形をしている。これについてはⅤ2期に下る可能性が高い。

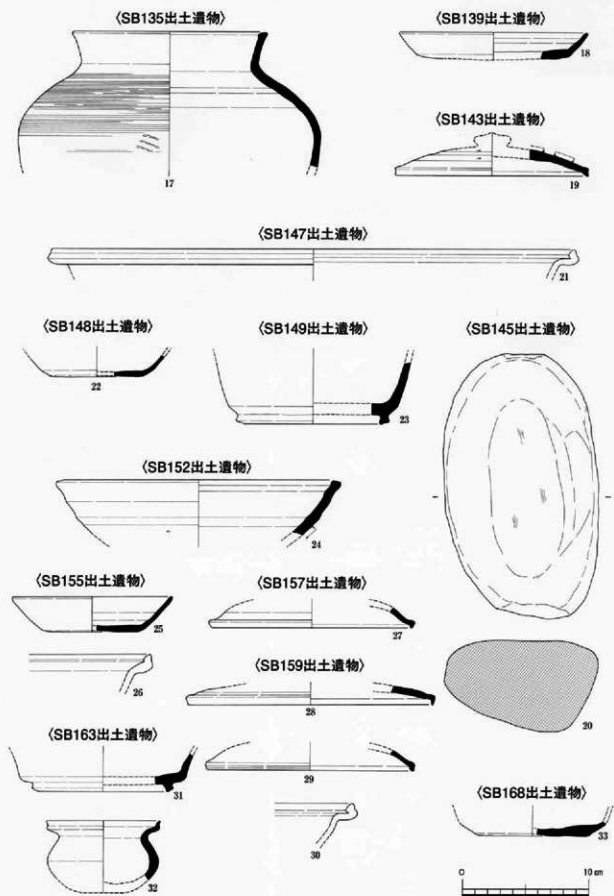
SB234は65点の土器を出土する掘立柱建物である。図示できたものは少ないが、須恵器盤Aや土師器煮炊具から概ね古代Ⅴ2期頃と判断される。140は須恵器窯で使用された溶着粘土塊で、粘土塊内部に須恵器片を噛んでいる(写真63)。SB174で出土する須恵器窯置台塊も古代Ⅴ期に位置づけられており、時間的に類似する。

今回報告地区の古代掘立柱建物出土遺物一覧表

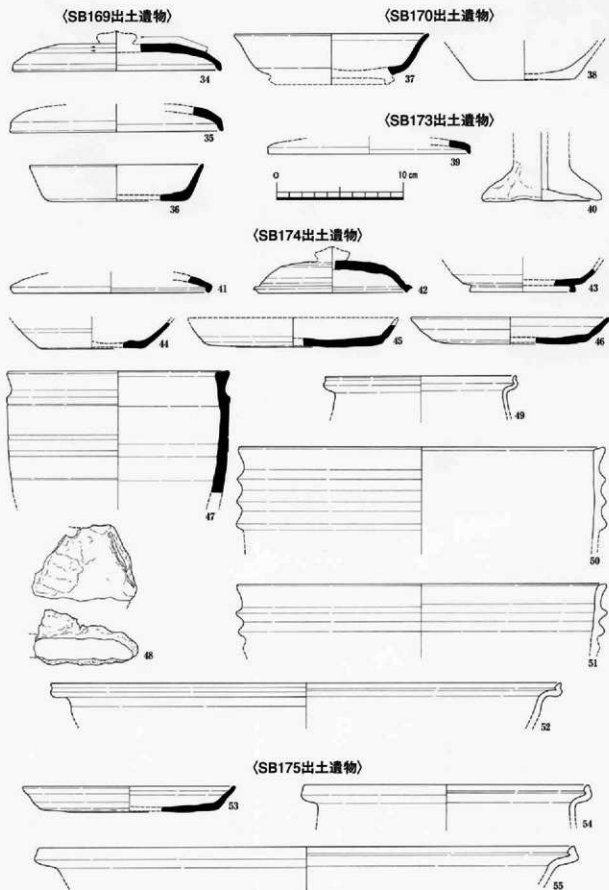
遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB110	遺物2点。古代Ⅱ～Ⅳ期?土師器。	SB179	遺物4点。古代Ⅳ期の須恵器・土師器。
SB112	遺物2点。古代Ⅱ～Ⅲ期?土師器。	SB180	遺物13点。古代Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ3期の須恵器・土師器。
SB113	遺物30点。古代Ⅰ期の須恵器・土師器。	SB181	遺物12点。古代Ⅱ2～Ⅳ2期の須恵器・土師器。
SB114	遺物3点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期の須恵器・土師器。	SB190	遺物1点。時期不明古代須恵器。中世掘立柱建物?
SB115	遺物14点。古代Ⅰ1古期の須恵器・土師器。	SB191	遺物17点。古代Ⅱ3期とⅣ～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB116	遺物78点。古代Ⅱ3期の須恵器・土師器。	SB192	遺物2点。時期不明古代土師器。
SB117	遺物6点。古代Ⅰ期?土師器。	SB193	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB118	遺物4点。時期不明古代須恵器・土師器。	SB195	遺物1点。時期不明古代土師器。
SB120	遺物8点。古代Ⅰ期?の土師器。甍形土製品。	SB196	遺物1点。時期不明古代土師器。
SB121	遺物11点。古代Ⅰ期の須恵器・土師器。	SB197	遺物2点。古代Ⅴ期?須恵器と土師器。
SB122	遺物7点。古代Ⅰ2～Ⅱ1期の須恵器・土師器。	SB198	遺物2点。時期不明古代須恵器。
SB123	遺物33点。古代Ⅱ1期とⅤ期の須恵器・土師器。	SB199	遺物79点。古代Ⅳ古期主にその前後期の須恵器・土師器。
SB124	遺物26点。古代Ⅰ期とⅡ2～Ⅲ3期の須恵器・土師器。	SB200	遺物7点。古代Ⅳ2期の須恵器・土師器。
SB125	遺物11点。時期不明古代土師器。	SB201	遺物91点。古代Ⅴ2期主にⅢ～Ⅳ期の須恵器・土師器。
SB126	遺物16点。古代Ⅰ期の須恵器・土師器。	SB202	遺物25点。古代Ⅳ2期頃の須恵器・土師器。
SB127	遺物47点。Ⅱ2～Ⅲ3期とⅤ期の須恵器・土師器。	SB203	遺物13点。古代Ⅴ期前後の須恵器・土師器。
SB133	遺物22点。古代Ⅲ・Ⅳ期の須恵器・土師器。	SB204	遺物19点。古代Ⅳ2期主にⅢ～Ⅳ期の須恵器・土師器。
SB134	遺物32点。Ⅳ2新～Ⅴ1期の須恵器・土師器。	SB205	遺物15点。古代Ⅲ～Ⅳ期の須恵器・土師器。
SB135	遺物18点。古代Ⅰ期とⅤ～Ⅵ1期の須恵器・土師器。	SB206	遺物33点。古代Ⅴ期前後の須恵器・土師器。
SB136	遺物7点。時期不明古代土師器。	SB207	遺物104点。古代Ⅴ主にⅢ～Ⅳ期の須恵器・土師器。匣鉢。
SB137	遺物20点。古代Ⅳ期頃の須恵器・土師器。	SB208	遺物22点。古代Ⅲ～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB138	遺物33点。古代Ⅳ2新～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB209	遺物78点。古代Ⅳ古期主にⅤ～Ⅵ期の須恵器・土師器。
SB139	遺物21点。古代Ⅱ2～Ⅴ1期の須恵器・土師器。匣鉢。	SB213	遺物11点。古代Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB140	遺物3点。時期不明古代土師器。	SB219	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB141	遺物3点。時期不明古代須恵器・土師器。	SB220	遺物3点。時期不明古代須恵器・土師器。
SB142	遺物6点。古代Ⅳ2～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB221	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB143	遺物10点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期の須恵器・土師器。	SB222	遺物5点。古代Ⅳ1期前後の須恵器・土師器。
SB145	遺物8点。時期不明古代須恵器・土師器。砥石。	SB223	遺物5点。時期不明古代須恵器・土師器。
SB146	遺物25点。古代Ⅳ期前後の須恵器・土師器。	SB225	遺物2点。時期不明古代須恵器。
SB147	遺物34点。古代Ⅴ～Ⅵ2期の須恵器・土師器。	SB226	遺物2点。古代Ⅳ～Ⅴ期の土師器。
SB148	遺物24点。古代Ⅵ2期主に、Ⅳ～Ⅴ期須恵器・土師器。	SB227	遺物5点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB149	遺物18点。古代Ⅳ2～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB228	遺物2点。古代Ⅲ3～Ⅳ1期の須恵器・土師器。
SB150	遺物2点。古代Ⅰ期?土師器。	SB229	遺物11点。古代Ⅱ2～Ⅲ期の須恵器・土師器。土製支脚。
SB151	遺物5点。古代Ⅰ期?土師器。	SB230	遺物20点。古代Ⅳ2とⅤ2期頃の須恵器・土師器。
SB152	遺物19点。古代ⅤⅠ期の須恵器・土師器。	SB231	遺物16点。古代Ⅴ期前後の須恵器・土師器。匣鉢。
SB154	遺物7点。古代Ⅵ2期の須恵器・土師器。	SB232	遺物305点。古代Ⅴ～Ⅵ期の須恵器・土師器。匣鉢多数。
SB155	遺物31点。古代ⅤⅡ2期の須恵器・土師器。土製支脚。	SB233	遺物11点。古代Ⅳ2新期の須恵器・土師器。円筒形土製品。
SB157	遺物24点。古代Ⅳ2～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB234	遺物65点。古代Ⅴ期前後とⅢ3期の須恵器・土師器。匣鉢。
SB158	遺物20点。古代Ⅰ2～Ⅱ1期の須恵器・土師器。匣鉢。	SB235	遺物28点。古代Ⅴ～Ⅵ期の須恵器・土師器。
SB159	遺物18点。古代Ⅲ3～ⅤⅠ期の須恵器・土師器。	SB236	遺物9点。古代Ⅲ期頃の須恵器・土師器。
SB162	遺物17点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期の須恵器・土師器。	SB237	遺物29点。古代Ⅴ期前後とⅢ期前後の須恵器・土師器。
SB163	遺物3点。古代Ⅳ1期の須恵器・土師器。	SB238	遺物7点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB164	遺物14点。古代Ⅳ期主に出土だが、中世掘立柱建物?	SB239	遺物2点。古代Ⅳ期とⅤ期頃の須恵器・土師器。
SB165	遺物3点。時期不明古代須恵器・土師器。	SB240	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB168	遺物14点。古代Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB241	遺物14点。古代Ⅲ3～Ⅳ期頃の須恵器・土師器。
SB169	遺物30点。古代Ⅲ期主にⅢ3～Ⅳ期の須恵器・土師器。	SB242	遺物14点。古代Ⅱ2～Ⅲ期の須恵器・土師器。
SB170	遺物42点。古代Ⅲ3～Ⅳ1期の須恵器・土師器。	SB245	遺物46点。中世掘立柱建物だが、中世土器は3点のみ。他は古代Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器が現在。
SB171	遺物19点。古代Ⅱ2～Ⅲ期の須恵器・土師器。	SB261	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB172	遺物35点。古代ⅣⅠ期の須恵器・土師器。	SB262	遺物1点。時期不明古代土師器。
SB173	遺物42点。古代ⅢとⅤⅠ期の須恵器・土師器。土製支脚。	SB277	遺物1点。時期不明古代土師器。
SB174	遺物146点。古代Ⅴ2～Ⅵ期主にⅣ期須恵器・土師器。匣鉢。	SB278	遺物24点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB175	遺物37点。古代Ⅴ～Ⅵ1期の須恵器・土師器。匣鉢。	SB279	遺物37点。古代Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB176	遺物62点。古代Ⅲ3～Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器。匣鉢。	SB287	遺物1点。時期不明古代須恵器。
SB177	遺物3点。古代Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB288	遺物7点。古代Ⅵ2頃の須恵器・土師器。



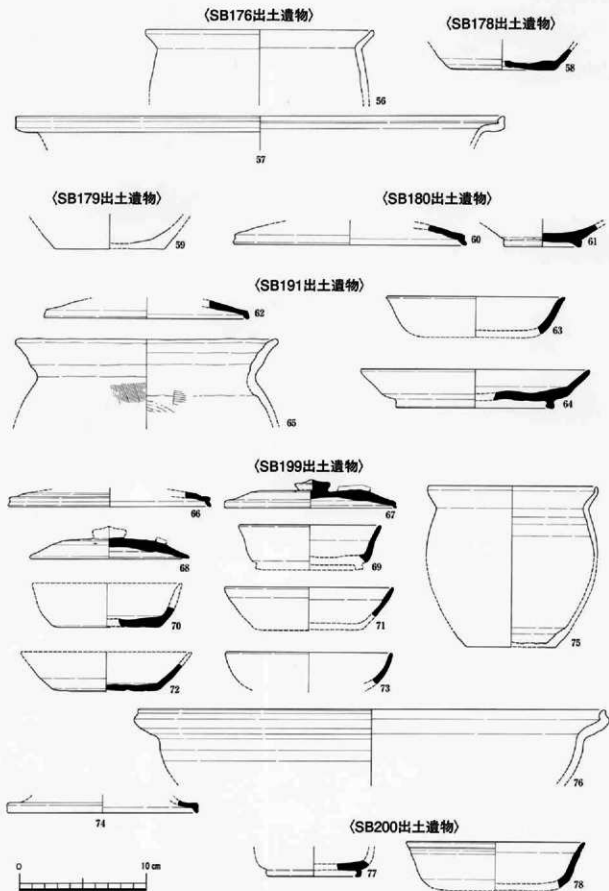
第100図 古代獨立柱建物出土遺物1 (SB113～SB134、全てS=1/3)



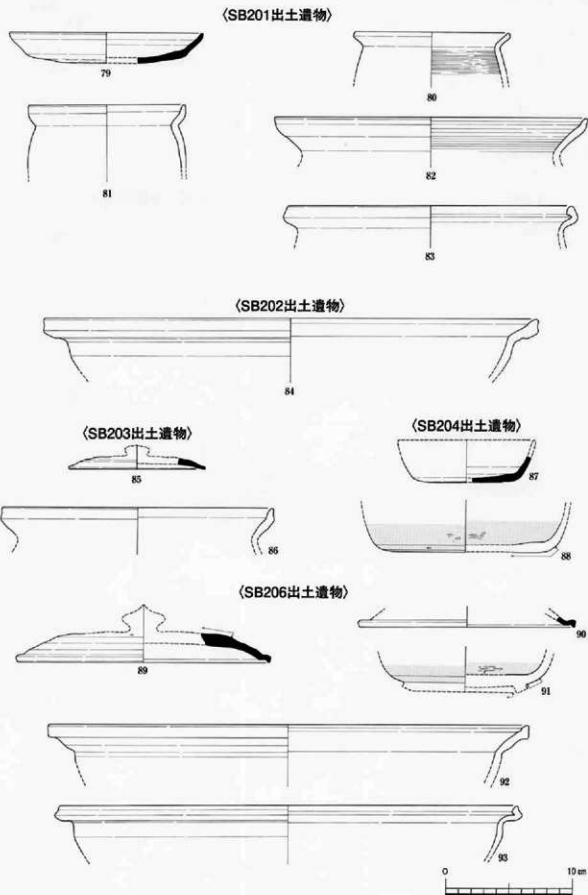
第101図 古代獨立柱建物出土遺物2 (SB135～SB168、全てS=1/3)



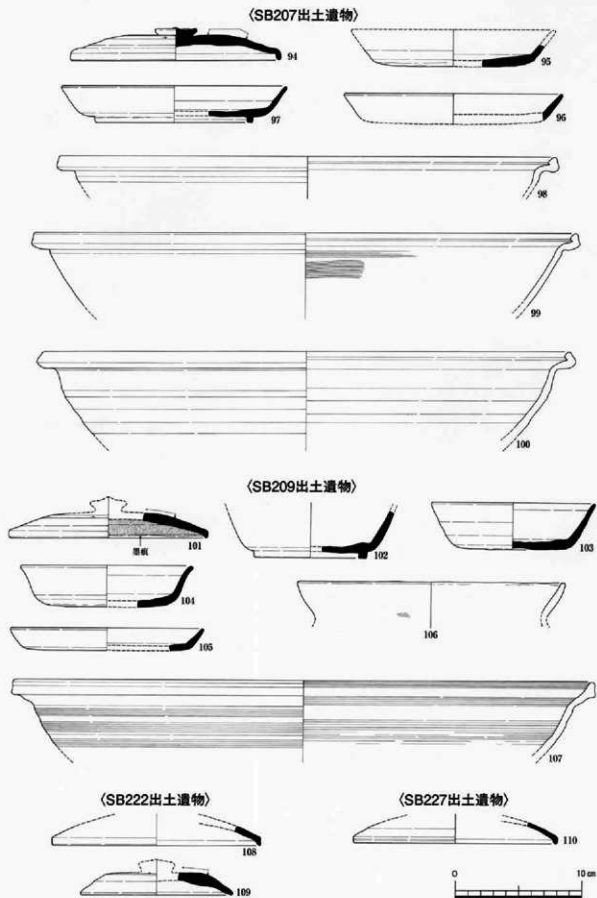
第102図 古代掘立柱建物出土遺物3 (SB169～SB175、全てS=1/3)



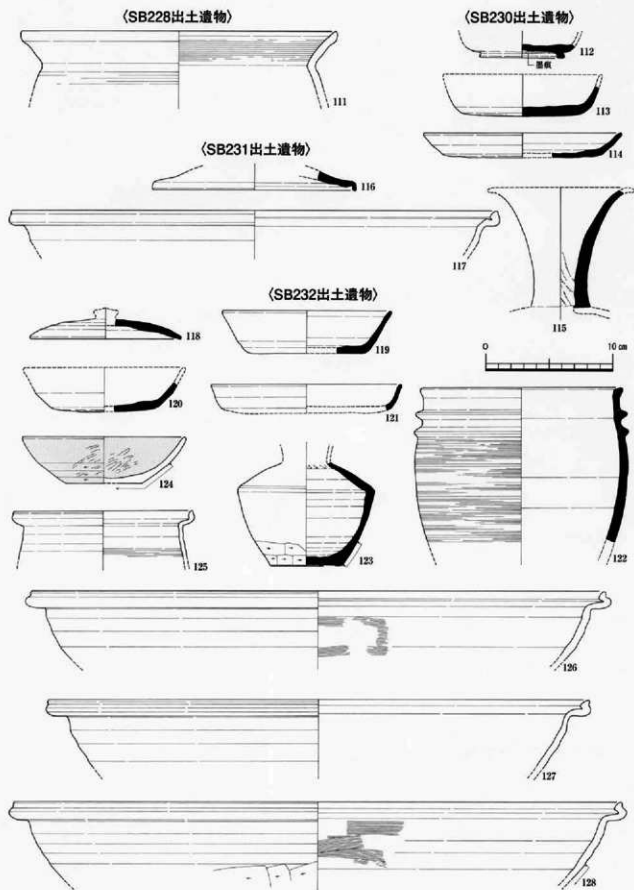
第103図 古代掘立柱建物出土遺物4 (SB176～SB200、全てS=1/3)



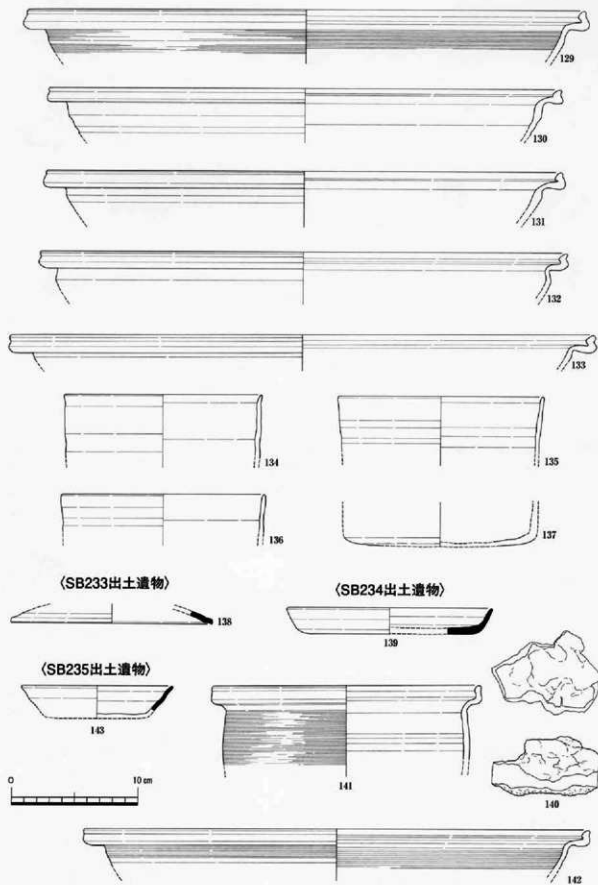
第104図 古代掘立柱建物出土遺物5 (SB201～SB206、全てS=1/3)



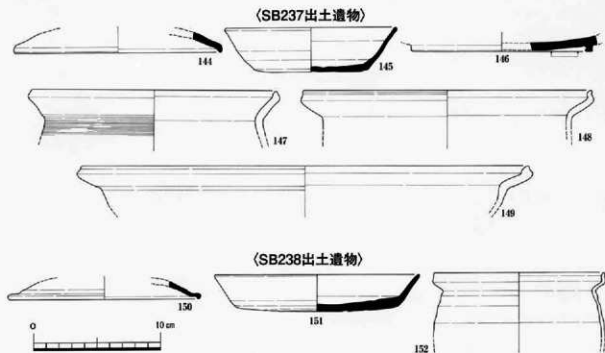
第105図 古代掘立柱建物出土遺物6 (SB207～SB227、全てS=1/3)



第106図 古代掘立柱建物出土遺物7 (SB228～SB232、全てS=1/3)



第107図 古代掘立柱建物出土遺物B (SB232～SB235、全てS=1/3)



第108図 古代掘立柱建物出土遺物9 (SB237・SB238、全てS=1/3)

第3項 古代土坑出土遺物

古代土坑から出土する遺物は、今回報告地区の中では43.6%と最も高い比率を占める。図示した遺物も多く、625点に上るが、一つの遺構で出土する一括性高い資料群となると、さほど多くはなく、そのような一括土器群を中心として遺物解説を行う。また、遺物の中には特筆すべき資料、特殊な資料もあるため、それらについては単体での出土であっても、解説を加えることとした。なお、当資料からは土師器焼成坑や製炭土坑の資料は除外し、それらは生産関連遺構出土遺物として後でまとめて述べることにする。

1. SK106 出土遺物

当土坑は須恵器食膳具212点、土師器食膳具83点、須恵器貯蔵具84点、土師器煮炊具1,457点、須恵質・土師質の土製品15点、石製品12点を出土する、大型の土器廃棄土坑であり、図示した遺物は今回報告の中で最も多い。埋土上層においてⅣ2期からⅤ期の破片が僅かに混在するものの、ほぼⅡ3期にまとまる資料で、三瀬台編年3C期を代表する基準資料である。

食膳具は須恵器主体の構成だが、赤彩土師器、内黒土師器も定量含まれる。須恵器は坏B、坏A、高坏Gで構成され、一器種一法量にまとまる。坏Bと坏Aの量比は拮抗し、蓋の扁平器形と坏B身や坏Aの口縁部外反器形、坏B身高台のしっかりとした形態など、Ⅱ3期の中でも古相を呈するものが大半を占めるが、Ⅱ1の扁平器形を呈す坏B身やⅡ9の坏Aなど、Ⅱ3期新からⅢ期に位置づけられるものも少量存在する。胎土は僅かに能美窯産を含むが、南加賀窯北群産が大半を占め、南群産は25の中躰しか確認できない。このような産地構成も当期の特徴をよく表しているものと言える。当資料では使用痕のある須恵器食膳具が定量あり、図示した1・2の坏B蓋の完形品は内面に広く墨痕をもつ。磨耗痕がないため、視としては使用していないようだが、墨溜めとして転用されたものだろう。なお、破片だが坏B身にも内面墨痕をもつものがあり、身の内面に磨耗痕の見られるものが8個体確認できる。また、4の坏B蓋の体部から口縁部にかけて、ロクロ成形後の粘土補修の跡があり(写真55)、焼き歪みのあるものも確認される。

土師器食膳具は赤彩碗F、赤彩坏B、内黒高坏Gで構成される。碗Fが主体だが、坏B、高坏Gも一定量見られる。碗Fは口径13cm台の通常法量と18cm台の大型法量とに明瞭に法量分化する。通常法量は底径大きく体部が開いて立ち上がる器形で、口縁部は内側が肥厚する。大型法量も共通する器形を呈するもので、口縁部内面に沈線状の窪みもち、暗紋等は入らないが、金属器模倣器種と言えるものである。坏Bは遺存状態のよいもの

はないが、山笠状の器形を呈する坯蓋と高い高台をもつ坯身で、Ⅱ3期の中でも古相を呈す須恵器坯B器形に似る。赤彩坯Bについては、Ⅲ期に定量生産される器種と位置付けられてきたが、南加賀窯二ツ梨豆岡向山支群C区出土の生産関連土器群の存在から、Ⅱ3期新段階には出現することが近年わかった。しかしながら、当資料はⅡ3期古段階に位置付けられる可能性が高く、Ⅱ3期の須恵器窯場への土師器食器生産移行と同時に坯系器種の生産が始まっていたことを示唆する。以上の赤彩土師器は全て窯場産に統一されているが、内黒高坯Gについても窯場産である。坯器器形は低平となり、須恵器高坯Gの器形にかなり似ている。32は赤色酸化鉄粒を胎土に練り込み赤色土器を内黒焼成するもので、二ツ梨豆岡向山支群C地区にもこのような外赤内黒の高坯が出土している。赤と黒の色彩を意図した祭器という位置付けなのだろう。

土師器煮炊具は短胴小釜、長胴釜、浅鍋、甗が出土する。完全な在来型技法は35の短胴小釜と44・45の浅鍋のみで、他は須恵器系技法を使用する。なお、40の長胴釜は在来型技法に基づくが、胴部上位の横ハケ目調整はカキ目調整を意図したものであり、純然たる在来型とは言えないものである。主体は、ハケ目調整等の在来型技法と須恵器系技法とを併用するもので、口縁部を丸くおさめるものが大半を占めるなど、北陸型煮炊具成立期の定型前の様相を示す。両技法の併用については、41の長胴釜が典型的な事例と言える。1次成形の技法は紐積み+縦ハケ目調整で、その後ロクロ回転を使用して、口縁部成形とカキ目調整を行い、台からはずして底部叩き出し成形を行う。この段階で製品としては完成されたものと言えるのだが、さらに底部叩きを消すかのように内外面にハケ目調整を施して仕上げている。このような最終調整をハケ目調整で仕上げる煮炊具は当期の長胴釜に多く、わざわざ須恵器系技法を隠すような行為をしていることが興味深い。

当資料では浅鍋が多く固化した器種構成として、三湘台3B期から3C期にかけて急増する傾向がある。器形は定型化しており、口縁部が長く強く開く器形のもの、口縁部が短く深身を呈するものがある。後者は1次成形に叩き出し底部叩き出し成形するものが多く、概して厚手に作られる。Ⅱ2期をもって姿を消していく深鍋の流れを汲むタイプとも考えられる。なお、45と53の浅鍋には顕著な使用痕が確認される。どちらも内面下半にコゲ痕跡があり、特に53は外面の頸部直下付近から底部にかけて顕著なスガが付着するもので、底面はスガが飛んで薄くなっている。内面は胴部上位から口縁部までコゲバンドが回り、胴部下位に厚いコゲのこびり付きが確認される(写真15)。コゲは粒状にも見え、穀物類を煮た痕跡の可能性が高い。

他の出土品としては、須恵質の圓足円面碗や甗形土師質製品、支脚形土師質製品、鉄器などが出土している。円面碗は方形スガをもつ小型のもので、作りは丁家で、器高の低い器形は当期の特徴を示すものであろう。甗形土製品は破片で14点出土しており、在来型のハケ目調整の56・57と叩き成形による55のみ図示した。いずれも地元産胎土で、叩き成形のものは平坦な天井部をもち、朝鮮系甗形土製品と言えるものである。A地区SI33で出土するものに胎土、色調等が類似しており、同一個体の可能性がある。内面にはスガ痕跡が残る(写真22)。支脚形も14点と出土量は多い。下端部の若干広がる中空タイプが主で、下端を広げる棒状脚に中心円孔を穿つタイプ(58)は少ない。いずれも被熱痕跡があり、器面は赤化しているが、59は特に外面下半が還元焼結していた(写真31)。鉄器(64)は刀子の刃部先端を欠損する10.5cmの長さを持つ遺存度のよいもので、刃部は断面三角形を呈し、鋳ばは両側、基部は刺突形態で断面方形のものである。

2. SK108 出土遺物

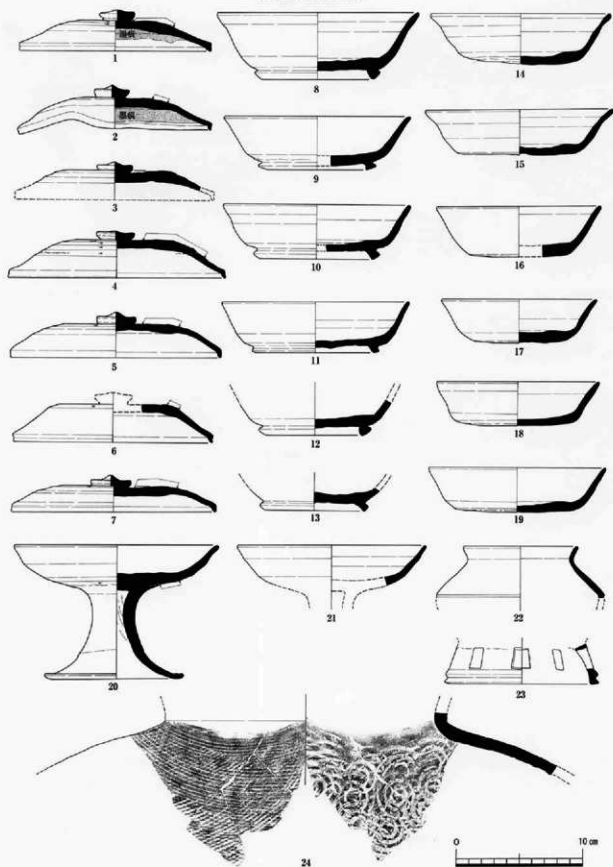
遺物量は少なく、図示できたものは65の釘状鉄製品の完形品のみである。長さ17.8cmを測る大型のもので、断面方形を呈し、頭部はL形に曲げられている。他の出土土器からⅡ3期からⅢ期頃のものと同推察される。

3. SK115 出土遺物

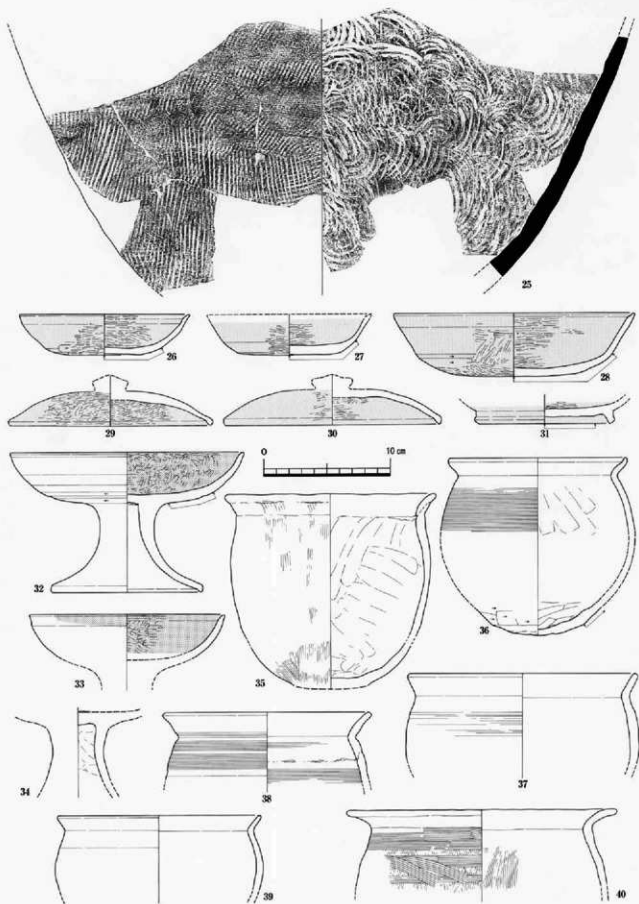
須恵器食器具329点、須恵器貯蔵具62点、土師器食器具86点、土師器煮炊具529点、その他土製品14点、石製品10点を出土する土器廃棄土坑であるが、埋土層には中世1期の土師器食器具が213点廃棄されており、当土坑資料については、中世遺物の項目でも取り上げる。古代はⅡ3期からⅥ1期までの土器が混在するが、中心はⅥ1期前後で、顔見町遺跡では数少ないⅥ1期の一括資料と言える。

須恵器食器具は坯A、坯B、盤A、盤Bで構成される。産地は80の盤Aと83の盤Bのみが能美窯産だが、他は南加賀窯産で占められている。能美窯の生産はⅤ2期をもって急速に衰退し、Ⅵ1期には生産停止へ向かうと予測されているが、当資料の能美窯産はⅤ2期に位置づけられるような器形を呈しており、型式のズレも予感させる。当資料には内面に黒痕をもつ坯B蓋が3点、盤Aが2点ある。特に69は朱墨と思われ、79の盤

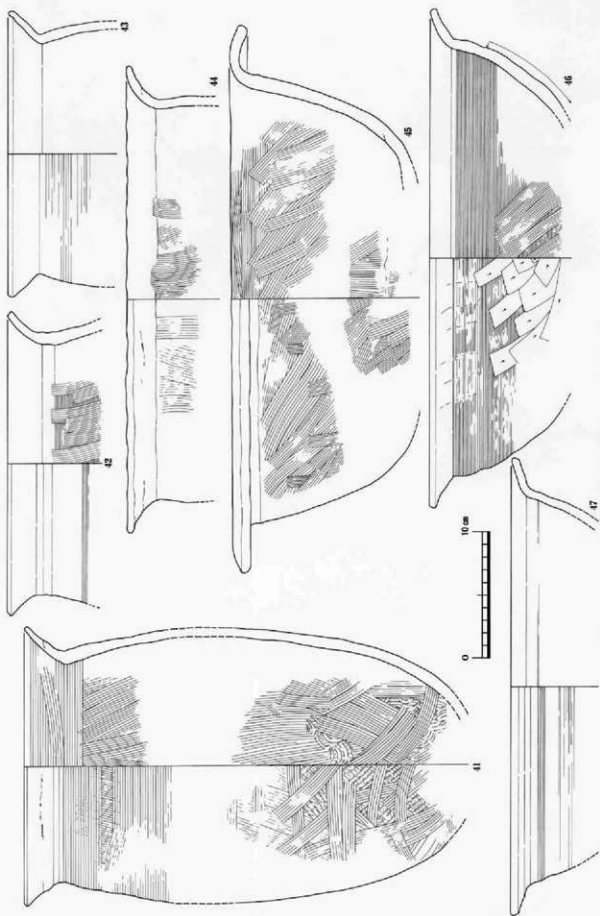
〈SK106出土遺物〉



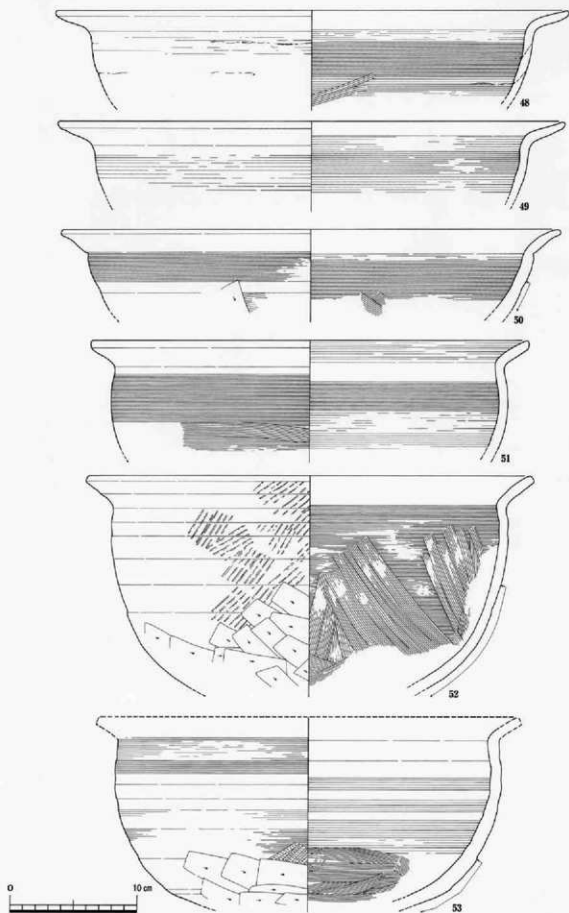
第109図 古代土坑出土遺物1 (SK106-1、全てS=1/3)



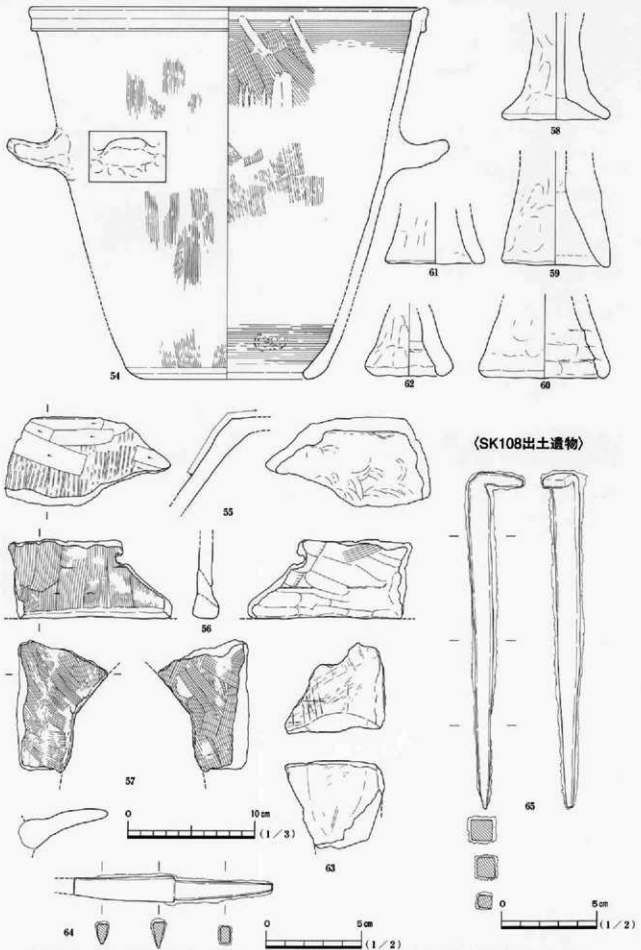
第110図 古代土坑出土遺物2 (SK106-2、全てS=1/3)



第111図 古代土坑出土遺物3 (SK106-3、全てS=1/3)



第112図 古代土坑出土遺物4 (SK106-4、全てS=1/3)



第113図 古代土坑出土遺物5 (SK106-5、SK108、64・65のみS=1/2、他は全てS=1/3)

A転用視の外底面には「十」の墨書が確認される。

土師器食器類は図示できるものはなかったが、当期に生産が定量化する外赤内黒土師器は出土しておらず、依然として赤彩土師器碗のみで構成されている可能性を持つ。

土師器煮炊具は短胴小釜、長胴釜、浅鍋、甌の器種がある他に、89の羽釜、91の台脚付の鉢がある。羽釜は二ツ梨一貫山支群でV期からVI 2期にかけての生産が確認されており、時間的に符合する。台脚付きの鉢については、口縁部のみ破片であるため、信憑性を欠くが、このような口縁部器形は浅身の盤状器形を呈す傾向が高く、脚は歇脚意匠の足が三足付されるものが多い。火舎の器種であり、91の内面にはスガが広く付着している。

4. SK116 出土遺物

須恵器食器類 379点、須恵器貯蔵具 97点、土師器食器類 133点、土師器煮炊具 1,017点、その他土製品 29点、石製品 11点を出土する出土量の多い土器廃棄土坑である。II 3期からVI 1期までの土器が混在するが、中心はV 1期前後で、顔見町遺跡では数少ない一括資料と言える。

須恵器食器類は坏A、坏B、盤Aを主に構成され、これに定量の盤Bが加わる。118の高坏Aが出土しているが、南加賀窯資料ではV期に下るものはないため、IV 2期に遡る可能性は高い。ただ、口径が小さくなっていることと能美窯ではV 2期に高坏をまだ生産していることを考え合わせれば、高坏A最終段階資料の可能性もある。須恵器産地は南加賀窯産地が大半を占めるが、能美窯産地も一定量存在しており、能美窯の盛んな生産を物語る。なお、当資料では転用視等は出土していないが、外底面に墨書をもつ盤Aが2点出土している。114は底部中心から下に「王生」と記すもので、115は底部中心よりやや右側に「生」と記す。114の「王」墨書は文字が薄れ、「王」なのか、「生」を2字連ねた可能性もあり、判断しにくい。H地区のSE03で115の「生」と同一筆跡と思われる「生」墨書がV 1期頃の盤Bに、H地区SK409ではIV 2古期に位置づけられる坏B身底面に「生」の焼成前刻書がある。窯場での刻書行為は、単なる吉祥句的なものと思えず、発元の氏族名を示す可能性もあると考えている。「生」の字を冠する氏族は、越前国足羽郡に「生江臣」がいる。8世紀代に部領を多く輩出する足羽郡の在地有力氏族で、足羽郡内に止まらず、越前国の東大寺領荘園の開発、経営に深く関与し、越前国に広く権勢を有していたと言われている。江沼地域において生江臣との関係を示す資料は知らないが、「生」墨書の意味を考える上で一つの視点にはなる。この点については、H地区の報告が済んだ後に改めて考察したいと考えている。

土師器食器類は外赤内黒の碗Aが出土するもので、VI期に下る可能性が高く、当期は赤彩のみで構成されるものと理解される。器種は坏・盤類もあるが、主体は碗Aで、126は当期の形態を示す良好な資料と言えよう。煮炊具は短胴小釜、長胴釜、浅鍋、甌が出土し、やはりここでも浅鍋の出土が目立つ。

5. SK124 出土遺物

遺物出土量は少ないが、今回の報告の中では古代III期に位置づけられる数少ない資料である。坏B蓋と坏Aの扁平器形で大ぶりを呈す特徴から、III期の中でも古段階、三湖台3D期に併行する資料と位置づけられよう。土師器煮炊具は口縁部を丸くおさめて面形成しないが、胴部調整にハケ目調整等を併用しておらず（少なくとも胴部上半はしていない）、3C期のSK106資料よりも、定型的な北陸型煮炊具に近くなっている。なお、当資料では赤彩土師器碗Fが出土しているが、口径の大きな扁平器形のもので、口縁部は内湾する器形を呈し、II 2期からの碗F器形とは大きく変化している。二ツ梨豆岡山支群C地区出土の赤彩碗Fに似ており、II 3期からIII期へ移行する段階で、新たな器形が導入され、形態変化したものと考えられる。当期は碗Fが最も扁平化する時期であり、これ以降、碗Aの出現とともに口径の縮小と底径の小量化が進む。

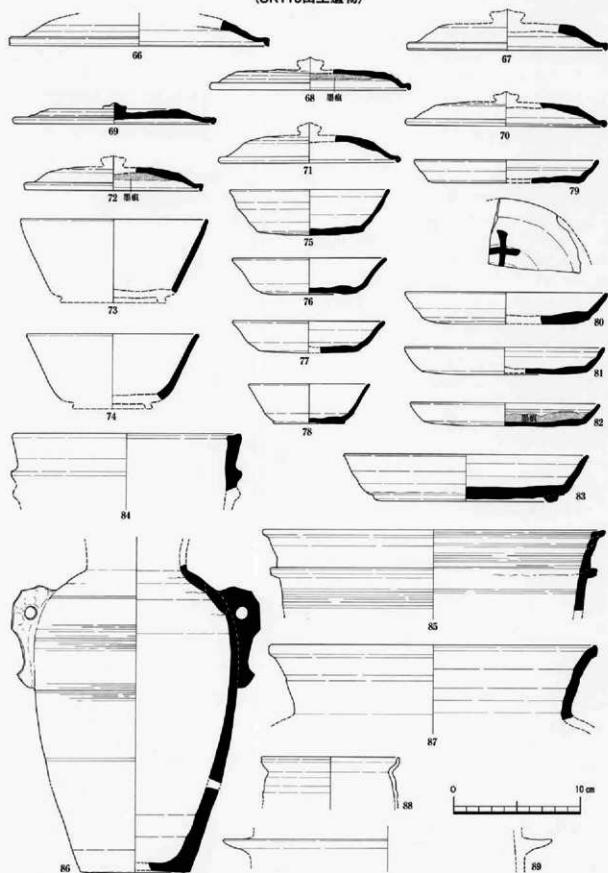
6. SK126 出土遺物

出土量が少なく、図示したのも限られているが、鉄鉢形土師器の鉢E (174) が出土している。口縁部端に沈線を施す薄手の作りのもので、体部下半をケズリ調整する良品である。鉄鉢形は7世紀後半以降に定型化し、9世紀中頃にかけて生産される器種で、9世紀後半以降はこの時期に定型化されて生産量が急増する鉢B（括れ鉢）に移行したものと見られている。当鉄鉢形資料とともに図示した土器群はVI期に位置づけられるものだが、この時期まで図示したような鉄鉢形が存続するとは考え難く、口縁部器形や薄手の特徴、そして土師器製であることから、9世紀前半頃に位置づけられるものと考えておきたい。

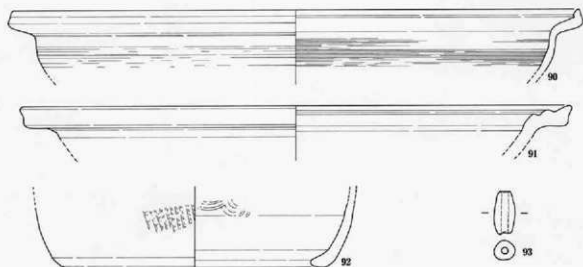
7. SK129 出土遺物

IV期頃に位置づけられる須恵器、土師器とともに支脚土師器製品が出土している。8cm弱の高さをもち、や

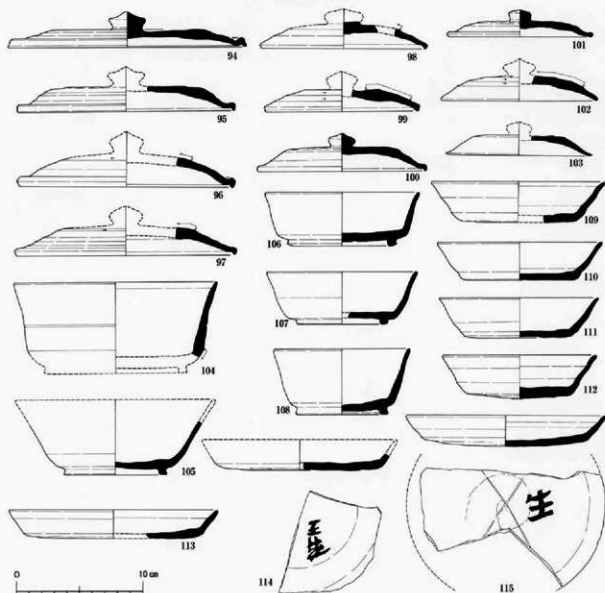
(SK115出土遺物)



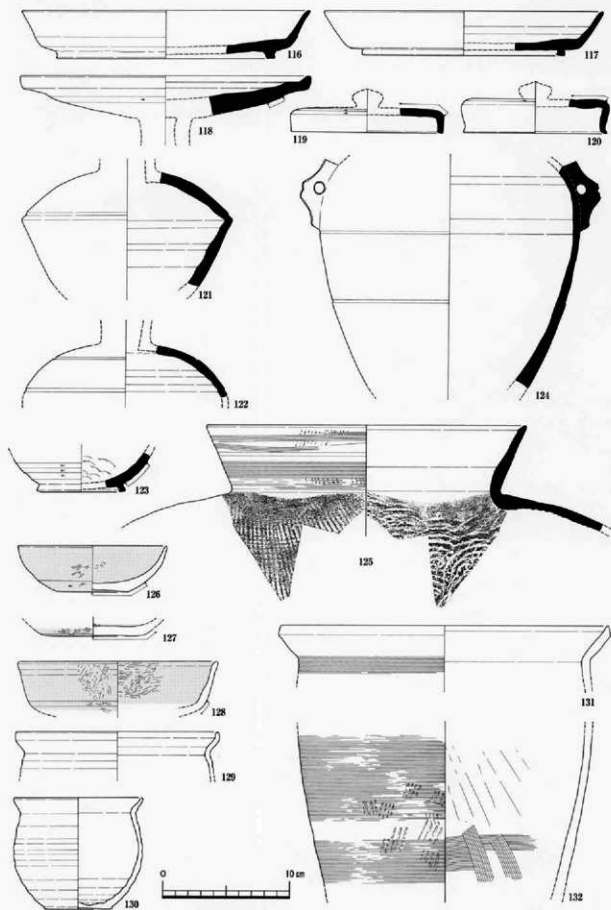
第114図 古代土坑出土遺物6 (SK115-1、全てS=1/3)



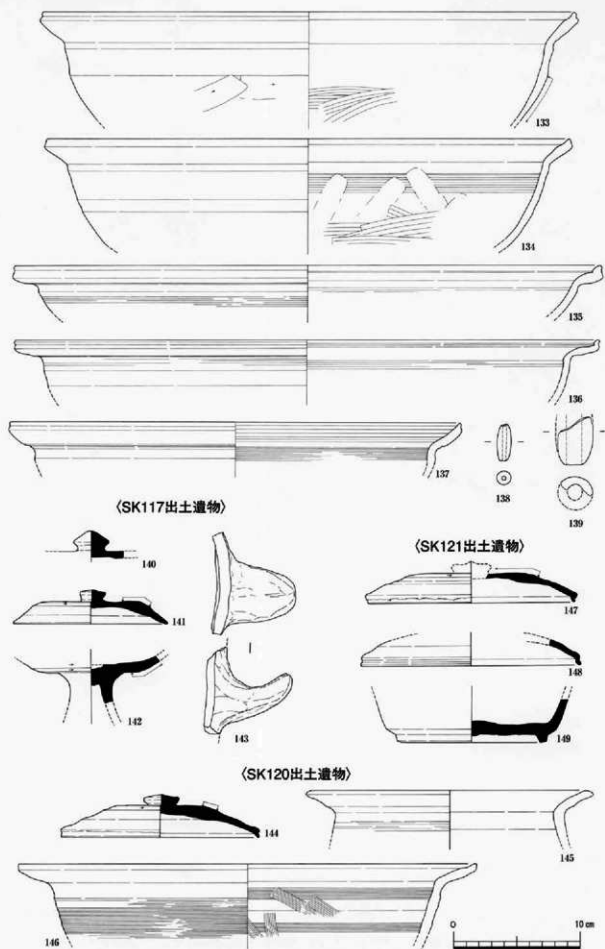
(SK116出土遺物)



第115図 古代土坑出土遺物7 (SK115-2、SK116-1、全てS=1/3)

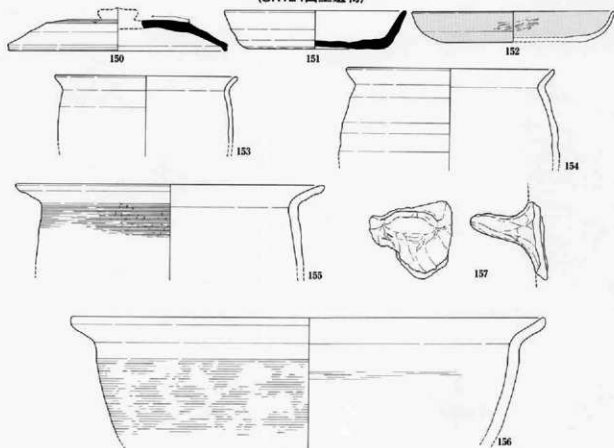


第116図 古代土坑出土遺物B (SK116-2、全てS=1/3)

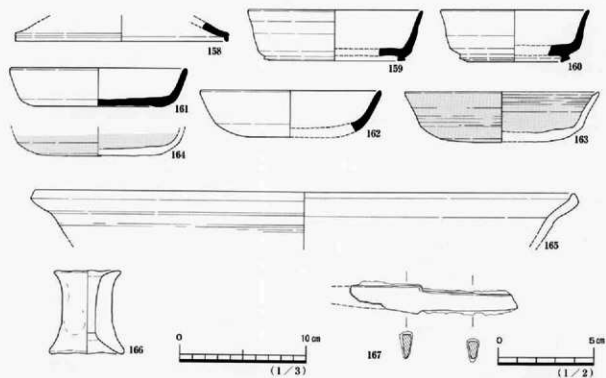


第117図 古代土坑出土遺物9 (SK116-3、SK117、SK120、SK121、全てS=1/3)

〈SK124出土遺物〉



〈SK128出土遺物〉



第118図 古代土坑出土遺物10 (SK124、SK128-1、167のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第119図 古代土坑出土遺物 11 (SK128-2、SK126、SK129、SK130、SK132-1、全てS=1/3)

や小型のものである。中心穿孔をもつ棒状脚の下端を裾広がりとし、上端を三又状に突出させるもので、胎土は地元産と推察される。

8. SK132 出土遺物

須臾器食膳具 97 点、須臾器貯蔵具 31 点、土師器食膳具 26 点、土師器煮炊具 358 点、その他土製品 1 点、石製品 2 点を出土する大型の土器廃棄土坑であるが、破片資料が主で、図示できたものは多いとは言えない。181 や 191 など I～II 期に位置づけられる資料もあるが、概ね III 期新段階から IV 1 期にまとまる資料群で、三湖台 4 A 期から 4 B 期にかけての資料と言える。須臾器胎土は南加賀産にほぼ統一されており、土師器は窯場産に統一される。煮炊具は口縁部を面形成するもので、技法的にも外面に在来型技法を併用しないなど北陸型煮炊具として確立期に入っている。

さて、当資料には、188 の胴部装飾を持つ長頸瓶、189・190 の須臾質の椎状鉢、199 の円筒形土師質製品と、特殊な製品が多いので、以下に触れておきたい。

長頸瓶は頸部を絞り込む古い技法のもので、瓶 F と分類したものである。胴部中位に沈線区画された脚描き波状文を 2 段に持ち、その上に羽状連続刺突文をもつもので、南加賀南群産のものである。当個体は、当土坑の破片を主とし、B 地区の SI37 と SI38 の埋土出土破片、C 地区の SI88 と SI100 の埋土出土破片と接合しており、破片がかなり広範囲に散らばっている。須臾器貯蔵具ではよくあることが、その中でも顕著な事例だろう。

次に椎状鉢についてだが、2 個ともほぼ同形態の多角錐形状を呈す完形品で、鈕を作り出しせずに頂部に縦孔を穿つタイプである（縦孔に別作り環状鈕を差込み使用）。形態、法量、色調、焼きの質も同じであり、同一の窯で焼かれ、土坑内に廃棄されたものと考えられる。両方の個体とも上端の孔の縁を同じように欠く（写真 79）、磨耗痕の確認されないものであり、2 個の椎状鉢を使用して何らかの祭祀行為を行い、埋納した可能性がある。ただ、189 が六角錐形、190 が七角錐形と一角異なっており、中心の穿孔の大きさも若干異なるなど、意識的に形態を変えている点は興味が持たれる。椎状鉢については、以前に北陸事例を集成し、考察したことがあるので、詳細は拙稿を参照いただきたい（『古代椎状鉢に関する一考察—北陸出土権衡資料の検討を中心として—』『北陸古代土器研究』第 10 号、2003 年）。

円筒形土製品は横口付きのタイプで、内面にスズ痕を残すものである。ニツ梨一貫山支群で生産される円筒形土製品は IV 2 古期からであるが、当資料群の時期からすれば、IV 1 期から円筒形土製品が生産開始されていた可能性を示唆しよう。技法は器面カキ目調整で、横口部は非ロクロ成形のものである。

9. SK135 出土遺物

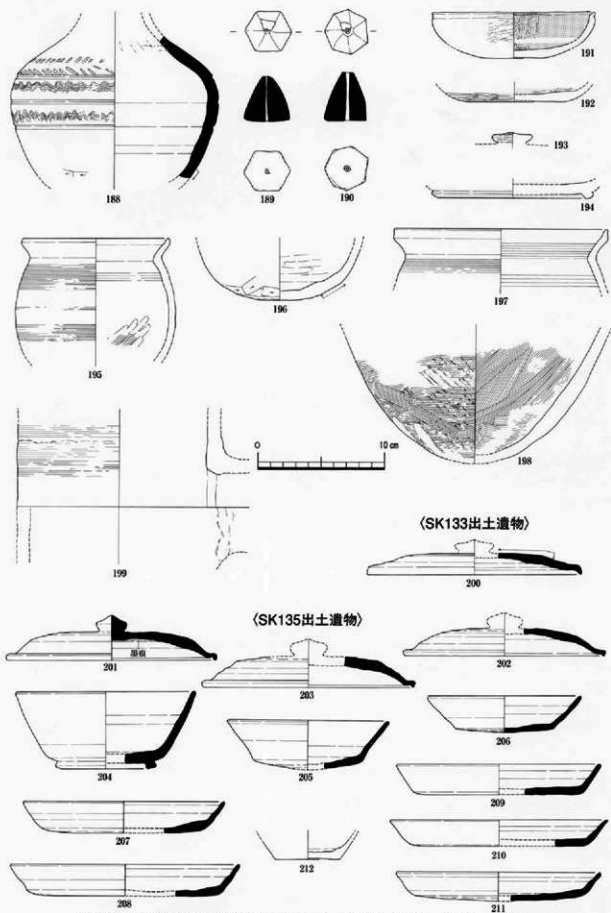
遺物出土量は多いとは言えないが、V 2 期に位置づけ可能な須臾器食膳具の一括資料が出土する。須臾器胎土は南加賀産が主だが、能美産も少量含まれ、当期資料に多い転用視も 1 点 (201) 確認される。なお、図示できていないが、坏 A 底部片で油痕の付くものがあり、この点も当期資料の特徴と言えよう。

10. SK136 出土遺物

須臾器食膳具 90 点、須臾器貯蔵具 29 点、土師器食膳具 69 点、土師器煮炊具 753 点、その他土製品 15 点、石製品 9 点を出土する大型の土器廃棄土坑である。埋土上層に IV 期から VI 期の破片が混在するものの、図化できたものはほぼ II 3 期にまとまり、SK106 同様に、三湖台編年 3 C 期を代表する基準資料と言える。

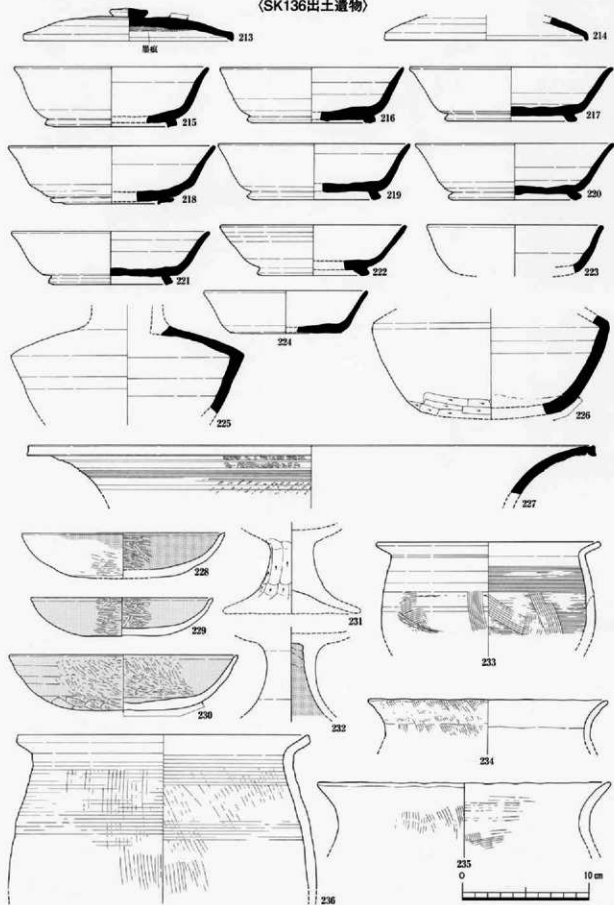
須臾器食膳具は坏 B 主体で構成される。坏 A は少なく、高坏 G が少量出土する。坏 B 蓋は扁平つまみで、山笠状に開く器形を呈す特徴や、219～221 の坏 B 身高台の高くしっかり踏ん張る器形特徴など、II 3 期古相を呈す様相をもつ。ただ、216 や 218、222 の坏 B 身高台は低く、坏 A も口縁部外反する II 2 期的な器形が見られないなどを考えると、II 3 期の中でも SK106 よりは下る時期、II 3 期中段階と位置づけるのが妥当である。なお、213 の坏 B 蓋は内面磨耗の顕著なもので、その部分で薄く朱墨が認められ、朱墨として使用された可能性がある。

土師器食膳具組成も SK106 同様だが、ここでは内黒碗 F (228) と内黒高坏 H (231) が出土する。高坏 H は脚部のみ破片のため、当期に位置づけ可能か信憑性を欠くが、内黒碗 F は全体的な器形や口縁部内面を若干肥厚させる特徴など、赤彩碗 F (229) に近似しており、II 3 期に伴うものと考えて問題はない。内黒高坏 G の坏部器形にも似ており、高坏 G 的な器種として作られたものかもしれない。赤彩碗 F は口径 14 cm 台の通常法量のものとも 18 cm 台の大型法量とがある。いずれも SK106 に比べて体部が開く器形をしており、薄手に作る点と全体的に器高低下する点に変化としてあげられる。また、通常法量のものには特に口径が大きくなり、扁平化が著取さ

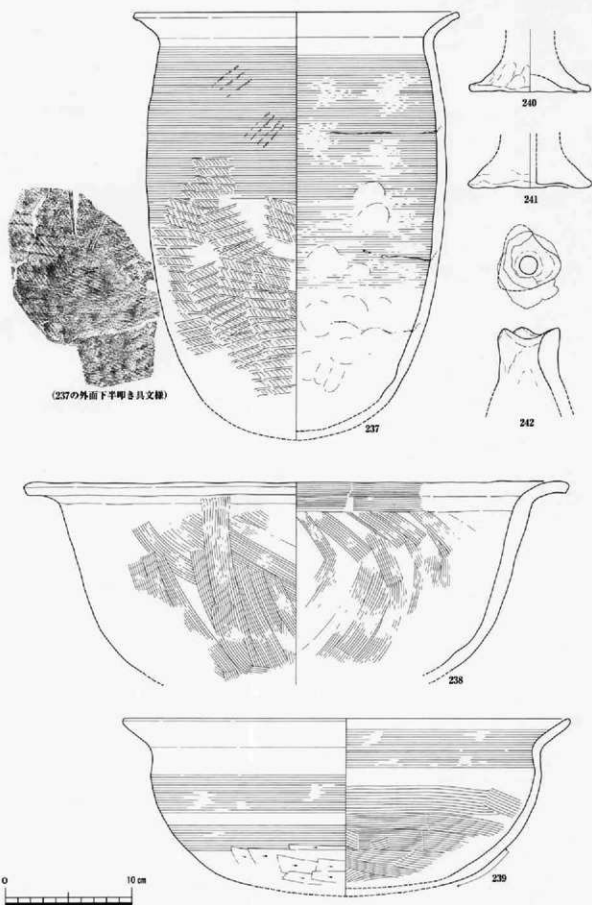


第120図 古代土坑出土遺物12 (SK132-2、SK133、SK135、全てS=1/3)

(SK136出土遺物)



第 121 図 古代土坑出土遺物 13 (SK136-1、全て S=1/3)



第122図 古代土坑出土遺物 14 (SK136-2、全てS=1/3)

れる。通常分量の碗FはⅡ3期新段階には扁平器形となっており、その変化途上にあるものと言えよう。

土師器煮炊具はSK106同様、在来型技法のものが定量含まれるが、それについても窯場生産品で、主な土師器煮炊具の生産の場が須恵器窯へは移行した段階と位置づけられる。北陸型煮炊具は在来型技法の併用を行うものが主で、定型的な北陸型はまだ成立する以前の段階と言える。そのような中で237の長胴釜は在来型技法を併用しないものだが、外面叩き具は極めて特徴的な条線幅の広いHb類で、内面当て具は無文と思われるものを使用するなど須恵器系の叩き具文様とは異なる（写真10）。朝鮮系軟質土器の系統のものかもしれない。なお、238の浅鍋だが、これについてはSK106から出土した破片と接合関係にある。口縁部を強く外反させる割の深いタイプで、在来型技法による地元産のものである。興味深いのはこれより口縁部が長く曲がるが、胴が深く在来型技法を使用する点で同類型と判断できるSK106の浅鍋45が、当土坑から出土する破片と接合していることである。両浅鍋の胎土は異なるが、系統的に共通するものであり、意識的に分けて両土坑へ廃棄した可能性もある。両土坑から出土する他の個体については接合関係は確認されておらず、僅かではあるが時間差も存在することを考え合わせ、どのような意味があるのか、興味深い事例と言えらう。

その他の出土品としては、支脚形土師製製品が13点出土している。図示できたのは3点のみだが、242は上端を三叉に突出させる三点支持のタイプである。中空のタイプで、下端へやや裾広がりとなる截頭円錐形を呈すものだろう。いずれの支脚形も外面被熱を受けて、赤化している。

11. SK138 出土遺物

当土坑は須恵器食膳具71点、須恵器貯蔵具32点、土師器食膳具32点、土師器煮炊具213点、その他土製品23点を出土する土器廃棄土坑であるが、破片資料が主で、図示できたものも遺存度不良の資料が多い。ただ、須恵器食膳具を中心に時期はⅣ2古期頃にはほぼまとまっており、当期の数少ない資料と言える。須恵器、土師器とも南加賀窯産には統一されるが、249の盤Aは能美窯産と判断される。

12. SK139 出土遺物

遺物量はさほど多くはないが、Ⅱ2期～Ⅱ3期に位置づけられる土器とⅣ期に位置づけられる土器とがあり、数量的には拮抗している。ただ、図示したものはⅡ2～Ⅱ3期の土器群が主体であり、このために、図ではⅣ期の土器群を新手一群として別に掲載した。

主体となる土器群は、264～266の須恵器環A蓋身器形から、Ⅱ2期に中心をおくものと見られるが、267～269の土師器煮炊具類はⅡ3期の様相も見られ、破片でⅡ3期に位置づけられる須恵器環蓋も確認されることから、やや幅を跨り、Ⅱ2期～Ⅱ3期と位置づけておきたい。さて、このSK139だが、SI87の一部重複している。当遺坑建物の時期はⅡ2期～Ⅱ3期であり、SK139のⅡ期の土器群と時期的に符合する。このため、Ⅱ期の土器群については、堅穴建物から混在した可能性もあり、その場合は新手としたⅣ期の土器群が当土坑の時期となろう。Ⅳ期の土器群については、270・271の須恵器器形から、Ⅳ2古期に位置づけられるものと言え、共存する土師器浅鍋の時期とも矛盾しない。なお、264の環A蓋については、内面に広く黒炭が確認でき、磨耗痕はないが、黒溜めとして使用されたものと理解される。

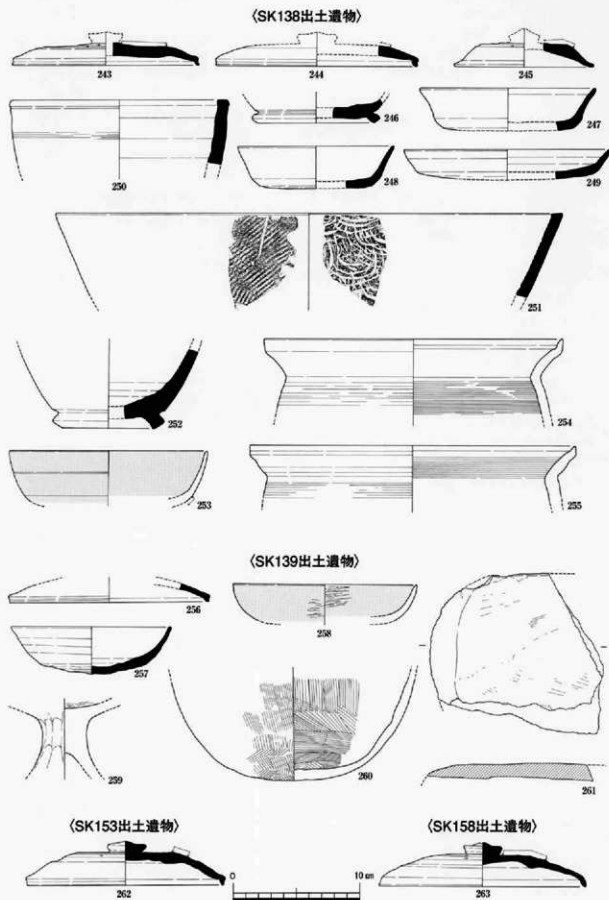
13. SK164 出土遺物

須恵器食膳具42点、須恵器貯蔵具19点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具105点、その他土製品5点を出土する土器廃棄土坑であるが、破片資料が主で、図示できたものは少ない。ただ、須恵器・土師器食膳具器形や土師器煮炊具、須恵器貯蔵具器形は概ねⅡ3期頃に位置づけられるもので、289の土師器長胴釜は在来型技法だが、窯場産胎土をもつ。なお、290の鉄製品は刃幅1cm弱の小型刀子の刃部破片である。

14. SK165 出土遺物

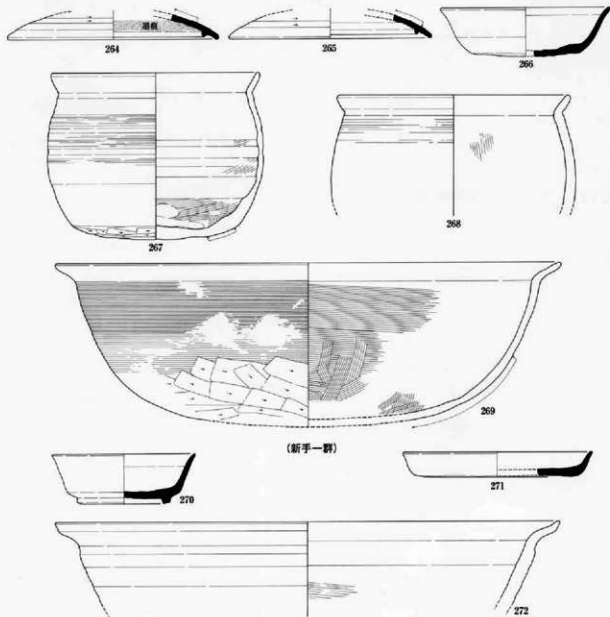
須恵器食膳具63点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具37点、土師器煮炊具234点、その他土製品4点、石製品4点を出土する大型土器廃棄土坑であるが、破片が主で、図示できたものも残りのよい資料はない。ただ、須恵器環B蓋の器形や法量、土師器浅鍋の口縁部器形などから、Ⅳ1期に位置づけられる資料であり、本道跡の中では数少ないⅣ1期の一括資料と言える。須恵器胎土、土師器胎土ともに南加賀窯産に統一されている。

当資料には大型の赤彩土師器碗A296が存在している。破片のため口径は不明だが、底径は10.8cmを測り、体部立ち上がりは立ち気味となる。底部糸切りの器種で、底面はケズリ調整され、丁寧に作られている。なお、土師器支脚299は、下端部裾広がりとする棒状脚で、中心に穿孔をもつタイプである。

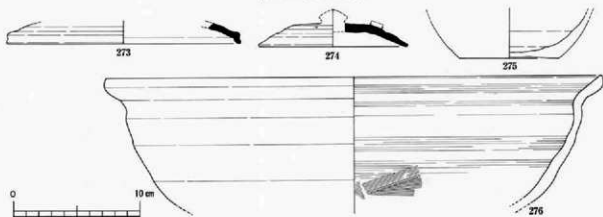


第123図 古代土坑出土遺物15 (SK138、SK139、SK153、SK158、全てS = 1 / 3)

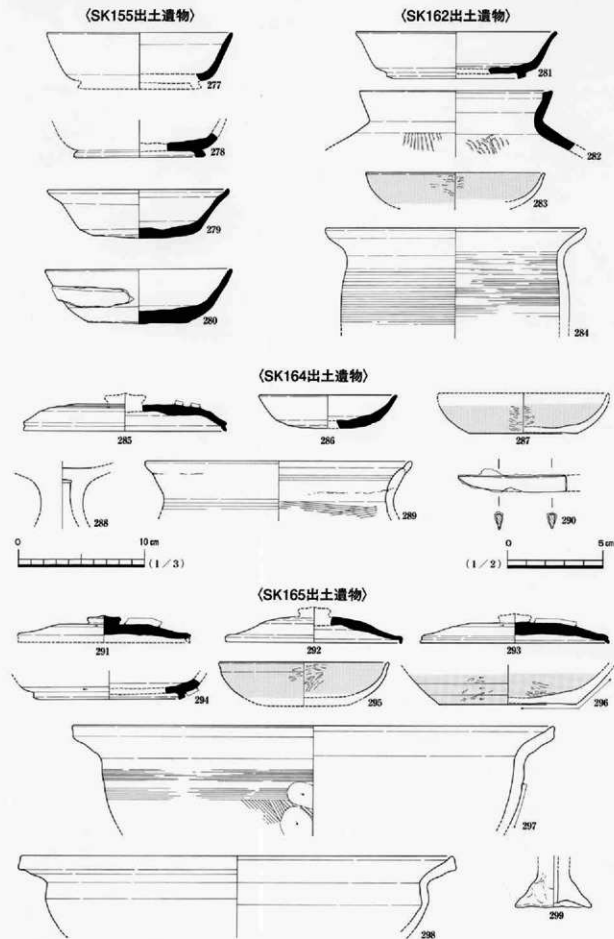
〈SK140出土遺物〉



〈SK159出土遺物〉



第 124 図 古代土坑出土遺物 16 (SK140、SK159、全て S = 1 / 3)



第125図 古代土坑出土遺物17 (SK155、SK162、SK164、SK165、290のみS=1/2、他は全てS=1/3)

15. SK171 出土遺物

須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具27点、土師器煮炊具224点、その他土製品13点を出土する土器廃棄土坑である。破片での資料が多く、良好な資料とは言い難いが、須恵器・赤彩土師器の坏B器形や土師器煮炊具器形、調整等からⅢ期に位置付け可能と判断する。須恵器食膳具胎土は南加賀産産、土師器胎土も窯場産に統一される様相で、須恵器窯場への土師器生産集約化が進行する段階である。ただ、土師器長胴釜は口縁部を丸くおさめるⅡ期の形態を依然として残しており、浅溝もⅡ3期の様相を残すなど、北陸型煮炊具として定型化する前の様相を示す。しかしながら、一方、短胴小釜では口縁部端を面形成するものや上端へ揃みあげるものなど北陸型煮炊具としての形態を整えていく器種もあり、器種によって定型化の進行度合いに差がある。このような器種による口縁部形態の差異は生産地資料の中でも確認できることであり、大型量の器種で、より保守的器形を残す傾向が看取できる。

その他の土製品については、土師質の支脚形が3点出土している。うち、2点を図示したが、いずれも裾広がりとなる大きな孔をもつタイプで、309では外面被熱による赤化が認められる。

16. SK172 出土遺物

当土坑は土坑形態から墓坑と想定するもので、遺物量は少ない。図示したものは須恵器坏B蓋の鈕片であり、これだけでは時期判断を行うことは難しいが、図示できなかった他の須恵器資料などを考え合わせるとⅡ3期からⅣ1期の中で考えられよう。ただ、当墓坑の副葬品と位置づけできる銅鈴については、土器とは異なる時期が想定される。銅鈴は鈕を欠損するものだが、本体はほぼ残っており、その鈕部の破損面状況と本体形状から、頭部鈕と球形呈す本体とを一体的に作るタイプと判断される(写真88)。銅鈴は8世紀前葉には上下半球形呈すものを合わせて球体とする分割成形タイプへと変化しており、つまり、当土坑出土の銅鈴は7世紀代の資料となるわけである。しかし、正確にどの段階で製作技法が変化したのか判断する資料を持たず、出土土器が埋土層からのものであることも考え合わせ、当土坑出土土器に関しては、墓坑埋没後のものと位置づけるのが妥当と判断されよう。つまり、副葬品と思われる銅鈴の時期から当土坑は7世紀代のものと考えておきたい。

17. SK175 出土遺物

須恵器食膳具94点、須恵器貯蔵具13点、土師器食膳具28点、土師器煮炊具440点、その他土製品5点、石製品4点を出土する大型の土器廃棄土坑だが、破片資料が多いのと、複数時期の遺物が混在しており、良好な資料とは言い難い。破片ではⅡ3期からⅤ期にかけての土器が存在するが、図示したものは概ね2時期に分けられる。主体はⅣ1期に位置づけられるもので、少数派のⅤ期に位置づけられるものは新手一帯とした。なお、317は体部沈線をもつ金属器系の碗であり、これについてはⅡ3期からⅢ期頃に位置づけられる可能性を持つ。

18. SK176 出土遺物

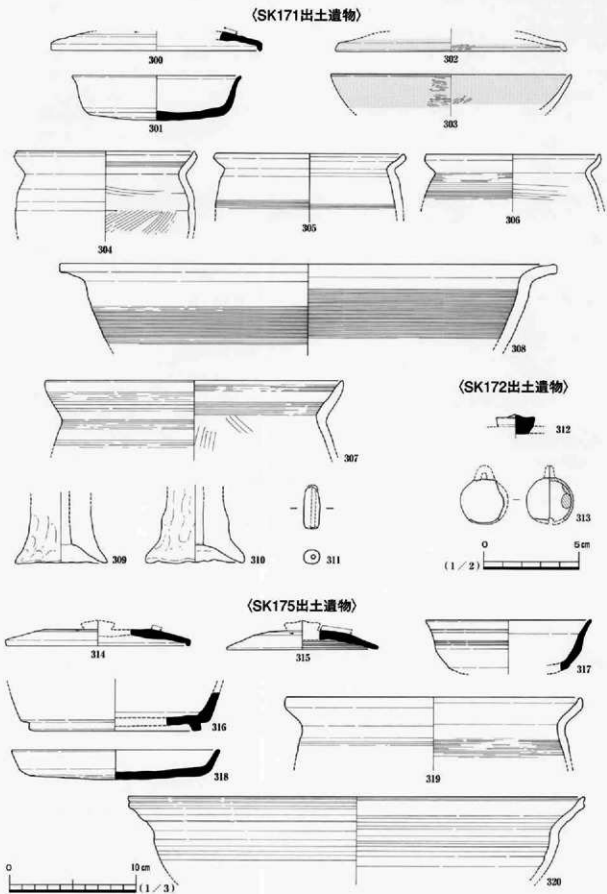
Ⅱ3期～Ⅲ期に位置づけられるSK176 bとⅥ2期～Ⅵ3期に位置づけられるSK176 aとが重複している。SK176 bについては出土量が少なく、図化できるものもなかったため、ここでSK176として表示するものは全てSK176 aに伴うものである。

SK176 aからは、Ⅵ2期に位置づけられる坏Aや整Aの小破片も出土するが、図示したものはほぼⅥ3期にまどまる。その中でも、碗A 320・328の底径の大きさと体部下位から底面にかけてのケズリ調整、碗B 330の高台形態、外赤内黒碗A 332の底径の大きさなど、やや古手の様相を多く残しており、Ⅵ3期古段階、戸津44号窟併行期に中心をおくものと理解する。土師器煮炊具器形も食膳具から求められる時期と符合する様相を持ち、飯見町遺跡の中では数少ない当期の一括資料と位置づけられるだろう。

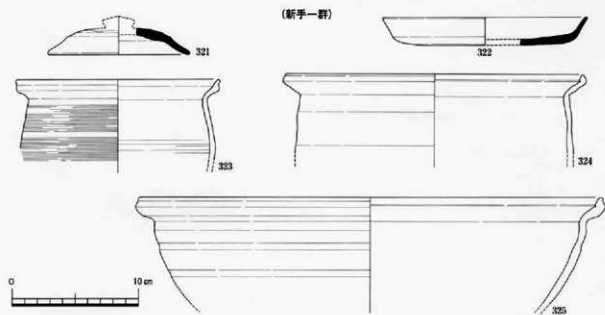
さて、当資料には厚鉢状土製品が100点近い細片として出土しており、口径等から当期に位置づけ可能と判断される。被熱して赤化したようなものが多いが、強い被熱によって生じる焼成剥離片はほとんど認められず、近隣で土師器焼成道具として使用され、まともな廃棄されたものと理解される。当土坑からは焼成破損したような土師器碗類の出土はなく、相伴する土師器は生産品とは考え難いが、331の土師器碗Aは外面赤彩を施すものの、内面は黒色焼成せず、ミガキ調整も認められないもので、製品としては中途半端なものと言える。これに関しては生産関連廃棄品の可能性がある。

19. SK177 出土遺物

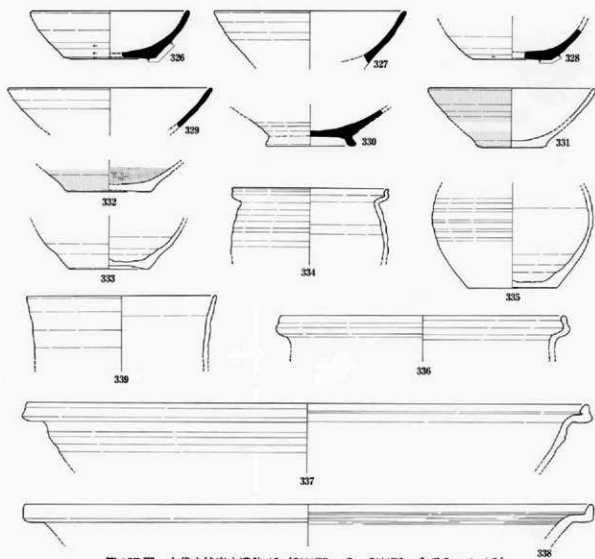
須恵器食膳具120点、須恵器貯蔵具19点、土師器食膳具28点、土師器煮炊具226点、その他土製品8点、石製品1点を出土する土器廃棄土坑である。当土坑からはⅡ3期～Ⅲ期、Ⅴ期～Ⅵ期の土器が混在して出土してい



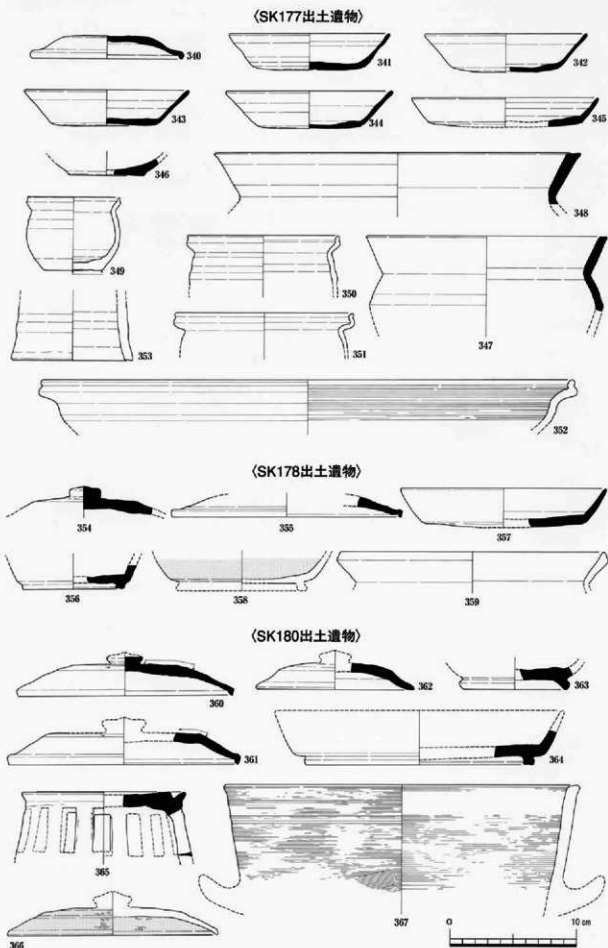
第126図 古代土坑出土遺物18 (SK171、SK172、SK175-1、313のみS=1/2、他は全てS=1/3)



(SK176出土遺物)



第127図 古代土坑出土遺物19 (SK175-2、SK176、全てS=1/3)



第128図 古代土坑出土遺物20 (SK177、SK178、SK180、全てS=1/3)

るが、図示できた資料は概ねⅥ2期にまとまる資料で、数少ない当期の一括資料と言える。食器具はほぼ須恵器で構成され、坏B、坏A、盤A、碗Aが確認される。坏Bは小型少量の無鈕蓋形態で、扁平で薄手となる特徴を持つ。341～344の坏Aは体部器内の極めて薄い、器高の低い特徴を持ち、いずれも戸津8号室に併行する資料、Ⅵ2期の中でも新相段階に位置づけられる。他の土器についても、土師器短胴小蓋や浅鍋など当期に位置づけられていないと判断されるが、345の盤Aと347の壺E、348の中甕はⅥ2期～Ⅵ1期に遡る可能性がある。なお、342～344の坏Aだが、器形のみならず、胎土、色調、焼き具合など共通するものであり、生産窯からまとめて持ち込まれて廃棄されたものと考えられる。また、341の坏A外底面には、複数字句を記した墨書痕跡があるが、墨痕が薄く、何字記されているのかも判読できない。その他の遺物として、径9cm程度の円筒形土師質製品353がある。ロク口成形のもので、大きざから見て支脚として使われたものと推察する。二ツ梨一貫山支脚のⅥ1期に位置づけられる土師器群中には円筒形呈す土師質支脚が出土しており、形態や大きさ等類似している。

20. SK180 出土遺物

須恵器食器具223点、須恵器貯蔵具40点、土師器食器具75点、土師器煮炊具528点、その他土製品2点を出土する。大型の土器廃棄土坑ではあるが、破片での資料が多いのと、Ⅱ3期からⅥ期間の複数時期の遺物が混在しており、良好な資料とは言えない。図にはⅢ期からⅣ1期のものを掲載したが、必ずしもその時期にまとまるわけではない。新しい時期のものを割愛しただけのことである。ただ、当土坑においては、365の圓足円面甕が出土している。取り上げた。円面甕は甕面径10.5cmを測るもので、無堤有溝式の比較的厚手のしっかりとした作りをしている。脚部には縦長の方形スカシをもち、Ⅱ3期からⅢ期頃のものと思われる。出土土器はⅢ期以降の土器が出土しているため、Ⅲ期の時期比定が妥当だろう。

21. SK181 出土遺物

遺物出土量は少ないが、当土坑からは須恵器窯跡から排出された窯床塊が出土しているため、取り上げておく。窯床塊は10cm以上を測る大型のもので、厚さは3cm程度、表面は自然釉が溶けて固まり、須恵器片を中に挟み込みながら2層の貼床でできている。裏面は地山床から剥がれた跡があり、何らかの目的で須恵器窯の溶着した床を剥ぎ取った断片と理解される(写真61)。このような塊が製品に付着したまま当遺跡に持ち込まれたとは考え難いため、別の意図で運び込まれたものなのだろう。なお、当土坑にはⅡ3期からⅥ期までの時期幅広い土器が出土しているが、図示できたものはⅣ1期～Ⅳ2古期のものであり、この時期に位置づけるのが妥当だろう。

22. SK207 出土遺物

調査当初は壑穴建物の堀方土坑としていたものだが、その後の資料検討で土坑へ変更したものである。出土量は多くないが、比較的まとまった時期の土器が須恵器食器具を中心に出土している。377の須恵器坏B蓋や383の土師器長胴釜、386の土師器浅鍋はⅤ1期からⅤ2期頃になる可能性が高いが、他の土器は概ねⅣ2新期に位置づけられるものであり、数少ない当期資料と位置づけできる。須恵器胎土は南加賀産に統一されており、当期の特徴である白く発色して焼き締まる胎土特徴が見られる。

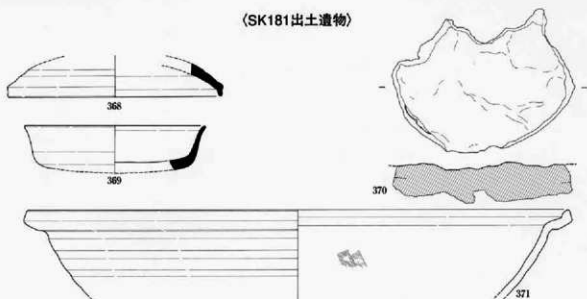
23. SK209 出土遺物

須恵器食器具49点、須恵器貯蔵具5点、土師器食器具20点、土師器煮炊具451点、匣鉢状土製品79点を出土するが、須恵器のほとんどはⅡ3期からⅣ2古期に位置づけられる時期のものが混在しており、図示した土師器煮炊具が当土坑に伴うものと理解している。須恵器は387の転用甕のみ図示したが、これについてはⅣ1期頃に位置づけ可能である。土師器煮炊具は短胴小蓋、長胴釜、浅鍋、甕が出土しており、概ねⅥ1期にまとまる。図示はしていないが、外赤内黒輪Aの破片や赤彩輪Aの破片も出土しており、これらも煮炊具同様の時期に位置づけられる可能性を持つ。当煮炊具については、388の胴部外面に一部ススが付着するものの、他の煮炊具については使用痕が見られず、多量に出土する匣鉢状土製品片の存在から、土師器生産に伴う焼成破損廃棄品の可能性がある。なお、当土坑にはカマドに使用するような凝灰岩とは異なる焼いた砂岩系の礫石が多く混在しており、これについても土師器生産に関連する可能性があろう。

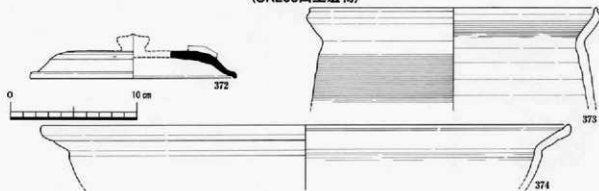
24. SK217 出土遺物

遺物出土量の少ない土坑だが、Ⅳ2新期頃の土器がまとめて出土している。図示できたものは須恵器食器具のみだが、Ⅳ2新～Ⅴ1期の甕Bや土師器煮炊具も出土する。図示した食器具は坏B、坏A、盤Aで、南加賀産のみ。410の坏Aは完形のもので、口縁部に焼成時のヒビを残す。

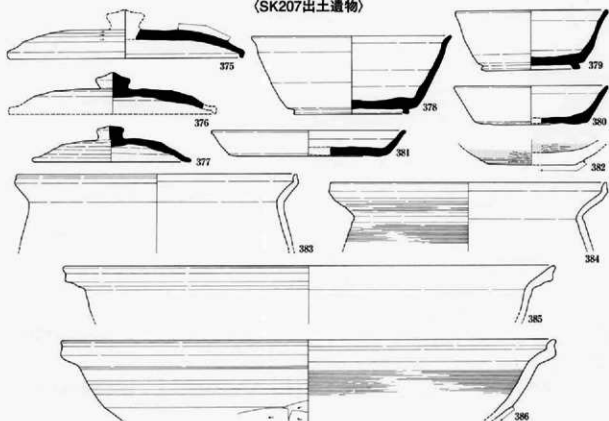
〈SK181出土遺物〉



〈SK206出土遺物〉

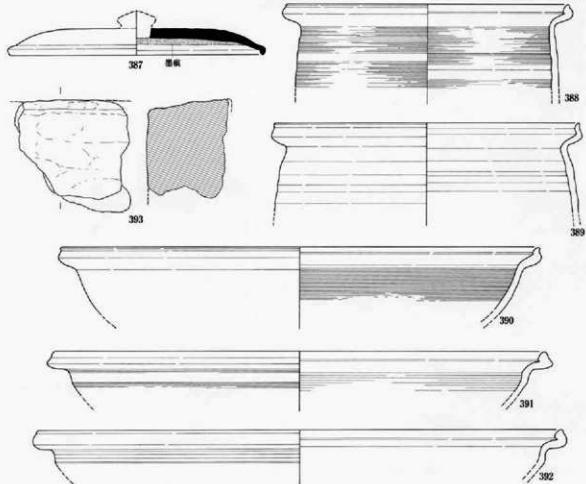


〈SK207出土遺物〉

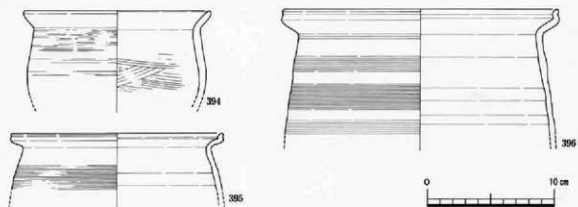


第129図 古代土坑出土遺物21 (SK181、SK206、SK207、全てS=1/3)

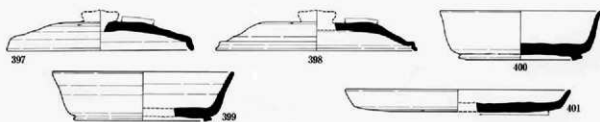
(SK209出土遺物)



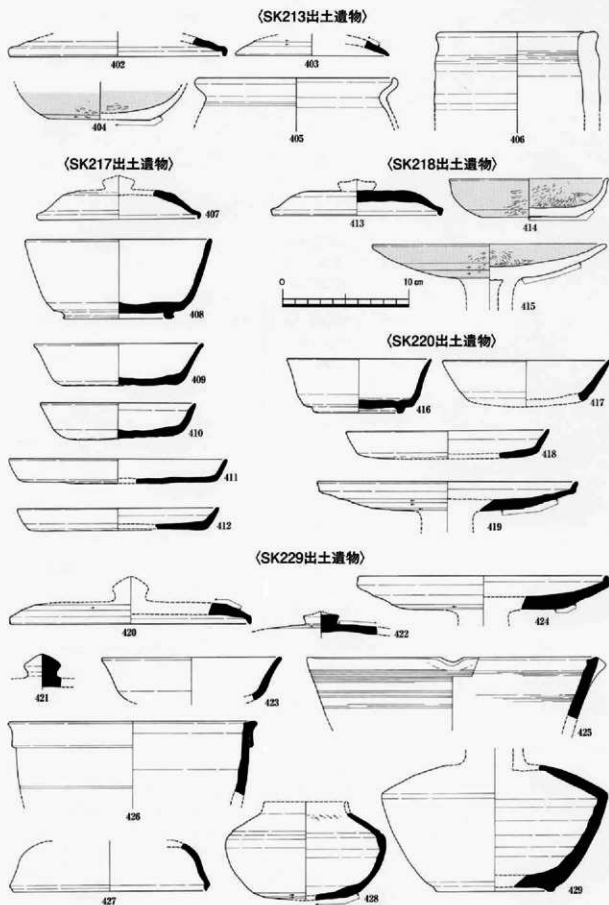
(SK210出土遺物)



(SK212出土遺物)



第130図 古代土坑出土遺物 22 (SK209、SK210、SK212、全てS = 1/3)



第131図 古代土坑出土遺物 23 (SK213、SK217、SK218、SK220、SK229-1、全てS=1/3)

25. SK218 出土遺物

遺物出土量の少ない小型土坑だが、土器様相にはまとまりがあり、Ⅳ2古期に位置づけられる。413の坏B蓋は鈕を欠く完形品で、内面全体が磨耗している。墨痕は確認できなかったが、鈕を欠く完形品である点と磨耗の状態から判断し、転用視として使われた可能性が高い。土師器は赤彩のみ図化したのが、414の碗A、415の高坏Aともに残りがよく、Ⅳ2古期の良好な資料と言える。特に415の高坏Aは口縁部端を折り曲げない皿形のものが、当期に出現してくる新しい身形態の高坏と言えるものである。

26. SK229 出土遺物

須恵器食膳具84点、須恵器貯蔵具26点、土師器食膳具38点、土師器煮炊具374点、その他円筒形土師製製品6点と土師1点を出土する土器廃棄土坑である。土器はⅡ3期からⅤ期にかけて時期幅広く見られるが、中心となる時期はⅣ1期からⅣ2古期頃で、図示したものはほぼその時期に該当する。ここでは特に説明を要する器種として、425の須恵器鉢と433の円筒形土師製製品をとりあげる。須恵器鉢は口縁部を片口状に曲げているもので、体部の立ち上がり方から鉢Fと推察するが、口径が大きくやや特殊な感もある。片口の付く鉢Fはこのような平坦な口縁部形態に付くもので、Ⅲ期からⅣ期にかけて散見されるが、南加賀室では珍しい器種と言える。円筒形土師製品は、厚手で内外面カキ目調整を施す点で通常のものとは変わりはないが、径が10cm程度と細い形状を呈す。被熱痕跡は外面に見られ、内面にはヨゴレが確認される程度で、通常のものとはやや異なる。煙突のような使用状態を復元するよりも、支脚やカマドの焚口部材など外面から被熱を受ける状態で使用されたものとみなされよう。SK177出土の支脚を想定する円筒形土師製品と共通する形態のものと言える。

27. SK231 出土遺物

出土量僅少の小型土坑だが、円面視435が出土している。視面径8.2cmの小型品で、脚部を欠損するが、脚内面は降灰しており、圓足円面視と予想される。外堤を一段もち、視面は平坦な形状を持つもので、周縁がくぼみ、陸と海を形成している。能美窯産と推察でき、作りはⅣ家で、視面は顕著に磨耗しているが、墨痕は見えない。視の形状からⅣ期までは下らない資料と見るが、共存する土器の時期は、Ⅱ3期からⅤ期の間でばらついており、判断材料に欠く。

28. SK234 出土遺物

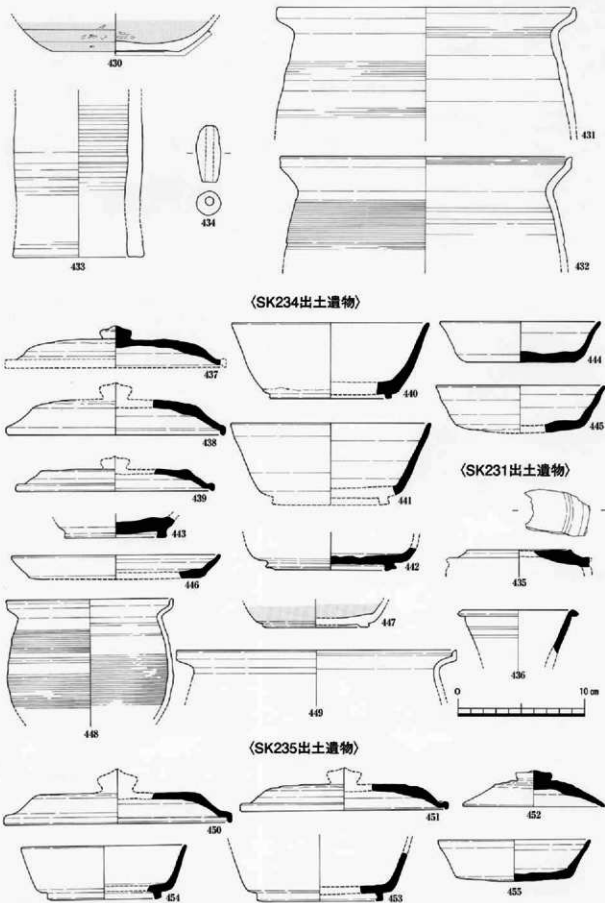
須恵器食膳具88点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具15点、土師器煮炊具192点、その他土製品2点を出土する土器廃棄土坑である。土器はⅡ3期からⅤ期にかけて時期幅広く見られるが、中心となる時期はⅣ2新期～Ⅴ1期で、図示したものはほぼこの時期のものである。数量的に多くはないが、この時期の資料としてはまとまった土器群と言えるだろう。須恵器胎土は南加賀室のもののみで、赤彩土師器は坏B身形態が出土する。

29. SK235 出土遺物

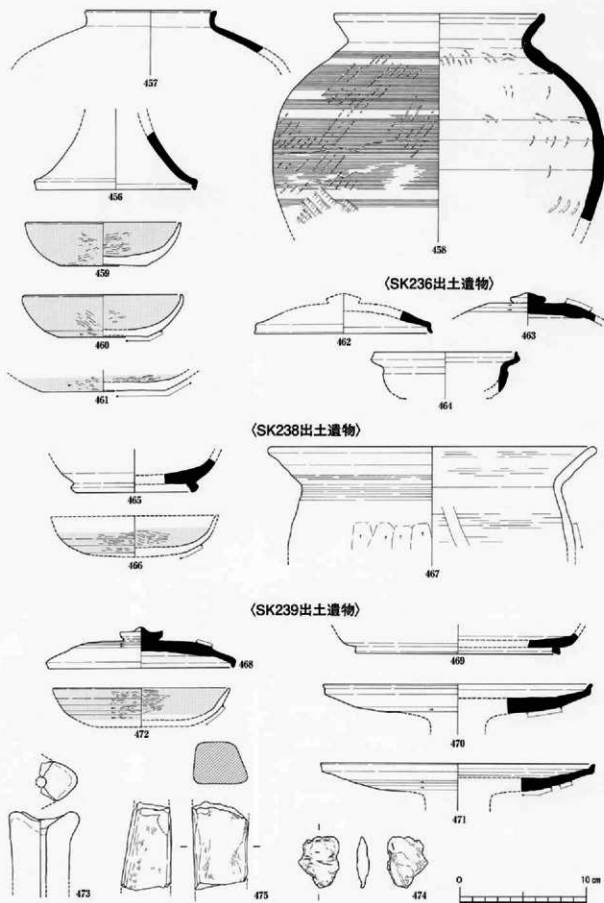
須恵器食膳具65点、須恵器貯蔵具19点、土師器食膳具22点、土師器煮炊具241点、その他土製品2点を出土する土器廃棄土坑である。土器はⅡ3期からⅤ期にかけて見られるが、SK234同様に中心となる時期はⅣ2新期～Ⅴ1期で、特に図示したものはⅣ2新期にまとまる。当期の良好な一括資料と言えるもので、459～461の赤彩土師器碗Aは当期の形態をよく表している。須恵器は南加賀室産のもので、SK234よりも坏蓋に天井部平坦な形態が残る、坏B身も扁平形態の系統を引きずる。なお、458の須恵器小甕については、Ⅰ期に位置づけられるもので、混在したものと見られるが、ただ器面の磨耗程度から見ると、伝世品の可能性もある。7世紀前半から100年以上の開きがあるが、甕・壺の貯蔵具であれば、可能性としてはありえるだろう。

30. SK239 出土遺物

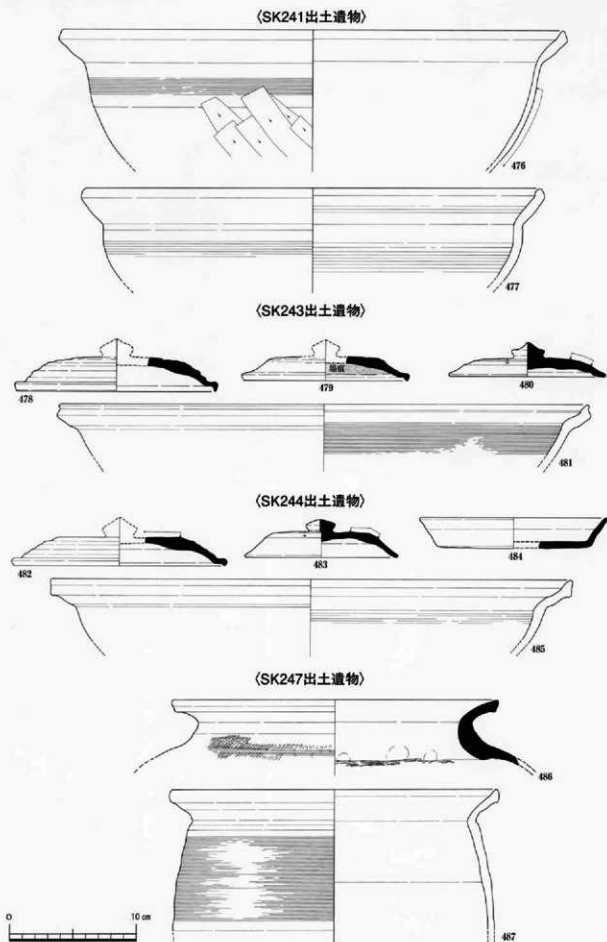
須恵器食膳具51点、須恵器貯蔵具20点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具184点、その他土製品5点、石製品1点を出土する土器廃棄土坑である。一部、Ⅴ期～Ⅵ期の土器を僅かに含むが、図示した土器を中心として、概ねⅢ期新段階からⅣ1期に位置づけられるものと見られる。須恵器胎土は南加賀室産ではは占められ、赤彩土師器碗は扁平な器形を呈している。その他の土製品として、当土坑からは支脚形土師製製品と焼成粘土塊が出土している。支脚形は太い棒状脚の上下端を広げる形状のもので、上端が三叉状に突出する形態である。焼成粘土塊は所謂焼成粘土塊A類とした土師器焼成における窯道具である（望月精司2005『古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術』『窯跡研究』創刊号、窯跡研究会）。製品のかまき材等に使われた扁平な土師製粘土片で、片面に黒斑、片面に火色発色を持ち、両面にはワラ等の細い繊維状圧痕が付着する（写真69）。



第132図 古代土坑出土遺物24 (SK229-2、SK231、SK234、SK235-1、全てS=1/3)



第133図 古代土坑出土遺物 25 (SK235-2、SK236、SK238、SK239、全てS=1/3)



第134図 古代土坑出土遺物26 (SK241、SK243、SK244、SK247-1、全てS=1/3)

31. SK241 出土遺物

調査時点では土坑底面の被熱状態から土師器焼成坑と位置づけたものだが、出土土師器には焼け弾けた痕跡や焼成剥離片はなく、土師器が全体的に軟質の焼成具合で、土師器焼成遺構によく見られる高温焼結品や多くの黒斑が確認できなかった点、加えて、477の土師器浅鍋の外面には被熱による赤化や内面のコゲ痕跡が確認できた点から、土師器焼成遺構ではないと判断し、被熱面をもった土坑として扱った。ただ、当土坑から出土する遺物は全てⅢ～Ⅳ期の土師器煮炊具であり、床面被熱を考えれば、単なる土坑ではなく、煮炊き等の施設に伴う下部遺構の痕跡と判断するのが妥当だろう。

32. SK250 出土遺物

須恵器食膳具を中心に土器廃棄がなされる土坑で、図示した土器は概ねⅡ3期新段階からⅢ期古段階に位置づけられる。破片で赤彩土師器碗と内黒高杯があり、当期の組成を示すだろう。

33. SK259 出土遺物

2基の土坑が重複しているが、両土坑は出土土器に大きな時期差がなく、図示した須恵器杯B蓋の扁平器形や赤彩土師器碗の扁平器形、土師器浅鍋の北陸型として定型化されたような口縁部器形などから、概ねⅢ期新段階からⅣ1期頃に位置づけられると判断する。浅鍋は2個体とも、外面スズ痕跡、内面コゲ痕跡を持つもので、499は口縁部にコゲバンド、500は胴部にコゲ痕跡を持つ。

34. SK264 出土遺物

出土土器に時期のまとまりがなく、遺物出土量も少ない小型土坑だが、特徴的な器種として須恵器平瓶と土師器外赤内黒土師器皿Bが出土しているので、取り上げておく。平瓶(510)は当土坑以外にSK239、SK409、み23Gr土器溜まり、む23Gr土器溜まり、よ22Gr土器溜まり、H地区土器溜まり5-Iと接合関係にある半完形品である。大型円盤で閉塞する平瓶出現期の様相を残す形態のもので、I2期からⅡ1期に位置づけられる。外赤内黒皿B(511)も略定形品で、高台径の大きな皿部扁平器形を呈す当器種出現期のものである。体部下位から底面を丁寧にケズリ調整しており、Ⅵ1期に位置づけ可能である。

35. SK265 出土遺物

須恵器食膳具81点、須恵器貯蔵具14点、土師器食膳具26点、土師器煮炊具334点、その他鉋状土師質製品59点を出土する土器廃棄土坑である。土器は大きくⅡ3期～Ⅲ期、Ⅴ期前後、Ⅵ2期頃の3時期があり、主体をⅤ期前後のものが占める。

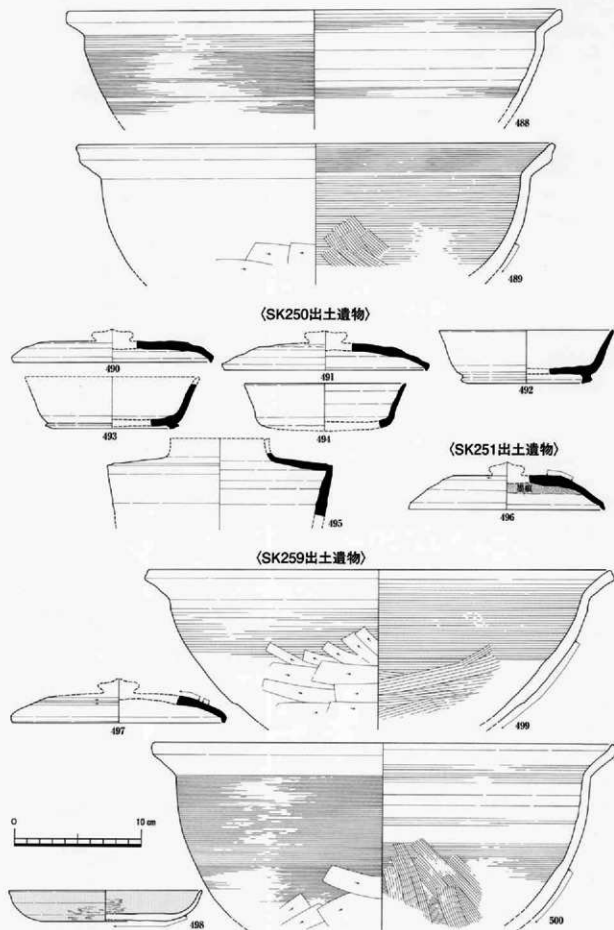
Ⅱ3期～Ⅲ期のものは古手一群として掲載したもので、須恵器食膳具中心に出土している。Ⅴ期前後のものは土師器が多く、赤彩土師器碗をはじめとして土師器短胴小釜、長胴釜、浅鍋、甗が確認される。須恵器は519の杯B蓋転用碗が出土しており、内面に顕著な磨耗痕と墨痕が残る。他にも破片で墨痕の残るものや顕著な内面磨耗痕の確認されるものがあり、数点の転用碗が存在したものと見られる。Ⅵ期のものは少量の土師器煮炊具と外赤内黒碗・皿が出土している。煮炊具しか図化しなかったが、Ⅵ2～3期に位置づけられる。

36. SK270 出土遺物

2基の土坑が重複しており、SK270 aはⅡ3期～Ⅲ期頃、SK270 bはⅣ期頃の土器が出土するが、SK270 bについては出土量が少なかつたため、ここでは取り上げず、Ⅱ3期～Ⅲ期に位置づけられるSK270 aのみを図示し、説明したい。SK270 aは遺物出土量が多いとは言えないが、土器様相にまとまりがあり、537・538の杯B蓋や杯Aの器形特徴や法量から、Ⅱ3期新段階～Ⅲ期古段階の中で位置づけ可能と判断される。540の赤彩土師器碗Fの扁平化した器形や541の赤彩土師器杯Bの高台の低く踏ん張る形態、542～545の土師器煮炊具類の面形成するような口縁部形態など、須恵器食膳具から導き出される時期に矛盾はなく、当期の一括資料と位置づけられよう。なお、537は略定形品の転用碗であり、内面中央に顕著な磨耗痕、その外縁に飛び散ったような墨粒痕が確認される(写真50)。

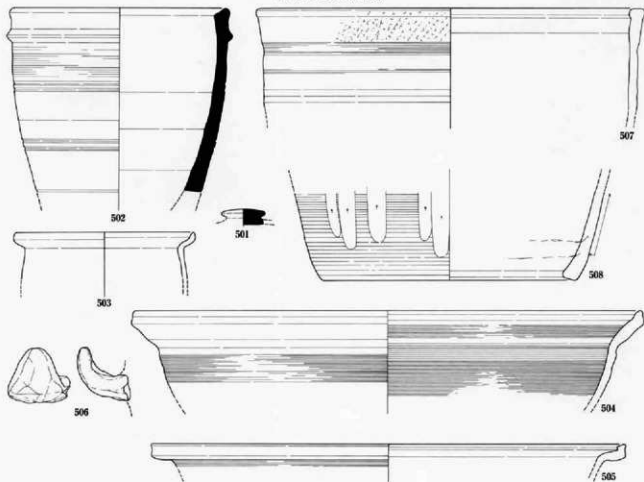
37. SK272 出土遺物

遺物出土量は少ないが、食膳具を中心にⅣ1期にまとまる土器群が出土している。転用碗として使用された磨耗痕、墨痕を持つ杯B蓋546(写真51)、当期の特徴を持つ扁平形の杯A547、大型でしっかりとした厚手の高杯A548と、いずれも遺存度のよい土器であり、共存する赤彩土師器碗Aも当期に位置づけて問題ない。当遺跡では数少ないⅣ1期の一括資料と評えよう。

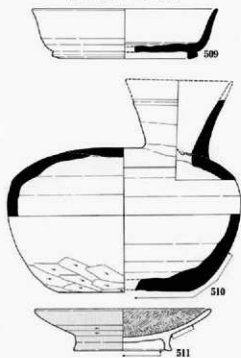


第135図 古代土坑出土遺物 27 (SK247-2、SK250、SK251、SK259、全てS=1/3)

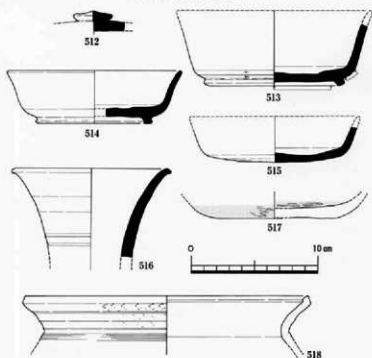
(SK262出土遺物)



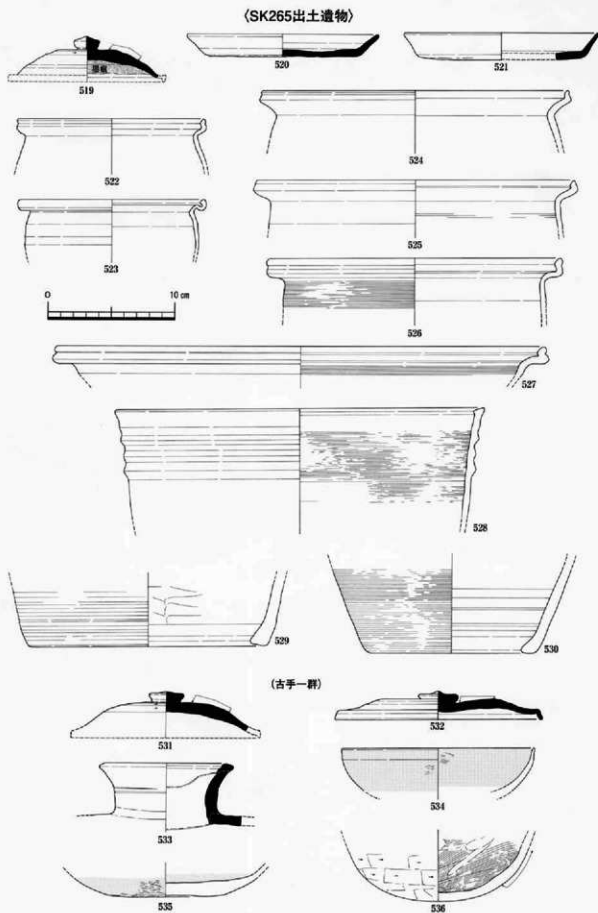
(SK264出土遺物)



(SK267出土遺物)

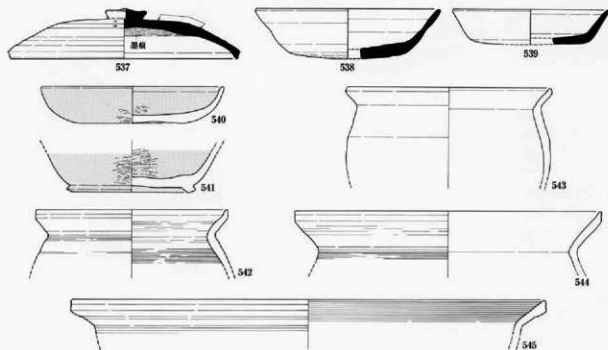


第136図 古代土坑出土遺物 28 (SK262、SK264、SK267、全てS = 1 / 3)

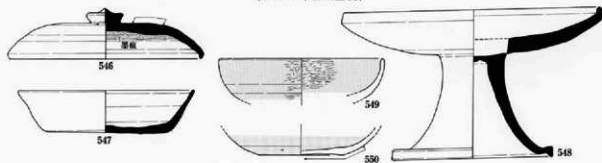


第137図 古代土坑出土遺物29 (SK265、全てS = 1/3)

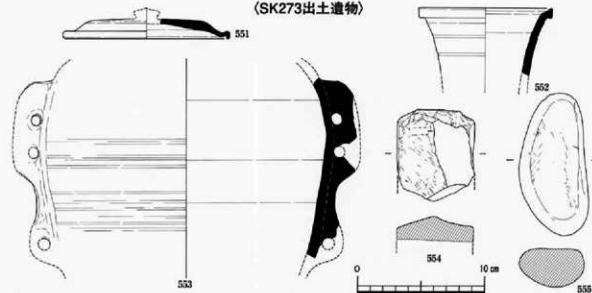
(SK270出土遺物)



(SK272出土遺物)



(SK273出土遺物)



第138図 古代土坑出土遺物30 (SK270、SK272、SK273、全てS=1/3)

38. SK275 出土遺物

小型の方形土坑で出土土器は少ないが、ここからは土師器の棒状把手を有す特殊な脚付き鉢 557 が出土している。土坑の時期は共伴する須恵器平飯 556 の器形や 558 のハケ目調整の楕把手形態、須恵器杯 B 蓋の小破片の形態などから、Ⅱ 2 期～Ⅱ 3 期の中で位置づけられるものと判断する。

さて、この特殊土師器 557 だが、口縁部と脚部、把手を欠損するものの、容器本体部分は完存しており、器形の概要は知ることができる。胎土はⅡ 2 期前後に一般的な地元 B 類胎土で、混和材を含まない赤く発色する胎土である。鉢本体と脚は、ロクロ成形により作られており、口縁部の外反する深身筒形の器形を呈す鉢に、低く開く脚を付すものである。当期の土師器高坏とは器形的に大きく異なっており、モデルとなるような器種は見当たらないが、強いて上げれば、5 世紀代の須恵器大型無蓋高坏に近い形態とも言える。ただし、当土師器は極めて厚手で、ミガキ調整も見られないなど粗雑な容器として作られている。加えて、体部中央には幅 4.0 cm、高さ 3.5 cm の断面方形を呈す中空把手を、体部側面を切り込むようにして、差込み取り付けしている（写真 37）。このような形状のものは、国内はもとより、朝鮮半島にも類似事例を見つけ出すことはできず、モデルとなる器種はもとより、用途や器種についても、見当がつかない。ただ、これはあくまでも想像の域だが、把手形態と極めて厚手の作りをする点から、銅等の金属の鋳造に使用するような、手付の埴輪容器として作られた可能性を考えたい。残念ながら、そのような痕跡が当土器に付着しておらず、仮にそうだとすも未使用品となるのだが、当土器理解の一つの可能性として提示しておきたい。

39. SK283 出土遺物

須恵器食膳具 100 点、須恵器貯蔵具 25 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 285 点、その他土製品 5 点を出土する大型の土器廃棄土坑である。土器はⅡ 3 期からⅥ期までのものが混在して出土するが、主体となるのはⅡ 3 期のものとⅣ 2 新期～Ⅴ 1 期頃のもので、前者を古手一群、後者を新し手一群として図に掲載してある。

古手一群はいずれもⅡ 3 期の範疇で捉えられるもので、比較的製品の残りがよい。須恵器産地は能美窟産、南加賀窟南群産が目立ち、南加賀窟北群産は従的存在である。なお、578 の赤彩土師器蓋であるが、口径 19.5 cm を測る特大法量の食器蓋で、大型の杯 B 身に伴うものと考えられる。丁寧な作りのもので、これも形態からⅡ 3 期に位置づけて問題なかろう。

新し手一群はⅣ 2 新期からⅤ 1 期と若干の幅を持つもので、ここでは図化しなかったが、当期に位置づけられるものに杯 B 蓋転用視 1 点と内面に油痕を残す杯 B 身 1 点が確認されている。

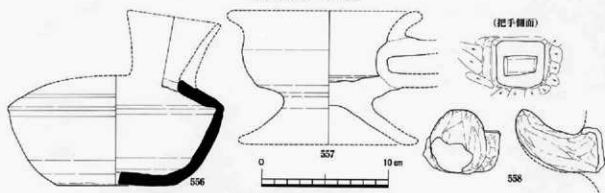
40. SK284 出土遺物

須恵器食膳具 64 点、須恵器貯蔵具 18 点、土師器食膳具 12 点、土師器煮炊具 154 点、その他土製品 1 点を出土する土器廃棄土坑で、全体としてはⅢ期からⅤ期の土器が出土するが、主体はⅣ 2 古期にほぼまとまる。図示した 588・589 の須恵器杯 A をはじめとして、杯蓋類や高坏 A、赤彩土師器輪 A もⅣ 2 古期に位置づけて問題ない。593 の土師器浅鉢は通常の器形とは異なるが、Ⅳ 2 新期までの範疇で考えれば、包括できる資料である。当土坑には 594 の支脚形土師器製品が出土している。下端が裾広がりとなる中空タイプで、Ⅱ期から続く非ロクロ成形のものである。支脚形はロクロ成形のものがⅥ期に確認されるが、非ロクロ成形のものは当土坑出土のⅣ 2 古期が最も新しいものである。SK229 では、ほぼ同時期の支脚的な円筒形土製品が出土しており、この頃を境に円筒形のロクロ成形のものへと変化していったものだろう。

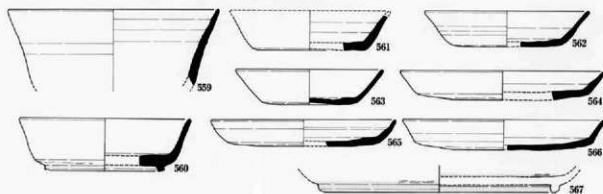
41. SK285 出土遺物

須恵器食膳具 144 点、須恵器貯蔵具 25 点、土師器食膳具 14 点、土師器煮炊具 333 点、その他土製品 5 点を出土する大型の土器廃棄土坑である。出土土器はⅡ 3 期からⅥ期までのものが混在するが、主体となる土器はほぼⅤ 1 期にまでまとまり、当期の基準となる一括資料と位置づけられる。須恵器産地は南加賀窟を主体とするもの、能美窟産も 1/3 を占めており、能美窟産須恵器は 600 の杯 B 身や 603～605 の杯 A などに見るように、南加賀窟よりもやや口径が大きく作られ、古手の様相をもつ。能美窟の須恵器は南加賀窟のものに比べて、Ⅳ 2 期では新しい器形を先に取り入れるが、Ⅴ期になると杯類器形など古い印象を受けるものが多くなる特徴があり、窯場の特性が現れている。なお、597 の杯 B 蓋には内面広く墨痕があり、墨溜めとして転用された土器だが、他にも 611 の盤 B には内外底面に墨痕、610 の底面には判読できないが、墨書きらしきものが確認される。土師器では食膳具が赤彩品で占められ、煮炊具も複数器種が出土しているが、図示できたものは少ない。

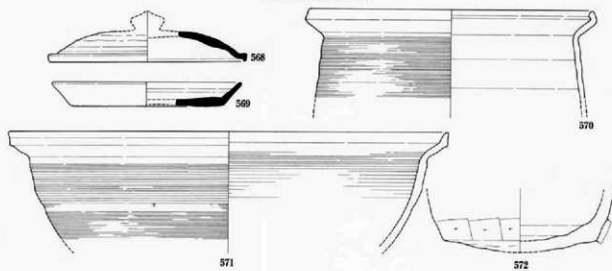
(SK275出土遺物)



(SK280出土遺物)

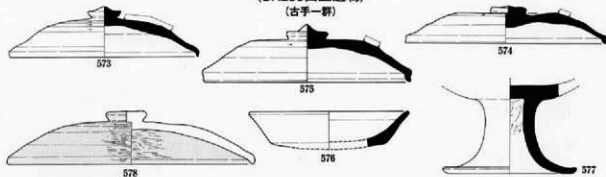


(SK281出土遺物)



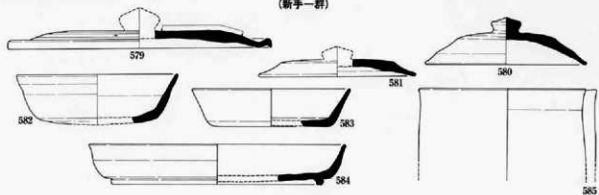
(SK283出土遺物)

(古手一群)

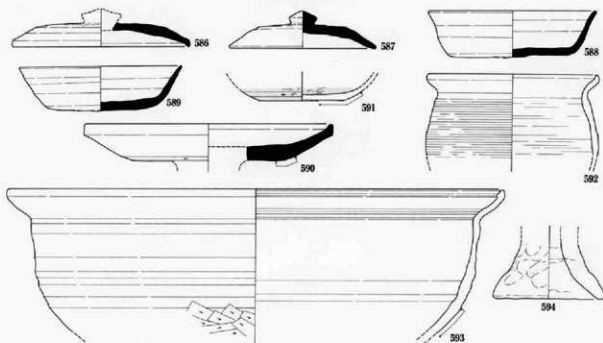


第 139 図 古代土坑出土遺物 31 (SK275、SK280、SK281、SK283-1、全て S=1/3)

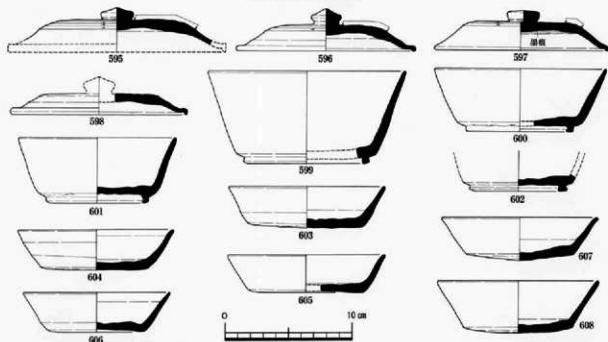
(新芋一群)



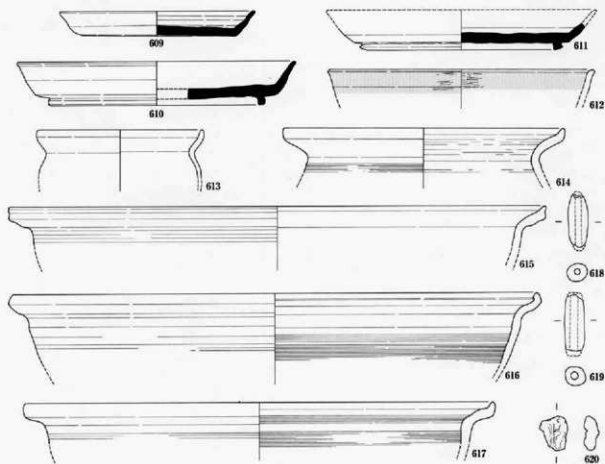
(SK284出土遺物)



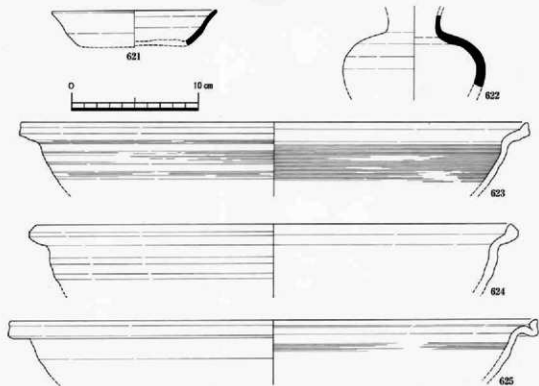
(SK285出土遺物)



第140図 古代土坑出土遺物32 (SK283-2、SK284、SK285-1、全てS=1/3)



〈SK286出土遺物〉



第141図 古代土坑出土遺物33 (SK285-2、SK286、全てS=1/3)

第4項 古代生産遺構及び道路状遺構出土遺物

ここで扱う古代生産遺構は、土師器焼成坑、鍛冶炉、製炭土坑であり、土師器焼成坑はSK146とSJ30、SJ51の3基、鍛冶炉はSJ20とSJ59の2基、製炭土坑はSK111とSK274の2基がある。土師器焼成坑は生産物である土師器及び焼成に関連する遺物を掲載するが、鍛冶炉や製炭土坑については、基本的に生産物の提示は最終巻に予定している製鉄関連遺構編の報告で行うため、ここでは遺構の時期を判断するための出土土器についてのみを提示する（SJ51・SJ59・SK274は固化可能遺物なく、割愛）。なお、道路状遺構については、SD25のみが今回の報告対象となるが、道路状遺構に関連する周辺土坑等から出土する遺物についてもあわせて報告する。

1. SK146（土師器焼成坑）出土遺物

当焼成坑の埋土上層からはⅣ期からⅥ期の須恵器・土師器が混在して出土するが、埋土下層から床面近くには当焼成坑で焼成破壊廃棄された土師器片 562 点が出土している。短胴小釜や長胴釜の破片 52 点以外は、全て食膳具破片で、内面黒色焼成されたものは確認されず、その窯道具と考えている匣鉢状土製品も出土していない。つまり、生産品は、全て通常の土師器で構成され、当焼成坑では内黒土師器が生産されなかったと考えられる。

食膳具種は椀Aと椀Bがあり、椀Bには定量の足高台品がある。椀Aは口径により、口径13.5～12.7cmの大法量（1～10）と口径12.3～11.5cmの小法量（11～13）、口径11.0～10.0cmの極小法量（17～21）の3種に区分可能である。大法量は口径13.5～13.0cmを主体に分布し、底径が大きく、器形の低い器形をもつ。これに対し、小法量は口径12cm前後に分布の中心があり、底径小さく、大法量より体部外傾の強い器形となるものと推察される。極小法量は口径10.5cm前後に分布の中心があり、底径は4.5～5.0cmで、椀A小法量を小型にし、さらに圓形化したような器形のものである。この3法量分化した椀Aについて、大法量と小法量の区分に関し、遺存状態の良好なものがなく、器形としても分けられるかどうか微妙な部分はあるが、極小法量とした10cm台のものについては、器形、法量とも識別可能で、その後、小皿へ展開する法量と位置づけできる。つまり、極小法量の椀Aについては、椀Aとは別器種の小皿に設定し、当資料をもって小皿の出現としたい。椀Bは全形を知る資料がなく、高台の形態のみだが、断面方形のシャープな作りのもので、薄手に作られている。高台貼り付け後に底面をナゲ消す特徴があり、台径は小さく、通常の高さの25とやや足高となる27とがある。

底部と口縁部の破片数から導き出した食膳具の割合は、椀A大法量45%、椀A小法量20%、小皿A25%、椀B10%で、椀Aの分化と小皿の定量存在が、当焼成坑資料の大きな特徴である。

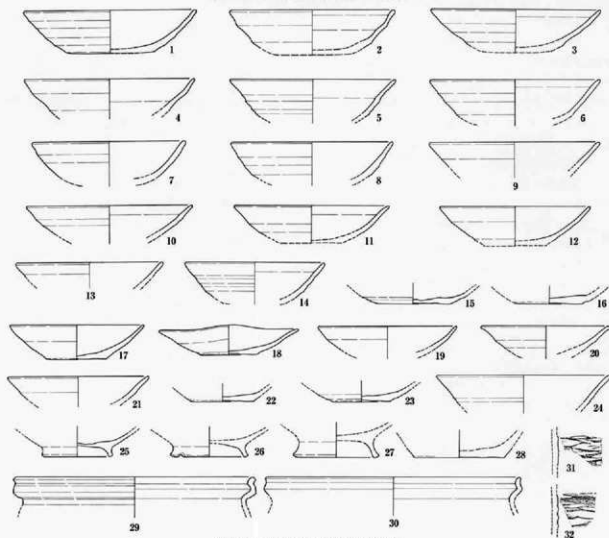
土師器煮炊具は北陸型煮炊具の特徴を持つ長胴釜と短胴小釜が出土している。Ⅵ期の流れの中で位置づけられるような、底部余切り痕をそのまま残す平底形態を持つ短胴小釜と、胴部下半に平行線文印きを残す長胴釜で構成され、古代Ⅵ1期との形態的、技法的な差異は認められない（写真72）。

以上、SK146土師器群の特徴をまとめれば、椀Aの法量分化と小皿の出現、内黒椀の衰退が上げられる。小皿の出現と古代型の内黒土師器生産の終焉は、中世土師器生産への移行を示すが、北陸型煮炊具生産を維持する点、土師器胎土が中世的な土師器胎土へ移行していない点、加えて古代土師器生産の系統にある土師器焼成坑での生産を行っている点で、依然として古代土師器生産の延長線上にあり、その最終期の段階と位置づけられるだろう。つまり、田嶋編年でのⅤ2期に位置づけられるものであり、『顔見町遺跡Ⅱ』で報告した土師器焼成坑SK49に後続する資料と理解する。

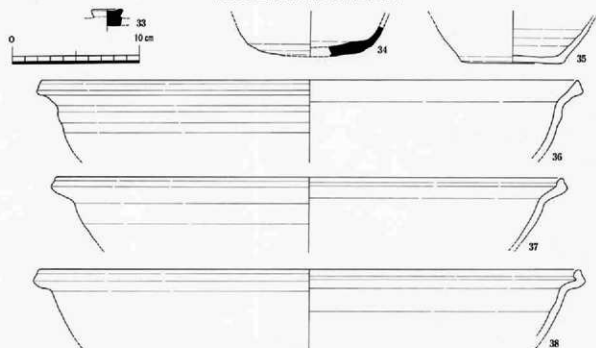
2. SJ30（土師器焼成坑）出土遺物

明確に土師器焼成坑のプランを確認していないが、被熱床面を伴う遺構で、煮炊き使用痕ではない被熱痕跡を持つ土師器片や窯道具片が多数出土したことから、土師器焼成に関連する遺構と位置づけたものである。須恵器食膳具の破片と土師器煮炊具、匣鉢状土製品が出土しており、須恵器はⅤ期頃のものと思われるが、土師器煮炊具は36がⅤ期頃に位置づけられる以外は、Ⅴ1期～Ⅴ2期に位置づけられるものと見える。Ⅴ期の土師器煮炊具は大半が浅鍋で、破片で40点ほど出土する。これら土師器片は強い被熱を受けて赤化や焼成剥離、焼け弾け等が見られ、ともに出土する匣鉢状土製品についても同様の被熱状態にある。匣鉢状土製品はⅤ期に位置づけられるもので、底部はヘラ切りのものである。いずれも細片化しているため、あまり固化できていないが、破片で193点出土しており、ここで窯道具として使用されたというよりも床に破片が敷き並べられていた感がある。匣鉢状土製品は本来、内黒食膳具焼成において使用される窯道具であり、当遺構で内黒土師器食膳具が全く出土していないこともその証左となろう。当遺構は主に土師器煮炊具を焼成したものと推察する。

〈SK146:土師器焼成坑出土遺物〉



〈SJ30:土師器焼成坑出土遺物〉



第142図 古代生産遺構・道路状遺構出土遺物1 (SK146、SJ30-1、全てS=1/3)

3. SJ20 (鍛冶炉) 出土遺物

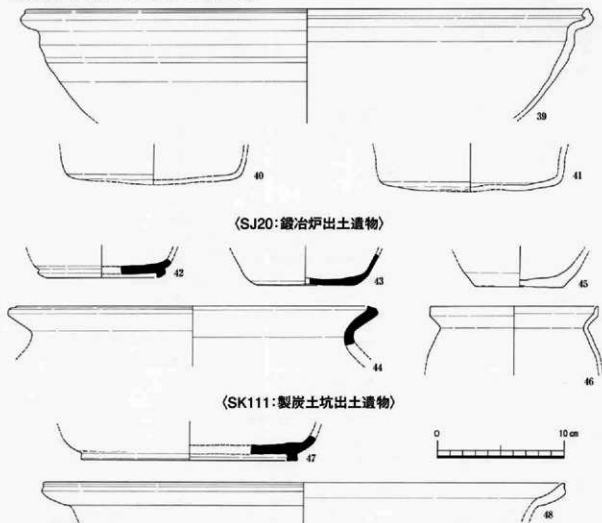
石囲み構造の大型鍛冶炉で、遺構内及び周辺から、多数の鍛冶滓とともに比較的多くの土器が出土しており、そのうちの数点を図化した。須恵器食膳具の底部器形や土師器煮炊具の口縁部器形などから、概ねV1期を前後する時期に位置づけられ、図化していない土器についても、この時期に位置づけられるものが多い。

4. SK111 (製炭土坑) 出土遺物

床面が還元焼結する製炭土坑であり、遺構としてしっかりしている。出土遺物としては製炭に伴う炭化材の他に、遺構埋土中から比較的多くの土器が出土している。ただ、小さな破片が主で、図化できたものは2点に止まる。Ⅳ2期に位置づけられる須恵器盤Aと同時期の位置付け可能な土師器浅鍋で、それ以外にも、ほぼ同時期に位置づけられそうな坏Aや坏Bの破片が出土している。

5. SD25 (道路状遺構) 出土遺物

SD25 出土遺物としてここに提示するものは、道路状遺構の側溝、道路敷き内、付属する土坑から出土したものである。須恵器食膳具528点、土師器食膳具28点、須恵器貯蔵具195点、土師器煮炊具454点、土製品7点、石製品5点を数え、須恵器と土師器での比率は須恵器6に対し、土師器4で構成される。この比率は、堅穴建物では勿論、須恵器率の高い土坑よりもかなり高い数値であり、特に土師器煮炊具の率が低い点は注目してよい。このような比率は、当遺構における土器の出土状態、つまり路面硬化のために敷く須恵器片に起因するものであり、特に貯蔵具破片を選択的に用いている可能性がある。このような土器片再利用の性格が強いため、土器の帰属時期にバラツキが多く、遺構の時期特定が困難となるのだが、最も新しい時期の土器のまとまりが道路構築時期と判断すれば、Ⅳ2新期～Ⅴ期が構築時期と考えられる。ただ、図示したものにそのような時期のものは少なく、特徴的な遺物や残りのよい遺物のみを示した。



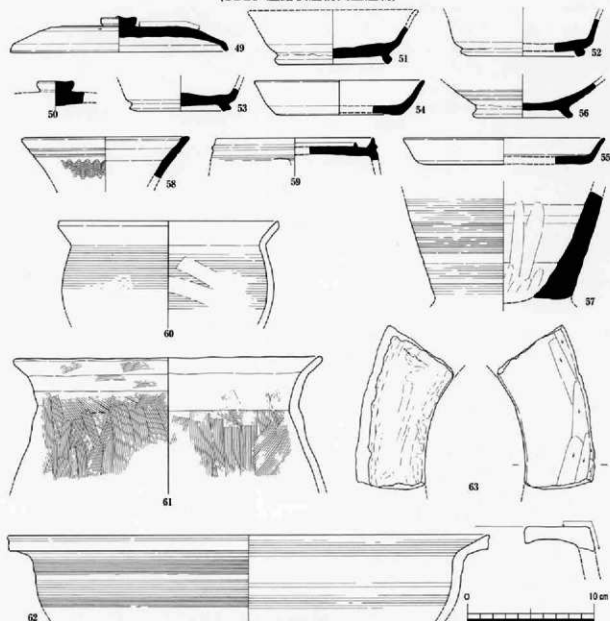
第143図 古代生産遺構・道路状遺構出土遺物2 (SJ30-2, SJ20, SK111, 全てS=1/3)

ここでは特徴的な59の須恵質円面硯と63の甍形土師質製品についてのみ取り上げる。

まず、59だが、圓足円面硯の脚部欠損する破片で、一部残されたスカシ形状から、縦長方形スカシをもつ脚部形態と考えられる。全体的に坏形を呈す、器内の厚くない重厚さに欠けるもので、8世紀中頃以降のものであろう。硯面に内装をもつ有堤式で、内径は9.6cm、外径は12.4cmを測る。南加賀窯産で、焼成は堅緻に仕上げるが、胎土は砂粒を多く含む。硯面に磨耗痕を残すが、磨り減ったようなものではなく、黒痕も確認できない。

63は直径37cm程度の円孔が圍く平坦な天井部をもつ甍形土製品で、平坦な天井部をもつという点から朝鮮半島に由来する朝鮮系甍形土製品と位置づける。同様の天井部形態を持つものは、A地区SI33壘土において出土しており、これについては他の朝鮮系軟質土器とともに、地元生産(地元B類胎土)されたものとみなされている。これに対し、63は窯場A類胎土のもので、南加賀窯での生産が予測されるものである。南加賀窯での甍形土製品の生産は、二ツ梨豆岡向山支群8-II号窯で確認されている。窯はII3期に位置づけられるもので、1次成形を叩き成形で行う付け庇形甍の甍形土製品であり、63の事例から考えて、天井部が平坦となる可能性も出てきた。筆者は、朝鮮系軟質土器生産が須恵器窯場へと移行する中で北陸型煮炊具が成立したと見ているが、このような朝鮮系甍形土製品生産の須恵器窯場への移行事例は、その説を補強するものと言えよう。

(SD25:道路状遺構出土遺物)



第144図 古代生産遺構・道路状遺構出土遺物3(SD25、全てS=1/3)

第5項 古代土器溜まり遺構出土土物

古代土器溜まり遺構は、今回報告地区の南東側、ま〜む-15〜28Grにほぼ集中して存在している。特に、土器出土量が300点を超すものは、20〜23Grにまとまっており、この区域が土器廃棄場的な位置付けにあったものと言える。隣接するH地区では当遺跡最大の土器廃棄場が存在しており、それとの関連性も注目される。今回報告において図示したものは、み20Gr土器溜まり、む22Gr土器溜まり、ま22Gr土器溜まりで、土器の時期にややばらつきがあるが、貯蔵具の出土が多い特徴を持つ。

1. み20Gr土器溜まり出土土物

須恵器食器具145点、土師器食器具34点、須恵器貯蔵具188点、土師器煮炊具180点、土製品3点、石製品4点が出土する、今回報告地区では最も出土量の多い土器溜まり遺構である。遺物の時期はⅡ3期からⅥ期まであり、中世1期のものも混在する。中心となる時期はⅡ3期〜Ⅲ期とⅣ2新期〜Ⅴ2期頃で、図示したのもこの2時期にはばまとまる。Ⅱ3期〜Ⅲ期を古群、Ⅳ2新期〜Ⅴ2期を新群とすれば、古群には2・4・5・7・14・15、新群には1・3・6・8〜13・16〜20・23〜25が該当する。

図示した古群資料は須恵器のみで、Ⅱ3期頃の坏B身が能美窟産である以外は南加賀窟産で占められる。当資料で注目されるのは14の瓶Aである。細かく破砕されているが、完形復元できるもので(写真78)、顕著な使用痕跡などは確認できない。この場所での意図的な土器廃棄を思わせるような出土品である。古群に位置づけられる資料には15の瓶A以外にも数点の瓶Aが出土しており、横瓶や壺など貯蔵具の廃棄が目立つ。

新群資料もほぼ須恵器で構成されるが、赤彩土師器輪Aと浅鍋が固化できている。須恵器はⅤ1期を前後する時期にはばまとまり、盤Aに2点の能美窟産がある以外は全て南加賀窟産で構成される。遺存度の良い土器はなく、全て破片出土で、特殊なものとしては3の坏B身内面に漆附着が確認されるものや、19の四耳壺がある。四耳壺は肩部の張る短頸壺の形態を有するもので、肩部には上方からの未貫通穿孔を施す角形把手を4つ付す。四耳壺はⅤ期に南加賀窟と能美窟で生産される特殊貯蔵具であるが、肩の張るタイプは当事例が初の確認である。肩の張る四耳壺は美濃須賀産において生産されており、美濃からの直接的影響で出現した器種の可能性がある。

なお、時期の特定は困難だが、能美窟産胎土で21の須恵器小壺が出土している。内面に車輪文当て具をもつもので、北陸では初見である。外面は平行線文(Ha類)叩き後にカキ目調整を施す(写真73)。

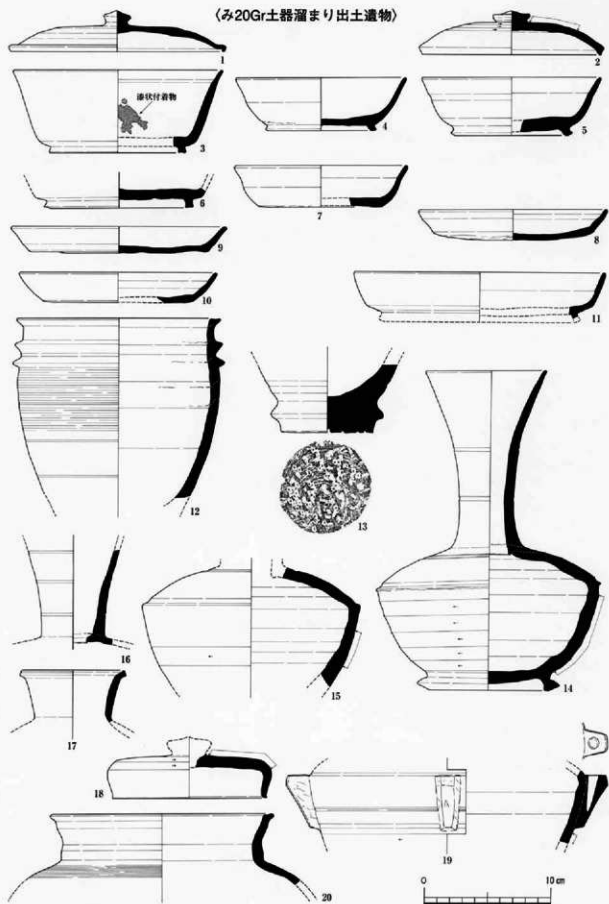
2. む22Gr土器溜まり出土土物

須恵器食器具180点、土師器食器具23点、須恵器貯蔵具48点、土師器煮炊具147点、石製品3点が出土する土器溜まり遺構である。遺物の時期はⅡ3期からⅥ期まであり、中世1期の土師器も僅かに混在する。中心となる時期はⅣ2新期〜Ⅴ1期を前後する時期で、28・29の小瓶もこの時期に位置づけられる。28の小瓶は肩の張る瓶A系統の器種で、南加賀窟産のものであるのに対し、29の小瓶は肩の丸く強く張る南加賀産ではあまり見ない器形を呈す。器形特徴とシルト系胎土から金沢末窟産の可能性が高い。南加賀地域で金沢産須恵器が出土する事例は少なく、特に、領見町遺跡で出土するものは当資料が初見である(写真75)。なお、32の鉄製品だが、刃部先端を欠損する刀子であり、両面は両面刃形、基部は長く断面は長台形を呈す。

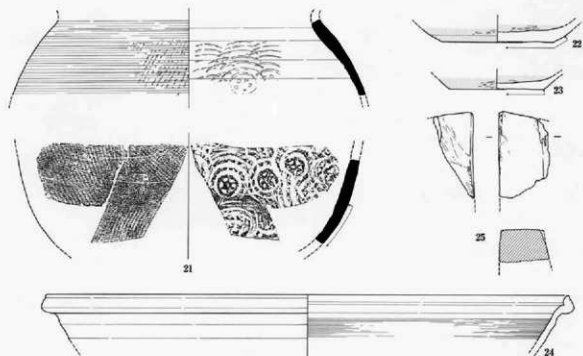
3. ま22Gr土器溜まり出土土物

須恵器食器具104点、土師器食器具11点、須恵器貯蔵具33点、土師器煮炊具196点、土製品2点、石製品2点が出土する土器溜まり遺構である。遺物の時期はⅡ3期からⅥ期まであり、中世1期の土師器も僅かに混在する。中心となる時期はⅣ2新期〜Ⅴ1期を前後する時期で、図示したのも当該時期のものである。33は口径22cmの特大坏B蓋で、器形や量から天井部に突起が巡る金属器系器種と考えられる。南加賀窟産で、Ⅴ期に顕在化する器種である。なお、41は非ロクロ成形の小型鉢状器種で、時期は不明だが、胎土は窟産のものである。非ロクロ成形の土師器小型鉢を祭祀用具や仏教用具として使用する場合もあり、そう考えれば、他の土器群とともにⅤ期に位置づけられる可能性もある。

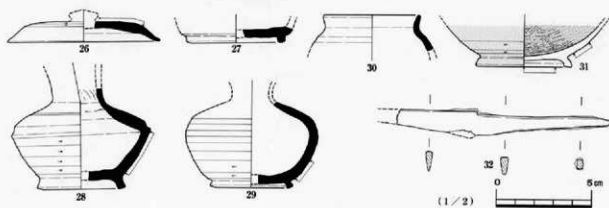
以上、土器溜まり遺構について述べたが、ここで取り上げなかった土器溜まり遺構も含め、概ねⅡ3期〜Ⅲ期とⅣ2新期〜Ⅴ2期の時期に中心がある。古段階は長頸瓶等の貯蔵具廃棄を中心に祭祀が行われていた感があるのに対し、新段階は須恵器食器具の出土も多く、器種は多様である。ただ、その中では小瓶や小壺の出土が目立っており、図示はしなかったが、当地区の土器溜まり遺構全体で14点の出土がある。当期の土坑資料ではこのような小瓶・小壺が目立った出土はなく、当期の土器廃棄祭祀の特徴的器種であったとも考えられる。



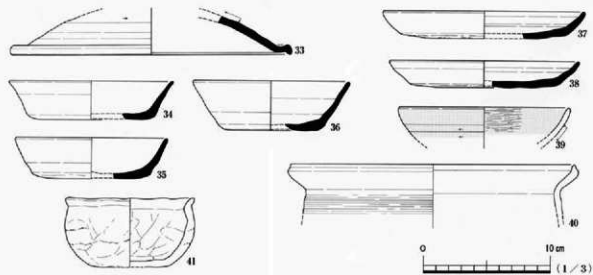
第145図 古代土器溜まり出土遺物1 (み20Gr-1、全てS=1/3)



(む22Gr土器溜まり出土遺物)



(ま22Gr土器溜まり出土遺物)



第146図 古代土器溜まり出土遺物2 (み20Gr-2、む22Gr、ま22Gr、32のみS=1/2、他は全てS=1/3)

第6項 古代ビット及び包含層出土遺物

古代の土器を出土するビットは、数多くあるが、そのなかで意識的な土器埋納を思わせるビットは、P 809、P 846、P 878で、他は特に個別記載する事項もないため、包含層出土土器とともに述べる。

1. 土器埋納ビット出土遺物

a. P809 出土遺物

Ⅲ期新からⅣ1期に位置づけられる須恵器食膳具が3個体(25～27)出土している。坏B身1個と坏A2個で、坏Aは略完形品と半完形品で残りがよい。出土状態の詳細を確認していないが、いずれも同時期のものであり、意識的なビット埋納と考えるのが妥当だろう。胎土は全て南加賀窯産である。

b. P846 出土遺物

V1期に位置づけられる南加賀窯産の須恵器坏B身30が半完形品で出土している。底面に墨書をもつもので、使用痕は確認されない。完形に近い墨書土器であり、ビット埋納的な性格を持つものと考えられる。

c. P878 出土遺物

Ⅱ3期新段階からⅢ期古段階に位置づけられる須恵器坏B身2個体が略完形で出土している。いずれも内底面に磨耗痕をもつので、34の内面磨耗は顕著で、高台端も磨耗している。35の磨耗は弱いが、外底面中央に墨痕があり、墨書されていた可能性がある。ほぼ完形品2個体のビット出土であり、意識的な土器埋納と位置づけられる。須恵器はいずれも南加賀窯産のものである。

2. その他のビットと包含層出土遺物

a. 須恵器及び須恵質土製品、その他陶器

須恵器は古代Ⅰ1期からⅥ2期まで、長期間、各時期のものが出土している。最も古いものは36の南加賀窯北群産坏H身で、立ち上りの直立器形や長さ、口径13.5cmを測る大きさ等から古代Ⅰ1期古段階を遡る時期、二ツ梨峠山10号窯段階、陶器窯TK43併行に位置づけられるものとみる。ただ、単体の遺物であり、これまでの報告区域の状況からして、古代Ⅰ1期を遡る時期の遺構は存在しないものとみてよいだろう。

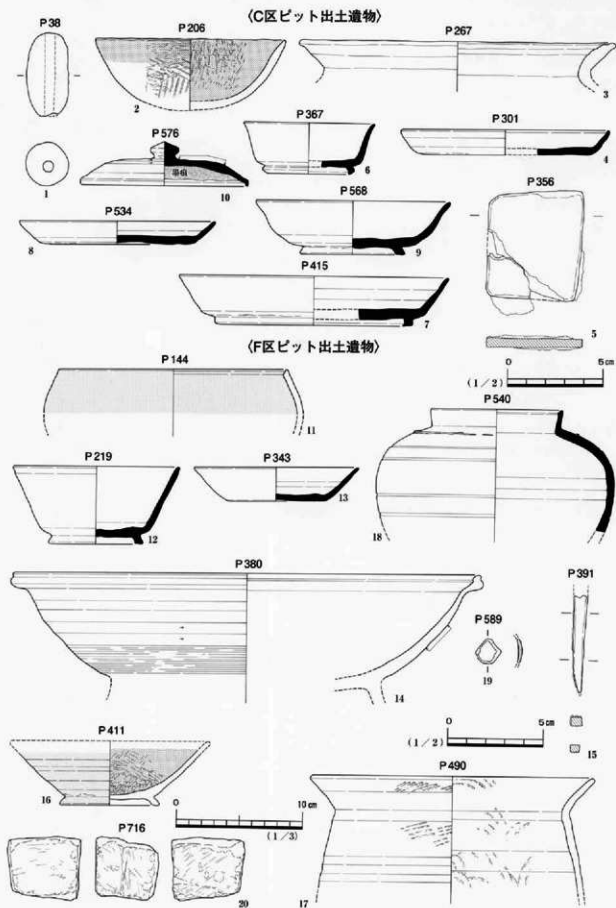
今回報告地区のビットや包含層から出土する土器を見ると、遺構帰属時期にも現れているように、Ⅱ3期以降のものが目立つ。遺物帰属時期の数値割合で見ると、150ページで示したように、Ⅱ3期からV期までほぼ一定量の土器出土が見えるが、実際の土器群のまとまりとしては、Ⅱ3期～Ⅲ期とⅣ2新期～V2期にピークがあるように感じる。ビットや包含層で図示できた土器も、この2時期が中心で、両時期とも、坏蓋転用碗をもつ事例が目立つ。Ⅱ3期～Ⅲ期は、これに圈足円面観が定量ともない、朱墨碗も少ないながらも確認される。Ⅱ1期以降、転用碗と定製碗の出土は見えるが、出土量から見て、Ⅱ3～Ⅲ期はそのピークであり、文書行政に携わる人間が滞在する集落であったことを物語る。当期の墨書土器が皆無に等しい状況からも、その墨磨り行為が祭祀的な側面というよりも、行政的な側面の高さを物語ろう。

Ⅳ2新期～V2期の土器は、多様な貯蔵具や多くの小瓶出土、そして墨書土器が当遺跡の中で最も盛んである点を考え、当期の土器に多く見られる転用碗や転用墨溜め容器使用は、祭祀的側面で理解すべきだろう。このV期を境に、当集落は様相を大きく変えていった可能性もあり、次回の報告で述べる、仏堂的な四面庇付き建物や大型の井戸、そしてそれを囲むように出土する油煙灰付着食膳具の存在などは、関連性が強いものと考えられる。

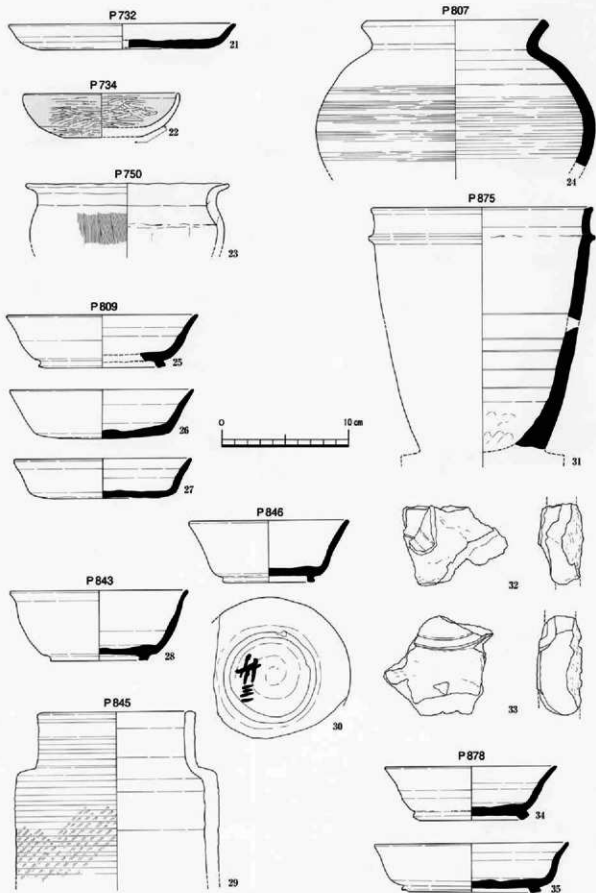
他の出土品として注目されるものには、61の片口鉢と64・65の小型平瓶、68の円面観、そして69～72の貯蔵具専用焼台や32・33・73～75の須恵器室内置き台塊などの須恵器室関連遺物がある。また、19の小破片だが、三彩輪陶器の小型短頸壺の胴部片であり(写真85)、V期頃の仏堂的建物や井戸等の祭祀に伴う可能性がある。

61の片口鉢は器形から見て、体部外傾器形を呈する平鉢形態の鉢Cと考えられ、片口の付くタイプは南加賀窯産では稀である。64・65の小型平瓶は南加賀窯産で、器形からⅡ3期～Ⅲ期頃のものと思われる。定製碗や転用碗の出土が多いⅡ3期～Ⅲ期に位置づけられるものであり、水筒として使用されたものだろう。68は能美窯産の圈足円面観の脚部欠損する破片で、視部の器内薄い環形を呈す小型品である。脚部は略方形のスカシをもち、観面に内堤が付く有堤式である。観面の磨耗は顕著で、墨痕も残り、観面裏にも墨痕がある。

69～72の貯蔵具専用焼台と32・33・73～75の須恵器室内置き台塊は、須恵器室関連遺物に性格づけられるものである(写真56～65)。貯蔵具専用焼台は体部直立器形のものが多く、71は内傾するタイプである。いずれも南加賀窯産でV期頃のものと考えており、須恵器室使用の置き台塊もほぼ同時期と見ている。置き台粘土に

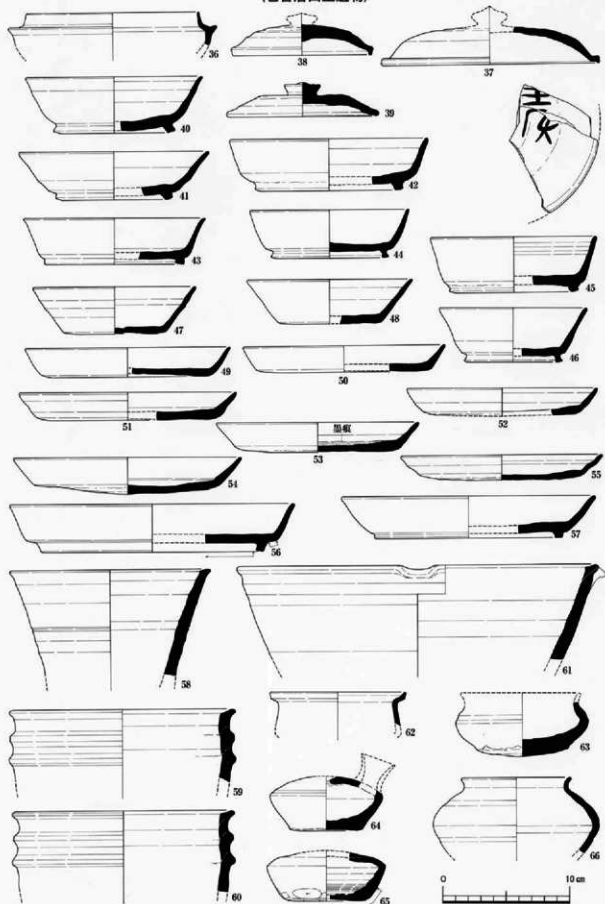


第147図 古代ビット・包含層出土遺物1 (5と15のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第148図 古代ビット・包含層出土遺物2 (全てS=1/3)

〈包含層出土遺物〉



第149図 古代ビット・包含層出土遺物3 (全てS=1/3)

付着した焼台片や塗り込められた須恵器片の器内などから、V期以降のものとして判断しており、全てとは言わないが、他の地区で出土する専用焼台も含めて、比較的短い期間、V期頃を前後する時期に捨てられたものと考えられる。このような遺物出土は単に偶発的なものではなく、その背景に当地での須恵器出荷工程に伴うような選別作業が行われた可能性を考えたい。Ⅱ2期頃に当集落内またはその近傍で行われていた土師器生産が、Ⅱ3期以降、南加賀窟へと移動するが、V期になると再び土師器生産が小規模ながら開始された可能性があり、この須恵器出荷作業とあわせて、南加賀窟の土師器・出荷工程の一部が当集落に割り当てられた可能性がある。なお、69に示した厚手で開く器形のあるは窯道具の一種と考えているものである。須恵器の酸化焼成で、7世紀の須恵器窯に伴う可能性もある。

b. 土師器及び土師質土製品

ビット、包含層より出土する土師器、土師質製品は、破片としては須恵器の量を凌ぐほど出土しているが、図化できるような遺存状態のよいものは少ない。よって、注目される遺物のみを取り上げることとする。

まず、赤彩貯蔵具として、11の鉄鉢形と77の小型壺を取り上げる。鉄鉢形は体部から口縁部へ内湾する径の小さなもので、口縁部内へ傾面を持つものである。ミガキ調整などは見られず、赤彩塗布するのみである。77の小型壺は破片出土のため、瓶形となる可能性もある。作りは雑ではないが、ミガキ調整は見られない。

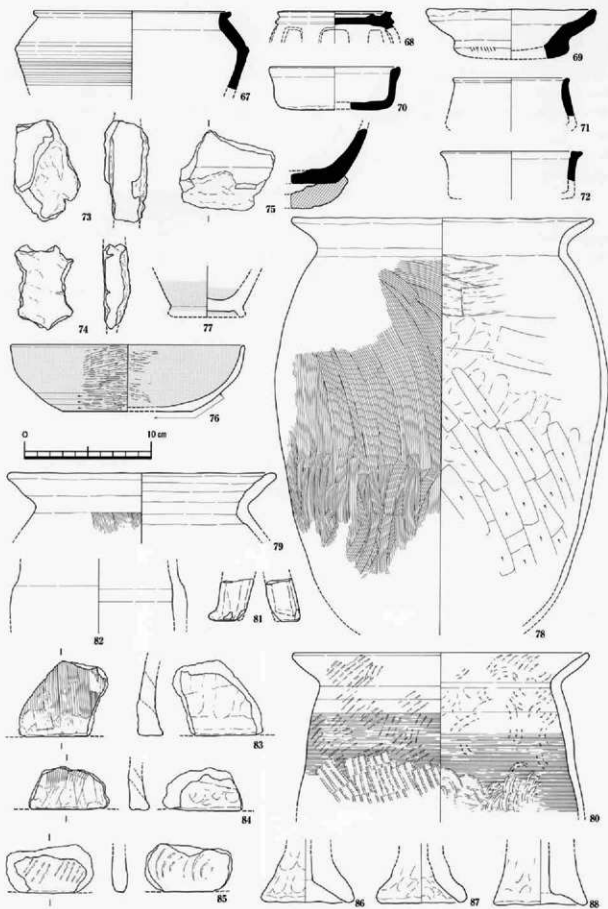
次に、煮炊具だが、3と79の丹波系煮炊具、17と80の1次叩き成形を行う長胴釜を取り上げる。丹波系煮炊具は頸部屈曲の強い胴張り気味の長胴釜で、口縁部内面のロクロヒダ状の段を特徴とするものである。丹波地域の由良川流域に放地を求めた土師器煮炊具で、胎土が地元産であることより、丹波系移民が放地の技法に基づき製作した煮炊具と位置づけているものである。当遺跡ではⅡ2期からⅡ3期に顕在化する煮炊具である。

叩き成形を伴う長胴釜は、口頸部まで叩き成形痕跡を残すもので、頸部「く」字状を呈し、口縁部は丸くおさめる。両者とも器形、技法ともに共通性が高く、ほぼ同時期に位置づけられるものと見るが、17のやや薄手で1次成形後にナダ調整の入るものは地元産胎土、80の厚手で叩き成形後にカキ目調整を施すものは南加賀窟産胎土を持つ。叩き成形の朝鮮系軟質土器生産が額見町遺跡周辺から南加賀窟へと移行する段階の製品と考えられる。

次に、土師質製品についてだが、83～85の竜形土製品、29・82の円筒形土製品、86～88の支脚形土製品など、ここでは煮炊具用関連の製品を取り上げるが、他に、管状土錘や馬形土製品の脚部片が出土する。

竜形は下端部のみ破片を図示した。83・84は外面ハケ目調整で仕上げるもの、85は叩き成形痕跡を残すもので、内面に同心円状で具痕が残る。前者は地元胎土、後者は窯場A類胎土で、いずれも内面スス痕跡や外面被熱赤化痕跡を残すものである。円筒形は、ビット出土の29が遺存度よい製品である。外面は叩き成形後のカキ目調整、内面はナダ調整のみで仕上げる、口縁部有段式のもので、口縁部以外の内面に広くススが付着する。外面の一部にスス付着が見られるが、被熱を受けて赤化したような痕跡はなく、この点は竜形とは異なる痕跡である。82にはスス等の付着はないが、円筒形土製品の多くはこのような内面スス痕跡が付くものと言え、その程度は竜形に近い。ただ、竜形が直接火のあたるといった形で使用されていたのに対し、円筒形は直接火を受けることは少なく、内側に煙が充満する状況、つまり煙突での使用が想定されよう。支脚形は今回報告地区では出土が多く、下端部の若干裾広がりがとなる中央に太い円孔をもつものである。土錘のように棒に粘土を巻き付けて手づくね成形し、その上下端を裾広がりに揃い出してから作り上げるものが主体的であったと考えられる。支脚形はいずれも顕著に被熱赤化しており、カマド支脚として日常的に使用されていただろう。

なお、今回の報告地区からほどの遺構からも多くの焼成粘土塊が出土したが、そのほとんどは焼土塊的なものであり、その性格を明確に示すような痕跡は得られなかった。なかには土師器焼成に関連するような焼成粘土塊A類とする窯道具的なものも出土したが、91～93に取上げた焼成粘土塊は、土師器焼成の覆い天井片としての焼成粘土塊B類に相当する(望月精司2005「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術」[窯跡研究]創刊号、窯跡研究会)。いずれの粘土塊も大きく平板な塊が細かく割れたものであり、上下2面をもつ以外は破面で構成される。全てC地区の38Grより出土しており、まとめて捨てられていたことが分かる。これらは砂粒をあまり含まない地山と同じような黄褐色系土が酸化焼結したもので、焼きは比較的よいが、土器のような焼結状態ではなく、脆い。片側(A面)は平滑で酸化被熱した状態、その反対側(B面)は凸凹で繊維状圧痕をもち、黒く還元する。B面が覆い天井の内側、A面が覆い天井の外側にあたると見ている(写真67・68)。古代土師器焼成において行われる、稲藁等の草燃料で覆って野焼き焼成する方法、覆い型野焼きに伴うものであり、覆い天



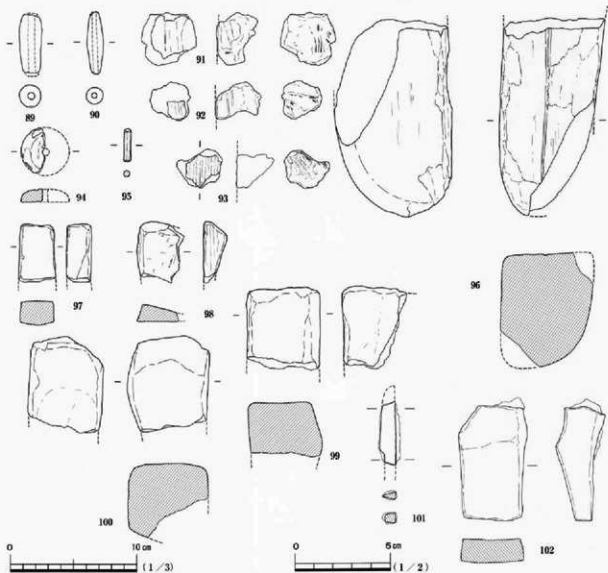
第150図 古代ビット・包含層出土遺物4 (全てS=1/3)

井塊と位置付けできるものである。南加賀窟での古代土師器焼成坑に伴って出土することは極めて稀であり、それ以前の7世紀代の土師器焼成に伴う可能性が高いと考える。

c. 石製品及び鉄製品

石製品は、砥石と石製紡錘車、管玉状製品を図示した。砥石は多数出土しているが、大型の有溝砥石96のみを取り上げる。砂岩質のもので、砥面を3面持ち、その中で最も平滑な面の中央に1本の溝が抉り込まれている。溝幅3～5mm、溝深1.5mm程度のもので、玉砥石として使用した可能性がある(写真90)。この砥石に関連するかは不明だが、一つのグリッドを挟んで、太さ5mmの断面多面体を呈す棒状石製品95が出土している。白色凝灰岩質のもので、管玉状に柱状加工した未製品である。両者とも古代に伴うものであるかも不明な出土品だが、古く位置付ければ、縄文時代に遡る可能性がある。石製紡錘車94は扁平形状を呈す凝灰岩質のものである。小さな欠けを多数持つ半完形品で、摩滅も見られる。

鉄製品は、鎌、棒状鉄製品、板状の未成品を図示した。鎌101は長頸鎌の刃部から施被部分にかけてと思われる破片である。刃部は断面三角形を呈す片刃形態で、基部は正方形を呈す。刃部が長いために刀子の可能性もあるが、基部断面が正方形であったので、長頸鎌とした。棒状製品15も長頸鎌の基部の可能性が高いものである。断面方形で先端に向けて細くなるのは釘とも思えるが、先端に向けてやや断面長方形となっており、長頸鎌と理解した。その他は鍛造未製品で、加工途中の廢棄品と思われるものである。5は正方形の板状のもの、102はやや台形呈す厚手のものである。



第151図 古代ピット・包舎層出土遺物5 (101・102のみS=1/2、他は全てS=1/3)

第3節 中世の遺構出土遺物解説

ここでは、中世遺構より出土する遺物について述べるが、古代の堅穴建物や土坑の埋土層に混在するような遺物及び包含層から出土する遺物についてもまとめて述べる。当期の遺物のほとんどは底部糸切りするロクロ成形の土師器食膳具で、これに少量の土師器鍋や白磁碗、灰胎陶器碗で構成される。1.500点近くの破片出土量があるが、遺構としてまとまったものは少なく、図掲載した土坑出土が大半を占める。中世に位置づけられる土坑は5基で、そこから約530点が出土するが、他のものは古代遺構埋土に混在するか、ピット、包含層から出土している。古代遺構混在遺物は、堅穴建物56点、土坑227点、掘立柱建物34点、溝状遺構及び土器溜まり89点であり、ピット、包含層からは575点が出土する。以下に個別遺構出土の遺物説明を行う。

第1項 中世土坑出土遺物

今回報告の区域では、定量の土師器食膳具を出土する埋納土坑が確認されている。数は多くないが、SK110、SK114、SK115はそのような性格の土坑であり、S188上層土坑とした遺構からもまとまった土師器食膳具が出土する。また、「顔見町遺跡Ⅱ」で報告漏れとなったSK142に関しても、一括性高い土師器食膳具が出土しており、今回の報告で述べておきたい。

1. SK110 出土遺物

小型の土坑で、土師器食膳具が55点出土している。内黒碗の小片が1点ある以外は、全て通常の土師器焼成のもので、地元A類胎土（HA類）の平底碗と平底小皿で構成される。柱状高台の出土は確認できておらず、内黒製品も少ないなど、比較的シンプルな組成を持つ。図示したように、完形か略完形の平底小皿5点と半完形の平底碗2点が埋納されており、碧玉製の管玉がその食膳具に添えられていた。管玉（8）は濃緑色呈す硬質の碧玉製で（写真89）、近接するS183から近似した石材をもつ柱状剥片が出土している。この材質の管玉については、他地域産（出雲）の可能性もあるが、古墳時代中期から後期に古墳の副葬品として当地域ではよく出土する材質のものであり、柱状剥片の存在も含め、在地産の可能性を考えたい。出土の仕方が混在品のものではないため、古墳時代の古墳副葬品を再利用したものか、中世に伝世された副葬品と位置づけられよう。

図示した土師器小皿は、口径10cm前後、底径4.5cm前後、器高2.0～2.6cmを測る。体部開く器形のもので、底部糸切り痕をそのまま残すものである。口縁部がやや内湾して内側に肥厚する特徴を持つaタイプ（3～5）と口縁部の短く外反するが端部を薄くするbタイプ（6・7）とがあり、後者は前者よりもやや赤く発色する（写真92・93）。平底碗（1・2）もやや赤く発色するタイプで、糸切り底の底部から体部を薄く引き延ばし、碗形を呈すように作られている。古代の土師器碗器形の系統の中で位置づけられる薄手のものであり、中世Ⅰ～Ⅱ期のものとは発色や器形が異なる。平底碗の法量は口径12.6cm、底径5.2cm、器高3.5cm程度で、古代土師器焼成坑のSK146出土碗Aからさらに小型化したような法量を持ち、敷地天神山道路1号溝資料に併行するものだろう。田嶋編年の中世Ⅰ～Ⅱ期資料とされるものだが、三浦幸明Ⅲ区SK07に対比できよう。

2. SK114 出土遺物

小型の土坑であるが、土師器食膳具が119点出土している。内黒土師器が65点、通常土師器が54点で構成され、内黒土師器の比率が高い。内黒土師器は輪高台碗が70%、柱状高台碗が15%、柱状小皿が15%程度の破片数構成をもち、通常土師器は平底小皿7割、柱状高台小皿または碗1割、平底碗2割程度で破片数構成される。

図示したものは内黒輪高台碗と内黒柱状高台碗、内黒柱状高台小皿、通常平底小皿、通常柱状高台碗で、「顔見町遺跡Ⅱ」で報告したB地区上層土器溜まり出土の土師器群に共通する器形特徴をもつものが数多く確認される。

内黒輪高台碗は地元近郊産と想定するA類・B類胎土と北加賀（金沢）産と推察するE類とがある。A類胎土はミガキ調整を伴わない14と内面に粗いミガキ調整をもつ15とがあり、前者がA類胎土に通常見られる器形のものである。極めて低い貼付高台をもち、底面ナデ調整するもので、B区上層土器溜まりの黒輪碗a1類に類型付けられる（内黒輪高台碗a1類のことだが、これ以降で示す食膳具類型は器種名を略して記載するとともに、類型番号はB区上層溜まり分類図に基づく）。15も貼付高台の底面をナデ消すものだが、高台は比較的高く、碗形に立ち上がる体部器形はa2類に該当しよう。E類胎土の16は内面ミガキ調整を丁寧に施すもので、体部が碗形となる。底面が剥落して調整の確認はできないが、底面中央が突出する形状は北加賀地域特有の菊花状掻き出し高台技法（底面中央から放射状に掻き出した粘土で高台を積み出し成形する技法、望月精司「古代末期における土師器

生産形態の変質」〔北陸古代土器研究〕第7号 北陸古代土器研究会、1997年）によった可能性が高い（写真95右）。金沢市戸水ホコダ遺跡SK70で出土するものに器形、技法ともに近似している。内黒柱状高台碗17はB類胎土で、体部碗形を呈し、内面ミガキ調整を伴わないロクロ成形のままのものである。薄手作りのもので、内湾する器形は黒輪碗a2類に近い。内黒柱状高台小皿18・19はA類胎土で、体部はやや閉き気味に作られる浅い椀器形のものである。内面ミガキ調整はなく、19の内底面中央には底部粘土円柱の粘土歪みに伴う凹みがある。

通常土師器は平底小皿と柱状高台碗のみ図化できた。柱状高台碗はE類胎土で、体部が薄く開く器形をしている。平底小皿は13のC類胎土以外はA類胎土で、11の口縁部上端を揃み上げて面形成し、厚手に作る特徴は土平皿a2類に類型付けられよう。10も口縁部形態はよく似ておりa類系統と言えるが、薄手で扁平な器形を呈しており、前回報告には該当する類型はない。これに対し、12は体部碗形に立ち上がり口縁部外反器形で、b1類に該当する。C類胎土の13は全体的に厚手で口縁部内端に沈線状のくぼみを持つe2類に該当する。このような器形も先述した戸水ホコダSK70の併行期とされる戸水大西SD166から出土しており、出越編年Ⅲ3期（出越茂和「北陸古代後半における陶皿食器（後）」〔北陸古代土器研究〕第7号、北陸古代土器研究会、1997年）に、田嶋編年では中世1-1期に併行する可能性を持つ。

	地元近郊系(A・B胎土)	地元高沼系(D胎土)	搬入系(C・E胎土)
平底碗		b1 b2 b3 c1 c2 c3	(+)
柱状高台碗			(+)
輪高台碗			
平底小皿	a1 a2 a3 a4 b1 b2 b3	c1 c2 c3 c4 c5 d1 d2	e1 e1 e2
柱状高台小皿			
内黒輪高台碗	a1 a2 a2	b b	c1 c2
内黒柱状高台碗			

第152図 B地区上層土器溜まり出土土師器類型図(S=1/5、「額見町遺跡Ⅰ」)

3. SK115 出土土物

大型土坑から土師器食膳具が213点出土している。通常土師器が157点、内黒土師器が55点で構成され、通常土師器は平底小皿が35%、柱状高台小皿または椀が15%、平底椀が50%、有台椀が僅少程度の破片数構成、内黒土師器は輪高台椀が80%、柱状高台椀が10%、柱状小皿が10%程度の破片数構成をもつ。

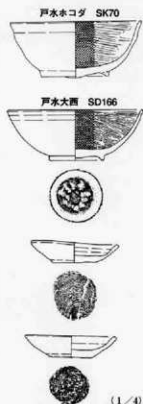
図示したものは通常土師器の平底椀と柱状高台椀、平底小皿、柱状高台小皿、内黒土師器の輪高台椀と柱状高台椀で、『額見町遺跡Ⅱ』で報告したB地区上層土器溜まり出土の土師器群に共通する器形特徴をもつものが多く確認されるが、新規に確認される器形も多い。

通常土師器では平底椀で残りのよい資料が多い。平底椀は地元A類胎土と地元周辺D類胎土とで構成され、A類胎土(20~23)は体部輪形を呈す比較的底部が厚手のものとなる。B区上層土器溜まりの土平椀b3類に近似しているが、底部厚手で外面口クロヒダの目立つ特徴はa類的でもある。一応、新規にd類と分類しておきたい。D類胎土(24・25)は小型底部をもつ椀器形のもので、c3類に近似する。25は外面火色を呈し、薄手である点も共通するが、24については体部がやや厚く、内面にラセン状の工具ナデを伴うなど相違点もある。同じ系統だが、c4類として分けておきたい。柱状高台椀26は体部が強く開く器形で、皿器形を呈すものである。A類胎土のもので、これ以降に定量存在する新器種と言える。類似する器形のもので白山市三浦半明遺跡Ⅲ区SK10で出土している。土師器小皿はA類胎土、B類胎土、D類胎土があるが、A類が大半を占める。類型はあまりまとまることなく、A類胎土のものは、B区上層土器溜まりに確認される口縁部端面形成の土平皿a1類(31)、底径大きく口縁部外反器形のb1類(30・32)、底径小さく突出気味のb2類(34)、b2類を扁平化したb3類(33)、また、29についてもひしゃげて底部突出が明瞭でないが、b2類の輪軸に入るものと考えられる。27・28はB区上層土器溜まりで確認できなかった器形のもので、f類としておきたい。B類胎土(35)は底部小さく突出気味のb2類で、A類胎土と同様である。D類胎土は底部が厚く突出する器形のもので、c1類に似るが、口縁部内面に沈線状の窪みをもたないタイプで、c1'類としておきたい。柱状高台小皿は体部深碗形の37と体部皿形の38とがある。前者はA類胎土、後者はD類胎土で、38の皿形は26の柱状高台椀とともに当期に出現する新型器形のもと言える。

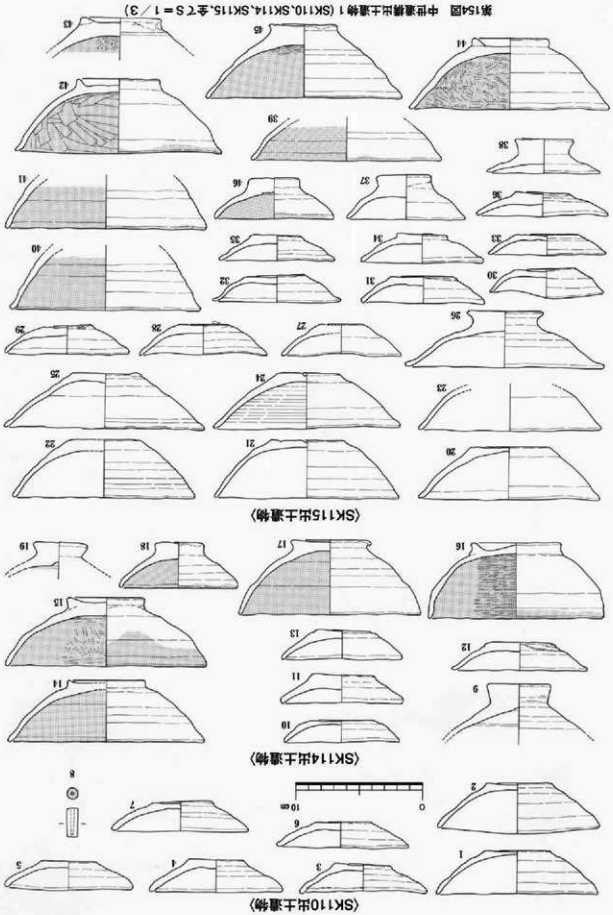
通常土師器がA類胎土では占められるのに対し、内黒輪高台椀ではD類とC類が定量存在し、A類胎土と拮抗した割合となる。A類胎土は内面ミガキ調整を施さない黒輪椀a類系統のもので、39はa1類、40・41はa2類に分類される。D類胎土は薄手で高台の作りの丁寧な貼付高台の42と底部厚手で高台の低い43とがある。42は全体的に薄手作りで口縁部外反する器形を持ち、内面にはヘラナデ調整を全体に施す。B地区では確認できなかったタイプであり、d類としておきたい。43は内面ミガキ調整の入るもので、黒輪椀b類としていいだろう。両者とも底面ナデ消しを行うものである。C類胎土は内面全体に丁寧なミガキ調整の入る体部外傾器形のものである。低い貼付高台を付すもので、底面には糸切り痕を残す。北加賀産の内黒椀はSK114で述べたような菊花状掻き出し高台技法によるものが特徴的と言えるが、貼付高台のものも定量存在する。菊花状高台のものが深碗的な器形を呈するのに対し、貼付高台のものは体部開き気味で口クロヒダの顕著なものも多く、北加賀産の一つの類型と位置づけられる。このタイプについてはe1類としておきたい。輪高台椀以外は柱状高台椀と柱状高台小皿が出土している。いずれもA類胎土で、椀45は体部薄く碗形に立ち上がる器形が平底椀d類の器形に似る。内面は平滑に仕上げられており、底面のみミガキ調整が施されている。小皿46は浅碗形の器形で、B地区上層土器溜まりの通常土師器柱状高台小皿のA類胎土に見られる器形のものである。

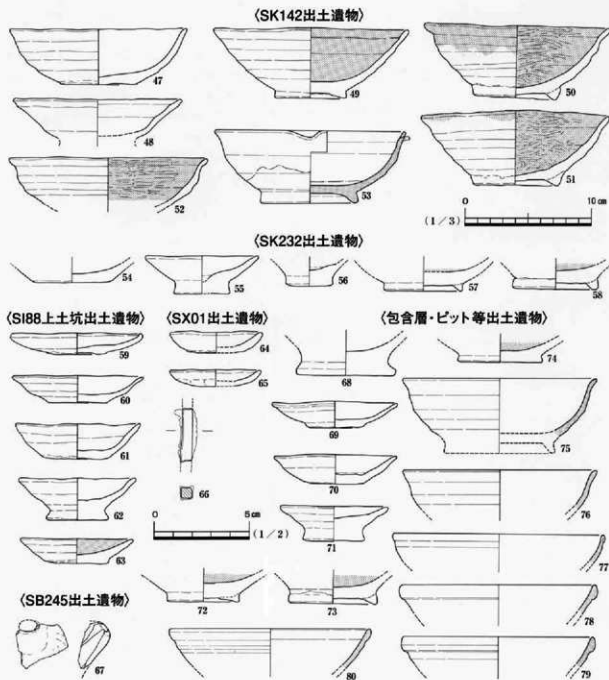
4. SK142 出土土物

竪穴建物S181の埋土中に存在する土坑で、中世の土器よりも古代Ⅳ期前後の土器の方が多い。ただ、古代のものはほとんどが破片であり、中世のような完形に近いものは出土していない。中世土器は出土量が少ないものの、一括性高いものであり、内黒土師器20点、通常土師器19点、灰輪陶器9点で構成される。



第153図 金沢のⅢ3期の内黒輪高台椀と小皿





第155図 中世遺構出土遺物2 (SK142、SK232、SI88 上土坑、SX01、SB245、包含層等、66のみ1/2、他は1/3)

通常土師器は体部内湾器形を呈する47の平底碗と体部皿形に開く器形の48がある。47はB類胎土のもので、口径14cm未満のやや小型法量を測り、体部内湾器形を呈すなど、これまで述べた土師器やB地区上層土器溜まりでは確認できなかった器形のものである。金沢市戸水大西SD166で出土する平底碗に器形が似ており、B地区上層土器溜まりに主体的な体部開く大型法量のものよりも古く、中世1-I期に位置づけられる可能性が高い。48はA類胎土で、体部器内薄く口径が小ぶりのものである。これについても平底碗と位置づけられる。

内黒輪高台碗は、49の内面ミガキ調整を施さないものがA類胎土、50～52の内面ミガキ調整を丁寧に施すものがC類胎土である。A類胎土は低い貼付高台を付すもので、底面をナデ調整し、小さな底部から体部へ碗形に開く器形を呈する。B地区上層土器溜まり黒輪碗a1類に類型付けられる。C類胎土は底面糸切り痕を残す貼付高台のもので、体部のロクロヒダや全体的な器形などSK115で黒輪碗e1類としたものに近似する。ただ、高台径はe1類より大きく、口縁部が外反する特徴をもつ点など古相を呈し、e2類として別に類型付けておく。

灰軸陶器有台碗は1個体がほぼ完成形で出土する(写真101)。口縁部の一箇所を片口状に窪ませたもので、東濃窯産と推察される。軸は内外掛け掛けのもので、底面には施軸されていない。体部は碗形を呈すが口縁部は外反気味となっており、碗Cに類型付けられるものと考えられる。高台は比較的高く踏ん張る形態を残すが、底面には糸切り痕を残すなど、明和27号窯式期に位置づけるのが妥当だろう。当期は11世紀2/4頃に位置づけられるものだが(尾野善裕「東濃窯灰軸陶器編年小考」『岐阜史学』第96号、1999年)、内底面に磨耗痕があり、時間的経過も想定される。当土器群に確実に伴う灰軸陶器であり、年代比較の根拠資料になるものと考えられる。

5. SK232 出土遺物

唯一F地区に位置する土坑で、中世土器が9点出土するが、古代土器の方が55点と多い。ただ、古代土器に時間的なまとまりはなく、中世土坑として扱った。柱状高台土器器をはじめてとして、通常土器器平底碗や内黒輪高台碗などが出土する。柱状高台小皿の体部開く器形や輪高台碗の高台器形などから、中世1-Ⅱ1期に位置づけ可能と判断される。

6. SI88 上層土坑出土遺物

土坑として認識できない堅穴建物埋土に混在したものも含まれるが、中世土器が134点出土している。通常土器器では平底碗、輪高台碗、平底小皿、柱状高台小皿、小型鍋が、内黒土器器では輪高台碗、柱状高台碗があり、多器種に及ぶが図示できたものは小皿類のみである。B地区上層土器器溜まりに類似する器形のものがあり、59は土平皿a1'類に、60は土平皿b1類に、61は土平皿d1類にそれぞれ該当する。62の浅碗器形呈す柱状高台小皿や63の内黒平底小皿もB地区上層土器器溜まりとほぼ同時期に位置づけられる。

第2項 その他の遺構及び包含層出土遺物

中世の集石遺構であるSX01、中世掘立柱建物のSB245、ピット・包含層等出土遺物の順で述べる。

1. SX01 出土遺物

出土した中世遺物は、図示した中世土器器小皿2点と釘状の棒状鉄製品1点のみである。小皿は非口縁成形のもので、口径は7cm程度と小型である。扁平な器形をしており、胎土は地元周辺としたD類胎土に分類できる。7cm前後の法量と扁平器形から判断して、藤田邦雄氏編年のⅣ期(14世紀後半~15世紀中頃、藤田邦雄「加賀における様相-土器器-」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会、1992年)と考えておきたい。

2. SB245 出土遺物

掘立柱建物の建物形式からすれば、中世に位置づけられるものだが、出土する遺物の大半は古代に位置づけられる土器であり、中世と位置付けできたものは灰軸陶器片と土器器平底碗片、内黒土器器碗片の3点のみである。土器器は小片のため図示できなかったが、灰軸陶器については注口部を図示した(写真102)。東濃窯産の注口瓶と思われ、軸は薄くつくか無軸に近い。古代注口瓶とは形態が異なり、時期、器形等に判断根拠を欠く。

3. ピット及び包含層出土遺物

古代遺構の埋土に混在するものやピット出土、包含層出土のものを含めて、約980点の中世土器器が出土するが、ほとんどは小片であり、図示できるような完存度高い中世土器器はここにあげた数点のもののみである。ただ、中国産白磁と灰軸陶器については破片でも図化しており、概要を述べておきたい。

先述の遺構出土品を除外して、古代遺構混在なども含めて、中世土器器の時期に位置づけられる陶磁器類を集計すると、灰軸陶器片が6点、中国産白磁片が11点となる。灰軸陶器の75・76は東濃窯産と思われる碗で、どちらも施軸は確認されない。体部が碗形に立ち上がり、口縁部で外反するもので、無軸である点から先述の明和27号窯式期に後続する西坂1号窯式期に位置づけられようか。白磁碗はいずれも口縁部破片で、幅狭の玉縁状口縁を呈す77と幅広の玉縁状口縁を呈す78・79、その中間の広さをもつ玉縁状口縁の80に分けられる。幅狭玉縁は軸に細かな貫入が入る陶器質胎土のもので、山本信夫氏の大宰府白磁分類Ⅱ1類に、幅広玉縁は灰色系の厚い軸で、白色系胎土をもつ特徴から山本の白磁Ⅳ1類に該当しよう(山本信夫「大宰府白磁分類と編年(基礎編)」『石川県立埋蔵文化財センター研究資料』1993年)。いずれも山本C期とされるもので、11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる。80は硬質の胎土を持ち、軸色が水色系を呈すところから、山本の白磁Ⅴ1類の可能性もある。山本編年では山本B期、11世紀前半に位置づけられており、古手の中世土器器群に伴う可能性を持つ。

以上、中世土器器群については、古代Ⅳ期の土器器群とともに総括において編年案を提示するので参照されたい。

付表1 額見町遺跡Ⅲ報告区域出土古代遺物観察表

付表1 額見町遺跡Ⅲ報告区域出土古代遺物観察表

1. 竪穴建物出土遺物

遺跡番号	遺物種類	出土場所	品名	製造	年代	形状	時期	調査者	備考	写真番号
5380	1 土器-阿波骨	S3607号上段	11136, 黒灰, 高脚	高加蓋	5000-1良好	120	11-12			S3813
	2 土器-阿波骨	S3607号上段A	11123, 黒灰	高加蓋	25000-1点	20	11	阿ノケノ目, 内面ノケノ目, 内口ノ目	阿波骨製, 高加蓋	S3814
	3 土器-阿波骨	S3607号上段B	11157	高加蓋	25000-1点良好	135	11	内面ノケノ目		S3815
	4 土器-阿波骨	S3607号上段C(14号)ノ下層A	11134, 丹灰, 赤灰	高加蓋	75000-1良好	15	11	内面ノケノ目	内面ノケノ目, 高加蓋	S3816
	5 土器-阿波骨小器	S3607号上段D(15号)ノ下層A	11136, 黒灰	高加蓋	25000-1点	130	11-12	阿ノケノ目, 内面ノケノ目, 内口ノ目	内面ノケノ目, 内口ノ目	S3817
	6 土器-阿波骨小器	S3607号上段D(15号)ノ下層A	11134, 黒灰	高加蓋	5000-1点	170	11	阿ノケノ目, 内面ノケノ目, 内口ノ目	阿波骨製, 高加蓋	S3818
	7 土器-阿波骨小器	S3607号上段D(15号)ノ下層A	11136, 黒灰, 黒脚	高加蓋	5000-1点	10	11	阿ノケノ目, 内面ノケノ目		S3819
	8 土器-阿波骨小器	S3607号上段D(15号)ノ下層A	11136, 黒灰	高加蓋	75000-1点	120	11-12	阿ノケノ目		S3820
	9 土器-阿波骨A	S3607号上段D(15号)ノ下層A	黒脚	高加蓋	75000-1点	120	11-12	阿ノケノ目		S3821
	10 土器-阿波骨A	S3607号上段D(15号)ノ下層A	11208	高加蓋	100000-1点	10	11-12	阿ノケノ目		S3822
5381	11 陶器-阿波骨中	S3607-120+高加蓋+内口	11136, 黒灰, 赤灰	高加蓋	25000-1良好	65	8-9		使用痕跡, 残多量ノ赤灰	S3823
	12 陶器-阿波骨中	S3607-120	11136, 黒灰	高加蓋	10000-1点	14	8-9			S3824
	13 土器-阿波骨	S3607-120	高加蓋	高加蓋	75000-1点	60	12-13	阿ノケノ目, 内面ノケノ目	高加蓋	S3825
	14 土器-阿波骨小器	S3607-120	11136, 黒灰	高加蓋	10000-1点良好	10	12-13	阿ノケノ目		S3826
	15 土器-支那器	S3607-120	790	高加蓋	25000-1点	110	8-9	磨痕		S3827
	16 土器-支那器	S3607-120	高加蓋	高加蓋	25000-1点	110	8-9	磨痕		S3828
	17 陶器-阿波骨中	S3607-120+高加蓋+内口	S381, 赤灰, 黒脚	高加蓋	10000-1点	15	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3829
	18 陶器-阿波骨中	S3607-120	高加蓋	高加蓋	5000-1良好	15	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3830
	19 陶器-阿波骨小	S3607+高加蓋	11136	高加蓋	500-1点	24	8	阿ノケノ目	磨痕	S3831
	20 陶器-阿波骨中	S3607-120	11123	高加蓋	25000-1良好	15	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3832
5382	21 土器-阿波骨中	S3607-120	C上層	高加蓋	10000-1点	15	12	阿ノケノ目	磨痕	S3833
	22 土器-阿波骨	S3607-120	11136	高加蓋	25000-1良好	15	8			S3834
	23 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋	11136	高加蓋	5000-1点	16	8			S3835
	24 土器-阿波骨	S3607-120	11139	高加蓋	25000-1良好	16	12-13			S3836
	25 土器-阿波骨	S3607-120	11133, 赤灰	高加蓋	500-1点	8	12-13		使用痕跡	S3837
	26 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋	11136	高加蓋	10000-1点	10	12-13			S3838
	27 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋	11136, 赤灰	高加蓋	25000-1良好	10	12-13			S3839
	28 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	10000-1点	15	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3840
	29 土器-阿波骨	S3607-120	11136	高加蓋	10000-1点	15	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3841
	30 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136, 赤灰, 黒脚	高加蓋	75000-1点	15	12-13	阿ノケノ目, 内面ノケノ目	磨痕	S3842
5383	31 土器-阿波骨	S3607-120	高加蓋	高加蓋	10000-1良好	10	12-13	阿ノケノ目	磨痕	S3843
	32 土器-支那器	S3607-120	7342	高加蓋	10000-1点	14	8-9	磨痕		S3844
	33 土器-支那器	S3607-120	11202, 赤灰	高加蓋	75000-1点	11	12-13	阿ノケノ目		S3845
	34 土器-支那器	S3607-120	11202	高加蓋	75000-1点	11	12-13	阿ノケノ目		S3846
	35 土器-長脚器	S3607-120+高加蓋+内口	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	15	8-9	阿ノケノ目, 阿ノケノ目, 阿ノケノ目	内面ノケノ目, 阿ノケノ目	S3847
	36 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136	高加蓋	75000-1点	130	8-9	内面ノケノ目		S3848
	37 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136	高加蓋	75000-1点	130	8-9	阿ノケノ目, 阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3849
	38 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136	高加蓋	75000-1点	130	8-9	阿ノケノ目, 阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3850
	39 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136	高加蓋	75000-1点	130	8-9	阿ノケノ目, 阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3851
	40 土器-阿波骨	S3607-120+高加蓋+内口	11136	高加蓋	75000-1点	130	8-9	阿ノケノ目, 阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3852
5384	41 土器-支那器	S3607-120	7346, 赤灰	高加蓋	75000-1点	115	12-13	阿ノケノ目		S3853
	42 陶器-支那器	C14-27+高加蓋	11122, 赤灰	高加蓋	10000-1点	2	11	支那器	磨痕	S3854
	43 陶器-支那器	S3607-120	高加蓋	高加蓋	25000-1良好	110	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目		S3855
	44 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	10000-1点	13	11	阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3856
	45 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	10000-1点	23	11	内面ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3857
	46 土器-阿波骨	S3607-120	11136	高加蓋	10000-1点	15	11	内面ノケノ目	阿ノケノ目	S3858
	47 土器-阿波骨小	S3607-120	11122, 赤灰	高加蓋	10000-1点	10	11	阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3859
	48 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	65	11	阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3860
	49 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	13	11	阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3861
	50 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	13	11	阿ノケノ目	阿ノケノ目	S3862
5385	51 土器-阿波骨小	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	25000-1点	45	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3863
	52 土器-阿波骨小	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3864
	53 土器-阿波骨小	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3865
	54 土器-阿波骨小	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3866
	55 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3867
	56 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3868
	57 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3869
	58 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3870
	59 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3871
	60 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3872
5386	61 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3873
	62 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3874
	63 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3875
	64 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3876
	65 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3877
	66 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3878
	67 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3879
	68 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3880
	69 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3881
	70 土器-阿波骨	S3607-120	11136, 赤灰	高加蓋	75000-1点	10	11	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	阿ノケノ目, 阿ノケノ目	S3882

遺物	発出・遺種	出土地点	法要	動土	色・境	形状	時期	調査等	備考	実測番号
S0232	E3	土師・浅鉢	S0232P1A	E160, 浅鉢	陶磁器	80788-2 浅鉢	1-30	V2-V3		S0232-6
	130	土師・浅鉢	S0232P1B	E154	陶磁器	125783-4 浅鉢	1-15	V1	ウツロコテ	S0232-12
	131	土師・浅鉢	S0232P1B	E160	陶磁器	125788-4 浅鉢	1-20	V1	ウツロコテ	S0232-11
S0233	132	土師・浅鉢	S0232P1A	E160	陶磁器	80788-4 浅鉢	1-20	V1	ウツロコテ	S0232-11
	137	土師・浅鉢	S0232P1B	-	陶磁器	125787-4 浅鉢	1-30	V1	ウツロコテ	S0232-14
	138	陶器・平口土師	S0232P2	E154	陶器	25275-1 土師	口縁部 2ヶ所		樽底部付・片・裏面削ぎ	S0232-1
S0234	139	陶器・平口土師	S0232P2	E162, 浅鉢	陶器	22747-2 土師	1-20	V2		S0232-1
	140	陶器・平口土師	S0232P2	E16+6+7	陶器	125790 浅鉢	破片	-		S0232-1
	140	土師・短脚土師	S0232P4	E121A, 浅鉢, 土師	陶磁器	80788-3 浅鉢	1-20	V2-V3	片・土師	S0232-1
S0235	141	土師・浅鉢	S0232P4	E158, 浅鉢, 土師	陶磁器	80788-3 浅鉢	口縁部 V2-V3	片・土師	樽底部	S0232-2
	142	陶器・平口土師	S0232P4	E113	陶磁器	80786-1 浅鉢	1-10	V2		S0232-1
	143	陶器・平口土師	S0232P4	E162	陶磁器	5737-1 浅鉢	破片	-	調査1	S0232-3
S0237	144	陶器・平口土師	S0237P1	E154, 浅鉢	陶磁器	5633-1 土師	3-6	V2	浅鉢・平口土師	S0237-3
	145	陶器・平口土師	S0237P1	E154, 浅鉢	陶磁器	25161-1 浅鉢	底片	V	土師	S0237-2
	146	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	25161-1 浅鉢	底片	V	土師	S0237-2
S0238	147	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	5737-1 浅鉢	1-25	V2-V3	浅鉢・土師	S0237-2
	148	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	80788-3 浅鉢	口縁部 V2-V3			S0237-2
	149	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	80788-3 浅鉢	口縁部 V2-V3			S0237-2
S0239	150	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	80788-3 浅鉢	1-30	V1		S0237-3
	150	土師・浅鉢	S0237P2	E154, 浅鉢	陶磁器	80788-3 浅鉢	1-30	V1		S0237-3
	152	土師・短脚土師	S0237P4	E121A, 浅鉢, 土師	陶磁器	10783-2 浅鉢	1-10	V2	ウツロコテ	S0238-1

3. 土坑出土遺物

遺物	発出・遺種	出土地点	法要	動土	色・境	形状	時期	調査等	備考	実測番号
S0306	1	土師・浅鉢	SK106 T1-1B・下層・土師	E160, 浅鉢, 土師	陶磁器	585-1 浅鉢	確定	E3	土師	S0306-5
	2	土師・浅鉢	SK106 F109+107 (転倒器)	E167, 浅鉢, 土師	陶磁器	28675-1 浅鉢	6.5	E3	土師	S0306-4
	3	土師・浅鉢	SK106 T1-1B	E160, 浅鉢, 土師	陶磁器	2276-1 浅鉢	1.5	E3	土師	S0306-4
	4	土師・浅鉢	SK106 T1-1B・119-123・142・143-151	E172, 浅鉢, 土師	陶磁器	585-1 浅鉢	3-5	E3	土師	S0306-4
	5	土師・浅鉢	SK106 T1-1B・151	E166, 浅鉢, 土師	陶磁器	585-1 浅鉢	1-4	E3	土師	S0306-7
	6	土師・浅鉢	SK106 F100・104・1194・下層	E167	陶磁器	4790-1 浅鉢	1-3	E3	土師	S0306-3
	7	土師・浅鉢	SK106 F93-94	E161, 浅鉢, 土師	陶磁器	1064-1 浅鉢	3-5	E3	土師	S0306-2
	8	土師・浅鉢	SK106 F52-74-99	E158, 浅鉢, 土師	陶磁器	577-1 浅鉢	0-6	E3	土師	S0306-9
	9	土師・浅鉢	SK106 T30-A土層	E146, 浅鉢, 土師	陶磁器	2876-1 浅鉢	1-3	E3	土師	S0306-10
	10	土師・浅鉢	SK106 T34-121-A・下層・土層	E172, 浅鉢, 土師	陶磁器	2875-1 浅鉢	1-3	E3	土師	S0306-11
S0307	11	土師・浅鉢	SK106 T34-121-A土層	E172, 浅鉢, 土師	陶器	1076-1 浅鉢	1-3	E3-V	土師	S0306-11
	12	土師・浅鉢	SK106 T30	E160, 浅鉢	陶器	25277-1 浅鉢	3-6	E3	土師	S0306-13
	13	土師・浅鉢	SK106 T37B	E160, 浅鉢	陶磁器	25275-1 浅鉢	3-4	E3	土師	S0306-14
	14	土師・浅鉢	SK106 F70	E141, 浅鉢	陶磁器	25277-1 浅鉢	確定	E3	土師	S0306-17
	15	土師・浅鉢	SK106 F72-74土層・A土層	E148, 浅鉢	陶磁器	80783-1 浅鉢	確定	E3	土師	S0306-18
	16	土師・浅鉢	SK106 T30B	E122, 浅鉢	陶磁器	10755-1 浅鉢	1-2	E3	土師	S0306-20
	17	土師・浅鉢	SK106 F41-C土層	E122, 浅鉢	陶磁器	95-4 浅鉢	3-2	E3	土師	S0306-19
	18	土師・浅鉢	SK106 F90-106-111・下層	E142, 浅鉢	陶磁器	2575-2 浅鉢	確定	E3	土師	S0306-15
	19	土師・浅鉢	SK106 T109-F1	E158, 浅鉢	陶磁器	576-1 浅鉢	1-4	E3-V	土師	S0306-23
	20	土師・浅鉢	SK106 T105-212-A土層・4+20	E151, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	確定	E3	土師	S0306-22
S0308	21	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147	陶磁器	576-1 浅鉢	1-15	E3		S0308-21
	22	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E148, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-20	E3		S0308-23
	23	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-6	E3-V		S0308-24
	24	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	25	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	26	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	27	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	28	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	29	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
	30	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0308-24
S0309	31	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	32	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	33	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	34	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	35	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	36	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	37	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	38	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	39	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3
	40	土師・浅鉢	SK106 T109-T41-A土層	E147, 浅鉢, 土師	陶磁器	576-1 浅鉢	1-1	E3-V		S0309-3

遺物番号	発祥・名称	出土地点	遺物	船主	色・質	規格	時期	調査等	備考	注目番号
SK220	SK220a-30-120-121-2	第1, 第115	銅製ナフシ		5191・青銅	1.4	1-12	銅製ナフシ		SK220a
	SK220a-47-A209*934	第17, 第19, 第4, 第105	銅製遺物		586・青銅	1.0	第			SK220b10
	SK220a-47-A209*934	第17, 第19, 第4, 第105	銅製遺物		586・青銅	1.0	第			SK220b10
	SK220a-50-08	第10	銅製A1		757308・青銅	1.4	第	第17号・第27号・第105号	銅製金具	SK220c1
	SK220a-50-08	第10	銅製A3		157307・青銅	1.15	第2	内側ナフシ		SK220c2
	SK220a-50-08	第10	銅製A2		107304・青銅	1.20	第2	内側ナフシ		SK220c3
	SK220a-50-08	第10	銅製A3		157307・青銅	1.15	第2	内側ナフシ		SK220c4
	SK220a-50-08	第10	銅製A2		107304・青銅	1.20	第2	内側ナフシ		SK220c5
	SK220a-50-08	第10	銅製A1		757308・青銅	1.4	第			SK220c6
	SK220a-50-08	第10	銅製A2		107304・青銅	1.20	第2	内側ナフシ		SK220c7
SK231	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
	SK231a-1	第113・A227*962	銅製遺物		5191・青銅	1.4	第1	内側ナフシ		SK231a
SK232	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
	SK232a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK232a
SK233	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
	SK233a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK233a
SK234	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a
	SK234a-1	第111, 第123, 第128, 第129	銅製遺物		5191・青銅	1.0	第2	銅製ナフシ		SK234a

付表1 額見町遺跡群田原区域出土古代遺物観察表

遺跡番号	遺跡名称	所在地	遺物	出土	出土地	種別	時期	観察者	備考	写真番号
SK201	100 遺跡-母体中	SK201-3	SK201-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK201-1
	101 遺跡-子	SK201-4	SK201-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK201-2
SK202	102 遺跡-母体中	SK202-1	SK202-1	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK202-1
	103 遺跡-子	SK202-2	SK202-2	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK202-2
	104 遺跡-母体中	SK202-3	SK202-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK202-3
	105 遺跡-子	SK202-4	SK202-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK202-4
	106 遺跡-母体中	SK202-5	SK202-5	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK202-5
	107 遺跡-子	SK202-6	SK202-6	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK202-6
	108 遺跡-母体中	SK202-7	SK202-7	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK202-7
	109 遺跡-子	SK202-8	SK202-8	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK202-8
	110 遺跡-母体中	SK202-9	SK202-9	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK202-9
	111 遺跡-子	SK202-10	SK202-10	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK202-10
SK203	112 遺跡-母体中	SK203-1	SK203-1	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK203-1
	113 遺跡-子	SK203-2	SK203-2	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK203-2
	114 遺跡-母体中	SK203-3	SK203-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK203-3
	115 遺跡-子	SK203-4	SK203-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK203-4
	116 遺跡-母体中	SK203-5	SK203-5	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK203-5
	117 遺跡-子	SK203-6	SK203-6	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK203-6
	118 遺跡-母体中	SK203-7	SK203-7	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK203-7
	119 遺跡-子	SK203-8	SK203-8	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK203-8
	120 遺跡-母体中	SK203-9	SK203-9	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK203-9
	121 遺跡-子	SK203-10	SK203-10	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK203-10
SK204	122 遺跡-母体中	SK204-1	SK204-1	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK204-1
	123 遺跡-子	SK204-2	SK204-2	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK204-2
	124 遺跡-母体中	SK204-3	SK204-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK204-3
	125 遺跡-子	SK204-4	SK204-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK204-4
	126 遺跡-母体中	SK204-5	SK204-5	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK204-5
	127 遺跡-子	SK204-6	SK204-6	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK204-6
	128 遺跡-母体中	SK204-7	SK204-7	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK204-7
	129 遺跡-子	SK204-8	SK204-8	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK204-8
	130 遺跡-母体中	SK204-9	SK204-9	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK204-9
	131 遺跡-子	SK204-10	SK204-10	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK204-10
SK205	132 遺跡-母体中	SK205-1	SK205-1	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK205-1
	133 遺跡-子	SK205-2	SK205-2	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK205-2
	134 遺跡-母体中	SK205-3	SK205-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK205-3
	135 遺跡-子	SK205-4	SK205-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK205-4
	136 遺跡-母体中	SK205-5	SK205-5	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK205-5
	137 遺跡-子	SK205-6	SK205-6	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK205-6
	138 遺跡-母体中	SK205-7	SK205-7	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK205-7
	139 遺跡-子	SK205-8	SK205-8	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK205-8
	140 遺跡-母体中	SK205-9	SK205-9	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK205-9
	141 遺跡-子	SK205-10	SK205-10	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK205-10
SK206	142 遺跡-母体中	SK206-1	SK206-1	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK206-1
	143 遺跡-子	SK206-2	SK206-2	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK206-2
	144 遺跡-母体中	SK206-3	SK206-3	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK206-3
	145 遺跡-子	SK206-4	SK206-4	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK206-4
	146 遺跡-母体中	SK206-5	SK206-5	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK206-5
	147 遺跡-子	SK206-6	SK206-6	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK206-6
	148 遺跡-母体中	SK206-7	SK206-7	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK206-7
	149 遺跡-子	SK206-8	SK206-8	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK206-8
	150 遺跡-母体中	SK206-9	SK206-9	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物1	SK206-9
	151 遺跡-子	SK206-10	SK206-10	高加蓋	5995-1-高好	鏡片	100	野村一	遺物2	SK206-10

第IV章 総括

第1節 掘立柱建物に関する検討—額見町遺跡の田嶋編年Ⅰ～Ⅴ期までの特徴—

1. 方法と前提

ここでは、これまで報告してきた中（額見町遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）から、本遺跡の掘立柱建物の特徴を整理してみたい。検討する際に、明かにしなければならないのは、建物の時期である。時期を無視して、特徴を述べることは出来ないと思うからである。しかし、本遺跡だけに限らず、田嶋明人氏の北陸古代土器編年（以後田嶋編年と表記する）の編年細分に確実に当てはまるものは、むしろ少ないと言えよう。例えば、須置器出土がなく土師器煮炊具のみが出土し、Ⅱ2～Ⅲ期やⅡ～Ⅳ期といったような大きな範囲でしか捉えることができない場合がある。遺物混入の考え方として、遺構の埋没時に古い段階の遺物が混入する可能性は高いが、古い段階の遺構に新しい段階の遺物が入りにくいという考え²¹から、今回は、最も新しい時期の遺物を建物の時期として捉えている。また、著しい削平を受けた建物に多いが、遺物の出土していないものがある。このような場合、柱穴の土層断面で新旧を判断したほか、周囲の建物との関係、つまり同方位軸をもつ建物や、建物配置からの関係などを考慮して、資料として逃すことのできないしっかりした柱穴や並びをもつ建物を主体に、時期を判断している。以上のような方法で時期別にし、今回対象とする資料を決めたのである。また、今回対象とする資料は、例えば建物の桁行と梁行1本ずつのみが検出されている場合や、削平・破壊により建物の一部しか検出されておらず、本来の建物を復元できないものは除外した。すると田嶋編年Ⅰ期からⅤ期にまとまりが見いだされ、最終的に119棟という建物が抽出された。なお、Ⅴ期以降の建物については次回の検討に含めたいと考えている。

以上のようにして対象資料を時期別にし、抽出したわけであるが、実は1つの懸念がある。遺構の時期を判断する手掛かりに出土遺物が基本となることは紛れもないのであるが、本遺跡では、以下のような例が見られる。それは、中世に見られる低床タイプの総柱建物でありながら、古代の遺物しか出土しないといった例である。しかも時期の異なる古いものも混入する場合があり、出土遺物だけを時期の拠り所とすることに多少の懸念を抱いているところである。しかし、今回の検討では、未報告の掘立柱建物もあり、今後さらなる精査が必要と考えていることもあり、現段階での資料によりまず検討することを了承願いたい。

以上の方法で抽出した、残存状況の比較的良好な建物を対象資料として、建物の平面規模、平面形式、柱間寸法、掘方の形態をまず重視し、川畑誠1995「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物の平面プランを中心として—」『石川県埋蔵文化財保存協会年報6』で述べられた掘立柱建物の基礎的な整理・検討と比較してみたいと考えている。またこの他に、柱間寸法については規格性と、掘立柱建物の設置・廃絶の際に監督性²²がもたれているかどうかという視点からも検討してみたいと考えている。掘方規模については、径と深さが考えられるが、本遺跡の場合、上面削平されたものも多い。このことから、実際の掘り込みの深さは求められないと考えられるため、深さを重要視せず、浅くてもしっかりと掘り込まれているか否かという点を重要とした。上面削平のために、深さと同様に径についても本来の径ではない可能性が十分もたれよう。しかし今回は、検出時の径をそのまま生かすこととした。建物方位については、真北から東へ2°～43°を測り、各時期によって大きな変化が見られないため、今回検討範囲から外している。しかし、建物方位については再検討が必要だと考えている。

掘立柱建物の遺構記号はSBを使用した。建物時期については、田嶋編年Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ・Ⅳ期、Ⅴ期に準じて区分した。Ⅲ期・Ⅳ期をまとめた訳は、抽出された建物が少ないということが第一の理由で、また両者に大きな変化が見られないということからである。なお、田嶋編年については、遺物凡例の〔南加賀地域古代土器編年軸と歴年代観〕一覧を参照されたい。掘立柱建物の建物形式の種類から、本遺跡の掘立柱建物は、一般建物である欄柱建物と倉庫状建物に大別されると考えられる。倉庫状建物では、総柱建物と床東建物²³を含めており、総柱建物では、柱が葦盤目に配置されるものを「総①類」、中柱が検出されていないものを「総②類」とした。これについては理由付けも含め後の文中内で述べることにする。なお、以後文中では、倉庫状建物を倉庫と記述することにしたい。また、平面形式において「○×○」と表記した場合は「桁行柱数×梁行柱数」を表す。例えば、桁行3梁行2間の欄柱建物の場合は、「3×2」と表記する。

2. 額見町遺跡・掘立柱建物の時期別（田嶋編年Ⅰ～Ⅴ期）特徴

(1) 田嶋編年Ⅰ期の掘立柱建物

Ⅰ期にあげられる対象資料は19棟である。内訳は、掘立柱建物15棟で79%、総柱建物4棟で21%である。掘立柱建物では、南梁行のみ3間となるものを1棟含む3×2が4棟で、4×3が7棟、4×4が2棟だが内1棟は北梁行が2間となるものである。4×3や3×2に主体を置いて掘立柱建物全体の約7割を占め、総柱建物は2×2に限られる。また、近接棟持柱構造もしくは半独立棟持柱構造⁹⁾の建物が2棟と、南梁行に1本しか検出されていないが棟持柱建物になるものと考えている建物が1棟あり、これらは掘立柱建物に含めている。

〈建物面積〉建物面積では、15㎡以下のものが1棟、16～19㎡が総柱建物4棟全てを含む6棟、20～29㎡が6棟、30～39㎡が6棟、40～49㎡が1棟である。40～49㎡のものは、建物面積42㎡で4×3のSB184である。15㎡以下にあたるのはSB160であり、掘方は方形プランを呈すが、径は50cm程度と小さい、小型建物である。

〈柱間寸法〉掘立柱建物3×2では、桁間寸法平均は142～221cm、梁間寸法平均は156～230cmである。桁間寸法平均は、SB160が最小で142cmだが、これ以外は157・169・178・193cmと多様である。梁間寸法平均では、SB160が最小値156cmを測り、190cmが1棟あるものの200cmを超すものばかりである。最大の桁間・梁間寸法平均をもつのはSB117で、桁間寸法平均が221cm梁間寸法平均216cmである。

4×3では、桁間寸法平均125～175cm、梁間寸法平均150～176cmを測る。桁間寸法平均では、160cmが2棟、175cmが3棟あり、梁間寸法平均では、150cmが2棟、166cmが3棟と、同じ値をもつものが存在する。また、SB183のように4×3で桁間寸法平均125cm梁間寸法平均150cmと、柱間を短くもつものがあり、SB184も桁間寸法平均が150cmと短い梁間寸法平均は176cmである。4×4では、SB186の桁間寸法平均が180cmに対し梁間寸法の南梁行平均が92.5cmと非常に短く、SB40は桁間寸法平均が162cmだが、梁間寸法平均は118cmである。以上から、3×2よりも4×3以上の方が、桁行・梁行とも柱間寸法を短くする傾向があると言え、このような多柱形態¹⁰⁾のものがみられるのは当期の特徴といえる。

2×2総柱建物では、柱間寸法平均の桁間は210cmもしくは220cm、梁間は180～220cmを測る。

〈指数〉指数は、51～100を示して、指数71・73・80で2棟ずつの重なりが見られるものの、広い分布をもつと言える。総柱建物2×2は、指数100に近い値を示し、最も指数の低いSB186は長細い建物となっている。

〈掘方の形態と径〉掘方については、方形採用しているものが総柱建物2棟を含め8棟で42%を占め、円形も8棟で42%、この他に方形と円形の両方を採用するのは3棟である。掘方径は、56～65cmが主体で全体の47%を占め、46～55cmと66～79cmが各々26%である。SB182は方形掘方をもつ4×3の面積32㎡の建物だが、掘方径は50cmを主体とした小型部類に入るものである。SB25は同じく4×3の面積35㎡を測る建物で、掘方には円形を採用し径は72cmを測る。また、SB184はP9のみ方形を呈すが円形を採用したものと捉えている建物で、SB182よりも面積は大きく42.4㎡だが、掘方円形径は60cm主体である。これに比べSB115は2×2総柱建物で、面積19.36㎡であるが、掘方には方形を採用し、径は72～80cmを主体に掘り込まれている。

また、方形・円形別に径を調べてみると、方形の径は48～80cm、円形の径は45～72cmである。方形の方が若干径を大きくもつのだが、最大径を持つのは72～80cmが主体のSB115（総）、次いで主体径72～80cmのSB120A（総）、これら以外のものは60cm以下となる。SB160は、3×2の13.55㎡という小型建物で、方形を採用しているながらも、径は48cmにとどまっている。このように、30㎡を超える建物であっても、方形や円形の両者を採用しており、その径はむしろ円形の方が70cmを超えるものが多い、または小型掘立柱建物においても方形採用する例がみられ径も小さいことから、方形掘方は建物規模に関係なく採用されたと考えられる。但し、方形を呈するものが多く、方形を斜めに配置するなどの現象がみられ、方形を意識したのではないかと考えている。

〈柱間寸法の規格性〉掘立柱建物は、どの柱もおおよそ相対する位置に柱を設置しているのだが、以下のような場合がある。それは、桁行と梁行それぞれの柱間寸法が同じ、若しくは、例えば桁行3間の中央部分を除いた両方の柱間が同じ寸法をもつといったような場合で、しかもきっちりと両桁行とも同様にどのような厳密さをもったものである。このようなものを仮に柱間寸法の規格性が高いと記してみたい。このようなものとして当期では、SB40・SB44・SB115（総）・SB25が挙げられるが、特にSB44やSB115（総）は深さもほぼ一定に保たれている。これら以外では、厳密な規格はないものの、ほぼ相対する位置に配置され、しっかりと掘り込まれた掘方をもつものは多い。また、この要素に付け加えれば、掘り込みで旧地形に添う深さをもつものや一定の深さ

をもっていないということも挙げられる。例えばSB182・SB184は、掘方の良好な配置と掘り込みをもつが、深さに対しては旧地形に添うものの隅柱のみが深いという点がある。また、SB113では比較的良好な配置ではあるがP9のずれをもち、深さについても、掘り込み自身はしっかりするが深さにばらつきがみられる。このように、柱間寸法に厳密な規格はないが良好な掘り込みと配置を有する掘立柱建物は、当期で6割を占めている。**〔監督性〕**設置・廃絶時の監督性としては、2つの観点から検討している。

1つ目は、柱次掘方の土層断面により、廃絶時の抜き取り方向が一定と判断されることや、設置時には掘方の形状がスロープや段を有し一定の方向から柱が掘り立てられたと考えられるものである。ただ、本道跡では柱の抜き取り痕跡をもつものが少ないという点があり、判断可能なものだけを挙げているので、情報量としては偏っているのかもしれない。2つ目は、掘方の配置時において、方形掘方の場合に掘方の外枠が完全に1本の線で揃っている場合があり、設置の段階で位置を統一している可能性である。しかし、本道跡の場合の殆どで、このような現象は一部に限られている。例えば12本の柱が方形プランで設置される場合に、左桁の外枠だけが揃っているが他は揃わないといった例や、右桁行の北側3本のみが完全に揃っているのに他はばらついているといったものである。このような現象は柱の位置を決めて掘方を掘削し始める当初は監督者がいたことを思わせ、その後監督者がいなくなったために掘方位置がばらついてしまったのではないかと予想している。

以上のような監督性を伺わせる建物としては、SB113が挙げられる。北梁行の3本のみ掘方ラインが揃う程度なのだが、この3本を基準として掘り込まれた可能性があろう。

〔小結〕掘立柱建物79%、総柱建物21%で構成される。掘立柱建物は $3 \times 2 \cdot 4 \times 3 \cdot 4 \times 4$ （梁行一方が2間となるものを含む）で、 $4 \times 3 \cdot 4 \times 4$ が掘立柱建物中の7割を占め主体をもちながら、古墳時代からの流れとされる棟持系建物も全建物で16%を占めていること、そして 4×3 の建物に限られる多柱形態の一定の存在が認められる。柱間寸法をこれに対し、 3×2 も3割の割合をもちながら、約半分に方形を採用する。但し、方形採用といっても配置に方形の意味が認められないものが多く、意識しただけと思われる。この掘方については、建物の約半数は掘方に方形を採用するが、建物規模に関わらず方形・円形を採用する。

県内での当時期は、田嶋編年Ⅱ期以降に普遍化する梁行2間を基軸とする新たな平面プランへの方向性が出現する（川畑1995）特徴があり、当道跡でも確認されたと考えよう。そして、梁行3間を基軸とする掘立柱体系（川畑1995）である古墳時代以来の平面形式があくまで主体をもち、両者が併存していたものと考えられる。また、大規模掘立柱建物はなく、20～30㎡代が主体で、最大36㎡であり、いかにも集落的な規模であるといえよう。なお、総柱建物は 2×2 に限られ、面積も15㎡前後と20㎡弱の4棟である。このような建物構成の中で、規格性を厳格に重視した建物は4棟あり、こういったものが当時期の主屋になるものと考えられる。また、僅かながら建物の掘立柱時に監督者がいたのではないと思われる建物が存在するものの、建物の極一部に限られるために、常時監督者はいなかったのではないかと推測する。

(2) 田嶋編年Ⅱ期の掘立柱建物

Ⅱ期にあげられる対象資料は52棟である。Ⅱ期では、当道跡で爆発的に掘立柱建物が増える時期である。このうち、田嶋編年Ⅱ期にあたる建物は10棟、Ⅱ2期にあたるものは23棟、Ⅱ3期にあたるものは15棟、以上いずれにも判断できないⅡ期とするもので対象から外すのは惜しい建物が4棟である。まずⅡ期全体で述べ、その後に、編年細分で違いがみられることのみ述べてみたい。

Ⅱ期の掘立柱建物は42棟で全体の81%、総①類とした 2×2 のベタ柱をもつ建物が6棟で11%、東柱1本ではあるが床東建物としたものが1棟で2%、一見掘立柱建物に見えるが総柱建物に匹敵する掘方形態をもつ総②類としたものが3棟で6%である。なお、総②類について詳細を記すと、 3×2 や 4×4 の平面形式で、掘方径が70～80cmと大きく、柱本数の割に面積が小さく柱間寸法も短いという特徴があり、1本のみ床東をもつものもある。通常の掘立柱建物とは考えにくいことから、住居というよりも倉庫として機能した可能性をもつと考えているものである。

掘立柱建物では、 3×2 が23棟、このうち南梁行の片方のみが3間となるものを1棟含む。そして、 3×3 が4棟、 4×2 が5棟、 4×3 が5棟、 4×4 が1棟、 5×3 が3棟、 6×4 が1棟であり、 3×2 が主体で55%を占める。倉庫では、総①類は全て 2×2 、総②類は、 3×3 と 4×4 と、床東建物の 3×2 である。この他に、Ⅱ2期に位置する棟持系構造物の1棟認められるが、これは掘立柱建物に含めている。

Ⅱ期の編年細分で見ると、Ⅱ1期で3×2が5棟、4×2が3棟、4×3が2棟であり、倉庫は検出されていない。Ⅱ2期では3×2が13棟、3×3が3棟、4×2・4×3がそれぞれ1棟、4×4は倉庫SB12を含め2棟、5×3が3棟である。3×2が全体の6割を占めて主体となり、1棟の倉庫が加わる状況である。Ⅱ3期では、2×2倉庫が5棟、3×2の倉庫1棟を含む5棟、3×3の倉庫1棟を含む2棟、4×2・4×3・6×4がそれぞれ1棟ずつで構成され、倉庫が半数を占め、圧倒的に数が増えたと言える。

なお、今回の対象資料から外したものの、特異ともいえる例がある。その建物はSB9で、Ⅱ期として位置づけられている7×2の掘立柱建物である。桁間10.9m梁行3.7m、面積40.33㎡、建物指数40の細長い建物である。柱間寸法の規格は極めて高く、桁間寸法平均は150cmが160cmに限られ、梁間寸法平均は185cmである。深さも梁行方向で旧地形に添って掘り込みをもつもの、ほぼ一定の深さを保つ。掘方は円形を呈し、径は70cmを主体に60～80cmの幅をもつ。このような非常に良好な建物なのだが、Ⅱ期に位置づけられる他の建物に比べ、この1棟だけが方位が全く異なったために、今回対象から外した。このような例があることだけ記述しておく。

(建物面積)Ⅱ期での建物面積では、掘立柱建物で16～19㎡が4棟、20～29㎡が22棟、30～39㎡が15棟、60～69㎡が1棟であり、20～29㎡が掘立柱建物全体の52%で主体、次いで30～39㎡が36%を占める。

倉庫では、15㎡以下のものが2×2の3棟、16～19㎡のものが2×2の2棟と総2類であるSB34と床東建物SB45の1棟で計4棟、20～29㎡は総2類であるSB11の1棟である。

Ⅱ期の編年細分では、Ⅱ1期では20～29㎡が6棟、30～39㎡が4棟のみで構成される。Ⅱ2期では、16～19㎡が3棟、20～29㎡が倉庫1棟を含む13棟、30～39㎡が6棟で構成される。Ⅱ3期では、15㎡以下では倉庫3棟、16～19㎡が倉庫4棟、20～29㎡が倉庫1棟を含む計2棟、30～39㎡が4棟、60～69㎡が1棟で構成されており、建物面積幅が増大し、小規模面積の倉庫群と比較的大型の建物群で構成される形となる。

(柱間寸法)柱間寸法の掘立柱建物3×2では、桁間寸法平均は140～226cm、梁間寸法平均は180～240cmを測る。実に多様な値だと見えるが、桁間寸法平均だけを見ると、同じ値をもつものは、173cmが3棟、186cmが2棟、193cmが2棟、206cmが3棟、210cmが2棟で、桁間寸法平均では180cmが3棟、210cmが2棟、220cmが2棟という具合に、何らかの法則が見いだせそうな重なりがみえる。但し、指数や編年細分で見ても大きな違いというものはない。しいていえば、桁間寸法平均値と梁間寸法平均値が誤差1cm以内で一致する値をもつものがみられるということで、SB48・SB189・SB94・SB49・SB5・SB6・SB85Bの7棟にあたる。しかし、指数も同じでなく、編年細分全ての時期に検出されるもの、この内4棟がⅡ2期のものである。ちなみに、このような桁行・梁間寸法平均の一致という現象は4×3に1棟確認できるだけである。なお、3×2での最大数値は、桁間寸法平均が226cm梁間寸法平均230cmのSB85である。3×3も、桁間寸法平均は180～213cm、梁間寸法平均は110～240cmと幅広い値をもつ。

4×2では、桁間寸法平均160～190cm、梁間寸法平均194～220cmを測り、4×3では桁間寸法平均168～195cm、梁間寸法平均143～160cmを測る。4×4はSB185で桁間寸法平均162cm梁間寸法平均は115cm、5×3では、桁間寸法平均が125～134cm、梁間寸法平均が150～163cmである。一連の値を見ていくと、3×2や3×3では桁間・梁間寸法平均とも200cmを超えるものがあるのに対し、4×2では梁間寸法で200cmを超えるものがあるもの、桁間寸法は200cm以内に収まっていく。これ以上の柱数になると桁間・梁間寸法平均が200cmを超えなくなる。そして、柱本数が増える程、柱間寸法平均値が短くなってゆく傾向にある。5×3に至っては桁間寸法を一段と短くもつ。しかし6×4では、桁間寸法平均が173cmに対し梁間寸法平均が160cmであり、以上のような傾向にはあてはまらない建物と言える。また、Ⅰ期に確認された多柱形態の建物は、当期ではⅡ2期までに限られ、Ⅱ3期になると見られなくなることも特徴と言える。

倉庫についてだが、総柱建物では、2×2の桁間寸法平均は150～220cm、梁間寸法平均が160～220cmである。床東建物3×2のSB45は桁間寸法平均が153cmで梁間寸法平均が176cmである。総2類の3×2のSB34では桁間寸法平均が156cmと166cmで梁間寸法平均は200cm、SB11の3×3では桁間寸法平均が173cmで梁間寸法平均が141cmである。4×4のSB12は、桁間寸法平均が125cm、梁間寸法平均が100cmと実に寸法を短くする。これらの2×2以外の倉庫は、掘立柱建物と比べ柱間寸法が特に短いことが特徴である。

(指数)指数は、55～100を示している。大きな集中はみられないが、小さな集中箇所はある。また、同じ値を示す建物は、とても少ない。Ⅱ1期では指数57～89を示して、指数77で2棟が同値をもつ。Ⅱ2期は指数60

～86を示して、指数67で2棟、指数71で4棟、指数86で2棟の集中が見られる。Ⅱ3期は、指数72で2棟みられ、倉庫は指数76～100の範囲に収まる。倉庫であるSB150(総①類)とSB45(総②類・床東建物)は、同じ指数77をもち、総柱建物で面積の小さなものは指数100に近い。以上のような、重なりといった程度の集中はみられるものの、それが主体とは言えず非常に幅広い指数をもつことが当期の特徴と言えよう。

〈掘方の形態と様〉掘方については、個柱建物で方形採用しているものは10棟であり、個柱建物全体で24%を占める。円形採用は24棟で57%、方形と円形の両者を採用するものは7棟、基本は円形採用だが隅柱のみ方形を採用する建物が3棟である。倉庫では、方形を採用するものは総②類SB45と2×2建物とで6棟、円形採用するものは総②類のSB11の3×3と、SB12の4×4の2棟で、倉庫での約6割が方形採用している。方形と円形の両者を採用しているものは2×2のSB136である。建物面積66.56㎡のSB1では、円形主体で隅柱のみを方形採用し、また、Ⅱ2期ではSB13やSB188のように30㎡以上の建物で円形掘方を採用し、Ⅱ3期には30㎡以上の建物は方形掘方を主とする。

Ⅱ期編年細分で見ると、Ⅱ1期では、方形採用が2棟、明確に方形採用されたものは少なく、部分的に採用したものと思われる。円形採用が3棟、円形主体で隅柱のみ方形採用するものが1棟である。Ⅱ2期では方形採用が4棟、円形採用が倉庫1棟を含め18棟、方形・円形両者の採用が1棟である。Ⅱ3期では、方形採用が倉庫5棟を含む計8棟、円形採用が倉庫2棟を含む計4棟、方形・円形両者採用が倉庫の1棟、円形主体で隅柱のみ方形採用するものが2棟である。編年細分と比較すると、Ⅱ1期では方形採用が20%、Ⅱ2には円形採用が23%を占め、Ⅱ3期には方形採用が53%となる。しかし、Ⅱ2期まではⅠ期のように、掘方を方形としているながらも、掘方配置を斜めにもつものや、方形の形が曖昧なものも多く、方形を意識したと思われる。これに比べⅡ3期になると、方形の形を明確にもつものが増える。

掘方径については、建物全体で45cm以内のものが10%、46～55cmが17%、56～65cmが44%、66～79cmが27%、80cm以上が2%である。80cm以上を示すものは、SB12の総②類の倉庫1棟にあたる。編年細分で見ると、Ⅱ1期では66～59cmが50%で、次いで56～65cmが30%である。Ⅱ2期になると56～65cmが57%と主体が代わり、次いで46～55cm、前期に比べ径が縮小気味となる。Ⅱ3になると66～79cmが47%、56～65cmが40%であり、前期に比べ今度は拡大気味となる。また、Ⅰ期の掘方径に比べれば、径の主体はそう変わらないものの、様々な径をもつようになり、径の幅が広がったという状況である。

また、方形・円形別に径を調べてみると、方形の径は55～80cm、円形では40～80cmであり、最小径は円形の方が小さいものの、径の大・小による両者の差は殆どないものと思われる。また、面積が大きな建物であるから方形を採用するといったこともなく、Ⅰ期とはほぼ同じ様相をもつと言えようが、どちらかというとき期別に関連した可能性が高いと思われる。また、Ⅱ3期に建てられる倉庫では、積極的に方形掘方を採用する傾向が見られ、円形の場合も含め、径が70cm前後から80cmを主体とした重厚な掘り込みをもつものが殆どである。

〈柱間寸法の規格性〉柱間寸法において規格性の高いものを挙げてみると、Ⅱ1期ではSB41・SB158B・SB123である。ただし、SB123の柱間寸法は規格性が高いものの掘方配置や柱筋の通りに問題がある。SB41は良好な掘り込みではあるものの一定の深さとはなっていない。SB158Bは、旧地形に添って一定の深さを呈している。

Ⅱ2期では、SB27・SB65・SB71・SB80・SB90・SB100・SB101であり、SB27・SB71は一定の深さをもつが、この他は深さが完全に一定とはなっていない。

Ⅱ3期では、SB11(総②類)・SB34(総②類)・SB143(総)・SB162で、SB143(総)とSB162が深さまで一定である。この他Ⅱ期としてSB72(総)・SB94が挙げられ、SB72(総)は深さも一定に掘り込まれる。Ⅱ期全体としては16棟に厳密な柱間寸法の規格をもっており、この内6棟が深さも一定に掘り込まれたものであり、当期では12%を示す。編年細分で見ると、1割前後がこういった厳密な柱間寸法・掘削された建物であり、たいした差はない。また、これら以外でも、Ⅰ期で述べたような、厳密な柱間寸法の規格はないものの、ほぼ相対する位置に配置され、しっかりと掘り込まれた掘方をもつものは多い。Ⅱ期全体で5割強であり、編年細分ではⅡ1期が51%、Ⅱ2期が61%、Ⅱ3期といった値となっている。

〈監督性〉監督性を伺わせる建物を挙げてみる。Ⅱ2期のSB27は、右桁行の内側ラインや南梁行が揃うため、部分的な監督性があつたものと思われる。SB45(床東建物)は、南梁行2本のみしっかりと掘方ラインが揃い、これを基準として他も揃ったものと捉えている。深さも一定に揃っているが、柱間寸法が揃わない。SB162は掘

方ラインがしっかりと描い、深さも一定に保たれている。SB45・SB162はⅡ3期にあたるものである。

〈小結〉当期は、本遺跡で最も掘立柱建物が増大する時期になる。Ⅱ期全体で掘立柱建物81%、総柱建物19%で構成され、前期と殆ど変わらない割合であるのだが、編年細分でみると明確な違いが見られる。

Ⅱ1期では、掘立柱建物は $3 \times 2 \cdot 4 \times 2 \cdot 4 \times 3$ のみで構成され、 3×2 が主体、次に 4×2 が多い。Ⅱ2期では、掘立柱建物 $3 \times 2 \cdot 3 \times 3 \cdot 4 \times 2 \cdot 4 \times 3$ で構成され、圧倒的に 3×2 が中心となり、これに、倉庫が1棟のみ加わる構成で、最も掘立柱建物が増える時期である。多柱形態はこの時期まで見られるが、Ⅱ3期になるとみられなくなり、棟持系建物もこの時期に確認できる。Ⅱ3期では、掘立柱建物 $3 \times 2 \cdot 3 \times 3 \cdot 4 \times 2 \cdot 4 \times 3 \cdot 6 \times 4$ で構成され、これに総柱建物 2×2 と 3×3 の倉庫が加わる形となる。掘立柱建物と倉庫が半分ずつであり、この時期に圧倒的に倉庫が増える。しかし1期に比べると倉庫の面積は15㎡以下が多い。建物面積の点から、Ⅱ期全体で20～29㎡が5割強、次いで30～35㎡が3割強、最大でも35㎡未満ということが全体を通して言えるが、Ⅱ3段階で、突如として66㎡の大型建物が建てられる。

以上のことから、Ⅱ1期では明らかにⅠ期の棟相を引き継ぐ傾向と言えようが、主体が 3×2 へと移り、 4×2 の出現など、Ⅰ期で述べたような梁行2間を基軸とする平面形式がより強くなると言えるだろう。Ⅱ2段階になると、さらに 3×2 が中心となり、 2×2 以外の倉庫出現が特徴で、建物も増えることが特筆される。Ⅱ3段階になると、さらに多様な形態の建物が見られ大型建物も出現する。また、圧倒的に倉庫が増加する。

掘方の方形採用は、Ⅱ期全体で捉えられるが、Ⅱ1期やⅡ2期では方形採用はそれぞれ2割前後で、やはりⅠ期のように方形を意識したと思われるものが多い。これに比べてⅡ3期では倉庫や30㎡以上の建物を中心に方形採用することが特徴で、方形という形がより強く現れる。しかし、66㎡を超える大型建物では円形採用を主体とする。また、掘方径については、倉庫で70～80cmが確認できるが、30㎡以上の建物や大型建物では60cm以内であり、集落的な主屋の様相に留まるものと言えよう。しかし、面積の大きさからいえば限内のこの時期では大規模クラスに位置づけられるものである。

規格性を厳密にもつ建物も、Ⅰ期に比べ増加し、これらがやはり主屋となってゆくのだろうと思われるが、Ⅱ2期に顕著で、これも次第に竪穴建物から掘立柱建物へと徐々に移り変わってゆく現象と考えられる。監督者の存在を伺わせるものは、Ⅱ期全体で僅かながらみられるが、Ⅱ3期に多少増える傾向である。このように見てみると、Ⅱ2期段階で変化を捉えることができ、Ⅱ3段階では前段階の変化を一層顕著なものにしたと言えよう。また、掘立柱建物の増加に対しても、本遺跡の竪穴建物の時間軸変遷でも述べられている本遺跡での竪穴建物から掘立柱建物へ移行する現象^⑧とリンクすることができる。

(3) 田嶋編年Ⅲ・Ⅳ期の掘立柱建物

Ⅲ期・Ⅳ期の対象資料はそれぞれ少ないため、Ⅲ期、Ⅳ期をまとめて述べてゆくこととしたい。Ⅳ期内の編年細分を見ると、基本的には大きな変化はみられないが、平面形式で柱本数に違いが見られるので、後で述べることにする。Ⅲ・Ⅳ期の対象資料は28棟である。内訳は、 2×2 が全て倉庫で4棟、 3×2 は倉庫1棟を含む計14棟で、このうち南梁行のみ3間となるものを3棟含めている。 3×3 は8棟、 $4 \times 2 \cdot 4 \times 3$ はそれぞれ1棟ずつであるが、 4×2 は南梁行が3間になる可能性をもつものである。編年細分で見えてゆくと、Ⅲ期とⅣ1期までは $2 \times 2 \cdot 3 \times 2 \cdot 3 \times 3$ で構成されるのに対し、Ⅳ2ではこれに 4×2 と 4×3 が加わる構成となっている。近接棟持柱構造または半独立棟持柱構造の掘立柱建物と考えているⅣ1期のSB130は、掘立柱建物に含めている。全体で、掘立柱建物が82%、倉庫は18%の割合である。

〈建物面積〉Ⅲ・Ⅳ期全体での建物面積では、15㎡以下は全て倉庫で3棟、16～19㎡が倉庫1棟を含む3棟で、20～29㎡が17棟で全体の59%、30～39㎡が5棟である。Ⅱ期のような60㎡以上といった大型建物は見られない状況である。最も小さな建物は8.16㎡の 2×2 総柱建物のSB76であり、本遺跡内でも最小面積の掘立柱建物となる。

〈柱間寸法〉掘立柱建物の 3×2 で、桁間寸法平均は173～193cm、梁間寸法平均は190～230cmであり、桁間寸法平均180～186cmと梁間寸法平均210～220cmに集中がみられる。 3×3 では桁間寸法平均171～213cm、梁間寸法平均153～233cmである。総柱建物 2×2 では、桁間寸法平均が150～200cm、梁間寸法平均が136～346cmであり、最も小規模なSB76で桁間寸法平均150cm、梁間寸法平均136cmである。SB29は 3×2 の総2類とした倉庫で、桁間寸法平均が166cm、梁間寸法平均が190cmを測る。

この柱間寸法において詳しく見てゆくと、 3×2 で桁間寸法平均に186cmが4棟、180cmが2棟で同じ値をもち、200cmを超えるものは少ない。また、梁間寸法平均では全てが200cm以上で同じ値をもつものがある。 3×3 では、桁間寸法平均が200cmを超えるものが半数以上となり、逆に梁間寸法平均は200cmを超えるものが少なくなり、150～160cm前後のものが主体となっている。 4×2 と 4×3 では、桁間寸法平均が似たような値で、梁間寸法平均が 4×2 は240cmであるのに 4×3 では165cm、つまり桁行長と梁行長が重視されて、これにあわせた形で柱本数を決めていると考えられる。

(指数) 指数は、64～96に収まる形で、同じ指数をもつ建物は少ないものの、集中箇所は認められる。鋼柱建物では、指数70前後に6棟、77前後に8棟、82・87・65前後にもそれぞれ2棟ずつである。総柱建物 2×2 では、指数90で同じ値をもつ建物が2棟確認できる。前期に比べ明らかに指数の一致するものが多くなっている。(掘方の形態と径) 掘方については、建物全体で方形採用しているものは14棟で48%、円形採用するものが13棟で46%、方形・円形の両方を採用するものが1棟である。構造別に見てみると、鋼柱建物で方形掘方を採用しているのは12棟、円形採用は11棟、倉庫では方形と円形それぞれ2棟ずつと両方採用がSB29(総②類)1棟の内訳である。掘方径については、建物全体で45cm以内のものが11%、46～55cmが43%、56～65cmが25%、66～79cmが14%、80cm以上が7%である。前期に比べ径の主体が46～55cmに移って小規模掘方を主体に採用する他、45cm以内や80cm以上のものが多少増加するという傾向である。編年細分で調べてみると、80cm以上を掘り込むのはⅢ期までに限られ、Ⅳ期では、Ⅳ1期のSB26が径主体を70cmにもつのが唯一であり、他は60cm未満である。Ⅳ2期に入ると最大値は56cm主体のSB148に限られ、他は50cm未満となる。要するに、当期の掘方径は時期が新しくなるほど、径を小さくしてゆく傾向である。

方形・円形別の径の違いでは、方形は48～68cm、円形では40～80cmである。また、方形と円形の採用のされ方についてだが、Ⅲ期の中で例を挙げると、SB29は総②類の倉庫で掘方径は80cm主体の円形採用、SB242は総①類の倉庫で掘方径は56～60cm主体とした方形採用である。Ⅳ1期では、 3×3 のSB26は円形採用で径は70cm主体、同じく 3×3 のSB209bは方形採用で径を48～50cmにもつ。Ⅳ2期では円形・方形どちらの値も変化はない。このように、当期で古い段階のものは、方形採用よりも円形採用の方が径を大きくもつという特徴があり、次の段階では前期の特徴を引き継いでいるものの径を小さくし、さらに次の段階では円形でも方形でも同じような径をもってさらに径を小さくするという特徴がある。

(柱間寸法の規格性・監習性) 柱間寸法において規格性の高いものを挙げてみると、SB29(総②類)・SB36・SB70・SB75・SB130・SB47・SB172・SB227である。その上、掘方の掘り込みもしっかりしており、ほぼ一定の深さを呈するものはSB70とSB75で、いずれもⅢ期の建物である。編年細分で見ると、8棟のうち5棟がⅢ期の建物、Ⅳ1期に2棟、Ⅳ2期に1棟である。これら以外では、Ⅰ・Ⅱ期で述べたように、厳密な柱間寸法の規格はないものの、ほぼ相対する位置に配置され、しっかりと掘り込まれた掘方をもつものは、当期全体で4～5割である。編年細分のⅢ期やⅣ1期では4～5割だが、Ⅳ2期の最も新しい段階では1棟しか見いだせない。つまり、Ⅳ2期段階になると、しっかりと掘り込まれた柱穴が少なく、柱間寸法の規格性が著しく低い掘立柱建物が増加すると言えよう。なお、当期に監習性を伺わせる痕跡は見いだせない。

(小結) 当期は鋼柱建物82%、倉庫18%で構成され、やはりⅠ期やⅡ期の比率と似た割合をもつ。鋼柱建物は 3×2 ・ 3×3 ・ 4×2 ・ 4×3 で、倉庫は 2×2 総①類と 3×2 総②類1棟である。前期のような大型建物は建てられていない。編年細分では、Ⅲ期・Ⅳ1期は 3×2 ・ 3×3 の鋼柱建物と倉庫が2棟ずつの構成、Ⅳ2期になると上記のような桁行4間建物が認められる。Ⅲ期に愕然と平面形式の種類が減るといった現象と言えようが、 3×2 でも桁間・梁間寸法を200cm以上もって、掘方径を70～80cmにもつなど、桁行長と梁行長を念頭においた掘方配置がなされたものと考えられる。建物指数も一定の値をもつものが増えることから、建物の建て方が変化する結果だろうと捉えている。しかし、このような大型の掘方を持つ建物はⅢ期までにほぼ限られると言え、Ⅳ1期には70cm径が1棟のみで主体は60cm前後に、Ⅳ2期段階になるとさらに径は小さくなって50cm以内に限られる。

建物自体も、厳密に規格する建物はⅢ期までであり、建物に歪みを持つもの、しっかりと掘方を掘り込まないものがⅣ1期に加え、Ⅳ2期にはさらに著しくなるということが当期の特徴である。しかも、編年細分の棟数をみてもⅣ2期に最も少ないということがあげられ、倉庫は 2×2 の1棟のみである。建物面積を見ると、Ⅲ期ま

では30㎡以内に限り、Ⅳ1期には30㎡以上の建物が1棟、Ⅳ2期には約30㎡の建物が1棟で他は25㎡以下のものとなる。以上のことから、本遺跡の中でⅣ2期に掘立柱建物建設の停滞があると言えようが、いずれの時期においても方形採用は5割の率をもつ。なお、当期において監督者の存在を伺わせる建物は見いだせなかった。

(4) 田嶋編年Ⅴ期の掘立柱建物

Ⅴ期の対象資料は20棟である。内訳は、2×2が全て総柱建物で5棟である。3×2は9棟だが、この内、梁行の片方が3間となっている建物が3棟含まれる。3×3は、SB278片廂建物を含む6棟で、当期に初めて廂付き建物が見出される。よって、側柱建物は全体の75%、総柱建物は25%の割合となる。また、当期にも近接棟持柱構造もしくは半独立棟持柱構造の可能性をもつ建物が1棟確認できており、これは側柱建物に含んでいる。

なお、建物の一部のみが検出されて全体復元が難しいために対象資料から外したのだが、大型の建物となる可能性が極めて高いものがSB157であり、この建物の存在を当期から全く外してしまうのは忍びないため、少し記述しておく。この建物は片廂建物になるものと考えられるが、身舎の欄方円形の柱径が80cm主体で、廂の掘方方形の柱径で50cm・60cmを主体とし、柱間寸法も残存部分だけで、桁行梁行ともに180cmと統一された規格性の高いものである。当期には前述したタイプの建物だけでなく、おそらく大型になりうるだろう建物も存在した可能性が極めて高い。

〈建物面積〉Ⅴ期全体での建物面積では、15㎡以下は5棟で全て総柱建物であり、このうち4棟は約9～11㎡の小規模な倉庫である。16～19㎡は2棟で3×2と3×3の側柱建物である。20～29㎡は11棟であり全体の55%、30～39㎡が2棟である。なお、SB278片廂建物は身舎部分のみを対象としてカウントしている。

〈柱間寸法〉側柱建物では、3×2で、桁間寸法平均は170～246cm、梁間寸法平均は180～260cmである。このうち、側柱建物の桁間寸法平均では170cmと173cmがほぼ同一、そして193cmと同一の値が2棟、186cmや200cmでも2棟ずつという風に同一の値がみられ、梁間寸法平均でも同様で同じ値が多く、220cm前後に集中がある。3×3では桁間寸法平均166～246cm、梁間寸法平均126～173cmで、桁間寸法平均には同じ寸法はないが、梁間寸法平均には2棟に146cmの同寸法が見られる。総柱建物2×2で、桁間寸法平均が160～220cm、梁間寸法平均が140～166cmである。

〈指数〉指数を見ると、当期は指数63～100に収まるが、3カ所に集中が見られる。指数75前後に、3×3建物が4棟、3×2建物では総②類1棟を含む計3棟、2×2総柱建物は2棟と集中がみられ、桁行長と梁行長を4:3比率にした建物が集中している。この他、指数70にも5棟の集中があり、内訳は3×2が4棟、3×3身舎の片廂建物1棟である。指数94には総柱建物2棟が集中する。このように殆どの建物が指数の一致がみられることは、当期の特徴である。

〈欄方の形態と径〉欄方については、方形採用が8棟で全体の40%、円形採用が8棟で全体の40%、方形・円形の両方採用が3棟、円形主体だが隅柱のみ方形を採用しているのが1棟である。この中で、倉庫の総柱建物4棟は全て円形、総②類の1棟は方形・円形両方を採用している。側柱建物だけを見ると、方形採用の8棟は全て側柱建物であり、側柱建物で円形採用は4棟である。また、掘方径においては、45cm以内が5%、46～55cmが50%、56～65cmが45%であり、主体は46～65cmに集約される傾向である。前段階でのⅣ2期では50cm以内のものが殆どであったことから、当期では一回り大きな径を採用するようになったと言えよう。径の方形と円形での比較では、方形は48～65cm、円形は44～60cmで、両者に大きな開きは見られない。方形・円形の採用に関しては、倉庫は円形を採用し、30㎡を超える建物も全て円形採用しているということが挙げられるが、これら以外の建物ではどちらも採用している。前述した指数75でも方形・円形いずれも採用が認められる。

〈柱間寸法の規格性・監督性〉柱間寸法において規格性の高いものは、SB279・SB278・SB216・SB191・SB109である。この内、深さも一定に掘り込まれているものはSB279である。SB279は柱の設置時に、全ての柱が半時計回り方向から柱を掘り立てていることが特徴で、監督された可能性もたれるものである。この他にも、前期までに記述したような、厳密な規格はないが柱の並びや掘り込みもしっかりする良好な建物は存在する。しかしその数は5棟であり、全体でも25%にしかすぎない。ただし、前期の棟相に比べれば、厳密な規格をもった建物が当期に格段に増えたことは間違いなく、当期との間に大きな変化があったものと思われる。

〈小結〉当期では、掘立柱建物の棟数が増えるという現象が認められる。側柱建物75%、倉庫25%で構成される。側柱建物では3×2・3×3の2種類のみの平面形式であり、殆どの建物が指数を一致させることから、桁行長

と梁行長の比率を重視した柱の配置がなされる建て方をしたと思われる。倉庫は2×2の総柱建物のみで小規模ではあるが、前期に比べ棟数を増やす。建物面積は、30㎡以上のものが認められるようになり、また、当期に初めて片廂建物が出現する。掘方形状については、方形・円形いずれも半分ずつの割合で採用されるが、総柱建物での方形採用がされなくなる傾向であり、30㎡以上の建物についても円形採用されている。掘方径は、前期に比べ一回り大きくもつようになるものの、65cm以内に収まる傾向である。厳密に規格された建物が前期に比べれば増えるものの、Ⅱ期程には至らない。しかし監督者の存在を伺わせる建物が僅かながら見られる。対象資料からは、以上のようなまとまりを考え出したのだが、SB157のような事例があることから、以上の構成にプラスして廂付きの大型建物が存在した可能性が極めて高いと考えている。

3. まとめ

上述してきたように、各時期の特徴が明らかになり、額見町遺跡・掘立柱建物での田嶋編年Ⅰ～Ⅴ期全体の中で、大きな変化を捉えることができる。それは、Ⅱ2～Ⅱ3期の面期と、Ⅴ期の面期である。

Ⅰ期段階では、古墳時代からの平面形式と、律令的建物様式(川畑1995)の前段階とも言える新しい様式の建物が併存することがわかった。但し、棟持柱建物の一定量検出や多柱形態建物にも見られるように、主体は古墳時代からの平面形式である。このような組み合わせは非常に興味深いものであり、宇野隆夫氏による6世紀末～7世紀第3四半期における従来の村落の多くが再編・集約化されたという提唱¹⁷⁾が浮かぶ。

Ⅱ2期では、まず圧倒的に掘立柱建物が増加すること、3×2が圧倒的に中心となり、平面形式もかなり増えることがあげられる。また、古墳時代からの平面形式が見られるのはこの時期までである。Ⅱ3期では、前期の平面形式をそのまま受け継ぎながら、突如66㎡の大型建物が建てられ、この時期に建てられた半分が倉庫となるのである。ガラリと様相が変わってしまう印象がもたれると同時に、前期までの古い形式を排除する印象である。このⅡ2～Ⅱ3期においては、堅穴建物がこの時期より減少し始めるため、堅穴建物から掘立柱建物へ移行する段階と重なり、当遺跡の大きな面期になると捉えることができる。

川畑誠氏によれば、県内で、律令式建物様式は、公権力を背景として再編・強化され階層性を具象化する、このような動きがⅢ期からⅤ期にあるとされ、Ⅴ期には完成をみる段階とする(川畑1995)。本遺跡では、Ⅲ期以降、集落として停滞してゆく傾向となり、Ⅳ2期には最も停滞の様相、要するに建物は建て方に統一性を欠き、規模も縮小、建物プランも台形状といった建物が多くなるのである。しかし、Ⅴ期に入ると一変する。建物は、桁行長・梁行長の比率をほぼ3パターンにもつ。建物規模も、掘方規模も拡大し、規格を重視した建て方へと変わる。しかしこれらの規模は、Ⅱ期程には至らない。そして、おそらく廂付き大型建物も建てたであろう。この大きな変化を当遺跡のもう1つの面期と捉えることができる。律令式建物様式の完成をみる最後の段階で、額見町遺跡は再編・強化されたのであろう。

最後に、監督者の存在に関してである。当遺跡には停滞するⅢ・Ⅳ期以外は、監督者の存在が伺える。但し、それは建物のごく一部に限られた部分であって、監督者が当地に常駐していたかどうか、一部を指揮し、後はまかせると言って離れていく光景が浮かぶ。監督者であったか、管理者であったか、指導者であったかわからないうが、そのような立場の人物がこの地へ出入りした可能性もあるものと考えている。

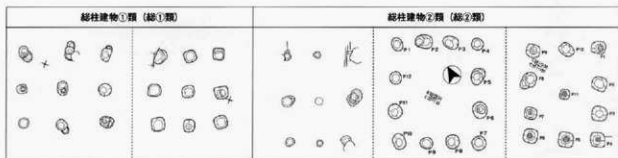
(注)

- 1) 望月朝司氏と相談、備後政による。
- 2) 山中誠史氏より御教示。1棟の棟柱の各柱間隔の一道において、桁行方向あるいは梁行方向に一直線上に揃っている例があることから、柱間隔の測目印として確認が行われ、これに一段を前せる形で建築が行われた結果とされること。また、柱間隔の測目印は、段階やスロープを一定方向にもつものがあることから、柱設置時に一定方向から柱を据え立てたとされること。逆に柱の抜き取り時での一定方向への抜き取りがみられるから、このような場合には、通常時・作業時に一定の範囲があるということであり、監督陣のものと作業が行われたとされる。もしくは指導者のような立場の人物が関わったとされる。また、柱間寸法、掘方径、掘方の一定値をもつということも、造営の仕方に一定の範囲があるということが言えることとされる。
- 3) 本遺跡では、本来、基盤目柱に柱が並立して中央の柱が細いものがある。本遺跡では、欄柱が総柱建物と同様に重畳で、中に1本だけ梁柱をもつ構造のものが検出されており、これがSB35である。このような構造のものは1棟だけであるが、本来の基盤構造の名称とは異なることは承知で、今回、本遺跡と呼び、総柱欄柱に含まれることとする。
- 4) 奈良奈良文化財研究所2003「古代の宮内遺跡1遺跡編」より。棟持柱は素懸柱列の外に立てる「独立棟持柱」素懸欄柱に横して建てる「近接棟持柱」などがある。福岡県筑後国後 SB4486の事例のように素懸柱列の中柱が柱筋よりも外側に横並びのように位置する。つまり素懸柱列の外側に棟持柱が立つ例は、「独立棟持柱構造」あるいは「近接棟持柱構造」と名称されている。この事例が、本遺跡の事例とよく似ていることから。
- 5) 金丸隆雄遺跡Ⅱに類似がある。
- 6) 望月朝司 2006「額見町遺跡の古名跡建物構造と造り付キマドについて」『額見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会より。
- 7) 宇野隆夫 1991「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として」『社説』より。

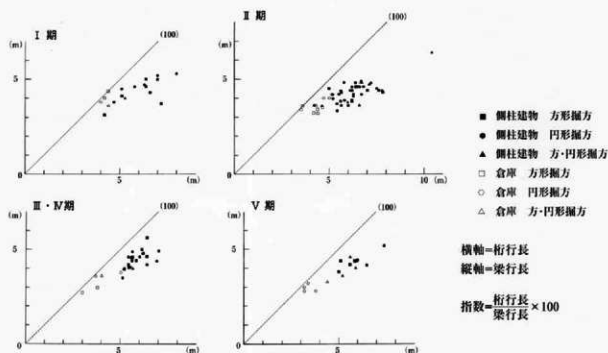
参考文献

石川県立埋蔵文化財センター 1997『永町ガマノマガリ遺跡』
 宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』桂書房
 川畑誠 1995『石川県内の古代建物に関する基礎的考察-掘立柱建物の平面プランを中心に-』(財)石川県埋蔵文化財保存協会年報6
 小松市教育委員会 1995『念仏林南遺跡1』
 田嶋明人 1983『奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡』

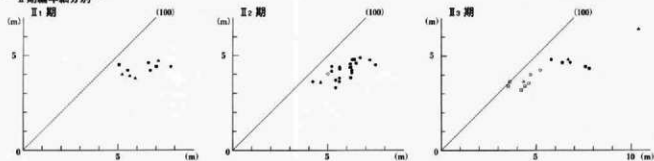
-加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書-『北陸の考古学』石川考古学研究会
 奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡I遺構編』
 奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡II遺物・遺跡編』
 奈良文化財研究所 2004『平成16年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「古代集落遺跡調査課程」資料』
 望月精司 2006『額見町遺跡の古代懸穴建物構造と造り付かマドについて』『額見町遺跡1』小松市教育委員会



第156図 総柱建物分類図 (S=1/200)

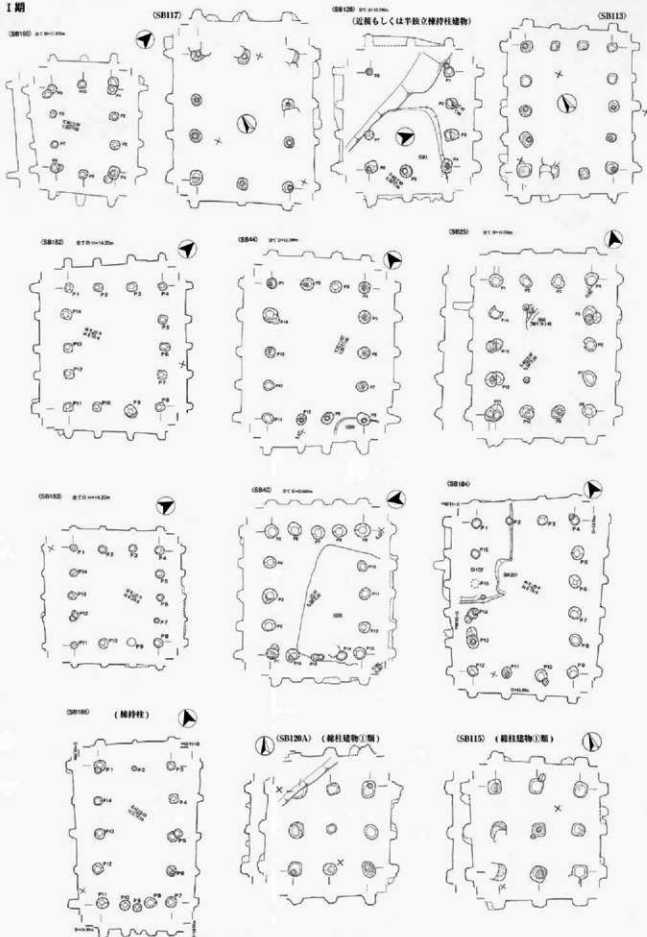


-I期編年級分別-



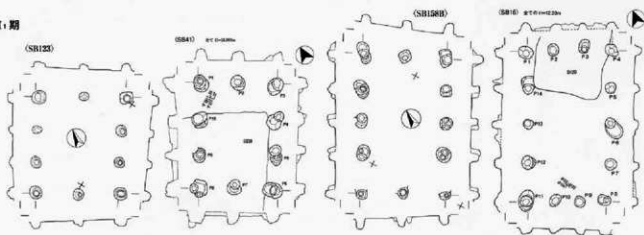
第157図 掘立柱建物の桁行長・梁行長と指数

I期

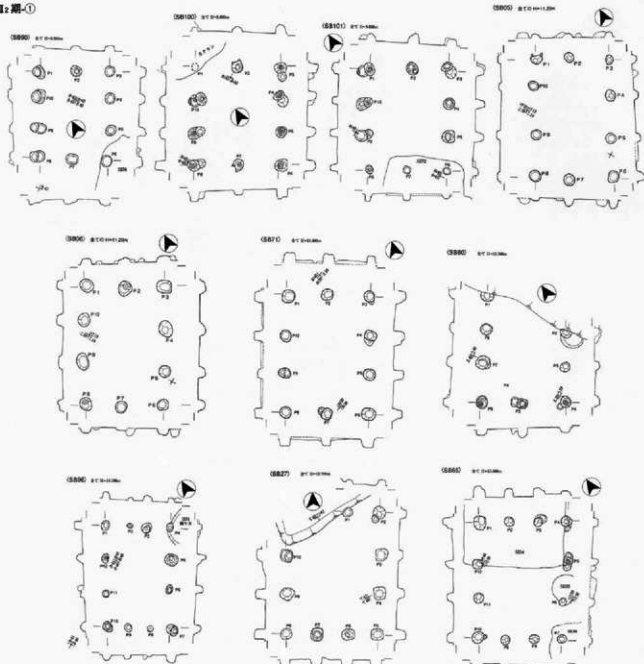


第158図 額見町遺跡・田嶋編年I期独立柱建物 (S=1/200)

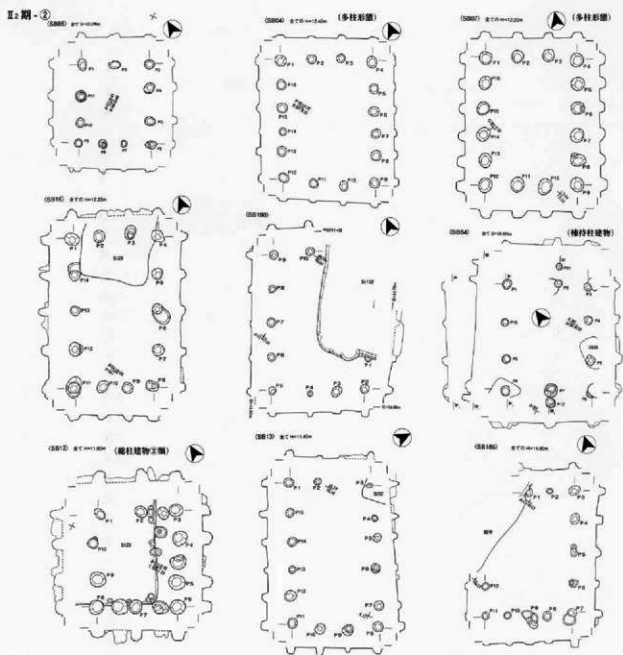
Ⅰ:期



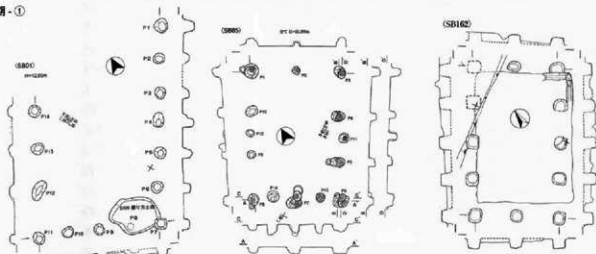
Ⅰ:期-①



第159図 額見町遺跡・田嶋編年Ⅰ期掘立柱建物(上段Ⅰ:期・下段Ⅰ:期-①)(S=1/200)

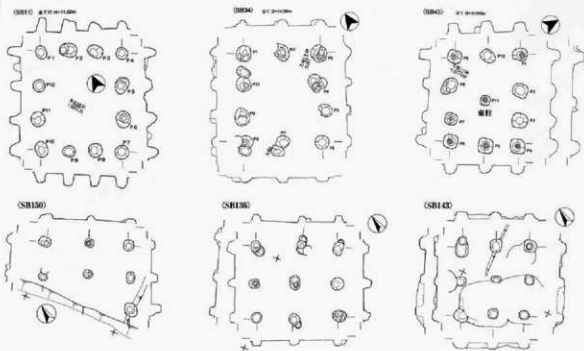


I: 期-①

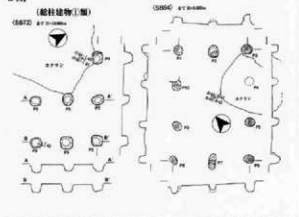


第160図 額見町遺跡・田嶋編年Ⅰ期掘立柱建物(上段Ⅰ:期-②,下段Ⅰ:期-①)(S=1/200)

Ⅰ期-②



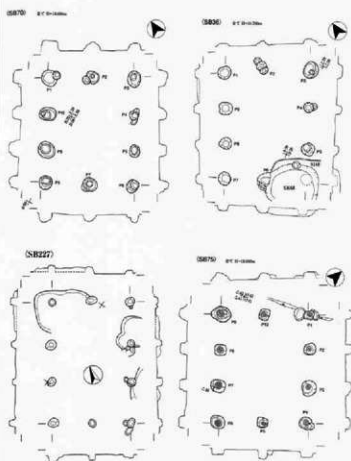
Ⅱ期



Ⅰ段: 掘立柱建物2層

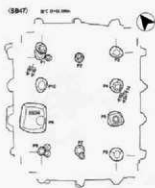
Ⅱ段: 掘立柱建物1層

Ⅲ期



第161図 額見町遺跡・田嶋編年Ⅰ期・Ⅱ期掘立柱建物(上段:Ⅰ期-② 下段左:Ⅱ期 下段右:Ⅲ期)(S=1/200)

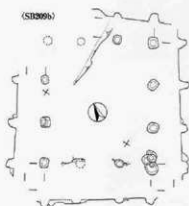
M₁期



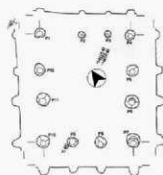
(SB130) (近縁もしくは半独立棟柱建物)



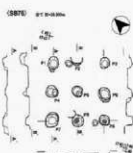
(SB209)



(SB20)

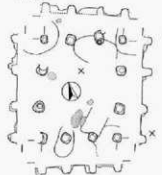


(総柱建物(上))



M₂期

(SB172)

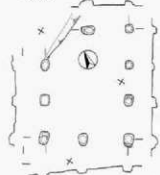


(SB148)



V期

(SB191)

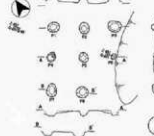


(SB279)

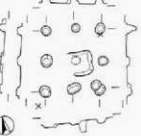


(総柱建物(下))

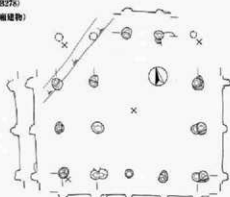
(SB126)



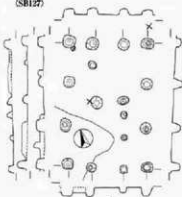
(SB216)



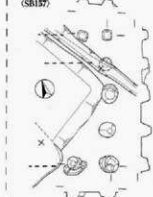
(SB278)
(片層建物)



(SB127)



(SB137)



第162図 顔見町遺跡・田嶋編年IV期・V期獨立柱建物 (上段M₁期 中段M₂期 下段V期) (S = 1 / 200)

第2節 南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察

1. はじめに

額見町遺跡からは田嶋編年古代Ⅶ1期からⅦ2期にかけての土器器焼成土坑が検出されており、資料の遺存度は悪いが、当期の組成を示す数少ない資料が得られている。また、今回報告の区域では、それに後続する土器器資料が得られ、これまで南加賀地域では空白期とされてきた平安時代後期の土器器様相が凡そ見えてきた。次回以降に報告される土坑や土器溜まり資料の中にも田嶋編年中世1期の良好な資料は多く、今後内容の補正や変更はあるだろうが、田嶋編年古代Ⅶ期から中世1期までの土器器様相の変遷について見通しが立ったので、ここで編年序列を提示し、北加賀地域の土器器様相と対比しながら既存の編年案との照合を試みてみたい。なお、額見町遺跡だけでは資料的に不十分な部分もあるため、この点については、既存の報告資料で補うこととし、南加賀地域の田嶋編年古代Ⅶ1期から中世1-Ⅱ2期までの土器器群を、平安後期編年として2期6小期区分する。田嶋編年に基づいて編年序列することも考えたが、編年区分の指標とする要素に違いもあり、その評価が煩雑となるため、併行関係を示すことでその点は了解いただきたい。

2. 大枠の編年区分指標

筆者は「額見町遺跡Ⅱ」の中で、「三湖台地集落群の古代前半期の土器器様相」と題する編年案を提示し、田嶋編年Ⅰ期からⅣ期までを1期から4期に区分した。5期以降については今回の報告で編年案提示していないが、田嶋Ⅴ-Ⅶ期を5期、6期で区分可能と考えており、平安時代後期、田嶋古代Ⅶ期と中世1期についても、それに継続する形で7-8期で編年区分したい。ただ、ここでは資料が三湖台地集落に基づくものではなく、江沼や能美を含む南加賀資料を対象としたものであるため、三湖台7・8期とはせずに、南加賀7・8期と呼称したい。

南加賀7期の成立については、古代型土器器生産体制の象徴でもあった須恵器生産の終焉に置く。全国的には若干の時間の前後はあるが、北陸をはじめとして東海を除いた東日本での須恵器生産は田嶋古代Ⅶ3期を併行する時期には終焉を迎えており、古代型土器器生産体制の解体期にあたる。南加賀8期成立の画期は、古代型土器器生産体制解体後も続いていた古代的と言える土器器器形や法量から衰退し、新たな法量や作りをもつ土器器食器が成立することである。8期成立をもち北陸型煮炊具も消滅しており、古代型土器器の終焉期と言える。8期の成立をもち、中世的土器器様式とする考えが田嶋氏より提示されているが、8期は古代後期の土器器様式が完成された段階とも評価可能であり(川畑1997, 104頁)、8期の終焉をもって7期から続く輪系統の土器器食器が消滅する点や在在での非クロ土器器食器や中世的貯蔵具生産が開始される点を重視し、8期までを古代的土器器様式と捉えておきたい。11世紀後半以降の政治体制や社会構造は中世的体制の萌芽期にあたり、社会全体を大きく変動させるものであったことは承知しているが、1185年以降を鎌倉時代とする時代区分を考慮しながら、12世紀中頃をもって中世的土器器様式の諸要素が揃った時期としたい。以下に、南加賀7期・8期を各3小期区分して編年概要を述べる。

3. 南加賀7期

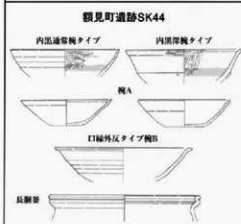
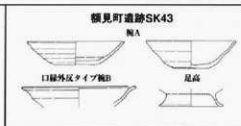
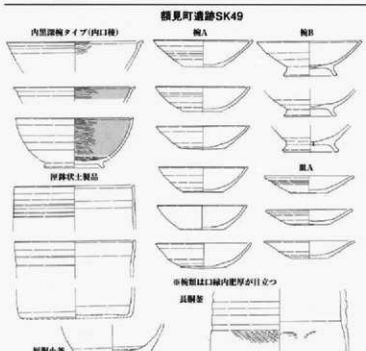
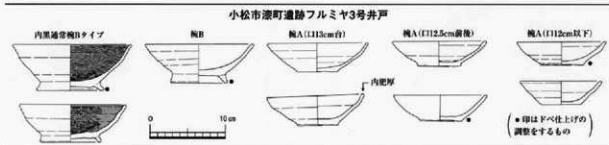
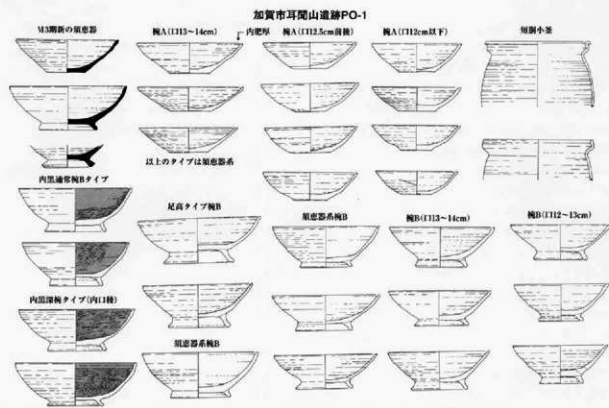
南加賀7期を小皿Aの出現により7A期と7B期に、小皿Aの増加と定型化により7B期と7C期に区分する。小皿Aの出現が7A期に遡る可能性は否定できないが、組成の中に確実に含まれる時期を評価したい。

(1) 南加賀7A期

加賀市耳聞山遺跡P0-1(加賀市1994)を当期の標識資料とし、漆町遺跡フルミヤ3号井戸(石川理文1986)と額見町遺跡SK43、SK44、SK49の土器器焼成坑資料、そして未報告だが浄水寺遺跡3号溝下層資料²⁾も当期に位置づけられる資料と見る。田嶋編年の古代Ⅶ1期(田嶋1997)に該当し、北加賀資料をもとに構成された出越編年ではⅡ2期(越中1997)にあたる。

当期成立の画期要素として須恵器生産の終焉を上げたが、耳聞山P0-1には僅かながら南加賀窯産の須恵器碗A・Bが含まれている(5%程度)。須恵器器形や法量から判断すれば、田嶋Ⅶ3期新相とすることに違和感はない。耳聞山で出土する碗A・Bは須恵器と土器器器形、法量を酷似させるものが一定量存在しており、南加賀窯での土器器生産も須恵器同様に当期まで一部残存する可能性を持つ。

南加賀窯の土器器焼成坑は群衆経営されるものが多いが、林遺跡では丘陵部縁辺に土器器焼成坑のみ単独で作



第163図 南加賀7A期の土器群 (S=1/5)

られる(石川保存1993)。出土する土器器食膳具が破片であるため、時期の特定が困難であるが、内黒土器や匣鉢状土製品の出土を確認できないことから、7A期に下る可能性が高く、古代型土器生産体制解体期のものと考える。つまり当期には須恵器窯も中核の戸津支群からはずれた地に単独で存在することもありえるだろう。

南加賀窯生産の土器器で現在のところまとまって確認される最新期資料は南加賀窯二ツ梨一貫山支群8号土坑(小松市2002)である。Ⅲ3期新相に位置づけられる須恵器が共存しており、土器器は内黒土器15%、通常土器85%で構成される。内黒土器器は全て外面赤彩で椀A・Bのみ確認。通常土器器は椀A 77%、椀B 1%、皿A 14%、皿B 8%で構成される。通常椀Aは全体的に薄手作りで、体部外傾器形だが、底径は比較的大きいものが定量存在し、口径12.5～13.5cm、径高指数27～32、底径指数44～48前後に分布する。皿Aは体部外傾の強い皿器形を呈するのに対し、皿Bは椀形気味で、高台径が小さい等、当期の須恵器皿Bの特徴と共通する。

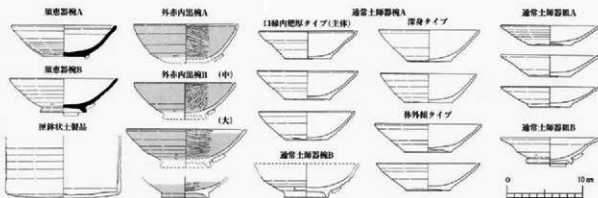
当土器器群は、通常土器器が主体的に存在する点や椀Aに主体を置く点などⅢ1期的な様相を色濃く出すが、二ツ梨の通常椀A法量と耳間山とを比較すると、耳間山の底径指数低下は明瞭である。加えて耳間山の椀Aは口径13～14cm、12.5cm前後のものに加えて12cmを切る小型法量が存在しており、新たな様相をもつ。二ツ梨一貫山支群8号土坑は、Ⅲ1期の様相のさきかけと言えるものだが、やはりⅢ3期の範疇でおさまるものだろう。

耳間山の土器器食膳具は内黒製品が5%、通常製品が95%で構成される。額見町の土器器焼成坑資料でも土器器食膳具の中で内黒の占める率は5～10%であり、概ね一致している。通常土器器は椀Aが2に対し、椀Bが1程度で構成される。二ツ梨一貫山支群の通常土器器の割合から椀Bが確実に増加傾向を見せており、それは須恵器椀Bの組成比に似る。当期の通常土器器の組成は須恵器組成をスライドさせたものであり、それ以前の土器器様相とは切り離して考えるべきであろう。なお、耳間山では確認されていないが、額見町SK49では皿Aが定量生産されており、7A期までは僅かながら残存する。額見町の皿Aは口径12cm前後とⅢ3期新相段階からの法量と器形をそのまま残しており、南加賀地域特有の様相とも言える。

椀Aは先述したように、体部外傾化の進行と口径に幅をもつこと、そして12cmを切る小型法量が出現することと特徴とする。北加賀編年で出越氏は椀Aの総合的な小型化により古と新に区分したが、漆戸遺跡フルミヤ3号井戸資料では13cm台と12cm台、11cm台の3法量のもの2個ずつ井戸埋納しており、法量の縮小をもって2期細分することは難しい。なお、口縁部内側に肥厚する特徴を持つ椀Aが目立つようになるのも当期の特徴で、それは椀Bでも確認できる。当期の製品を識別する一つの判断材料となろう。

椀BはⅢ3期新相の須恵器椀Bに見られた法量分化の様相や体部外傾と体部椀器形存在など共通する部分が多いが、総合的に高台が高くなり、底面ナデ調整するものが目立つようになる。足高形態はⅢ3期の須恵器で既に定量存在しているので当期の特徴とは言いが、総合的な足高傾向は7A期の特徴を示すものと言える。なお、額見町SK44出土の口縁部強く外反する大型法量製品が当期に散見されるようになるが、Ⅲ3期の須恵器椀Bには認められないものであり、7A期の指標となる器形だろう。施軸陶器模倣と理解している。

内黒土器器は外面赤彩するものはない。土器器焼成坑で匣鉢状製品を使用した合わせ口焼成を行う額見町遺跡の事例も全て赤彩はなく、赤彩技法の消滅は南加賀の7A期の指標となろう。北加賀ではⅢ1期には早くも赤彩が欠落しており、その点は地域差が明瞭である。内黒焼成法は須恵器窯場での技術系統を引く合わせ口法の



第164図 南加賀Ⅲ3期新段階併行の土器器食膳具(二ツ梨一貫山支群8号土坑、S=1/5)

他に、伏せ置き法もこの時期に確実に出現し（望月1997）、7B期をもって伏せ置き法へ統一されたと見る。器種はほぼ椀Bに淘汰され、VI3期からその数量を激減させる。器形は通常土師器と共通する須恵器的な椀器形の他に、体部下位に張りをもち体部立ち気味の器形を呈す深椀形態が出現する。口縁部内端に稜を形成し、外面体部下位をケズリ調整する精製品であり、大型法量をもつ。施釉陶器模倣とも言えるものであり、先の口縁部外反器形の椀Bとともに当期の指標となろう。

以上、南加賀7A期の土師器食器具様相について述べたが、器種組成や器形、法量以外にも、製品全体の作りの変化が上げられる。まだ当期はVI3期からの系統を色濃く残す額見町の土師器焼成坑のような製品が主体的だが、厚手で器表面にドベによる仕上げ調整を行う作りで、くすんだ淡黄褐色を呈し砂粒を器表面出さない特徴の土師器が確実に出現する。黒灰を残すため、焼成法に大きな変化はないものと見るが、明瞭な火色を器面に残さず、質感が異なる。主体をなすのは8期からだが、新たな土師器の流れは当期に始まっていることを予感させる。なお、当期の胎土構成は、額見町分類でA類胎土とした砂粒を多く含む集落近郊の胎土を主体とし、能美（柳川流域）産と推察する粘土質のD類胎土を定量含み、須恵器器形と合致する土師器は南加賀窯産の胎土をもつ。

土師器食器具以外では、VI3期からその量を大きく減じるが、まだ一定量の土師器煮炊具が出土する。器種、器形ともにVI3期新相からほとんど変化を見せず、胎土や色調、焼成方法についても同様と見る。ただ、窯場での土師器生産解体とともに生産量は激減しており、鉄鍋等の素材への転換が進行した時期と捉える。須恵器貯蔵具はVI期に位置づけられる南加賀窯産の伝世品が少量出土し、他地域の広域流通品は確認できない。

(2) 南加賀7B期

千代オオキダ遺跡196号土坑（小松市2006）を当期の標識資料とし、漆町遺跡サンパンワリ153号土坑（石川埋文1988）及び額見町遺跡SK146の土師器焼成坑資料を補足資料とするが、額見町の資料は当期の中でも古相呈す資料と位置づける。当期は田嶋編年VI2古期に相当すると言えるが、南加賀地域では該当資料がないとし、田嶋氏は北加賀の千木ヤシキダ遺跡SX10や三浦幸明遺跡IV区SK16をあてる（田嶋1997）。出越編年では三浦幸明資料をII2新期、千木ヤシキダ資料をII3期にあてており（出越1997）、編年区分の仕方に違いがある。出越氏は主に椀Aの形態ごとの法量変化に重点を置き、田嶋氏は器種構成に重点を置くことに拠ると見るが、筆者は先述したように、小皿A出現を当期の指標としており、三浦幸明の小皿A出現を評価する立場をとる。

千代オオキダの土師器食器具は、内黒土師器の椀B6点と、通常土師器の椀A15点、椀B16点、小皿A6点が図化されているが、そのまま当資料の器種構成比を反映していると見る。通常椀Bは7A期から増加傾向にあると言えるが、内黒椀Bについては漆町153号土坑の状況や額見町SK146土師器焼成坑の内黒生産を行っていない状況などから、7A期から横ばい減少していると見る。なお、漆町153号土坑からは3点の皿Bが出土する。体部扁平で小型の高台が付されるもので、VI3期の椀形呈す器形とは異なり、系統的に繋がるものとは言い難い。ただ、7A期の皿A残存を見れば、当期までは古代的な皿器種が残ると評価すべきだろう。

内黒土師器椀Bは所謂深椀器形が主体的に存在する様相をもち、施釉陶器の深椀器種の盛行（虎漢山1号窯期）と対応関係にあるものと考えられる。深椀器形は口径13cm前後のものと15cm前後のものがあり、高台は極めて低く底面ナダ調整をする。内黒焼成は伏せ置き法で、内面ミガキ調整をもつが、かなり雑に仕上げられている。また、口径15cm程度的大型法量には口縁部外反器形で足高台の付く器種があるが、7A期から続く足高椀器形系統のものであり、当期をもって消滅する器種である。

通常土師器の椀Aは口径13cm前後のものも確認されるが、11～12.5cmが大半を占める。当期に一定量存在するとされる口径14cm台のものはここでは確認されないが、漆町153号土坑では確認例がある。当期の古相資料として位置づけた額見町SK146の椀Aと比較すると、小型法量の主体化と底径の小量化が進行しており、また、全体的に体部椀形呈す器形が主体となる。7A期の須恵器的とも言える体部外傾器形を主体とする様相はSK146で定量的存在したが、千代オオキダではそれを払拭する方向へ変化している。北加賀の当期の標識資料とされる三浦幸明遺跡IV区SK16（松任市1996）と比較すると、南加賀は相対的に低平な器形をもつ特徴が見られよう。

なお、口径10.5～11cmの小型法量の椀Aが当期に定量的存在する。7A期で小型法量としたものの系統で考えるべきか、後述する小皿Aの深身器形と位置づけるべきものか、やや悩むところであるが、その中間的なものとして小型椀Aと位置づけた。当期の特徴的な器種であり、次の7C期においても定量的存在する器種である。

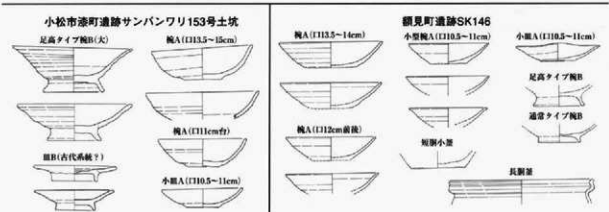
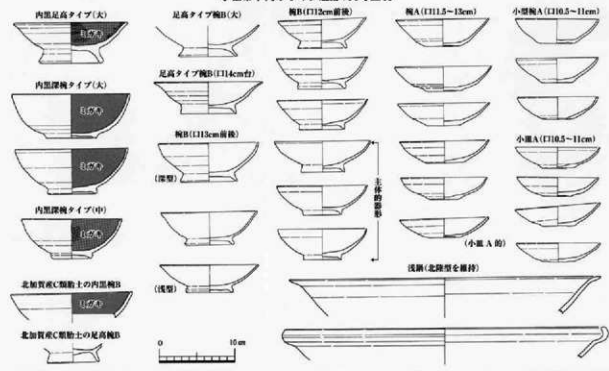
椀Bは椀A同様に体部椀形呈す口径12cm前後のものが主体を占め、これに口径13cm前後の椀形のもの、口径

13 cm前後で7 A期からの系統にある体部外傾器形のもの、口径14 cm台の口縁部外反器形のもの加わる。口縁部外反器形は足高高台をもつ7 A期からの系統のもので、当期がその消滅期と見る。他の椀B高台は7 A期よりも低くなり、断面三角形を呈するものが主体的となる。当期の椀Bは食器具の半数近くを占める特徴があるが、北加賀では椀Aが3に対し椀Bが1程度で構成され、その点でも南加賀的な様相と位置づけできよう。

小皿Aは口径10.5～11 cmを測る、椀A主体法量を小型にしたものだが、体部外傾器形という点で椀Aと識別でき、定型的是と言えないまでも、別器種としての位置づけが確実になされる。先に述べた小型椀Aと器種として分けるべきか、評価が難しいが、小型椀Aの祖形は7 A期にあると見ているため、当器形の小皿Aをもって、小皿出現としたい。

小皿Aの出現について、田嶋氏はⅧ1期、つまり7 A期に置くのに対し、出越氏は次のⅢ1期、7 C期に置く。出越氏の当期の標識資料とする三浦幸明遺跡Ⅳ区SK16に伴う小皿A全てを当期資料としてよいか筆者も迷うが、同時期に位置づけられるⅢ区SK16の小皿Aは当期に位置づけできる器形をしており、北加賀地域においても7 B期を小皿出現期することに問題はないと判断する。田嶋氏のⅧ1期の小皿出現は、先駆的に出現してよいという評価であり(田嶋1997)、平安京で出土する10 cm台の皿の定量組成時期(平安京Ⅲ期中=虎渓山1号窯期、小森2005)を考へても、当期をもって一般土器組成に小皿Aが含まれる時期とするのが妥当だろう。

小松市千代オオキダ遺跡196号土坑



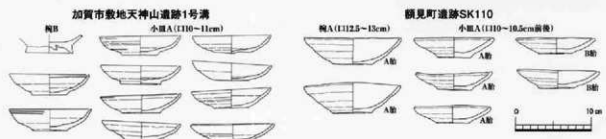
第165図 南加賀7 B期の土器群 (S=1/5)

以上、南加賀7B期の土師器食膳具様相について述べたが、7A期で見られた胎土や焼成の特徴を持つものが当期でも継続的に確認される。集落近郊のA類と呼べるものにも、砂粒を多く含むものと砂粒を浮き出させないようなものがあり、精と粗の製品印象を作り出している。また、千代オオキダ196号土坑では北加賀産と考えられるC類（額見町分類）胎土の内黒碗Bと通常碗Bの破片が出土している。漆器資料も含めて、主体はA類胎土だが、北加賀産C類の搬入は内黒碗Bと通常碗Bに特化される点が注目される。8A期に始まる北加賀産内黒碗の定量搬入の先駆的なものであり、この時期から北加賀産の内黒碗生産が盛んになったことを物語るであろう。

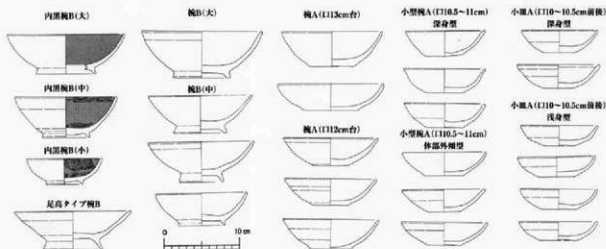
土師器食膳具以外では、依然として古代的な形態を残す北陸型煮炊具が定量出土する。額見町SK146土師器焼成坑では古代VI3期と器形的に差異のない長胴釜や短胴小釜が生産されており、千代オオキダでも北陸型系統の浅鍋が確認される。ただ、千代の浅鍋は口縁部器形がしっかりとS字状を呈さず、内湾しただけのもので外屈するだけのものとがあり、端部の摘み出しを省略する傾向が見られる。

(3) 南加賀7C期

額見町遺跡SK110と加賀市敷地天神山1号溝（石川理文1987）、そして未報告だが、浄水寺遺跡Ⅳ-4テラス礎石3建物周辺並びにP31資料も当該期に位置づける。当期は田嶋編年Ⅷ2新时期に相当するが、氏は南加賀地域では該当資料がないとし、北加賀の中村井出2号土坑、5号土坑（松任市1993）と三浦幸明遺跡Ⅲ区SK07をあてる（田嶋1997）。出越編年では中村井出をⅢ1期に、三浦幸明SK07をⅢ2期にあてており、細分している（出越1987）。南加賀地域の資料は未報告の浄水寺資料が内黒碗B、通常碗A、通常碗B、通常小皿Aで構成され、当期の土器様相をある程度網羅していると言えるが、図示した額見町遺跡SK110は通常土師器の碗Aと小皿Aのみ、敷地天神山資料は通常土師器の碗Bと小皿Aのみの出土で、良好な資料とは言い難い。ただ、浄水寺をはじめとして、いずれの資料も小皿Aが7割を超える割合を占めており、小皿Aを多用する土器埋葬祭祀が当期から始まったと評価できよう。北加賀の三浦幸明資料でも小皿Aの主体化は認められるが、碗Aが1に対し碗Bが2、小皿Aが2程度（うち小型碗1）であり、小皿A主体化への傾斜が顕著ではない。北加賀では次の8期に小皿Aが過半数を超える様相が見られており、小皿Aの形態も含めて地域的様相差が顕在化する時期と位置づけられる。



第166図 南加賀7C期の土器群（S=1/5）



第167図 7C期併行の北加賀地域土器群（白山市三浦幸明遺跡Ⅲ区SK07、S=1/5）

内黒輪Bは図を提示できないが、浄水寺Ⅳ-4テラスP31で10cm台の小型法量を持つ一帯が定量存在している。内面ミガキの丁寧な精製品で、高台もしっかりと作られている。体部やや外傾気味のものと同輪器形を呈すものがあり、焼成の特徴や胎土特徴など7B期の内黒輪Bの系統のものと言える。当期は本来、千代オオキダ遺跡の深輪器形を呈す輪Bの大・中法量が定量存在しているはずで、当資料は新たに加わった小型法量と見る。

通常土器の輪Aは従来の器高低い浅形輪器形を呈すものに加えて、体部下位に張りをもって輪形に立ち上がる深形の輪器形が出現し、増加する。深形輪器形の初現は既に7B期の漆町153号土坑にあるが、当期が本格的な導入期と位置づけられる。額見町SK110では口径13cm弱の浅形輪器形が、浄水寺Ⅳ-4テラスP31では同法量の浅形輪器形に加えて12cm弱の深形輪器形が、浄水寺礎石3建物周辺では口径12～13cm前後の深形輪器形のみが確認される。小皿Aの器形等から見て、浄水寺Ⅳ-4テラスP31は古相に、浄水寺礎石3建物や額見町SK110は新相に位置づけ可能と考えられ、この時期に浅輪器形から深輪器形へ移行していったものと理解する。北加賀でも三浦幸明Ⅲ区SK28やⅢ区SK07で浅輪器形と深輪器形が併存しており、新法量の輪へと変化している。

輪Bは浄水寺Ⅳ-4テラスP31のみの資料だが、体部外傾器形と体部輪器形とがある。数が少なく、その様相は判然としなが、7B期からの減産という変化で理解可能だろう。北加賀では当期は依然として定量の輪B生産を行っており、大型の足高台輪と大小法量の体部輪器形を呈す器種が存続する。

小皿Aは7B期の小型底部をもつ扁平な輪器形に加えて、底部大きく扁平な器形を呈すものや体部下位に張りを持つ器高高いもの加わり、多様化する。体部下位に張りを持つ器高高いものは7B期の小型輪からの系統と位置づけられるものであるが、当期にはその形態差が曖昧な部分もあり、小皿Aに一括した。口径は10～11cmにおくものが主体だが、10cmを切るものや11cmを超えるものなども存在し、器形によってもばらつきがある。この器形と法量の多様化は、7B期に存在した小型輪Aが当期に小皿Aへと変化したことによるものと言えるが、北加賀との比較では低平な器形が主体的に存在することを南加賀の特徴として上げておきたい。北加賀では体部下位に張りをもつ器形が定量存在しており、輪A器形の相違も含めて地域的な様相差と位置づけられる。

以上、7C期の土器器食類具様相について述べたが、小皿Aの増加や新たな法量の輪A出現など中世的な土器器食類具様相へと強く傾斜する時期と言える。ただ、土器胎土や焼成の特徴は7A期からの系統で考えられるもので、8期に入ると新たな胎土調整や焼き色、仕上げ調整のものが大半を占めるようになる。

土器器食類具以外では、7B期まで少ないながらも定量存在していた北陸型煮炊具が消滅の様相を見せるが、三浦幸明遺跡Ⅲ区SK07では、僅かながら、北陸型の長胴釜と浅鍋が出土しており、当期まで古代的な煮炊具が生産されていた可能性をもつ。少なくとも、中世的な非フクロ口成彩煮炊具は存在しておらず、当期を古代的土器器食類具の終焉期とすることができよう。

4. 南加賀8期

南加賀8期を体部外傾器形の輪・小皿出現と柱状高台器種の盛行により8A期と8B期に、有台輪と内黒焼成品の衰退・消滅により8B期と8C期に区分する。なお、8期以降の器種名について、本文では古代食類具との系統的な断絶感を出すため、古代で使用した輪A、輪Bの器種名を使用しなかったが、古代から続く輪A、輪Bは7A期以降、各形態の更新を続けながらも8期へと繋がりをもって存在する器種と位置づけ可能なため、統一的な器種名として使用する。なお、Aは平底、Bは輪高台を意味し、柱状高台器種については柱状・器種名で呼称する。

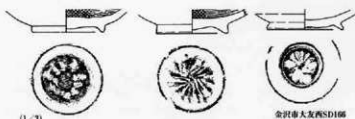
(1) 南加賀8A期

未報告だが、額見町遺跡SK419を標識資料とし、SK114、SK142を補足資料とする。当期は田嶋編年中世1-I期に相当するが(田嶋1997)、田嶋氏は南加賀地域では該当資料がないとして、北加賀の戸水ホコダ遺跡SK70と大友遺跡SD166下層資料を、出越編年も同一資料をもつⅢ3期とする(出越1997)。

額見町SK419は総柱大型建物に伴う大型の土器廃棄土坑で、一括性高く完形に近い土器が廃棄され、組成や土器様相を把握することができる。通常土器と内黒土器との比率は9:1程度で、通常土器は輪A 26%、小皿A 72%、輪B 2%で構成される。小皿A主体構成は7C期に類似した構成であり、輪Bはさらに減少傾向にあると言える。北加賀に比べて小皿Aの比率が高く、輪B量比が著しく低い傾向は7C期以来の様相であり、南加賀の地域性を示している。また、当期は柱状高台器種が出現する画期であるが、当資料では全て内黒製品で占められる。柱状小皿は全体の3%、柱状輪は1%と少ないが、当期に位置づけ可能な額見町SK114

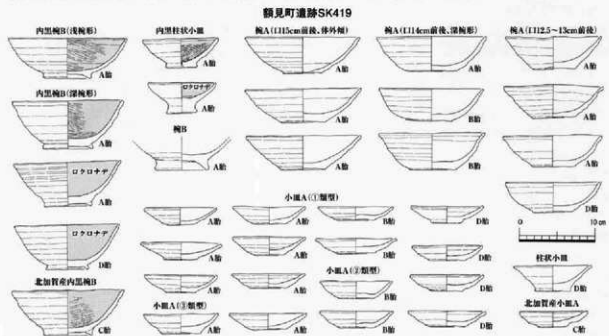
でも柱状高台器種は内黒に限られており、当期の内黒製品再興と関連性を持つものかもしれない。内黒碗Bは全体で8%の率で存在しており、通常碗Aの1/3程度の量比をもつ。

内黒碗Bは7B期以来、減少の傾向にあったが、当期は確実にその生産量を増やし、加賀地域においては内黒再興期と



第168図 「菊花状かき出し高台技法」の底部痕跡

評価されている（田嶋1986）。器形は7A期に出現した深碗器形を系統的に維持するものだが、全体的には体部外傾の傾向を見せ、浅く碗形を呈するものなど、器形差により法量にばらつきが見られ、7C期で見られた3法量分化が解消される段階と位置づけできる。また、産地により形態や技法に差異が見られるのも当期の大きな特徴である。当期の土師器は全体的に北加賀産C・E類胎土が定量確認できるようになり、特に内黒碗Bにおいては北加賀産が一定のシェアをもつ。当期の地元産A・B類胎土と南加賀地域エリア内と予想するD類胎土は内面ミガキ調整がかなり雑となり、ロクロナデのみで仕上げる製品も定量出現する特徴がある。加えて高台は貼り付けだが、高台を低く外側貼付して底面ナデ消し調整する特徴をもつ。これに対し、北加賀産内黒碗BはSK419やSK142に示すように内面ミガキ調整が丁寧で断面三角形の貼付高台をもち底面に糸切り痕を残す特徴をもつ。また新たな技法として貼付高台ではなく、底面粘土を中心から放射状にかき出して低く小さな高台を成形する「菊花状かき出し高台技法」（望月1997）が出現しており、額見町SK114で同時期の南加賀タイプと共存する。



第169図 南加賀8A期の土器群 (S=1/5)

内黒柱状高台の椀・小皿は、内黒限定器種ではないが、当期については内黒製品を基本とした可能性がある。北加賀でそのような傾向は看取できず、南加賀地域の特徴と位置づけられる可能性が高い。南加賀では8B期になっても柱状高台器種の3割程度は内黒焼成品が占めており、当期に欠落する10cm台の内黒椀Bに代わる器種であった可能性もある。当期の柱状高台器種は、椀は深椀器形を、小皿に関しては椀形を志向した器形に統一される。内面ミガキ調整を施す製品も少なからず存在し、内黒椀Bとの互換性をもつ。

通常土師器椀Aは、浅い椀形を呈す器形と、底径が大きく深い椀形を呈す器形とで構成される点では7C期からの流れにあるが、後者の深椀器形は全体的に厚手で作りが粗雑となっており、口径は従来の12.5～13cm前後に加え、14cm前後の体部下位の張る深椀器形と15cm前後の体部外傾気味となる器形とが定量加わる。大型法量のものには、クロヒダ顕著な体部開くタイプも僅かながら存在しており、新たな法量構成が成立するとと言える。

小皿Aは口径9cm台を中心とし、10～10.5cmを測るやや大振りのものや8.2～8.7cmの小振りのものが一定量存在する。器形は7C期に定量存在していた器高2.5cm以上を測る小型椀的なものが消滅し、椀Aとの分化を一層明瞭にする。法量の小型化もその傾向と言えるもので、底径の大きな扁平な器形のものも主体を占める。これら小皿Aの主体は椀Aからの形態変化の中で捉えられるものであり、7B期以来の椀系統の範疇にあったものだが、椀系統とは異なる新たな器形の小皿Aが当期に出現してくる。仮に7B期以来の椀系統のものを①類型として括り、比較的小さな底径から体部下位に強く張りを持って立ち上がり、口縁部へ若干外反気味となる形態のものを②類型、大きな底径をもち、体部が短く立つ厚手の作りのものを③類型として分類する。②類型については、体部下位の屈曲気味に張った器形が白磁皿のVI 1a類やVII 1a類に、口縁部外反器形がV 2類に類似しており、白磁皿器形を模して出現した可能性を持つ。北加賀の大夫西遺跡SD166（金沢市2002）や戸水ホコダ遺跡SK70（金沢市1999）では比較的多く確認される形態であり、当期の小皿A形態の変革様相が明瞭に捉えられる。南加賀では当該類型が数量的に少なく、この点も地域様相を反映していると言える。なお、③類型については、器形的に椀系統からの変化とも捉えられるが、次の8B期に定着の様相を持つものであり、その走りも位置づけておきたい。先述した体部開く器形の椀Aの出現とともに新たな器形をもつ椀皿形態とみなされよう。主体を占める①類型での北加賀との比較では7C期でも指摘したが、扁平な器形が主体を占めることを南加賀の特徴と位置づけておく。北加賀の金沢市大夫西遺跡SD166資料では7C期以降のやや深身呈す器形が依然として定量存在しており、地域的様相差を示す。



第170図 北加賀の②類型小皿A

以上、8A期の土師器食膳具様相について述べたが、8期成立の画期として、柱状高台器種の出現と内黒器種の再興、内黒椀Bにおける新型技法の採用、小皿A、椀Aの新型器形、新型法量の出現をあげる。中世的土師器様式の象徴とも言える小皿Aの定型化と増加は7C期に既に見られ、当期の椀Aの主流となる器形や法量は7C期からの系統下にあるものだが、新たな器種や法量の出現を重視したい。なお、ここで出現した新たな要素は次の段階に主体的な存在となるもので、8C期にはそれへと淘汰されていく傾向が見られる。また、もう一つの大きな転換要素として、通常土師器の胎土調整や焼き色、仕上げ調整の変化が上げられる。7期で既にその兆候も一部発現しているが、主体を占めるようになるのは当期からと言え、7期まで主体を占めた火色発色による器面の肌色系色調は激減する。胎土は砂粒を多く含むものと砂粒を含まないもの、酸化鉄粒を多く練り込んで赤色調整するものなど多様化し、焼き上げりに赤の発色と白の発色を意識した生産が増える。また、器表面に意識的にドバを塗って仕上げたようなものも多くなり、内面を平滑に上げる最終調整は少なくなる。総じて大きさを揃えただけの厚手で作りの雑なものとなり、中世の土師器食膳具に共通した要素が出揃う。

土師器食膳具以外では、7期まで僅少なながらも一定量存続していた6期の系統下にある北陸型煮炊具は完全に消滅し、北陸型煮炊具からの形態変化で7B期に一部出現したS字状屈曲しない内屈するだけの浅鍋や口縁部外反するだけの小型浅鍋が僅かに残る。8B期に定量出現する平底の厚手鍋は出現前と位置づけられ、7C期とともに古代煮炊具から中世的な煮炊具へ転換する空白期に近い状況を示す。

(2) 南加賀8B期
 観見町遺跡B区上層土器溜まりを標識資料とし、同遺跡SK115をそれよりもやや古相呈す資料に位置づける。加賀市田尻シンベイダン01大溝（石川県1979）も当期に位置づけられるものと考えられ、ここで示す土器様相

と若干の相違点もあり、8C期に一部入る程度の時期幅をもつ可能性がある。当期は田嶋編年中世Ⅰ～Ⅱ1期に相当する。田嶋氏は三浦幸明遺跡Ⅲ区SK10と田尻シンペイダン資料を前後に位置づけながらも、田尻シンペイダンの後で型式が区切られると評価したのに対し(田嶋1997)、出越編年では前者をⅣ1期、後者をⅣ2期にあり、田尻シンペイダンは三木だいもん遺跡溝6と同一時期に比定された(出越1997)。型式概念の設定の仕方によるのだが、筆者は食器具(形態)組成を重視する立場から、田尻シンペイダンは8B期の中で見ておきたい。

額見町B区上層土器溜まり資料は、通常土器85%、内黒土器15%で構成される。SK115は内黒が25%と高く、田尻シンペイダン資料も2割で構成されるなど、相対的に8A期から内黒製品の率は高くなったと言える。器種構成は、B区上層溜まりで椀A2割半、柱状高台椀1割、椀B1割、小皿A4割強、柱状高台小皿1割半で、8A期から小皿Aの減少と椀A、柱状高台椀・小皿の増加が上げられる。小皿Aの低下と柱状高台小皿の増加は運動したものと言えるが、椀Aや柱状高台椀の増加が当期の一つの指標と言えよう。8A期からの流れとして、



第171図 南加賀8B期の土器群(S=1/5)

碗と小皿の2法量整理に伴い、碗Aが組成の中での割合を定着させた可能性を持つ。

碗Bは内黒が大半を占め、通常土器は足高状で体部外傾した厚手のものが僅かに存在する程度である。内黒製品は、8A期で定量化された内面ミガキ調整をもつ在地産(A・B・D類胎土)が内面クロコナデのものにほぼ統一される様相をもち、体部外傾化と高台径の小量化が進行する。北加賀産C類胎土も当期には体部外傾化の進行や底径の小量化、浅碗形の出現が見られるが、内面ミガキ調整を省略するものではなく、丁寧な作りを維持する。北加賀産内黒碗が当期に入っても定量化される要因は、このような精製的な価値からくるものだろう。

柱状高台の碗・小皿は、8A期の内黒主体から通常土器主体へと移行する。柱状碗は8A期に見られた深碗器形から体部外傾する傾向が強まり、体部が皿状に広がる新器形も出現する。柱状小皿に関しては8A期の碗形を志向した器形から、浅碗器形主体へ移行し、新たに皿状器形のものも出現しており、同じ柱状高台器種として、大小の関係にあるものも見える。この皿状に開く柱状高台器種は当期新相段階では主体的な形態となっており、8C期には皿形に淘汰される様相を見せる点から、皿状器形を呈す柱状器種の出現を当期の指標に置きたい。なお、8A期に見られた内面ミガキ調整は、当期も一部確認でき、内黒器種としての調整法を維持する傾向にある。

碗Aは、8A期に主体を占めた口径12.5～14cmの深い碗器形が激減し、口径14cm台で浅い碗器形が主体を占める。また、8A期で僅かに確認できた体部外傾の強い外面クロコナデ顕著な、口径15cm台のタイプが定量化されるようになり、皿状に開く柱状高台器種とともに当期の指標となる。

小皿Aは8A期と同様、口径9cm台を中心とし、その前後の法量のものも僅かながら存在する。器形も8A期からやや扁平な器形が増える程度で大きな変化はない。8A期で完成された小皿Aがそのまま存続する様相にあり、8A期資料との単体での識別は困難と言える。断面別では依然として碗系統の①類型が大半を占めるが、白磁皿系統の②類型が定量化されるようになる。③類型も確認されるが、その量は少なく、③類型の定着が早い北加賀(三浦幸明Ⅲ区SK10)とは様相が異なる。

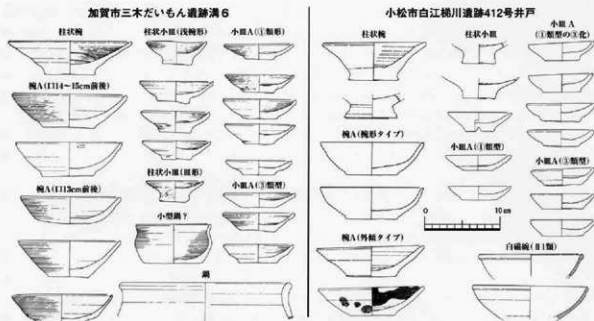
以上、8B期の土器器食器具様相について述べたが、当期は8A期で出現した各器種、器形、法量が定着し、最も豊富な器種組成をもつ時期と言える。南加賀では8A期の内黒土器再興の余波で、当期も器種を拡大しながら存続するが、北加賀では三浦幸明遺跡Ⅲ区SK10資料を見る限りは、碗Bとともに早くも減少の兆しを見せてくる。ただ、同時期の大友西遺跡SK195に見るように、内黒碗の一括廃棄は続いており、さみだれ式に減少していったものだろう。胎土や焼き色、仕上げ調整等の変化は、8A期で述べたように当期も同様の様相であるが、一部見られた火色発色による器面の肌色系色調のものはほぼ見られなくなる。

土器器食器具以外では、白磁碗皿の共伴が確実に始まる。既に8A期でも一部共伴事例はあるが、数量を増すのは当期からで、南加賀では山本信夫氏の大宰府分館(山本1995)の白磁碗Ⅳ1類とⅡ1類が目立つ。施釉陶器に関しては、7期から一定量の共伴事例があり、当期においてその量に大きな変化は生じていないが、ほぼ東濃産灰輪陶器に限られるものと予想する。なお、この時期には新たに土器器煮炊具が出現する。南加賀では大型の浅鍋と小型の浅鍋が存在するようで、両者とも平底を呈す可能性が高い。全体的に厚手でケズリ調整やヘラナデ調整、ユビナデで仕上げるもので、中世へと継承される器種と理解される。当期以降、確認される器種と言えるが、その数量は極めて少なく、儀礼的なしは非日常の場で使用される特殊な煮炊具であったと見られる。

(3) 南加賀8C期

額見町遺跡のまとまった土坑資料等は8B期でほぼなくなり、当期に位置づけられる遺物は包含層やピット等から単体で出土する程度に限られてくる。つまり、当期は額見町遺跡の集落終焉期にあたるわけで、これをもって、三湖台地に6世紀末業から継続的に営まれてきた古代的と言えような台地集落群が終りを告げる。これ以降、集落は河川流域の低地帯へと経営地を移しており、集落経営の点からも大きな画期に位置づけられる。当期の標識資料として、加賀市三木だいまん遺跡溝6(加賀市1987)と白江梯川遺跡412号井戸(石川理文1989)を上げる。両資料は小皿Aの型式変遷から前後関係に位置づけ可能だが、食器具構成や法量分化の視点から見れば、一つの型式に包括されるものと考えられる。藤田邦雄氏の編年では三木だいまんをⅠ～Ⅱ2期、白江梯川をⅠ～Ⅲ期に(藤田1992)、出越編年では田尻シンペイダシと三木だいまんをⅣ2期、白江梯川をⅣ3期に(出越1997)、田嶋編年では三木だいまんを中世Ⅰ～Ⅱ2期に位置づけている(田嶋1997)。

三木だいまん溝6資料では、内黒製品、通常土器ともに碗Bの出土は確認されていないが、周辺から通常土器の碗B破片が1点出土しており、僅かながら残存する可能性も持つ。ただ、その数量は通常の組成に含まれ



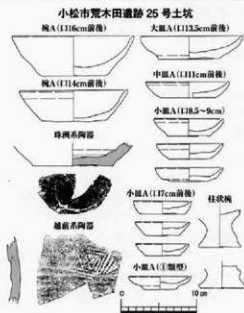
第172図 南加賀8C期の土器群 (S=1/5)

ない程度であり、次の白江柳川では確認できないことから考えて、当期は碗Bが食膳具組成から消滅した段階と位置づけ可能である。8B期の内黒再興全盛の後、碗Bは急速に衰退消滅したと言えるが、田尻シンペイタンでは定量の内黒製品を中心とする碗Bが存在しており、そのことが8C期と分ける大きな要素と考えている。

食膳具の大半は通常土器の碗Aと小皿Aが大半を占め、柱状高台の碗と小皿が少ないながらも定量を占める。正確な量比を把握していないが、碗Aが2割半～3割程度、小皿Aが5割～6割割、柱状高台碗が1割未満、柱状高台小皿が1割～1割半程度といった構成であろう。三木だもん資料よりも白江柳川資料の方が柱状高台小皿率の低下が見られるが、それに伴って小皿Aの量は若干増加しており、碗と小皿の量比は概ね碗1に対し小皿2程度で構成されたと見る。当期の終末に位置づけ可能と判断する小松市荒木田遺跡25号土坑²⁾では、柱状高台小皿は出土せず、組成からはずれぬ現象が見られるが、柱状高台碗は依然として定量存在しており、柱状高台器種の存続が当期と次の時期とを分ける一つの要素となる。

碗Aは8B期に存在した法量のバツキや形態差が徐々に失われ、全体的に厚手で底径の大きな形態に淘汰されていく。口径は三木だもんで13.5～15cmと幅を持ち、白江柳川では口径13.5～14cm前後にまとまっているが、おおよそ口径はこのような幅で最終末まで存続するであろう。器形は体部下位に張りを持つ碗形呈すタイプと底部から口径部までまっすぐ外傾するタイプの大きく2種にまとまってくる。底径の小さなタイプは8B期で消滅しており、体部開く器形のものも当期をもって消滅するようである。

小皿Aは8B期で主体を占めた碗系の①類型が衰退し、大きな底径に短く立つ体部をもつ厚手作りの③類型が主体となる。当期の①類型は底部を大きく厚くする器形へと変化して、③類型への傾斜を強めるとともに碗器形の払拭を図るが、当期の終末と位置づける荒木田25号土坑においても碗器形を呈す①類型は少量ながら存続しており、碗器形を完全に払拭する次の時期の小皿Aとの境界をここに設定することが可能である。③類型への移行は、三木だもん→白江柳川412号井戸→荒木田25号土坑と進行するが、③類型への傾斜はこの時期に数量を増してくる平高台をもつ漆器皿が強く影響し



第173図 南加賀8C期終末の土器群(S=1/5)

ているものと予想する。8B期に定量を占めた白磁系②類型は当期では確認できず、そのモデルを磁器から漆器へとシフト転換させ、古代から続く土器碗器形から脱却していったものなのだろう。また、器形の変化に伴い、口径も段階的に縮小する様相が見られる。8B期の9cm台から、三木だいもんでは9cm前後、白江梯川では8.5～9cm程度へ小型化し、さらに荒木田資料ではその法量に加えて、7cm前後のさらに小型化した法量のもの、11cm前後、13.5前後の法量が出現する。大型法量ものは次の時期に定型化する土師器皿法量であり、京都系非クロロ土師器皿の影響により出現した可能性が高い。

このような椀Aと小皿Aの変化に対し、柱状高台の椀・小皿は、型的に8B期から大きな変化はない。当期は8B期に出現した体部皿状に開く器形のものへ統一される段階と評価でき、全体的に厚手の作りとなる。口径も三木だいもんの段階で柱状小皿が口径8cm台前後に小型化している。

以上のように、8B期の標識資料とした額見町B区上層土器溜まりから三木だいもん溝6への変化は大きいと言えるが、田尻シンペイダンの中には三木だいもんと共通する様相も見られる。また、8C期の中で見られた三木だいもんから白江梯川への段階的な型式変化は、中世的な器形と法量への方向性を明確にしておき、その点を評価すれば、藤田氏の編年区分のように、白江梯川をその過渡的段階として型式区分することも可能と言えよう。器種の消長により型式を区切るか、土師器小皿の型式変化によって区切るかの問題と言えるが、田尻シンペイダンは8C期から切り離すことで、8B期からの変化は明確になると考えられる。

8C期の土師器食器具は、椀Bが欠落することで、椀Aと小皿Aの単純組成へと傾斜することに特徴がある。器形や法量、作りも中世的と言えるものへ強く傾斜し、7期から8期へと継続的に生産されてきた古代須恵器椀にその祖形をもつ土師器食器具が終焉期を迎える。その意味で当期までを古代に位置づけるが、次の段階には椀Aは一層皿形へ変化し、大小の皿の組成を確立する。その走りは当期の最終末に位置づけた荒木田25号土坑で出現しており、既に当期において中世土師器皿の器形と法量が成立していると言えるが、京都系非クロロ土師器や在地の中世陶器が組成の中で確実に出現する次の段階の転換は大きく、現段階では土器様式の面から8C期を切り離して考える要素は低いと判断する。ただ、近年、能登地域の矢駄アカメ遺跡土器溜まり資料において、三木だいもんの資料に近い小皿Aと柱状小皿に共伴して、京都系非クロロ土師器皿が定量出土する事例が確認され(藤田2007)、加賀でも8C期には非クロロ土師器皿が出現している可能性が出てきた。荒木田25号土坑の存在から、中世陶器の共伴も想定する必要性はあり、そのような条件が揃えば、8C期中世的な土師器皿組成の様相からして、8C期をもって中世的土器様式の成立とみなすことも十分可能である。三湖台地集落群の急激な衰退からしても、8C期を切り離して考える必要性も感じている。

6. 画期設定の問題と暦年代観

(1) 各期の暦年代根拠資料と筆者の暦年代観

7期の暦年代観を示す前に、それ以前の暦年代根拠資料を提示し、筆者の暦年代観を示しておく。筆者は以前、二ツ梨豆岡山窯の報告書作成の際に、出土する軒先瓦の編年的考察を試み、田嶋古代VI期に位置づけられる南加賀窯の各時期の暦年代観を提示したことがある(望月2005)。そこでは、南加賀窯の二ツ梨豆岡山支群と戸津支群で出土する軒先瓦セットを平安京系複弁四葉蓮華文軒瓦とC字対称形均整唐草文軒平瓦のセット関係、並びに加賀市高尾庵寺出土軒先瓦セットと平安京系複弁八葉蓮華文軒瓦と唐草文軒平瓦のセット関係との比較から、VI1期を9世紀中頃～3/4期、VI2期を9世紀後葉から10世紀初頭、VI3期を10世紀前葉から中頃とした。詳細については、拙稿を参照いただきたいが、南加賀地域のVI期終焉は10世紀中頃とする考えにある。

7期の暦年代観資料は、消費地における記年銘木簡等の共伴がないため、施軸陶器での共伴資料となるが、田嶋氏は以前より、当期の暦年代根拠としてVII1期に比定する安養寺遺跡柴木B地区資料での近江系軟質緑軸陶器の存在を重視し、10世紀後半まで新しい段階と評価してきた(田嶋1997)。これに対し、出越氏は出越II2古期に位置づける千木ヤシキダ遺跡の資料に丹波篠山黒岩産緑軸陶器や近江系硬質緑軸陶器(中相)が共伴する事例を上げ、10世紀3/4の暦年代を与える根拠とした(出越1991)。いずれも南加賀7A期に併行する時期で、今回提示した標識資料には施軸陶器等の共伴は確認できないが、同時期に比定できる浄水寺遺跡3号溝下層で近江系緑軸陶器の略定形品が出土している。近江中相に位置づけられるものであり⁹⁾、出越氏の暦年代根拠とした資料的位置づけと合致する。近江中相段階の近江産緑軸陶器については、平安京III期中段階に伴うものとされて

おり、950～980年頃の年代観が与えられている(畑中2003)。柴木B Lの近江系軟陶の共伴は評価に苦慮するが、南加賀窯終焉時期と共伴事例の多寡から考えて、7A期を10世紀3/4期に位置づけておきたい。

後続する7期の年代観資料は、従来、良好な資料がなかったが、7C期に位置づけられる浄水寺IV-4テラスP31資料で東濃産ないしは尾張産と思われる灰軸陶器碗が共伴した。形態的に虎渓山1号窯式期でも後半の東海灰軸陶器編年Ⅱ新期に位置づけ可能と判断されるもので¹⁰⁾、尾野善裕氏の示した暦年代観では980～1010年頃となろう(尾野2003)。また、あくまでも傍証資料でしかないが、7B期の千代オオキダ遺跡196号土坑出土の内黒土師器碗Bに見られる深碗形器の盛行は、灰軸陶器の虎渓山1号窯期に見られる深碗の盛行と時期的な対応関係が想定でき、これらを総合すれば、7B期を10世紀4/4期に、7C期を10世紀末から11世紀初頭ないしは前葉の時期に位置づけられるだろう。

8期の暦年代観も共伴する施軸陶器資料並びに白磁資料により比定する方法しかない。中世Ⅰ-I期の標識資料である戸水大友西遺跡SD166下層において、百代寺窯式の灰軸陶器が、戸水ホコダSK70で九石2号窯式期の灰軸陶器が共伴するとされる(出越1997)。いずれも破片資料であり、資料の信憑性に問題を含むが、8A期とした額見町SK142で出土する明和27号窯式に位置づけ可能な灰軸陶器碗は完形品であり、共伴の信憑性は高い。東海灰軸陶器編年Ⅱ古期に位置づけ可能と推察され、1010～1040年頃の年代観を与えることができる(尾野2003)。

また、8B期以降は白磁の共伴が目立つようになる。額見町B区上層土器溜まりでは山本分類のⅡ1類とⅣ1類に該当する白磁碗が、灰軸陶器では明和27号窯式～百代寺窯式に位置づけ可能な破片が出土しており、白磁からは11世紀後半から12世紀前半の幅の中で(山本1995)、灰軸陶器からは東海灰軸陶器編年Ⅱ中期、1070～1100年頃の年代観が与えられる。田嶋氏は筆者が当期の新相に置く田尻シンペイダシ6号溝出土資料について、小皿Aに平安京藤原国明邸井戸8掘方出土品と同類器形があり、それが寛治5年(1091)の墨書銘須恵器と共伴することから、この時期の年代の1点を置いているが(石川泉1979)、上記年代観との矛盾はなく、当期に関しては出越氏、田嶋氏と同じく、概ね11世紀後半から12世紀初頭の暦年代観が妥当と判断される。8C期については、暦年代根拠となる資料に乏しく、積極的な位置づけは躊躇されるが、白江柳川412号井戸資料で山本Ⅱ1類の白磁が確認されており、山本C期の11世紀後半から12世紀前半の中で、8B期に後続する時期という点で、12世紀前半としておきたい。また、当期の最終末に位置づける荒木田遺跡25号土坑では珠洲や越前の中世陶器が共伴する。資料共伴の信憑性は高く、珠洲1期の上限を1143年の若山庄成立とする点(吉岡1994)から考えれば、8C期の下限は1150年頃とするのが妥当だろう。

以上を整理すれば、7期の成立を10世紀中頃に置き、その終焉を11世紀初頭から前葉頃に、8期をそれ以降とし、その終焉を1150年頃で考えておきたい。

(2) 各時期の画期様相とその評価

以上、各時期の土器様相とその暦年代観を述べたが、ここで各時期の画期要素を整理し、まとめたい。

まず、7期成立の画期を、須恵器生産の終焉に置いたわけだが、それは7世紀以来続けられてきた古代的な集約生産型の土器生産体制が解体したことを意味する重要な画期であり、須恵器が消えることで古代的土器様式は終焉したと言っても過言ではない。その観点からすれば、6期までが古代的土器様式であり、7・8期は12世紀中頃に中世的土器様式が成立するまでの過渡的な土器様式と位置づけるのが妥当である¹¹⁾。7・8期は段階的に古代的土器様式を払拭し、中世的土器様式を成立させていくものであり、まさに律令体制から武士階級が新たな支配体制の基礎を形成していくまでの、拱開期から院政期にあたる。土器様式の何をもって中世的土器様式と位置づけるのか、その視点によって考え方は異なってしまうが、1150年前後の時期をもって在地での中世陶器生産が開始され、確実に土器組成の中に定着することと舶載磁器や漆器碗が一般集落での組成の中に、ある程度の浸透度をもって加わってくることをもって、中世的土器様式の成立とした。当期は中世型荘園の成立期のピーク時にほぼ合致しており、新たな土地制度に基づく集落形成と武士団成立という新たな階層の出現とともに、新たな価値観と生産・流通体制の構築に基づいて、土器様式に反映されていったものと理解したい。

古代的土器様式から中世的土器様式へと段階的に変異していく7・8期は、7期が依然として古代的土器様式を遺存させる段階、8期が中世的土器様式成立前夜の段階と位置づけることが可能である。7期は須恵器生産消滅後も依然として素材を須恵器から土師器に置き換えて、古代的土器様式の維持を図る様相が強く、それは北

陸型煮炊具生産の維持や古代型技法と言える土師器焼成方法(匣鉢使用の内黒土師器焼成や火色発色をする色調)の残存にも現れている。8期は7期の古代的な土師器生産を払拭し、新たな規範のもとに再編された土師器生産体制と技術や器モデルの成立と言う意味で、ここに中世的土器様式の端緒を見ることも可能だが、6期の須恵器碗から段階的に変化した小皿A①類型が依然として組成の中心を占める段階では、完全なる古代的土器様式の払拭とは言えないだろう。8期の新たな法量や器形の導入も白磁碗皿の器形模倣に基づく変化である点で、中世的土器様式へ転換する序章段階と評価したい。前述したように、8C期の評価については微妙な部分もあるが、概ね1150年を前後する段階をもって、中世的土器様式の成立を考えることで問題はないと考えておきたい。

注

- (1) 淨水寺遺跡の資料は、当編年を組み立てる上で重要な資料であるが、未報告のため、資料実見した成果を盛り込んで文章のみでの提示とした。報告書は2008年3月に石川県埋蔵文化財センターより刊行される予定であるため、詳細は報告書で確認いただきたい。なお、資料実見に際し、田嶋明人氏、柿田祐司氏より資料評価に意見をいただいた。感謝したい。
- (2) 荒木田25号土坑は、大型の井戸状土坑で埋土層から一括して土師器、白磁、中世陶器、木製品が出土している。定量の土師器輪・皿が出土しているにも関わらず、京都系非クロロ土師器が含まれていないことや柱状高台器類、①類型小皿Aが存続する点などから、本論では8C期の範囲で捉えた。ただ、次期に出現してくるはずの口径13cm台と10cm台の大・中の土師器皿が存在していることや珠洲や越前の中世陶器が確実と共に伴している点は、中世的土器様式の走りと言えるような土器群であり、最終未と位置づけられるも、多分に次期の要素を保有する資料と位置づけられよう。
- (3) 田嶋明人氏より御教示を受けた。
- (4) 田嶋明人氏、柿田祐司氏とともに資料実見し、評価を下した。
- (5) 当期の前期評価については、田畑誠氏の考えが示唆に豊む(田畑1997)。当期の位置づけを多角的に能括した論考であり、重要な提唱がなされている。

参考文献

- 石川県教育委員会 1979 『加賀市田尻シンペイダシ遺跡発掘調査報告書』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『浄町遺跡Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1987 『敷地天神山遺跡群』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 『浄町遺跡Ⅱ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989 『白江柳川遺跡Ⅱ』
- 石川県埋蔵文化財保存協会 1993 『小松市林道跡』
- 尾野善哲 2003 『古代の尾張・美濃における緑輪陶器生産』『古代の土器研究—平安時代の緑輪陶器・生産地の様相を中心として—』古代の土器研究会
- 加賀市教育委員会 1987 『三木だいもん遺跡』
- 加賀市教育委員会 1994 『耳間山遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター 1999 『戸水遺跡群Ⅰ 戸水ホコダ遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター 2002 『石川県金沢市大友西遺跡Ⅱ』
- 川畑 誠 1997 『シンボジウム討論のまとめにかえて』『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 小松市教育委員会 1996 『荒木田遺跡』
- 小松市教育委員会 2002 『二ツ梨—貫山遺跡』
- 小松市教育委員会 2006 『千代オキダ遺跡』
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都編集工房
- 田嶋明人 1986 『9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷』『浄町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1997 『加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代』『シンボジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1991 『加賀における施輪陶器の展開』『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』金沢市教育委員会
- 出越茂和 1997 『北陸古代後半における飯皿食器(後)』『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 畑中英二 2003 『近江における緑輪陶器生産の様相』『古代の土器研究—平安時代の緑輪陶器・生産地の様相を中心として—』古代の土器研究会
- 藤田邦雄 1992 『加賀における様相—土師器—』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 藤田邦雄 2007 『欠収アカム遺跡』『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施輪陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 松任市教育委員会 1993 『松任市中村井出遺跡』
- 松任市教育委員会 1996 『松任市三浦・幸明遺跡』
- 望月精司 1997 『古代末期における土師器生産形態の変質』『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 2005 『南加賀室跡群の平安期軒先瓦に関する編年の考察』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』小松市教育委員会
- 山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 吉岡直暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



写真1 頼見町遺跡遺景斜め航空写真(南方面からC地区西側全景)



写真2 頼見町遺跡遺景斜め航空写真(C地区西側を北方向から)



写真3 熊見町道跡航空写真(今回調査区域)



写真4 C地区東区域遠景斜め航空写真



写真5 C地区西区域垂直航空写真



第6図 F地区航空写真



写真7 SI82 完掘全景
(SI82 遺構調査写真)



写真8 SI85 完掘全景
(SI85 遺構調査写真)



写真9 SI86 完掘全景
(SI86 遺構調査写真)



写真10 SI86 カマド



写真11 SI86 掘方



写真12 SI87 完掘全景
(SI87 遺構調査写真)



写真13 SI89 完掘全景
(SI89 遺構調査写真)



写真14 S188 完掘全景



写真16 S188 覆土内遺物出土状況



写真17 S188 L字型カマド本体部分



写真15 S188 L字型カマド全景



写真18 S188 L字型竪道部分(左ソテ側から)



写真19 カマド本体部分右ソテ断ち割り



写真20 カマド竪道部分断ち割り
(S188 遺構調査写真)



写真21 カマド竪道覆土

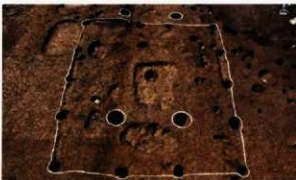


写真22 S191 完掘全景
(S191 遺構調査写真)



写真23 S192 完掘全景
(S192 遺構調査写真)



写真24 SI98・99 完掘全景



写真25 周溝覆土



写真26 カマド煙道から



写真27 SI98 L字型カマド全景



写真28 SI98 L字型カマド周辺遺物



写真29 SI98 L字型カマド覆土土層断面



写真30 SI98・99 セクションベルト



写真31 SI98 カマド煙道断ち割り
(SI98・SI99 遺構調査写真)



写真32 SI98・99 顧方



写真 35 SI105 カマド



写真 33 SI105 完掘全景



写真 36 SI105 セクションベルト



写真 34 SI105 カマド完掘全景



写真 37 SI105 掘方



写真 38 SI105 カマド断ち割り

(SI105 遺構調査写真)



写真 30 SI107 完掘全景



写真 40 SI107 カマド検出状況

(SI107 遺構調査写真)



写真 41 SK146 完掘全景



写真 42 SK146 出土遺物除去後の床面被熱状況



写真 44 SK146 覆土土層断面



写真 45 SK146 被熱床下断ち割り



写真 43 SK146 被熱床面の被熱成績アップ写真



写真 46 SK146 被熱床下断ち割りアップ

(SK146 土師器焼成坑 遺構調査写真)



写真 47 SJ30 完掘全景



写真 48 SJ30 被熱状況アップ写真



写真 49 SJ30 上層覆土断面
(SJ30 土師器焼成坑 遺構調査写真)



写真 50 SJ51 完掘全景・床面被熱状況
(SJ51 土師器焼成坑 遺構調査写真)



写真 51 SJ51 遺物出土状況



写真 52 SJ51 床面断ち割り



写真 53 SJ59 鍛冶炉 炉床近景



写真 54 SJ59 鍛冶炉 覆土断面
(SJ59 鍛冶炉 遺構調査写真)



写真 55 SJ59 鍛冶炉 炉床断ち割り



写真 56 SJ20 鍛冶炉検出状況



写真 57 SJ20 鍛冶炉近景



写真 58 SJ20 鍛冶炉 断面も割り (右手は SK129)

(SJ20 鍛冶炉 遺構調査写真)



写真 59 SK274 検出状況



写真 60 SK274 断面も割り・土層状況
(SK274 製炭土坑 遺構調査写真)



写真 61 SK274 完制



写真62 SK111 完掘全景



写真63 SK111 完掘



写真64 SK111 覆土断面



写真65 SK111 被熱床アップ



写真66 SK111 覆土断面アップ

《SK111 製炭土坑 遺構調査写真》



写真67 SK106 F層遺物出土状況



写真68 SK110 遺物出土状況

《土坑 遺構調査写真》



写真69 SK114 遺物出土状況



写真70 SK116・136 遺物出土状況



写真71 SK115 遺物出土状況



写真72 SK115 遺物出土状況アップ



写真73 SK134 完掘状況



写真74 SK175・SJ32 遺物出土状況



写真75 SK182と周辺土坑の遺物出土状況



写真76 SK171・J33 遺物出土状況

(土坑 遺構調査写真)



写真 77 SK172 完備全景

(SK172 土坑 遺構調査写真)



写真 78 SK172 覆土土層断面 1



写真 79 SK172 覆土土層断面 2



写真 80 SK172 削製露出土状況



写真 81 SK208 覆土土層断面状況



写真 82 SK253 完備全景



写真 83 SK248 完備全景



写真 84 SK283 ~ 285 遺物出土状況

(土坑 遺構調査写真)



写真85 SD25土器敷き硬化面検出状況1-全景



写真87 SD25土器敷き硬化面 (ほ31Gr)



写真88 SD25土器敷き硬化面 (ま32Gr)



写真86 SD25土器敷き硬化面検出状況2 (西方向から撮影)



写真89 SD25硬化面下の土器状況 (ま32Gr)



写真90 SD25土器敷き硬化面検出時アップ及び上層の土層断面 (ま32Gr)
《道路状遺構1 遺構調査写真》



写真91 SD25 土坑3 土器焼き硬化面検出状況



写真92 SD25 土坑1・2



写真93 SD25 土坑1・2 覆土土層

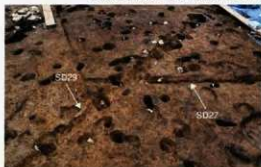


写真94 SD27・SD29 検出状況



写真95 SD27(北西から)

(道路状遺構1 遺構調査写真)



写真96 SD25 土層断面Dライン



写真97 SJ21a 被熱状況

(炉状遺構 遺構調査写真)



写真98 SJ45 新ち割り

(炉状遺構 遺構調査写真)



写真99 F 地区む23 土器だまり状況

(土器だまり 遺構調査写真)



写真100 SX01 検出状況

(集石遺構 遺構調査写真)



写真101 SX01 上層撤除去後



写真1 古代Ⅱ3期最古相の土器群 (SB8出土土器の集合)



写真2 古代Ⅱ3期中段階の土器群 (SK106出土土器の集合)



写真3 古代Ⅱ3期中段階の土器群 (SK136出土土器の集合)



S188-51



写真4 I 1期在来型短脚小釜地元 A 胎土
SK132-196



外底面

写真8 III期北陸型短脚小釜空場 A 胎土



S188-55



内底面

写真9 I 1期の在来型長脚釜地元 A 胎土



外底面

SK140-257



底外縁スス付着

底中心被熱弱い



内面

写真5 II 2期北陸型短脚小釜空場 A 胎土

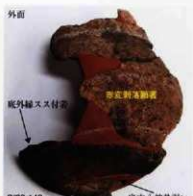


SK136-237



外面上半

写真10 III期北陸型長脚釜空場 A 胎土



S188-149



内面

写真6 III期北陸型短脚小釜空場 A 胎土



S188-151



内底面

写真7 III期北陸型短脚小釜空場 A 胎土



底面回転ケズリ調整



写真11 Ⅱ2期須戸波系長胴釜地元B胎土（口縁部クロコヒダ状と赤色発色）



写真12 Ⅳ1期北陸型長胴釜空場A胎土（内外面にスズ痕跡付着）



写真13 Ⅳ1期北陸型長胴釜底部空場A胎土（底部内面ハケ目調整押し出し技法）



写真16 Ⅱ3期在来型浅胴地元D2胎土（厚手で特徴的な口縁部器形）



写真17 Ⅱ3期在来型浅胴地元B胎土（SK136-238と同類器形もつ）



写真18 Ⅱ3期北陸型浅胴空場A胎土（右は口縁部内面コゲのアップ）



写真14 Ⅱ2期の北陸型浅胴空場A胎土



写真15 Ⅱ3期の北陸型浅胴空場A胎土

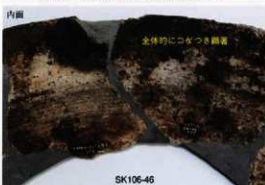




SK136-239



写真19 Ⅱ3期の北陸型浅鍋密場A胎土



SK106-46

写真20 Ⅱ3期の北陸型浅鍋密場A胎土



S199-171

写真21 Ⅳ1期?の在来型磁形土製品(密場A胎土)



SK106-55

写真22 Ⅱ3期朝鮮系磁形土製品の天舟部(地元B胎土)



SK106-56

SK106-57

写真23 Ⅱ3期在来型磁形土製品(地元C胎土)



S1107-221

写真25 Ⅳ期頃の北陸型円筒形土製品(密場A胎土)

写真26 Ⅳ2期北陸型円筒形土製品(密場A胎土)



写真27 K期頃の北陸型円筒形土製品 (横口付設タイプ、宮場A胎土)



写真28 II 3期の支脚形土製品 (A2a類、地元B胎土)



SK136-242

写真30 II 3期支脚形土製品 (C2類、宮場A胎土)

写真31 II 3期の支脚形土製品 (A2b類、宮場A胎土)

写真29 II 3期の支脚形土製品 (C2類、地元B胎土)



写真32 I 1期新在来型輪皿(地元A胎土)

写真33 I 1期新在来型内黒高坏皿(地元A胎土)



写真34 Ⅰ1期新在来型内黒高環H(地元A胎土)



写真35 Ⅱ2期赤彩高環A(窯場A胎土)

写真36 Ⅱ3期内黒高環G



写真37 Ⅱ1期頃の手付台付鉢(地元B胎土)





写真38 IV2古期の墨書須恵器「上」

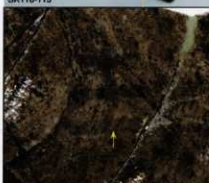


写真39 V1期の墨書須恵器「生？」

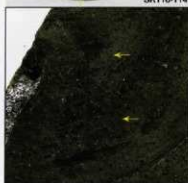
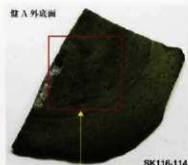


写真40 V1期の墨書須恵器「□生？」

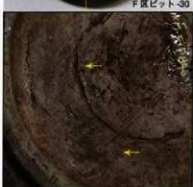


写真41 V1期の墨書須恵器「□生？」

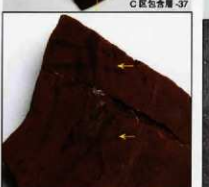
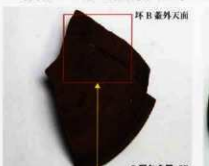


写真42 V2期の墨書須恵器（字句不明）



写真43 V1期の朱墨書須恵器（字句不明）



写真44 W1期の墨書須恵器「十」



写真45 II3期の環B蓋転用器（完形品で焼きまみ大きい）

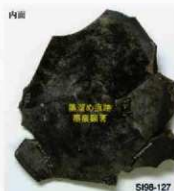


写真 46 II 3期の坏B蓋転用器跡め



写真 47 II 3期の坏B蓋転用器跡め

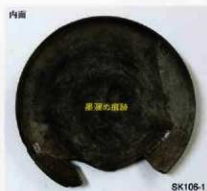


写真 48 II 3期の坏B蓋転用器跡め

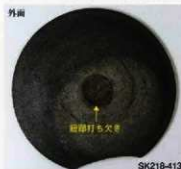


写真 49 IV 2古期の坏B蓋転用鏡?

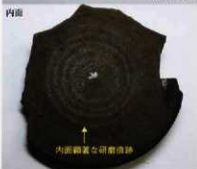


写真 50 III期の坏B蓋転用鏡



写真 51 III期の坏B蓋転用鏡

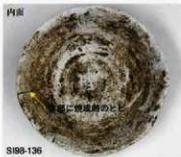


写真 52 II 3期の焼成破損須恵器坏A



写真 53 III期の焼成破損須恵器坏B



写真 54 IV 2期の焼成破損須恵器坏A



写真 55 II 3期の口縁部補修痕跡のある須恵器坏B蓋



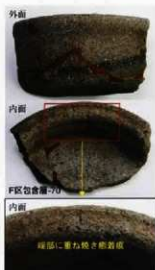


写真56 貯蔵具専用焼台



写真57 平底貯蔵具の焼台痕跡



写真58 焼台状土製品



写真59 貯蔵具底部重なり粘土塊



写真60 須恵器窯粘土塊置台（焼台や瓶口縁片堆詰め）



写真61 須恵器窯粘土塊置台（表面溶解破着）

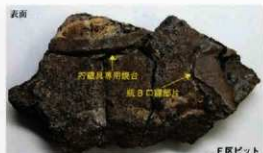


写真62 須恵器窯粘土塊置台（壺胴片堆詰め）



写真63 須恵器窯粘土塊置台（溶解散）



写真64 須恵器窯粘土塊置台（壺胴片堆詰め）



写真67 須恵器窯粘土塊置台（壺胴片堆詰め）



写真70 須恵器窯粘土塊置台（壺胴片堆詰め）



写真73 須恵器窯粘土塊置台（溶解散）



写真64 須恵器窯粘土塊置台片(左: C区包含層-73, 右: C区包含層-74)



写真65 須恵器窯粘土塊置台(表面溶解)



写真66 SI98出土の焼成粘土塊B類(A面に棒状の圧痕)



写真67 焼成粘土塊B類(C区包含層-91, A面・側面に棒状圧痕)



写真69 焼成粘土塊A類(SK239-474)



写真70 SK146土師器焼成坑出土の焼成測離した輪郭底部



写真71 SK146土師器焼成坑出土の焼成測離した輪郭底部



写真72 SK146土師器焼成坑出土の焼成測離した煮炊具



写真73 内面車輪文当て具痕をもつ須恵器中壺(み20ダマリ-21)



写真74 須恵器小型平瓶(F区包含層-64)



写真75 須恵器小瓶(む22ダマリ-28・29)



写真76 須恵器鉢Fの底面破片(み20ダマリ-13)



写真77 須恵器四耳壺(み20ダマリ-19)



写真79 須恵質椎状鉢(SK132-189・190)



写真78 須恵器瓶A(み20ダマリ-14)



写真80 圈足円面碗(SK106-23)



写真81 圈足円面碗(SK180-305)



写真82 團尾円面甕 (F区包含層-68)



写真83 團尾円面甕 (SD25-59)



写真84 馬形土製品(包含層-81)



写真85 二彩釉陶器(F区セット-19)



写真86 刀子状鉄製品



写真87 釘状鉄製品 (SK108-65)



写真88 銅製鈴 (SK172-313)



写真89 碧玉質管玉 (中世SK110-8)



写真90 有溝砥石 (F区包含層-96)



写真91 Ⅱ2新期小型平底碗(HA胎)

写真92 Ⅱ2新期平底小皿a型(HA胎)

写真93 Ⅱ2新期平底小皿b型(HB胎)

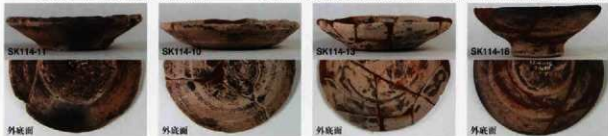


写真94 中世1-I期平底小皿・柱状小皿の諸類型(左からa2類、a6類、e2類と筒形の柱状小皿、胎土は13のみHCで他は全てHA)



写真95 中世1-I期内里輪高台輪の諸類型(左からa1類:HA胎、e2類:HC胎、f類:HE胎)

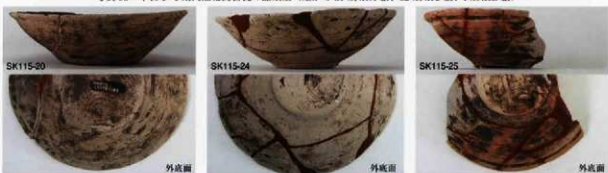


写真96 中世1-II期平底碗の諸類型(左からd類:HA胎、c4類:HD胎、c3類:HD2胎)

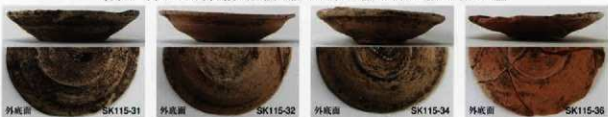


写真97 中世1-II期平底小皿の諸類型(左からa1類、b1類、b2類、c1類、胎土は36のみHDで他は全てHA)



SK115-26



外底面



SK115-45



外底面



SK115-44



外底面

写真 98 中世1-Ⅱ1期柱状高台碗 (左は皿型で通常土師、右は碗型で内黒、両方HA胎土)



SK115-37



外底面



SK115-38



外底面



SK115-42



外底面

断面方形
胎付高台

写真 100 中世1-Ⅱ1期柱状高台小皿 (左は碗型でHA胎土、右は皿型でHD胎土)

写真 99 中世1-Ⅱ1期内黒輪高輪の諸類型 (上はe1類でHC胎土、下はd類でHD胎土)



内底面

輪の範囲
(没け溝付)

外底面

外口縁に
口縁部折り曲げ



SK142-53



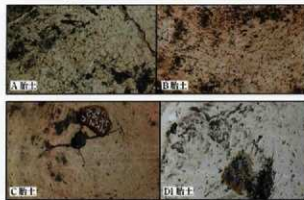
外面

内面

SB245-67

写真 101 中世1-Ⅱ1期に伴う灰輪陶器碗

写真 102 中世1-Ⅱ1期灰輪陶器注口瓶 (注口部片)

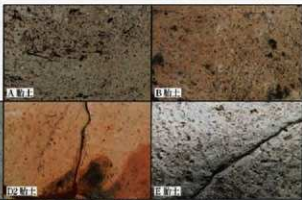


A1F1

B1F1

C1F1

D1胎土



A1F1

B1F1

D2胎土

E1胎土

写真 103 中世土師器胎土類型サンプル (左上は古代Ⅱ2新期の土師器で、他は中世1期の土師器)

額見町遺跡 III

— 申・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 —

発 行 日 平成 20 年 3 月 31 日

編集・発行者 小松市教育委員会
文化課 埋蔵文化財調査室
〒 923-0801 石川県小松市園町ホ 62 番地
(TEL) 0761-24-8132

印 刷 英文堂印刷

Excavation Reports of the Cultural Sites
in Nukamimachi Sites
Vol. III



古代Ⅱ3期の土器群 (SI98・SK106・SK136)

2008. 3. 31
Komatsu City Board Of Education